

近代日本における建築出版活動の史的展開に関する研究

—— 昭和戦前期までの建築出版組織の形成と建築図書の役割

平成 29 年 9 月

川 嶋 勝

近代日本における建築出版活動の史的展開に関する研究
——昭和戦前期までの建築出版組織の形成と建築図書の役割

目次

序章 本研究の目的と方法.....	7
1 研究目的	8
2 既往研究の検討	11
3 研究方法とその企図.....	30
4 論文構成	32
第1章 建築出版組織の展開にみる近代日本の建築出版活動の史的概観.....	39
序 既往研究における建築出版組織への言及と本章の構成.....	40
第1節 建築出版組織の類型と「建築ジャーナリズム史」の位置.....	42
1-1-1 「建築ジャーナリズム史」の成立経緯.....	42
1-1-2 建築出版組織の類型.....	50
第2節 前史：官版による建築技術書 1856年～.....	55
1-1-1 軍事技術書としての建築技術書の邦訳.....	55
1-1-2 市販の近代建築書への継承.....	59
第3節 建築系学協会による会誌 1886年～.....	66
1-3-1 造家学会による『建築雑誌』.....	66
1-3-2 浪和会による『建築』.....	71
第4節 建築図書出版社による市販図書 1893年～.....	75
1-4-1 建築家による講義録.....	75
1-4-2 建築図書出版社の生成.....	83
第5節 建築誌出版社による市販誌 1907年～.....	88
1-5-1 建築世界社による最初期の建築批評.....	88
1-5-2 建築誌出版社の展開.....	95
第6節 建築運動体による作品集と機関誌 1920年～.....	110
1-6-1 分離派建築会による建築出版活動.....	110
1-6-2 分離派建築会以後の建築運動体とその出版活動.....	115
第7節 戦時下における建築図書の出版活動.....	123

1-7-1 彰国社による文化財刊行物.....	123
1-7-2 相模書房による雑誌『東洋建築』と叢書『建築新書』.....	127
小結 建築出版組織の展開にみる日本近代建築出版活動の時代区分.....	131
1 建築出版組織の展開.....	131
2 日本近代建築出版活動の時代区分.....	134
第2章 建築書院と近代建築書の生成.....	137
序 既往研究における建築書院への言及と本章の構成.....	138
第1節 建築書院の活動概要と院主・吉原米次郎の経歴.....	142
2-1-1 吉原米次郎の経歴と建築書院の創業経緯.....	142
2-1-2 活動期間の概要と発行人の変遷.....	147
2-1-3 設立趣旨と刊行物の概要.....	153
第2節 建築書院の工学書全体にみる出版活動の変遷.....	158
2-2-1 第1期：土木・建築書による創業期 1893～1902年.....	158
2-2-2 第2期：工学書全体への展開期 1903～1909年.....	162
2-2-3 第3期：建築・電気書への偏向期 1910～1921年.....	164
2-2-4 第4期：建築・電気書による収束期 1922～1931/1941年.....	168
第3節 建築書院における建築書の展開.....	172
2-3-1 第1期：建築教本による始動期 1893～1902年.....	172
2-3-2 第2期：建築仕様便覧と建築図集の展開期 1903～1909年.....	174
2-3-3 第3期：建築図集の開花期 1910～1921年.....	176
2-3-4 第4期：建築図集の継承期 1922～1931年.....	180
2-3-5 建築書院にみる工学書と建築書の同異.....	182
小結 建築書院と吉原米次郎の事績.....	184
1 建築出版組織としての特質.....	184
2 建築出版活動としての史的意義.....	185

第3章 洪洋社と建築出版活動の展開.....	187
序 既往研究にみる洪洋社への言及と本章の構成.....	188
第1節 洪洋社の活動概要と編著者の特徴.....	191
3-1-1 組織の概要.....	191
3-1-2 刊行物の概要と編著者の特徴.....	192
第2節 建築出版活動の変遷.....	194
3-2-1 第1期：社主独力の創業期 1912～1919年.....	194
3-2-2 第2期：刊行形式の多様化と建築専門家との共同 1920～1930年.....	196
3-2-3 第3期：社主の引退と建築専門家による編著の主力化 1931～1944年.....	198
3-2-4 叢書の特徴とテーマの展開.....	200
第3節 叢書形式の建築図集と編集体制.....	202
3-3-1 叢書形式の建築図集の概要.....	202
3-3-2 社主の経歴.....	203
3-3-3 編集体制と写真部員による図版制作.....	205
第4節 建築図集における刊行手法の変遷.....	207
3-4-1 複製図版による海外情報の目的.....	207
3-4-2 自社撮影による国内情報の推移.....	208
3-4-3 実測・作図と「建築設計部」の役割.....	209
3-4-4 印刷方法の特徴.....	211
第5節 叢書総体としての刊行の企図.....	212
3-5-1 読者層の想定.....	212
3-5-2 目録としての性格.....	213
3-5-3 建築意匠に対する意識.....	214
小結 洪洋社の特質とその刊行手法の意義.....	215
1 建築出版活動としての特質.....	215
2 刊行手法の史的意義.....	216

第4章 構成社書房と近代建築運動の最盛期における建築出版活動.....	219
序 既往研究にみる構成社書房への言及と本章の構成.....	220
第1節 構成社書房の活動概要.....	223
4-1-1 組織の概要.....	223
4-1-2 刊行物の概要.....	224
第2節 雑誌による新概念の提示.....	225
4-2-1 雑誌『建築紀元』と「構成」.....	225
4-2-2 雑誌『建築時潮』と「構築」.....	227
第3節 叢書と単行本による海外情報.....	230
4-3-1 写真集『現代建築大観』.....	230
4-3-2 叢書『現代建築文叢』.....	232
4-3-3 単行本の役割.....	233
第4節 出版活動の特徴.....	235
4-4-1 企画・編集の体制.....	235
4-4-2 新思潮に対する姿勢.....	236
4-4-3 編著者の人物像.....	237
4-4-4 読者対象の傾向.....	238
4-4-5 経営者の足跡.....	239
小結 構成社書房の性質とその意義.....	241
1 建築出版組織としての性格.....	241
2 建築出版活動としての史的意義.....	242
結章 近代日本の建築出版活動の特質とその史的意義.....	245
1 建築出版活動の史的展開とその特質.....	246
2 近代日本の建築出版活動の史的意義.....	251
図表.....	253

参考文献	395
既往研究一覧	399
あとがき	401
Summary	403

序章 本研究の目的と方法

1 研究目的

本論文は、近代日本における建築出版活動の史的展開について、昭和戦前期までの建築出版組織の形成とそれに連動した建築図書の役割に焦点をあてながら分析することで、建築出版活動の全体像を検証し、その日本近代建築史上における意義を明らかにすることを目的としたものである。著者や編集者・出版人による書物の刊行行為について、建築出版組織の枠組みでとらえる建築出版活動という評価軸を設定することで、建築出版活動からみた建築の近代化過程という日本近代建築史研究の新たな方法論を提示することを目的としている¹。

建築を伝えるメディアとしての書物の存在は、古代ローマのウィトルウィウスからルネサンス期のアルベルティやパラディオへとつながる建築理論書²、あるいは近世日本の木割書や規矩術書が知られるように、古くから大きな役割を果たしてきた。そして近代における写真印刷技術の発展は、建築の視覚情報の役割を飛躍的に拡大させた。ある建築の姿をはじめて知る機会、実物を見るよりも、書物に掲載された写真をつうじた場合となることが増大し、実物よりも写真のほうが建築を理解しやすいとさえ評されてきた³。近代の建築にみられる特質のひとつが、書物や展覧会をつうじて伝播された点にあることは、レイナー・バンナムやピアトリス・コロミーナ、エイドリアン・フォーティエなどの欧米の建築史家によっても論考が重ねられてきた⁴。たとえば、ル・コルビュジエが自ら創刊した

¹ 筆者は「建築出版活動」を主題に掲げた以下の論文を発表してきた。拙稿「構成社書房の建築出版活動の概要と史的意義について」（矢代眞己、大川三雄と共著、日本建築学会計画系論文集、第541号、pp.221-226、2001年3月）、拙稿「洪洋社の建築出版活動の概要とその特質について」（大川三雄、矢代眞己、田所辰之助と共著、日本建築学会計画系論文集、第721号、pp.751-758、2016年3月）

² たとえば、ヴィトルヴィウス『建築について』（建築十書、紀元前1世紀）、レオン・パティスタ・アルベルティ『建築論』（建築十書、1485年）、アンドレア・パラディオ『建築四書』（1570年）などが知られている。また、建築と書物の関係性については、たとえばヴィクトル・ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』（1831年、邦訳、河出書房1950年、岩波文庫1956～1957年ほか）の第五編における以下のような叙述が知られている。「世界のはじまりからキリスト紀元の十五世紀の末までは、建築は人類の持っていた偉大な書物の役目をつとめ」てきたが、グーテンベルクの登場がその立場を逆転し、「書物が建築を滅ぼすだろう」と司教補佐の言葉にユゴーの思想が託されている（辻昶・松下和則訳、岩波文庫新訂版・上巻、2016年、pp.350-352）。

³ ヴァルター・ベンヤミン「写真小史」、1931年（邦訳『図説 写真小史』、p.45、久保哲司編訳、筑摩書房、1998年）

⁴ 「近代運動とは、個人的経験とか、あるいは慣習的な本によってではなく、まったく『写実的事実』に依拠した、美術史上最初の運動だった」とレイナー・バンナムが記したことをうけて、ピアトリス・コロミーナは「建築の生産の現場」が「建築出版や展覧会、雑誌の非物質的な場所に移行」したモダニズムの建築は、「ただメディアとの関わりにおいてのみ近代的たりうる」のであり、「20世紀の文化を決定するように」なった「新しいコミュニケーション・システム、つまりマスメディア」こそが、モダニズムの建築が「生み出された本当の場所であり、そして直接的に関わっているもの」と述べている（Beatriz Colomina, *PRIVACY AND PUBLICITY: Modern Architecture as Mass Media*, The MIT

雑誌でその建築像を喧伝したように⁵、書物の役割は一段と重視されていったのである。

書物は一般に、雑誌と図書に分類され⁶、図書は単行本とシリーズ形式の叢書に区分される。日本の近代建築史研究において建築の書物（以下、「建築書」と表記する）を対象とした既往研究では、モダニズムの導入をめぐる建築の雑誌（以下、「建築誌」）の存在に多くの脚光が当てられてきた。日本近代建築史研究の創成期となった1950～1960年代には、1920～1930年代の建築運動史にそって建築誌の系譜が描かれていった⁷。一方で、建築誌を史料として用いながらその記事を分析することで、モダニズム建築の導入過程を検証する研究が1980年代から活発化され⁸、今日ではその延長線上において20世紀後半の建築誌にまで分析対象が広がられている⁹。さらに2000年代からは、1920～1930年代の建築運動を担った建築家による書物の編集行為について、建築設計と同様の表現行為とみなす論考が発表されている¹⁰。

こうした近代日本の建築書そのものを対象とした研究については、その嚆矢が1930年代に早くも見いだされるように¹¹、長きにわたって幾多の論考が積み重ねられてきた。1990

Press,1994/邦訳『マスメディアと近代建築——アドルフ・ロースとル・コルビュジエ』、松畑強訳、pp.25-26、鹿島出版会、1996年）。また、エイドリアン・フォーティは、「写真は鉄筋コンクリートを文化の媒体（メディア）とすることに成功」し、「写したものが何であれ美しく見せられる写真の力を通して、鉄筋コンクリートは近代建築の主役となった」と指摘した（Adrian Forty, *Concrete and Culture: A Material History*. London: Reaktion Books, 2012/邦訳『メディアとしてのコンクリート——土・政治・記憶・労働・写真』、坂牛卓・邊見浩久・呉鴻逸・天内大樹訳、p.341、鹿島出版会、2016年）。

⁵ ル・コルビュジエと雑誌『レスプリヌヴオー』については、たとえばコロミーナ、前掲4に詳しい。

⁶ 書物は、図書と雑誌に二分され、前者は1冊で完結され、後者は同一タイトルで定期的に刊行されるため「巻」「号」がつく。国際標準番号がISBN（図書）とISSN（雑誌）で付与されているように、世界共通の区分となる。

⁷ たとえば、神代雄一郎「日本における近代建築思潮の形成」（『建築学大系6 近代建築史』、pp.313-315、彰国社、1958年）、日本科学史学会編『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』（村松貞次郎責任編集、第一法規出版、1964年）が挙げられる。くわしくは次項「既往研究の検討」の第1目「日本近代建築史の包括的研究」を参照されたい。

⁸ たとえば、広瀬謙二、松成和夫、三宅信夫、勝又英明「雑誌にみる海外建築紹介」（日本建築学会学術講演梗概集（計画系）、1982年、pp.2355-2356）と藤岡洋保「大正末期から昭和初期の日本の建築界におけるル・コルビュジエの評価」（日本建築学会学術講演梗概集（計画系）、1982年、pp.2353-2354）が最初期の代表的な論考として挙げられる。くわしくは次項「既往研究の検討」の第2目「建築書にもとづく日本近代建築史研究」を参照されたい。

⁹ たとえば、東京工業大学の奥山信一研究室が2015年度日本建築学会大会学術講演にて「戦後日本の建築ジャーナリズムにおける記事に関する研究」として2編を発表している（「(1) 建築専門誌における記事内容とその構成」「(2) 建築専門誌における記事内容とその構成の推移」日本建築学会学術講演梗概集、建築歴史・意匠、2015年、pp.615-618）。

¹⁰ たとえば、藤岡洋保『表現者・堀口捨己——総合芸術の探求』（中央公論美術出版社、2009年）、井上章一「現代の建築家⑧ 堀口捨己——メディアの可能性ともむきあって」（『GA JAPAN』117号、pp.126-135、2012年7月、のちに単行本『井上章一 現代の建築家』に所収、エーディーエー・エディタ・トーキョー、2014年）などが挙げられる。

¹¹ 佐藤功一「西洋家作雛形解題」（『明治文化全集 第24巻 科学編』吉野作造編、日本評論社、1930年、『佐藤功一全集 第三巻』p.91、1942年）

年代には建築誌のドキュメンテーション活動の成果としての総目次が公刊されている¹²。まもなく建築誌そのものの復刻刊行がはじまり、2000年代になって主要な建築誌がほぼ復刻刊行され、さらに、単行本や叢書による建築の図書（以下、「建築図書」）を復刻して所収する叢書が相次いで刊行されるにいたった¹³。これらの復刻刊行にあたっては、文献解題が付されることとなり、その検証作業は雑誌から図書へと拡充されてきたといえる。

そして、日本建築学会賞（業績）と日本建築学会文化賞は、編集者・出版人や写真家といった多くの建築書のつくり手に授与されてきたことにも、今日にいたるまでの建築と書物の密接な関係性が示されているといえる。古くは雑誌『国際建築』編集長・小山正和が戦前戦後にわたる「近代建築思潮の導入育成についての出版活動」によって1965年に受賞し、最近ではSD選書や雑誌『a+u』の創刊に携わった中村敏男（2016年受賞）にいたるまで、延べ18名の編集者・出版人や評論家と8名の建築写真家が表彰されている¹⁴。

本論文の研究対象は、幕末の開国から昭和戦前期までに刊行された近代建築書である。近代建築書とは、近代西洋文明と接して建設されるようになった近代建築¹⁵を主題として扱う雑誌および図書とし、日本の伝統的建築を扱う書物については写真印刷などの近代的な刊行手法や解釈が認められるものを含めている。

近代建築史研究においては、前述のとおりモダニズムを推進した建築運動体の機関誌などの前衛的な建築誌に注目が集まることが多い¹⁶。しかし、日本の近代建築書を概観すると、欧米歴史主義の建築様式や日本の伝統的建築の意匠を扱った幾多の建築図集をはじめ、建築技術書や住宅関連書などの多様な建築図書が刊行されていた。とくに市販の近代建築書における著者や編集者・出版人の刊行趣旨には、読者の需要が少なからず反映されることとなり、建築をめぐる社会的な嗜好や共通意識の一面が示されているものといえる。また、

¹² 菊岡俱也、藤井肇男編『日本近代 建築・土木・都市・住宅 雑誌目次総覧』、柏書房、1990～1991年

¹³ 次項「既往研究の検討」の第3目「日本の近代建築書の史的的研究」を参照されたい。

¹⁴ 日本建築学会賞（業績）および日本建築学会文化賞を授与された編集者・出版人、評論家、写真家は、2017年までに以下のとおりである。表彰の対象は、日本建築学会賞（業績）は同学会の会員、*で示した日本建築学会文化賞は会員外とされる。下出源七（1954、1963年）、吉岡保五郎（1963年）、小山正和（1965年）、長谷川堯（1985年）、吉田義男*（1986年）、渡辺義雄*（1986年）、鹿島出版会*（1990年）、普請帳研究会代表・宮澤智士（1993年）、平山忠治*（1995年）、平良敬一（1997年）、二川幸夫*（1997年）、川澄明男（2000年）、東秀紀*（2001年）、馬場璋造（2002年）、植田実*（2003年）、増田彰久*（2006年）、山田脩二*（2008年）、大橋富夫*（2009年）、村井修*（2010年）、松葉一清*（2011年）、松山巖*（2011年）、遠藤信行*（2013年）、佐伯泰英*（2014年）、中村敏男*（2016年）。

¹⁵ 藤森照信『近代日本の洋風建築』（開化篇、p.389、栄華篇 p.435、筑摩書房、2017年）

¹⁶ 西野嘉章『前衛誌——未来派・ダダ・構成主義』（東京大学出版会、2016年）は、ヨーロッパの前衛芸術運動の機関誌を網羅的かつ詳細に解説した貴重な成果となっている。

建築出版組織ごとの出版活動を概観すると、建築誌を主体とした出版社をふくめて、ほとんどの建築出版組織が建築図集を刊行していたことが認められる。前述したように、建築をめぐる視覚情報の役割が近代になって飛躍的に拡大したとされるなかで、建築図集の性質とその変遷を検討する意義は決して小さくない。こうした建築出版活動の史的展開を概括することは、わが国において建築が工学の一分野でありながらも、技術とともに歴史や思想、そして意匠を重視する建築学に固有の特質が形成されていった背景を見いだすことができるとも考えられる。また、建築分野の史料を保存活用するアーカイブズの展開においても、近代建築書の取り扱いに関する一定の評価軸を提示しうることも期待される。

本論文は、以上のような視座に立脚したうえで、建築誌のような系譜が見いだされてこなかった単行本や叢書による建築図書について、建築出版組織の枠組みでとらえることで建築図書相互の関連性および編集者・出版人の刊行趣旨や刊行手法を分析し、建築図書の史的展開を検証することを目的としている。また、建築誌および建築図書を一定期間刊行した建築出版組織の諸活動を編年的にとらえることで、建築誌と建築図書をあわせた近代建築書の全体像について検証することを試みるものである。

2 既往研究の検討

本論文の研究対象となる日本の近代建築書が、既往研究においてどのように叙述されてきたのかについて、4つの観点から検討していく。すなわち、1) 日本近代建築史の包括的研究、2) 建築書にもとづく日本近代建築史研究、3) 日本の近代建築書の史的研究、4) 近代日本の建築出版活動に関する研究、の順に述べる。

1) は、日本近代建築史のいわゆる通史のなかで、どのように建築書が取り扱われてきたのかについて、定本とされる論考を中心に検証する。2) の観点は、多くの日本近代建築史研究にあてはまるともいえるが、ここでは近代建築書の分析・検証に依拠した日本近代建築史の論考を取り上げる。3) は、近代建築書そのものを対象とした史的研究である。3) は4) もふくんでいるが、4) は本論文が立脚する視座であり、近代建築書を刊行した著者や編集者・出版人による建築出版活動という観点からとらえた論考について概観する。

1) 日本近代建築史の包括的研究

日本近代建築史の概説書の定本、いわゆる通史を中心として刊行順にたどりながら、近代建築書に関する記述を抽出することで、近代建築書の史的研究への視座を整理する。

稲垣栄三著『日本の近代建築——その成立過程』(丸善、1959年)¹⁷では、造家学会(現・日本建築学会)創設以前の工学会機関誌の存在がふれられたうえで、造家学会誌『建築雑誌』が工部大学校卒業生たちの研究・啓蒙の舞台のひとつとなっていたことが述べられ、同誌の初期における記事内容が紹介された¹⁸。また、その初版の「はしがき」では、戦前期の「建築運動のはなやかであったころ、出版物も大いににぎわった」¹⁹と建築運動と建築誌の密接な関係性が言及された。全体をつうじては、建築の様式や技術の展開だけでなく、社会制度や建設業界の動向など、広範な視野によって日本近代建築史が概説されているが、その成立過程の一要素として建築書の役割についても目配りがしめされた。

同年に刊行された村松貞次郎著『日本建築技術史』(日本技術史叢書、地人書館、1959年)²⁰では、数多くの建築技術書が紹介されている。たとえば「イギリスの煉瓦造小住宅改良法の訳書『西洋家作ひながた』」は、銀座煉瓦街建設の契機となった1872年の銀座大火が同書の刊行の背景とされ、その訳者や原書についてもふれられた²¹。当時の大工技術の教育は、親方制度とともに規矩術書の流通に支えられており、それらが江戸期の代表的な書物の「亜流」であったこと、また中村達太郎が『建築雑誌』において扇種の計算法を会員に募った過程が詳述された²²。さらに、新しい技術への大工たちの向学心に応えたものとして、『建築雑誌』のある号に紹介された7点の市販建築書が取り上げられ、とくに滝大吉著『建築学講義録』と中村達太郎著『建築学楷梯』が後世に与えた影響の大きさに言及したうえで、滝の著書がその主宰する夜間工業学校での講義録であった刊行経緯や、「建築技術全体の一大便覧」と評する記載内容が「建築における開明思想」の表れとして詳述された²³。村松による本書は、建築技術史の観点から日本近代建築史を叙述した嚆矢的な通史とされるが、建設活動の実践に新旧の建築技術書が果たした役割に多くの注意が払われた。

桐敷真次郎著『明治の建築——建築百年のあゆみ』(日経新書33、日本経済新聞社、1966年)²⁴では、幕末の反射炉建設におけるオランダの軍事技術書の邦訳の役割に言及され、『西洋鉄煩鑄造篇』や『築城典刑』などの6点の訳出事例と大島高任ら訳者の存在が叙述され

¹⁷ 1979年に鹿島出版会SD選書(上下巻)に、2009年に『稲垣栄三著作集 五』(中央公論美術出版)に所収された。

¹⁸ 前掲17 稲垣栄三『日本の近代建築——その成立過程』(鹿島出版会、上巻、p.141、1979年)

¹⁹ 稲垣、前掲18、p.9

²⁰ 1959年11月刊。前掲17、稲垣『日本の近代建築——その成立過程』の初版(丸善)は1959年6月刊。

²¹ 村松貞次郎『日本建築技術史』(p.50、p.62、日本技術史叢書、地人書館、1959年)

²² 村松、前掲21、p.127、p.131

²³ 村松、前掲21、p.127、p.131、p.134

²⁴ 「復刻版」が本の友社から2001年に刊行されている。

た²⁵。また、『建築雑誌』が1910年末に「普通ページにも、写真が印刷」されるようになり、その3年後には「おもな海外雑誌の内容紹介が、写真入りで連続的に行なわれるようになった」ことが「画期的な事件」とされ、欧米の「新作品の姿」が建築学会の一般会員にも広く見られようになったことが紹介された²⁶。西洋建築史を専門とする桐敷ならではの国際的な視座によって、海外情報の移入という観点から建築書の役割が言及されている。

日本近代建築史の通史の定本とはやや性格を異にするが、上記の3冊より一足早く刊行された『建築学大系 6 近代建築史』（彰国社、1958年）は、「欧米近代建築史」「日本近代建築史」「現代建築史」の3部構成によって叙述された。このうち阿部公正と神代雄一郎の共著による「日本近代建築史」では、神代が担当した2章「日本における近代建築思潮の形成」において、多くの建築誌が紹介されている。表紙が挿図として掲載された建築誌には『国際建築』『建築時潮』『建築工芸アイシーオール』『現代建築』が認められ、昭和戦前期までの「建築関係雑誌年表」が「日本の近代建築運動年表」と並べて掲示された²⁷。本文で言及された建築書としては、『新建築』『インターナショナル建築』『建築科学』『DEZAM』の各誌、単行本としても『日本美の再発見』など4冊のブルーノ・タウトの著作にくわえ、『国際建築』誌の特集「日本建築再検 第1集 数寄屋造」（1934年1月号）へのタウトの寄稿も紹介されている²⁸。そして日本のモダニズム建築における「合理主義的な歩み」の広がりをしめす事例として、岸田日出刀の写真集『現代の構成』やル・コルビュジェの『今日の装飾芸術』の訳出など4冊の刊行物が紹介され、その脚注において「これらの著書は雑誌『建築時潮』を刊行した構成社書房から出版された」と付記された²⁹。戦前期においてモダニズム建築が推進された具体例として、雑誌を軸とした近代建築書の紹介に多くの紙幅が割かれている。

そして、『建築学大系 6 近代建築史』で神代が掲示した「建築関係雑誌年表」と「日本の近代建築運動年表」については、村松貞次郎責任編集『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』（日本科学史学会編、第一法規出版、1964年）においても、同一の名称と同様の体裁で「第10章 近代建築運動の展開」の冒頭で縦列に掲載された³⁰。同書は、幕末以降100

²⁵ 桐敷貞次郎『明治の建築——建築百年のあゆみ』（pp.40-43、日経新書33、日本経済新聞社、1966年）

²⁶ 桐敷、前掲25、p.173

²⁷ 神代、前掲7、pp.313-315

²⁸ 神代、前掲7、pp.308-323

²⁹ 神代、前掲7、p.313

³⁰ 村松、前掲7、p.483

年間の建築関連史料が村松の独力ではじめて体系的に編まれた日本近代建築史研究の基本文献のひとつである。前述の『建築学大系』は、戦後建築学界の総力をもって建築各分野の概説書が40巻で網羅された建築学全体の基本文献とされる。そうした基本文献2冊に「建築関係雑誌年表」が「日本の近代建築運動年表」と併載されたことで、建築誌の系譜が建築運動史と重ね合わせられて浸透した範囲は決して狭くないものと考えられる。

以上、日本近代建築史の包括的研究の定本を中心にみた近代建築書に関する叙述は、建築技術書と建築誌の観点に大別できる。建築技術書の側面においては、西洋建築技術の導入と普及には邦訳を端緒とした建築図書が、そして日本の伝統的な技術体系の継承には規矩術書の役割にも脚光が当てられていた。建築誌に関する論考では、海外情報のメディアとしての建築誌による報道が述べられ、とくにモダニズム建築の導入とその建築運動との関係性において建築誌の存在に叙述の力点が置かれていた。日本近代建築史研究の草創期といえる1950年代から書物の役割に多大な注目が払われていたのである。

2) 建築書にもとづく日本近代建築史研究

建築書の分析・検証に依拠した日本近代建築史の論考について、それらの特徴をおもに年代順に確認する。

前目1)における建築技術史からみた建築書の叙述のなかで、村松貞次郎著『日本建築技術史』における『西洋家作ひながた』の紹介は、菊池重郎の論考によっていることが注釈に示されている³¹。菊池は、幕末・明治初期における建築技術書の論考を1950年代から数多く著しており³²、その成果を博士論文『日本に於ける洋式建築の初期導入過程の研究』（東京工業大学、1962年）にまとめた。前目1)の桐敷真次郎の概説書『明治の建築——建築百年のあゆみ』は、新書という性格ゆえだろう引用文献は明記されていないが、その幕末の軍事技術書に関する記述は菊池の研究成果によっていることは、両者の刊行年の関係性からも明らかといえる。さらに菊池は、明治期前半における西洋建築技術の刊行物を12冊リストアップし、それらの訳出の多くが明治政府の機関によることを指摘している³³。

建築技術史からみた近代建築書に関する論考は、その後も村松貞次郎の著作をはじめと

³¹ 村松、前掲21、p.62

³² たとえば、菊池重郎「明治初期洋風建築技術書「西洋家作ひながた」——1 その原著・訳者・刊本について」（日本建築学会研究報告31-2、pp.233-234、1955年5月）および「明治期洋風建築術書「西洋家作ひながた」——第2報 その刊行の意図と原書との関係について」（日本建築学会研究報告33-2、pp.235-236、1955年10月）

³³ 菊池重郎『日本に於ける洋式建築の初期導入過程の研究』（東京工業大学博士論文、1962年）、pp.507-508

して展開していったが³⁴、その研究テーマの広がりには近年においても認められる。たとえば片野博らは、近代の「我が国における技術書の刊行と建設技術の普及に関する研究」を2001年から2004年にかけて10編を発表し³⁵、一連の教科書的な建築書の概要は片野の共同研究者である松永文雄によって建築教育史研究をテーマとした博士論文のなかでまとめられた³⁶。また、近世以来の大工の雛形書についても、柳澤宏江の博士論文において明治期の「洋風意匠」にまで焦点が当てられている³⁷。そして規矩術書の近代における展開については、中谷礼仁が『幕末・明治規矩術の展開過程の研究』（早稲田大学博士論文、1998年）³⁸のなかで詳しく検証し、規矩術書をめぐる出版構造の変遷や著者である建築技術者の人物像を検証するなど、本論文の目的とする建築出版活動の性質が包含されている。中谷は前述の『西洋家作ひながた』についても同様の視座で研究に取り組んでおり、邦訳の経緯や原書の背景などの検証が進められている³⁹。

前目 1) の日本近代建築史の包括的研究における建築書の叙述のもう一方の観点として、建築誌に関しては、海外情報のメディアとしての役割に焦点が当てられていたが、それは本目の建築書を史料として用いた日本近代建築史研究においても同様であった。その嚆矢

³⁴ たとえば、より一般向けの日本近代建築史の概説書となる村松貞次郎『日本近代建築の歴史』（NHK ブックス、日本放送出版協会、1977年）においても、大工棟梁たちが西洋建築を学ぶ手段として、徒弟学校などへの就学とともに、「学士様たちの著作」としての講義録での学習をあげている（p.42）。

³⁵ 片野博らによる「我が国における技術書の刊行と建設技術の普及に関する研究明治」は、以下が確認できる。「昭和初期における理工学系教科書と建築学教科書の役割」「その2：大正、昭和初期に刊行された代表的建築学教科書の内容の特徴について」（共著：塚原恵美子、長谷隆、日本建築学会研究報告九州支部第40号、pp.157-164、2001年）、「その3：明治、大正、昭和初期における建築技術書の時期別出版状況」「その4：明治、大正、昭和初期における建築技術書の分野別出版状況」（共著：長谷隆、山口圭子、同報告第41号、pp.21-28、2002年）、「その5：著者にみる建築技術書の内容的変遷」「その6：一般叢書にみる建築普及の変遷 明治・大正・昭和初期」（共著：山口圭子、同報告第42号、pp.45-52、2003年）、「その7：建築の基礎学問分野における技術書の変遷」「その8：土木分野における技術書の変遷」（共著：その7岡本温子、その8黒澤圭太、同報告第43号、pp.49-56、2003年）、「その9：「高等建築学」と著者の属性について 構造・材料等分野」「その10：「高等建築学」と著者の属性について 計画等分野」（共著：木下健二、同報告第43号、pp.57-64、2004年）。

³⁶ 松永文雄『我が国における中等建築教育の確立に関する基礎的研究——大正末、昭和初期の文部省内と建築学会の検討活動を通じて』（九州大学博士論文、私家版、2008年）のうち「第2章 建築教育における教科書（とその役割）」。

³⁷ 柳澤宏江『明治時代の建築雛形本にみる洋風意匠の受容に関する研究』（名古屋市立大学博士論文、私家版、2008年）

³⁸ 中谷礼仁・中谷ゼミナール著『近世建築論集』に所収（アセテート、2005年）

³⁹ 中谷礼仁らによる「『西洋家作雛形』・『Cottage Building』比較研究」は、以下の発表が確認できる。「1：明治初期日本における救貧行政からみる出版意図の再考察」「2：産業革命後英国における住宅改善の取り組みと本書の位置づけ」「3：西洋建築導入期における技術的語句の意図的な翻訳の工夫」「4：明治初期日本における「建築」概念の美学的観点について」（共著者：本橋仁、丸茂友里、根来美和、廣瀬翔太郎、日本建築学会大会学術講演梗概集、2015年、建築歴史・意匠、pp.739-746）。

といえるのが、1982年の日本建築学会大会に提出された2編の口頭発表論文となる。

広瀬鎌二らは戦前期の「建築ジャーナリズムが果たした海外建築紹介の役割」の考察⁴⁰をテーマとし、「時系列による国別の変化・海外情報の推移」について3誌が分析対象とされた。『国際建築』は「海外建築紹介の中心的雑誌」、『建築世界』は「民間ジャーナリズムの代表的存在」、『建築雑誌』は「学術的性格ばかりでなく、海外の動向にも敏感であったので一般雑誌として扱った」とされていることから、各誌の性質をふまえたうえでの検証作業であったことが認められる。

もうひとつの論考は、藤岡洋保による「大正末期から昭和初期の日本の建築界におけるル・コルビュジェの評価」⁴¹である。それは「当時の建築関係の代表的な雑誌」として『建築雑誌』『建築世界』『建築画報』『建築新潮』『国際建築』『日本建築士』の各誌から、ル・コルビュジェを扱った記事が抽出され、その評価の変遷について検証されている。以降、藤岡は、建築各誌の記事をテーマにそって抽出する手法によって、ミース・ファン・デル・ローエやヴァルター・グロピウスといった西欧モダニズム建築の巨匠たちへの日本における評価の変遷を分析し、あるいは戦前期の日本建築界における「日本的なもの」「空間」「機械」「都市美」といった枢要な概念の変容についての検証を広く展開していった⁴²。これらの一連の論考においては、建築誌の記事が海外情報の窓口としてとらえられているだけでなく、日本建築界の歩みを編年的にたどる史料として扱われている。そのテーマは、建築

⁴⁰ 広瀬ほか、前掲8

⁴¹ 藤岡、前掲8

⁴² 藤岡は、前掲8、「大正末期から昭和初期の日本の建築界におけるル・コルビュジェの評価」の論考を発表した翌年に「昭和初期の合理主義の建築家による「日本的なもの」(日本建築学会学術講演梗概集(計画系)、1983年、pp.2573-2574)をつづけ、以後「大正末期から昭和初期の日本の建築界におけるヴァルター・グロピウスの評価」(広瀬健吾と共著、日本建築学会学術講演梗概集F、1985年、pp.907-908)、「大正初期から昭和戦前の日本の建築界における「機械」の概念の導入とその理解のされ方」(鈴木達也と共著、日本建築学会学術講演梗概集F、1987年、pp.773-774)、「明治末期から昭和戦前の建築・美術・都市関係雑誌に示された都市美に対する考え方について」(山崎鯛介と共著、日本建築学会学術講演梗概集F、1990年、pp.761-762)などのテーマへと展開した。その成果は以下のような査読付き論文にまとめられた。「大正末期から昭和戦前の日本の建築界におけるル・コルビュジェの評価」(日本建築学会計画系論文報告集、第371号、pp.112-118、1987年1月)、「昭和初期の日本の建築界における「日本的なもの」——合理主義の建築家による新しい伝統理解」(日本建築学会計画系論文報告集、第412号、pp.173-180、1990年6月)、「日本の建築雑誌に示されたルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエの評価」(鈴木達也と共著、日本建築学会計画系論文報告集、第418号、pp.147-153、1990年12月)、「建築雑誌に示された日本の建築界への「空間」という概念の導入と定着」(佐藤由美と共著、日本建築学会計画系論文報告集、第447号、pp.109-118、1993年5月)。また、近年は海外の建築書にも藤岡の目が向けられており、たとえば『NIPPON』と『TOURIST LIBRARY』に示された「日本的なもの」の理解」(日本建築学会学術講演梗概集F-2、2002年、pp.381-382)や「"ARCHITECTURAL JAPAN OLD NEW"に見る1930年代の「日本建築」観」(日本建築学会学術講演梗概集F-2、2010年、pp.533-534)などが挙げられる。

に関する概念をふくめて、モダニズムの観点が主軸とされてきたことも指摘できる。

建築誌の記事の分析にもとづく史的検証は、その後も多様なテーマへと展開されていき、近年では戦後の建築誌も分析の対象とされ⁴³、あるいは建築設計における建築誌の役割についても検討がくわえられている⁴⁴。こうした検証作業が継続されるなかで、1982年の広瀬らの論考に明示されていた各誌の性質とその差異について考慮した検証の形跡が、しだいに認めにくくもなっており、たとえば記事の本数によって各誌の統計が等価に算出されている傾向も観察される。それは逆説的に、日本の近現代建築史に関する基本資料として建築誌の存在が周知されていることの証左ともいえよう。

本目の最後に、その刊行年代と研究対象の性質はやや異なるが、堀越三郎著『明治初期の洋風建築』（丸善、1929年）⁴⁵についてふれておきたい。同書は、日本近代建築史をテーマとした博士論文としては戦前期で唯一の存在とされる。倉方俊輔も指摘しているように⁴⁶、「三大民営建築の復原」においては写真をもとに平面・立面図が作成され、図面から起こす透視図法とは逆工程が採られた手法に対して「錦絵や写真を寄せ集めても学位論文になるか」⁴⁷との指摘があったとされる。しかし、写真や錦絵を史料として用いた堀越の日本近代建築史研究は、写真による建築の伝播という近代社会の特質に見合った研究手法とも考えられる。擬洋風建築の姿が錦絵によって広く伝播されたことも知られてきたが⁴⁸、日本近代建築史研究の起首において写真や錦絵というメディアが題材とされていたことを指摘しておきたい。

3) 日本の近代建築書の史的 연구

本目では、わが国における近代建築書そのものを研究対象としたおもな論考について、その特徴を編年的にたどっていく。

⁴³ 奥山ほか、前掲9

⁴⁴ 信州大学（当時）の坂牛卓研究室が「建築意匠設計における建築雑誌の役割に関する研究」を発表している（「建築一般誌と建築専門誌の作品写真から読み取れる両誌の特質分析」日本建築学会学術講演梗概集 F-2、2007年、pp.665-666、「建築専門雑誌の作品写真から読み取れる年代特質分析」（日本建築学会学術講演梗概集 F-2、2008年、pp.591-592、「建築作品写真の特質が記者に与える影響の分析」（日本建築学会学術講演梗概集、建築歴史・意匠、2011年、pp.65-66）。

⁴⁵ 1932年に同一表題にて博士論文として東京帝国大学に提出。1929年の丸善版は、1973年に南洋堂書店から復刻刊行された。

⁴⁶ 倉方俊輔「『日本近代建築』の生成——「現代建築」から『日本の近代建築』まで」（『10+1』no.20、pp.151-152、2000年6月）

⁴⁷ 滝沢真弓『明治初期の洋風建築』原本成立の経緯と運命（堀越三郎『明治初期の洋風建築』復刻版、p.2、1972年）

⁴⁸ 初田亨『職人たちの西洋建築』（pp.110-115、講談社選書メチエ、1997年）

その嚆矢として挙げられる論考は、1930年に佐藤功一によって著された「西洋家作雛形解題」⁴⁹とみられる。同論は、明治期の基本文献を集成した『明治文化全集』（明治文化研究会編、1927～1932年）のなかの「第24巻 科学編」（吉野作造編、1930年）に所収された。佐藤は1872年刊行の『西洋家作ひながた』⁵⁰をわが国最初の「建築構造の書」⁵¹と評し、同書の著訳者や版元に言及しながら、初版と再版の時代背景が検討された。こうした建築書の考証は、1950年代に日本近代建築史研究が本格化する以前に、『明治文化全集』に所収されることによって建築史研究の萌芽が存在していたものと認められる。それは、前目で紹介した堀越三郎著『明治初期の洋風建築』（1929年）と並ぶ、日本近代建築史研究のさきがけとも位置づけられる。

そして、佐藤による『西洋家作ひながた』への着目は、前目でみた1950年代の菊池重郎による建築技術書の論考へと継承されたことは、菊池の論考に明記されている⁵²。菊池は、佐藤が言及しながら特定できなかった原著や訳者の人物像についても解明し、原書と訳書に共通する都市火災という刊行の経緯を検証している。それは、明治初期における建築技術史の研究成果としてだけでなく、建築技術書における出版活動の史的研究としてもとらえることができる。『西洋家作ひながた』の研究については、以降も多くの論考が重ねられていき⁵³、現在は中谷礼仁らによって出版背景の再検証や技術用語の邦訳過程などの詳細な分析が進められている⁵⁴。

また、菊池による近代建築書の研究は、建築技術書だけでなく建築図集にも及び、たとえば武田五一によって編まれたフランク・ロイド・ライトの建築図集の刊行経緯に関する論考が1960年代から発表された⁵⁵。同じく1960年代には、堀口甚吉も近代建築書に関する

⁴⁹ 佐藤、前掲 11、pp.91-92

⁵⁰ シー・ブリュス・アルレン著、ウキール・ジョン増補、村田文夫、山田貢一郎訳、玉山堂（著者名の表記は原文ママ）

⁵¹ 佐藤、前掲 11、p.91

⁵² 菊池、前掲 32。2編のうち、「明治初期洋風建築技術書「西洋家作ひながた」——1 その原著・訳者・刊本について」の冒頭において、佐藤功一の論考が紹介されている。

⁵³ おもな論考として、長尾重武「文献《西洋家作雛形》」（『都市住宅』1974年5月、p.76）、丹羽和彦「村田文夫と『西洋家作ひながた』について」（日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠、1999年7月、pp.339-340）、藤田治彦「明治五年刊『西洋家作雛形』の建築用語」（『待兼山論叢 33号 美学篇』pp.1-24、1999年）、瀧上貴由樹「『西洋家作ひながた』の住宅室名用語について」（日本建築学会研究報告九州支部、2013年3月、pp.581-584）などが知られる。

⁵⁴ 中谷ほか、前掲 39

⁵⁵ 菊池重郎「大正期近代建築の導入と建築図集の刊行——武田五一のライト作品集」（日本建築学会関東支部第39回学術研究発表会梗概集、p.17、1964年）

論考を發表しはじめている⁵⁶。それは、中村達太郎や滝大吉、三橋四郎による最初期の建築講義録について、建築家たちの啓蒙的な執筆活動の事績として検証するものであり、明治期から昭和戦前期にかけての建築講義録の系譜についてもたどっている。日本の近代建築書に関する史的研究の視座が、建築技術史から建築家たちの出版活動へと広がっていったことが認められる。

建築家たちによる出版活動という視座は、次目4)の主題となるが、日本建築学会誌『建築雑誌』の通巻1,000号(1968年8月号)を記念してまとめられた同誌の記事にも確認できる。同学会の事務局長などを長く務めた高杉造酒太郎は、その学会運営をつうじての伝聞や知見をもとに、創刊前後の編集活動における中心人物や事務局の実務担当について叙述した⁵⁷。山口廣によって1,000号がまとめられた年表⁵⁸では、記事や編集委員の変遷からレイアウトや発行部数などの推移に至るまでのトピックスが抽出されている。

著者や編集者による出版活動の観点をふくめた近代建築書の史的研究は、より若い世代の建築史研究者にも引き継がれていった。河東義之と長男重武は、1974年に雑誌『都市住宅』において文献紹介の連載を担当し、『西洋家作ひながた』や『建築学階梯』、あるいは『建築』『建築世界』『建築画報』といったように、建築技術書と建築誌における最初期の重要文献を解題していった⁵⁹。また、「明治創刊の雑誌一覧」として、建築分野を中心に工学・美術・工芸・図案などの周辺分野もふくめた専門誌のリストが掲示されている。

これらの建築関連の専門誌に関するドキュメンテーション活動、すなわち文献情報の整理と総覧化に取り組みつづけた代表的な研究者としては、菊岡俱也が挙げられる。前述の河東の「明治創刊の雑誌一覧」にさきだつ1971年に、「建設関係(戦前中心)和雑誌所在

⁵⁶ 堀口甚吉による建築図書に関する研究は、以下のような論考に代表され、いずれも『近代建築史論』(堀口甚吉論集刊行会、1984年)に所収されている。「下田菊太郎氏著欧米建築(明治22年6月出版)について」(日本建築学会論文報告集、第89号、p.485、1963年)、「滝大吉氏の建築家としての業績」(日本建築学会論文報告集号外、40巻、p.671、1965年)、「中村達太郎博士の建築学書著作家としての一面」(日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、44巻、pp.879-880、1969年)、「我が国における建築講義録の発達について」(日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、47巻、pp.1387-1388、1972年)、「三橋四郎氏著「大建築学」について」(日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、46巻、pp.1075-1076、1971年)

⁵⁷ 高杉造酒太郎『『建築雑誌』の歩みと変せん』(『建築雑誌』、1968年8月号、pp.588-593)

⁵⁸ 山口廣「年表・建築雑誌1000号の歩み(明治20年～昭和43年)」(『建築雑誌』、1968年8月号、pp.594-607)

⁵⁹ 『都市住宅』における河東義之と長男重武の連載は「文献」と題されたコーナーにおいて、1974年5月号から11月号にわたった。河東はおもに建築誌を担当し、掲載順に『建築』『建築工芸叢誌』『建築工芸画鑑』『建築世界』『建築ト裝飾』『建築画報』『明治創刊の雑誌一覧』『工匠雑誌』、長尾はおもに建築技術書を中心とした図書を担当し、『西洋家作雛形』『百科全書』フレッチャー『建築史』『新撰大匠雛形大全』『欧米建築』『建築学階梯』『日本建築構造改良法』を解題した。

目録（建築技術史・産業史資料）」を編さんし、建設省建築研究所から刊行している。1977年には『建築雑誌』の主集「建築ジャーナリズム」において「明治・大正・昭和にみる建築・都市・住宅関係雑誌の変遷」⁶⁰と題したドキュメンテーションを寄せ、主要各誌の創刊号の表紙、目次、創刊の辞を一覧に示し、関係誌の統合リストも併載した。こうした菊岡による建築誌のドキュメンテーション活動の集大成といえるのが1990～1991年に刊行された『日本近代建築・土木・都市・住宅雑誌目次総覧』（柏書房）であった。土木学会附属土木図書館に長く勤めた藤井肇男との共編によって、約80誌の全号ぶんの目次ページが所収された合計12巻からなり、各誌の解題が各分野の研究者によって分担執筆された。同書によって、昭和戦前期までの建築誌についてはドキュメンテーションの構築が済んだかみえたが、『国際建築』をはじめとするモダニズム系の建築各誌については、『建築新潮』をのぞいて全号目次の収録がなされていない。

一方で、建築図書に関するドキュメンテーションの構築については、日本建築学会に勤めた所正七が昭和戦前期までの図書目録を1983年に発表したが、「二次文献により図書カードの作成」を行った「不備」が注記されている⁶¹。これに対し、近代建築書の実物にあたって図書と雑誌の総合リストを構築したのが、藤森照信を代表研究者とする『日本近代建築書の研究』（昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年）であった。同研究では、日本建築学会図書館をはじめとする各図書館から近代建築書が抽出され、図書が1,563点、雑誌が1,050点の2本立てのリストで整理された。ここで対象とされた近代建築書とは、明治期から昭和戦前期までを近代とし、日本近代建築史研究において史料として扱われる建築書、と定義されている⁶²。そうした史料としての利用頻度については、同研究での調査によると、1) 建築家の作品集、2) 日本建築学会誌『建築雑誌』、3) 建設会社の作品集、4)

⁶⁰ 菊岡俱也、田中良寿「明治・大正・昭和にみる建築・都市・住宅関係雑誌の変遷」（『建築雑誌』1977年11月号、pp.43-59）。同号の主集「建築ジャーナリズム」は編集委員長を近江栄が務めた。

⁶¹ 所正七「明治・大正・昭和（昭和20年迄）図書目録」（全8回、『近代建築』1982年8月号～1983年5月号）。なお、タイトルは「明治・大正・昭和（昭和20年迄）建築図書目録」とされた号もみられる。また「明治・大正・昭和 雑誌一覧表①」（『近代建築』1983年6月号）は継続が確認できていない。

⁶² 藤森照信（代表研究者）『日本近代建築書の研究』（pp.3-4、昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年）。原則として対象外とされたのは、戦前期における日本の古建築をテーマとした建築史学の書物、たとえば膨大に刊行されたとされる調査報告書の類となる。建築史学の書物のなかで例外として対象とされたのが「戦前に二冊だけ出された日本の近代建築を対象とした史書である『明治初期洋風建築』堀越三郎著、と『明治初期来朝イタリア美術の研究』隈元謙次郎著はこれを日本近代建築書の一つとする」と述べられている。前者は『明治初期の洋風建築』（小滝文七刊、1929年、復刻版・南洋堂書店、1973年）、後者は『明治初期来朝伊太利亜美術家の研究』（三省堂、1940年）を指すとみなされる。

各種建築図集、5) 建築家の論文集、の順とされた⁶³。利用頻度の高い上位5種のうち3種を建築図集が占めているのである。つまり、藤森らの研究によって、日本の近代建築書においては図書の刊行点数が雑誌よりも多い傾向が示されているとともに、日本近代建築史研究における建築図集の重要性が認められる。

その建築図集については、前述の菊池重郎による蒐集活動が知られており、わが国の「欧米近代建築の図集」に関して「ほぼ全貌を把握しうる段階に達した」と自任していた⁶⁴。菊池による建築図集の研究成果は1960年代から建築学会などで発表されているが、1980年代の『明治村通信』誌において精力的に筆が執られており⁶⁵、そこでは木葉会や洪洋社といった建築図集の版元にも考証が及んでいる。

近代日本における建築図集の全貌を俯瞰した先行研究は、管見では確認できていない。しかし、住宅図集については、藤岡洋保らが昭和戦前期までを対象に国立国会図書館の蔵書から150点を抽出し、それらの「出版の背景と和洋に対する態度」を分析している⁶⁶。その編者は66点以上が建築家、20点は建築系出版社、4点は同潤会や住宅改良会などの住宅関連団体、あるいは刊行趣旨が明記された81点のうち63点は一般向けと設定されていたことが述べられており、住宅図集の総体としての一定の傾向が示されている。これを内田青蔵は基礎研究として評価しつつも、国立国会図書館所蔵のみを参照したため、すでに存在が知られつつも対象外となった住宅図集について指摘した⁶⁷。また、建築図集に関する近年の研究成果としては、明治初期の開拓使によって蒐集された米国の「パタンブック」に

⁶³ 藤森ほか、前掲62、『日本近代建築書の研究』は、1年間の調査における統計とされ、特定の建築家の作品や特定の建築について調べることの多さが示されている

⁶⁴ 菊池、前掲55

⁶⁵ 菊池重郎の『明治村通信』誌における建築図集をテーマとしたおもな論考は、以下が挙げられる。「欧米新建築のプレート図集「モダン・アーキテクチュア」について」1981年2月号、「月刊図集「近世建築」(1・2)」1981年4、5月号、『セッション図案集』特に「外観之部」の初刊年代について(上・下)」1981年9、10月号、「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動(上・下)」1982年1、2月号、「洋風建築装飾ひながた図集(上・下)」1982年6、7月号、「木葉会の明治期に刊行した建築プレート図集考(上・中・下)」1982年10月号、1983年1、3月号、「洪洋社の「建築写真類聚」の創刊(1)～(5)」1983年7、10、11月号、1984年2、5月号、「幻の邦訳・日本語版『フランク・ロイド・ライト作品集』の探索(1)～(4)」1984年9、12月号、1985年1、2月号

⁶⁶ 藤岡洋保、石井高弘「明治末期から昭和戦前における「住宅図集」について——出版の背景と和洋に対する態度」(日本建築学会学術講演梗概集F、1990年、pp.787-788)

⁶⁷ 内田青蔵が欠如を指摘した住宅図集としては、『木造洋館雛形集』(上下、吉原米次郎、建築書院、1897年)、『木造洋館詳細雛形集』(三橋四郎、高橋仁太郎刊、1900年)、『通俗家屋改良建築法』(井上繁次郎、博文館、1902年)が列挙されている(内田青蔵「総論」、『近代日本生活文化基本文献集——ひと・もの・住まい』別冊 解題、p.12、日本図書センター、2012年)。

ついて、その全容と意匠・技術の参照過程が池上重康によって解明されている⁶⁸。

そして、わが国の近代建築書研究における近年の際だった傾向としては、復刻版の活甞な刊行であり、そこに建築史家ら研究者による解題が付されていることにある。1991年から1996年にかけて日本建築協会の会誌『建築と社会』が山形政昭の解題とともに不二出版から復刻刊行⁶⁹されたのを皮切りに、2000年代に入って複数の出版社による重要文献の復刻刊行が展開されていった。おもな建築誌について復刻刊行年の順に記すと、2001年から住宅改良会の『住宅』⁷⁰、2006年に建築工芸協会の『建築工芸叢誌』『建築工芸画鑑』⁷¹、2006年から新建築社の『新建築』⁷²、2008年にインターナショナル建築会の『インターナショナル建築』⁷³、2009年から国際建築協会の『国際建築時論』および『国際建築』⁷⁴、2011年に日本工作文化連盟の『現代建築』⁷⁵、2015年から洪洋社の『建築工芸アイシーオール』⁷⁶といった各誌の復刻刊行がつづいている。

一方で、建築図書の復刻刊行については、たとえば1938年初版刊行の『ANTONIN RAYMOND: ARCHITECTURAL DETAILS』（国際建築協会）が2014年に鹿島出版会から復刻刊行⁷⁷されるなど、単行本形式によるものも認められるが、叢書形式による重要文献の所収が近年の主流をなしているといえる。その代表的な叢書としては、つぎの3シリーズが挙げられる。

⁶⁸ 池上重康『明治初期日本政府蒐集舶載建築書の研究』（北海道大学出版会、2011年）。同書のベースは『明治初期日本政府蒐集建築関連洋書からみた洋風建築の導入過程に関する研究』（北海道大学博士論文、2007年）とされる。

⁶⁹ 『建築と社会〔復刻版〕』、日本建築協会刊行1917～1955年分を全87巻・別冊1で復刻刊行、別冊（解説・総目次・索引、解説：山形政昭）、不二出版、1991～1996年

⁷⁰ 『雑誌「住宅」復刻版』、住宅改良会刊行の1916～1943年分を全12巻で復刻刊行、監修・内田青蔵、柏書房、2001～2003年

⁷¹ 『建築工芸叢誌・建築工芸画鑑 復刻版』、建築工芸協会刊行の1912～1916年分を全8巻で復刻刊行、監修・内田青蔵、柏書房、2006年

⁷² 『新建築〔復刻版 1925～1944〕』、新建築社刊行の1925～1944年分を全46巻・補巻1・別冊1で復刻刊行、別冊『新建築』解題・総目次・索引、解題・石田潤一郎、不二出版、2006～2010年

⁷³ 『復刻版 インターナショナル建築』、インターナショナル建築会刊行の1929～1933年の全29号に別巻1を付して復刻刊行、監修・京都国立近代美術館、解説・岩城見一、笠原一人、川島智生、山野英嗣、国書刊行会、2008年

⁷⁴ 『国際建築時論』『国際建築』復刻版、国際建築協会刊行の1925～1940年分を全31巻で復刻刊行、監修・内田青蔵、柏書房、2009～2010年

⁷⁵ 『復刻版 現代建築』、日本工作文化連盟刊行の1939～1940年の全15号に後継誌『工作文化』を付して復刻刊行、監修・笠原一人、国書刊行会、2011年

⁷⁶ 『復刻版 建築工芸アイシーオール』（監修・梅宮弘光、国書刊行会）は、洪洋社刊行の1931～1936年の全58号のうち、1933年以前の号が2015年に復刻刊行され、1934年以降の号は2017年以降の復刻刊行予定とされる。

⁷⁷ 『アントニン・レーモンド建築詳細図譜〔復刻版〕』、鹿島出版会、2014年

第一の叢書となる『コレクション・モダン都市文化』（和田博文監修、全5期100巻、ゆまに書房、2004～2014年）は、「文学・美術・映画・演劇・経済・商業・建築・交通・スポーツ・ファッションなど」の「モダン都市文化」をめぐる重要文献が広く所収された⁷⁸。同叢書におけるおもな建築書としては、山田守『ジードルンク』（建築学会、1933年）や石原憲治編『建築の東京』（都市美協会、1935年）などの単行本のほか、洪洋社の『建築写真類聚』から6巻分や常盤書房の『高等建築学』から3巻分と、叢書の一部も抜粋されている⁷⁹。

第二の叢書となる『叢書・近代日本のデザイン』（森仁史監修、全3篇68巻、ゆまに書房、2007～2015年）は、「近代日本の造形文化」⁸⁰が軸とされながら、明治期から昭和戦前期にかけての美術、工芸、デザイン、建築などの重要文献が復刻・所収されている。同叢書におけるおもな建築書としては、杉本文太郎『日本住宅 室内装飾法』（建築書院、1910

⁷⁸ 『コレクション・モダン都市文化』第1期カタログ、頁数記載なし、ゆまに書房、2004年

⁷⁹ 『コレクション・モダン都市文化』（和田博文監修、全5期各20巻・総計100巻、ゆまに書房、2004～2014年）に所収された文献のうち、建築書としては以下の27点が認められる（表記は原文ママ）。石原憲治編『建築の東京』（都市美協会、1935年、復刻刊行・第5巻「モダン都市景観」、西村将洋編、2004年）、牧野正己『競技場建築』（丸善、1934年、復刻刊行・第9巻「競技場」、中村三春編、2005年）、『最新建築設計叢書第1期第10輯 渋谷アパートメントハウス』（建築資料研究会、1927年、復刻刊行・第18巻「アパート」、紅野謙介編、2006年）、清水一「アパートメントハウス」（『高等建築学 第14巻』所収、常盤書房、1933年、復刻刊行・同前）、『新興アパートメント』（洪洋社、1934年、復刻刊行・同前）、エム・ヤ・ギンズブルグ『様式と時代 構成主義建築論』（叢文閣、1930年、復刻刊行・第29巻「構成主義とマヴォ」、滝沢恭司編、2007年）、森口多里編『表現主義建築図集』（洪洋社、1923年、復刻刊行・第30巻「表現主義」、鈴木貴字編、2007年）、意匠美術写真類聚刊行会『表現主義の工芸美術集』（洪洋社、1923年、復刻刊行・同前）、森口多里・林いと子『文化的住宅の研究』（アルス、1922年、復刻刊行・第36巻「郊外住宅と鉄道」、庄司達也編、2008年）、大内秀一郎『建築と社会』（吉田工務所出版部、1929年、復刻刊行・第42巻「建築」、梅宮弘光編、2009年）、吉村辰夫・與石武『新建築起原』（建築工業社、1930年、復刻刊行・同前）、山田守『ジードルンク』（建築学会、1933年、復刻刊行・同前）、ル・コルビュジエ『建築芸術へ』（構成社書房、1929年、復刻刊行・第43巻「ル・コルビュジエ」、林美佐編、2009年）、『ル・コルビュジエ』（国際建築協会、1929年、復刻刊行・同前）、蔵田周忠『近代的角度』（信友堂書店、1933年、復刻刊行・第44巻「デザインとバウハウス」、山野英嗣編、2009年）、『建築紀元』（秋季特集号「ばうはうす」1929年、復刻刊行・同前）、『建築新潮』（バウハウス号、1929年、復刻刊行・同前）、高梨由太郎編『帝国ホテル』（洪洋社、1923年、復刻刊行・第61巻「旅行・鉄道・ホテル」、山本亮介編、2010年）、高橋豊太郎ほか『高等建築学第15巻 ホテル・病院・サナトリウム』（抄録、常盤書房、1933年、復刻刊行・同前）、建築写真類聚刊行会編『建築写真類聚 室内装飾』1～3巻（洪洋社、1918～1920年、復刻刊行・第78巻「生活空間」、千葉真智子編、2012年）、建築写真類聚刊行会編『建築写真類聚 新時代の家具』（洪洋社、1925年、復刻刊行・同前）、主婦之友社編輯局編『中流和洋住宅集』（主婦之友社、1929年、復刻刊行・同前）、伊藤義次『室内装置』（金星堂、1932年、復刻刊行・同前）、岸田日出刀『第十一回オリンピック大会と競技場』（丸善、1937年、復刻刊行・第79巻「丸善と洋書」、和田桂子編、2012年）、建築写真類聚刊行会編『建築写真類聚 百貨店・白木屋』（洪洋社、1929年、復刻刊行・第80巻「出版メディア」、疋田雅昭編、2012年）、建築写真類聚刊行会編『建築写真類聚 講堂と図書館』（洪洋社、1928年、復刻刊行・第87巻「図書館と読書」、大澤聡編、2013年）、古茂田甲太郎ほか『高等建築学 第20巻 学校・図書館』（抄録、常盤書房、1937年、復刻刊行・同前）

⁸⁰ 『叢書・近代日本のデザイン』、明治篇カタログ、頁数記載なし、ゆまに書房、2007年

年) や中村鎮編『後藤慶二氏遺稿』(後藤芳香刊 [私家版]、1925 年)、あるいは分離派建築会『分離派建築会 宣言と作品』(岩波書店、1920 年) や小池新二『汎美計画』(アトリエ社、1943 年) などの幅広いテーマの図書だけでなく、建築各誌に掲載された重要論文も抜粋され、「我国将来の建築様式を如何にすべきや」(『建築雑誌』、1910 年)、伊藤清造「建築のプロレタリアズム」(『建築新潮』第 7 年第 7 号) などのほかに、「日本工作文化連盟 趣意書・綱領・規約」(『現代建築』1 号) といった建築運動関連の資料も収録されている⁸¹。

⁸¹ 『叢書・近代日本のデザイン』(森仁史監修、明治篇 9 巻、大正篇 19 巻、昭和篇 40 巻、ゆまに書房、2007~2015 年) には所収された文献のうち、建築関係の書物や記事としては以下の 66 点が認められる(表記は原文ママ)。杉本文太郎『日本住宅 室内装飾法』(建築書院、1910 年、復刻刊行・第 8 巻、森仁史解説、2007 年)、「我国将来の建築様式を如何にすべきや」(『建築雑誌』、1910 年、復刻刊行・第 9 巻「論文選 明治篇」、森仁史解説、2007 年)、木樽一『家具の設計及製作』(博文館、1922 年、復刻刊行・第 18 巻、森仁史解説、2009 年)、生活改善同盟会編・刊『住宅家具の改善』1924 年、復刻刊行・第 20 巻、内田青蔵解説、2009 年)、平井八重編『生活改善の策 (改訂版)』『新しい台所と台所道具』(生活改善同盟会、1928 年、復刻刊行・同前)、高梨由太郎『文化村の簡易住宅』(三版、洪洋社、1922 年、復刻刊行・第 20 巻、藤谷陽悦解説、2009 年)、高橋仁編『文化村住宅設計図説』(五版、鈴木書店、1922 年、復刻刊行・同前)、時事新報社編『新しい東京と建築の話』(再版、時事新報社、1924 年、復刻刊行・第 22 巻、藤谷陽悦解説、2009 年)、中村鎮編『後藤慶二氏遺稿』(非売品、後藤芳香刊、1925 年、復刻刊行・第 23 巻、梅宮弘光解説、2009 年)、森谷延雄『小さき室内美術』(洪洋社、1926 年、復刻刊行・第 24 巻、本橋浩介解説、2009 年)、『木のめ舎家具作品集 森谷延雄氏遺作』(装飾研究会、1927 年、復刻刊行・同前)、分離派建築会『分離派建築会 宣言と作品』『分離派建築会の作品 第二刊』(岩波書店、1920 年、1921 年、復刻刊行・第 25 巻、菊地潤解説、2009 年)、分離派建築会・関西分離派建築会『分離派建築会の作品 第三』(岩波書店、1924 年、復刻刊行・同前)、今和次郎『民俗と建築』(磯部甲陽堂、1927 年、復刻刊行・第 26 巻、森仁史解説、2009 年)、木樽一『私の工芸生活抄誌』(非売品、木樽先生還暦祝賀実行会、1942 年、復刻刊行・第 27 巻、森仁史解説、2009 年)、第 28 巻「論文選 大正篇」(2009 年) 所収に、黒田鵬心「建築批評の標準」(『建築雑誌』第 293 号)、佐野利器「建築家の覚悟」(『建築雑誌』第 295 号ほか)、伊東忠太「建設と国民」(『建築雑誌』第 323 号)、岡田信一郎「新日本の建築」(『建築雑誌』第 337 号)、野田俊彦「建築非芸術論」(『建築雑誌』第 346 号ほか)、山崎静太郎「虚偽建築に就いて中村先生へ」(『建築雑誌』第 347 号)、中村達太郎「再び虚偽建築に就いて」(『建築雑誌』第 349 号)、中村達太郎「虚偽建築なりや否」(『建築雑誌』第 345 号ほか)、石本喜久治「帝大建築科の現制を論じてそれが根本に及ぶ」(『建築世界』第 14 巻第 1 号)、中村鎮「建築界革新の気運 (其一)」(『建築世界』第 14 巻第 8 号)、岡村蚊象「創宇社とその第一回展」(『建築新潮』第 5 年第 2 号)、仲田定之助「ワルター・グロピウス推讃」(『建築新潮』第 6 年第 10 号)、伊藤清造「建築のプロレタリアズム」(『建築新潮』第 7 年第 7 号) ほか、川喜田煉七郎『家具と室内構成』(建築資料叢書、1931 年、復刻刊行・第 37 巻、梅宮弘光解説、2012 年)、桑沢洋子編『生活の新様式 住宅・家具』1937 年、復刻刊行・同前、沢良子解説、「YSY METAL TUBE FURNITURE」(日本金属加工)、「YSY METAL TUBE FURNITURE」(『国際建築』第 8 巻第 3 号抜刷)、「SSS CATALOGE」(東京建材工業所)、「METAL TUBE FURNITURE 鋼管製家具」(横浜船渠)、西川友武『軽金属家具』(工業図書、1935 年、以上復刻刊行・第 38 巻、梅宮弘光解説、2012 年)、手塚敬三・松本政雄『型而工房ラポルト 1 パイプ家具』(型而工房・国際建築協会)、小林登・豊口克平・齊藤四郎「型而工房ラポルト 2 椅子」(型而工房・国際建築協会)、豊口克平『型而工房ラポルト 3 アパートメントの室内図解と数字』(型而工房、1934 年)、豊口克平『型而工房ラポルト 4 型而工房第二回標準家具』(1936 年、未刊、『国際建築』第 13 巻第 4 号 昭和十二年四月)、型而工房編『生産工業的家具』(洪洋社)、豊口克平『標準家具』(東学社、1935 年、以上復刻刊行・第 43 巻、森仁史・敷田弘子解説、2012 年)、山脇巖『櫛』(アトリエ社、1942 年、復刻刊行・第 48 巻、梅宮弘光解説、2012 年)、山脇巖『櫛 続』(井上書院、1973 年、復刻刊行・第 49 巻、梅宮弘光解説、2012 年)、川喜田煉七郎・武井勝雄『構成教育大系』(学校美術協

第三の叢書となる『近代日本生活文化基本文献集——ひと・もの・住まい』（内田青蔵監修、全3期21巻・別冊1、日本図書センター、2010～2012年）は、「住まい」をキーワードに明治期から昭和戦前期にかけての「基本文献」が復刻・所収された。たとえば橋口信助編『新しき住家 中流住宅叢書第1編』（住宅改良会、1921年）、大野三行『バンガロー式明快な中流住宅』（洪洋社、1922年）、山田醇『家を建てる人の為に——附・和洋住宅の実例』（資文堂、1928年）など、住宅の設計者のみならず施主層にむけた文献が多く含まれている⁸²。

会、1934年、復刻刊行・第50巻、金子一夫解説、2013年）、高梨由太郎『多摩川原遊園京王閣図集』（洪洋社、1927年）、『北九州の一住宅 安川第五郎氏邸』（非売品、国際建築協会、1937年）、『等々力住宅区の一部』（国際建築協会、1936年）、『白柱居 箱根仙石原山荘』（非売品、国際建築協会、1937年、以上復刻刊行・第54巻、森仁史解説、2013年）、『朝日住宅写真集』（朝日新聞社、1927年、復刻刊行・第55巻、内田青蔵解説、2013年）、佐野利器『住宅論』（文化生活研究会、1925年）、分離派建築会編『紫烟荘図集』（洪洋社、1927年）、堀口捨己編『住宅双鐘居』（洪洋社、1928年、以上復刻刊行・第54巻、内田青蔵・林美佐解説、2013年）、木檜一著『我が家を改良して』（博文館、1930年、復刻刊行・第57巻、森仁史解説、2014年）、『今日の住宅』（朝日新聞社、1935年、復刻刊行・第58巻、梅宮弘光解説、2014年）、川喜田煉七郎『構作技術大系（付・再版抄録）』（図画工作社、1942年、復刻刊行・第65巻、梅宮弘光解説、2015年）、小池新二『汎美計画』（アトリエ社、1943年、復刻刊行・第67巻、藤原恵洋解説、2015年）、水谷武彦「構成基礎教育」（『建築画報』22巻10号）、剣持勇「戦時住ひ方後記」（『生活美術』3巻5号）、佐藤功一「合理主義の建築」（『建築新潮』11年1号）、「日本工作文化聯盟 趣意書・綱領・規約」（『現代建築』1号）、「建築と壁画 建築家と画家の座談会」（『新建築』18巻4号）、西山卯三「大東聖地祝祭都市計画案覚書」（『新建築』19巻1号）、仲田定之助「パウハウス」（『アトリエ』5巻9号）、牧野正己「ル・コルビジエを語り日本に及ぶ」（『国際建築』5巻5号）、吉田薫「ゲッサウ訪問記」（『建築新潮』10年11号、以上復刻刊行・第68巻「昭和篇 論文選」、森仁史解説、2015年）

⁸² 『近代日本生活文化基本文献集——ひと・もの・住まい』（内田青蔵監修、第I期明治・大正編7巻、第II期大正・昭和期編7巻、第III期昭和戦前期編7巻・別冊1、日本図書センター、2010～2012年）には、以下の40点の文献が所収された。土屋元作『家屋改良談』（時事新報社、1899年）、樗溪道人編著『家庭の快樂 家庭全書第11編』（再版、尚文堂・吉岡書店、1902年、以上復刻刊行・第1巻、安野彰解題、2010年）、金子清吉『日本住宅建築図案百種 全』（建築書院、1913年）、近間佐吉『最新図説模範日本住宅』（再版、鈴木書店、1919年、以上復刻刊行・第2巻、内田青蔵解題、2010年）、駒杵勤治・越本長三郎編『和洋住宅建築学 上巻・下巻』（三版、須原屋書店、上巻1906年・下巻1907年、復刻刊行・第3巻、安野彰解題、2010年）、杉本文太郎『日本住宅室内装飾法 全』（図解日本座敷の飾り方 全）（建築書院、1911年、1912年、復刻刊行・第4巻、川上悠介解題、2010年）、ワグネル『単純生活』（三版、文部省訳・刊、1903年、復刻刊行・第5巻、安野彰解題、2010年）、西村文則『簡易生活法』（三版、大日本図書、1906年、復刻刊行・第6巻、安野彰解題、2010年）、国民新聞社編『理想の家庭』（家庭博覧会、1905年、復刻刊行・第7巻、内田青蔵解題、2010年）、三角錫子『婦人生活の創造』（実業之日本社、1921年）、橋口信助編『新しき住家 中流住宅叢書第1編』（住宅改良会、1921年）、住宅改良会編『中流住宅設計図集』（住宅改良会、1921年、以上復刻刊行・第8巻、内田青蔵解題、2011年）、『家事科学展覧会』（『新家庭』臨時増刊、玄文社、1918年）、橋詰せみ郎編『生活改造資料』（再版、婦女世界社、1920年、以上復刻刊行・第15巻、須崎文代解題、2011年）、生活改善同盟会編『住宅家具の改善』（生活改善同盟会、1924年）、生活改善同盟会編『実生活の建直し』（寶文館、1929年、以上復刻刊行・第10巻、川上悠介解題、2011年）、高梨由太郎『文化村の簡易住宅』（再版、洪洋社、1922年）、高橋仁編『文化村住宅設計図説——平和記念東京博覧会出品』（鈴木書店、1922年）、『文化住宅』（『住宅』号外、1922年5月）、市川喜作

こうした叢書形式以外による建築図書の復刻刊行としては、文献を再編集する形式も認められる。そこに文献解題が付された事例として、たとえば昭和戦前期までの建築関連の叢書で最大の巻数とみられる洪洋社の『建築写真類聚』（266巻、1915～1943年ごろ）は、その約13,000点の図版から約800点が再構成されて1990年に『写真集 失われた帝都 東京——大正・昭和の街と住い』（藤森照信、藤岡洋保、初田亨編著、柏書房）として刊行された⁸³。同じく洪洋社の叢書『近代家具装飾資料』（47集、1936～1944年）は、全巻が再構成されて2017年に『戦前日本の家具・インテリア——『近代家具装飾資料』でよみがえる帝都の生活』（上下巻、新井竜治編著、柏書房）として刊行された。

以上のような近代建築書の復刻刊行において、雑誌から図書へと展開されていく全体的な傾向を指摘でき、主要な文献の大半が復刊・所収されていることが認められる。その復刻刊行の版元としては、建築にかぎらない学術史料の復刊シリーズを手がける出版社であることに共通点が見いだされ、おもに図書館や研究機関向けへの販売が主対象と考えられる。とくに図書については、「モダン都市」や住まい、デザインといった広範なテーマを包含する用語によって叢書が銘うたれ、そこに建築図書が所収されるかたちとなっている。それは、より広い図書館や研究機関で購入対象となることが企図されているといえようが、たとえば洪洋社の叢書『建築写真類聚』が異なる復刊シリーズに分かれて所収されるなど、近代建築書として系統だてられた復刊趣旨を見いだすことができないといえる。一方で、それらの復刊対象は、モダニズム建築を推進した前衛的な書物のみならず、日本家屋の座

編『住宅改造博覧会出品住宅図集』（日本建築協会、1922年、以上復刻刊行・第11巻、金容範解題、2011年）、大野三行『バンガロー式明快な中流住宅』『住み心地よき和洋折衷』（洪洋社、1922年、1924年、復刻刊行・第12巻、内田青蔵解題、2011年）、藤根大庭『理想の文化住宅』（アルス、1923年）、菅野弓一『三百円の家』（改10版、森本書院／大正13年）、登尾源一『文化小住家（再版、文化建築社、1924年、以上復刻刊行・第13巻、金容範解題、2011年）、森本厚吉『滅びゆく階級』（三版、同文館、1924年）、森本厚吉著『アパートメントハウス——新しい住宅の研究』（文化普及会出版部、1926年、以上復刻刊行・第14巻、内田青蔵解題、2011年）、建築写真類聚刊行会『理想の台所建築写真類聚第3期第18回』（洪洋社、1922年）、豊泉益三編『懸賞募集台所設計図案集』（三越呉服店、1925年）、蓮田聖三郎『実用台所設計図案：全』（再版、鈴木書店、1929年、以上復刻刊行・第15巻、須崎文代解題、2012年）、木檜怨一『新しい家と家具装飾』（四版、博文館、1929年、復刻刊行・第16巻、川上悠介解題、2012年）、内務省社会局社会部編『家庭実務指導者講習会講演集』（内務省社会局社会部、1927年、復刻刊行・第17巻、須崎文代解題、2012年）、有川ヒサエ『家庭園芸実習書』（養賢堂、1930年）、有川ヒサエ『婦人と園芸 婦人講座第15篇』（社会教育協会、1931年、以上復刻刊行・第18巻、西村公宏解題、2012年）、時事新報家庭部編『実際に役立つ和洋住宅とその設備』（三版、荻原星文館、1934年、復刻刊行・第19巻、須崎文代解題、2012年）、山田醇『家を建てる人の為に——附・和洋住宅の実例』（資文堂、1928年、復刻刊行・第20巻、内田青蔵解題、2012年）、下郷市造『来るべきアパートと其経営』（斗南書院、1937年、復刻刊行・第21巻、内田青蔵解題、2012年）

⁸³ 1998年には『写真集 幻景の東京——大正・昭和の街と住い』と改題されて同じく柏書房より再刊された。

敷飾りに関する図解書が取り上げられるなど、わが国の建築の近代化過程における伝統的な意匠や装飾にも注意が払われていることも認められる。

復刻刊行にみられる近代建築書の史的研究は、雑誌から図書へ、モダニズムから伝統や装飾、工芸へと、その対象が広げられ、近年も精力的に復刻刊行が展開されている。しかし、わが国における近代建築書の総体を概括しうる視座は見いだされていないともいえる。

4) 近代日本の建築出版活動に関する研究

前目 3) の日本の近代建築書に関する既往研究においては、著者や編集者・出版人の役割や刊行物相互の関係性への言及は、その嚆矢である 1930 年代から確認でき、近年の復刻刊行の解題においても同様の傾向が認められた。本目では、本論文の主題をなす建築出版活動に関する先行研究として、著者や編集者・出版人による近代建築書の刊行行為、そして刊行物相互の関係性についての検証が主眼とされた論考をおもに時系列でたどっていく。

1949 年の宮内嘉久による東京大学卒業論文「近代日本の建築イデオロギー ——ジャーナリズムを通して」は、造家学会誌『建築雑誌』の創刊から昭和戦前期までの建築誌が、建築思潮の形成と建築運動の動向に果たした役割との関係性を軸として叙述された。当初は卒論という私家版であったが、1974 年に宮内の建築評論集に所収されて公刊され、宮内が生涯にわたって叙述を試みた「建築ジャーナリズム史」の骨格が同論に認められる⁸⁴。ここでは、プロレタリアートのための建築理論の獲得と建築批評の確立に関する叙述が主眼とされており、その史料として建築各誌に掲載された論文が抽出されている。特定のイデオロギー色の強い建築運動と建築誌の関係性に焦点が当てられているものの、明治期から昭和戦前期までの建築誌の系譜を描いた嚆矢的な論考とみなされるだけでなく、わが国の近代建築書に関する一定の系譜が通史的に叙述された唯一の存在と考えられる⁸⁵。

以降の建築誌に関する検証作業は、前目でみたように、個々の建築誌に関する論考や建築誌全体のドキュメンテーションの整備が 1970 年代から 1990 年代にかけて進められていった。そうしたなかで 1990 年、大川三雄の論考「建築ジャーナリズムの『昭和』」⁸⁶によっ

⁸⁴ 宮内嘉久『少数派建築論』(pp.252-305、井上書院、1974 年)。その後の同様の骨格による宮内嘉久の論考として、たとえば「日本の建築運動 1920-60——組織・創造・イデオロギー」(『世界建築全集 9 近代』、pp.99-104、平凡社、1961 年)、「20 世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」(『建築雑誌』、1999 年 9 月号、pp.20-25) が挙げられる。

⁸⁵ 日本の近代建築書の系譜を年表形式で描き出した好例としては、たとえば「明治建築界年表」(山崎幹泰、内矢雅清、藤尾直史作成、「特集：建築改名 100 年」、『建築雑誌』1997 年 8 月号、p.8) では「出版」の項目が設けられている。

⁸⁶ 大川三雄「建築ジャーナリズムの『昭和』」(平林左伎司・宮本和義監修『昭和彩譜』、pp.139-144、シーアイ化成、1990 年/再刊、宮本和義監修『昭和彩譜——写真が語る昭和の建築と世相 建築で綴る昭和史』日経 BP 社、1991 年/復

て、昭和期の建築各誌をめぐる見取り図が著された。戦前期は『国際建築』誌を軸に叙述され、同誌の執筆者や編集者の人物像、主要な特集記事や論文の特徴などを検証し、『建築紀元』や『現代建築』といった各誌の関係者や編集方針が比較されている。それらの版元となった出版社の存在や建築運動の盛衰との関係についても考察された。また、戦後期には『新建築』誌の発展が軸とされながら、『建築文化』から『日経アーキテクチュア』にいたる戦後創刊の各誌の特徴とその影響が幅広く論じられた。宮内による「建築ジャーナリズム史」が特定の建築思潮、あるいは建築批評活動の形成過程に焦点が当てられていたのに対し、大川の論考は近代建築史研究の観点にもとづきながら、建築家たちによる出版活動として建築の批評活動をより広くとらえなおしながら描き出されたものといえる。

こうした大川による近代建築史研究に立脚した観点は、2000年代における建築誌の個別研究においても顕著となっている。青井哲人による連載『『建築雑誌』アーカイブス』⁸⁷は、その創刊時のけん引役となった中村達太郎の編集員としての執筆・啓蒙活動などにも焦点が当てられており⁸⁸、前目で述べた高杉造酒太郎と山口廣による『建築雑誌』の史的研究⁸⁹が継承されている。また、花田佳明と石坂美樹による「建築雑誌『国際建築』研究」⁹⁰においても同誌編集長・小山正和の人物像とその編集方針が検証された。のちに花田は、小山が育てた建築誌の編集者についても着目し、戦後の建築誌についても論考を展開している⁹¹。そして、宮脇哲司による雑誌『建築ト装飾』の研究⁹²では、同誌の編集人・塚本重五郎に脚光が当てられた。その経歴や建築思想などの人物像が検証され、「高等工業附属職工徒弟学校木工科」⁹³を1898年に卒業した経歴が指摘されている。

一方で、建築図書の編集者・出版人について着目した既往研究としては、管見によれば、洪洋社の社主・高梨由太郎に関する論考のみ認められる。前目でもふれたように、菊池重

刊、宮本和義監修『昭和建築世相史』日本図書センター、2012年)

⁸⁷ 青井哲人『『建築雑誌』アーカイブス』（『建築雑誌』2002年1月号～2003年12月号）

⁸⁸ 青井哲人「中村達太郎と初期の会誌編集」（『建築雑誌』アーカイブス、第17回、『建築雑誌』2003年5月号、pp.154-155）

⁸⁹ 高杉、前掲57、および山口、前掲58

⁹⁰ 花田佳明、石坂美樹「建築雑誌『国際建築』研究1・2」（2001年日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2、pp.653-656）

⁹¹ 花田佳明『植田実の編集現場』（113-115頁、ラトルズ、2010年）。同書では、小山とともに戦後建築誌の編集者5名が紹介され、「日本の建築ジャーナリズム史の中で」とする章立てにおいて植田実が位置づけられている。

⁹² 宮脇哲司「建築誌『建築ト装飾』、編集人・塚本重五郎に関する研究」（2012年日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠、pp.149-150）

⁹³ 「故正員塚本重五郎君」（建築雑誌、第35巻、p.459、1921年8月号）の記述による。校名は「東京高等工業学校附属職工徒弟学校」を指すと考えられる。実際に、『東京高等工業学校附属職工徒弟学校一覧』大正2年～大正3年には、明治31年3月木工科卒に塚本の名が列挙され、当時は「藤田家建築事務所（麻布広尾町）」と記されている。

郎が同社の建築図集に関する論考を 1980 年代に発表するなかで、洪洋社の存在にも焦点をあててその創業期の出版活動について検証し、その前後の高梨由太郎の経歴が追跡された⁹⁴。藤岡洋保は、菊池の論考をうけるかたちで、高梨の遺族から聞き取りを行ってその出自や生没年を明らかし、『建築写真類聚』を中心に高梨の出版活動の特徴が考察された⁹⁵。

そして近年、建築図書に関する日本近代建築史研究の視座として、堀口捨己による作品集の刊行行為に着目した論考が、2009 年に藤岡洋保、2012 年に井上章一によって発表された⁹⁶。そこでは、建築家によって執筆され、編まれた建築書が、建築の設計行為と同様の創造行為とみなされ、建築書が建築家の建築作品のひとつとしてとらえられている。近代建築書の編集・刊行行為に対し、より積極的な意味が見いだされ、あるいは再評価されていることを示すものと考えられる。

以上、本項でみてきたように、わが国の近代建築書に関する既往研究を概観すると、日本近代建築史研究においてはその創成期から建築書の役割が重視されており、多くの建築書に関する史料研究が積み重ねられてきたことが認められる。建築書を執筆した建築家たち著者の業績にも着目され、ときに編集者・出版人の存在にも言及されていた。こうした日本の近代建築書研究において、当初から対象とされていたのが建築技術書と建築誌であった。とくに建築誌に関しては、「建築ジャーナリズム史」ともよばれる通史の描出が追求されるなかで、建築運動とモダニズム導入との関係性が強調されていたが、1990 年代ごろから 2000 年代にかけて建築家や編集者たちによる出版活動としての視座にもとづく考証へと移行されていった。

これらの論考の展開と並行して、近代建築書に関するドキュメンテーションの整備が進められていき、2000 年前後からは昭和戦前期を主体とした建築書の復刻刊行が活発化されてきた。復刻の対象は雑誌から図書へ、とくに建築図書については建築意匠関連が主体とされていくなかで、建築各分野の研究者たちによる解題が復刻版に付されることによってわが国の近代建築書研究はいっそうに拡充されてきた。さらに、建築家による作品集の編集・出版行為について、建築設計と同様の表現行為とみなす積極的な視座による論考も現

⁹⁴ 菊池重郎が『明治村通信』誌に寄せた洪洋社の建築図集に関する論考としては、「欧米新建築のプレート図集「モダン・アーキテクチャ」について」1981 年 2 月号、「月刊図集「近世建築」(1・2)」1981 年 4、5 月号、『セセッション図案集』特に「外観之部」の初刊年代について(上・下)」1981 年 9、10 月号、「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動(上・下)」1982 年 1、2 月号、「洪洋社の「建築写真類聚」の創刊(1)～(5)」1983 年 7、10、11 月号、1984 年 2、5 月号、

⁹⁵ 藤岡洋保「はしがき」(『写真集 失われた帝都 東京』、pp.3-5、藤森照信、初田亨と共編著、柏書房、1990 年)

⁹⁶ 藤岡および井上ともに、前掲 10

れている。

つまり、日本の近代建築書研究は、建築誌の系譜にもとづく通史の描出が追求されてきたが、定説とよべる論考は確認できず、一方の建築図書については個別研究が拡充されているものの、それらを系統立てるような包括的な視座はこれまでに見いだされていないといえる。また、建築書の編集者・出版人の事績については、ほとんどが雑誌に限られてきた。そして、近代の建築は、写真による伝播がその特質のひとつとされるとともに、日本近代建築史研究において建築図集の利用頻度が高いとされるなかで、建築史的な観点による建築図集の検討はほとんど進められていない。雑誌と図書、あるいは図集といった建築書の刊行形式を統合し、編集者・出版人の活動を概観するような、日本の「近代建築書史」は描く試みは、未着手の状況にあるといえる。

3 研究方法とその企図

本項では、本論文における研究対象と対象期間について述べたうえで、研究方法とその企図について、とくに建築図書に着目した経緯とともに記していく。

1) 研究対象と対象期間

本章第 1 項で述べたように、本論文の研究対象は、幕末の開国から昭和戦前期までに刊行された日本の近代建築書である。近代建築書とは、近代西洋文明と接して建設されるようになった近代建築を主題として扱う雑誌および図書とし、日本の伝統的建築を扱う書物については写真印刷などの近代的な刊行手法や解釈が認められるものを含めている。

こうした近代建築書を主体的かつ継続的に刊行した建築出版組織の活動を、直接の分析対象として定めた。その典型が、いわゆる建築専門出版社である。また、雑誌『建築雑誌』を刊行する現・日本建築学会に代表される建築系の学会や協会、あるいは自らの機関誌を刊行した建築運動体も分析対象となる。いずれも建築に関する活動を専門あるいは中心にすえた組織となる。

一方で、建築書を主体としない出版組織として、たとえば建築とその周辺分野にかぎらない多分野の書物を刊行する丸善などの総合出版社については、そこで刊行された建築の重要文献を中心に引き上げながら、その刊行の経緯と意義を軸に検討をくわえるものとする。同様に、幕末・明治維新时期においてオランダの軍事技術書などを翻訳した江戸幕府や明治政府の関連機関についても、日本の近代建築書の出版活動として検討の対象とした。

ゆえに、本論文の研究対象期間の始点は、江戸幕府による洋学の研究機関として洋書の邦訳などを手がけた蕃書調所が開所された 1856 年としている。

逆に、研究対象期間の終点については、1945 年の第二次世界大戦の終戦前後における建築書刊行の中断期とした。それは、戦前期最大手の市販の建築誌とされた『建築世界』を刊行していた建築世界社と、建築図書の刊行では戦前期の最多点数とみられる洪洋社が、いずれも 1944 年ごろに建築出版活動の実質的な終焉を迎えており⁹⁷、わが国における建築書の刊行においては今日に至るまでの唯一の空白期が第二次世界大戦の終戦前後といえるためである。しかし、戦前戦後にわたって近代建築書を刊行した建築出版組織については、日本建築学会や日本建築協会、あるいは国際建築協会や新建築社、彰国社、相模書房などの事例が少なからず認められるため、建築書の出版活動における戦前と戦後の関係性についても検討をくわえている。

2) 研究方法と本論文の意義

近代建築書を主体的かつ継続的に刊行した建築出版組織を直接の研究対象とすることによって、著者や編集者・出版人による建築書の刊行行為を建築出版組織の枠組みでとらえる、建築出版活動という考察軸を本論文では設定した。この研究方法は、つぎの 2 点の有効性を備えていることは、本章第 1 項で述べたとおりである。

- ① 建築誌のような継続性と一貫性が見いだされにくかった建築図書に対し、建築出版組織の枠組みにおける建築図書相互の関係性および編集者・出版人の刊行趣旨と刊行手法を分析することで、建築図書の史的展開を検証しうること。
- ② 建築誌および建築図書を一定期間刊行した建築出版組織の諸活動を編年的に捉えることで、建築誌および建築図書をあわせた近代建築書の全体像を検証しうること。

建築出版組織の枠組みでとらえることは、定期刊行の雑誌のような継続性と一貫性が見いだしにくかった単行本や叢書による建築図書について、個々の刊行物の関係性をふくめた経年的な変遷を具体的に分析しうるものと考えられる。さらには、これらの建築図書の変遷を先行研究による建築誌の史的展開とあわせて検討することによって、建築書全体の史的展開とその系譜を統合的に概括していくことを目的としうる。そして、雑誌や単行本、

⁹⁷ 洪洋社は戦後も数点の新刊や再刊が認められるが、実質的には戦前期にその建築出版活動を終えた（第 3 章参照）。

叢書、あるいは講義録や図集といった建築書における多様な刊行形式や刊行手法の展開を分析することによって、建築書というメディアの性質に関する変容についても、その一側面を検証しうるものと考えられる。一般的な傾向としては、即時的な情報による複数の記事で構成された雑誌よりも、単行本や叢書による図書は一冊ずつのテーマが独立して明快に示され、その情報はより体系的に蓄積されていく性質がみられる。ゆえに、各書に込められたテーマの変遷における潮目が明確に確認しうるため、近代建築書の変遷を俯瞰的に考察することも期待できる。

そして、建築出版組織における編集者・出版人の存在とその活動に着目することは、建築情報の供給側における刊行趣旨や刊行手法を抽出することとなり、それらの合わせ鏡として読者の需要、つまり建築情報の受容側の意識を検証することとなる。それは、建築をめぐる社会的な嗜好や共通意識という一般的には抽出が困難な観点について、具体的に抽出することを企図している。また、建築情報の供給側における当事者の人物像や具体的か活動に焦点をあてることになり、藤岡洋保らの指摘した建築家たちの表現行為としての建築書の編集・出版行為を具体的に検証していくこととなる。

日本の近代建築書の系譜が著者や編集者・出版人たちによる情報供給側の能動的な営為としてとらえられ、「日本近代建築出版活動史」が将来的に描き出されることも視野に入れている。

4 論文構成

本論文における主題は、1) 建築出版組織の展開にみる近代日本の建築出版活動の史的概観、2) 建築書院と近代建築書の形成、3) 洪洋社と建築出版活動の展開、4) 構成社書房と近代建築運動の最盛期における建築出版活動、の4点を取り扱っており、それぞれに検討をくわえている。

とくに1)において、近代日本の建築出版活動の史的概観について検証し、そこでえられた特徴をふまえて3つの建築出版組織に着目して2)から4)の個別研究の対象を抽出した。つまり、1)で概観した建築出版組織のほとんどで建築図集が刊行されていた共通点、ならびに建築出版組織の諸活動全体の要点をふまえて抽出した個別研究の対象とは、建築図集が主力刊行物のひとつにふくまれながら、図書や雑誌、あるいは図集や講義録といった複数の刊行形式による近代建築書が展開されていた建築出版組織となる。2)の建築書院は、建築系出版社の嚆矢である。3)の洪洋社は、昭和戦前期までの市販建築書としては最大の

刊行点数が認められる。また、2) の建築書院と 3) の洪洋社の 2 社の活動期間によって、建築出版組織の諸活動の全期間を包含できる。そして 4) の構成社書房は、建築出版活動の重要な一側面をなす建築運動の頂点と密接な関係性が指摘でき、同書房自身が建築運動体的な性質が示された短期間の活動でありながら、建築運動体としては稀といえる建築図書と建築誌を併行して刊行していったため、建築図書と建築誌の系譜それぞれの関係性、あるいは建築図書と建築運動のつながりについても検証しようと考えた。

こうした研究方法における枠組みにともなって、上記の 4 点の主題は本論文における第 1 章から第 4 章に対応している。そこに序章と結章をくわえた全 6 章、全 19 節によって本論文は構成される。なお、個別研究の対象となる 3 つの建築出版組織のうち、建築書院と構成社書房については、従来はほとんど検討がくわえられてこなかった出版社といえる。洪洋社については、その刊行物のテーマと刊行形式が広範にわたるためか、同社の建築出版活動の全体像は見いだされてこなかった。

第 1 章では、建築出版組織をその性格によって類型を整理し、それぞれの成立過程を分析することで、近代日本の建築出版活動の史的概観について検証した。各類型の建築出版組織が派生しながら重層的に併行していくため、それぞれの生成と展開の過程を時系列でたどることによって、近代日本の建築出版活動の系譜を概観しようと考えた。

各建築出版組織を検証する前に、第 1 節では、本論文が検証しようとする日本の近代建築書の全体像について、既往研究においては唯一の通史的存在といえる宮内嘉久の「建築ジャーナリズム史」の叙述経緯とその特徴について分析する。建築運動史に建築誌の系譜を重ね合わせた宮内の叙述方法が、戦前期建築運動の当事者たちから受けた影響、そして戦後の日本近代建築史の基本文献に反映された経緯を検証し、特定の建築誌に焦点が当てられた背景に言及する。

つぎに、わが国において近代建築書を刊行した建築出版組織は、その性格によって 4 つの類型に区分できることを述べる。すなわち、建築系の団体がおもに会誌などを刊行した学会や協会（以下、「建築系学協会」）、市販の建築図書を主体とした出版社（以下、「建築図書出版社」）、市販の建築誌を主体とした出版社（以下、「建築誌出版社」）、そして自らの機関誌や作品集などを刊行した建築運動体となる。そして、これらの近代日本の建築出版活動の全体像のなかでは、従来の「建築ジャーナリズム史」が一部の範囲に限定されていたことを指摘する。

第 2 節は、近代建築書の刊行を主とする建築出版組織が活動をはじめる以前の前史段階

となる。幕末・明治初期において軍事機関などがオランダの軍事技術書を邦訳した西洋建築技術の導入についても検討をくわえ、邦訳文や版元の継承性について述べる。

第3節以降は、建築出版組織の4つの類型にそって節を構成する。

第3節は、第一の建築出版組織となる建築系学協会の成立過程として、その嚆矢となった造家学会と浪和会の建築出版活動について検討をくわえる。第4節は、第二の建築出版組織となる建築図書出版社の生成過程として、建築家による建築講義録の出版活動の特徴を述べるとともに、初期の建築図書にみる出版組織の展開について言及する。第5節は、第三の建築出版組織となる建築誌出版社の出現という観点から、初期の市販建築誌の創刊経緯を中心に検証する。建築世界社による最初期の建築批評について分析するとともに、各誌の展開について出版組織としての性質に注目しながら検討をくわえる。第6節は、第四の建築出版組織としての建築運動体による建築出版活動として、その機関誌だけでなく、作品集という建築図書をふくめて分析する。そして、分離派建築会と分離派建築会以後の運動体による建築出版活動の特徴として、市販を担った出版社の存在に言及する。

第7節は、4つの類型の建築出版組織の展開を概観する補遺として、戦時下における建築図書の出版活動について述べる。1930年代における彰国社と相模書房の設立経緯を検証しながら、1940年代における両社の建築図書の共通点を指摘する。

以上の4つの類型の建築出版組織にみられる諸活動を概観すると、これまで十分な検討がくわえられてこなかった建築図書出版社の存在の重要性が認められることを述べながら、いずれの類型においてもほとんどの建築出版組織から建築図集が刊行されていたことを指摘する。これらの特徴をもとに、第2章以降における個別研究の対象となる3つの建築出版組織を抽出する。

第2章では、建築書院と近代建築書の形成として、同院の出版活動の概要と刊行物の特徴について考察する。従来の研究ではほとんど言及されてこなかった建築書院だが、社主の人物像と工学書全体への展開過程、そして市販建築書の嚆矢的な活動という観点からその特徴と史的意義を検証する。

第1節では、建築書院の活動概要と院主・吉原米次郎の経歴として、吉原が建築の近代教育を受けた建築書の編集者・出版人の嚆矢的存在であることを指摘し、その就学経験と刊行分野との関係性について同院の設立趣旨とともに検討する。つぎに建築書院の活動期間と発行人の推移を検証したうえで、工学全体にわたる刊行分野が6つに大別でき、その展開によって同院の出版活動が4期に区分できることを述べる。

第2節では、建築書院の工学書全体にみる出版活動の変遷を4期にわけて検討をくわえる。第1期(1893~1902年)は土木・建築書による創業期として、両分野の教本づくりが主体とされ、とくに攻玉社の卒業生などの土木技術者の執筆陣が形成されていたことを指摘する。第2期(1903~1909年)は工学書全体への展開期として、日露戦争後の国力増強の機運によって海事や動力機関などの刊行物が増え、同院の編集部員が筆記や図版収集を行うなど、自社編纂における入門書や実務書が工学全体に展開されたことを述べる。第3期(1910~1921年)は建築・電気書への偏向期として、初学者向けの電気分野の叢書が自社編纂で拡充されながらも、図書ならではの既刊書の重版や改訂版とその告知にも力を注ぐことで、工学分野におけるレファレンスが形成されていったことに言及する。第4期(1922~1931/1941年)は建築・電気書による収束期として、吉原没後もその編集方針のうえに刊行がつづけられたものの、工学全体を俯瞰する視野が薄れていく様相に出版人の個性とその役割の大きさを指摘する。そして、全体の活動をつうじては、建築書にみられる体裁の豪華さと図版印刷への注力から、吉原が建築書を主眼としていたことを述べる。

第3節では、建築書院における建築書の展開として、前節と同じ区分の4期にそって検証する。第1期は建築教本による始動期として、講義録などの文章主体の刊行物が私家版の既刊書を取り込むことでラインナップが形成されながら、自社編纂による図版主体の刊行物への取り組みが確認できることを述べる。第2期は建築仕様書と建築図集の展開期として、文字情報と視覚情報が併存されながらも、住宅の間取りや商店のファサードなどを建築技師に描かせることで社会の需要に応じていったことに言及する。第3期は建築図集の開花期として、図版主体の構成によって読者対象が建築の施主などの素人へも広げられるとともに、日本の伝統的な建築文化を扱う図集が資産階級にむけて豪華な体裁で刊行されたことを検証する。第4期は建築図集の継承期として、吉原の逝去とともに自社編纂の機能が実質的に失われながらも、著者筋が受け継がれることで図版主体の建築書へと特化されていく様相を述べる。

建築書院の建築書全体としては、伝統的な文化を視覚的に示す建築書への注力が確認でき、読者層が建築の初学者から施主としての富裕層へと広げられることで、西洋化の進む社会において日本の伝統的な建築が文化や趣味、あるいは芸術として視覚化され、継承・普及されていった特徴を述べる。そして、ときに不動産経営の対象として近代社会に組み込まれることで、日本家屋が社会通念として視覚的に再定着されていったことを指摘する。

第3章では、洪洋社と建築出版活動の展開として、同社の出版活動の概要と多様な刊行

形式の拡充について考察する。社主・高梨由太郎の刊行手法の特徴とともに、洪洋社の刊行物の全体像とその特質を検証する。

第1節では、活動概要と編著者の特徴として、多品種の叢書をはじめとする刊行形式の多様さと社内編集の多さを指摘する。そして、単行本・叢書・雑誌という刊行形式の変遷と、社内編集か社外の編著者による違いにもとづき、同社の活動が3期に区分できることを述べる。

第2節は、洪洋社の建築出版活動の変遷を3期の区分にそって分析する。社主独力の創業期となった第1期（1912～1919年）では、印刷業から起業し、建築プレート図集の市販事業が確立されたことを検証する。刊行形式の多様化と建築専門家との共同が特徴の第2期（1920～1930年）では、情報の即時性や資料性が高められていった興隆期といえる特徴を述べる。社主の引退にともない建築専門家による編著が主力化された第3期（1931～44年）では、出版社と著者の役割が明確化され、刊行物のオリジナリティが深められた展開過程について言及する。

第3節以降は、洪洋社において最も点数が多い刊行形式である叢書形式の建築図集について取り上げることで、同社の刊行手法を明らかにする。

第3節においては、洪洋社の刊行形式と編集体制との関係性について検討し、図版の制作方法との関わりを指摘する。まず、高梨由太郎の経歴と「写真印刷部」の設置による出版活動の関係性について述べる。図版の社内制作を活動の柱に据えることで、同社の刊行形式の特徴がもたらされたことを指摘する。

こうした特徴をうけて第4節では、図版の制作方法の観点から刊行手法の変遷について、洋書の複製、建築の撮影、実測・作図の観点から検証する。写真掲載の主眼は、建築の部位や用途ごとの雛形の提供から、芸術や伝統としての建築へ、そしてモダニズムや伝統的建築の造形美へと展開されていき、視覚情報としての建築写真に込められた刊行趣旨が深められていったことを述べる。

第5節では、叢書総体としての刊行の企図について検証したうえで、同社の刊行手法の特徴を評価する。各巻の内容を伝える平易な建築用語で表題が付され、軽妙な刊行趣旨文を目録形式で提示することで、読者による検索可能性を目論んだ経緯について検討する。

洪洋社の建築出版活動の全体をつうじては、刊行形式の展開、テーマの拡充、出版社と著者との共同の緊密化といった、日本の近代建築書の変遷をたどる一定の輪郭が示されていることを述べる。そして、その中核を担った叢書形式の図集は、広範な建築意匠を題材

とした図版の集成と視覚表現の深化によって、造形語彙の選択可能性を拡充させ、建築設計における意匠の多様性への認識が広がっていった様相を示すことを指摘する。

第4章では、構成社書房と近代建築運動の最盛期における建築出版活動として、その活動概要と刊行物の特徴について考察する。同社の活動は1930年前後の2年あまりにかぎられ、従来はほとんど検討されてこなかったが、その刊行物はわが国の建築運動のピークとなる動向との関係性が示唆されており、出版組織としての史的意義を検証する。

第1節は、組織と刊行物の概要として、48点が確認できる刊行物は雑誌と叢書が主体とされ、単行本をふくめた刊行形式ごとに出版活動を検証することを述べる。

第2節は、ふたつの雑誌の特徴として、モダニズム建築の論理的規範を追求する編集方針について検証する。いずれも同時代的な海外の動向を紹介しつつ、『建築紀元』誌では工学的審美性の本質を「構成」ととらえ、『建築時潮』誌では科学を基盤とする「構築」という概念を規範にすえて、インターナショナルな建築像の確立をめざした啓蒙活動が行われていたことに言及する。

第3節は、写真集と論集による叢書の特徴として、欧米のモダニズム建築の最新動向が作品と理論の両面から、網羅的に紹介していこうとしていたことを述べる。とくに写真集『現代建築大観』では、菊四倍判という異例の大きさの判型で、国別のモダニズム建築が美術全集のようにまとめられ、世界の趨勢が視覚と書物の体裁で示されたことを指摘する。つぎに、単行本による建築像の提示として、雑誌・叢書を補完する企画であったことを検証する。ル・コルビュジエの著作における初の全訳、CIAM議事録の即時的な訳出のほか、堀口捨己がモノグラフの作品集を、岸田日出刀は自らの撮影写真によって日本の伝統的建築に構成の美を示すなど、モダニズム建築の解釈をめぐる研究成果が建築書のかたちで表現されていたことを述べる。

第4節は、編集・出版の体制にみられる特徴として、建築家たちが自ら企画・編集に携わっていた活動と主要人物の傾向について検証する。その中心メンバーの多くが、幻の祖組織的建築運動体とされる新興建築家連盟において、活動の中核を担っていたことを指摘する。構成社書房の出版企画は、そうした建築家たちに一任されており、同社は出版・印刷業などを営む資産家によって支援されていた形跡について言及する。

構成社書房の出版活動の全体としては、世界的な視野のもとでモダニズム建築の導入と展開が図られており、その中心的な役割を日本建築界で果たしていた建築家たちによる、実質的な建築運動体ともいえる性格が内在されていたことを指摘する。

結章においては、近代日本の建築出版活動の特質とその史的意義として、一連の活動による史的展開の特質を考察したうえで、建築出版活動が日本近代建築史上に果たした役割について述べる。まず、第2章から第4章で個別検討を行った3社における建築出版活動は、建築書院が伝統的な住まいの姿を近代社会に再定着させ、洪洋社は多様な建築意匠に対する設計者と施主の共通意識を育み、構成社書房はモダニズム建築の抽象美を文化人に伝えていった、建築図書の展開過程について言及する。そして、写真をはじめとした図版による視覚表現が発達していくことで、建築をめぐる施主の趣味性や多様な嗜好が醸成されていったことを指摘する。

モダニズムを推進した建築誌が前衛性を旨としたのに対し、建築図書では様式性や装飾性、伝統性、近代性といった概念がそれぞれ相対化され、個人の趣味によって建築意匠が選択できる土壌の形成に寄与したことに言及する。近代日本の建築出版活動は、一部の前衛的建築家による建築誌の報道だけでなく、建築図書の史的展開によって建築の社会性と個人の趣味性との均衡が図られながら、受容者側の視点もあわせもちつつ建築の設計行為の裾野が広げられ、近代社会における建築への認識が形成されていったことを述べる。

第1章 建築出版組織の展開にみる日本近代建築出版活動の史的概観

序 既往研究における建築出版組織への言及と本章の構成

本研究の方法は、建築出版組織の枠組みをもとに近代日本の建築出版活動の展開について検証することで、雑誌だけでなく建築の図書をふくめた日本の近代建築書の全体像を考察することにある。しかし序章で述べたように、日本近代建築史研究において近代建築書を主題とした従来の論考においては、建築誌もしくは建築技術書が扱われることが多くを占め、その出版組織の存在に着目したのは菊池重郎や花田佳明らによる論考にほぼ限られていた¹。また、日本の近代建築書の系譜を通史的にとらえる試みとしては、宮内嘉久による「建築ジャーナリズム史」²の叙述が唯一の存在といえる。それは、特定の近代建築運動と建築批評の盛衰に焦点が当てられているものの、明治期から昭和戦前期までの建築誌の系譜が描かれている。

本章では、近代日本における建築出版活動の全体像として建築誌と建築図書を包括的に俯瞰するために、近代建築書に関する既往研究の成果をふまえながら、建築出版組織の展開という観点にもとづき整理することによって、その史的概観を描出することを試みる。

第1節では、わが国の近代建築書に関する従来の通史といえる「建築ジャーナリズム史」について、その成立経緯と特質を検証する。つぎに、近代建築書の版元となった建築出版組織が、それぞれの性格によって4つの類型に整理できることを述べる。そのうえで、従来の「建築ジャーナリズム史」が近代日本の建築出版活動において一部の範囲に限定されていたことを指摘する。第2節以降は、建築出版組織の類型ごとにそれぞれが生成した経緯を中心としながら時系列で検証する。建築出版組織の各類型が派生しながら重層的に併行していくため、それぞれの類型が生成した経緯を検証

¹ 菊池重郎は『明治村通信』誌において、建築図集に関する出版組織に関する論考も発表している（「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（上・下）」1982年1、2月号、「木葉会の明治期に刊行した建築プレート図集考（上・中・下）」1982年10月号、1983年1、3月号、「洪洋社の「建築写真類聚」の創刊（1）～（5）」1983年7、10、11月号、1984年2、5月号）。花田佳明は国際建築協会に関して、石坂美樹との共著論文（「建築雑誌『国際建築』研究1・2」2001年日本建築学会学術講演梗概集 F-2、pp. 653-656。この発表に先立って石坂の修士論文「雑誌・『国際建築』研究——昭和期の建築界におけるその位置付け」は2001年度日本建築学会優秀修士論文賞を授与された）のほかに、その編著書『植田実の編集現場』において小山のすぐれた短評を著している（pp.113-115、ラトルズ、2010年）。同書では「日本の建築ジャーナリズム史の中で」とする章が設けられ、小山に連なる戦後建築誌の編集者5名が紹介された。

² 宮内嘉久「近代日本の建築イデオロギー——ジャーナリズムを通して」（東京大学卒業論文、1949年、宮内『少数派建築論』所収、pp.252-305、井上書院、1974年）が嚆矢となった経緯は、本章第1節第1項を参照。

することによって、建築出版組織の類型が展開する過程を分析し、近代日本の建築出版活動の系譜を概観しうると考えられるからである。

第2節は、建築出版組織の活動の前史となる。幕末から明治期にかけて邦訳された軍事技術書としての西洋建築技術書であり、幕府と明治政府の機関による官版の建築出版活動として述べる。また、それらが市井の書林による市販の近代建築書へと受け継がれていたことに言及する。

第3節からは建築出版組織の4つの類型にそって各節を構成する。第3節は、建築系の学会や協会などの団体による会誌であり、その嚆矢となった造家学会と浪和会の建築出版活動について検討をくわえる。第4節は、建築図書を主体とした出版社による市販図書であり、建築家による講義録の特徴を述べるとともに、初期の建築図書にみる出版組織の展開について言及する。第5節は、建築誌を主体とした出版社による市販誌であり、建築世界社による最初期の建築批評について分析するとともに、以後の各誌の展開について出版人や編集者など特徴に注目しながら検討をくわえる。第6節は、建築運動体による建築出版活動として、その機関誌だけでなく、作品集という建築図書をふくめて分析する。分離派建築会と分離派建築会以後の運動体による建築出版活動の特徴について、市販を担った版元の存在に言及する。

第7節は、4つの類型の建築出版組織の展開を概観する補遺として、戦時下における建築図書の出版活動について述べる。彰国社による文化財刊行物と相模書房による叢書刊行について、1930年代における両社の創業経緯を検証しながら、1940年代における建築図書の出版活動の特徴を指摘する。

以上の各節をふまえた小結では、4つの類型の建築出版組織のうち、建築図書を主体とした活動がこれまで看過されてきたことを述べながら、いずれの類型の建築出版組織からも建築図集が刊行されていたことを指摘する。これらの特徴をもとに、第2章以降における事例検証の分析対象となる3つの建築出版組織を抽出する。

第1節 建築出版組織の類型と「建築ジャーナリズム史」の位置

1-1-1 「建築ジャーナリズム史」の成立経緯³

わが国の「建築専門誌はジャーナリズムではない」ともいわれるが、「建築ジャーナリズム」をめぐる課題については日本建築学会の会誌『建築雑誌』でも何度となく特集されてきた⁴。その『建築雑誌』にはじまるわが国の建築誌の系譜は、「建築ジャーナリズム史」ともいわれ、1950年代から『新建築』や『国際建築』などの編集で活躍した建築評論家・宮内嘉久を主唱者として論陣が張られることとなった。宮内によれば「建築ジャーナリズム」という言葉そのものが、自身の東京大学卒業論文「近代日本の建築イデオロギー——ジャーナリズムを通して」(1949年、以下〈宮内1949〉)⁵において「しぜんにできた造語」と回顧しているものの⁶、その用例は戦前期に遡ることができる⁷。また、今日の建築史研究においても用例が認められるが⁸、宮内が晩年に「建築ジャーナリズム史に至っては、空白のまま——一巻の通史もなく——打ち捨てられている」⁹と嘆いたように、そのライフワークとなった探究が第三者へと継承された形跡は認められない。

本項では、わが国の「建築ジャーナリズム」に対する建築史研究上の認識の代表例として、宮内による「建築ジャーナリズム史」の成立経緯と特質について検証していく。その発端となったと宮内自身が申告した〈宮内1949〉に着目し、同論に影響を与

³ 本項は、以下の2編の拙稿をもとに、その後の知見をくわえながら再構成したものである。「宮内嘉久による「建築ジャーナリズム史」の成立経緯について」「宮内嘉久による「建築ジャーナリズム史」の意義と特質について」(いずれも大川三雄、矢代眞己、田所辰之助と共著、平成28年度日本大学理工学部学術講演会予稿集、pp.548-551、2016年)

⁴ 『建築雑誌』1977年11月号特集「建築ジャーナリズム」(編集委員長・近江榮)は、馬場璋造「建築専門誌はジャーナリズムではない」など各誌編集長ら13名の寄稿で構成されている。ほかに同誌での例として、1956年4月号「創立70周年記念特集」の座談会「建築ジャーナリズムの動きをたどる——関係誌20年の歩み」、1999年9月号特集「建築をめぐるジャーナリズム」などが挙げられる。

⁵ のちに宮内嘉久『少数派建築論』(井上書院、1974年)に所収されており、本章では同書版を用いている。

⁶ 宮内、前掲5、p.319

⁷ 「建築ジャーナリズム(史)」の初出については現時点で確定できていないが、たとえば『建築新潮』1926年3月号に「ジャーナリズム」の用例が確認でき(p.16「編集室だより」)、「建築ジャーナリズム」の用例は西山如三「建築批評の問題」(『国際建築』1935年10月号、p.2)や竹村新太郎「創宇社建築会の新建築運動」(『建築と社会』1937年6月号、p.30、「建築ジャーナリズム」と表記)などが挙げられる。

⁸ たとえば、東京工業大学の奥山信一研究室が2015年度日本建築学会大会学術講演にて「戦後日本の建築ジャーナリズムにおける記事に関する研究」を2編発表している(同梗概集、pp.615-618)。

⁹ 宮内嘉久「鏡のない世界——誰もその歴史を知らない建築ジャーナリズム」、『建築雑誌』、1992年5月号、p.57

えたとみられる参考文献との関係性、ならびに同論がその後の建築界に与えた影響について考察する。

〈宮内 1949〉では、1920年から1930年が「建築ジャーナリズムの開花」¹⁰期とされるなど、建築誌の系譜については各所で触れられている。しかし、副題に「ジャーナリズムを通して」と付されたように、「あくまでもジャーナリズムの視点で、建築思潮と建築運動の関連を歴史的に捉え」¹¹ることが企図されていた。実際に、その論考のトピックスをたどっていくと〔表 1-1〕の〔A〕に示したように、たとえば建築学会での帝国議会議事堂をめぐる様式論争（1910年）が「建築論的思考の発生」¹²、分離派建築会の結成（1920年）は「新旧イデオロギーの対立抗争」における「闘いののろし」¹³、岡村蚊象の講演「合理主義反省の要望」（1929年）が「プロレタリアートによる建築理論の獲得にその道を切り拓いたもの」とされ¹⁴、dezam（デザム）の論文「建築と建築生産」（1933年）が建築運動の「前衛的イデオロギーを代表し、その理論的武器」¹⁵になったとも評された。

こうした叙述内容や時代区分については、後述する1961年の宮内の論考とほぼ重なっており、最晩年となる1999年の論考「20世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」¹⁶に至るまでほぼ変わっていない（〔表 1-1〕の〔A〕）。つまり、宮内の論陣の骨格については卒論〈宮内 1949〉で形成されたことが認められるとともに、一連の論考における叙述の主眼は建築誌そのものの歴史よりも「建築思潮と建築運動の関連を歴史的に捉え」ることに重きが置かれつづけていたことを指摘できる。それは「建築ジャーナリズムを、それとしてしっかり成立させなければ」¹⁷と決意した宮内による建築ジャーナリズムの職能論、あるいは職能運動であったとも考えられる。そこで、その理論的な背景の検証として、〈宮内 1949〉に示された参考文献のなかから建築運動をテーマとした論考について考察する。すなわち、西山卯三によるふたつの論考と高橋寿男によるひとつの論考の合計3本の参考文献について、〈宮内 1949〉の記述と

¹⁰ 宮内、前掲 5、p.273

¹¹ 宮内、前掲 5、p.29

¹² 宮内、前掲 5、p.263

¹³ 宮内、前掲 5、p.272

¹⁴ 宮内、前掲 5、p.281

¹⁵ 宮内、前掲 5、p.301

¹⁶ 宮内嘉久「20世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」、『建築雑誌』、1999年9月号

¹⁷ 宮内、前掲 5、p.29

比較する（〔表 1-1〕の〔B〕）。

1 本めの西山卯三「建築家のための建築小史」（1933～34年、以下〈西山 1933〉）¹⁸は、その京都帝国大学での卒業論文「住宅計画の科学的考察」（1933年）の序文原稿が「若干補筆訂正」されたものであり、『国際建築』誌に『唯物史観による全建築史の見直し』として編集者から紹介されたうえでの連載となった¹⁹。当時の建築界における唯物史観は、モダニズムの建築が否定した歴史主義の建築様式にもとづく従来の建築史家による様式史から脱却し、建築の「生産方法」をもとに史的考察を求めるもので、石原憲治や岡村蚊象、原沢東吾らによる建築史研究の共通テーマとされた。これらの論考は、のちに宮内によって重視され、繰り返し引用されることとなった（〔表 1-1〕の〔A〕）。

そして〈西山 1933〉の企図は「社会の発展と建築、建築運動との関連に於いてこの最も興味ある『建築のイデオロギー的部分』の発展を主として明白にしよう」²⁰とすることに置かれた。これは、すでに引用した宮内卒論の企図と類似する。しかし〈西山 1933〉では、たとえばグロピウスやル・コルビュジエが叙述される際も、その理論は蔵原惟人らによるプロレタリア芸術論の邦訳書²¹に負いながら、「建築家層のイデオロギー的発展の過程」²²にそって分析されている。つまりその主眼は、「歴史を科学とし」て「成立せしめた唯物史観」による「建築一般の歴史的発展の解明」に定められていた²³。宮内が目とした「新旧イデオロギーの対立抗争」との性質の差異を指摘できる。

西山による 2 本めの論考「日本折衷主義と我国の建築運動」（1937年、以下〈西山 1937〉）は、つぎに挙げる高橋寿男の論考とともに、『建築と社会』誌 1937年 6月号の

¹⁸ 西山卯三「建築家のための建築小史」、『国際建築』、1933年 8月号～1934年 1月号。のちに西山卯三『建築史ノート』（相模書房、1948年）と西山卯三『西山卯三著作集 4 建築論』（勁草書房、1969年）に所収された。

¹⁹ 西山（前掲 18、1969年、p.52）によれば、卒論の序文は「ある事情によって論文から削除されて自分の手元にあったのを、武蔵高工の蔵田先生のすすめにより若干補筆訂正して出したもの」とされる。

²⁰ 西山、前掲 18、『国際建築』9巻 p.394、1933年 11月号。西山、前掲 18、1969年、p.85では用語に異同あり。

²¹ 西山、前掲 18、1969年、p.52に以下の参考文献が掲出されている。イ・マーツァ『現代欧州の芸術』（蔵原惟人、杉本良吉訳、叢文閣、1929年）、同『世界芸術発達史』（熊沢復六訳、鉄塔書院、1931年）、ヴェ・フリーチェ『芸術社会学の諸問題』（黒田辰男訳、往来社、1932年）、同『欧州文学史』（外村史郎訳、1930年、正しい書名は『欧州文学発達史』鉄塔書院か）、同『芸術社会学の諸問題』（蔵原惟人訳、1930年、しくは1932年の往来社か）。

²² 西山、前掲 18、『国際建築』9巻 p.402、1933年 11月号。西山、前掲 18、1969年、p.96では用語に異同あり。

²³ 西山、前掲 18、『国際建築』9巻 p.320、1933年 11月号（西山、前掲 18、1969年、p.55-56）

特集「近世日本建築文化運動」に寄せられた。のちには〈西山 1933〉とともに、西山の初期の代表的著書『建築史ノート』（1948年）と全4巻の著作集（1969年）の双方に所収されており、西山の建築論を代表する論考に数えられる²⁴。〈西山 1937〉は1948年の著書へ所収される際に「日本建築運動小史」と改題されたように、1930年代までの「建築論の変遷と、建築運動を概観」²⁵したものである。

その記述は、様式論争などのトピックスから建築運動体や論考の抽出に至るまで、宮内のそれと大部分が重なる。「日本近代建築」の概念の生成過程を詳細にたどった倉方俊輔の論考によれば、1910年の様式論争が「分離派前史」として着目されたのは1950年代の史的研究においてであり、ここに「日本近代建築史」の「基本的なトピック」が揃ったとされる²⁶。しかし、同様のトピックスの抽出は、少なくとも戦前期の〈西山 1937〉に遡ることが認められる。

3つめの比較対象となる高橋寿男の論考「青年建築家クラブを顧みて」（1937年、以下〈高橋 1937〉）²⁷は、「戦前に書かれた建築運動小史としても貴重」²⁸と評されている。その叙述のトピックスは、〈西山 1937〉とほぼ重なっているほか、日本における建築運動の時代区分が示されたことを特記できる。すなわち、1920年代前半は分離派建築会などの「芸術的なもの」、1920年代後半は日本インターナショナル建築会などにより「技術が前面」に出はじめ、1930年代は「急進的な思想が色濃く這入りこんだ」めに新興建築家連盟が「泡沫の如く解体させ」られたのち、同連盟の思想性とは異なる側面であった「科学的に観る方法」が日本青年建築家連盟（のち建築科学研究会）に受け継がれていった様相が取り上げられながら、一連の系譜が整理されてい

²⁴ 西山、前掲 18

²⁵ 西山、前掲 18、1969年、p.53

²⁶ 倉方俊輔「『日本近代建築』の生成——『現代建築』から『日本の近代建築』まで」（『10+1』no.20、p.159、2000年6月）。倉方によれば「『日本の近代建築』の視点から整理する試み」は、木村徳国「明治から大正へ——日本近代建築史前期」（『建築雑誌』1950年4月号）で「最初の成果」をえたとされ、「近代日本の建築の攻究は、一九五〇年代の末に『研究』として成立」したとし、以下のような文献などを取り上げている。山本学治・神代雄一郎・阿部公正・浜口隆一『建築学大系6 近代建築史』（彰国社、1958年）、稲垣栄三『日本の近代建築——その成立過程』（丸善、1959年）、蔵田周忠『日本近代建築の研究——国際環境における日本近代建築の史的考察』（早稲田大学学位論文、1959年）、神代雄一郎『近代建築思潮形成過程の研究』（東京大学学位論文、1961年）。

²⁷ 『建築と社会』誌 1937年6月号特集「近世日本建築文化運動」の寄稿のひとつ。京都帝国大学で一時同級生となった西山の編集による高橋の遺稿集『建築・住宅・都市計画』（相模書房、1962年）にも所収された。

²⁸ 日本科学史学会編『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』（村松貞次郎責任編集、第一法規出版、1964年）、p.496

る²⁹。そして dezam が「画期的な研究『建築生産』」を 1932 年に発表し、建築運動に「強力な理論的武器を与えた」とされる³⁰。高橋は、京大建築学科における dezam メンバーと同学年だった時期があり、建築科学研究会から青年建築家クラブへといたる一連の建築運動体の主要メンバーのひとりであった³¹。

つまり、〈宮内 1949〉における dezam への脚光や建築運動史の叙述には、戦前期の当事者による叙述のトピックスや時代区分が受け継がれていたものと認められる。〈西山 1937〉と〈高橋 1937〉が発表された『建築と社会』誌の特集「近世日本建築文化運動」では、「そろそろ歴史的的存在となった分離派建築会」³²とそのメンバーのひとりだった山田守の回顧がみられるように、遅くとも 1937 年の時点で建築運動の史的叙述が当事者によって着手されていたことを示している。

つぎに、〈宮内 1949〉の執筆経緯とその後の影響について検証する。宮内は 1949 年 3 月の東大卒業後に「新日本建築家集団 (NAU)」の事務局に就職した。建築運動最大の統一体として 1947 年 6 月に結成された NAU の事務局に、宮内は在学中から出入りし、山口文象や高橋寿男、今泉善一などの戦前期の建築運動の当事者たちを「じかに知ることとなった」なかで卒論のテーマが固められたという³³。

NAU の活動の柱のひとつとされた「歴史部会」による建築運動史研究は、結成後間もない 1947 年 11 月に最初の対外活動として蔵田周忠を招いた講演会が開催されたのち、単行本『日本近代建築運動史』の編纂に向けた講演会や討論会が展開された³⁴。そうした活動の結実が 1949 年 10 月から 12 月まで毎週金曜日に連続 10 回が開催された「日本建築運動史講座」(以下〈NAU1949〉)であった。分離派建築会から日本工作文化連盟、民主建築会から NAU にいたる戦前戦後の建築運動の当事者を招いた講演

²⁹ 『建築と社会』、1937 年 6 月号、pp.51-52

³⁰ 前掲 29、p.52

³¹ 高橋は 1929 年に京都帝国大学建築学科に入学。留年により西山と同級生となるが、dezam 結成のころは高橋はほとんど登校していなかったとされる(前掲 27、『建築・住宅・都市計画』、p.4)。しかし、やがて dezam と緊密な連携をとる建築科学研究会から高橋は主要メンバーとなり、以後それらの運動体を継承した青年建築家クラブの結成に至るまで中心人物のひとりとなった。なお高橋は、京大中退後に日本大学建築学科に再入学し 1934 年に卒業した。

³² 山田守「そろそろ歴史的的存在となった分離派建築会の事など・たまたま同人大大内秀一郎君逝く」、前掲 29

³³ 宮内、前掲 5、pp.28-29

³⁴ 本多昭一著、松井昭光監修『近代日本建築運動史』、p.126、ドメス出版、2003 年。未刊に終わった単行本『日本近代建築運動史』は相模書房から刊行される予定で、「日本建築運動史講座」はそのための速記がとられたとされる。

会では、ガリ版刷の充実した資料が毎回配布され³⁵、その作成を宮内は手がけていた³⁶。第1回「総論」の配布資料のひとつが「近代日本建築運動史略年表（附・建築関係雑誌創刊年表）」である〔表 1-2〕。そして、詳細は不明だが、〈宮内 1949〉には「建築関係雑誌創刊年表」が付されていたとされる³⁷。

ふたつの年表はその名称と作成者に明らかな重なりが認められるため、〈NAU1949〉の雑誌年表は〈宮内 1949〉の一部であったと考えられる。つまり〈宮内 1949〉は、NAUにおいて戦前期建築運動の当事者たちと接するなかでテーマが育まれ、その成果の一部は NAU の建築史運動研究の基礎資料のひとつとして反映されたことが認められる。そこには、建築運動史の展開に並列されるかたちで建築誌の系譜が重ねあわせられている特徴を指摘できる。

これと同じ特徴が示された年表は、序章の既往研究の検討で述べたように、日本近代建築史に関する基本文献 2 冊に見いだすことができる。『建築学大系 6 近代建築史』（彰国社、1958 年）と村松貞次郎の責任編集『日本科学技術史大系 第 17 巻 建築技術』（日本科学史学会編、第一法規出版、1964 年、以下《村松 1964》）であり、「日本の近代建築運動年表」と「建築関係雑誌年表」のふたつの年表が同じ名称でいずれも縦に並んで掲出されている〔表 1-3〕〔表 1-4〕。

『建築学大系』は、戦後建築学界の総力によって建築各分野が概説された基本文献である。第 6 巻『近代建築史』の第 II 部「日本近代建築史」は、阿部公正と神代雄一郎の共著であり、「日本近代建築史」の名称が掲げられた最初期の文献とされる³⁸。前述の年表は、神代が担当した 2 章「日本における近代建築思潮の形成」（以下〈神代 1958〉）に掲げられた³⁹。

一方の『日本科学技術史大系』（日本科学史学会編、第一法規出版、1964～1972 年）は、「科学の『日本書紀』を作ろう」⁴⁰が編纂の旗印とされ、全 25 巻と別巻から構成された。その建築技術編となる《村松 1964》は、幕末以降 100 年間の建築関連史料が

³⁵ 前掲 34、p.128。「この資料作成には 49 年 4 月の大学卒業と同時に「NAU」専従事務局員になった宮内嘉久が中心的役割を果たしていたようである」とも付記されている。

³⁶ 宮内、前掲 5、p.207

³⁷ 宮内、前掲 5 では「建築関係雑誌創刊年表（省略）」として割愛されている（p.304）。

³⁸ 倉方俊輔「『日本近代建築』の生成——「現代建築」から『日本の近代建築』まで」（『10+1』no.20、p.160、2000 年 6 月）。

³⁹ 神代雄一郎「日本における近代建築思潮の形成」（『建築学大系 6 近代建築史』、p.318、彰国社、1958 年）

⁴⁰ 中山茂「日本科学技術史大系・地球・宇宙科学編の編集を終えて」、『天文月報』、1965 年 4 月号、p.85

村松の独力ではじめて体系的に編まれたものである。のちに日本建築学会の総力をもって建築学の各分野の基本史料が集成された『近代日本建築学発達史』（丸善、1972年）は、『日本科学技術史大系』に準拠して《村松 1964》を「豊富に発展・充実」させたことが巻頭に明記されている⁴¹。《村松 1964》は、建築界における『日本書紀』の原型として位置づけられる。

そうした《村松 1964》の「建築関係雑誌年表」は、同書第 10 章「近代建築運動の展開」の概説文⁴²に対する挿図として掲出された⁴³。その叙述が「負うところが大きい」と特記されたのは、宮内嘉久の論考「日本の建築運動 1920-60——組織・創造・イデオロギー」（1961 年、以下〈宮内 1961〉）⁴⁴である。それは卒論〈宮内 1949〉が「下敷き」⁴⁵として書かれたもので、ふたつの宮内の論考に共通する建築運動の時代区分「転換の時代：1920-30」「暗い流れ：1930-45」は、村松の概説文に踏襲された。

宮内のいう「暗い流れ」とは、「建築ジャーナリズムにみられるマルクス主義建築理論の展開とも関連しつつ、一つの飛躍を建築運動にもたらした新興建築家連盟が 1930 年に「赤という魔符を張られて壊滅」した時代を指している⁴⁶。その叙述は《村松 1964》に引用され、そうした「変遷のはげしい時代を理解する助け」としてふたつの年表を掲示した村松の企図が付言されている⁴⁷。

また、《村松 1964》には「建築史方法論・近代日本建築思想史文献」のリストが「NAU 歴史部会編」と出典を明示して掲載された。つまり、日本近代建築史研究の基本文献たる《村松 1964》の建築運動史の叙述は、当時の建築界の共通認識としての〈NAU1949〉の研究成果に多くを負っていたものと考えられる。そして、建築運動史に建築誌の系譜を重ねてみる宮内の見解が反映される結果となった。

こうした〈NAU1949〉と《村松 1964》、そして〈神代 1958〉の雑誌年表に示された特徴を明らかにするには、1956 年の日本建築学会創立 70 周年記念座談会のひとつ「建築ジャーナリズムの動きをたどる——関係誌 20 年の歩み」の冒頭に掲載された年表

⁴¹ 関野克「編集にあたって」（『近代日本建築学発達史』p.iii、日本建築学会編、丸善、1972年）

⁴² 村松、前掲 28、pp.481-482

⁴³ 村松、前掲 28、p.483

⁴⁴ 宮内嘉久「日本の建築運動 1920-60——組織・創造・イデオロギー」、『世界建築全集 9 近代』、pp.99-104、平凡社、1961年

⁴⁵ 宮内、前掲 5、p.252

⁴⁶ 宮内、前掲 44、p.101

⁴⁷ 村松、前掲 28、p.482

[表 1-5]と比較検討することが適当と考えられる⁴⁸。合計 20 名の出席者は、市浦健、川添登、蔵田周忠、田辺員人、高橋寿男、浜口隆一、宮内嘉久などで、戦前戦後の建築誌の編集に関わった当事者の多くが一堂に会している⁴⁹。

この年表では、「関係誌 20 年の歩み」が終戦年を軸として各誌の刊行期間が描かれ、戦前戦後の建築誌の系譜が俯瞰されている。左下には「昭和初頭に廃刊となった雑誌の主な物」として『建築新潮』や『建築工芸アイシーオール』、『建築科学』や『dezam』などの誌名だけが付記された。これらの雑誌については、〈NAU1949〉と《村松 1964》の雑誌年表では中央に示されている。なかでも『dezam』は、京大建築学科の西山卯三らのクラス会にはじまる活動の機関誌であり、ほかの学協会誌や市販誌とは性質を異にしている。つまり、〈NAU1949〉の「建築関係雑誌創刊年表」と《村松 1964》の「建築関係雑誌年表」は、いずれも表題が中庸な用語なのに対し、叙述目的が建築運動史にあったとはいえ、対象雑誌と掲載方法には偏向が認められる。

こうした傾向をもたらした〈宮内 1949〉が下敷きとされた〈宮内 1961〉は、表題が「日本の建築運動」とされているが、当初の執筆テーマは“昭和期のモダニズム建築”だったとみなされる。〈宮内 1961〉が所収された『世界建築全集 9 近代』の全体は、欧米と日本のモダニズム建築が時系列で構成され、「明治・大正初期の建築」（関野克）につづくかたちで宮内しんがりが殿を務めているためである。そこには新興建築家連盟の「思想闘争」を受け継ぐ『dezam』誌などの記述も忘れられておらず、「建築思想の発展がすべてなんらかの形で建築運動とからみあいつつ形成」され、「それが建築ジャーナリズムの発展と深く関連しているということ」が強調された⁵⁰。つまり〈宮内 1961〉は、日本のモダニズム建築という執筆テーマが、表題で「建築運動」へと転換され、副題で「イデオロギー」へと引き寄せられたうえに、その叙述の主眼は「建築ジャーナリズムにみられるマルクス主義建築理論の展開」に置かれていたものと考えられる。

以上から、宮内嘉久の「建築ジャーナリズム史」は、西山卯三ら戦前期建築運動の

⁴⁸ 前掲 4、『建築雑誌』1956 年 4 月号、p.59。同様の座談会として「デザイン」「構造」「材料・施工」の各テーマが開催された。

⁴⁹ 出席者と当時の所属（カッコ内原文ママ）はつぎのとおりである。市浦健（市浦建築設計事務所）、稲垣栄三（都立大学）、川添登（新建築）、菊地重郎（国鉄）、蔵田周忠（武蔵工業大学）、小場晴夫（日本住宅公団）、清水一（大成建設）、清水英男（建築文化）、菅原肇（建設省）、田中康男（建築界）、田辺員人（国際建築）、高橋寿男（日本住宅協会）、浜口隆一（東京大学）、宮内嘉久（新建築）、森田茂介（法政大学）。編集委員として、伊藤喜三郎、市川清志、内田祥哉、亀井勇、神代雄一郎。

⁵⁰ 『世界建築全集 9 近代』（平凡社、1961）、p.101

当事者による叙述が踏襲された建築思潮史といえる性質を有していたことが認められる。日本のモダニズム建築の史的叙述は、分離派建築会に象徴される建築運動にはじまることが多いが、その端緒は1930年代の当事者による証言に見いだせることが確認できた。そうした一次資料が、客観的な検証も加えられないまま、唯物史観の建築史を求めた戦前期の論考とともに、宮内の論考においては建築思想の闘争史として継承され、さらに「建築ジャーナリズム」の職能論へと転換されていったのである。

その理論的な基盤をなした卒論〈宮内1949〉は、〈NAU1949〉における建築運動史研究の資料の一部に反映されることで、日本近代建築史の基本文献たる〈神代1958〉と《村松1964》に引用されることとなった。そこでは特定のイデオロギー色の強い建築運動体と建築誌の関係性に焦点が当てられながら、建築運動史の叙述に建築誌の系譜を重ねあわせることによって「建築ジャーナリズム史」が描かれようとしていた。

〈宮内1949〉の基底となった建築運動史を著した西山は、戦後の「近代建築史」について「すでに勝利をえた『近代建築』の側から自己流に合理化された勝利の歴史であるとするなら、その解説を意味する『近代建築史』の講義のごときは、むしろ意味がないと言わねばなるまい」と1969年に述べている⁵¹。1977年代には村松が「戦前の近代建築派の闘いにもあまりにも高い評価を与えすぎ」と顧みたとように⁵²、建築運動史への研究熱が冷めていくなかで、宮内による思想闘争あるいは職能論としての「建築ジャーナリズム史」への関心も薄らいでいったといえる。

1-1-2 建築出版組織の類型

前項でみた「建築ジャーナリズム史」の叙述に象徴されるように、近代建築書の系譜を俯瞰する従来の見取り図としては、建築各誌の刊行期間を図示した年表が日本近代建築史の基本文献によって広められていた。しかし、菊池重郎が着目した洪洋社のように、建築図集などの多くの図書を刊行した建築系の出版社の存在が知られている。

わが国の近代建築書の系譜について、建築図書と建築誌をあわせて総合的に俯瞰する新たな見取り図の試みとして、建築書を主体に刊行した建築出版組織の枠組みによって建築出版活動の展開を示したのが〔表1-6〕である。建築出版組織については、その性質の類型によって組織の類型を区分しながら、各組織の活動期間を示した。建

⁵¹ 西山、前掲18『西山卯三著作集4 建築論』、p.48

⁵² 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』（日本放送出版協会、1977年、p.174）

建築出版組織の類型とは、建築系の学会や協会（以下、「建築系学協会」）、建築誌を主体とした出版社（以下、「建築誌出版社」）、建築図書を主体とした出版社（以下、「建築図書出版社」）、そして建築運動体の4つの類型に整理できると考えられる。このうち3者が建築誌を主体に刊行していた組織に相当し、建築系学協会による会誌、建築誌出版社による市販誌、建築運動体による機関誌、と建築出版組織の類型によって建築誌の性質を区分できる。

建築図書出版社については、序章で述べた日本の近代建築書の図書と雑誌を包含する唯一の総合リスト『日本近代建築書の研究』（昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、藤森照信代表研究者、1988年）から抽出した。その選定基準としては、同研究のリストに挙げられた建築図書1,563点を刊行した版元のうち、建築書を主体とした出版組織のなかから刊行点数10点以上、もしくは活動期間5年以上が認められるものをもって、本論文の研究対象に設定した「日本の近代建築書を主体的かつ継続的に刊行した出版組織の活動」に相当すると考えた。該当する建築出版組織を以下に記す（カッコ内は『日本近代建築書の研究』で示された建築図書の刊行点数と刊行期間／国立国会図書館における建築書以外も含む蔵書状況とその刊行期間）。

[本論文で抽出した建築図書出版社]

建築書院（31点、1896～1924年／218件、1893～1941年）

信友堂・信友堂書店（10点、1904～1933年／49件、1904～1942年）

洪洋社（337点、1915～1942年／355件、1915～1948年）

鈴木書店（30点、1919～1941年／103件、1911～1943年）

構成社書房（13点、1929～1931年／9件、1929～1933年）⁵³

城南書院（6点、1935～1943年／戦前期刊行分4件、1937～1941年）

相模書房（21点、1937～1943年／同67件、1937～1943年）⁵⁴

彰国社（5点、1942～1943年／同20件、1942～1944年）

最後の彰国社については、『日本近代建築書の研究』からの抽出基準である建築図書の刊行点数10点以上、もしくは活動期間5年以上から外れるが、例外として取り上げ

⁵³ 構成社書房は、建築図書以外として雑誌『建築紀元』と『建築時潮』を刊行していた（詳しくは第4章参照）。

⁵⁴ 相模書房は、建築図書以外として雑誌『東洋建築』も刊行していた（詳しくは本章第7節第2項参照）。

ている。同社の建築出版活動については本章第7節第1項で分析するように、戦前期の活動期間は1932年から1944年までに至ることが明確であるとともに、同社の叢書「東亜建築撰書」は10点の刊行⁵⁵が認められるためである。『日本近代建築書の研究』において彰国社の刊行点数が少ないのは、戦前期における同社の刊行物が日本の古建築の図集もしくはその修理報告書が多く、同研究による近代建築書の定義に当てはまらないことが指摘できる。また、このほかの建築図書出版社における個々の活動実態についても、今後の研究課題は多く、建築とその周辺分野以外の刊行物も認められる。しかし、少なくとも建築図書を刊行物の主軸のひとつにしていたと考えられることから、本論文では建築図書を主体とした出版社として分析対象とする。

このほかに建築図書に関する出版活動としては、以下のような組織を抽出できる(カッコ内は『日本近代建築書の研究』で示された建築図書の刊行点数と刊行期間)。

[出版社以外の建築図書の出版組織]

帝国工業教育会 (9点、1920～1927年)⁵⁶

建築資料協会 (28点、1925～1938年)⁵⁷

同潤会 (21点、1931～1941年)

[多分野の図書を扱う総合出版社]

丸善 (20点、1884～1942年)

博文館 (10点、1902～1927年)

大倉書店 (11点、1904～1929年)

須原屋書店 (9点、1906～1941年)

早稲田大学出版部 (32点、1918～1944年)

岩波書店 (15点、1920～1943年)

誠文堂 (10点、1922～1937年)

アルス (32点、1926～1934年)

⁵⁵ 10点のうち2点は、戦時統制による出版社の統合により龍吟社の名義で刊行された。

⁵⁶ 帝国工業教育会は、建築図書以外として雑誌『建築の普及』も刊行していた形跡が認められる(現存が確認できるのは3巻2号1922年3月～7巻9号1926年9月)。

⁵⁷ 建築資料協会は、建築図書以外として雑誌『建築・土木・材料』も刊行していた形跡が認められる(現存が確認できるのは1巻1号1928年7月～3巻1号1930年5月)。

常盤書房（20点、1932～1935年）

東学社（13点、1934～1935年）

龍吟社（9点、1936～1944年）

上記のような出版社以外の建築図書の出版組織、もしくは建築とその周辺分野を主体とせず、多分野の図書を扱う総合出版社については、序章3項で研究対象を設定したように、そこで刊行された建築の重要文献を中心に取り上げながら、その刊行の経緯と意義を軸に検討をくわえる。

このように建築出版組織の枠組みによって俯瞰すると、[表 1-6] に示したように、従来の建築誌に限定された年表よりも対象範囲が大きく広がり、幕末から昭和戦前期までの近代建築書の系譜を概観しうることが認められる。前項で述べた「建築ジャーナリズム史」は、建築運動体の機関誌とモダニズム導入に関する市販建築誌の動向に特定されていたことも再確認できる。

従来から描かれてきた建築誌の系譜としては、1887年の造家学会の会誌『建築雑誌』の創刊が嚆矢として取り上げられ⁵⁸、市販の観点では1907年の『建築世界』誌の創刊が端緒とされてきた。しかし、建築図書をふくめて概観すると、1870年代から近代建築書の市販が刊行でき、建築図書を主体とした出版社の活動は1890年代から見いだすことができる。さらに遡れば、幕末・明治初期においてオランダの軍事技術書などを邦訳した江戸幕府や明治政府の関連組織については、必ずしも建築書の刊行を主体としていないものの、建築技術書の出版活動としての継続性が認められる。あるいは、「建築ジャーナリズム史」が「暗い流れ」⁵⁹とした1930年代以降も、彰国社や相模書房などの戦後につながる建築図書の出版社が設立されている。

そこで、本章の次節以降の構成としては、建築出版組織の4つの類型ごとに1節ずつ設けることで第3節から第5節とし、各類型の生成過程を中心としながら検討をくわえる。また、それらの前史段階としての幕末・明治初期における建築技術書の出版活動についても1節を設け、第2節とする。また、建築出版組織の展開に対する補遺として、戦時下における建築図書の出版活動についても1節を設置し、第6節とする。

⁵⁸ 宮内嘉久は『建築雑誌』が「日本の建築ジャーナリズム史上、最初の雑誌として現れるということは、建築におけるジャーナリズムとアカデミーとの関連にとって、はなはだ象徴的であろう。ジャーナリズムのアカデミーへの屈従的性格は、ここにすでに前史的な形成を受けるのである」と述べた（前掲5、pp.258-259）

⁵⁹ 宮内、前掲5、p.295

以上の計 6 節からなる区分にそって、次節から近代日本の建築出版活動の史的概観を述べていく。

第2節 前史：官版による建築技術書 1856年～

1-2-1 軍事技術書としての建築技術書の邦訳

建築誌の動向に限定された従来の建築ジャーナリズム史が、その起点を1887（明治20）年の造家学会誌『建築雑誌』の創刊としてきたことは前述のとおりである。しかし、単行本や叢書といった建築図書へと視角を広げると、わが国における近代建築書の出版活動は江戸後期・幕末にまで遡ることができる。オランダの軍事技術書の邦訳による西洋建築技術の導入である。それらの建築出版活動については、1950～60年代の日本近代建築史研究の初期段階にあって優れた論考が早くも著されている。

「種々な意味においてこの訳業を重視」⁶⁰した菊池重郎は、1962年の博士論文『日本に於ける洋式建築の初期導入過程の研究』においてオランダの軍事技術書の邦訳行為を詳しく検証し、その研究成果は日本近代建築史の初期の定本のひとつである桐敷真次郎著『明治の建築——建築百年のあゆみ』（1966年、日経新書）にも盛り込まれていった⁶¹。しかし、これらの研究は、建築技術の導入過程に主眼が置かれたため、建築書の版元についての記述は徹底してない。近世から近代初期の書物は、後印版や覆刻版、翻刻版などのいわゆる異版が多く、版元を特定しにくいことも原因のひとつであろう。そこで本項では、版元の存在を補いながら先行研究の成果をたどることで、わが国における最初期の近代建築書の出版活動について検討をくわえる。

菊池は、幕末における近代建築書の最初の指標のひとつとして、1854（安政元）年に刊行された『海上砲術全書』[図1-1]を挙げている。つまり「洋式建築導入の契機は外国船来航の頻発に対する海防すなわち軍備である。海防は洋式軍事技術の導入ならびに洋式軍事設備の建設を促進した。洋式軍事技術の分野は幕府の邦訳したカルテン原著『海上砲術全書』に示されるものを基幹とするものである」⁶²と位置づけた。その原書は、「葛爾甸」ことJ. N. Caltenの著で、1832年にオランダ・デルフトで刊行された『Leiddraad bij het onderrigt de zee-artillerie』⁶³である。邦訳は「老中水野忠邦の命」によって1841（天保12）年にはじまり、「天文方の蘭方医家の共訳」として「宇田川榕庵・杉田立郷・全成郷・箕作阮甫・竹内玄同・品川梅次郎など」の当代の「蘭

⁶⁰ 菊池重郎『日本に於ける洋式建築の初期導入過程の研究』（私家版、東京工業大学博士論文、1962年）、p.27。

⁶¹ たとえば桐敷真次郎『明治の建築——建築百年のあゆみ』（日経新書、1966年）、p.43。

⁶² 菊池、前掲60、p.53

⁶³ 菊池、前掲60では「海上砲術教書」と訳している。

学者を網羅」したメンバーが手がけたとされる⁶⁴。同書は 28 冊からなる「海防技術全書」であり、「全巻は火薬・煩砲・煩車・弾・火料・射放擲放・帯仗・築堡・海岸攻守」で構成された⁶⁵。建築書としての特徴については、「第 24 巻から第 28 巻まで築堡および海岸攻守すなわち洋式築城であること」や「海岸攻守編すなわち築城術の訳文の中に『建築』なる訳語が用いられていること」、そして「刊行年は Perry 来航の翌年であること」を菊池は指摘している⁶⁶。また、「訳了は天保 14 年（1843 年）であるが、刊本ははるかに遅れて安政元年（1854）越前大野藩によつて行われた」とする⁶⁷。『海上砲術全書』は、わが国の近代建築書の出版活動が、幕府主導の訳出によって幕を開けたことを示している。

さらに菊池は、^{ほんしょしらべしょ}蕃書調所における「建築書の導入」の動きについても「江戸旧幕府蘭書目録」から抽出している⁶⁸。蕃書調所は、1856（安政 3）年に幕府が開校した洋学の研究教育機関であり、洋書の邦訳や検閲、邦訳書の印刷・出版などを行った。のちに「洋書調所」「開成所」と改称され、明治維新とともに「開成学校」として再編されて東京大学の源流のひとつとなった⁶⁹。本研究は、近代建築書に関する出版組織の存在に着目していることから、研究対象の端緒を蕃書調所の開校においたことは序章で述べたとおりである。菊池によれば、蕃書調所の所持していた「建築蘭書は 1847 年から 1857 年までの刊行書」で、「handboek とか handleiding とか記された便覧・教科書の類」が多く、「ほゞ建築学の全分野に及」んだとする⁷⁰。菊池はそれらの蔵書の点数を分野ごとに整理し、建築史 2 点、建築美学 1 点、建築設計 1 点、建築便覧 3 点、建築論集 1 点、透視図法 2 点、建築用語 2 点、そのほか 2 点とした。

⁶⁴ 菊池、前掲 60、p.27。「杉田立郷・全成郷」は杉田立卿と杉田成卿を指すものと考えられる。

⁶⁵ 菊池、前掲 60、p.27

⁶⁶ 菊池、前掲 60、pp.27-28

⁶⁷ 菊池、前掲 60、p.27

⁶⁸ 菊池、前掲 60、p.32

⁶⁹ 蕃書調所の前身にあたる「洋学所」は、1811（文化 8）年に設置されたわが国の「近代翻訳機関の淵源」である幕府天文方翻訳局（蕃書和解御用）を拡充・独立させて 1855（安政 2）年に開設。これにもとづく翌年に蕃書調所が開校。その後 1862（文久 2）年に「洋書調所」、1863（文久 3）年に「開成所」と改称され、1868（明治元）年に「開成学校」、翌 1869 年に「大学校」、1871 年 7 月に文部省と改称された。同年 9 月に文部省編輯寮が置かれ、翌 1872 年 9 月に編書課と反訳課となり、やがて 1877 年に東京大学が創立された（長沼美香子「開化啓蒙期の翻訳行為——文部省『百科全書』をめぐる——『翻訳研究への招待』7 号、日本通訳翻訳学会、2012 年 3 月、p.15）。

⁷⁰ 菊池、前掲 60、p.32

そして、『海上砲術全書』のような砲術関連の軍需技術書よりも「もっと多かった」と桐敷真次郎が述べた「築城術の本」は、なかでも当時「最も新しく、かつ信頼されたのは、ペルの『下級士官のための築城術教範』二巻（一八五二）」であり、「三種もの邦訳が出ている」ことを指摘している⁷¹。原書はC. M. H. PelのHandleiding tot de kennis der versterkings-kunstであり、その邦訳については菊池重郎が具体的につぎの3種を挙げている（表記は原文ママ）⁷²。

福澤諭吉訳	ペル築城書	安政4年（1857）稿
大鳥圭介訳	築城典 ^{ママ} 刊	万延元年（1860）刊
広瀬元恭訳	築城新法	文久元年（1861）刊

福澤諭吉の訳文は未刊に終わったとされる。広瀬元恭の訳による『築城新法』も不明な点が多いが、国立国会図書館蔵本は1859年に京都の版元・若山屋茂助が刊行したとされる。そして、大鳥圭介の訳書の版元について菊池はふれていないが、『築城典刑』の邦題で初版は縄武館より刊行された[図1-2]。縄武館とは「江川太郎左衛門英龍の功に対して幕府が英龍の子、大郎左衛門鋭敏に与えた砲術演習場、別名江川塾」のことで、同書の「初版刊行当時、大鳥は同館の翻訳担当教官」を務めていた⁷³。その後、大鳥は幕府の陸軍所に勤め、『築城典刑』は「元治元年幕府の陸軍所から再刊され、慶応2年には堡障畧典と解題され、更に明治に入ってから陸軍から重訂堡障畧典と改題復刊され幕末明治初期の基本的築城書」となった⁷⁴。これらの異版の経緯について、以下に整理する（*筆者の補記）。

邦題	版元	刊行年
『築城典刑』	縄武館*	1860（万延元）年
『築城典刑』	陸軍所	1864（元治元）年
『堡障畧典』	兵学校*	1865（慶応元）年
『重訂堡障畧典』	（版元名や刊行年は不明）*	

⁷¹ 桐敷、前掲 61、p.43

⁷² 菊池、前掲 60、p.42

⁷³ 西野嘉章編『歴史の文字——記載・活字・活版』（1996年、東京大学出版会）、p.187

⁷⁴ 菊池、前掲 60、p.42

縄武館は、私塾とはいえ、伊豆菰山代官の江川家の主宰であり、幕府における軍備の西洋化の流れをくんでいる。ゆえに上記の異版による大鳥圭介の訳書は、江戸幕府から明治政府へと受け継がれていったものと認められる。

筆者には実物が確認できていないが、村松貞次郎によれば「幕末にもたらされた建築書のうちオランダの van Storm の本（1863 年刊）が、明治 3 年（1870）陸軍兵学寮から『造営法』『造厩法』の 2 書として一部翻訳出版され、明治初期の兵営建築などの典範として用いられたことは注目される。特に兵営が地方に建てられるにしたがって、地方の工匠に新しい技術を伝播した功績は大きい」とされる⁷⁵。この記述の典拠と考えられる菊池の博士論文には、上記の 2 書の中扉が 2 種類ずつ掲載されている⁷⁶ [図 1-3]。その違いは発行所の名称だけであり、初版刊行時は「兵学寮」、直後の 1870 年 11 月に「陸軍兵学寮」と改称され、双方の名称が記された中扉による刊本の存在が示されている。

このように幕末・明治初期の近代建築書における刊行をいち早く検証した菊池は、「蘭書の訳刊は洋式建築の導入過程として見れば需要の姿として注視される」が、それは軍事技術書としての建築技術書の訳出に限られているため、先述のような「多数の一般建築書の舶載があつたにも拘らず、建築書らしい洋式建築書は幕府・諸藩・民間を通じて一つもない」とした⁷⁷。その一方で、次節で述べる「明治初期について見ると『造営法』『西洋家作ひながた』『法国築営課程』などが訳刊されて」いることから、「洋式建築の導入において少なくとも江戸末期は消極的であり明治初期は積極的であつたと云うことが出来る」と評価した⁷⁸。

しかし、本項でみてきたように、オランダ軍事技術書の訳出による建築技術書は、刊行点数は限定されるが、江戸幕府と明治政府によって刊行が手がけられ、いわば国策にもとづく訳出という共通点を見いだすことができる。ときに『築城典刑』のように異版によって同じ訳文が継承されていった事例も存在していた。これらの観点において、西洋の建築技術書の訳出については、幕末と明治期のあいだに一定の継承性が

⁷⁵ 村松貞次郎「総論 近代日本建築学発達の概観」（日本建築学会編『近代日本建築学発達史』、丸善、1972 年）、p.2

⁷⁶ 菊池、前掲 60、pp.551-552。『造営法』『造厩法』の現存を筆者は確認できていない。

⁷⁷ 菊池、前掲 60、p.41

⁷⁸ 菊池、前掲 60、p.41

認められるのである。

1-2-2 市販の近代建築書への継承

本項では、市販の近代建築書に関する最初期の建築出版活動の特徴について述べる。前項で述べた軍事技術書としての建築技術書の訳出がいわゆる国策の一環とみなすならば、市販書という性質は対照をなすことになる。

市販の近代建築書の動静については、本章の第3節と第4節の起点に相当する1886（明治19）年ごろより刊行が盛んになる傾向が、村松貞次郎らにより早くから指摘されてきた⁷⁹。一方で、その盛期を15年ほどさかのぼる1872（明治5）年には、『西洋家作ひながた』⁸⁰（シー・ブリュス・アルレン著、ウキール・ジョン増補、村田文夫、山田貢一郎訳、著者名の表記は原文ママ [図1-4]）が玉山堂から刊行されている。同書は、東京大学藤森照信研究室による日本の近代建築書リスト（1983年）⁸¹のなかで最も刊行年が早いものであり、「わが国最初の洋風建築書」⁸²として日本近代建築史の最初期の重要文献のひとつに位置づけられ、1950年代の日本近代建築史研究の初期段階より今日に至るまで研究が重ねられてきた⁸³。また、同書は「わが国市販最初の洋

⁷⁹ たとえば村松貞次郎『日本建築技術史』、p.131、地人書館、1959年。

⁸⁰ 表題の表記は、『西洋家作ひながた』と『西洋家作雛形』の双方が既往研究でも用いられてきたが、本研究では国立国会図書館蔵書の玉山堂版の表紙と同館における登録情報にならって『西洋家作ひながた』とした。

⁸¹ 藤森照信（代表研究者）『日本近代建築書の研究』、1982年度科学研究費補助金一般研究（C）研究成果報告書、1983年

⁸² 菊池重郎「明治初期洋風建築技術書「西洋家作ひながた」——1 その原著・訳者・刊本について」（日本建築学会研究報告31-2、p.233、1955年5月）。

⁸³ おもな既往研究を列記する。菊池重郎「明治初期洋風建築技術書「西洋家作ひながた」——1 その原著・訳者・刊本について」（日本建築学会研究報告31-2、pp.233-234、1955年5月）、菊池重郎「明治期洋風建築術書「西洋家作ひながた」——第2報 その刊行の意図と原書との関係について」（日本建築学会研究報告33-2、pp.235-236、1955年10月）、長尾重武「文献《西洋家作雛形》」（『都市住宅』1974年5月、p.76）、丹羽和彦「村田文夫と『西洋家作ひながた』について」（日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠、1999年7月、pp.339-340）、藤田治彦「明治五年刊『西洋家作雛形』の建築用語」（『待兼山論叢33号 美学篇』pp.1-24、1999年）、瀧上貴由樹「『西洋家作ひながた』の住宅室名用語について」（日本建築学会研究報告九州支部、2013年3月、pp.581-584）、本橋仁、中谷礼仁、丸茂友里、根来美和、廣瀬翔太郎「『西洋家作雛形』・『Cottage Building』比較研究1：明治初期日本における救貧行政からみる出版意図の再考察」（日本建築学会大会学術講演梗概集、2015年9月建築歴史・意匠 pp.739-740、以下同書所収）、根来美和、中谷礼仁、本橋仁、丸茂友里、廣瀬翔太郎「『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究2：産業革命後英国における住宅改善の取り組みと本書の位置づけ」（pp.741-742）、廣瀬翔太郎、中谷礼仁「『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究3：西洋建築導入期における技術的語句の意図的な翻訳の工夫」（pp.743-744）、丸茂友里、中谷礼仁、本橋仁、根来美和、廣瀬翔太郎「『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究4：明治初期日本における「建築」概念の

式建築書」⁸⁴（傍点引用者）ともいわれるように、その版元となった玉山堂は、後述のとおり当時の大手書林のひとつである。そこで本項では、『西洋家作ひながた』に関する既往研究の経過とその成果をたどりながら、著者や出版社という情報の担い手の性質に着目することで、市販における日本近代建築出版活動の起点について検討をくわえる。

『西洋家作ひながた』は、明治期の基本文献を集成した『明治文化全集』（明治文化研究会編、1927～1932年）のなかの「第24巻 科学編」（吉野作造編、1930年）にいち早く所収されている⁸⁵。その佐藤功一による解題には「日本に於て最も古く出版せられた建築構造の書物」と紹介されており、刊行から半世紀を越えた当時であって「之を軽く通読しても意味の通じない箇所は殆どないほど此の翻訳は丁寧親切を極めて居る」と訳出の確かさが評価されている⁸⁶。戦後から現在までつづく『西洋家作ひながた』の研究の多くは、この佐藤の評価に端を発している。

菊池重郎は1955年に『西洋家作ひながた』に関する書誌学的な研究を発表し、その邦訳の底本となった原書をはじめ特定したうえで、訳書との関係性を比較した⁸⁷。すなわち原書については、1870年にロンドンで刊行された英国の建築家C.ブルース・アレン（C. Bruce Allen）による『Cottage Building』の第6版⁸⁸であるとし、当時のロンドンの過密な住環境を背景に、郊外における貧困な農業労働者の煉瓦造の小住宅を

美学的観点について」(pp745-746)

⁸⁴ 菊池、前掲 60、p.508

⁸⁵ 「第24巻 科学編」に所収された刊行として、同書の主要目次を引用する。「寫真鏡圖説 ダグロン原著 柳河春三訳（慶應三・四年）／天變地異 小幡篤次郎著（明治元年）／舍密局開講之説 ハラタマ述 三崎嘯輔訳（明治三年）／西洋開拓新説 緒方正訳（明治三年）／西洋家作雛形 シー・プリユス・アルレン著 ジョン・ウキール増補 村田文夫 山田貢一郎共訳（明治五年）／航海夜話 ヘンレイ・ピツチングトン著 西江舎主人訳（明治五年）／防雷鍼略説 明石博高口述 竹岡友仙筆記（明治六年）／農業三事 津田仙撰（明治七年）／物理了案 宇田健齋著（明治十三年）／大森介壺古物編 エドワルド・エス・モールス撰著（明治十三年）／動物進化論 エドワルド・エス・モールス口述 石川千代松筆記（明治十六年）／百工開源 石川千代松著（明治十九年）／腦髓生理 精神啓微 吳秀三著（明治二十二年）／精神病者の書態 吳秀三著（明治二十五年）／蘭疇 窪田昌編（明治三十五年）」

⁸⁶ 佐藤功一「西洋家作雛形解題」（『明治文化全集 第24巻 科学編』吉野作造編、日本評論社、1930年、『佐藤功一全集 第三巻』pp.91-92、1942年）。なお、佐藤は「尤もこの前に明治三年十月に刊行した兵学寮蔵版の『造営法』が紹介されたが、「但し之には構造に関する事は少しも書いていない」とも記している。

⁸⁷ 菊池、前掲 83「明治初期洋風建築技術書「西洋家作ひながた」——1 その原著・訳者・刊本について」および「明治期洋風建築術書「西洋家作ひながた」——第2報 その刊行の意図と原書との関係について」

⁸⁸ *Cottage Building: Hints For Improved Dwellings For The Labouring Classes*, Strahan & Co., London, 1870(6th ed), 1st ed. John Weale, London, 1949.

扱ったものと考察している。これに対して訳出の経緯としては、1872年2月（旧暦）の銀座大火後に興隆した都市の不燃化をめざす機運のなかで、煉瓦造建築の推進に役立てようとした訳者の企図をその序文から菊池は読み取っている。そして「当時にあつては煉瓦造建築の更に基礎的などちらかと云えば教科書的な書物が要求されたに違いない」と述べたうえで、訳出対象の「選択は必ずしも適切であつたとは云えない」と評した⁸⁹。

これに対し早稲田大学中谷礼仁研究室では、『西洋家作ひながた』と『Cottage Building』に関してより詳細な比較研究を2012年度から継続的に取り組んでいる⁹⁰。中谷らは、銀座大火による罹災貧困者の救済と同書の啓蒙書的な性質の関係性を指摘し、当時の日本では理解が困難だった西洋建築における美学的な観点の訳出は意図的に割愛され、日本に適用可能な技術的な項目に訳出が絞られていること、当時の日本に類例のない用語の訳語には原語の読みがたと訳者の補足説明などを併記されていることなどから、訳出の適正とその意図を再評価している⁹¹。

こうした邦訳を行った訳者の村田文夫と山田貢一郎の人物像については、菊池と中谷らとともに、丹羽和彦も追跡している⁹²。村田文夫（1836-1891）は芸州藩医の家に生まれ、漢学を修めたうえで緒方洪庵門下で蘭学を学び、幕末に英国へ出奔し、維新後に帰国した。そして藩候洋学教授となって『西洋見聞録』（井筒屋勝次郎刊、1869年）⁹³を著し、内務省や工部省へ出仕したのち、1877年に「団々社」を興して風刺雑誌『団々珍聞』や『驥尾団子』を創刊した。ジャーナリストとして成功してからは、自由民権運動に奔走した政治活動家として名を残している。訳書に『子供育草』（汪彫楼、1873年）、『官吏選挙法』（玉山堂、1876年）、『輿地新図』（稲田佐兵衛刊、1894年）が挙げられている。一方の山田貢一郎の人物像は、これまで明らかにされていない。その生没年は不詳で、1869年には村田のもとで洋学教授を務めていたとされる。

⁸⁹ 菊池、前掲 83 「明治期洋風建築術書「西洋家作ひながた」——第2報 その刊行の意図と原書との関係について」、p.236

⁹⁰ 第一回の報告として、2015年度日本建築学会大会にて前掲 83 『西洋家作雛形』・『Cottage Building』比較研究1~4」の4編の論考が発表された。

⁹¹ 丸茂ほか、前掲 83 『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究4：明治初期日本における「建築」概念の美学的観点について」

⁹² いずれも前掲 83、菊池「明治初期洋風建築技術書「西洋家作ひながた」——1.その原著・訳者・刊本について」、丹羽和彦「村田文夫と『西洋家作ひながた』について」、本橋ほか「『西洋家作雛形』・『Cottage Building』比較研究1：明治初期日本における救貧行政からみる出版意図の再考察」

⁹³ 「明治文化研究会編：『明治文化全集 第17巻』、日本評論社（1992）ISBN 4535042578」に収録）

村田の経歴に関して『西洋家作ひながた』との接点で注目されるのは、同書の刊行が工部省の在籍期間と重なることにある。丹羽によれば、同書刊行2年前の1870（明治3）年に民部省へ出仕して中央官庁の役人となり、翌年8月に「設立間もない工部省へ移り（七等出仕）、工学権助、工学助兼測量正（明治6）、測量正（明治7）」を務め、「英国滞在を経て培ったその力を所属した政府機関に関連する翻訳等の業務に生かした」とし、村田と「工部省が接したわずかな一点から、我々は『ひながた』という遺産を得ることとなった」と述べている⁹⁴。そして中谷らは、1872年の銀座大火に対して「当時工部省工部大丞であった佐野常民は、工部省御雇い外人の技術者たちに、東京の罹災地の再建を如何にするべきかの意見を求めていた」ことを指摘している⁹⁵。さらに、当時の社会的な関心が耐火とともに貧民層の救済にも注がれており、『西洋家作ひながた』の邦訳は銀座大火前より準備されていた可能性が高く、「明治初期の日本における救貧行政の側面」がみられるとも述べている⁹⁶。

つまり、『西洋家作ひながた』の刊行は、語学に堪能な専門家や研究者などによる個人的かつ啓蒙的な邦訳行為というよりも、明治初期の社会情勢をうけた政府の政策に則した訳出の性格が強かったものと考えられる。

一方で『西洋家作ひながた』の版元となった玉山堂については、菊池が書誌研究書を参照しながら「云うまでもなく、玉山堂は山城屋佐兵衛」⁹⁷と述べているほかは、具体的な論考は現時点で見当たらない⁹⁸。『西洋家作ひながた』は中扉に「東京 玉山堂発兌」と掲げられ、奥付には「日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛」と記されている⁹⁹。江戸期以来の大手書物問屋である玉山堂は「山城屋 稲田佐兵衛」の名でも知られており、「日本橋通二丁目」に位置していたことから、両者は同一の書林であることがあらためて確認できる。玉山堂は、たとえば1824（文政7）年刊行の『江戸買物独案内』

⁹⁴ 丹羽、前掲83「村田文夫と『西洋家作ひながた』について」、p.340

⁹⁵ 本橋ほか、前掲83『『西洋家作雛形』・『Cottage Building』比較研究1：明治初期日本における救貧行政からみる出版意図の再考察」、p.740

⁹⁶ 前掲95に同じ。

⁹⁷ 菊池重郎が参照したのは「天野敬太郎編：本邦の書誌、昭和8年刊」とあるが、これは天野敬太郎『本邦書誌ノ書誌』（間宮書店、1933年）のことと考えられる（菊池、前掲83「明治期洋風建築術書「西洋家作ひながた」——第2報 その刊行の意図と原書との関係について」、p.236）。

⁹⁸ 中谷礼仁らは須原屋などの雛形書の書林についての研究を重ねており、玉山堂についてもいずれ何らかの知見が示されるものと考えられる。

⁹⁹ 国立国会図書館蔵本による。

(大阪・中川芳山堂)では江戸の書物問屋のひとつとして掲載されており¹⁰⁰、明治初期の書林のなかでは「東京中で一番売れた店」とする証言も残されている¹⁰¹。つまり玉山堂は、少なくとも江戸後期から明治初期にかけては、江戸・東京における最大手の書林のひとつだったと考えられる。

そして、時代はやや下るが、1886(明治19)年1月改正の「玉山堂出版書目録」¹⁰²によって、同社全体での取扱テーマおよび同社における建築書全体の概況を見て取ることができる。同目録は「漢籍之部」「兵書及軍談書之部」など合計21部門に分けられており¹⁰³、「雛形書之部」はその17番目に登場する。「雛形書之部」には合計41点の刊行物が掲載されており、その筆頭に『西洋家作ひながた』は掲げられている[図1-5]。「雛形書之部」のほかの刊行物については、国会図書館の所蔵などにも確認できず実在が不明だが、「玉山堂出版書目録」に記された書名だけで内容を類推すれば、『大匠雛形』(鈴木勘右衛門、本林重之介著)や『新選絵様 建具雛形』(宮城呂成著)など、『西洋家作ひながた』以外のすべての建築書は近世以来の大工雛形書だったとみなすことができる。

これらから『西洋家作ひながた』は、江戸期からつづく大手書林の玉山堂が従来より刊行してきた大工雛形書の延長線上の出版活動として、西洋建築の雛形書を刊行物したものと考えられる。つまり同書は、維新政府の方針にもとづく邦訳を江戸期以来の書林が刊行を担ったものであり、いわば和魂洋才型の性格をもつ訳出であったことが指摘できる。

これにつづく近代建築書の刊行は、中谷らが「10年の開きがある」と述べているよ

¹⁰⁰ 国立国会図書館蔵本『江戸買物独案内』(1824年)の「ほんや」の項では、書物問屋41軒、地本問屋18軒が名を連ねており、書物問屋の筆頭は須原屋茂兵衛、玉山堂は17番目に掲載されている。

¹⁰¹ 今田洋三によれば「浅倉久兵衛(元禄以来の書物屋)」の明治初期の記述として、「山佐(山城屋稲田佐兵衛)——通二丁目。須原屋の近く、立派な店土蔵、三人の番頭が帳場に控えてみました。私ども先代の話では、東京中で一番売れた店で、市などの買高では他の全部の店を纏めただけと釣合つたと言ひます」(今田『江戸の本屋さん——近世文化史の側面』p.209、平凡社ライブラリー、2009年(初版:日本放送協会、1977年))

¹⁰² 国文学研究資料館電子資料館「近代書誌・近代画像データベース」、2017年9月7日、最終アクセス2017年9月19日、<http://school.nijl.ac.jp/kindai/NIJL/NIJL-01105.html>

¹⁰³ 目次の順では「旧官版之部、漢籍之部、歴史之部、兵書及軍談書之部、詩文集之部、用文章及作文書之部、国書之部、歌俳諧之部、画学書之部、地誌之部、諸家墨帖及習字帖之部、辞書之部、医書之部、修身書之部、算術書之部、雑之部、雛形書之部、碁経之部、将棋経之部、家相方位書之部、易及相学書之類」となる。

うに¹⁰⁴、1882（明治 15）年に文部省の邦訳と刊行で訳出された『百科全書』のなかの一遍である「建築学」となる¹⁰⁵ [図 1-6]。『百科全書』の「建築学」については、菊池によれば「明治工業史建築編もこの書には全くふれていない」ほど「世人の耳目から遠ざか」っていたが、1931 年の「建築学会の明治建築座談会席上曾根達蔵博士は建築の書籍に『建築学』という書名を冠したわが国最初の書として本書を学界に紹介され、再び『建築学』は人の知るところとなつた」という¹⁰⁶。菊池はその成立過程をつぎのようにまとめている。

1. 『百科全書』は、1871（明治 4）年に文部省の編集寮において、箕作麟祥（1846～1897 年）の主導による邦訳で着手された。
2. 文部省による分冊形式の刊行は、1873 年から 1883 年にわたり、最初の刊行は箕作訳「教導説」（1873 年 9 月）であった。1882 年刊行の「建築学」を訳した関藤成緒は「文部省系の当時の英学者であつて建築関係者ではない」¹⁰⁷。
3. 箕作麟祥の専門はフランス法学であり、当時の「官学教授職の最高位にあつた洋学者」で、「かつては日本最初の英和辞書『英和对訳袖珍辞書』編纂協力者」であった。
4. 『百科全書』の原書は「William & Robert Chambers の Information for the People の 1858 年第 4 版」であった。
5. 『百科全書』の刊行は「翻刻市販」が許されており、有隣堂が 1883 年から 1886 年ごろにかけて市販版を刊行した。一方で丸善は、原書の底本を 1874 年刊行の第 5 版とし、建築編の邦題を「造家法」（大鳥圭介校閲、都築直吉訳）と変えて 1884 年に刊行した。

¹⁰⁴ 丸茂ほか、前掲 83 『『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究 4：明治初期日本における「建築」概念の美学的観点について』、p.745

¹⁰⁵ 1984 年に青史社から復刻刊行された。なお、同書初版と同じ 1882 年に刊行された『工匠用字類』（宮地高里、金港堂）は、建築・土木をはじめとする工匠が用いる言葉の読みだけをつづった用語集であり、「塹、濠、堀（ホリ）」から「暖炉（ヘヤヌクメ、ダンロ、ストーブ）」まで幅広く扱っている。

¹⁰⁶ 菊池重郎「文部省における「百科全書」刊行の経緯について——文部省刊行の百科全書「建築学」に関する研究・その 1」（日本建築学会論文報告集 61 号、pp.112-119、1959 年 3 月）。ほかに、松永文雄『我が国における中等建築教育の確立に関する基礎的研究——大正末、昭和初期の文部省内と建築学会の検討活動を通じて』（九州大学博士論文、私家版、2008 年）では、丸善版の「造家法」について取り上げている（p.16）

¹⁰⁷ 菊池、前掲 60、p.543

なお、「William & Robert Chambers」は英国の出版社名であり、『百科全書』全体については多くの先行研究が存在する¹⁰⁸。明治初期における書籍全般の出版事情としては「出版印刷がまず政府自らの手で行われ、各省また盛んに出版活動を行いその大半が文部省であった」¹⁰⁹こと、その「文部省の差し迫った任務は教科書などの編纂」¹¹⁰だったことが大きな社会的背景として指摘できる。そうしたなかで『百科全書』は、文部省主導で実施された「国家的翻訳プロジェクト」¹¹¹であり、その一編である「建築学」は維新政府の初期政策の申し子だったともいえる。菊池重郎も、こうした明治初期における建築書の刊行を「明治政府の官版」と評している¹¹²。

丸善版『百科全書』の「造家法」は、明治初年に創業¹¹³した気鋭の民間出版社による独自の訳出という側面も認められるが、文部省の訳出の影響は否めないであろうし、校閲者の大鳥は当時、工部大学校校長の任にあり、工部省工学頭、工部技監という明治政府の工学教育の最高責任者だったことから¹¹⁴、国の政策の方針に連なっていたものといえる。それは、先述の『西洋家作ひながた』が工部省の方針による邦訳を、江戸期以来の書林が版元となった経緯とも重なる。

以上のことから、わが国の市販の近代建築書は、その最初期においては軍事技術書の建築技術書と同じく、政府の方針に則った官版の訳出としての性質が色濃いことを指摘でき、版元としては江戸以来の老舗や維新後の新興出版社の双方が担っていたことが確認できた。それは、1879（明治12）年に工部大学校造家学科の第一回卒業生が世に送られ、1886年に造家学会が創立する以前の、わが国の建築界における情報伝播の実情の一端を示している。

¹⁰⁸ たとえば長沼美香子「開化啓蒙期の翻訳行為——文部省『百科全書』をめぐる」（『翻訳研究への招待』7号、pp.13-39、日本通訳翻訳学会、2012年3月）には、『百科全書』をめぐる先行研究の経緯などもまとめられている。

¹⁰⁹ 杉村武『近代日本大出版事業史』（出版ニュース社、1967年）、p.93

¹¹⁰ 長沼美香子「開化啓蒙期の翻訳行為——文部省『百科全書』をめぐる」（『翻訳研究への招待』7号、日本通訳翻訳学会、2012年3月）、p.15

¹¹¹ 長沼、前掲110、p.37

¹¹² 菊池、前掲60、pp.506-508

¹¹³ 丸善の創業は、旧暦明治2年1月1日（新暦1869年2月11日）とされる。

¹¹⁴ 松永、前掲106、p.16

第3節 建築系学協会による会誌 1886年～

1-3-1 造家学会による『建築雑誌』

本節と次節の起点となる1886(明治19)年は、造家学会(現・日本建築学会)の創立年および書籍『造家必携』(ジョサイヤ・コンドル口述〔著〕、松田周次、曾禰達蔵筆記〔訳〕、加藤良吉刊)の刊行年による。前者の会誌『建築雑誌』の創刊は、翌年の1887年1月となるが、編集などの出版活動は1886年から進められていたと考えられるとともに、造家学会創立時の規約には「第八章 雑誌刊行」が定められている。よって後者とともに、わが国において近代建築教育を受けた建築家による公刊物の建築出版活動の幕開けとして、1886年を起点と定めた。本項では前者、つまり最初期の建築誌としての建築系学協会による会誌について、次節では後者、つまり『造家必携』をはじめとする市販の建築図書について、いずれもその出版組織や編集者・出版人などの関係者の特徴に注目しながら検証していく。

『建築雑誌』の創刊経緯については、その発行元である造家学会の歴史とともに、周年記念事業などの刊行物において繰り返し叙述されてきた。たとえば『日本建築学会百年史(1886～1985)』(日本建築学会編、丸善、1990年)や『近代日本建築学発達史』(日本建築学会編、丸善、1972年)がよく知られている。とくに後者は、同学会の創立80周年記念事業として幕末以降の建築学に関する史料が斯界の総力をあげて集成されており、『建築雑誌』についても重要記事の多くが抄録されていることから、同誌の歩みをたどることができる。

そして『建築雑誌』の歴史そのものに焦点をあてた文献としては、同誌で発表されたふたつの記事に代表されるといってよい。ひとつめは特集「1000号記念」(no.1000、1968年8月号)における高杉造酒太郎の論考と山口廣による年表、ふたつめは青井哲人による連載「『建築雑誌』アーカイブス」(2002年1月号～2003年12月号)である。高杉造酒太郎は、1926年に学会書記となって戦後は事務局長などを務め、その長きにわたる学会運営の知見をもとに論考「『建築雑誌』の歩みと変せん」をまとめた。建築史家・山口廣による年表「建築雑誌1000号の歩み(明治20年～昭和43年)」は、記事や編集員の変遷からレイアウトや発行部数などの推移に至るまでのトピックスが14頁にわたって抽出されている。これらの一連の研究成果をふまえた建築史家・青井哲人による連載「『建築雑誌』アーカイブス」は、全24回が各回2頁で構成され、記

事のトピックスから編集上の特徴などを抑えた“『建築雑誌』史”といえる。各回のタイトルは、青井のまとめた“『建築雑誌』史”のトピックスを示すと考えられるため、以下に列挙する。

青井哲人 連載「『建築雑誌』アーカイブス」(『建築雑誌』2002年1月号～2003年12月号)

第1回	アジア	第12回	『工学会誌』のなかの〈造家〉
第2回	誌名——造家学会と『建築雑誌』	第13回	住宅調査
第3回	危機と統計——建築産業への眼差しの一端	第14回	近代都市計画の受容
第4回	表紙	第15回	明治建築
第5回	1945	第16回	江戸への距離
第6回	火事と地震の明治	第17回	中村達太郎と初期の会誌編集
第7回	辰野金吾の街	第18回	防空建築学
第8回	関東大震災	第19回	大東亜の建築論
第9回	グラフ	第20回	特集主義
第10回	建築設計資料集成	第21回	『建築雑誌』はジャーナリズムか
第11回	昭和10年の会誌改革	第22回	読者の声——変わらぬ複層性
		第23回	『建築雑誌』をめぐる文献
		第24回	『建築雑誌』年表

本項では、高杉、山口、青井による論考の成果にもとづきながら、『建築雑誌』をめぐる建築出版活動の特徴について述べる。

同誌の草創期の中心人物としては、創刊時の編集員として中村達太郎と滝大吉の存在に注目されてきたが、とくに中村については「助走から離陸までをけん引した最大のエンジン」が中村だったと青井は前述の連載第17回¹¹⁵のなかで脚光を当てている。「中村が一冊まるごと書いた」号あるいはそれに近い号は相当数にのぼったことを指摘し、「最初の数年間の会誌編集をめぐる事情は、おそろしく壮絶であった」とする。そこには、中村自身がのちに創刊時を振り返った座談会の発言が引用されている。

¹¹⁵ 青井哲人「中村達太郎と初期の会誌編集」(『建築雑誌』アーカイブス、第17回、『建築雑誌』2003年5月号、pp.154-155)

中村 ……其時分には建築実物の参考物も殆ど無い位に近い少い数でありますし、建物ばかりでない総てのものがまあ貧弱で、例に採ろうと云うようなものがま少ないと云う訳でありまして、従て此建築雑誌の原稿を寄せ集めるのも仲々困難であつた……それはまあ仕方ないし詰らない原稿を色んな名で、名を変えちゃ出して居った……

「建築学会創立 50 周年記念号回顧座談会 第 1 回座談会」

(『建築雑誌』1936 年 10 月号、p.101)

中村の編集員の任期は、創刊前年の 1886 年から 1903 年までの一時の離任期をはさんで合計 13 年にも及んだ。それにつづく伊東忠太と大澤三之助が 7 年、滝大吉が 6 年余と半分ほどとなり、中村の編集員としての貢献度は突出していた。さらに執筆した記事の数でみると、中村達太郎の記名記事が 1 年あたり 20 本強、略名やペンネームをふくめると雑報以外でもその 3 倍以上に達したものと青井は推定している。

また、中村が獅子奮迅の活躍をみせた『建築雑誌』の草創期について、創刊から「早くも 2~3 年のうちに、メディアとしての複層的、立体的な展開」をみせたことに青井は連載第 12 回¹¹⁶のなかで注目している。それは「『建築雑誌』前史」としての『工学会誌』に遡って検証された。工学会は 1879 (明治 12) 年に工部大学校の最初の卒業生 23 名によって設立され、翌 1880 年 6 月に会誌『工学叢誌』が創刊されている (1884 年 1 月号で『工学会誌』へ改題)。青井の分析によれば、造家学科の出身者による同誌への寄稿は、『建築雑誌』創刊を境に落ち込みが歴然とし、『建築雑誌』の創刊当初は「体裁・内容ともに、“『工学会誌』のなかの造家”が場所を変えて連続しているような印象」だという。こうした『工学会誌』からの移行期における『建築雑誌』は、「学士院=アカデミー」を志向する工学会の性質にもとづいて、「都市建築の煉瓦造・石造への移行に関する技術的問題群」が記事の軸に据えられていた。

しかし、『建築雑誌』の創刊 2 年後の 1889 年には早くも編集方針が転換され、中堅技術者層を意識した記事の設置がうたわれたことについて、青井は連載第 2 回¹¹⁷のな

¹¹⁶ 青井哲人「『工学会誌』のなかの〈造家〉」(『建築雑誌』アーカイブス、第 12 回、『建築雑誌』2002 年 12 月号、pp.146-147)

¹¹⁷ 青井哲人「誌名——造家学会と『建築雑誌』」(『建築雑誌』アーカイブス、第 2 回、『建築雑誌』2002 年 2 月号、pp.168-169)

かで注目している。それは、工部大学校を卒業した学士建築家（技師）の設計や意思を、建設現場で職人層に伝えて施工を管理する中堅技術者（技手）の養成のために、1887年に工手学校（現・工学院大学）が設立され、同校の造家学科から卒業生が輩出されようとするときであった。彼らは造家学会では準員として取り込まれ、1889年当時の同学会会員数500名あまりのうち約8割が準員で占められていたという。同年の会誌改良では、学士を中心とした正員たちによる「平易ノ文」と「講義体」の解説による啓蒙的な記事が準員向けに設置されるようになった。それは「マジョリティとしての中堅技術者層を積極的に抱え込むことで自己規定をとげようとしていた」同学会の姿勢の表れとも青井は指摘する。また、中村達太郎は工手学校で教鞭をとるなど中堅技術者の養成に携わったほか、古今東西の建設現場の用語を収集した『日本建築辞彙』（1906年、丸善）などの著作でも知られているが、そのような人物が初期の『建築雑誌』を支えたことに「重い意味」を有していると青井は述べる。増えゆく準員への配慮という観点でも、中村は最適の人材だったといえるだろう。さらに、造家学会設立の翌年に創刊された会誌名が『建築雑誌』となった背景については、同誌1997年8月号の特集「建築学会改名100年」の論考をふまえつつ、幕末の造語である「造家」は基本的に工部大学校でしか用いられていなかった特殊な用語、つまり工部大学校を基盤とする工学会の系統にあたる用語であり、建設一般を意味するようになっていく「建築」を会誌名に冠したのは『工学会誌』の一分冊とみなされまいとする造家学科卒業生にとって、工学会からの独立心の強い意思表示だったとも青井は指摘する。

そうした同誌の創刊時における実務の体勢については、高杉造酒太郎がその論考で触れている。創刊号の奥付では、造家学会は「事務所」として表記され、発行所は「芝区露月町十八番地 米倉屋」、発行人兼編集人は滝大吉、印刷人は金田次左衛門とされた。高杉によれば「米倉屋は印刷屋で、金田は雑誌の配達人兼会費集金人として雇用された月手当2円の小使いであった」とされ、その背景には当時の出版検閲制度による名義人の処罰逃れのための「身代わり名義人は端役の者がさせられる慣わし」があったことを述べている。また、同誌創刊のころに会誌業務の錯雑さを懸念した中村達太郎から職員の雇用が提案され、辰野金吾副会長と同郷の準員檜橋健三郎を月5円で書記として雇ったとされる。山口廣の年表では「編集助手」と記された檜橋は、高杉によれば「他に定職をもっていたらしく、麴町永田町に3間位の家を構えていた。学会も居所定まらずのときだった」ため1888（明治21）年1月に「檜橋宅に事務所を置

かせてもらい、34年夏まで13年も居候をきめこみ、会合などを開かせて貰った」という。こうした記述からも、同学会の運営や会誌編集の活動が正員有志たちのいわゆる手弁当によっていたことが読みとれる。

以上の経緯にみられる『建築雑誌』の草創期の編集・出版活動は、工部大学校造家学科卒業生たちによるアカデミックな情報交換を目的とした『工学会誌』の方針からは早々に転換され、中堅技術者層への建築知識の啓蒙活動へと舵が切られていった。そこには中村達太郎を中心とした啓蒙意識の高い正員たちによる献身的な活動によって会誌が成り立っていったことが示されている。しかし、山口や青井が指摘するように、そうした啓蒙的な記事はやがて減じていき、正員たちを中心とした学術研究の性質が色濃くなっていった。

こうした『建築雑誌』の編集方針をたどるために、やや時代を下ることとなるが、昭和戦前期までの同誌のおもなトピックスについて、高杉、山口と青井による研究成果をもとに述べる。3者はいずれも建築書に不可欠な図面や写真について取り上げている。図版の掲載は創刊の準備段階より協議されていた議事が残り、実際に創刊号には片山東熊設計の北京公使館の外観が銅版画で掲載された。その2年半後の1890年7月号に写真がはじめて登場し、辰野金吾設計の渋沢邸の外観・内観写真が1枚ずつ掲載された。1号あけて9月号と10月号にも辰野設計の帝国大学工科大学がつづけて掲載され、以後は「巻末竣工建築」欄で写真の掲載が恒例とされていった。やがて1930年代に入ると、『国際建築』や『新建築』などの市販誌との競合関係もあって『建築雑誌』のヴィジュアル化が促進され、欧米の建築誌から写真を集めた臨時増刊号『建築グラフ』（1932～1936年）へと結実された。年刊形式で計5冊が刊行された各号はアート紙が用いられ、1937年8月号からは本誌に同様のページが登場し、その次号より「海外建築グラフ」として常設欄となった。

こうした『建築雑誌』の誌面の変化は、昭和期に入ってからが顕著とされる。とくに1930年に全編が横組みとなったのは、数式を用いる論文への適用が主目的とされた。また、1935年に会誌改革が学会内で集中的に議論された結果として、前述の臨時増刊号『建築グラフ』のほかに、1936年に論文集が別立てとして年4回刊行されるようになった（当初『建築学会論文集』）。それは、会誌が研究論文発表の場としての性格を強めていったことへの批判に対し、学術研究を分離・独立させることで解決が図られたかたちとなる。また、1936年に連載「建築統計資料」がはじまり、その年間報告と

なる『建築年鑑』が1938年から刊行されるに至っている。1937年11月号からは巻末付録「建築設計資料集成」の掲載がはじまり、そこから35年を経た1972年になって同名書籍が刊行されるに至った。こうした展開について青井は、『建築雑誌』の諸機能がいくつかの刊行物に分配され、会誌としての役割が純化されるプロセスであったと述べている¹¹⁸。さらに青井は、1978年から1983年にかけて改訂された『建築設計資料集成』のまとめ役となった内田祥哉の発言をもとに、以下のようにまとめている。

……ちなみに内田祥哉氏はこう強調する。『集成』の編集・執筆は、それに携わる個人にとっては労多くして報い少ない仕事である、しかし、学会という稀有な回路は、不思議と報いなき労をたくさん集めることができる、と。これを自嘲や皮肉のみと受け取る必要はないだろう。

青井哲人「建築設計資料集成」（『建築雑誌』アーカイブス、第10回、
『建築雑誌』2002年10月号、p.113）¹¹⁹

そうしたヴォランティアな精神にもとづく編集・執筆行為は、青井が指摘した「建築設計資料集成」とどまらず、『建築雑誌』の編集業務全般に共通する性質とも考えられる。同誌の創刊期に八面六臂の活躍をみせた中村達太郎は、まさにその象徴といえる。それは近代日本の建築出版活動の総体にもあてはまることといえる。建築書の著者のほぼ全員が、建築設計や建築関連の教職などの本業をもちながら編集・執筆活動を行う動機と精神を、造家学会誌の創刊経緯は示してもいる。

1-3-2 浪和会による『建築』

『建築雑誌』がわが国初の建築誌であるに対し、草創期の建築誌のなかで同誌との比較事例として対照的に語られてきたのが浪和会の会誌『建築』である。浪和会と同誌

¹¹⁸ 青井哲人「昭和10年の会誌改革」（『建築雑誌』アーカイブス、第11回、『建築雑誌』2002年11月号、p.113）

¹¹⁹ 内田祥哉自身はつぎのように発言している。「この前の資料修正についても、労多くして報いが少なかったと言ってらっしゃる執筆者の方がたくさんいました。……今回はそういう発言が残らないようにしようと思って学会や丸善とも、その点はぜひぶん話し合ったつもりです。けれど……。結局、皆さん、やってくださってしまうんです。……これは、学会のせいというよりも、皆さんのボランティアで、奉仕することが何か社会に還元する。逆にいうと、資料修正が社会に還元しなければ罪だし、還元することで、やってくださった方に、満足していただけることになるんじゃないか。」（内田祥哉、林昌二、伊藤誠、沖種郎、鈴木成文、渡辺健一、木野修造「座談会 資料集成の世界」、『建築雑誌』1985年5月号、p.15）

については河東義之の論考にくわしく¹²⁰、本項ではその記述にそってその建築出版活動としての特徴を確認する。

河東によれば、浪和会は1891（明治24）年4月に「建築に従事せるもの数名相謀り互いに斯道研究の為め参考図集の交換を目的として」結成され、1896年1月より「更に広く会員を募集し一定の規則の下に定期頒布の道を取」って会則と会名が定まり、正式に発足したという。その名称は、発起人である中村喜太郎、宮崎辰次郎、渡辺福三の名頭をとって「なみわ」とされた。この3名のうち河東が出自にふれているのは渡辺である。工部大学校造家学科2期生であり初代帝国ホテルなどの設計者で知られる渡辺讓の弟とされ、もうひとりの弟・録造も浪和会の一員として紹介されている。ほかに同会の初期からの中心メンバーは、東京商業学校付属商工徒弟講習所や工手学校の第1期生などからなり、唯一の工学士として眞水英夫（帝国大学工科大学造家学科1892年卒、第12期生）が指導的な立場で参画していた。彼らの全員が造家学会の会員でもあり、眞水以外はみな準員であったことから、河東は浪和会を「当時日本に於てようやく出現し始めた現場の中堅技術者達によって、公的な造家学会とは別に、独自に結成された団体と言えるだろう」と指摘し、「自分達の知識の向上が先決であった」と述べている。

会誌『建築』は、1900（明治33）年に創刊され、1918（大正7）年ごろまで刊行されたものと推定されている。1907年に建築世界社より『建築世界』が創刊されるまでは、建築学会の『建築雑誌』を除く唯一の建築誌として会員頒布の形式で刊行されていた。『建築』の誌面の変遷について河東がたどったところによれば、創刊当初は「参考図集の交換」時代の延長線上で、図面と写真に広告が数頁ほどつく各号10頁程度だったが、創刊翌年の第17号（1901年6月）から記事が付けられ、第48号（1904年1月）から記事が大幅に拡張された。同号では「建築界の思潮」と「室内の装飾」や「庭園のことはいふに及ばず建築をユニットとして起る彫刻・絵画等芸術上のこと」の掲載をめざすことがうたわれ、武田五一や鈴木貞次、岡本鑿太郎らが編集に参画するようになった。清水組の技師長だった岡本は、1914年まで編集の中心的な役割を担い、岡本によって中流住宅が同誌の主題とされていったことを河東は指摘する。

さらに第175号（1914年10月）より岡田信一郎、中村伝治、松井貴太郎が横河工

¹²⁰ 河東義之「雑誌『建築』と浪和会について」（日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、47巻、pp.1383-1384、1972年）、河東義之「文献《建築》」（『都市住宅』1974年5月、pp.76-77）

務所で編集にあたるようになり、「岡田の建築論、中村の現場技術、松井の建築評論」と横河工務所の現場図面が誌面を特徴づけていったとされる。そして1917年6月ごろと河東が推定する第200号から刊行が不定期となり、翌1918年の第202・203合併号以降の刊行が確認できないとされる。この間の浪和会による特徴的な刊行物としては、「別誌『家』」（1905年ごろから3～4集）の刊行、第200号記念号で伊東忠太や佐野利器ら「一流建築家25名」が論じた特集「将来の建築」を河東は挙げている。つづけて河東は、浪和会と会誌『建築』の意義について「現場の中堅技術者達に実利的な知識を与え、合わせて建築家としての自覚をうながし」、「中流住宅を中心とした内容は、大正初期の住宅雑誌の先駆けとなるもの」とし、市販の建築誌の増加と全国建築士会（1914年設立、現・日本建築家協会）と関西建築協会（1917年設立、現・日本建築協会）などの設立が『建築』及び浪和会の存在意義を弱めていったことを指摘した。

こうした河東の考察に対し、本項では同会と同誌の出版活動としての特徴を2点ほどつけ加えておきたい。第一としては、会誌創刊にあたって1899年12月に改訂された会則第3条をみると、「毎月一回建築ヲ発刊シ是レヲ会員ニ頒布ス右ニ対シ質問アラバ明瞭ニ其主趣ヲ事務所ニ照会スベシ本会ハ其答弁ヲ怠ラザルヘシ」とされ、いわば通信教育のような機能を企図していたものと考えられる。実際に、創刊年の1900年10月号らは読者との「問答」が展開されていることが確認できる¹²¹。

第二としては、創刊時期の奥付に記された人物についてである。事務所兼発行所は「東京市麹町区麹町二丁目三番地 浪和会」とされ、発行人は「同所 渡邊録造」、編集人が「松山諫」、印刷所兼印刷人は「京橋区銀座三丁目十六番地 浅野芳造」とされ、同一の表記は筆者が確認できた範囲では第49号（1904年2月）まで変化がみられない。渡邊録造は前述したように渡辺讓の弟であり、その自宅とみられる住所に浪和会の事務所が置かれていたものと考えられる。松山諫は、河東によれば、やはり同会の発足メンバーのひとりであり、東京商業学校付属商工徒弟講習所の第1期生とされる。印刷人の浅野芳造は、現時点で人物像は不明である。たとえば一定規模の印刷所や書林ならば、なんらかの刊行物に印刷者や発行者として記録されていることが多いが、その形跡は確認できない。よって浪和会の会誌『建築』の創刊については、当時の有力な印刷所や書林を得ていなかったものと推定される。

¹²¹ 第9号（1900年10月）に「質問」、つぎの第10号（1900年11月）に「答」が掲載され、以後第12号（1901年1月）から「問答」欄が定着した。

浪和会の建築出版活動は、河東が述べた『参考図集の交換』時代の延長線上」に自主的な刊行が学士ではない中堅技術者によって開始されたが、やがて岡本鑒太郎ら学士建築家たちへと引き継がれ、18年もの長期にわたって刊行がつづいた。同会の出版活動は、図集の交換から市販誌の刊行へと移行していった、建築家たちによる建築書への関与の形式が転換する過程を示しているとともに、市販の建築誌が隆盛を迎える1910年代までの橋渡し役、もしくは建築家たちの啓蒙・向学心の受け皿となっていたとも考えられる。

第4節 建築図書出版社による市販図書 1893年～

1-4-1 建築家による講義録

第2節第2項でみた市販の建築図書のはじまりは、版元としては江戸以来の老舗や維新後の新興出版社の双方が担っていたものの、刊行趣旨をたどっていくと政府の方針に則った官版の訳出としての性質が色濃いことを指摘した。本節の起点は、『造家必携』（ジョサイヤ・コンドル口述〔著〕、松田周次、曾禰達蔵筆記〔訳〕、加藤良吉刊）が刊行された1886年となる。このころの建築図書として先行研究で繰り返し取り上げられてきたのは、『建築学階梯』（中村達太郎著、上・中・下・続、米倉屋書店、1888～90年）、『建築学講義録』（滝大吉著、私家版、1889年、建築書院、1896年ごろ）、『和洋改良 大建築学』（三橋四郎著、上・中・下・続、大倉書店1904～11年）といった建築家の講義録に代表される。これらは第2節にみられた洋書の邦訳出版ではなく、オリジナルの原稿を刊行したことに大きな変化が認められる。そして、滝の『建築学講義録』を市販した出版社である建築書院の名前に示されているように、建築図書を主体とした出版社が生成したことも特記できる。

これらの建築図書に関するおもな先行研究としては、この時期の「公刊建築書」を丸茂友里・中谷礼仁らが抽出し〔表1-7〕、さらに各書の相互関係を検証している〔図1-7〕¹²²。また、堀口甚吉は建築家の著述活動の業績、あるいは建築講義録の発達として考察しており¹²³、松永文雄は建築教育史研究の一環として建築学の教科書を取り上げている¹²⁴。本項では、こうした先行研究の成果をふまえながら、1886年以降の建築図書について、とくに建築家による講義録を刊行した版元の性質に着目しながらその特徴を検証していく。

ジョサイヤ・コンドルの口述による『造家必携』は、工部大学校造家学科において

¹²² 丸茂ほか、前掲83『『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究4：明治初期日本における「建築」概念の美学的観点について』

¹²³ 堀口甚吉による建築図書に関する研究は、以下のような論考に代表され、いずれも『近代建築史論』（堀口甚吉論集刊行会、1984年）に所収されている。「下田菊太郎氏著欧米建築（明治22年6月出版）について」（日本建築学会論文報告集、第89号、p.485、1963年）、「滝大吉氏の建築家としての業績」（日本建築学会論文報告集号外、40巻、p.671、1965年）、「中村達太郎博士の建築学書著作家としての一面」、日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、44巻、pp.879-880、1969年）、「我が国における建築講義録の発達について」（日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、47巻、pp.1387-1388、1972年）「三橋四郎氏著「大建築学」について」（日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、46巻、pp.1075-1076、1971年）

¹²⁴ 松永、前掲106

最初期の学生に講じたお雇い外国人建築家の教育内容を知るものである。その重要性から『西洋家作ひながた』と同様に、明治期の基本文献を集成した『明治文化全集』のなかに「補巻3 農工篇」（明治文化研究会編、日本評論社、1974年）に所収され、菊池重郎が『造家必携』の刊行経緯や史的意義についてくわしく解題している¹²⁵。同書の序文は1882年付けだが、その初出は工学会の会誌『工学叢誌』（のち『工学会誌』）の30号（1884年6月）から54号（1886年6月）まで10回にわたって「造家必携」のタイトルで掲載されたという。単行本では「基礎編」と「壘石編」からなり、全112頁のうち約7割が「基礎編」にあてられ、全体の性格としては「技術論」であると菊池は評している。

記者のひとりの曾禰達蔵は工部大学校造家学科の第1期生であり、昭和戦前期までの代表的な建築設計事務所である曾禰中條建築事務所の主宰者として著名である。もうひとりの訳者の松田周次については、ほとんど触れられることがないが、工部省営繕局の技術者であり、辰野金吾が留学から帰国した際に任じられた「工部権少技長」を務めたことから、実務経験に明るい有力な技術者であったと菊池は述べている。

発行者については、菊池は「績文舎」としており、土崎紀子らも同社の発行としているが¹²⁶、現在の国立国会図書館の蔵書は「東京府族 加藤良吉」とだけ記されている。加藤良吉については、ほかの刊行物に関与した記録などは現時点で確認できていない。績文舎については、国立国会図書館の蔵書には8点ほどの刊行物が確認でき、たとえば『清国漫遊誌』（曾根俊虎著、1883年）の奥付では「出版人 松本義保」「発兌 活版所 績文舎」と併記され、両者は同住所となっている¹²⁷。「松本義保 績文舎」は、次章で述べる建築書院の刊行物においては1894年から1911年にわたって印刷を手がけていたことが確認できる。よって『造家必携』の版元は、書林というよりも印刷所あるいは印刷人であったものと考えられる。

このころの建築図書には、著者である建築家自身が発行者となり、発売を書林が務め、私家版を市販する形式が認められる。たとえば下田菊太郎『欧米建築』（1889年）や佐藤勇造『地震家屋』（1893年）、千葉末吉『建築学提要』（1891年）が著者による

¹²⁵ 菊池重郎「『造家必携』解題」（『明治文化全集 補巻3 農工篇』、解題 pp.3-6、明治文化研究会編、日本評論社、1974年）

¹²⁶ 土崎紀子、沢良子編著『建築人物群像——追悼編・資料編』（後編 p.56、住まいの図書館出版局、1995年）では「績文社」と表記されている。

¹²⁷ 両者の住所は京橋区南鍋町2丁目11番地とされている。

自主刊行に該当する¹²⁸。『造家必携』については、序文が1882年付け、『工学叢誌』掲載が1884年から1886年、その掲載完了とほぼ同時に書籍化という経緯からみても、「コンドル先生」と呼ばれた著者の教えを活字化するために、教え子らが数年かけて筆記と邦訳を自主的に行い公刊されたものと考えられる。

つぎに、中村達太郎が著した『建築学階梯』は、上・中・下の3巻と続編からなり、1888年から1890年にかけて刊行された。わが国における近代建築教育をうけた建築家あるいは建築学者のなかでは初の著書といえる。その内容は松永文雄も引用しているように「家屋改良を図るに至れり唯憾むくは工匠輩の如き和文建築書に乏しきを以て」「多年翻訳或は記録する所の草稿を訂正増補して以て世に公行し」たもので、日本語による洋式技術の建築書が少ないなかで、中村が洋書の邦訳などを蓄積してきたテキストがベースとされたという。松永はそれを『建築雑誌』で中村が紹介していた西洋建築技術の記事によるものと推定している¹²⁹。さらに稲垣栄三は、「洋書から得た知識を建築各職に分けて叙述したものであり、大学での教科書として企画されたのかもしれない」と指摘した¹³⁰。

本書の発行元は、米倉屋書店とされることが多い¹³¹。奥付には発行人として中村順三郎の名が記され、発売所として共益商社書店、丸善洋書店、米倉屋書店の3社が並び、発行人・中村順三郎と米倉屋書店の住所が同じ「芝区露月町十八番地」とされていることから、米倉屋書店が実質的な発行元であり、その代表者が中村順三郎と考えられる。巻頭の扉頁に記された「中村氏蔵版」とは、中村順三郎を指すものと認められる。米倉屋書店あるいは中村順三郎についての詳細は現時点で定かでないが、国立国会図書館の蔵書をたどると、米倉屋書店名義の刊行物は『建築学階梯』の4点や中村達太郎著『配景図法』（1890年）のほかに、『商用簿記精法』（上・下、松井竹次郎著、1889年）と『風琴独稽古』（橋本治民著、1888年）の合計8点、中村順三郎名義の刊行物は『童蒙英語初学』（中村順三郎著・発行、「小学堂順三郎」と発行者併記、1881年）、『スペルリングブック』（ウェブストル著、1885）、『小学校用 英文独学』（中村順三郎編・発行、1885年）、『英和字彙 附音插图』（柴田昌吉、子安峻訳、1888年）

¹²⁸ いずれものちに建築書院から再刊されたと考えられる（第2章参照）。

¹²⁹ 松永、前掲106、p.18

¹³⁰ 稲垣栄三「解題一 『日本建築辞彙』と中村達太郎」（『日本建築辞彙〔新訂〕』、p.576、中村達太郎著、太田博太郎、稲垣栄三編、中央公論美術出版、2011年）

¹³¹ 国立国会図書館の発行元表記ほか、土崎ほか、前掲126、後編p.89など。

の4点が確認できる。同図書館の蔵書ではこのほかに『加奈用法』（中村愿編、1876年）が「米倉屋順三郎」名義で刊行されており、編者の中村愿はその住所が「芝区露月町廿三番地」と中村順三郎の住所と近いことから、同一人物である可能性が指摘できる。これらから中村順三郎は、その刊行物を確認できる期間は集中しているが、初等語学を中心とした教本の出版人あるいは著述家であったものと考えられる。

さらに「芝区露月町十八番地」の米倉屋書店は、1887年1月の『建築雑誌』創刊号の奥付に記された発行所「芝区露月町十八番地 米倉屋」と住所と屋号が一致することから、同一の書林と考えられる。前述の高杉造酒太郎の論考によれば、創刊直前の臨時正員会の議事録には発行人を「芝区露月町十八番地 米倉順三郎」と定めたとされる¹³²。高杉は「米倉屋は印刷屋」としたが、雑誌の内容、つまり編集には関与しない発行者といった意味合いとも受け止められる。

これらのことより『建築雑誌』の創刊翌年の1888年から刊行が開始された中村達太郎の『建築学階梯』は、『建築雑誌』創刊時に編集員として中村が奔走するなかで、米倉屋書店の中村順三郎と出会い、あるいは協働を深め、中村自身による著書の発行・発売元を米倉屋書店が務めるに至ったものと考えられる。

『建築学階梯』の刊行がはじまった2年後、1890年に私家版によって刊行が開始されたとされるのが滝大吉の『建築学講義録』である¹³³。その冒頭には松永も引用しているように¹³⁴、「工業夜学校講義録発行の主意」と題された序文がつづられ、「自ら図らず進んで実業改良の先鞭者たらんことを期し曩に工業夜学校を創設し昼来学の余暇なきものの為に建築化学二科の講義に従事し今や又従て講術し従て筆記し以て工業夜学校講義録を発刊し夜間来学の余暇を得ざるもの及び在地方実業熱心者の需要に應ぜんと欲す」と述べられ、その読者対象は滝のいう「実業家」、つまり建築の職工とされた¹³⁵。滝は大阪で工業夜学校を開設したことで知られているが、その口述内容を筆記することで夜間でも来校が困難あるいは地方在住の向学心に富んだ建築職工に應えようとしていたことが認められる。

¹³² 高杉造酒太郎「『建築雑誌』の歩みと変せん」（『建築雑誌』、1968年8月号、p.588）

¹³³ 土崎ほか、前掲126、後編p.73。同書では「『建築講義録』全3私家版1889（復刻 建築書院1898）」と表記されている。

¹³⁴ 松永、前掲106、pp.19-20

¹³⁵ 滝大吉、齋藤賢治「工業夜学校講義録発行の主意」（1890年10月付）。筆者が同文を実見した『建築学講義録』は、建築書院刊行の1914年版（pp.1-2）。

また、本書の企図としては、当時の建築書の刊行状況を触れ、「工科に関する邦文の書籍」は「造家一科に至っては中村博士の造家階梯あるのみ又陸軍省所蔵の建築学教程と題するものなるも是れ単に陸軍内部の用書に止まり広く講習の購閲し得べきにあらず其の他猶ほ大学教授ジョサイヤコンダー氏の原著にして曾根松田両氏の記述に係る造家必携を題するものあれども書中僅に地基論の一斑を論ずるに過ぎず」と述べている。滝は1887年の『建築雑誌』創刊時に編集員を中村達太郎とともに務めていたことから、中村の『建築学階梯』の存在はよく知っており、ほぼ同時期に執筆が進行していたとみられる滝の著書に対し、夜学校の講義録としての性格を際立たせることにつながったものと考えられる。また、コンドルの『造家必携』が「基礎編」にとどまっていることをふまえ、滝の『建築学講義録』では建築工事を全般に網羅した職工向けの技術書として編まれている。

こうした『建築学講義録』の刊行経緯について堀口甚吉は、「初め分冊で発行され、第1号が-90年、完結が-94年であった。後合本3冊となった」と記している¹³⁶。分冊版の形跡については現時点で筆者は確認できていないが、この堀口の記述の根拠とみられる滝自身の叙述が「合本」版に確認できる。

去る明治二三年十月本講義録第一号発刊の当時より本月其終局を告ぐるに至る迄正に三年十ヶ月にして其間世故の類に制せらるゝ事多く遂に一回之を停刊するの不幸に際会せりと雖も偶々吉原米次郎君の建築書院を創立せらるゝに当り奮つて其続刊に従事せられたるか為め茲に始めて其終局を見るに至りしは不肖の全君に謝せざる能はざる所なりとす（後略） 明治二七年八月 工学士 滝大吉

（「告別之辞」『建築学講義録』「第2回合本印刷」版、
卷之三、p.258、建築書院、1898年10月）

ここに『建築学講義録』の刊行は1890年10月にはじまり、1894年8月に完結したことが認められる。この間の1891年に滝は陸軍省に入って陸軍建築法の改訂に従事し、1894年から1897年まで朝鮮・清国に派遣されている¹³⁷。上記の文章は、3年10か月

¹³⁶ 堀口、前掲123「滝大吉氏の建築家としての業績」

¹³⁷ 土崎ほか、前掲126、後編p.73

の末の完結を示すだけでなく、海外派遣が決まったの「告別之辞」だったとも考えられる。逆に、海外派遣にむけて完結を間に合わせたとも推定できる。この文章を筆者が確認したのは、1898（明治31）年10月に「第2回合本印刷」として刊行された建築書院版であり、同院は第2章で取り上げる東京の出版社である。同版の奥付には「明治29年4月15日第一回合本印刷発行」とも併記され、1896年に建築書院の合本版が最初に刊行されたことが認められる。

以上の記述内容から考えられる『建築学講義録』の刊行経緯としては、分冊版が1890年から大阪の工業夜学校もしくは滝個人の私家版として刊行されはじめたものの、陸軍省に入ったこともあって「停刊」していたところ、東京で建築書院が創設されることとなり、同院が続刊を引き受けて1894年に完結し、1896年に合本版が刊行されたものと考えられる。この合本版こそが、今日までよく知られる3冊組の『建築学講義録』であり、現在の国立国会図書館の蔵書ではいずれも建築書院版の1909年の「第十六版合本発行」や1914年の「合本発行」が確認できる。

建築書院は第2章で述べるように、1893年ごろに設立されたわが国初の建築系の出版社となる。前述のように多数の版の刊行が認められるため、『建築学講義録』は同社にとってのロングセラーとなったといえる。また、合本前の分冊刊行は、それが月刊形式だったのか、科目別だったのかは現時点で定かでないが、滝が自ら主宰するや学校に来校困難な向学の職工を明確な対象としていたことから、結果として通信教育の形式となっていたものとも指摘できる。建築の講義録は以後、各社から大型のシリーズがつづき、その多くに分冊形式での刊行がみられることから¹³⁸、出版社にとって定番の刊行形式をかたちづかったのが滝大吉の講義録と位置づけられる。つまり、滝の『建築学講義録』は、啓蒙的な建築家の教育・著述活動として刊行された経緯は先行した中村達太郎の『建築学階梯』と同様だが、私家版にはじまり途中で出版社がつき、合本版などの刊行を出版社が積極的に推し進め、建築図書の市販を活発化させるきっかけをつくったものとして評価できる。

¹³⁸ 堀口甚吉と中島久男によれば、つぎのような刊行物が該当する。大日本工業学会『建築講義』（著者は東京高等工学校筋、13冊、1913～1914年）、帝国工業教育会『建築講義録』（著者は早稲田大学筋、1922～1926年）、建築世界社『建築講義録』（著者は各大学より結集、1924～1928年）、アルス『建築大講座』（1926～1929年）、早稲田大学出版部『早稲田建築講義』（1929～1931年）。（堀口、前掲123「我が国における建築講義録の発達について」、中島久男「大正・昭和初期における建築講義録からみた建築教育の変遷について」（『工業教育研究講演会講演論文集』、62巻、pp.3-4、1987年））

さらに「中村、瀧^マの著作と並んで教科書的に扱われた」¹³⁹もうひとつの建築書のロングセラーとされるのが三橋四郎の『和洋改良 大建築学』である。上・中・下巻と続編の全4巻で構成され、総頁数は2,636頁に達し、うち各巻に付された索引だけでも合計154頁となる大著が、一建築家の単著によって1904年から1911年の8年がかりで大倉書店より刊行された¹⁴⁰。その内容は、建築の基礎から屋内外の各種工事から、鉄骨や鉄筋コンクリートを含む建築構造、仕様書・積算書や透視図、そして東洋・西洋建築史から建築意匠論まで網羅され、「一大建築百科全書」¹⁴¹とも評される。

本書について近代日本の建築出版活動の歩みのなかで俯瞰すると、ふたつの意義を指摘できる。ひとつめは建築家の執筆活動の系譜、ふたつめは大手出版社による建築書の出版という観点である。前者については、三橋四郎が滝大吉に薫陶を受けており、また三橋の建築事務所から蔵田周忠が輩出された。三橋は1893年の帝国大学工科大学造家学科卒業後に陸軍省へ就職するが、そのときの上官が滝であった。堀口甚吉が述べたように、三橋は『和洋改良 大建築学』の各所で滝を恩師と記し、1902年の滝の急逝時には『建築雑誌』に追悼の評伝を寄せている¹⁴²。滝の『建築学講義録』の分冊版は三橋の陸軍省入省の翌年に完結され、その合本版はふたりの在職中に刊行されていることから、同書の刊行をリアルタイムで三橋は体験していたこととなる。また、三橋は『和洋改良 大建築学』の完結後まもない1915年に客死するが、その最晩年の所員のひとりに蔵田周忠がいた。蔵田の在籍期間は2年ほどと短かったが、後年に欧米のモダニズム建築を積極的に紹介する旺盛な執筆活動は三橋の影響によるものとされる¹⁴³。つまり三橋の建築出版活動は、その明治期の草創期から昭和戦前期のモダニズム全盛期をつなぐものと考えられる。

¹³⁹ 松永、前掲106、p.22

¹⁴⁰ 各巻の刊行年月と頁数（本文＋索引）は以下のとおりとなる。上巻1904年2月（686＋38頁）、中巻1904年12月（438＋44頁）・下巻1908年5月（828＋4頁8）・続巻1911年1月（530＋24頁）。また、この刊行期間における三橋は、以下のように建築技師として奉職中であった。1867年生まれ、1893年帝国大学工科大学造家学科卒業、陸軍省入省、1898年通信技師、1906年東京市技師、1908年三橋建築事務所設立、1915年逝去。

¹⁴¹ 堀口、前掲123「三橋四郎氏著『大建築学』について」。また、版元の大倉書店の社告では「『建築学界之新百科全書』とうたわれている（三橋四郎著『商店住宅建築図説』、巻末社告、1908年6月）。

¹⁴² 堀口、前掲123「三橋四郎氏著『大建築学』について、三橋四郎「故工学士瀧大吉氏の伝」（『建築雑誌』、16巻、pp.362-365、1902年12月号）

¹⁴³ 大川三雄「生活芸術を追求したモダニズムの啓蒙家」（『INAX REPORT』、no.177、p.4、「特集1生き続ける建築11 蔵田周忠」、2009年）、亀野晶子「蔵田周忠の建築思想の独自性——代表的著作を手がかりに」（『デザイン理論』58号、p.50、意匠学会、2011年）

そして、『和洋改良 大建築学』の版元となった大倉書店は、当時の最大手書林のひとつといえる存在だった。1875年創業の同書店の二代目発行人を務めた大倉保五郎は、同書の刊行時までに東京書籍商組合や医書組合、中等教科書協会などの幹事を歴任し、昭和初頭には東京書籍商組合の組長などを務め、出版業界の盟主として長く君臨していた¹⁴⁴。そうした大手の総合出版社である大倉書店が大部の『和洋改良 大建築学』を8年かけて続編までを刊行したばかりか、その刊行中の1908年には三橋四郎による『商店住宅建築図説』が刊行された。また、『和洋改良 大建築学』の巻末社告に注目すると、1904年の上巻と中巻にはみられないが、1908年の下巻では同書の案内に『商店住宅建築図説』の近刊予告が添えられているほか、「大倉書店最近出版工学書」として土木が6点、機械・電気が6点紹介されている。建築書をはじめとする工学書の刊行に大手出版社が参入していたことを示すものと考えられる。

さらに『和洋改良 大建築学』は、三橋の死後も増刷がつづき、やがて大熊喜邦らの手による改訂増補版が4巻構成で刊行されている、それは「大倉書店の懇請」¹⁴⁵によるものであり、大熊は「筆を加へること」に「頗る躊躇せざるを得なかつた」が「學術の進歩」に応じて「改訂増補を加へるのが社会に対する奉公で、同時に原著者への後進の義務」と決意したという¹⁴⁶。第1と第2巻が1923年4月、第3巻が1923年6月に刊行されたのち、第4巻の「執筆を了りこれが印行中」に関東大震災に襲われて「紙型は勿論図面原板は全く灰燼に帰し」、「書肆の損失は多大であつた」が「然し大倉書店は災後建築書の欠乏に鑑み再び版を起しこの機を利用して更に改訂増補せんと企てた。我々も書肆のこの意を汲み」て執筆を再開して「漸く第四巻の刊行を見るに至つた」のが1925年10月であつた¹⁴⁷。未曾有の大震災をうけて大部の建築書を再刊しようとする大手出版社の並々ならぬ意欲が認められるとともに、建築書の重要性が出版業界全体のなかでも高まっていた証左とも考えられる。

¹⁴⁴ いずれも東京書籍商組合編・刊行による『東京書籍商組合史及組員概歴』（1912年）および『東京書籍商組合史』（1927年）参照。大倉保五郎の職歴は前者 pp.110-111 による。

¹⁴⁵ 大熊喜邦「第四巻序文」（『改訂増補 和洋改良 大建築学』第4巻、序1、1925年）。なお、この改訂増補版の全4巻は、大熊喜邦を「改訂者代表」とし、工学士小島榮吉、同大口清吉、建築技師横山信が実務を担った。

¹⁴⁶ 大熊喜邦「改訂増補に就て」（『改訂増補 和洋改良 大建築学』第1巻、序1～2、1923年）

¹⁴⁷ 大熊喜邦「第四巻序文」（『改訂増補 和洋改良 大建築学』第4巻、序1～2、1925年）

1-4-2 建築図書出版社の生成

建築図書の出版組織の事例として、丸茂友里・中谷礼仁らによる当時の公刊建築書一覧〔表 1-7〕より 3 社についてふれておきたい。いずれの出版組織も活動の全体像は現時点で定かでなく、今後の課題となるものの、それぞれの性格に特徴がみられることから、建築出版活動の展開を見いだせると考えられるためである。

建築学研究会による『建築学講本』については、松永文雄も教科書の一例として取り上げている¹⁴⁸。国立国会図書館蔵書では 5 点が確認でき、1904（明治 37）年 11 月に「第一冊」、翌月に「第二冊」、3 冊目は飛んでいて、1905 年 2 月に「第四冊」、翌月に「第五冊」、そして同年 8 月に「第六冊」となる。「第一冊」巻頭の刊行案内によれば、「建築沿革史」から「建築構造法」「建築施工法」など 8 科目について各科目が毎月 16 頁以上、合計 120 頁以上で構成して配本・郵送することが記されていたことから、月間の通信教育を計画していたものと考えられる。「講本の起稿者」は「森山松之助、柴垣鼎太郎二工学士及び日本建築に精通の名のある井上繁次郎氏なり」とされ、「講本見本には佐野工学士材料強弱学担当の旨掲載せし」もい「公務の都合上執筆難しく辞任申し出たことが告知された¹⁴⁹。やや刊行が遅れた「第六冊」で、森山が病床にあり「井上技師また軍事上の建築に関係して熱田に出張」したため刊行が遅れたことを読者に詫び、「在大学院の東京美術学校教授工学士古宇田実君」が参加することで挽回することを約しているが¹⁵⁰、その後の続刊は現時点で確認できていない。井上繁次郎は、『通俗家屋改良建築法』（1902 年）や『室内装飾家具図説』（1909 年）などを博文館から刊行していることから、筆力と建築実務経験を兼ね備えた技術者だったとみられる。

建築学研究会の詳細は現時点で明らかでないが、1908 年には須原屋より『日本家屋間取雑作図集 第 1 輯』が同会編で刊行されていることから、同会自らが発行者となった『建築学講本』の刊行は長く続かなかつたものと推定される。しかし、建築学研究会の活動目的のひとつが、森山松之助や柴垣鼎太郎らの工学士たちによる建築の通信教育にあったと考えられることから、前節でみた波和会と同様に、建築書の出版行為が建築家たちによる啓蒙活動の一環として明治期から認識されていたことを示している。

¹⁴⁸ 松永、前掲 106、pp.18-19

¹⁴⁹ 「建築学講本の内容」（『建築学講本』第一冊、巻頭・頁数記載なし、建築学研究会編・刊、1904 年 11 月）

¹⁵⁰ 「稟告」（『建築学講本』第六冊、巻頭・頁数記載なし、建築学研究会編・刊、1905 年 8 月）

つぎに、『簡易洋風建築術』（1906年）を刊行した信友堂については、同書の編者であり発行者の森友吉が1904年に創業したばかりの出版社だったことが、『東京書籍商組合史及組合員概歴』（1912年）および『日本出版大観』（1930年）からたどることができる。森は1880（明治13）年から銅版印刷業に従事して1886年に同業で独立し、1890年ごろから東京工業学校（のち東京高等工業学校）の参考書を販売してから同校の「御用書肆」となって1904年に信友堂を創業し、1930年の時点ではその子息とされる森菊雄が「工業書を専門に堅実な営業を続けてゐる」とある¹⁵¹。

国立国会図書館の蔵書のなかで確認できる信友堂の刊行物には、一部に「信友堂書店」との表記が併用されている。それらの刊行点数としては、[表 1-8] に示したように、重版をのぞくと合計49点となり、そのすべてが工学書とみられる。このなかで建築書は19点となり、最も古い刊行物は1904年3月刊行の『日本建築規矩術』（齋藤兵次郎著）である。信友堂の建築書のなかで最も多い著作7点が認められる齋藤兵次郎は、東京高等工業学校建築科で「日本家屋構造」や「日本建築製図」などの科目を担当していた助教授であった。その信友堂における著書『日本家屋構造』については、東京高等工業学校の建築教育もしくは教科書として検証した柳澤宏江による論考がある¹⁵²。また、東京高等工業学校建築科編による『和洋建築製図手本』（1908年）を信友堂が刊行していることから、同校の「御用書肆」であったことが認められる。今後の研究課題のひとつとなるが、工学系の高等教育機関と直結した出版社による建築書の刊行事例として、信友堂は建築出版活動の展開における方向性のひとつを示すものと考えられる。

なお、同堂の建築書としては、齋藤亀吉も3点の著作を刊行している。『東京高等工業学校一覧』によれば、齋藤兵次郎の担当科目を1917年から齋藤亀吉が受け継いでおり、両者の出生地が「静岡」で一致することから¹⁵³、兵次郎と亀吉は同一人物であり、1917年に改名したものと推定できる。信友堂の著作としても、兵次郎は1904年から1908年、亀吉は1918年から1920年と区分されている。

最後に、『和洋住宅建築学』（上・下、駒杵勤治著、越本長三郎編、上巻1906年、下

¹⁵¹ 『東京書籍商組合史及組合員概歴』（p.209、東京書籍商組合編・刊行、1912年）、『日本出版大観』（東京編 p.46、出版タイムス社編・発行、1930年）

¹⁵² 柳澤宏江「齋藤兵次郎著『日本家屋構造』にみる建築教育との関係について」（日本建築学会東海支部研究報告集、第49号、pp.709-712、2011年）

¹⁵³ 『東京高等工業学校一覧』の大正4・5年版 p.6（1915年）および大正6・7年版 p.7（1917年）

巻1907年)について検討をくわえる。同書を刊行した須原屋書店は、江戸期における最大手の書林のひとつとして名高い。『和洋住宅建築学』については、2012年に『近代日本生活文化基本文献集』と銘打った基本文献の復刊シリーズに収められており、安野彰によって解題が付されている¹⁵⁴。

安野によれば、著者の駒杵勤治は東京帝国大学工科大学建築学科を1902年に卒業し茨城県や内務省などで建築技師を務めた人物であり、編者の越本長三郎は工手学校を卒業し本願寺や東京府などで建築技師を務め、ふたりの接点としては両者ともに共同設計の実績が認められる伊東忠太の存在を挙げている¹⁵⁵。本書の上巻では洋風の大邸宅が対象とされ、「各室の詳細、すなわち寸法の取り方や設備のありようをまとめて示した書籍は、日本人によるものでは本書以前に認められないだろう」と安野は指摘する。下巻では商家や旅館、日本住宅が対象とされ、店舗付き住宅によって「都市型住居のあり方を示そうとしている」という。それは和洋折衷などの住宅改良が上流階級ではじまった明治末の特徴を表すものと安野は位置づける。

こうした内容の特徴のほかに、本書はわが国の建築出版活動における大きなトピックスの引き金となった意義を見いだせる。それは、戦前期最大の市販建築誌となった建築世界社の雑誌『建築世界』(1907~1944年)の創刊である。同誌の「創刊時に東京高等工業学校に在学中」だった10年来の匿名寄稿者の回顧を河東義之がたどったところによれば、建築世界社の創業者で同誌発行人の光岡義一は「建築には全くの素人」であり、「日露戦役に際して得たる賞金の百金を如何に使用すべきかを考慮せし際計らずも、須原屋書店が駒杵氏の住宅建築学を依て意外の儲けをしたのを見て、須原君を説いて初めて発行したのが建築世界」とされる¹⁵⁶。この「駒杵氏の住宅建築学」とは、『和洋住宅建築学』とみて間違いないと考えられる。須原屋の建築書には、「駒杵」と名をつく著者はほかに現時点で確認できない。

江戸期における須原屋書店は、江戸城下の武士名鑑といえる『武鑑』の刊行で隆盛をきわめたことで知られるが¹⁵⁷、規矩術書などの建築書についてもほとんどを独占し

¹⁵⁴ 安野彰「第三巻『和洋住宅建築学』上巻・下巻」(内田青蔵監修『近代日本生活文化基本文献集——ひと・もの・住まい』別冊 解題、pp.35-40、日本図書センター、2012年)

¹⁵⁵ 伊東は、駒杵の帝大在学時に助教授、伊勢神宮の式年造営でふたりは共同、越本とは本願寺で設計を共同している。

¹⁵⁶ 河東、前掲120「文献《建築世界》」、p.54。なお、河東はこの引用文の出典を「《蔵前建築》第4号、大正8年7月、東京高等工業学校建築科研究会」としている。

¹⁵⁷ 今田、前掲102、pp.207-209

ていたことが中谷礼仁によって考証されている¹⁵⁸。そして、中谷が述べるように、須原屋は明治期になっても近世以来の建築書の再版などの刊行をつづけ、1904(明治37)年に創業家の北畠茂兵衛から支配人格の鈴木荘太郎に書林経営を譲渡した時期に『建築世界』誌が創刊されており、同誌の経営譲渡と同誌創刊の関連性が指摘されている。創刊時の同誌は発行が建築世界社で発売が須原屋書店を担い、関東大震災以降に発行も須原屋書店の名義となって、1944年8月号まで刊行されつづけた。須原屋書店の明治期以降の建築書については、中谷が建築技術書を中心に考証しており¹⁵⁹、「鈴木荘太郎経営の須原屋書店は、国立国会図書館所蔵本検索(「書誌一覧」)で見ると限りでは、建築関係のものが多く」¹⁶⁰みられる傾向についても指摘されている。実際に『建築世界』誌の社告では、須原屋書店の建築書が継続して紹介されていることから、建築図集などをふくめた須原屋書店の建築書の全体像について今後の説明が望まれる。

一方で、1912年刊行の『東京書籍商組合史及組合員概歴』における「須原屋 鈴木荘太郎」の欄では、「宗教書、工芸書其他数種ヲ出版シ販売業ヲ兼営」と業務内容が紹介されている¹⁶¹。実際に『日蓮聖人全集』(日蓮宗全書出版会編、1914～1916年)などの刊行が認められる。版木の独占によって支えられていた江戸期の大手書林は、明治以降の出版構造の変革に対応できずことごとく消え去っていき¹⁶²、最大手の須原屋における1907年の経営譲渡がその象徴的な出来事であることは、中谷が指摘したとおりである。経営を譲渡された鈴木は、須原屋の出版活動の再興を図るなかで「数種ヲ出版」に宗教書などとともに建築書を入れていたことになる。それは、明治以降に大手となった新興出版社である大倉書店が前述のとおり建築書の刊行をつづけたように、新旧の総合出版社が建築書を有力な刊行分野のひとつと認識していたことが示されている。

以上、初期の建築図書の出版組織について3つの事例をみてきたが、建築家による自主的な団体、工業学校の御用書肆、江戸期以来の大手書林と、多様な版元による建

¹⁵⁸ 中谷礼仁「幕末・明治規矩術の展開過程の研究」(早稲田大学博士論文、1998年、『近世建築論集』、pp.122-167、アセテート、2005年)

¹⁵⁹ 中谷、前掲158『近世建築論集』、pp.122-167

¹⁶⁰ 吉原丈司「内務省警視局御用御書物師須原鉄二とは誰ぞ——明治警察史の一齣」(補正第十五次稿、2012年1月31日、p.6、広島大学法学部 旧・吉原研究室「法制史学者著作目録選(WEB版)明治警察史コーナー」、最終アクセス2016年11月24日、<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/subara.pdf>)

¹⁶¹ 『東京書籍商組合史及組合員概歴』(p.229、東京書籍商組合編・刊行、1912年)

¹⁶² 今田、前掲102、pp.248-253

築出版活動が展開されていた実像が明らかとなった。こうした動きのなかで、わが国最初の建築系出版社とみられる建築書院が1893年に設立されたのである。

従来の建築書の研究では、1907年の『建築世界』誌の創刊をもって市販の建築書の刊行が成立し、やがて1910年代以降の住宅改良運動のなかで住宅関連書が盛んに刊行されたとみなされてきたが、1890年代には市販の近代建築書の活発な刊行が認められることが明らかとなった。前節でみた同時期の建築系学協会による会誌とあわせると、中堅技術者層に向けられた啓蒙的な建築情報が雑誌や図書のかたちで刊行され、会誌、同人誌、通信教育、そして大手書林や専門出版社といった多様な出版組織の形態が1900年前後には成立していたことを示している。

第5節 建築誌出版社による市販誌 1907年～

1-5-1 建築世界社による最初期の建築批評¹⁶³

本章では、市販誌を主体とした建築出版組織、つまり建築誌出版社の展開について検討をくわえる。その起点は、建築世界社の創業となる。同社は1907（明治40）年7月の雑誌『建築世界』創刊を機に設立されたと考えられ、同誌はわが国初の市販建築誌として「唯一のジャーナリズム」で「編集は多面的で、雑然としていたけれども、よく集められていた」¹⁶⁴ことから「戦前派には大いに愛読された」¹⁶⁵。戦時下にあっても『建築雑誌』とともに刊行がつづけられ、1944（昭和19）年8月号まで発刊された。『建築世界』誌に関する既往研究としては、河東義之や中谷礼仁らによる論考がみられるが¹⁶⁶、その長期にわたる活動の全体像については渡辺未央による日本大学修士論文¹⁶⁷も確認できるが、建築世界社の史的評価は定まっているとはいいがたい。本項では建築誌出版社の成立という観点にもとづき、建築世界社の創業期の活動を中心に検証する。

建築誌に関する史的研究は、従来はモダニズム導入との関係性が軸となり、とくに1920年代以降の近代建築運動や建築批評の趨勢が重視されてきたことは繰り返し述べたとおりである¹⁶⁸。そのなかで『建築世界』誌については、中堅技術者向けの実務的な内容と評され¹⁶⁹、雑誌としての批評性や先鋭性という観点では評価の俎上に乗せられてこなかった。しかし、同誌の創刊5年めには「建築と批評」を表題に冠した記事もみられる¹⁷⁰。そこで本項では、最初の5年間を『建築世界』誌の「創刊期」と仮定し、その動静について既往研究の評価を検討しながら、同誌の署名記事と巻頭言の

¹⁶³ 本項は、拙稿「雑誌『建築世界』の創刊期における署名記事と巻頭言の展開について」「雑誌『建築世界』の創刊期における「主張」欄の推移と編集体制の特徴について」（建築世界社の出版活動研究1、2、大川三雄、矢代眞己、田所辰之助と共著、平成27年度日本大学理工学部学術講演会予稿集、pp.517-520、2015年12月）をもとにしており、一部にその後の知見を加えたものである。

¹⁶⁴ 蔵田周忠「大正末から昭和初期のこと——主としてジャーナリズム記」（『新建築』、1964年6月号、p.261）

¹⁶⁵ 村松貞次郎『日本建築家山脈』、p.228、鹿島研究所出版会、1965年

¹⁶⁶ 河東、前掲120、pp.53-54、中谷、前掲158『近世建築論集』、pp.122-167

¹⁶⁷ 渡辺未央「雑誌『建築世界』（1907～1944）を中心とする「建築世界社」の活動に関する史的研究」平成17年度日本大学大学院理工学研究科修士論文、2006年

¹⁶⁸ 本章第1節第1項参照。

¹⁶⁹ たとえば中谷礼仁ほか前掲158『近世建築論集』、p81

¹⁷⁰ 巻頭言「建築と批評及建築家と批評家」（『建築世界』1911年2月号）

展開を軸に分析をくわえる。また、創刊期における出版組織としての特徴を検証するために、同誌編集局による「主張」欄の推移と編集体制について考察する。

『建築世界』誌に関する史的研究の嚆矢となった1974年の河東義之の論考は、雑誌『都市住宅』における文献紹介欄という紙幅の制限ゆえか、1907年7月の創刊経緯と1909年7月の2周年「記念号」にのみ焦点があてられた¹⁷¹。創刊当初の内容の脆弱さは同誌編集局内でも自覚されており、河東は創刊2周年の「記念号」をもって市販建築誌としての地位を確立したと評している。それは編集局の記した「多年本誌が予期した意識の実現」が、判型の大型化と増頁にも表れていることを河東は指摘した。そして同号の目次を掲げ、執筆者に関野貞や中村達太郎、曾禰達蔵、塚本靖、三橋四郎、伊東忠太といった「建築界の大家」が「顔をそろえ」ることで「押しも押されぬ一流雑誌に発展した」と結論づけている。

つぎに、『建築世界』創刊期における建築批評などの情勢の概括として、本章第1節でも取り上げた宮内嘉久の東京大学卒業論文「近代日本の建築イデオロギー——ジャーナリズムを通して」（1949年）¹⁷²を検討する。「あくまでもジャーナリズムの視点で、建築思潮と建築運動の関連を歴史的に捉え」¹⁷³ることを目的とした宮内は、「建築ジャーナリズムの開花」を1920年代とし、伊藤清造の論考「建築のプロレタリアズム」（『建築新潮』1926年7、8月号）に「歴史的価値」を与えた。その前兆となる1910年代に「建築論的思考の発生」を指摘し、「建築批評・評論の徴表」となる論考を列挙した〔表1-9〕。帝国議会議事堂をめぐる様式論争に端緒を見いだしつつ、岡田信一郎の論考「建築と評論」（『建築雑誌』1910年4月号）を「建築評論の問題をはじめて意識的に採りあげた」と評し、野田俊彦の東京大学卒業論文「建築非芸術論」（『建築雑誌』1910年10月号）を「唯物論的建築思考の出発点」と位置づけた。こうしたなかで『建築世界』誌の記事については、「建築と批評及建築家と批評家」（1911年2月号）が唯一挙げられた。これは本項の冒頭において「批評」の表題を指摘した記事であり、同誌編集局による巻頭言である。そして『建築世界』誌の存在そのものについて宮内は「いわゆる雑誌ジャーナリズムの建築における端緒」と記すにとどまっている。

『建築世界』創刊号は「内容の如きも大に粗雑と不体裁とを究め慚愧」する謝罪が奥付頁に掲げられたほどで、その年の記事の大半が無署名であった。しかし、創刊から

¹⁷¹ 河東、前掲120、p.54

¹⁷² 宮内、前掲5

¹⁷³ 宮内、前掲5、p.29

1年を経たない1908年5月号には辰野金吾、塚本清、伊東忠太による説林「議院建築の方法」が掲載され、以後、錚々たる顔ぶれの署名記事が並ぶようになる。1周年直前の同年6月号には、図版の充実や増頁などが社告でうたわれた。そこで同誌の創刊期における記事の展開をたどるために、おもな署名記事と「主張」欄を抽出する〔表1-10〕。多種の記事で構成された『建築世界』誌は、各欄には「評論」「学苑」「問答」などの名称が付された。とくに「主張」欄は、編集局の巻頭言として1909年7月号から1939年12月号まで継続したことからも、その報道姿勢を最もよく示すものと考えられる。署名記事で際立つのは、議事堂の様式論争に関するもので、辰野や伊東らが入れ替わりで登場している。宮内の指摘した「建築批評・評論の徴表」が建築学会誌と同様のテーマで同時期に、市販誌『建築世界』で展開していたことが認められる。

同誌編集局の意思を最もよく伝える巻頭言は、最初期の名称と内容に変動がみられる。創刊号の「発刊の辞」は「社説」とされ、日露戦争後の「陸海軍の大拡張に伴ふ兵營の建築」や「市区改正に要する改築」の機運に乗ろうとする旨がうたわれた。翌1周年の「記念号発刊の辞」は「社辞」とされ、雑誌刊行の「実質と声価」が「予想以上に発達を遂げ得たる」ことへの「諸大家の指導と懇篤なる愛読者」に謝意が示されたが、建築に関する具体的な記述はみられない（1908年7月号）。翌年の2周年記念号で名称が「主張」欄に固定されたが、表題は「記念号発刊の日に臨み」と前年同様に抽象的である（1909年7月号）。しかし本文の調子は一変し、建築をめぐる情勢が積極的に論じられた。冒頭から「現時の土木建築界は、誠に和洋両様式の過渡時代也。思想混乱の粉擾時代也」とつづられ、「各様式乱れ」た「不幸なる国民」を嘆く。その翌年になると「主張」欄の表題は「方針を誤れる我建築界」と強い語調となり、「日本の建築が世界一般から見て後れて居ることは已に国民一般に自覚する様になつて是非共大改革」をと訴えた（1910年8月号）。これらには「国民」の用語が繰り返しみられる。さらに翌年、先述の論考「建築と批評及建築家と批評家」が登場した（1911年2月号）。

『建築世界』誌の創刊期における誌面は、河東による従来の評価よりも早い段階で充実していく形跡を指摘でき、創刊翌年から有力建築家による署名記事が増えていった。しかし、市販建築誌としての地位が確立されたのは、河東が述べたように3年めとみるのが妥当と考えられる。そこには、建築家たちの様式論争の興隆とともに現れた、同誌編集局の批評精神の萌芽が「主張」欄に見いだせるのであり、「国民」にとっての

建築の姿を問うような意識も認められる。

つぎに、こうした建築批評の萌芽が見いだせる『建築世界』の創刊期における誌面の展開について、編集局の「主張」欄の推移と編集体制の特徴を中心に考察する。河東義之が「真の意味での創刊号」¹⁷⁴と位置づけた『建築世界』1909年7月の2周年「記念号」には、妻木頼黄が「今ヤ斯界ニ一光彩ヲ放テル参考資料ナリ」と祝辞を寄せている。その前年、1908年から有力建築家の署名記事が現れたことは前述したとおりだが、同年7月の創刊1周年「記念号」には賀詞の出稿が見開きで並び、古市公威、辰野金吾、曾禰達蔵、伊東忠太といった建築・土木界の権威が名を連ねている。次頁には妻木の祝辞が1頁大で掲げられ、編集局の「記念号発刊の辞」を演出するように対向で掲載された。「日猶ほ浅しと雖も斯界の賞賛を博せしは蓋し時宜に適ひ実用に適せる」までに至らせた発行人「光岡君」の事業手腕が讃えられている。つまり、創刊翌年には学界の支援が広く集まっていたことを指摘できる。同誌のパトロンについては、三橋四郎の存在が従来から知られており¹⁷⁵、実際に裏表紙への出稿が1908年5月号から毎号つづくことから、その後援が裏づけられる。また、祝辞の扱いからは、妻木が第一の編集顧問格に遇されていたと考えられる。

建築批評の萌芽が見いだせるのは、編集局の巻頭言が「主張」欄と定まる2周年記念号のころなのは前述のとおりである。その様相を具体的にたどっていくと、同号では「土木建築思想の乱状」と「各様式乱れ」る「社会の状態に鑑み」て、「国民の土木建築上の於ける必要の知識を普及」すべく「発刊の企て」がつづられた。翌1910年8月号「方針を誤れる我建築界」では、様式論争による「建築改良とは甚だ縁が遠い心持ち」が示され、「新材料の上に発達を求むる方が有効」と唱えた。「言ふ迄もなく鉄とセメント」であり、「世界的大様式は必ずや世界的の材料あつて始めて成立す可きもの」とし、日本が「世界建築界に雄飛せんとする矢先に此新材料の現はれた」のは「千載の一遇」としながら、「何故に我建築界は構造上に重きを置かない乎」と嘆く。あくる1911年2月号「建築と批評及建築家と批評家」では、建築家が「技能を研くに二つの途」として自己研鑽と「他人の意見を聴く」ことを挙げる。「批評といふことが表だつて聴ゆるのは漸く二三年此方」であり、建築が「我国の芸術中に重く見らるゝに至つた」のは「我建築界の慶事」とする。「併し乍ら此批評」が「社会の耳目を聳動さす

¹⁷⁴ 河東、前掲120、p.54

¹⁷⁵ 村松、前掲165、p.228

るに到つた限りは其反共として正しき批評は良好なる結果を持来たすと同時に誤られたる批評は好しからざる結果を起す」注意を喚起し、「批評は建築家の健康剤」であり「或は却て害毒の基」となる功過が指摘された。さらに「全く此種の専門知識に欠けたる一般社会」の目にも批評が触れるゆえに「正鵠を欠いた」ならば「其結果は間接に建築家を毒することが意外に甚しい」ことが警告された。

こうして創刊期の「主張」欄の推移をたどると、3年めに議事堂の様式論争をめぐる建築界の混乱を嘆き、4年めに新材料の鉄筋コンクリート造による様式の創造を訴え、5年めには建築批評の功過を指摘していた。そこには編集局の批評精神の急速な形成が認められ、建築に対する「社会の耳目」への意識が通底している。

『建築世界』誌の創刊経緯と発行人・光岡義一については、「創刊時に東京高等工業学校に在学中」だった10年来の匿名寄稿者の回顧を河東がたどっている¹⁷⁶。

主幹は之れ建築には全くの素人であった。而し彼が日露戦役に際して得たる賞金の百金を如何に使用すべきか考慮せし際計らずも、須原屋が駒杵氏の住宅建築学依て意外の儲をしたのを見て、須原君を説いて初めて発行したのが建築世界である、(世界と云ふ名も博文館あたりの何々世界と云ふのを真似たのは勿論である)当時関係せし人は専門の方ではI氏、編集の方にはK氏此二人で兎に角記事を纏めて第一号を出したのであるが其内容外観の貧弱なることは到底お話になったものにあらず……

主幹は光岡義一を指すのは間違いない。「駒杵氏の住宅建築学」¹⁷⁷が『和洋住宅建築学』(上・下、駒杵勤治著、越本長三郎編、上巻1906年、下巻1907年)と考えられることは前節で記した。河東は、「K氏」は奥付に「編集者」と記された小西勝次郎とし、「小西可東」の筆名で同誌に執筆していたことを指摘しており、「I氏」は不明とされた。奥付の編集名義は1909年8月号から光岡が発行兼編集人となり、小西の名が消えている。この年の年賀社告では「編集局記者」の氏名が列举され、彼らの署名記事の肩書きをたどると、中谷礼仁も指摘しているように¹⁷⁸、多くが建築技師と土木技師であったことが認められる[表 1-11]。前述の匿名寄稿者は「戸台邀月」と類推し

¹⁷⁶ 河東、前掲 120、p.54

¹⁷⁷ 前掲 156 に同じ。

¹⁷⁸ 中谷礼仁ほか前掲 158『近世建築論集』、p81

うるが、出身校と学位が一致しない。

唯一、技師などの肩書が付されていない小西については、他社の著書をたどると〔表1-12〕、建築を専門としないジャーナリストとみられ、戦記ものの出版で光岡や須原屋との関係も推測しうる。一方で、小西とともに創刊に携わったとされる「専門の方ではI氏」とは、「編集局記者」にイニシャルの該当者が認められず、建築技術者の井上繁次郎であったと考えられる。最初の署名記事は第2号からみられ、記者のひとり金城不二夫と井上であり、井上は創刊5年めの1912年1月号まで署名記事を断続的に寄せている¹⁷⁹。井上の経歴について詳細は不明だが、前節で述べたように『通俗家屋改良建築法』（1902年）や『室内装飾家具図説』（1909年）など著作を博文館から刊行しているほか、建築学攻究会の『建築学講本』（1904～1905年）にも寄稿が認められるように、筆力と建築実務経験を兼ね備えた技術者だったと考えられる。つまり『建築世界』誌の創刊期の編集は、一般のジャーナリストの小西が実務を担い、技師たちが記者として共同していたと考えられる。その体制が深まったために、奥付の編集名義に小西の名が消えたとも考えられる。

そうした小西だったが、その名が奥付から確認できなくなる前号の2周年記念号には、「記念号発行当日の感」を記し、「茶話」欄に異例の3頁分の紙幅が割かれた¹⁸⁰。それは、同号の取材で「大家名門」に「親しく其人格を渴仰し得た」手記であった。中村達太郎は「洒脱快談、現場の事に至ては学究極めて深く、建築界比肩する者が無い」、伊東忠太は「沈思森厳、相ひ対して一種の圧迫を感ずる」、塚本靖は「装飾の造詣に至ては建築界独歩」の「俊英なる風姿」といった寸評が付されたほか、「在野の大家」の寄稿者として辰野や妻木ら11名が挙げられた。小西が建築界に馴染んでいった様子がうかがえる。つづく「名家曰く集」をつづった「覆面記者」は、技師の「編集局記者」と思われる。「伊東博士曰く。記念号夫れは結構、御交際して何か書きませう」「武田五一氏曰く、大蔵省と京都の工芸学校の掛け持ちは忙しいよ。よし書きかけのを送らう」「妻木博士曰く、儲かるかね、何千刷る、成る程、結構々々、吾輩にも喋べれ？、喋るよ、来月一つ法螺を吹いてやらう」といった14名の取材後記がつづく。これらの記事からは、同誌の記者の存在が建築界に定着していった様相が認められる。

発行人の光岡義一については、前述のとおり日露戦役の報奨金を元手にした起業だ

¹⁷⁹ 井上繁次郎「予算仕様書編成法」（22回、1907年9月号～1909年7月号）、「建築工事監督者の心得」（14回、1909年9月号～1912年1月号）

¹⁸⁰ 小西可東「記念号発行当日の感」（建築世界、1909年7月号、pp.59-62）

ったと河東が指摘し、これを菊岡俱也は「いまでいえばベンチュアビジネスとして創刊された」¹⁸¹と述べている。一方で『建築世界』誌の誌面をたどると、光岡自身が署名入りで執筆している記事が確認できる。新しい防火建材の紹介記事では異例の13頁を割いて細字の長文を掲げており、江戸時代の古書として木割や測量術などの土木建築の関連書を2度ほど紹介している¹⁸²。よって光岡は、新興の実業家という側面だけでなく、社会啓蒙家の気質を兼ね備えていたものと考えられる。

以上みてきたように、『建築世界』誌の創刊期の誌面について検証すると、創刊2年め以降に学界を挙げての支援が急速に展開されていた。編集局の批評精神も数年で形成され、新様式の創造に向けて新材料や批評への着目が訴えられていった。こうした誌面の充実化を担ったのは、建築を専門としないジャーナリストと建築技師との共同による編集体制であった。全体では建築実務に即した記事が多いなかで、巻頭の「主張」欄で醸成されていった同誌の批評精神は、建築と社会の関係性が意識され、社会派ともいえる性格を有していた。それは、ジャーナリストと建築技師の共同と、学界からの友好的な支援のもとに築かれたことが認められる。つまり、従来のモダニズムの先鋭性を重視する建築誌研究とは異なる広い視野での建築批評が、1910年代に観察できることを示している。

なお、今後の課題としては、『建築世界』誌の全体像についての検証だけでなく、建築世界社としての建築出版活動の分析も挙げられる。同社から刊行された雑誌以外の建築図書は少なくないとみられ、その一例を〔表 1-13〕に示した。このほかに、実在と詳細は不明だが「建築参考絵葉書」が「一組（十枚）月一回」で発行されていた形跡が確認できる。『建築世界』誌1910年5月号の社告から継続的に案内がはじまり、「工学士保岡勝也君の所有に係る数百枚の各建築物を始め、広く江湖に募つて各地方の各建築の絵葉書を建築設計の参考と兼ねて建築史の材料」¹⁸³として刊行されていた。建築写真の刊行形式の一例として注目できる。

¹⁸¹ 菊岡俱也「『建築世界』、『日本近代建築・土木・都市・住宅雑誌目次総覧』、第1期第2巻、p.7、柏書房、1990年）

¹⁸² 「主幹 光岡義一」の署名記事として確認できるのは、「説話界 エンペルを論ず」（1908年12月号）、「史話界 古書私考是非」（2回、1909年5月号～同年6月号）

¹⁸³ 『建築世界』1910年5月号、p.54

1-5-2 建築誌出版社の展開

前項でみた建築世界社による『建築世界』につぐ市販建築誌が、建築画報社による『建築画報』(1911年ごろ～1933年)と建築ト装飾社による『建築ト装飾』(1911～1923年)となる¹⁸⁴。この2誌について登場する建築誌は、住宅改良会による『住宅』(1916～1943年)と関西建築協会による『関西建築協会雑誌』(のち『建築と社会』、1917～1944年)となり、いずれも建築系の学協会の会誌に属するといえる。

そして1920年代以降、洪洋社による『新住宅』(1920～1923年)の創刊を皮切りに出版社による建築誌が相次いで発刊された。『新建築』と『国際建築』という長命が保たれた市販建築誌もこのころ誕生している。本項では、『建築世界』誌以降の出版社による市販誌の特徴について、その建築出版組織の性質を軸としながら検討をくわえる。

a 建築画報社による雑誌『建築画報』

建築画報社と『建築画報』誌については、河東義之がその創刊期を検証した論考が存在し、ついで菊岡俱也も解題を行っているが¹⁸⁵、20年あまりに及ぶとみられる出版活動の全体像についてはいまだに明らかとされていない。『建築画報』誌の創刊号は不明とされ、河東は1910年12月と推定し、菊岡は「翌1911年1月の可能性が強い」とする。河東は「初期の内容は、題名が示すように〈画報〉を中心としたもので、全体で約40頁の半分近くを良質のアート紙とし、内外の新しい写真を掲載していた」とし、菊岡は「内外・古今の建築作品を写真で豊富に紹介」する建築誌の「伝統」を「最初に実践したのが本誌」だったと評している。

建築画報社からは同様の趣旨によって『西洋建築図集』(全12冊、1914～1915年)と写真集『東京百建築』(1915年)も刊行された。後者の「はしがき」では「欧米の都市では、必ず其の都市の建築を主とした写真帖」があるのに日本にはない「欠点を補はん」とされ、「多年『建築画報』を発行し、古建築の研究と共に、新建築の紹介に努めて来た我が社」の企図が示されている。同書の奥付には「編集者」として黒田鵬

¹⁸⁴ 河東義之による建築系の雑誌リストには、1906年に『建築新報』という雑誌の存在が示されているが(河東「文献：明治創刊の雑誌一覧」(『都市住宅』1974年10月号、pp.70-71)、建築系の雑誌を網羅的に調査した菊岡俱也は「『建築新報』(詳細不明)」としている(菊岡「『建築世界』、『日本近代建築・土木・都市・住宅雑誌目次総覧』、第1期第2巻、p.7、柏書房、1990年)。

¹⁸⁵ 河東義之「文献：《建築画報》」(『都市住宅』1974年9月号、pp.58-59)、菊岡俱也「『建築画報』、『日本近代建築・土木・都市・住宅雑誌目次総覧』、第1期第4巻、p.7、柏書房、1990年)

心の名が確認できる。河東によれば、黒田は1915年1月号から『建築画報』誌の主幹を務め、その期間は1年間にとどまったものの、建築評論の記事が充実化されていった。それまでの同誌の編集局は「当時建築界に於ては、すべて無名に近い人達」だったが、「建築評論という新しい分野を開拓しつつあった文学士黒田」の加入によって、同誌が専門誌としての地位を築いていく様相を河東は特記した。全体をつうじては「記事の全く無い号も珍らしくはなかったが、昭和に入ってから、数々のユニークな特集号を発刊して多くの読者を獲得した」と河東は述べている。

黒田以前の『建築画報』誌の編集者としては、最初に確認できる発行兼編集人がのちに洪洋社を興した高梨由太郎であり、第3巻第2号(1912年2月号)から諏訪方季^{たかすえ}が発行兼編集人として奥付に記された¹⁸⁶。高梨と洪洋社については第3章で取り上げる。諏訪方季は当時、電話機の特許を扱う「諏訪工業事務所」を経営していた。

従来の研究において指摘された形跡は確認できないが、『建築画報』誌の「創刊第十五周年記念号」(第15巻第10号、1924年10月号)に創刊の経緯が記録されている。「建築画報の経営は初めから一般専門雑誌とは大に趣を異にして居て経営者は電話器業界の重鎮諏訪方季氏」であり、「当時の記者としては現洪洋社主高梨由太郎氏清水健吉氏などが苦心された」という¹⁸⁷。「創刊第十五周年記念号」では、諏訪は「建築画報創刊者」という肩書で登場することからも¹⁸⁸。諏訪が建築画報社の創業者であったことが認められる。同号で諏訪自身は以下のように創刊時を回顧した。

私が此建築画報と云ふものを始めたのは今を去る十五年前である……此建築画報が産声を上げたのは営利の爲めではなかつた。自分の專業が電気技術者であつて専門の見地から其当時建築設計者の多くが電気設備特に電話に対する用意が忘れられて居つて私が電話を専門に新しき事業を始めた為めの工事に着手する度毎に折角構成せられた建築美を損ずる(斯く申すと今の建築技術者は不振に思はれるかも知れぬが之は其当時の事実話である)ことが多々あつた為め此雑誌を発行して一は自己天職の罪ほろぼしとなし一は建築の参考書となし家は亡びるとも其面影を保存せしめたい存念に外ならかつたのである。

諏訪方季「建築画報創刊十五周年記念に當りて」(『建築画報』1924年10月号、p.6)

¹⁸⁶ 菊岡、前掲185『『建築画報』』、p.7

¹⁸⁷ 満寿志「創刊十五周年記念に際して——建築画報の生ひ立ち」(『建築画報』1924年10月号、pp.2-4)

¹⁸⁸ 諏訪方季「建築画報創刊十五周年記念に當りて」(『建築画報』1924年10月号、p.6)

やはり創刊当時の状況を知る別の寄稿者は、諏訪が「私設電話の注文を受けて其配線などをやられる時に建築家なり施主が其付帯工事に対する準備計画が少しもない上にそこに配線しては美観を害する」だけでなく「最初の設計に準備さへ出来て居れば実に安々と出来る」ことを「嘆じ」て「注意を与ふ事は技術者の任務だと云ふ考へから其手段として建築画報を思ひ立たれた」と証言している¹⁸⁹。『建築画報』誌の創刊は、電気技術者による建築界への電気設備計画の啓蒙活動としての性格が色濃かったことが認められる。

b 建築ト裝飾社による雑誌『建築ト裝飾』

『建築画報』誌と同時期に「建築ト裝飾社」から創刊された『建築ト裝飾』誌については、河東義之による文献解題¹⁹⁰だけが長らく唯一の論考となっていたが、2012年に宮脇哲司が論考「建築誌『建築ト裝飾』、編集人・塚本重五郎に関する研究」¹⁹¹を発表した。河東と宮脇はともに、創刊者で編集人の塚本重五郎の経歴について紹介している。塚本は1883（明治16）年に東京で生まれ、1898年に高等工業付属職工徒弟学校木工科を卒業後、臨時海軍建築部や宮内省内匠寮などで技手として活躍するかたわらで、早稲田工手学校の製図担当講師、『建築ト裝飾』の編集・発行のほか、1914年には「建築普及会」を設立して『建築設計講義録』を刊行し、1921年に逝去した¹⁹²。『建築ト裝飾』の編集・発行については宮脇が経過をたどっており¹⁹³、第2巻3号より中村鎮が編集に参加し、同巻8号より発行所が南北社に変更された。

宮脇は『建築ト裝飾』の特徴をまとめ、「建築趣味の普及という目的が時代の要求を満たすものであった」「建築のアカデミズムと技術者・学生の接点として機能した」「建築運動論媒体の嚆矢であった」「中堅技術者・塚本重五郎という人物の実践の場として上記の特徴が生じ、雑誌媒体として結実した」と評している。塚本による建築ト裝飾

¹⁸⁹ 前掲 187 に同じ。

¹⁹⁰ 河東義之「文献：《建築ト裝飾》」（『都市住宅』1974年8月号、p.42）

¹⁹¹ 宮脇哲司「建築誌『建築ト裝飾』、編集人・塚本重五郎に関する研究」（日本建築学会大会学術講演梗概集、2012年9月建築歴史・意匠 pp149-150）

¹⁹² 経歴の出典については「故正員塚本重五郎君」（『建築雑誌』1921年8月号、p.69）と考えられ、「高等工業付属職工徒弟学校」は「東京職工学校附属職工徒弟学校」（現・東京工業大学附属科学技術高等学校の前身）を指すものと考えられる。

¹⁹³ 前掲 191 に同じ。

社は、その建築出版組織としての性格をみると、前節までにみてきた浪和会や建築学攻究会と同様に、啓蒙意識の高い技術者たちによる出版活動という共通点を指摘できる。さらに、塚本重五郎という建築家個人の思想が雑誌媒体として具現化していた点において、建築出版組織の新たな展開を見いだすこともできる。

c 1920年代以降の市販建築誌と洪洋社の雑誌刊行

1920年以降に創刊された市販の建築誌としては、おもにつぎのような誌名が知られている。第1節第2項で触れた洪洋社からは、建築図集などの多くの図書が刊行される一方で、雑誌としても『新住宅』（1920年1月号～1923年9月号）と『建築新潮』（1924年1月号～1931年8月号）、『建築工芸アイシーオール』（1931年11月号～1936年8月号）が刊行されていた。建築誌を主体とする建築出版組織としては、国際建築協会からは『国際建築時論』（1925年1月号～1927年5月号）とその改題・後身となる『国際建築』（1928年1月号～1940年9月号、1950年7月号～1967年6月号）が刊行され、新建築社からは『新建築』（1925年8月号～1944年12月号、1946年1月号～）が刊行された。構成社書房については従来ほとんど注目されておらず、第4章でその出版活動の全容を検証するが、同書房の雑誌としては『建築紀元』（1929年10月号～1930年3月号）と『建築時潮』（1930年7月号～1931年6月号）が刊行された。

本目と次目d、eでは、これらの市販誌の特徴について、その出版組織の性質とともに検討する。その多くの建築誌においてモダニズム建築をはじめとする新しい動向が積極的に紹介されており、次節で述べる建築運動体による出版活動と比較検討しうると考えられる。なお、同時期に創刊された建築誌としては、帝国工業教育会の『平民建築』（1920年3月号～1922年1月号）とその改題・後身とされる『建築の普及』（1922年3月号～1926年9月号）、建築学研究会の『建築学研究』（発行：星野書店、1927年5月号～1941年ごろ、1947年ごろ～1950年ごろ）、金星堂の『建築・造園・工芸』（1931年6月号～1932年ごろ）などの存在も指摘できる¹⁹⁴。

洪洋社の出版活動の詳細は第3章で検証するように、同社の創業刊行物として1912

¹⁹⁴ 金星堂は1918年に創業された現存の出版社である。戦前期はおもに文芸書を刊行していた。さらに、同時期に創刊された建築系協会の会誌としては、満洲建築協会の『満洲建築協会雑誌』（1921年1月号～1933年12月号）、朝鮮建築会の『朝鮮と建築』（1922年6月号～1944年ごろ）などが挙げられる。後者については金珠也『日本強占期の建築団体「朝鮮建築会」の機関誌『朝鮮と建築』と住宅改良運動に関する基礎的研究』（京都工芸繊維大学博士論文、1999年）などの先行研究が認められる。

年から1914年ごろに雑誌『建築写真時報』誌を刊行していたが、その業績は振るわなかったとみられ、叢書や単行本によるプレート図集に注力することで、建築専門出版社としての活動を軌道にのせていったと考えられる。そうした洪洋社がふたたび雑誌刊行に挑んだのが1920年1月創刊の『新住宅』誌であった。同誌については、先行して刊行されていた住宅改良会の機関誌『住宅』（1916年8月号～1943年12月号）との著者の重複や記事の類似性が内田青蔵によって指摘されている¹⁹⁵。また、洪洋社の社主・高梨由太郎が後年に回顧して「文化住宅熱の勃興時代に『新住宅』といふ半家庭的な雑誌」¹⁹⁶を立ち上げたと記しており、同誌の顧問の2名は大熊喜邦と佐藤功一は住宅改良会の顧問を務めていたことから、洪洋社が一度は失敗した建築誌を発刊するにあたって、住宅改良会の出版活動は大きな模範となったものと考えられる。

『新住宅』誌は関東大震災ののち休刊となり、翌1924年1月に『建築新潮』と改題されて洪洋社の雑誌刊行は再開された。『建築新潮』誌となってからは、震災復興の機運によって建築への社会的な関心が高まるなかで、改題前の住宅分野から建築全般へと題材が移行された。さらに、同誌の記事の傾向については「若手の建築運動を他のどの雑誌にもまして数多く取り上げていることであろう」¹⁹⁷と石田潤一郎が指摘したように、創宇社建築会やバラック装飾社などの展覧会を繰り返して紹介している。次節で述べるように、分離派建築会の展覧会作品集が岩波書店の単行本から『建築新潮』誌の特集形式へと移行されたのも、その一環といえる。

『建築新潮』誌が1931年8月号をもって休刊となった「最大の理由は不況の祟り」とされたが、まもなく川喜田煉七郎が洪洋社の広告用小冊子の編集を受託するかたちで¹⁹⁸、新たな雑誌『建築工芸アイシーオール』が1931年11月号に創刊された。同誌は、川喜田の主宰する新建築工芸学院の機関誌へと脱皮させたものとされ¹⁹⁹、いわば川喜田独自による近代建築運動の機関誌ともいえる。つまり、1920年代以降の洪洋社における3つの建築誌については、そのテーマが住宅から建築全般へ、さらに近代建築運動へと展開していった様相が認められる。

¹⁹⁵ 内田青蔵「解題」（『雑誌『住宅』〔復刻版〕第1巻 1916年8月～1917年12月号』、pp.39-41、柏書房、2001年）

¹⁹⁶ 「休刊の言葉」（『建築時潮』1931年6月号、p.1）

¹⁹⁷ 石田潤一郎『『新住宅』『建築新潮』』（『日本近代 建築・土木・都市・住宅 雑誌目次総覧』、第2期第1巻、p.141、菊岡俱也、藤井肇男編、柏書房、1991年）

¹⁹⁸ 村松貞次郎「日本建築界のアウトサイダー・川喜田煉七郎」（前掲165、p.273）

¹⁹⁹ 前掲198に同じ。

d 新建築社による雑誌『新建築』

洪洋社の雑誌にみられた住宅誌から建築誌へと転換する様相は、新建築社の雑誌『新建築』にも同様に観察できる。同誌の転換については、1925年8月の創刊時の副題が「住宅之研究雑誌」と付されていたことに示されるように、これまでも繰り返し指摘されてきた。同誌の歴史について整理した先行研究としては、『新建築50年に見る建築昭和史』（新建築1975年12月臨時増刊）が監修・解説の佐々木宏によって同誌の歩みと日本近代建築史の関係性が論述され、『現代建築の軌跡——新建築70周年記念号』（新建築1995年12月臨時増刊）はその誌面のダイジェスト版が軸とされながら、研究者たちによる多数の論考がコラムとして付されることで同書の内容を深めている。また、同誌の戦前期全号が2010年に復刻刊行された際の石田潤一郎による解題「『新建築』の創刊前後——解題にかえて」は、「創刊前年の一九二四（大正一三）年から一九三〇（昭和五）年の東京進出までにしぼって事実関係を整理」²⁰⁰することが論考の目的とされた。本項では、おもに佐々木と石田の論考にもとづきながら、新建築社設立時の出版活動の特徴について検討をくわえる。

新建築社を創業した吉岡保五郎は、1888（明治21）年2月15日に大阪で生まれ、1911年に大阪の東洋学校文科を卒業して満州日日新聞記者を務め、満州で新聞社を経営していた²⁰¹。1924年ごろ大阪に戻った吉岡は、当地で1920年に結成された住宅改造会の会誌『住宅研究』（1921年1月創刊）が経営不振に陥っていた支援を要請され、これが建築誌と吉岡の出会いとなり、同誌の後ろ盾であった武田五一とも知遇をえることとなったという。吉岡は、『住宅研究』誌1924年10月号で編集人を西村廣三郎と共同で務め、翌11月号で発行人を務めることとなった²⁰²。石田の論考によれば、『住宅研究』誌のこの号をもって吉岡が終刊したものと推測を引用する一方で、吉岡が関与する前後の同誌の違いについては「挿図においても、それまではペン書きの図面

²⁰⁰ 石田潤一郎「『新建築』の創刊前後——解題にかえて」（『『新建築』解題・総目次・索引』、p.7、不二出版、2010年）

²⁰¹ 石田、前掲200、pp.8-9では、満州で吉岡が経営していた新聞社は「満州経済日報社」（村松貞次郎「故吉岡保五郎氏の業績」、『新建築』1972年12月号、pp.126-127）と「大連経済日報」（谷元二編『大衆人事録 第十四版 東京編』帝国秘密探偵社、1942年の復刻版である『昭和人名辞典 第1巻 東京編』p.1080、日本図書センター、1987年）の二説を指摘している。

²⁰² 石田、前掲200、pp.8-12によれば、住宅改造会を主導したのは建築家・登尾源一であり、その機関誌『住宅研究』は1923年から1924年10月号までは発行所が「文化建築社」（主宰・登尾）で編集人が吉岡と西村廣三郎、翌11月号の発行所は「住宅研究会」（主宰・武田、参与・吉岡）、発行人・吉岡、編集人・西村とされる。

が主であったのに対し、撮り下ろしの写真が増えている。これは、吉岡が大型カメラでの撮影技術を体得していたことと深く関わっているだろう²⁰³と述べている。また、当時の東京では、前述の住宅改良会による『住宅』と洪洋社による『新住宅』といった住宅専門誌が刊行されていたが、大阪に類書がなかったことを石田は指摘する。

いわばこうした前史を経て、翌1925年8月に大阪で創刊された『新建築』誌の発行所となる新建築社の設立については、京都帝国大学建築学科の創設者である武田五一教授の支援があったことは広く知られてきた。実際に同誌の編集についても、当時の大学院生などの武田の門下生があたったとされる。神代雄一郎は東大や早大などより設置が後発だった「京大建築学科の機関誌」ともとらえているが、これを石田は「やや深読みすぎるといえそう」とし、執筆者が出身大学に無関係に選ばれていたことを指摘する²⁰⁴。そして武田の設計活動がモニュメンタルな建築だけでなく、若いころから住宅も重視していたことから、吉岡と「住宅観が近かったことに目を向けるべき」とする²⁰⁵。また石田は、当時の関西最大の建築誌であった『建築と社会』が、武田と東大の同期生だった「片岡安のワンマン雑誌的な性格が強かった」ことを指摘し、「都市経営的な視点」による片岡の関心とは武田が合わなかったため、「社会的評価の高からぬ『住宅』や『住宅研究』に深入りした」と推し量り、「自分と同質の漸進主義的な住宅観を持ち、ジャーナリストとしても信頼できそうな吉岡」と手を携えたとみている²⁰⁶。

その結果として、『新建築』という誌名の命名は武田であり、副題の〈住宅研究之雑誌〉というのは吉岡自身による」雑誌が誕生したものの、吉岡の「当初の意図は素人のための建築啓蒙雑誌であったが、予想に反して読者層も限定され、発行部数も伸びなかったようである。ましてや建築の専門家の間ではあまり注目されなかった」と佐々木宏は述べている²⁰⁷。この苦境を脱するために誌面を刷新したのは、「専従者のように編集に深く関与した」²⁰⁸とされる武田門下の岡田孝男だった。当時の岡田は、京大の選科生としての課程を終えたのちに1927年に同大建築学科に入学したため、学

²⁰³ 石田、前掲200、pp.12-13

²⁰⁴ 石田、前掲200、pp.14-15

²⁰⁵ 石田、前掲200、p.16

²⁰⁶ 石田、前掲200、p.16

²⁰⁷ 佐々木宏監修・解説『新建築50年に見る建築昭和史』、p.2、新建築1975年12月臨時増刊)

²⁰⁸ 前掲207に同じ。

課を修了して遊んでいたのを武田に目をつけられ、編集メンバーのひとりに指名されたという²⁰⁹。岡田の実行した方策は、海外の建築家へ手紙を書いて資料を取り寄せたことは佐々木も石田も指摘している。1926年9月号から連載「メンデルゾーンの観たるライト」が開始され、同年11月号の安井武雄特集を送ったのち、1928年はJ.J.P.アウト、P.ペーレンス、ソヴィエト建築、E.メンデルゾーン、H.ペルツイヒと特集が組まれていった。

このように「〈建築家の作品集〉という形式」を採りながら専門誌としての拡充が図られていた一方で、国内の建築運動体と『新建築』誌の関係性については良好でなかったことを佐々木は指摘する²¹⁰。同じ関西を基盤とする数少ない建築運動体である日本インターナショナル建築会は、早稲田大学の出身者を中心として構成されていたため、京大色の濃い『新建築』誌には協力的でなかったこと、分離派建築会は同誌が1929年1月号で「石本喜久治作品号」としてひとりの会員のみをクローズアップしたためにほかのメンバーに強く反発されていたという。こうした傾向は、近代建築運動の舞台が東京に重きがあったという事情を差し引いたとしても、同時代の建築誌である『建築新潮』や『国際建築』との重要な差異として認められる。

そして『新建築』1930年11月号から東京に進出する新建築社の経緯については、石田はつぎのような要因を指摘する²¹¹。建築全般を扱うようになると東京の類書と比較され、関西を中心とした掲載作品に「マイナーかつローカルな印象は免れない」ようになっていったこと、1929年からの世界不況による雑誌全般の売れ行きが落ち込んでいったこと。一方で「在京の既存雑誌が退潮気味であったことも見落とせない」とし、『建築世界』誌は「技術的・実務的な記事」が多く掲載作品は「保守的な傾向」がつづき、『建築新潮』誌は「書き手が固定化して同人雑誌化」してページ数も薄く、『建築画報』誌は「写真はきれいだが、掲載されている作品のレベルが低い」ことを指摘した石田は、「こうした低調さを見て、これなら勝てるという計算もあったのではないか」と述べる。

新建築社の東京進出にあたって白羽の矢がたったのは、前年の1929年に京大を卒業して大蔵省営繕に就職したばかりの安田清であった。吉岡保五郎は武田五一の紹介状

²⁰⁹ 石田、前掲 200、pp.15-16。なお、石田が引用した資料は『京都大学工学部建築学教室六十年史』の座談会とされる（同編集委員会、1980年、p.219）。

²¹⁰ 佐々木、前掲 207、p.3

²¹¹ 石田、前掲 200、pp.20-22

を携えて訪ねたとされ、京大卒業生の最若手だったために編集に任を押しつけられるかたちとなった安田だが、「大蔵省の同僚を率いて獅子奮迅の大活躍を見せ」た。刷新された誌面は「舐めるようなカメラと、若やいだ皮肉っぽい筆致の解説は新しい建築ジャーナリズムの誕生を告げるものであった」と石田は指摘する。そして東京進出翌年の1931年には、『新建築』の変貌は確かなもの」となり『新興建築』と様式主義の双方に目を配って、優品はどちらの側であっても掲載し、「合理主義的な建築観の持ち主」であった安田の「解説文は分析的で、露骨な党派性を感じさせない」ことに石田は着目する。そして吉岡の葬儀における安田の弔辞が引用され、安田ら大蔵省の官僚建築家たちが毎晩のように吉岡宅に集まって編集を行い²¹²、「清新な建築家の方々の作品を前に」して吉岡と「共にカメラをのぞいてアングルを定めた」こと、そして戦前期の最大手だった『建築世界』誌の発行部数を『新建築』が追い抜いたときの感激が証言されている。

新建築社の創設から東京進出までの動向には、住宅専門から建築一般へと移行した関東大震災前後の建築誌の展開が示されているだけでなく、国内の近代建築運動の機関誌とは一線を画し、ときに内外のモダニズム建築と様式建築がともに紹介する編集活動の場が、若手の官僚建築家たちに継続的に与えられていたことが示されている。それは建築専門ではない一般のジャーナリストであり出版人であった社主・吉岡の出版社経営と写真技術への感性をもって、建築誌が市販の情報媒体として均衡が形成されていった姿ともとらえることができる。

e 国際建築協会による雑誌『国際建築』²¹³

新建築社とほぼ同時期に東京で設立されたのが、雑誌『国際建築』の刊行で知られる国際建築協会である。同誌については、戦前戦後にわたって欧米のモダニズム建築をわが国に紹介した代表的な雑誌として評されてきた。その評価は、同誌の編集長を

²¹² 1937年に東大を卒業して大蔵省営繕に務めた小場晴夫も、その勤務後に新建築社に集まって編集作業していたことを証言しており、そのメンバーは安田清志ら8名程度だったと記している。こうした安田らの編集については、佐々木宏の論考に詳しい（たとえば佐々木宏『『新建築』誌を編集した大蔵省の建築家——結実した安田清らの努力』（『真相の近代建築——数奇な運命の建築家たち』、pp.124-125、鹿島出版会、2012年）。

²¹³ 本項は、拙稿「小山正和——日本的モダニズムの雑誌編集人」（『建築文化』2000年1月号、特集「日本モダニズムの30人 モダニスト再考 II——国内編」pp.98-99（のちに一部を改稿し、『モダニスト再考 [日本編]——建築の20世紀はここから始まった』所収、pp.108-115、彰国社編・刊、2017年）をもとにしており、一部にその後の知見などを加筆・訂正したものである。

長く務めた小山正和が編集長退任後の1966年に授与された日本建築学会賞（業績）の「推薦理由」に象徴されているといえる²¹⁴。すなわち、わが国で「多くの建築家、学生等が、この雑誌を通じて世界の建築の新風を学び、現在の日本の建築界の隆盛に対して一つの大きな役割を果たした」とされ、「特に戦時中軍国主義の流れの中に多くの出版物が押し流されて行った」なかでも「小山君のとった態度は終始一貫」しており、小山の「信じて止まなかった建築の発展の動向を進めることに努力」したと評された。戦時下の圧政に対するモダニズム建築の抵抗を強調する姿勢は、本章第1節第1項で述べたように、建築誌の歩みを近代建築運動とその思潮の闘争史とみなす宮内嘉久による建築ジャーナリズムの歴史観との共通性を指摘できる。小山への日本建築学会賞の表彰名は「近代建築思潮の導入育成についての出版活動」とされ、モダニズムをめぐる思潮がキーワードとされた。その推薦理由の結びは「輝かしい日本建築の伝統の上に築きあげられた現代建築のデザインは今や世界的地位を保っているが、このような発展をもたらした基盤の一つとして、雑誌『国際建築』を通じた小山君の努力があったといえよう」と締めくくられた。わが国におけるモダニズム建築が戦前期の苦難の導入期を経て、実作の設計・建設活動が1960年代に盛期を迎えた、モダニズムの導入と実践を小山とともに歩んだ同時代性が示された評ともいえる。

小山正和に関する叙述は、『国際建築』誌の編集部にて小山に直接師事した宮内嘉久によってその仕事ぶりが紹介される一方で²¹⁵。その建築史上の評価を最初に試みたのは1990年の大川三雄による論考「建築ジャーナリズムの『昭和』」²¹⁶と考えられることは序章で述べた。昭和戦前戦後の建築誌の展開について系統づけることを試みた先駆的な論考であり、昭和戦前期は『国際建築』を軸に、戦後期は『新建築』を軸に論述されている。筆者も小山正和についての短評を2000年に『建築文化』誌で発表し、わが国におけるモダニズム建築の導入の特徴をもとに小山の事績の評価を試みた²¹⁷。

拙稿とほぼ同時期には、花田佳明と神戸芸術工科大学花田研究室が小山正和の遺族ら関係者への聞き取り調査も行いながら『国際建築』誌の研究に取り組み、その成果の一部は「建築雑誌『国際建築』研究1・2」として2001年の日本建築学会大会にて

²¹⁴ 「日本建築学会賞・業績 近代建築思潮の導入と育成についての出版活動 小山正和」（『建築雑誌』、1966年7月号、pp.359-360）

²¹⁵ たとえば宮内嘉久「小山学校」（『建築ジャーナリズム無頼』、pp.43-46、晶文社、1994年）

²¹⁶ 大川三雄「建築ジャーナリズムの『昭和』」（『昭和彩譜』pp.139-144、シーアイ化成、1990年）

²¹⁷ 拙稿、前掲213

報告された²¹⁸。同研究は小山の来歴を述べたうえで、戦前の創刊から戦後の終刊にかけての同誌の変遷を5期にわけて整理しながら、特集テーマや執筆者の傾向を分析しながら、海外情報の比率やタイムラグを検証している。さらに2009～2010年には、『国際建築』の戦前期全号の復刻版が11巻編成で刊行され、その第1巻の冒頭には復刊を監修した内田青蔵による解題が付された²¹⁹。本項では、上記の先行研究による成果を参照しながら、『国際建築』誌の創刊期となる1920年代の国際建築協会の活動を中心としてその特徴について検討をくわえる。

『国際建築』誌の発行元となった国際建築協会の設立経緯については、現時点で明確にされていない。同誌の前身となる『国際建築時論』は1925年1月に創刊されていることから、その発刊準備や編集作業の時間を考慮すると、遅くともその前年の1924年には国際建築協会が活動を開始していたものと考えられる。同協会については、早稲田大学建築学科の卒業生によるグループであったことが小山自著の経歴に記されるとともに²²⁰、先行研究でも繰り返し指摘されてきた。

同誌の編集兼発行人として奥付に記された渡辺虎一は早稲田大学建築学科1913年卒の第一期生であり、創刊号の執筆者8名は今井兼次（同1919年卒）や桜井省吾（同1920年卒）など全員が早大建築学科の卒業生であったことが内田によって指摘されている²²¹。今井兼次らの関連資料の追跡調査などが今後の課題として想定されるが、『国際建築時論』創刊期における国際建築協会の活動は同誌の刊行以外が確認できず、また本章でこれまでみてきた建築学研究会や建築ト裝飾社など、建築の近代教育を受けた建築家たちによる自発的な出版活動の展開をふまえるならば、国際建築協会はその機関誌『国際建築時論』の刊行を主目的として早大建築学科の卒業生によって設立された愛好家のグループと考えられる。

編集兼発行人の渡辺虎一については、1927年竣工の東京廻米問屋市場（のち食糧ビル）を渡辺事務所として設計していることから、『国際建築時論』時代の国際建築協会

²¹⁸ 花田、石坂、前掲1「建築雑誌『国際建築』研究1・2」。この発表に先立って、石坂の修士論文「雑誌・『国際建築』研究——昭和期の建築界におけるその位置付け」は2001年度日本建築学会優秀修士論文賞を授与されている。また花田は、その編著書『植田実の編集現場』において小山のすぐれた短評を著している（pp.113-115、ラトルズ、2010年）。同書では「日本の建築ジャーナリズム史の中で」とする章が設けられ、小山に連なる戦後建築誌の編集者5名が紹介された。

²¹⁹ 内田青蔵『『国際建築』の復刻に際して』（『国際建築時論』復刻版、第1巻、pp.3-11、柏書房、2009年）

²²⁰ 前掲214、p.359

²²¹ 内田、前掲219、p.5

は編集・出版の専任者は存在しなかったものと推定される。そのためか、創刊2年後の1927年2月号には発行が遅れたことの詫び文が「編集室」の名義で記されるようになり、同年5月号をもって休刊を余儀なくされている。『国際建築時論』時代の誌面の特徴としては、海外作品はドイツ表現主義が中心で日本の古建築も紹介されていたが²²²、全体のページ数の割合では海外作品の記事がきわめて限られ、創刊半年後の1925年7月号の表紙タイトルでは「国際」の文字が小さくなり、翌1926年7月号でさらに「国際」が縮小された経緯から、海外情報の入手の困難さを内田が指摘している²²³。『国際建築時論』が1927年5月号で休刊されて約半年後、同誌を改題するかたちで1928年1月に創刊されたのが雑誌『国際建築』であり、その編集長に小山正和が就いた。同協会を継ぐ前後をふくめた小山の来歴について、前述の日本建築学会賞受賞時に小山自身が著した来歴をもとに叙述する。

1892年に京都で生まれた小山正和は、京都府立京都第二中学校を卒業した1906年に第三高等学校第二部甲類（工科）へ入学し、いわゆるエリートコースを古都で歩んでいったが、「在校3年にして中退」した。やがて1914年に上京して建築世界社に入社し、「月刊『建築世界』を編集することによって建築界にデビュー（生涯にわたる編集生活のはじまり）」したと記している。同社で働きながら同年に早稲田大学建築学科へ入学し、1年後に「英語科へ転じ」²²⁴て1919年に卒業した。同大建築学科の教授を務めていた岡田信一郎の推薦によって建材商社の明正社に就職し、系列会社の「都市工業株式会社」の創設に従事したとされる。在職2年あまりで起業して建材商社「日米建築商社」を創設し、関東大震災時には「なら屋小山商店」を営んで「主として堅木檜材の挽材（家具商卸し）、建築用椽甲板を販売」していたとされる。こうして建材商社を営む一方で、『建築世界』の編集にもかかわりつづけ、その「所載の建築作品は依然自カメラアングルよる」もの、つまり建築写真を小山が撮っていたという。後年の日本建築学会賞受賞の推薦理由が著された文章では「建築作品の撮影にあたってはピントグラスまでを自分でのぞき、レイアウトの隅々まで目を通さなければ気がすまないという態度は関係者のすべてが認める点」とされていることから、『国際建築』創刊以前の約10年にわたる『建築世界』誌の編集経験のなかで、とくに建築写真の撮影については一定以上の技量を備えていたものと認められる。

²²² 花田、石坂、前掲1「建築雑誌『国際建築』の概要について——建築雑誌『国際建築』研究1」、p.653

²²³ 内田、前掲219

²²⁴ 早稲田大学の当時における名称では「英文学科」を卒業したものとみられる。

国際建築協会が小山に受け継がれ、その機関誌の誌名も『国際建築』と改題されたのを機に、編集体制は同人制が採られた。その同人は「蔵田周忠、菅原栄蔵、能勢久一郎ほか」であったことが小山によって記されている。蔵田は早稲田大学建築学科選科を修了しているものの、菅原と能勢は早大の卒業生ではなく、蔵田と菅原はともに三橋四郎の建築事務所に在籍していた時期があり、三橋が『建築世界』誌を支援して蔵田も同誌の編集に携わっていたことから、「小山が親しい雑誌編集の経験者たちに声を掛けて集めたものと考えられる」と内田は指摘する²²⁵。

小山によって誌名を『国際建築』と改題され、その英題として「THE INTERNATIONAL ARCHITECTURE」²²⁶が表紙に併記された同誌は、文字どおりに「国際」を看板として誌面が刷新されていく。その分水嶺とみられる記事としては、たとえば改題・創刊の年末から開始された蔵田周忠の連載「国際雑記」（1928年12月号～1930年10月号）や、改題翌年に2号連続で送られたル・コルビュジエ特集（1929年5月号、6月号）などがよく知られている。前者は、編集同人・蔵田による海外建築情報のコーナーで、当初は海外文献の翻訳などをつうじていたが、1930年3月の蔵田の渡欧後は各国の最新情報を現地からリポートされた。蔵田の渡欧目的のひとつが『国際建築』誌の特派員として各地の動向を伝えることだったともされる²²⁷。後者はわが国の戦前期におけるル・コルビュジエへの傾倒の頂点を示すもののひとつとされ²²⁸、特定の建築家が2号連続で特集された同誌唯一の記事となる。これを機に各号でテーマを絞った特集形式が基本となっていき、ジードルンクや H. ヘーリングなど欧米の新しい建築思潮や作品を即時的に報じる記事によって誌面が埋められていった²²⁹。

これらの最大の情報源とされたのは、雑誌交換で提携していた欧米の建築誌である

²²⁵ 内田、前掲 219、p.8

²²⁶ 『国際建築時論』の時代は、英題として「International Architectural Review」が表紙に併記されていた。

²²⁷ 山脇巖『続・樗』、pp.65-66、井上書院 1973 年

²²⁸ 藤岡洋保「大正末期から昭和戦前の日本の建築界におけるル・コルビュジエの評価」（日本建築学会計画系論文報告集、第 371 号、p.114、1987 年 1 月）

²²⁹ 本章第 IV 期にあたる『国際建築』誌の 1928 年から 1931 年における特集としては、「アメリカ建築」（F. L. ライト、1929 年 9 月号）、「新建築思潮」（創宇社講演会 1929 年 11 月号）、「W. M. デュドック」（1930 年 1 月号）、「鉄筋混凝土形態」（1930 年 5 月号）、「ロシアの新建築」（1930 年 6 月号）、「R. ノイトラ」（1930 年 7 月号）、「水泳プール」（1930 年 8 月号）、「ジードルンク」（1930 年 9 月号）、「創宇社建築展」（1930 年 11 月号）、「新建築思潮（第 2 回創宇社講演会、1930 年 12 月号）」、「新住宅」（1931 年 3 月号）、「コンペティション」号 1931 年 6 月号）、「ドイツ建築博覧会 1931 年 7 月号）」、「H. ヘーリング 1931 年 10 月号）」、「新住宅」（1931 年 12 月号）年 12 月号）が確認できる。

う。作家特集をはじめ、ビルディングタイプや国別に焦点を当てた特集も組まれていく。モダニズムの建築が日本国内で実現されるようになると、乾式工法や鋼管家具、アレキサンダー・クラインの室内動線論など、設計や建設の実践に即した特集が組まれていった。

国内の動向についても注目すべき特集は少なくない。たとえば、創宇社建築会主催の第2回「新建築思潮講演会」は1930年代初頭におけるモダニズムへの理解の深化を示すものとして著名だが、その全貌を収録している（1930年12月号）。また、ウクライナ劇場の国際コンペにてグロピウスなどを押し退けて堂々の4等入選を果たした川喜田煉七郎の応募案を克明に紹介しながら、同じ号において東京帝室博物館コンペの入選案と前川國男の落選案を掲載し、「コンペティション号」とする編集上の演出をみせた（1931年6月号）。前川に「負ければ賊軍」、川喜田には帝室博物館コンペの保守性を批判する論文を書かせたのは、小山だったに違いない。一方では、タウトの来日を契機としたモダニズムの視座からの伝統建築再考の風潮に対し、「日本建築再検」特集を数寄屋と民家の2号にわけて世に送っている（1934年1月号、7月号）。

こうした小山の編集方針は、欧米のモダニズム建築を同時代的に紹介し、それらを評価の尺度としながら、日本国内の動向についても報道していくことにあったといえる。つまり、国内外の建築情報のパイプ役を担うことによって、日本におけるモダニズム建築の導入と展開を醸成させ、少壮の建築家たちを育成する役割を果たしていった。

『国際建築』の改題・創刊号の巻末に付記された編集方針は、5項目が挙げられており、その最終項は「諸種の欧米専門誌に表はれた作品や思想文献を容易く消化して、その大勢を御知らせする事」²³⁰と締めくくられている。こうした小山と『国際建築』の姿勢は、編集同人・蔵田周忠の執筆活動にも共通している。当時群発していた建築運動体の機関誌のように、自らの主義主張を表立って振りかざすことはなく、欧米のモダニズム建築をじっくりと研究し、日本の読者に紹介することが重視されていた。運動体の機関誌の多くが短命に終わるなかで、『国際建築』は同じモダニズム路線を歩みながらも紹介役を第一義とすることで、一定の読者層を獲得し、市販誌としての軌道にのせていったのである。

小山の仕事ぶりを知るものは、建築写真の撮影から誌面レイアウトまで自らの手で

²³⁰ 「編集言」（『国際建築』1928年1月号、奥付頁、頁数なし）

行う職人氣質の強さを語り、文章でアジテートするタイプの編集者ではなかったという²³¹。取り上げるテーマや誌面構成そのものが小山にとっての主張であり、その静かなる編集行為によって、モダニズムへの信奉と雑誌の市販性のバランスが図られていたといえよう。そうした成果は、『国際建築』誌の休刊後に同誌の誌面から「住宅図版の全部を蒐めて全4巻を以て完結せしめ」²³²た図集『現代住宅 1933—1940』（1941年3月）にまとめられた。

小山が編集長に就いた1920年代後半の建築書は、専門誌の多彩な展開とともに、アルス社の『建築大講座』などの講義録シリーズが各社からつづいていた²³³。「戦前期の建築学叢書の決定版」²³⁴として名高い『高等建築学』（常盤書房）が完結したのは1935年のことである。こうした1930年前後の建築書における全集化の傾向は、モダニズム陣営にも観察できる。岸田日出刀らが国別の海外写真集『現代建築大観』（構成社書房）を全17集で完結させたのは、建築学会による『建築グラフ』シリーズの前兆ともみなされる²³⁵。川喜田煉七郎も「近代建築史」と題した連載をやはり国別にまとめている²³⁶。

建築出版活動の観点からモダニズム導入を振り返ると、近代運動として欧米で興り、日本に移入される際に書物のかたちにも再編集されることで、ある種の建築学のように大系的に整理されていった様相が浮かび上がってくる。それは、情報輸入国である日本ならではの構図といえるのであり、モダニズム建築を「容易く消化して、その大勢を御知らせする」小山の編集方針は、そうした図式を先取りしていたことを指摘できる。それは、ときにデザインの新奇性として消費されがちであったともいえるモダニズム建築に対し、着実に消化していくことを信条とする小山の姿勢そのものが、日本の建築界にとっての情報媒体としての役割を果たし、雑誌『国際建築』の個性として結実されたと考えられる。

²³¹ 花田佳明『植田実の編集現場』（113-115頁、ラトルズ、2010年）。同書では、小山とともに戦後建築誌の編集者5名が紹介され、「日本の建築ジャーナリズム史の中で」とする章立てにおいて位置づけられている。

²³² 「序文」、『現代住宅 1933—1940』第1集、p.5、1941年3月

²³³ たとえば、建築世界社『建築講義録』（1924～29年）、アルス社『建築大講座』（1926～29年）、早稲田大学出版部『早稲田大学建築講義』（1929～31年）など。

²³⁴ 内田祥哉「序」（『日本建築辞彙〔新訂〕』、i頁、中村達太郎著、太田博太郎、稲垣栄三編、中央公論美術出版社、2011年）

²³⁵ 『現代建築大観』（構成社書房、1929～31年）は岸田日出刀、堀口捨己、今井兼次、藤島亥治郎によって編まれ、その全員が『建築グラフ』（建築学会、1932～36年）に参画している。

²³⁶ 川喜田煉七郎「近代建築史」（『建築工芸アイシーオール』1932年7月号～35年12月号、洪洋社）

第6節 建築運動体による作品集と機関誌 1920年～

1-6-1 分離派建築会による建築出版活動

本節の起点は、分離派建築会の結成年となる。同会の建築史上の意義は、わが国最初の建築運動体として広く知られているが、建築出版活動の展開においても画期的な存在となったと考えられる。それは、展覧会を開催し、作品集を刊行することを活動の柱としたことである。なかでも同会の理論的リーダーだった堀口捨己は、個人で設計した建築作品について、モノグラフを刊行し、その装幀も自らデザインしている。

これまで述べてきたように、建築家たちは学協会の会誌や講義録の刊行など、建築出版活動に力を注いできたが、分離派建築会と堀口は刊行物そのものを自らの「作品」あるいは「表現行為」としてとらえていることに、従前の建築家たちの活動とは異なる大きな特徴を指摘できる。こうした観点は、藤岡洋保によって『表現者・堀口捨己——総合芸術の探求』（中央公論美術出版社、2009年）のなかで詳しく論述されている。同書のタイトルは「堀口の中では、建築設計も、研究も、著作も、本の装幀も、『表現』であるという点でつながっていた」²³⁷とする藤岡の認識にもとづき命名されたという。また、分離派建築会の復刻刊行における解題のなかで菊池潤は「運動戦略としての作品集刊行」との項を立て、「参考書的意味合いの強かった建築書籍のあり方を拡張することにも寄与したと思われる」と述べている²³⁸。本項では、これらの先行研究の成果をふまえながら、分離派建築会の史的意義について建築出版活動の観点から検討をくわえる。

「分離派建築会規則抄」における活動方針は、藤岡が指摘しているように、「一、毎年一回以上公開展覧会を開く。二、定期又は臨時に刊行物を、発行す」²³⁹と展覧会の開催と刊行物の発刊がうたわれている。分離派建築会にとって結成の機となった「習作

²³⁷ 藤岡洋保『表現者・堀口捨己——総合芸術の探求』（p.iv、中央公論美術出版社、2009年）

²³⁸ 菊池潤「分離派建築会と作品集について」（『分離派建築会 宣言と作品』分離派建築会 『分離派建築会の作品 第二刊』分離派建築会 『分離派建築会の作品 第三刊』分離派建築会・関西分離派建築会』叢書・近代日本のデザイン 25、p.382、森仁史監修、ゆまに書房、2009年）。菊池はウェブサイト「分離派建築博物館」（2016年12月24日、最終アクセス2017年1月11日、<http://www.sainet.or.jp/~junkk/>）を運営し、その同会の資料整理と公開に努めている。また、同様の復刻刊行としては『住宅論』佐野利器 『紫烟荘図集』堀口捨己／分離派建築会 『住宅双鐘居』堀口捨己』（叢書・近代日本のデザイン 56、森仁史監修ゆまに書房、2013年）も刊行され、堀口の2冊を林美佐が解題している。

²³⁹ 分離派建築会『分離派建築会宣言と作品』（p.37、岩波書店、1920年）

展」(1920年2月1日、東京帝国大学第二学生控所)こそ刊行物が伴わなかったものの、創設メンバーの東京帝大卒業直後に開催された「第1回分離派建築会展」(1920年7月18日～22日、日本橋白木屋)では、『分離派建築会宣言と作品』(岩波書店)が刊行された。同書の奥付は展覧会の初日が記載されていることから、開催にあわせて刊行されたものと考えられる。同様に第2回作品展(1921年10月20日～24日、日本橋白木屋)も開催初日の奥付による『分離派建築会の作品 第二刊』(岩波書店)が刊行された。現在の美術館・博物館における展覧会においても、図録などが開催にあわせて刊行されるが、ときに開催初日に図録刊行が間に合わないケースも発生するように²⁴⁰、展覧会の設営と図録の編集を同時に進行させるのは決してやさしくない。それらの費用は会員たちが工面して持ち寄り、作品集は岩波書店に「実費精算」のかたちで刊行にこぎつけたとされる²⁴¹。大学を卒業したばかりの6名の会員²⁴²による活動のなかで、展覧会にあわせた作品集の刊行がいかに重視されていたかをうかがい知ることができる。

3冊めの作品集となる『分離派建築会の作品 第三刊』は、1、2冊めと同じく岩波書店から1924年に刊行された。菊池による論考では²⁴³、「私見を交える誹りを覚悟」でと断ったうえで、3冊めまでの作品集の編集を事実上任されていた堀口が「作品集の刊行に踏み切り、継続した真のねらいは、既に広く知られていた芸術運動たる白樺派と同様の体裁を持つ機関紙によって、建築を芸術としてダブらせること、つまり、創造芸術としての建築の位置を既成事実化して見せる狙いが、作品集の刊行という行為に仕組まれていたものとみられる」と述べる。さらに「それまで参考書の意味合いの強かった建築書籍のあり方を拡張することにも寄与したと思われる」とも評している。『分離派建築会の作品 第三刊』には、2冊めの作品集刊行から3年間に発表された作品が第4回作品展の内容とともに収められ、第3回作品展(1923年6月30日～7月5

²⁴⁰ たとえば、展覧会「シャルロット・ペリアンと日本」(2011年10月22日～2012年1月9日、神奈川県立近代美術館 鎌倉)では同名の書籍が鹿島出版会から刊行され、筆者はその編集を担当したが、同書の見本が完成したのは展覧会の開会から1週間ほど経っていた。

²⁴¹ 滝沢真弓「分離派建築会——その正誤と自註」(『建築と社会』、1961年12月号、p.40)。藤森照信は「岩波茂雄に頼み込んで全冊買取りを条件に『分離派建築会宣言と作品』を刊行」と記している(藤森照信『日本の近代建築』下、p.170、岩波新書、1993年)

²⁴² 結成時の会員は堀口捨己、石本喜久治、山田守、滝沢真弓、森田慶一、矢田茂。のちに岡村(山口)蚊象、浜岡(蔵田)周忠、大内秀一郎が参加し、客員として川喜田煉七郎も名を連ねた。

²⁴³ 菊池、前掲238「分離派建築会と作品集について」、p.382

日)の際の作品集の刊行計画は関東大震災や堀口と石本の渡欧などの事情で実現されなかったという²⁴⁴。そして4冊めの作品集となる第5回展から最終回の第7回展までは、洪洋社の雑誌『建築新潮』へと舞台が移された²⁴⁵。この間の展覧会と会員の出版活動について、菊池の年表²⁴⁶にもとづきながら以下に整理する。

1924年 4月13日～28日「帝都復興創案展覧会出展」(東京竹之台陳列館)、5月「第2回関西展覧会」(大阪 三越)・講演会開催、5月『建築譜』(石本喜久治編著、分離派建築会刊)、7月『近代建築思潮』(濱岡周忠編、建築文化叢書第12編、洪洋社)、11月1日～7日「第4回作品展」(東京松屋)、12月『分離派建築会の作品 第三刊』(分離派建築会・関西分離派建築会、岩波書店)、12月『現代オランダ建築』(堀口捨己著、岩波書店)

1925年 展覧会、出版ともになし

1926年 1月27日～31日「第5回作品展」(東京白木屋)、3月「分離派建築会第五回展覧会作品集」(『建築新潮』1926年3月号)、6月『ロダン以後』(蔵田周忠著、中央美術社)、6月『近代英国田園住宅抄』(蔵田周忠著、建築画報社)、10月『近代の欧州建築』(大内秀一郎著、建築文化叢書第6編、洪洋社)

1927年 1月2日～26日「第6回作品展」(東京白木屋)、1月『紫烟荘図集』(分離派建築会編、洪洋社)、3月「分離派建築会第六回展覧会作品集」(『建築新潮』1927年3月号)

1928年 9月16日～20日「第7回作品展」(東京三越)、9月『住宅双鐘居』(堀口捨己編、洪洋社)、11月「分離派建築会第七回展覧会作品集」(『建築新潮』1928年11月号)

参考： 1930年12月『一混凝土住宅』(堀口捨己編、構成社書房)

1936年10月『一住宅と其庭園』(堀口捨己著、洪洋社)

²⁴⁴ 菊池、前掲238「分離派建築会と作品集について」、p.384

²⁴⁵ 『建築新潮』1926年3月号の見出しは、「特集」と表記されず、表紙は「分離派建築会第五回展覧会作品集」、目次は「分離派建築会第五回展覧会作品号」と記されている。菊池は後者の「作品号」で第5回から第7回までを表記する(菊池潤作成ウェブサイト、前掲235、「分離派建築博物館」で更新中の「分離派建築会年表」)。一方で『建築新潮』1928年11月号は、表紙も目次も「分離派建築会第七回展覧会作品集」と表記されているため、本項では「作品集」の表記で統一した。

²⁴⁶ 菊池潤「分離派建築会年表」、前掲235、「分離派建築博物館」

この間の分離派建築会による活動の実情については、創設メンバーのひとりである滝沢真弓が書き残している²⁴⁷。その記述によれば、年1回の展覧会開催と作品集刊行は「追々に会員も各自家庭をもつようになり、こういう仕事は経済的に大きな負担となってきた」なかで、2度の関西展は関西在住の「石本や森田の家に泊まり込んで展覧会や講演会をやった」とする手弁当による活動の実態が証言されている。「実費精算」による岩波書店からの作品集の刊行は「若干の借金もあったが、各自年末のボーナスから支弁した」とされるなかで、『分離派』も追々と建築界の名物 *みた* ようなものになった。そして洪洋社の『建築新潮』の特定月号が『分離派』の作品のために提供してもらえるようになった。これによってわれわれの経済的負担は著しく軽減した」と述べている。

実際に同誌の当該号における「編集室だより」によれば、「本号は第五回分離派展覧会の為に其全部を提供する事にした。斯うした試みは我国に於てはジャーナリズムとして最も新しい興味あるものだと信じて居ります。○普通の言葉で云へば臨時号とも云ふべきもので、平常と全然体裁内容を異にして居ります。日本建築界の一方の新しいムーヴメントの記録として本誌が永久に残る事を編集者は喜んで居ります」と歓迎している²⁴⁸。のちに同誌が休刊される際には「建築新潮は発刊以来儲けたといふことは無かつた」ばかりか「損ばかりしてみた」と吐露されていることから²⁴⁹、分離派建築会の作品集の継続刊行という点でも洪洋社による実質的な支援が認められる。

同社と分離派建築会との会遇については定かでないが、同会と会員による刊行物の形跡をたどるならば1924年は7月に濱岡周忠編『近代建築思潮』が洪洋社から刊行される一方で、12月に『分離派建築会の作品 第三刊』と堀口捨己著『現代オランダ建築』が岩波書店から刊行されている。そして1926年3月号の『建築新潮』で「分離派建築会第五回展覧会作品集」が特集されてから、翌年以降の同誌における第6回と第7回の作品展特集だけでなく、堀口の建築作品のモノグラフである『紫烟荘図集』と『住宅双鐘居』も洪洋社によって刊行されている。同社からの刊行物を分離派建築会会員として最初に刊行した濱岡（蔵田）周忠による仲介の有無は不明だが、1926年の時点では分離派建築会の出版活動の舞台は岩波書店から洪洋社へと移行されたことが

²⁴⁷ 滝沢真弓「分離派建築会——その正誤と自註」（『建築と社会』、1961年12月号、pp.40-41）

²⁴⁸ 『建築新潮』1926年3月号、p.16

²⁴⁹ 「休刊の言葉」（『建築新潮』1931年8月号、p.1）

認められる。

同会は1928年の第7回作品展を最後に実質的な活動がみられなくなったとされるが、堀口の建築作品のモノグラフは1930年刊行の『一混凝土住宅』が構成社書房から刊行されたのち、1936年の『一住宅と其庭園』はふたたび洪洋社から刊行された。構成社書房については第4章で検証するように、その活動期間は1929年から1931年の短期間に限られており、堀口をふくむ岸田日出刀や小池新二ら新進の建築家や評論家たちの主導による出版活動が展開されていた。したがって分離派建築会の建築出版活動における版元をたどっていくと、前半は実費精算による岩波書店、後半は雑誌誌面の提供による洪洋社と大別できるほか、堀口のモノグラフも同様に岩波書店から洪洋社への移行が確認でき、そこに堀口らが主導する構成社書房の活動が限定的に表れている。それは、建築出版活動全体の展開という観点で、建築専門出版社による近代建築運動の支援の様相を具体的に示している。

堀口捨己の建築作品のモノグラフはこうして版元の移行がみられるが、装幀のデザインに類似性が顕著なのは、藤岡洋保も指摘するところである。和紙のような風合いの無地の用紙に、書名が縦組みの均等割りで全面に箔押しで配されているのは、堀口自らの装幀によるデザインの志向が表れている。これは戦後の鹿島出版会における著作集の装幀にもおいても共通する²⁵⁰。藤岡洋保は堀口の著作も詳細に研究しており²⁵¹、建築家はその建築作品をモノグラフで刊行する行為は堀口が1927年に刊行した『紫烟荘図集』（分離派建築会編、洪洋社）が日本では最初のこととされ、写真が1ページ1点ずつ配された体裁を美術図集になぞらえている。「図集では彼が設計し満足レベルにあると感じたところだけを紹介」していたとする見解を示す藤岡は、堀口の弟子たちの証言を引いて写真のトリミングは本人によって行われ、「いつも印画紙に焼き付けたものを持ち歩いていて、折に触れてそれをトリミングしていた」ばかりか、「自分の意図をより鮮明に示すために徹底的にトリミングし、写真のサイズが小さくなるため拡大して印刷する時に粒子が荒れることはあまり気にしなかった」とされる逸話を記している。

²⁵⁰ 『庭と空間構成の伝統』（1965年）、『利休の茶室』（復刻版、1968年、初版1949年、岩波書店）、『茶室研究』（1969年）、『利休の茶』（復刻版、1970年、初版1951年、岩波書店）、『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』（1974年）、『建築論叢』（1976年）、『書院造りと数寄屋造りの研究』（学位論文復刻版、1976年、学位取得1944年、東京大学）

²⁵¹ 藤岡、前掲237、pp.164-167

こうした堀口の建築出版活動の特徴について、分離派建築会の時代の傾向をくわえるとすれば、刊行のタイミングを作品展の開催にあわせることをモノグラフなどの著書で継続していたことが指摘できる。作品集の1、2冊めは展覧会の1、2回の開催日にあわせて刊行されたが、3冊めは第4回の展覧会の翌月に刊行された。しかし、第4回展と同じ月に堀口の著書『現代オランダ建築』が同じ岩波書店から刊行されている。第5回展から第7回展は展覧会の記録を印刷するかたちで会期の翌々月の『建築新潮』誌に特集されることとなったが、第6回展の開催月に『紫烟荘図集』が、第7回展の開催月に『住宅双鐘居』が、いずれも『建築新潮』誌と同じ洪洋社から刊行されており、なかでも『住宅双鐘居』の奥付は第7回展の開会前日の発行日が記されている²⁵²。現在でも展覧会にあわせた関連書の刊行がしばしば行われているのは、展覧会場を訪れる関係者や入場者が刊行物の広報や読者の対象と重なるためだが、堀口はその著書の刊行を早期から戦略的に行っていたものと考えられる。

分離派建築会の第1回展覧会には「当時新進気鋭だった芥川龍之介を押しかけて、展覧会をみてなにか書いてほしい」²⁵³と依頼し、同会の存在と近代建築運動の意義を社会に周知させることに力を注いでいたことが認められる。1920年の1冊めの作品集から1924年の3冊めの作品集と堀口の単著『現代オランダ建築』までの刊行は、「実費精算」までしながら岩波書店に一手に託している。当時の岩波書店は、創業翌年の1914年に夏目漱石の『こゝろ』を刊行したのち、『道草』（1915年）がつづき、その遺作となった『明暗』（1917年）、さらに最初の『漱石全集』（1917～1919年）を刊行することによって、出版界にその地位を築いていったころであった。

分離派建築会、とくに単著も刊行した堀口にとって、出版社の選択は近代建築運動へのブランディングとして重視していたものと考えられる。したがって、岩波書店のあとを引き継ぐようなかたちで分離派建築会と堀口捨己の作品集を刊行した洪洋社と『建築新潮』誌もまた、建築専門出版社としての一定のブランドが建築界において形成されていたことを示している。

1-6-2 分離派建築会以後の建築運動体とその出版活動

わが国の近代建築運動は、創宇社建築会が分離派建築会の弟分として関東大震災直

²⁵² 各所の奥付に記された発行日は、『紫烟荘図集』が1927年1月22日、『住宅双鐘居』が1928年9月15日である。

²⁵³ 滝沢、前掲247、p.39

後の1923年10月に結成され、翌1924年4月の帝都復興創案展にてラトーとメテオールが組織されたが、いずれも分離派建築会のような単独の作品集や機関誌を有した形跡はみられない。この時期の関連団体としては、村山知義が率いるダダ的芸術団体マヴォ（1923年7月結成）のみが自らの雑誌『マヴォ』（1924年7月～25年8月、7号）を刊行していた。

ラトーとメテオールは継続的な活動はみられず、1931年ごろまで活動した創宇社建築会は、『マヴォ』7号に岡村文象が寄稿しているのをはじめ、各誌での展覧会紹介と寄稿のかたちとなっている。創宇社建築会は、分離派建築会と比べると展覧会や講演会に活動の重心が置かれ、作品集の形式にはこだわっていなかったものと考えられる。しかし、創宇社建築会が主催した2回の講演会「建築思潮講演会」は、「建築運動の飛躍的な発展と再統合への機運を醸成した」²⁵⁴ものとして日本の建築運動史で繰り返し取り上げられているが²⁵⁵、両度とも『国際建築』誌が「新建築思潮」特集として全面的に取り上げ²⁵⁶、講演の全貌を伝えている。同誌1930年11月号では特集「創宇社建築展」が組まれたのをはじめ、洪洋社の『建築新潮』誌においてもメンバー本人の寄稿や第三者の批評などが繰り返し掲載されていった²⁵⁷。

こうした1920年代の建築運動体のなかで、自らの機関誌を有していたのが日本インターナショナル建築会であった。同会は1927年7月に上野伊三郎らによって京都で設立され、機関誌『インターナショナル建築』は1929年8月から1933年5月までに29号が刊行された²⁵⁸。会の設立から機関誌の創刊まで2年が空いているが、設立直後には実質的な機関誌といえる『デザイン』という雑誌において、日本インターナショナル建築会のメンバーが作品や論文を発表していた。笠原一人の研究²⁵⁹によれば、『デ

²⁵⁴ 近江栄「日本の建築運動」（『近代日本建築学発達史』、p.1600、9編建築論4章、日本建築学会編、丸善、1972年）

²⁵⁵ たとえば本多、前掲34、pp.42-47、ドメス出版、2003年

²⁵⁶ 『国際建築』1929年11月号および1930年12月号

²⁵⁷ 『建築新潮』での創宇社建築会の関連記事としては、岡村蚊象「創宇社と其の第一回展」1924年2月号、岡村蚊象「創宇社第三回展覧会と吾々の態度」1925年9月号、濱岡周忠「創宇社第三回展」同前、佐藤武夫「創宇社展を見て」1926年12月号、平澤郷勇「第四回創宇社展覧会を見て」同前、金須孝「創宇社主催無選共同建築展批判」1928年2月号、竹村新太郎「建築実践とは」1930年5月号などが挙げられる。

²⁵⁸ 2008年に『復刻版 インターナショナル建築 全29冊』が刊行され、笠原一人らによる解題が付されている（京都国立近代美術館監修、国書刊行会）。

²⁵⁹ 笠原一人「雑誌『デザイン』の概要と特徴について」（日本建築学会大会学術講演梗概集、2004年7月、建築歴史・意匠、pp.425-426）

デザイン』誌を刊行していた創生社とは、日本建築協会に在籍し『建築と社会』の編集主任を務めていた江村恒一が独立して興した出版社であった。建築の専門教育を受けていない江村のほうから日本インターナショナル建築会に対して「造形美術の雑誌を発行するについて編集を引き受けてほしいという申し入れ」があつて実現したとされる。当初は同会会員の展覧会特集を組むなどしていたが、やがて「経済上の理由」でヴォーリズの関西学院などの「伝統的作品の紹介を始めたため」に、日本インターナショナル建築会は独自の機関誌の創刊に踏み切ったという²⁶⁰。同会が離れたあとの『デザイン』誌は、「鉄扉社建築会」の作品や論考が主体となるなど変遷を重ね、1935年6月までは刊行が確認できるとされる²⁶¹。つまり、江村恒一の創生社にとっては、建築系の雑誌は商業出版として継続されていたものと考えられる。

新たに発刊された『インターナショナル建築』誌については、同誌の復刻版に付された笠原の解題に詳しい²⁶²。笠原の分析によれば、カバーデザインは伊藤正文や宇賀一郎などの会員が担当し、各号の構成は巻頭に数ページのグラビア、つぎに論考と活動報告、最後に数ページの広告が付される形式で一貫していた。グラビアの掲載作品は国内会員以外の土浦亀城や竹中工務店による設計もみられ、外国会員ではヴァルター・グロピウスやリチャード・ノイトラ、ヨゼフ・ホフマンなど、外国会員以外ではル・コルビュジエやフランク・ロイド・ライトなども掲載されたことに笠原は注目している。

同誌の発行所は、大阪の芸苑社と奥付に記されている。同社についての詳細は不明だが、国立国会図書館の蔵書をたどると、『大阪市美術協会展覧会図録』（大阪市美術協会編、1924年）、『陸軍特別大演習記念特別展観図録』（大阪市編、1933年）、『大阪築城三百五十年記念特別展観図録』（大阪市編、1934年）、『日本社寺古建築鑑識資料』（増山新平著、1935年）、『浪漫——協同詩集』（坂本富美穂、村上正郁、兒島次郎 著 芸苑社 1935年）、『美術綜覧——年鑑 昭和14年（昭和15年版）』（国民芸術研究所編、1940年）、『日本文学史要』（国学院大学調査部編、1949年）、『歌舞伎』（芸苑社編、1949年）、『日本芸能史——中世歌舞の研究』（岩橋小弥太 著 芸苑社 1951年）、『世界文学

²⁶⁰ 笠原、前掲 259、p.426

²⁶¹ 前掲 260 に同じ。

²⁶² 笠原一人「日本インターナショナル建築会——その理念と活動」には「『インターナショナル建築』について」として節が立てられている（『復刻版 インターナショナル建築 別冊』、pp.143-147、京都国立近代美術館 監修、国書刊行会、2008年）。

の展望』(楠長之助、1952年)といったように、大阪を地場として芸術系の刊行物に力を入れていた出版社だったとみられる。1930年には日本インターナショナル建築会のスポークスマンだった伊藤正文の著書『社美の新構成——附・丹波達身寺稲麻殿設計記録』が刊行されている。

笠原によれば、日本インターナショナル建築会の活動停止としては、1933年5月の『インターナショナル建築』29号に予告された次号のブルーノ・タウト特集が発行されなかったことを指摘している。その理由として、同会は、その名称にあって左翼的な団体と誤解されたこともあって会費が集まらず、不足分を上野伊三郎が負担しており、上野自身も建築設計の仕事が少なく、会も上野も経済的に困難を抱えていたとされる。さらに、同誌29号が刊行された月にタウトが来日し、その世話役で上野が多忙となったこと、1932年1月ごろに同会会員となってすぐに機関誌の編集を任されていた香野雄吉が1933年6月に治安維持法違反で検挙されたことも指摘されている²⁶³。

こうした経緯から、『インターナショナル建築』誌の編集は、日本インターナショナル建築会の会員の手によって行われていたとみられる。同会と発行所の芸苑社との関係や同社発行人として奥付に記された川村五十四の人物像は定かでない。しかし、これまでみてきたように、芸苑社の刊行物に芸術系が多いとみられること、とくに大阪市主催の展覧会図録が複数みられること、日本インターナショナル建築会の伊藤正文の著作を刊行していること、日本インターナショナル建築会の経済事情や世間からの誤解をふまえるならば、『インターナショナル建築』誌は、大阪での芸術活動に縁のある出版活動を行っていた芸苑社による一定の支援と理解のもとに刊行が実現できたものと考えられる。同誌の前身ともいえる『デザイン』誌も、新興出版社であった創生社による商業出版とみなされることは前述のとおりである。つまり、日本インターナショナル建築会による機関誌の刊行には、民間出版社による一定の支援が継続して認められる。

日本インターナショナル建築会以降の建築運動体において機関誌を有したのは、dezam(デザム)の『dezam』(1930年～1932年ごろ)²⁶⁴、日本青年建築家連盟(JAF)

²⁶³ ロシア文学者の湯浅芳子からの依頼によるカンパ集めに香野が加わっていたことが共産党協力とみなされたという(笠原、前掲262、p.142)。

²⁶⁴ 『dezam』の刊行期間については、西山記念文庫の資料整理情報による。同文庫所蔵のうち巻数が最も早い『dezam3』は1930年刊行、巻数の最後は『dezam7』となり、この7号は論文「建築と建築生産」が掲載され、1930年12月に刊行されたことが西山卯三によって証言されている(西山、前掲18、『西山卯三著作集4建築

の『建築科学』（1932年4月～1933年2月）²⁶⁵、青年建築家クラブの『青年建築家クラブニュース』（1933年11月～1934年2月）²⁶⁶となる。『建築科学』誌の体裁を「ピラ・ニュースのよう」²⁶⁷だったと西山卯三が回顧したように、1930年代におけるこれらの機関誌については市販や流通の実態が定かでない。

上記の建築運動体の直前に、諸団体が大同団結された組織的建築運動である新興建築家連盟²⁶⁸が1920年10月に結成された直後、同年11月12日付の読売新聞により「建築で『赤』の宣伝——凡ゆる方面に拡がるナツプの活動」と報道されたことによって瓦解したことはよく知られている。同連盟は研究部や宣伝部、実行部、抗議部（のち批判部）、互助部、連絡部といった6つの部署が連携し、組織化されることが目論まれていたが、固有の機関誌の存在については明記されていない。一方で、新興建築家連盟の瓦解を唯一大きく報じた雑誌『建築時潮』は、その刊行期間が1930年7月号から翌1931年6月号までと短かったこともあり、従来はあまり注目されてこなかった。しかし、同誌の編集責任は、新興建築家連盟の結成準備メンバーのひとりであった山越邦彦であり、同連盟の機関誌のような役割を果たそうとしていた形跡が認められる。雑誌『建築時潮』の発行元となった構成社書房は、雑誌『建築紀元』（1929年10月号～1930年3月号）や叢書『現代建築大観』（全17集、1929年10月～1930年3月）など、岸田日出刀や堀口捨己といったモダニストが編集の主体となった刊行物ばかりを発刊していたことが筆者らの研究により明らかとなった。構成社書房の詳細については、第4章で取り上げる。

新興建築家連盟の大同団結と瓦解ののち、少人数のグループに分かれた建築運動体が1936年に再び結集したのが日本工作文化連盟である。同連盟の機関誌『現代建築』は、1939年6月から1940年9月にかけて15号が刊行され、「戦後の建築ジャーナリズムの一種の母型」²⁶⁹とも評される。同誌の「復刻版」が2011年に刊行されたことは序章で触れたが、日本工作文化連盟と『現代建築』誌の活動とその意義については

論』、p.626)。西山記念文庫の資料整理情報では、『dezam』の発行所は田中平安堂とされる。

²⁶⁵ 『建築科学』の刊行期間については、本多、前掲34、pp.54-56（ドメス出版、2003年）を参照した。同書によればその後「もっと簡単な形の「建科ニュース」はさらに発行が続き、ニュース第10号が33年9月に出ている」とされる（p.56）。

²⁶⁶ 『青年建築家クラブニュース』の刊行期間については、本多、前掲34、pp.60-62、を参照した。

²⁶⁷ 西山卯三『建築学入門——生活空間の探究（上）』、p.186、勁草書房、1983年

²⁶⁸ 新興建築家連盟の活動については、本多、前掲34、pp.33-53、に詳しくまとまっており、本項でも参照した。

²⁶⁹ 宮内、前掲5、p51

復刻刊行を監修した笠原一人の「解説論文」に詳しい²⁷⁰。本項では、おもに同誌を刊行した建築出版組織について検討をくわえる²⁷¹。

『現代建築』誌の表紙には「日本工作文化連盟編集」と掲げられ、奥付には編集兼発行者として同連盟会員の濱松義雄の名が記されている。発行元は「現代建築社」とされ、奥付表記では連盟と同じ「東京市麹町区内幸町幸ビル」の所在とされる。現代建築社は、『現代建築』誌のほかに刊行物が認められないことから、日本工作文化連盟の機関誌刊行のために連盟内に設置された出版部門とみなされる。

日本工作文化連盟の綱領には「建築ヲ中心トセル工作文化ノ健全ナル発達ニ寄与セントス」と記され、共同研究、生産の指導、大衆の啓蒙などを目的としていた。その中心を担った人物は、堀口捨己、岸田日出刀、小池新二、市浦健などが知られるが、市浦によれば同連盟結成の当初、『国際建築』誌を連盟の機関誌へ衣替えを試みたものの、同誌編集長の小山正和から拒絶されたという²⁷²。そのためか、「発会以来の宿望であった」²⁷³機関誌が創刊されるまでに3年を要した。

『現代建築』誌の発刊趣旨は、日本が「興亜の盟主として長期建設に乗り出した」なかで「建築界を始め一般工作文化の各分野」が「将来新体制の整備」に「課せらるべき使命は頗る重大である」のは「興亜の大業の真の成功は文化の威力によつてのみかち得られるのである」ゆえに、「日本工作文化連盟はその趣旨に基く使命達成の拠点として「現代建築」を刊行する」とうたわれた²⁷⁴。その編集方針としては、「他の建築の雑誌の様に大部分外国雑誌の複写をして御茶を濁して居るのや玉石混淆で何等指導精神のない編集振を敢へてして居るものとは全く異なり、新しい日本建築、優秀なる工作文化の作品や指導的な理論を主要な内容とする」ことがめざされた²⁷⁵。

創刊にあたっては「時局柄不相当と云う反対意見」のなかで、岸田日出刀「理事長始め一部の人」から「時局はむしろかゝるものを要求する」という声上がり、発刊

²⁷⁰ 『復刻版 現代建築』は、同誌全15号に後継誌『工作文化』を付して復刻刊行され（監修・笠原一人、国書刊行会、2011年）、笠原一人による解説論文「日本工作文化連盟がめざしたもの——『日本的なもの』を超えて」（『復刻版 現代建築 別冊・復刻版「工作文化」解説・総目次』）が付された。

²⁷¹ 『現代建築』については、拙稿「雑誌『現代建築』の概要と性格について——戦時下におけるモダニズム建築の啓蒙」（大川三雄、片桐正夫と共著、平成10年度日本大学理工学部学術講演会論文集、p.668-669、1998年11月）をもとに、その後の知見を加筆・訂正した。

²⁷² 前掲4「建築ジャーナリズムの動きをたどる——関係誌20年の歩み」、p.64

²⁷³ 『現代建築』第4号、p.64、1939年9月

²⁷⁴ 『現代建築』第1号、第3号

²⁷⁵ 『現代建築』第4号、p.64、1939年9月

に至ったという²⁷⁶。「ドイツ、イタリー等も日本と同じ緊迫した非常時に有乍ら宣伝省を作つて内に外に文化的宣伝を盛んにし」²⁷⁷ていることを引き合いに示しながら、「海外への日本文化宣伝」²⁷⁸や「政治層への啓蒙的な運動」²⁷⁹といった言葉が随所にみられる。『現代建築』誌は、連盟の目標とする「指導精神」のプロパガンダとしての役割が、明確に意図されていたことが示されている。

同誌の体裁は、四六倍判の判型で、通常の各号は48頁、活字は横組で、原則的にアート紙を全頁にわたって使用しており、余白にゆとりのあるレイアウトで、写真を見開きで掲載した頁もある。こうした体裁は、イタリアの建築誌『カサベラ』を模範としたものであった。両誌に掲載された海外建築の紹介写真についてレイアウトの酷似が指摘できる²⁸⁰。『カサベラ』誌にみられる「写真の大きさの統一、文字の配置、広告に至る迄細い芸術的神経が行き渉つてゐる」美しい体裁に「編集に表はれた全体主義精神」を見だし²⁸¹、『現代建築』誌の目標としたのであった。

記事の内容については、「大陸建築特集」（第4号）や堀口捨己のほぼ独力による「休憩の建築特集」（第13号）、あるいは忠霊塔設計競技の詳細な報道（第9、10号）、そして丹下健三の処女論文「ミケランジェロ頌」（第7号）などが知られるが、その詳細については笠原の解説に網羅されているため、本項では重複を避ける。

これらの編集を担った人物として、編集兼発行者と奥付に記された濱松義雄については、その経歴や人物像は現時点で明らかとされていない。村松貞次郎によれば、『建築世界』誌を後援していた三橋四郎が「その私財を創刊号に投じ、以来所員の^{ママ}濱松義雄を編集にあたらせ、その面倒をみていた」²⁸²とされる。同誌の奥付によれば、1923年から1932年までその名前が確認でき、1935年から1938年までは雑誌『建築知識』の編集人として奥付に記されていた。濱松は『現代建築』誌の編集に携わるまでに建築誌の豊富な編集経験を有していたことが認められ、『現代建築』誌においても編集上の実務を担っていたと考えられる。

²⁷⁶ 『現代建築』第4号、p.64、1939年9月

²⁷⁷ 『現代建築』第1号、p.5、1939年6月

²⁷⁸ 『現代建築』第11号、p.45、1940年5月

²⁷⁹ 『現代建築』第14号、p.45、1940年8月

²⁸⁰ たとえば『現代建築』第1号、pp40-41、1939年6月と、『カサベラ』第136号、pp28-33、1939年4月の類似を指摘できる。

²⁸¹ 『現代建築』第1号、p.47、1939年6月

²⁸² 村松、前掲165、p.228

また、同誌の記事には原則として署名が記載され、編集後記の記名などから市浦健が中核的存在となっていたことが認められる²⁸³。また、市浦よりも若い世代の「ここ数年来東京帝国大学建築学科を卒業し」た「青年建築家」たちが参加し、「強力なる推進力」となっていたことを市浦は述べている²⁸⁴。たとえば、津田輝夫（東大 1935 年卒）、森田茂介（同 1936 年卒）、薬師寺厚（1937 年卒）、本城和彦（同 1938 年卒）などの編集員としての参画が編集後記から確認できる。『現代建築』誌の編集は、市浦健を中心とした青年建築家による企画・執筆を、ベテラン編集者でもある建築家・濱松義雄がまとめることによって、建築家による建築誌の理想像が形成されていったといえる。

なお、『現代建築』誌の最終号となった第 15 号が刊行されてから 1 年後、1941 年 9 月に、同誌の後継とされた『工作文化』が同月に相模書房から刊行された。同書は日本工作文化連盟編集、「近代工作文化特集」と表紙に掲げられたが、これにつづく号が刊行された形跡はみられない。相模書房については次節で述べるが、1940 年代の戦時下にあっても建築書を刊行し、岸田日出刀が同社の刊行物に深く関与していたことが認められる。戦時下の出版統制もあってのことか、『工作文化』は日本工作文化連盟の建築出版活動に対して相模書房という出版社が関与もしくは支援していた形跡としてみなすこともできる。

日本の近代建築運動は、その具体的な活動は展覧会や講演会もさることながら、作品集や機関誌の刊行や市販誌の執筆・編集といった建築出版活動がもっとも大きな柱となっていたといえるが、その実態は民間の出版社との関係が深いことが明らかとなった。

²⁸³ 『現代建築』第 4 号、p.64、1939 年 9 月

²⁸⁴ 『現代建築』第 4 号、p.64、1939 年 9 月

第7節 戦時下における建築図書の出版活動

1-7-1 彰国社による文化財刊行物

近代建築運動と建築批評の展開という観点から建築誌の系譜が叙述された「建築ジャーナリズム史」では、宮内嘉久によって1930年代以降が「暗い流れ：1930-45」²⁸⁵とされたことは本章第1節で述べたとおりである。たとえば、新興建築家連盟の瓦解後に創宇社のメンバーを中心に再結成された日本青年建築連盟は、機関誌『建築科学』を1932年4月から発刊したが、8頁だての創刊号を手にした際の印象を西山卯三は「ピラ・ニュースのようなこの機関紙^マをみて、日本の建築界の底に流れている清冽な水音をきいたような驚きを感じた」²⁸⁶と追懐している。

一方で、同時期の建築図書を概観すると、たとえば常盤書房からは「戦前期の建築学叢書の決定版」²⁸⁷とも評される『高等建築学』（全26巻、1932～35年）が刊行され、洪洋社からは『数寄屋聚成』（全20巻、1935～37年）と『国宝書院図聚』（全13巻、1938～39年）という大判の全集が相次いで刊行された。1930年代のわが国における建築出版活動は、建築図書を視野に入れるならば、低調だったとは決していいきれないものと考えられる。本節では、1930年代に建築出版活動を開始した建築図書出版組織の代表例として、戦後も活発な活動を展開することになる彰国社と相模書房について取り上げる。両社の創業経緯を述べながら、とくにこれまでほとんど指摘されてこなかった戦時下における建築図書の出版活動の一側面として、1940年代に両社が叢書を刊行した共通点について検討をくわえる。

今日においても建築の図書や雑誌の刊行をつづける彰国社は、1932年に設立された。同社の設立経緯や創業者・下出源七の経歴については『彰国社創立五十周年』（彰国社編・刊、1982年）からたどることができる。同書によれば下出源七は、1906年に岐阜県神岡町（現・飛騨市）に生まれ、1925年に中央大学法学部を中退し「美術関係図書の出版」を営んでいた巧芸社へ入社した²⁸⁸。下出は巧芸社で『国宝全集』²⁸⁹の編集

²⁸⁵ 宮内嘉久「日本の建築運動 1920-60——組織・創造・イデオロギー」（『世界建築全集 9 近代』、p.101、平凡社、1961年）。同論考は、日本科学史学会編（責任編集：村松貞次郎）『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』にも引用された（p.482、第一法規出版、1964年）。

²⁸⁶ 西山卯三『建築学入門——生活空間の探究（上）』、p.186、勁草書房、1983年

²⁸⁷ 内田祥哉「序」（『日本建築辞彙〔新訂〕』、i 頁、中村達太郎著、太田博太郎、稲垣栄三編、中央公論美術出版社、2011年）

²⁸⁸ 「下出源七の歩みをたどる——略年表」（『彰国社創立五十周年』、p.120、彰国社、1982年）

に携わっていたことから²⁹⁰、同書の愛読者だったという服部勝吉と出会い²⁹¹、彰国社設立後にシリーズ形式の大判図集『国宝建造物』（監修：伊東忠太、関野貞、武田五一、編集・解説：阪谷良乃進、服部勝吉、澤島英太郎、1933～1938年）の刊行へとつながったという。彰国社の「創立以来の顧問」としては、服部勝吉、田辺泰、太田博太郎の3名を下出は特記しており²⁹²、刊行物のテーマと著者筋は日本建築史の分野が主体とされていたことが明らかである。

『彰国社創立五十周年』によれば、同社の最初の刊行物が『国宝建造物』であり、その刊行資金は徳富蘇峰の娘婿である資産家の矢野国太郎から受けていたと下出は証言する²⁹³。実際に同書の奥付には「発行所 国宝建造物刊行会」「発行者兼著作権所有者 矢野国太郎」と明記されている。下出と彰国社については、同書第1期第10集（1934年4月）より「印刷者 下出源七」「印刷所 彰国社」との記載が確認できる。奥付に記載された住所は、国宝建造物刊行会、矢野、下出、彰国社はいずれも「東京市日本橋区通3丁目2」に位置し²⁹⁴、彰国社が1932年6月1日に創業された住所も同じである²⁹⁵。第1期第1集（1933年7月）から第1期第9集（1934年3月）までは「印刷者 葛西喜一」「印刷所 青雲堂印刷所」と記され、両者の住所は刊行会と異なる²⁹⁶。戦後に工作舎を主宰した編集者の山本夏彦はつぎのように振り返っている。

彰国社はもともと印刷屋で、文部省の国宝建造物をコロタイプで印刷して納めていた。主人の実直な人ながら文部省に買われて印刷をまかせられ、むろん彰国社にコロタイプの設備はないから、たぶん光村に頼んで収めていたのだろう。……仕事

²⁸⁹ 巧芸社による刊行物で『国宝全集』という書名は、国立国会図書館をはじめとする公立図書館や大学図書館の蔵書では確認できない。しかし、巧芸社の刊行物としては、たとえば『『聖徳太子奉讃美術展覧会図録 第一回西洋画之部』（聖徳太子奉讃会、1926年）や『明治大正名作大観 日本画』（上下、織田信大編、1928年）といった美術系の図集は確認できる。

²⁹⁰ 服部勝吉「想起」（前掲288、pp.8-9）

²⁹¹ 前掲290に同じ。

²⁹² 下出源七「ご挨拶」（前掲288、p.6）

²⁹³ 服部勝吉、太田博太郎、下出源七、清水英男「彰国社創立五十周年記念座談会 半世紀の歩みを振り返って」（前掲288、pp.76-77）

²⁹⁴ 国宝建造物刊行会の住所は第2期までが「東京市日本橋区通3丁目2-6」、矢野、下出源七、彰国社の住所は第2期までが「東京市日本橋区通3丁目2」、第3期第1集からは（1935年12月）からは刊行会、矢野、下出源七、彰国社ともに「東京市麹町区平河町2-11」と表記されている。

²⁹⁵ 「東京市日本橋区通3丁目2-6」とされる（前掲288、p.120）。

²⁹⁶ 葛西喜一と青雲堂印刷所の住所は「東京市麹町区飯田町4」と記載されている。

は注文（原稿）をとった社のものなのである。彰国社が文部省に信用され、任されていたのなら、たとえ光村に頼もうと印刷者は彰国社下出源七である。だから私ははじめ彰国社を印刷屋だとみて、出版社だとはみていなかった。出版社になったのは戦後である。印刷が一段低くみられるのが残念だったのだろう。²⁹⁷

上記の「主人」とは下出源七にほかならず、「光村」とは1901年創業の老舗印刷会社・光村印刷をさすと考えられる。一方で、下出は『国宝建造物』の販売の実態について、つぎのような回顧を残した。

うちの社は五、六人しかいないからそれをみんな持って回って金持ちのところへ置いてくるわけです。そしてどうか御主人様にごらん願ってと、一週間後にまたきますからイエスカノーか聞かしてほしいと。²⁹⁸

五百部完全に売れるようになったのは二年目ぐらい。……矢野国太郎さんに私が千円ばかり借金ができたわけです。それをぽつぽつ返せたときですから一年ぐらいで収支償うようになったんです。²⁹⁹

『国宝建造物』における「青雲堂印刷所」から彰国社への印刷所の変更経緯や編集業務の実態は定かでないが、彰国社は出版社として販売の実務を担っていたことは認められる。また、同書の奥付には3名の撮影者が記されており³⁰⁰、そのひとりが村沢文雄だった。村沢については、戦後も彰国社の『建築文化』誌などで活躍したわが国の

²⁹⁷ 山本夏彦『私の岩波物語』（pp.282-283、文藝春秋、1994年）。評論家で翻訳家の小田光雄は、ブログ「出版・読書メモランダム」の2011年12月14日付けにて、「古本夜話158 龍吟社と彰国社」で両者の関係性を詳細につづっている（2017年7月13日、最終アクセス2017年7月14日、<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/20111214/1323788463>）。

²⁹⁸ 服部勝吉、太田博太郎、下出源七、清水英男「彰国社創立五十周年記念座談会 半世紀の歩みを振り返って」（前掲288、p.78）

²⁹⁹ 前掲298、p.80

³⁰⁰ 『国宝建造物』の奥付に記された撮影クレジットとその住所表記は以下のとおりである（「1-1」は第1期第1集を示す）。松岡光夢（奈良市プラス町／1-1、1-7、1-9、2-3～2-8）、谷山均（京都市丸太町通西洞院／1-2、1-3）、村沢文雄（東京市神田区宮本町10／1-4、1-5、1-10～1-12、2-1、2-2、2-9～2-12）、松岡・谷山の併記（1-6、1-8）、第3期以降は撮影クレジットなし。谷山均の人物像は不明だが、松岡光夢については奈良で活躍した仏像写真家とされる（川口拓之、関根信夫、兼古健吾、山内利秋「短報：春日大社所蔵の写真資料について」、『劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究』、p.93、平成11年度～平成15年度私立大学学術研究高度化推進事業（「学術フロンティア推進事業」）研究成果報告書、國學院大學日本文化研究所、2004年）。

建築写真のパイオニアのひとりとして知られている。下出の略歴には同社設立前の1930年ごろに「写真師村沢文雄氏と出会う」と特記され、彰国社が『国宝建造物』の印刷所となる前から村沢は同書の撮影者として登場する³⁰¹。『国宝建造物』における「青雲堂印刷所」と彰国社、そして村沢の関係の詳細は定かでないが、戦前期から下出と服部たちと村沢が文化財の撮影を行っていたことが当事者によって語られている³⁰²。また、『日本建築』（編著：田辺泰、服部勝吉、1941～44年）も村沢の撮影クレジットが記されている。国際建築協会を主宰した小山正和が自ら建築撮影を行っていたことは前節で述べたように、わが国の建築出版活動において、戦前期から建築写真の撮影が重視されていたことを彰国社の刊行物は示すものといえる。

彰国社のこのほかの戦前期の刊行物としては、『建造物修理報告書』（1939～1968年）は「公共団体が多少金を出してくれて、そしてつくってお納め」していたことを服部は証言し、「工事報告書というのをもっと改良してよくという希望からで、それをしてくれるのは彰国社」だったが、制作費用を「工事費から出すのはやはり苦勞ですね」と回顧している³⁰³。

このようななかで「建築の本で最初から一番売れた」ものとして9,000部の注文があったことを下出が「終生私は忘れることのできない」と語ったのが、『法隆寺建築』（太田博太郎著）であった³⁰⁴。1943年7月の初版のち、1944年2月の2版、1945年3月の3版までの現存が確認できる。同書は『東亜建築撰書』の第5巻として所収されたもので、同叢書は10巻の刊行が認められる〔表1-14〕。

『東亜建築撰書』の「刊行の辞」では「大東亜文化圏の性格把握への指針」となることがうたわれ、「東亜文化の発祥は欧米の文化よりもい遙かに古く、その文化的所産たる建築の如きも、古来高度に完成」されており、「東亜一環の民族的色彩の最も濃厚に顕示されてゐる古建築を研究することは科学する総力進発への一行動として、現下の急務と信ずる」とつづられている³⁰⁵。文章の全面に戦時体制の影響が色濃く認められるが、建築書の出版活動としては彰国社の著者筋であった日本建築史研究者の顔ぶれが生かされるかたちで、戦時下にあっても旺盛な執筆が行われようとしていたともい

³⁰¹ 第1期第4集（1933年10月）と第1期第5集（1933年11月）の撮影者を務めている。

³⁰² 前掲298、pp.80-82

³⁰³ 前掲298、p.86

³⁰⁴ 前掲298、p.88

³⁰⁵ たとえば岡大路『支那庭園論』（1943年8月）の後付社告、頁数なし。

える。『東亜建築撰書』のうち、『法隆寺建築』（太田博太郎著）と『日光廟建築』（田辺泰著、東亜建築撰書9巻、1944年）については、戦後に彰国社の『建築文化撰書』に同じ表題で所収された³⁰⁶。

第二次世界大戦の終戦間もない1946年4月に戦後を代表する建築誌『建築文化』を創刊することになる彰国社だが、1930年代の創業当初は市場に広く流通させる建築書の刊行というよりも、建築に関する文化財刊行物の撮影をふくめた制作を請け負うかたちでの出版活動の性格が色濃かったものと考えられる。大判の図集には出資者が存在し、戸別訪問での販売も行われていた。彰国社の設立経緯には、文化財関連の刊行物だけで事業として成立しえたことが示されている。そして1940年代になると、「東亜建築撰書」の一部がヒットしたように、市販の建築書を刊行する出版社としての活動が成立していたものと認められ、戦後の刊行物との直接的なつながりも見いだせるのである。

1-7-2 相模書房による雑誌『東洋建築』と叢書『建築新書』

彰国社の活動期間とほぼ重なる相模書房は、1936年に創業され、2015年に廃業した。よく知られる同社の建築書としては、戦前期は岸田日出刀の『薨』（1937年）や『縁』（1937年）などの建築家の随筆集、終戦直後は西山卯三『これからのすまい』（1947年）や浜口ミホ『日本住宅の封建性』（1949年）などの建築評論集、そして1970年代には長谷川堯の『神殿か獄舎か』（1972年）や『都市廻廊』（1975年）といった名著と評される刊行物を世に送った。

戦前期における相模書房の刊行物は、建築書だけでなく、里見弴や野上弥生子など小説家による随筆集³⁰⁷も多くみられ、ごく短期間だが雑誌『劇と評論』の発行元を担っていたこともあり³⁰⁸、出版活動の幅はせまくない。その全体像については今後の課

³⁰⁶ 「建築文化撰書」は、つぎの3巻の刊行が確認できる。1『日光廟建築』（田辺泰著、1946年）、2『台湾の建築』（藤島玄治郎、1948年）、4『法隆寺建築』（太田博太郎著、1949年）。

³⁰⁷ たとえば、野上弥生子『秋風帖』（1937年）や里見弴『銀語録——昭和一三年版随筆集』（1938年）など。ほかに東京美術学校の校長を長く務めた正木直彦の『十三松堂閑話録』（1937年、「十三松堂」は正木の号）なども最初期に刊行している。

³⁰⁸ 『劇と評論』誌が相模書房から刊行されたのは1937年9月から12月である。同誌は1922年6月に小山内薫が中心となって創刊され、その発行元は翌1923年9月までが玄文社、1926年6月から1927年9月は歌舞伎出版部、1927年10月から1928年7月は原始社、1928年9月から10月は青香社、1929年3月のみ映画世界社、1932年5月から1933年3月は日日書房、1933年6月から1934年3月が再び映画世界社、1934年4月から1935年3月は丸の内出版社、1935年4月から1936年10月は劇と評論社、1936年11月から1937年7月は双雅房、

題としたい。本項では、1971年に相模書房に入社してその黄金時代を支えた編集者のひとりである小川格への聞き取り調査³⁰⁹をもとに、同書房の設立経緯を述べながら、これまでほとんど注目されてこなかった1930年代後半の雑誌と1940年年代の叢書について検討をくわえる。

相模書房を創業した中心人物は、出資者の鈴木^{にろく}二六、社長の小林^{よしかず}美一、編集者の引頭^{いんどう}百合^{ゆり}太郎^{たろう}の3名であった。鈴木は小田原相海漁業組合理事長を務めた大網元であり、箱根の老舗旅館「環翠楼」の社長でもあった。相模書房は、富裕な経営者による文化事業として設立され、その社名は鈴木が拠点とした地域名から付された。小川が在籍した1970年代にあっても建築士の資格試験本の原稿作成は、正月に環翠楼で数泊し、著者の市川清志や矢代秀雄に編集担当者が同伴するかたちで進められたという。社長の小林は、建築そのものへの興味は示しておらず、日本書籍出版協会副会長や日本出版クラブ理事などを務めるなど、業界活動に熱心に取り組んでいたとされる。

岸田日出刀らの建築家による随筆集は、1930年代に数多く刊行していったが、そのきっかけをつくったのが編集者の引頭であった。もとは平凡社で百科事典を編集しており、建築の担当執筆者として岸田と面識があったことから、相模書房においても随筆を依頼したという。やがて岸田の周囲の建築家や建築学者によって相模書房の執筆陣が築かれていき、岸田と同世代とされる引頭はゴルフにも同伴するほど親しかったと小川は証言する。

こうした建築家や建築学者による執筆陣が顔をそろえたのが雑誌『東洋建築』だったと考えられる。同誌は1937年4月に創刊され、翌1938年3月号の12号以降は刊行が確認できない。刊行期間が1年と、短命に終わった建築誌ではあるが、戦時下にあって意欲的な編集の姿勢が認められる。各号は16頁のモノクログラビアと50頁前後の本文で構成され、国宝を中心とした文化財建築の姿をグラビア写真で視覚的に示し

1937年9月から12月が相模書房、そして1968年10月から1976年11月が劇と評論の会が務めた(以後休刊)。同誌の創刊を振り返った特集『『劇と評論』50年の歴史』(1971年9月)では、相模書房との関わりについて昭和「十一年十一月から、今度は、発行所が神田鍛冶町の双雅房にかわった……が、半年ともたなかった。苦闘時代といえる。次いで(ママ)十二年、日本橋通り二丁目の相模書房に転じ倦怠に活を入れることとした。遠藤慎吾君、竹越和夫君が編集を引き受けて、献身的に働いてくれた」と触れられている(大江良太郎「瀬戸さんのこと」、『劇と評論』1971年9月、p.25)。なお、国立国会図書館の蔵書情報では、『劇と評論』の発行元が創刊時の1922年から相模書房となって登録されているが、それは戦前期最後の発行元であったために一括して登録されたものとみられ、実際の発行元は前述のとおりである。

³⁰⁹ 2017年1月19日に実施した。

つつ、本文では日本の伝統的建築をめぐる学術論文や紀行文、あるいは連続講座が掲載された。台湾や沖縄、離島の民家なども繰り返し紹介されている³¹⁰。おもな執筆者としては、足立康、巖谷不二雄、大岡実、大熊喜邦、太田静六、太田博太郎、川上邦基、蔵田周忠、今和次郎、澤島英太郎、関野克、竹内芳太郎、龍居松之助、田辺泰、服部勝吉、藤岡通夫、藤島亥治郎など、日本建築史の研究者が一堂に会していることが確認できる。

表紙写真の撮影者をみると、岸田日出刀、今和次郎、関野克、田辺泰、藤島亥治郎などが挙げられており、建築学者の眼による写真によって日本の伝統的建築の美を提示しようとしていた姿勢が認められる。それは、相模書房における岸田の写真集『過去の構成』（1938年、初版：構成社書房、1929年）や『熱河遺蹟』（土浦亀城と共著、1940年）の刊行趣旨に共通しているとも考えられる³¹¹。小説家や建築家の随筆集が多くを占める相模書房のなかで、岸田の写真集は異質ともとらえられるが、『東洋建築』誌の存在によって、同社における刊行趣旨の一貫性を見いだせるともいえる。

相模書房における岸田日出刀の存在感は、叢書『建築新書』にも示された。同叢書は、岸田と田辺平学、田辺泰の監修のもと1941年から刊行が開始され、現時点で16巻の刊行が確認できる〔表1-15〕。彰国社の『東亜建築選書』とは刊行時期が重なり、両叢書の刊行計画までを視野に入れると田辺泰や日本の伝統建築といった著者やテーマの一部が重なっているが、相模書房の『建築新書』のほうが建築計画や都市計画、海外建築情報といったテーマの広がりが認められる。

『建築新書』全体の刊行趣旨としては、「大東亜共栄圏の建設と高度国防国家体制の整備」のために「我等の持つ最高水準の建築技術を全建築技術者は勿論遍く新体制下における我が国人士の手に普及せしめ」とされ、「旧体制下に於ける講義録的・教科書的・講座的斯種出版物の旧套を脱し、監修者の企画に基く整然たる組織に則り、専門的に細分せられたる各部門に於ては独立せる權威を有する」ことで「大東亜建設の基礎打つ大槌・伸び行く日本必携の工具として、この《建築新書》を提起する」ことがうたわれていた。戦時体制による影響が強く認められるなかで、それまで連綿と刊行されてきた建築講義録の類の刊行物をより進展させる企図も確認できる。「我が国人士

³¹⁰ たとえば、大岡実「琉球紀行」（4回、1937年4月、5月、9月、1938年2月号）、藤島亥治郎「台湾紀行」（8回、1937年6月～1938年3月号）、蔵田周忠「民家巡礼 八丈島民家記」（1937年8月）などが掲載された。

³¹¹ 岸田日出刀は戦後も相模書房より写真集『京都御所』（1954年）を刊行した。

の手に普及」させようとしていたように、コンパクトな体裁の読み物とすることで、建築の技術者や専門家に限らない読者にも建築学を伝えようとしていた姿勢が確認できる。そこでは「相模書房引頭百合太郎氏が遠隔地にある著者のために終始連絡に、校正に、索引作成に労をおしまれなかつた」³¹²ことに謝辞を述べた著者がいたように、読み物の建築図書をつくる編集者の仕事があったことも認められる。

さらに、「建築新書」は、戦後も刊行が継続されていた。その奥付によれば、終戦直後の1945年11月に14巻めとなる『工具寄宿舎』（図師嘉彦著）が刊行され、1948年と1949年にも1冊ずつの刊行が認められる〔表 1-15〕。また、1943年に刊行された『樺太アイヌの住居』（山本祐弘著）は、一部が増補されて1970年に『樺太アイヌ 住居と民具』として相模書房から再刊されてもいる³¹³。のちに岩波新書に所収される今和次郎の『日本の民家』は、1948年に単行本として相模書房から刊行されたが、戦前期に『建築新書』として計画されていた。

わが国の建築出版活動における戦前戦後のつながりは、建築誌においては『建築雑誌』『建築と社会』『新建築』『国際建築』などが知られてきたが、建築図書においても直接的なつながりが確認できるのである。相模書房の『建築新書』は、戦後すぐに活発に刊行されていった建築書、とくに建築家の単著による随筆・評論集の基盤となったと考えることができ、それは編集の企画と実務に徹する引頭百合太郎というベテラン編集者と、建築の歴史意匠系の人脈を握る岸田日出刀との協働、そして文化事業への出資者によって支えられていたのである。そこに戦時下における旺盛な建築出版活動の一側面を垣間見ることができる。

³¹² 山本祐弘『樺太アイヌの住居』（p.5、建築新書10）。著者の山本は樺太庁博物館に勤務していた。

³¹³ 山本祐弘と知里真志保の共著「樺太アイヌ民具」（「樺太庁博物館報告第5巻第1号」、1943年）が増補。

小結 建築出版組織の展開にみる日本近代建築出版活動の時代区分

1 建築出版組織の展開

本章では、わが国の近代建築書について、雑誌と図書をふくめた全体像を俯瞰するために、建築出版組織の展開という観点から近代日本の建築出版活動の史的概観の描出を試みた。その結果として、以下のことが明らかとなった。

日本の近代建築書に関する従来の通史といえる宮内嘉久の「建築ジャーナリズム史」には、西山卯三ら戦前期建築運動の当事者によるトピックスや唯物史観が踏襲された建築思潮史という性質を有していた。その基底をなした宮内の卒業論文が NAU における建築運動史研究の資料の一部に反映されることによって、日本近代建築史の基本文献に引用されることとなり、建築運動史の叙述に建築誌の系譜を重ねあわせた「建築ジャーナリズム史」が伝播されていった。1970年代以降に建築運動史への研究熱が冷めていくと、宮内の職能論ともいえる「建築ジャーナリズム史」への関心が薄らいでいったため、その後の建築誌研究への直接的な影響はみられない。

こうした建築誌の系譜に対し、建築図書をふくめて近代日本の建築出版活動を概観するために、日本近代建築史の基本文献に登場する近代建築書を抽出しながら、その版元となった建築出版組織について4つの類型に整理した。建築系学協会、建築誌出版社、建築運動体、そして建築図書出版社である。これらの前史にあたるのが、幕末以降における西洋軍事技術書としての建築技術書を翻訳した江戸幕府と明治政府の公的機関が挙げられる。以後の第2節以降は、建築出版組織の類型ごとに時系列でその展開を検証した。

建築出版組織が形成される前史としては、江戸幕府と明治政府によるオランダ軍事技術書の訳出による建築技術書の刊行は、先進的な越前大野藩や洋学の研究教育機関である蕃書調所ではじまり、明治以降は陸軍の機関が中心となっていた。幕末と明治期をわたる両者には、国策にもとづく官版の訳出という共通点を指摘できる。さらに大鳥圭介の訳による『築城典刑』は、異版によって刊行が継承されたように、幕末と明治期における建築技術書の訳出には一定の継承性が認められる。こうした官版による訳出の特徴は、最初期の市販の近代建築書にも継承されていた。工部省や文部省の政策にもとづく邦訳による文章からなり、版元としては江戸期からつづく老舗の書林と明治維新後の新興出版社の双方が務めていた。

わが国における建築出版組織の起源のひとつとなる建築系学協会の会誌刊行は、『建築雑誌』を創刊した造家学会が設立された 1886 年を端緒とする。同誌における草創期の編集・出版活動は、中村達太郎を中心とした啓蒙意識の高い建築家たちによって、中堅技術者層への知識の献身的な普及活動が展開されていた。つづいて『建築』誌を 1900 年に創刊した浪和会は、建築の研究と参考図集の交換を目的に結成された建築家たちの自主組織であり、啓蒙活動への意欲と向学心の受け皿となることで、1907 年に市販建築誌『建築世界』が創刊されるまでの橋渡し役となった。

こうした会誌の発刊と併行して、洋書の邦訳によらないわが国独自の建築図書の刊行も展開していった。それは建築家による講義録に代表される。当初の日本人建築家による建築図書は、著者自身が発行者になり、書林はその発売を担うかたちが多かったが、1890 年前後から出版社による積極的な関与が認められるようになり、建築書院のような建築図書を主体とする出版社や大倉書店のような大手の総合出版社が大部の建築家の講義録を刊行してきた。建築図書出版社の建築書院は 1893 年に設立され、造家学会の建築出版活動とほぼ同時期にはじまっていた。1900 年ごろからは建築図書の出版組織にも多様な展開が認められ、建築家による自主的な団体、工業学校の御用書肆、江戸期以来の大手書林が活動していた。

そして、従来は「建築ジャーナリズム史」のなかでとらえられてきた市販建築誌についても、多様な性質の建築出版組織が展開していった。わが国初の市販建築誌『建築世界』誌を発刊した建築世界社は、建築の専門外の社主による起業であった。同誌は先進性や建築批評の観点ではこれまで評価されてこなかったが、創刊翌年から建築学者たちの支援が急速に展開されて、数年間のうちに社会派ともいえる批評精神が形成されていた。それは建築技師とジャーナリストによる共同の編集体制によって、新様式や新材料、建築批評の必要性がとわれるなど、広い視野での批評活動が 1910 年代から確認できた。ついで 1911 年に 2 つの市販建築誌が創刊され、建築画報社による『建築画報』誌は、電気技術者から建築界への電気設備計画の啓蒙活動が発刊の端緒とされながら、写真によって建築をヴィジュアルに報じる編集方針が築かれていた。一方の建築ト装飾社による『建築ト装飾』誌は、「建築趣味の普及」を中堅技術者一個人の思想と啓蒙精神が具現化されていた。

1920 年代以降になると市販建築誌を刊行する出版社は、さらに多様に展開されていた。建築図書も多く刊行した洪洋社においては、3 つの建築誌が継承的に刊行され、

そのテーマが住宅から建築全般へ、さらに近代建築運動へと移行していった。『新建築』誌を刊行した新建築社は、その創業期となる1920年代後半の動向には、国内の近代建築運動の機関誌とは一線を画し、国内外のモダニズム建築と歴史主義の様式建築をもとに紹介する編集活動の場が、若い建築家たちに継続的に与えられていた。そこでは、ジャーナリストである社主・吉岡保五郎の出版社経営と写真技術への感性にもとづき、市販建築誌としての均衡が図られていた。同時期に『国際建築』誌を発刊した国際建築協会にも同様の傾向が認められた。モダニズム建築の導入を運動として扇動するのではなく、海外情報を着実に消化しながら紹介する姿勢に徹した編集長・小山正和の方針によって、モダニズムへの信奉と雑誌の市販性の均衡が形成されていった。

こうした建築誌出版社の展開と併行し、1920年代からは建築運動体も建築出版活動を活発化させていった。分離派建築会は展覧会の開催にあわせた作品集の刊行を重視するとともに、実費精算してまで岩波書店からの刊行を継続した。同会と堀口捨己の作品集や著書については、岩波書店と洪洋社、構成社書房と舞台がほぼ特定され、版元の選択が近代建築運動へのブランディングとして意識されていた。以後の建築運動体においても、その具体的な活動は展覧会や講演会もさることながら、作品集や機関誌の刊行や市販誌の執筆・編集といった建築出版活動がもっとも大きな柱となっていた。日本インターナショナル建築会が芸術系の出版社の支援を受けた形跡が認められるように、その実態は民間の出版社との関係が深いことも明らかとなった。

1930年代以降は従来の「建築ジャーナリズム史」で停滞期とされたが、建築図書の刊行は着実に継続されていた。彰国社では、建築写真の撮影を軸とした文化財刊行物によって出版事業が成立していた。同社は1940年代に『東亜建築撰書』の一部を市販で成功させ、戦後に再刊される巻も登場した。同時期に活動を開始した相模書房では、編集の企画と実務に徹するベテラン編集者・引頭百合太郎と、建築の歴史意匠系の人脈を握る岸田日出刀との協働、そして文化事業への出資者によってその建築出版活動が支えられていた。同書房の『建築新書』は、1940年代の戦前戦後にわたって刊行が継続され、終戦後まもなく陸続と刊行されていった建築関係の随筆や評論集の基盤となっていた。

このように近代日本の建築出版活動は、建築出版組織が多種多様に展開していくなかで、建築誌のみならず講義録や図集といった建築図書も広く刊行され、刊行形式の広がりという観点で近代建築書そのものの発展過程をたどることができるともいえる。

2 日本近代建築出版活動の時代区分

本章でみてきたように、建築出版組織の展開によって近代日本の建築出版活動を概観すると、その全体を4期に区分することができる。まず、建築出版組織の前史としては、1856～1885年の造家学会の設立以前となる。江戸幕府と明治政府の軍事機関などによるオランダ軍事技術書の邦訳による西洋建築技術の移入と、その市販版が江戸期以来の老舗書林と明治以降の新興出版社の双方によって担われていた。いわば、「官版の邦訳による建築技術書の輸入期」といえる。

第I期は1886～1906年の造家学会の設立以降となる。日本人建築家による雑誌と講義録の建築出版活動とともに、建築出版組織としても学協会や建築家による自主的な団体、工業学校の御用書肆、そして建築系の図書出版組織と多様に展開されていた。「建築学協会と建築図書出版社による近代建築書の草創期」といえる。

第II期の1907～1919年は、建築世界社の創業以降である。建築誌を主体とした出版組織とともに、洪洋社のような建築図書を主体とする出版組織も発展していった。「建築専門出版社による市販建築誌の成立期」といえる。

第III期の1920～1931年は、分離派建築会の結成以降となる。建築運動体が作品集や機関誌を刊行するとともに、『国際建築』や『新建築』のように長命が保たれた市販建築誌が発刊され、建築講義録などの多くの建築図書も刊行されていった。「建築運動体による建築作品集と建築誌・建築図書の隆盛期」といえる。

第IV期の1932～1945年は、彰国社の創業以降である。戦後に直接つながる建築の叢書が戦時下の1940年代にあっても活発に刊行されていた。「建築図書出版社の個性化による建築出版活動の成熟期」といえる。

これらの建築出版組織の共通点としては、建築誌を主体とした組織を含めて、そのほとんどが建築図集を刊行していたことが指摘できる。その一例を各組織で挙げていけば、建築学会では『建築グラフ』、浪和会は『建築』誌そのものが図集の体裁をとっていた。以後、建築学攻究会は『日本家屋間取雑作図集 第1輯』、信友堂は『日本著名建築写真帖』、建築世界社は『フランク・ロイド・ライト作品集 第1集』、建築画報社は写真集『東京百建築』、分離派建築会は作品集『分離派建築会宣言と作品』、国際建築協会は図集『現代住宅 1933—1940』、彰国社は図集『国宝建造物』、相模書房は写真集『過去の構成』などが該当する。また、本文では触れなかったが、新建築社も『横浜市立復興小学校建築図集』（横浜市建築課編、1931年）などを刊行した。

序章の冒頭で述べたように、建築の視覚情報の果たす役割が近代になって拡大したとされるなかで、写真印刷技術の発達により建築のイメージを視覚的に普及させた図集という媒体形式に着目する意義は小さくない。しかし、従来の日本近代建築史研究において建築図集に焦点を当てた論考は、菊池重郎や藤岡洋保らによる一部の研究にかぎられており、建築図集を刊行した特定の出版組織について活動全体を明らかにした論考は確認できないことは前述のとおりである。

こうした近代日本の建築出版活動の史的概観における要点をもとに、個別研究対象となる3つの建築出版組織を抽出する。抽出にあたっては4期に整理した時代区分とその潮目を包括しつつ、各組織の共通点である建築図集をふくむ建築図書が主力刊行物のひとつに含まれながら、講義録や雑誌などの複数の刊行形式の建築書が展開されていた建築出版組織となる。それは、建築書院、洪洋社、構成社書房となる。

第一の建築書院は、建築系の出版社の嚆矢にあたり、同院の活動期間は全体の時代区分の第I期から第III期にほぼ相当する。第二の洪洋社は、第II期から第IV期にわたって活動し、戦前期までの建築出版組織としては最大の刊行点数が認められる。第三の構成社書房は、建築出版活動の一側面をなす近代建築運動の頂点と密接な関係性が指摘できる。建築書院と構成社書房については、先行研究ではほとんど注目されてこなかった。洪洋社は、戦前期を代表する建築系の出版社としてよく知られてきたが、その建築出版活動の全体像については明らかとされてこなかった。

次章以降はこの3つの建築出版組織について個別に検討をくわえる。

第2章 建築書院と近代建築書の生成

序 既往研究における建築書院への言及と本章の構成

本章は、建築書院の出版活動について、院主・吉原米次郎の経歴や刊行物の特徴を検討することで、その概要を明らかにしながら、日本近代建築史上における意義について考察するものである。次章で取り上げる洪洋社については、大正・昭和戦前期に30年あまり刊行がつづいた叢書『建築写真類聚』（1915～43年ごろ）や新興建築運動を報じた代表的な建築専門誌のひとつ『建築新潮』（1924～31年）などの著名な建築書の版元として建築関係者に記憶され、その出版活動に関する建築史的研究は菊池重郎や藤岡洋保などによって手がけられてきた¹。しかし、建築書院については、その特徴的な名称にもかかわらず、建築書の出版社としての存在に注目した論考はほとんどみられない。今日の建築史研究者の多くにとっては、わが国における最初期の建築講義録のひとつである滝大吉の著作『建築学講義録』の版元として、建築書院の名を認識するにとどまっていることだろう。

管見によれば、これまで建築書院の出版社としての存在に言及したのは、1963年の堀口甚吉と2012年の内田青蔵のみとみられる²。堀口は、その専門とした建築構造力学の延長線上として近代建築史研究にも取り組み、欧米における初期の鉄骨構造や明治期の日本人建築家たちによる著作活動などに焦点を当てた³。そのひとつとして1963年に下田菊太郎の著作『欧米建築』を取り上げており、同書が「明治26年（1893）造家学会正会員吉原米

¹ 菊池重郎による『明治村通信』誌における一連の研究（「欧米新建築のプレート図集「モダン・アーキテクチュア」について」1981年2月号、「月刊図集「近世建築」(1)(2)」1981年4、5月号、「『セセッション図案集』特に「外観之部」の初刊年代について(上)(下)」1981年9、10月号、「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動(上)(下)」1982年1、2月号、「洪洋社の「建築写真類聚」(1)～(5)」1983年7、10、11月号、1984年2、5月号)。ほかに、藤岡洋保「はしがき」(『写真集 失われた帝都 東京』藤森照信、初田亨と共編著、柏書房、1990年所収)、中村裕太「資料紹介 スタイルブックとしての『建築写真類聚』」(大正イマジュリィ、no.7、pp.96-120、2012年)が挙げられる。

² このほかに柳澤宏江、溝口正人「明治期公刊建築技術書に記載された洋風建築の意匠にみる設計手法について その1」(日本建築学会東海支部研究報告集、第43号、pp.725-728、2005年)では、「明治期公刊建築技術書」のひとつとして『木造洋館雛形集』への言及が認められるが、「明治30年に吉原米次郎によって著され建築書院から出版された二巻構成の技術書である。吉原米次郎は建築書院の主幹であった」(同 p.726)と述べるにとどまっている。これは『木造洋館雛形集』における序文が「建築書院主幹 吉原米次郎」と署名された記述にもとづくものと考えられる。

³ 堀口甚吉の建築史研究については、第1章で指摘したように以下のような論考に代表され、いずれも『近代建築史論』(堀口甚吉論集刊行会、1984年)に所収されている。「下田菊太郎氏著欧米建築(明治22年6月出版)について」(日本建築学会論文報告集、第89号、p.485、1963年)、「滝大吉氏の建築家としての業績」(日本建築学会論文報告集号外、40巻、p.671、1965年)、「中村達太郎博士の建築学書著作家としての一面」(日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、44巻、pp.879-880、1969年)、「我が国における建築講義録の発達について」(日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、47巻、pp.1387-1388、1972年)、「三橋四郎氏著「大建築学」について」(日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、46巻、pp.1075-1076、1971年)

次郎が開設した建築書院にて売捌きしていた 18 種の中の一つで、この 18 種は建築構造の書 5、設計ハンドブック 2、セメント試験法 1、土木の書 5、構造力学の書 1、製図中村達太郎著配景法、雑誌 1、電話必携 1、の中の 1 種として欧米建築があげられている（傍点引用者）と記した⁴。ここに掲げられた刊行物書については不明点が多いが⁵、堀口は滝大吉の業績や各出版社の建築講義録に関する論考も残していることから⁶、出版社の存在にも意識が向けられていたものと考えられる。

一方の内田は、前章でも紹介した住宅関連の基本文献の復刊シリーズ『近代日本生活文化基本文献集』において、建築書院が 1913 年に刊行した『日本住宅建築図案百種』（金子清吉著、伊東忠太校閲）を収録し、その解題のなかで同院について以下のように触れている⁷。

この建築書院は、一八九三（明治二六）年に吉原米次郎の興した出版社で、「建築書院」という書店名から、当初は建築系の出版物を扱っていたと思われる。吉原自身、明治期から建築学会の准員にも名を連ね、一八九七（明治三〇）年には自ら『木造洋館雛形集』（建築書院）を出版するなど建築関係者であったことは明らかである。ただ、大正元年版の『建築学会員住所姓名録』によれば吉原の肩書は「工業書類出版業」とあり、必ずしも建築分野とは限っていない。この点は、本書の末尾の広告からも明らかで、大正期には建築系の単行本とともに、「土木学書類」「測量学書類」「鉄道学書類」「海事及船舶書類」「機械及機関術書類」「電気書類」「化学書類」などの項目が見られる、工学全般を専門とする出版社であった。

⁴ 堀口、前掲 3「下田菊太郎氏著欧米建築（明治 22 年 6 月出版）について」

⁵ 「18 種」の刊行物とは、堀口はいずれかの刊行物の社告リストを参照にしていると推定されるが、それに相当あるいは類似する社告は現時点で確認できていない。具体的な刊行物を推定しうるのは、「セメント試験法」が『摘要 石灰及セメント使用法』（亀井重磨編、1894 年 4 月）を指すとみられるだけである。「製図中村達太郎著配景法」とは『配景図法』（中村達太郎著・発行、米倉屋書店発売、1890 年 7 月）を指しているものとも想像されるが、建築書院で再刊された形跡は確認できていない。同書を堀口が所蔵していたことは認められる堀口の論文には発行所などは記されておらず、発行年月は 1890 年 7 月で一致する（堀口甚吉「中村達太郎博士の建築学書著作家としての一面」、日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、44 巻、p.879、1969 年）。

⁶ 堀口、前掲 3「滝大吉氏の建築家としての業績」「我が国における建築論議録の発達について」

⁷ 内田青蔵「第二巻『日本住宅建築図案百種：全』金子清吉著（建築書院、一九一三〔大正二〕年）『最新図説模範日本住宅』近間佐吉著（鈴木書店、一九一九〔大正八〕年）」（内田青蔵監修『近代日本生活文化基本文献集——ひと・もの・住まい』別冊 解題、p.28、日本図書センター、2012 年）

建築系文献の復刊シリーズは、昨今いくつかの出版社で進められているが、それらの監修役のひとりである内田ならではの出版社の存在に注意をむけた論考といえる⁸。内田がふれた『木造洋館雛形集』については、ほかの建築史研究者からも注目されてきた。たとえば山口圭子と片野博による2003年の共著論文では、「1897年に吉原米次郎編集による『木造洋館雛形集』が日本人著者による洋式建築の雛形として初めて出版された」と述べている⁹。片野は、近代の「我が国における技術書の刊行と建築技術の普及に関する研究」¹⁰に継続的に取り組んでいるが、吉原の人物像や建築書院の存在についての言及はみられない。

以上のように、従来は建築書院と吉原米次郎についてほとんど注目されてこなかったが、内田が「建築関係者であったことは明らか」と指摘したように、吉原は工手学校（現・工学院大学）の造家学科を卒業していたことが筆者の調査により判明している。そして、内田が「末尾の広告」をもとに「工学全般を専門とする出版社であった」と述べたように、実際に建築書に限らず、機械や電気などの工学書を刊行していた形跡もみられる。

そこで、建築書院の全体像に関するはじめての建築史的な考察となる本章では、その鍵とみなされる同院発行人・吉原米次郎の経歴について最初に述べながら、同院の創業経緯を検証していく。そのうえで、同院の出版活動全体が、工学書における刊行分野の変容によって、4期に区分できることを指摘する。つづく第2節では、その4期の区分にそって、建築書院の工学書全体にみる出版活動の変遷について述べていく。第3節では、建築書院の刊行物のなかから建築書を抽出し、同じく4期の区分にそって、同院の建築書の展開について検証する。そして、それらの建築書にみられる吉原の刊行手法の特徴についても言及する。以上をふまえた本章の小結では、日本近代建築史上における建築書院と吉原米次郎の事績について考察する。

検証作業にあたっては、建築書院における刊行物の全体像を把握することに努めた。国立国会図書館の蔵書を中心としながら、同院の刊行物をできるだけ実見したほか、学術情報データベースCiNiiによる大学・研究機関などの各図書館の蔵書を確認していった。また、建築書院の存在への注意の有無に関わらず、同院における個々の刊行物が考証された既往

⁸ 内田の編纂としては『住宅建築文献集成』（全27巻、2009-2013年）をはじめ、『雑誌『住宅』復刻版』（全52巻、2001～2003年）や『建築工芸叢誌・建築工芸画鑑 復刻版』（全8巻、2006年、いずれも柏書房）などがある。

⁹ 山口圭子、片野博「著者にみる建築技術書の内容的変遷——我が国における技術書の刊行と建築技術の普及に関する研究 その5」（日本建築学会研究報告九州支部計画系、第42号、2003年）、p.45

¹⁰ 片野博は「我が国における技術書の刊行と建築技術の普及に関する研究」として、これまでに10回の報告を行っている（第1章注35参照）。

研究の成果も参考にしている。さらに、建築書院の刊行物に掲載された社告に注目することで、同院の刊行情報を追跡し、それらと前述のデータベースなどと照合することで刊行実績の検証作業を補足した。

第1節 建築書院の活動概要と院主・吉原米次郎の経歴

2-1-1 吉原米次郎の経歴と建築書院の創業経緯

吉原米次郎の出自については、1912（大正元）年発行の『東京書籍商組合史及組合員概歴』（東京書籍商組合編・発行）によって確認できる。その全文を以下に引用するとともに、同書に掲載された吉原の肖像写真を本論文の図版項に掲示する [図 2-1]。

建築書院 吉原米次郎 初代（明治元年四月六日生）

東京市京橋区南槇町十三番地

創業 明治二十四年四月

生国ハ香川県香川郡中笠居村字香西ニシテ、明治二十一年出京シ建築学ヲ学ブ、偶々建築学講義録ノ発行ヲ囑托セラル、ヤ就職ノ念ヲ断チ、工業書専門ノ出版業者タラント欲シ、明治二十四年四月、建築書院ト号シテ書店ヲ創メ、一二講義録ヲ月刊シ、其他土木建築ニ関スル書ヲ発行ス。明治三十年一月以後、更ニ進ンデ工業全般ニ涉リ専門的ノ書籍及ビ海軍、庭造ニ関スル書ヲ発行シ、以テ今日ニ至ル。

『東京書籍商組合史及組合員概歴』、1912年、pp.140-141

吉原米次郎の生まれは、香川県香川郡中笠居村字香西、現在の高松市香西本町とされる。明治元年は9月8日に改元されたため、慶応4（西暦1868）年4月6日の生まれと記してもよい。吉原が1888（明治21）年に上京した当時、東京市下で開校されていた建築関連の学校の記録をたどっていくと、工手学校（現・工学院大学）の卒業生名簿のなかに、1892（明治25）年2月の「造家学科 第六回卒業」生¹¹として吉原米次郎の名前を確認できる。同名簿の記載によれば、1894（明治27）年版では「吉原米次郎 香川県平民」、1908（明治41）年版では「吉原米次郎 旧名斧太〇 香川」（筆者注：伏字は判読不明な細字だが「斧太郎」とも読める）と紹介されている¹²。なお、この旧名については、1908年版名簿のほかに記載例は確認できていない。

工手学校が開校されたのは、1888（明治21）年2月であり、吉原が上京した年と重なる。しかし、当時の修業年限は本科1年、予科6か月の合計1年6か月であり、吉原は1892年

¹¹ 当時の卒業月は、2月と7月の年間2階制だった。

¹² 『工手学校一覧』、1894年版 p.48（印刷：積文舎）、同1908年版 p.56（印刷：秀英舎）、発行者はいずれも工手学校。

卒業の第6回生である。したがって吉原は、上京後2年ほどを経てから工手学校に入学し、建築を学びはじめたものと考えられる¹³。

前述の『東京書籍商組合史及組合員概歴』の記載によれば、吉原が建築書院を創業した1891（明治24）年4月は、工手学校を1892年2月に卒業する一年あまり前、つまり在学中だったということになる。一方で、堀口甚吉は建築書院の創業年を1893（明治26）年としたのは前述のとおりである。また、建築書院の初期の刊行物には、出版活動の拡充に向けて寄稿を呼びかける社告が頻繁に掲出されており、「先輩諸士ノ協賛ヲ得テ明治二十六年五月建築書院ヲ興シ」たことが「明治二十九年十一月 建築書院主幹 吉原米次郎」と1896年の署名で記されている¹⁴。この記述の社告は繰り返し掲載されていることから、誤植や記憶違いを含むとは考えにくく、堀口はこの記述によって創業年としたものと考えられる。そして、現時点で確認できる建築書院の最初の刊行物は、奥付が不明で1893年10月付の「序」が掲げられた『実用 曲線測設法』（原田碧編）¹⁵および1894年1月刊行の『工師必携 材力便覧』（立岩芳太郎著）である〔図2-2〕〔図2-3〕。これらの刊行実績からみても、創業年として确实視できるのは1893年と考えられる。

さらに、この時期の吉原の活動として、造家学会（現・日本建築学会）機関誌『建築雑誌』への寄稿が以下のように確認できる。

「名称ニ就テ」、『建築雑誌』第5巻、pp.329-330（第60号、1891年12月）

「大工之書」、『建築雑誌』第6巻、pp.47-49（第62号、1892年2月）、pp.76-79（第63号、1892年3月）、pp.110-113（第64号、1892年4月）、pp.143-146（第65号、1892

¹³ 東京工業大学の源流である東京職工学校は1881年に開校しているが、当初は機械工芸科と化学工芸科のみが設置され、建築系の専攻の設置は1894年に工業教員養成所で木工科、1902年に東京高等工業学校で建築科となる。また、東京商業学校（現・一橋大学）附属商工徒弟講習所に職工科が1886年に設置され、当初は木工科としておもに職人の子弟を対象に募集された。同所は1890年に東京職工学校に移管されて附属職工徒弟講習所と改称ののち、1924年に東京高等工芸学校附属工芸実修学校へと改組された。一方で、私学の攻玉社は1879年の開校当初は測量術のみであり、1901年に攻玉社工学校となって土木科と建築科を設けられた。

¹⁴ たとえば『実用鉄道工学講義』（1896年11月）や『建築学提要』（訂正増補再版、1896年11月）のほか、1893（明治26）年創業を明記した社告としては『測量学全書 上巻』（1897年3月）、『木造洋館雛形集』（上巻、1897年7月）、『理論応用 橋梁構造編』（1898年10月）など多数が挙げられる。

¹⁵ 国立国会図書館蔵の『実用 曲線測設法』に奥付が欠如している。現在の刊行物において序文などの著者の署名年月が記される場合は、奥付の刊行年月よりも数か月以上前、つまり序文の執筆日で記され、その後の編集・印刷の期間を経た配本年月が奥付に記される。しかし、建築書院の傾向をみると、序文や社告などの署名年月については、奥付に記された刊行年月と一致している。この傾向からも『実用 曲線測設法』の序文の署名年月が刊行年月と推定しうる。

年5月)、pp.171-175(第66号、1892年6月)、pp.227-230(第68号、1892年8月)、
pp.269-272(第69号、1892年9月)

「会員諸君に望む」、『建築雑誌』第7巻、pp.226-227(第79号、1893年7月)

これらのなかで「名称ニ就テ」は、「近き頃『老牛餘喘』と名けし古き書物を見たるにその中巻」から「同文の儘抜粹し貴会に寄せ会員諸君の参考に供せん」とし、「納屋」「部屋」「厨」「屋蔵」などの説明文が引用されている。『老牛餘喘』は「神道、古語の語義、音韻、語源、古風俗等、和学を中心とした考証随筆」として天保年間(1840年ごろ)に成立したもののだが¹⁶、同書のなかから造家学会員に役立ちそうな建築関連の語彙が吉原によって紹介された。

2つめの寄稿「大工之書」は、「昨年夏期帰郷ノ折或ル人ヨリ本書一冊贈与」されたが「浅学ニシテ只ニ日本建築ニ関スルモノト推考」しても刊行年や「当時ニ行ハル、者ヲ記シタルモノナルカ更ニ判然セズ」ゆえに、造家学会員に「御教示ヲ乞ヒ併テ聊カ諸君ノ御参考ノ一端ニモ相成ランカト全文ヲ其儘抜記シ」たという。この寄稿については青井哲人が明治20~30年代の『建築雑誌』における「江戸時代にかかわる記事」の11事例のひとつとして取り上げており、「全7回の連載という、当時としては長大な記事となった。茶室建築に関して各部の雛形が詳細に記述されたもの」と紹介している¹⁷。

3つめの寄稿「会員諸君に望む」では、造家学会員に対して建築書院への寄稿が呼びかけられている。いわく「建築書院を設立し専ら建築書発行の策を決し其第一着手として過般来休刊中なりし本会正員滝工学士の講述に係る建築学講義録を続刊せり」しものの、「単に講義録発行のみにては僅に建築学の一斑を知るに止る」ことになるため、「後來益々建築書院の業務を拡張して建築に関する読書を続々発兌せん」ために、「願くは会員諸君の包蔵せらるゝ明論卓説等は続々之を上梓して我々後進生をして其恩沢に浴せしめよ」と訴えかけられた。

この記述によって、3つめの寄稿が掲載された1893年7月の時点で建築書院に刊行実績があったものと認められる。同稿で触れられた「滝工学士」とは、『建築学講義録』の著者である滝大吉にほかならない。その『建築学講義録』には、「休刊中」の同書を「続刊」したとする吉原の記述を裏づける滝の言葉も確認できる。

¹⁶ 「西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース」(デジタルアーカイブシステム ADEAC<https://trc-adeac.trc.co.jp/>)の「和書一総記」のうち『老牛餘喘』の項より(2016年12月6日、最終アクセス2017年7月14日、<https://trc-adeac.trc.co.jp/>)。

¹⁷ 青井哲人『建築雑誌』アーカイブス 第16回 江戸への距離、『建築雑誌』、2003年4月号、p.108

去る明治二三年十月本講義録第一号発刊の当時より本月其終局を告ぐるに至る迄正に三年十ヶ月にして其間世故の類に制せらるゝ事多く遂に一回之を停刊するの不幸に際会せりと雖も偶々吉原米次郎君の建築書院を創立せらるゝに当り奮つて其続刊に従事せられたるか為め茲に始めて其終局を見るに至りしは不肖の仝君に謝せざる能はざる所なりとす（後略） 明治二七年八月 工学士 滝 大吉

この文章が掲げられたのは、1898（明治31）年10月に「第2回本印刷」として刊行された建築書院版である。同版の奥付には「明治29年4月15日第一回本印刷発行」とも併記されている。滝大吉と『建築学講義録』[図2-4]については、堀口甚吉をはじめとする先行研究がみられるが、同書の初版年などの刊行経緯については明確にされていない。その要因は『建築学講義録』の初版が私家版の月刊形式の分割頒布であったことによるものと考えられる。堀口甚吉によれば「初め分冊で発行され、第1号が-90年、完結が-94年であった。後合本3冊となった」と刊行時期にふくみをもたせた記述となっている¹⁸。

工部大学校造家学科（現・東京大学建築学科）の第5回生（1883年卒）である滝大吉は、造家学会の創立発起人のひとりであり、前章で触れたように建築教育とその教本づくりにも熱心に取り組み、同窓で陸軍省技師時代に部下となった三橋四郎の執筆・出版活動に大きな影響を与えたとされる¹⁹。その滝が1889（明治22）年に大阪で「工業夜学校」を開設し、同校での講義録を同年から私家版で刊行したのが『建築学講義録』の初版とされてきた²⁰。そこには、前述の滝自身の記述である「明治二三年十月本講義録第一号発刊」とは1年のずれが認められる。一方で滝は、工手学校の創立から1896年1月まで造家学科で教鞭をとっていたともされる²¹。これは吉原米次郎の在校期間と重なり、滝と吉原が教員と学生として出会っていた可能性は高いといえる。

これらの経緯をふまえると、『東京書籍商組合史及組合員概歴』で吉原自身が申告し、執筆したと考えられる「偶々建築学講義録ノ発行ヲ囑托セラルハヤ就職ノ念ヲ断」つたのは、

¹⁸ 堀口、前掲3「滝大吉氏の建築家としての業績」

¹⁹ 堀口、前掲3「三橋四郎氏著「大建築学」について」

²⁰ 土崎紀子、沢良子編著『建築人物群像——追悼編・資料編』（後編 p.73、住まいの図書館出版局、1995年）。なお、堀口、前掲3「滝大吉氏の建築家としての業績」や堀勇良「奇傑として豪壮に生きた滝大吉」（『近代日本の異色建築家』pp.93-102、朝日新聞社、1984年）には、『建築学講義録』の刊行年や初版の経緯などの記述はみられない。

²¹ 荻原正三「工学院大学」（日本建築学会編『近代日本建築学発達史』、「11編 建築教育」、p.1828、丸善、1972年）

滝大吉の存在、あるいは工手学校の教員・滝から学生・吉原への誘導などがあったものとも考えられる。その類推には、『建築学講義録』の発端である工業夜学校が大阪の地にあったとされ、筆者による同書の実存の確認が再版以降の建築書院版にとどまっているなどの不整合は残されているが、建築書院設立後まもなく吉原が造家学会員にむけて告知した「第一着手として過般来休刊中なりし本会正員瀧工学士の講述に係る建築学講義録を続刊」したとする記述とは、少なくとも合致している。同様に 1895 年の記述としても「既に発刊の重なるものには瀧工学士の建築学講義録あり」とする吉原の記述が確認できる²²。

よって本章における建築書院の創業時期は、同社の刊行物の実存が確認でき、当時の社告で繰り返し記された 1893（明治 26）年 5 月を採るが、その一方で『東京書籍商組合史及組合員概歴』に申告された 1891（明治 24）年 4 月という年月にも一定の信憑性を指摘しておきたい。つまり、実存が確認できていないが、滝の私家版あるいは工手学校内の頒布などのかたちで「建築学講義録を続刊」するかたちで、吉原の建築書院の出版活動がはじまっていた可能性は否定できないものとも考えられる。

吉原が 1891 年から翌年にかけて『建築雑誌』に寄せた『老牛餘喘』と『大工之書』の紹介は、工手学校の在学時から卒業前後の投稿となる。江戸期の随筆や雛形書に対して吉原が学生時代から興味をもっていたのは、周囲に有識者の存在やその示唆も推察され、少なくとも吉原本人の向学心が人並み以上に高かったものとみてよいだろう。あるいは、学生時代より何らかのかたちで建築書の出版活動に携わっていたがゆえに、江戸期の建築書に興味を抱いたものとも推し量れよう。

以上から建築書院は、工手学校生・吉原米次郎の素地を見込んだ滝大吉らの教員が、講義録の刊行を依頼することで、その出版活動がはじまったものと考えられる。そして、吉原米次郎は、わが国において近代建築教育を修めた最初の出版・編集人として、建築史上の意義を見いだせる。従来は、早稲田大学建築学科を経て 1928 年から『国際建築』誌を主宰した小山正和が、建築教育を受けた建築専門編集者のパイオニアとみられてきた。前章では、それを遡る 1907 年の『建築世界』誌創刊直後から建築技術者などが記者として活躍していたことはふれたが、建築書院の吉原米次郎の存在は、それらをさらに 10 年以上早めることになるのである。

なお、建築書院における吉原の呼称は、創業時は「主幹」が用いられていたが、やがて

²² 二見鏡三郎講述『土木工学講義』第 1 号、1895 年 6 月、頁数記載なし、巻頭掲載

「院主」に定まっていったため、本章での表記は「院主」とする²³。また、創業年の判断材料として、後年の「周年刊行」も参考となるが、建築書院では以下のように起点となる年次が定まらないため、本章では考慮の対象から外した。

社告の表題	社告の署名年月	掲載・対象刊行物
「創業二十周年記念」	1910年7月	『和洋住宅建築図集』
「創業二十五周年記念」	1913年9月	『日本住宅建築図案百種』
「創業三十周年記念」	1917年8月	『日本住宅雑作図案五百種』
「創業三十一周年記念」	1918年9月	『世界の建築様式』

2-1-2 活動期間の概要と発行人の変遷

前項で述べたように、本章では建築書院の創業を1893（明治26）年5月とし、現存が確認できる最初の刊行物は1893年10月ごろの刊行とみられる。一方で、最後の刊行物についても現時点で不明点が多い。ともに1931（昭和5）年1月刊行の『すぐにわかる和洋建築早割図解』（石原良三著）と『八坪より七十坪まで 住み心地よき日本住宅の間取と外形図集』（建築書院編）までは刊行物が継続的にみられるが、その後10年ほどは刊行物が現時点で確認できていない。

建築書院の名が再び認められるのは、1941（昭和15）年3月に3点が刊行された『機械技術者養成叢書』であり²⁴、その奥付によると発行所が建築書院、発売所が国民出版社とされている。発行人は「建築書院 右代表 平井佐兵衛」と記され、これは1931年の建築書院の刊行物と同じ人物であることから、両社が同一の出版社であるとも確認できる。また、『機械技術者養成叢書』は、1944年3月に国民出版社の発行名義で再刊されている²⁵。「明治以後の書籍商史」として1930年に刊行された『日本出版大観』によれば、国民出版社の

²³ 「主幹」の表記は、最初の刊行物とみられる『実用 曲線測設法』（1893年10月序）と『摘要 石灰及セメント使用法』（1894年4月）にはじまり、社告では『木造洋館雛形集』（上巻、1897年7月）、著者の叙述では『摘要 石灰及セメント使用法』（第二版、1899年10月）など。「院主」の表記は、『測量学全書』（上巻、1897年3月）にはじまり、『和洋住宅建築図集』（1910年7月）における「創業二十周年記念出版」の辞として明記されて以降、「院主」の表記に定まったとみられる。

²⁴ 各巻タイトルは『工作機械の構造及性能』『工作機械の使用法』『木型と鑄造及製缶其他』（いずれも田中光彦ほか著）

²⁵ 同じ『機械技術者養成叢書』のシリーズ名にて、『工作機械の使用法』（田中光彦、中谷喜美、鎌谷一二著）、『測定器及図面』（田中光彦、大石國一、鎌谷一二著）、『工場用金属材料』（田中光彦、鎌谷一二著）が刊行された。

経営者が平井佐兵衛であったことも判明する²⁶。そこで、平井に至るまでの建築書院の発行人について追っていく。

創業から 1919 年 9 月刊行の『無線電信電話』（電気工学初等叢書）までの発行人は、吉原米次郎である²⁷。翌 1920 年に刊行を確認できる 4 点は発行人が「吉原松」となり、1921 年には新刊が確認できず、1 点の重版の形跡が残されている²⁸。そして、1922 年の刊行物で発行人は「株式会社建築書院 右代表 今津源右衛門」となる。この発行人が記された奥付が確認できるのは、1922 年 3 月刊行の『電気工学初等叢書 照明工学』（建築書院編、扇本真吉・若目田利助・高津清・村尾葉監修）から 1928 年 2 月刊行の『標準製図用文字ト輪廓』（徳岡精彦著）までである。ついで発行人として名前が認められるのが「井上鉄三郎」で、1928 年 3 月刊行の『自分で出来る電気鍍金術』と同年 12 月刊行の『自分で出来る電鈴と電気玩具』（ともに『通俗科学電気講座』、西田順一著）の 2 冊が確認できる。そして 1929 年 3 月刊行の『自分で出来る交流機械及静電機械』（同講座、同著者）以降の発行人が前述の平井佐兵衛となった。

こうした発行人の変遷とともに、建築書院の所在地は以下のように移り変わっていった。それぞれの年月は、発行人や奥付の変化がみられる刊行物の発行年月を示している。

	住所	発行人
1893 年 10 月 ²⁹	東京市芝区南佐久間町 1 丁目 3 番地	吉原米次郎
1894 年 11 月	東京市京橋区日吉町 9 番地	〃
1898 年 6 月	東京市京橋区日吉町 1 番地	〃
1903 年 4 月	東京市京橋区南伝馬町 2 丁目 14 番地	〃
1908 年 2 月	東京市京橋区南槇町 13 番地	〃
1920 年 3 月	〃	吉原松
1922 年 3 月	東京市神田区錦町 3 丁目 2 番地	今津源右衛門

²⁶ 「国民出版社・建築書院 平井佐兵衛」（『日本出版大観』、大阪編 p.147、出版タイムス社編・発行、1930 年）

²⁷ 発行が他者、建築書院は発売のみ（売捌所）となった刊行物として、つぎの 3 点が確認できる。『家屋改良談』（土屋元作著、時事新報社発行、1899 年 3 月）、『潜水業』（齋藤高保編・発行、1905 年 8 月）、『製図用文字及輪廓』（山本公介編・発行、1906 年 6 月）

²⁸ 1920 年の刊行として『電気工学初等叢書 変圧器及誘導電動機』（建築書院編、1920 年 3 月）、『日本建築欄間図集』（伊藤虎三著、1920 年 9 月）、『日本建築建具図集』（伊藤虎三著、1920 年 10 月）、『電気工学初等叢書 汽力発電所』（建築書院編、1920 年 11 月）。1921 年の重版とみられるのは 1912 年初版の『実用建築材料編 建築叢書』（天野郁介著）。

²⁹ 前掲 15、奥付が確認できていない『実用 曲線測設法』（原田碧編）の「序」の署名日付による。

1928年2月	東京市神田区神保町十番地	〃	
	大阪市西区新町四丁目（両住所併記）		
1928年3月	〃	（両住所併記）	井上鉄三郎
1929年3月	〃	（両住所併記）	平井佐兵衛（以下同）
1930年5月	大阪市西区新町通三丁目	東京市神田区神保町十番地	
1931年2月	東京市神田区今川小路三ノ六	大阪市西区新町通三丁目四十一番地	
1941年3月	大阪市西区北堀江通四丁目		

前述の『日本出版大観』（1930年）は、当時の出版業界紳士録が地域ごとに掲載されており、「大阪編」の平井佐兵衛の項には上記の井上鉄三郎が登場する³⁰（以下、傍点引用者）。

国民出版社・建築書院 平井佐兵衛 明治卅年九月生 西区新町通三丁目四一

君は大阪市難波新地の生れ、歳十五歳にして文貴堂書店に入り爾来同店にあること十八年、店主の絶大なる信用と其の後援を得て昭和三年九月、其の初め大淵善吉、井上鐵次郎、藤谷芳三郎、脇坂要太郎、岡本政治君等によつて共営されてゐる国民出版社、建築書院の経営を引つぐ事になつた国民出版社は大正十四年の創立、当用日記、家庭日記学生日記及夏季小学生日記帳を刊行し建築書院は建築電気に関する出版を刊行し東京時代（東京今津隆治君）よりつとに世に名声あつたが買収後は更に一段の生彩を帯び旧態を全く一身せるかの観がある。

上記の「東京今津隆治君」は、やはり『日本出版大観』の「東京編」に掲出されている³¹。

如山堂、工業書院、数文館 今津隆治 明治十一年一月生 東京市神田区錦町三ノ一九

明治十一年一月東京日本橋本船町（世俗魚河岸と称す）に生る、家は代々魚問屋なり、幼より読書の癖あり、森塾といふ寺子屋に入り十歳頃大人に伍して文章規範の輪講に加はる、小学校教育を終るや其当時の大書肆嵩山房須原屋小林新兵衛の丁稚となる、時に明治二十三年なり。明治二十七年日清戦役に際し主人の許可を得て、戦争物数点を出版す

³⁰ 前掲 26 に同じ。

³¹ 「如山堂、工業書院、数文館 今津隆治」（前掲 26 『日本出版大観』、東京編 p.83）

明治三十八年二月独立して東京市京橋区南伝馬町一丁目に如山堂なる店舗を構へ伊藤銀月氏の百字文選正統二冊を独立後の処女出版として、爾来毎年数種を出版す、此間活版所秀英舎の火災により紙型全部を焼失し、神田の大火に於ては献身的大出版といふべき文部省内史談会編纂の維新史蹟に掲ぐべき各名家秘蔵の重宝を苦心撮影したる図版凡そ一千個灰燼に帰せしため、再び蒐集の途なく、遂に涙を飲で中止の止むなきに至る、爾来織田得能師著仏教大辞典の出版に着手し、編纂完了を告ぐるや、資本主の躊躇により之亦遂に委せざるを得ざるに逢着し、此間三年の努力水泡に帰す。大正七年親友建築書院吉原米次郎氏の死去するや遺族の懇請により、全部を買収して、株式会社建築書院を起し茲に文学書肆變じて工業書肆となり、常務として経営すること数年年々好成绩を持続せしが、突始大震災の為に八ヶ所の収容品悉く烏有となる此損害四十万円なり。再起甚だ困難なりしも大正十三年六月辛ふじて復活開業せしも資金薄くして意の如くならず遂に一切の債務を支払ひたる後昭和三年二月解散の上、同年九月工業書院を創立し、一面教科書の出版を為すべく四年十二月数文館^{ママ}を兼設して今日に及ぶ。

これらの記述内容をふまえると、「今津隆治」とは建築書院の発行人を務めた「今津源右衛門」と断定できるものと考えられる³²。また、発行人が吉原米次郎から替わる直前の建築書院の動向としては、前項でふれたように、1917年と1918年に「創業三十周年記念」と「創業三十一周年記念」の刊行が吉原米次郎名義の社告で実施されている³³。さらに1919年6月刊行の『かし家と小住宅建築図案五十種』は、建築書院編による刊行趣旨が同年月の吉原米次郎の署名で2頁にわたって掲げられた。

以上の経緯から推定される建築書院の消息は、1893年に東京市芝区で吉原米次郎によって創業され、翌年には東京市京橋区に移転された。日本橋から京橋、伝馬町にかけては江戸期以来、須原屋をはじめとする多くの大手書肆が店を構えていたことで知られており、

³² 今津源右衛門という人物名は、四谷銀行が1923年1月の休業騒動の際に同行の専務取締役を務めていた人物が同姓同名である（「四谷銀行の整理如何」、『中外商業新報』1923年1月23日）。前掲26『日本出版大観』にその記述は認められないが、同書における「今津隆治」の経歴が日本橋の「代々魚問屋」の生まれであり、出版事業が繰り返され災禍に見舞われながらも再起している形跡がみられることから、四谷銀行の経営に関与した実業家・資産家であったとも推定しうる。なお、四谷銀行は1897年設立、1927年消滅とされる（ウェブサイト「銀行図書館」中の「銀行変遷史データベース」、2016年7月31日、最終アクセス2016年8月23日、<http://www.zenginkyo.or.jp/abstract/library/hensen/>）。

³³ 1918年9月刊行『世界の建築様式』（金子清吉著）、1917年8月刊行『日本住宅雑作図案五百種』（森田洪著）

明治20年代(1890年前後)までは京橋が書肆の中心地だったとされる³⁴。吉原はこうした檜舞台に身を置くなかで、須原屋で修業し南伝馬町で独立した今津と出会い、ふたりは「親友」となったと考えられる。『日本出版大観』が吉原の逝去年として伝える1918(大正7)年と、建築書院の刊行物に吉原の名が確認できる1919~1920年との差異は、理由が定かでない。しかし、同院の刊行物の形跡からは、1918~1920年とみられる吉原米次郎の死は急逝だったものとみられ、直前まで出版活動の陣頭指揮をとっていたと推し量ることができる。

吉原の逝去直後の1920年は、米次郎の妻とみられる吉原松が発行人を務めたものの、翌1921年は新刊が途絶え、吉原の「遺族の懇請」により同院を買い取った今津源右衛門が、1922年に株式会社として神田区神保町で再出発させたこととなる。しかし、翌年の関東大震災によって全資財が焼失し、再興が難航したすえに1928年に井上鉄三郎らに受け継がれ、ここで国民出版社とともにふたつの出版社が共同経営されることとなった。さらに、大阪に生まれて書肆で修業した平井佐兵衛の独立を機に、建築書院と国民出版社の経営が引き継がれていった。

こうして建築書院の経営が今津から井上、平井と継承される過程にあつて、その所在を示す住所地は東京と大阪が併記されるようになり、1930年代の新刊の空白期間を経て、1941年には大阪が拠点とされていた。東京と大阪の移転前後における発行所と発行人・平井の住所は一致しており、1931年2月時点が「東京市神田区今川小路三ノ六」、1941年3月時点で「大阪市西区北堀江通四丁目二〇番地」と表記されている。1931年2月時点で併記された建築書院の大阪の住所「大阪市西区新町通三丁目四十一番地」が、1930年刊行の『日本出版大観』に記された平井の住所と一致するから、平井は出生地の大阪を拠点とした出版人であったと考えられる。その前の発行者の井上鉄次郎は、東京と大阪の双方で出版活動を行っていた「井上一書堂」の東京側の発行人として記載が認められる³⁵。

つまり建築書院は、創業者・吉原米次郎の逝去後に、東京と大阪の出版人に継承されるなかで、大阪へと移転されたことが確認できる。しかし、移転前後の出版活動の形跡は現時点で認められないことから、本章では建築書院の活動期間についてはその刊行物が確認

³⁴ 大内田鶴子「神田神保町書店街の成立——日本橋から神保町への移行期の諸問題」(『三田社会学』14号、pp.12-23、三田社会学会、2009年)。大内田によれば東京書籍商組合の構成は、1906(明治39)年時点で神田地区への集積が確認できるという。

³⁵ 井上一書堂については、たとえば国立国会図書館の蔵書では1891年から1913年の刊行物が確認でき、井上鉄次郎の名前は『最新日本地理』(普通学研究会編、1911年4月)などに認められる。

できる 1893 年から 1931 年、そして 1941 年とする。その出版活動の終点は、「1931/1941 年」と表記したい。

わが国の昭和戦前期までの建築専門の出版組織は、1887 年 1 月に機関誌『建築雑誌』を創刊した造家学会（現日本建築学会、終戦前後の休刊期 1944 年 10 月～45 年 10 月をのぞき今日まで刊行中）をのぞけば、商業出版社としては 1907 年 7 月から 1944 年 8 月まで月刊誌『建築世界』を刊行しつづけた建築世界社が最も長く活動したものとみられてきた。建築世界社と建築書院の活動概要の比較として、次章で取り上げる洪洋社とあわせ、各社の活動期間と創業者の発行人在任期間を以下に記す。

社名	活動期間	創業者	創業者の発行人在任期間
建築書院	1893～1931/41 年（約 39 年間）	吉原米次郎	1893～1918 年ごろ（約 25 年間）
建築世界社	1907～1943 年（約 36 年間）	光岡義一	1907～1923 年（約 16 年間） ³⁶
洪洋社	1912～1944 年（約 32 年間）	高梨由太郎	1912～1937 年ごろ（約 25 年間）

わが国の明治期から昭和戦前期における建築系の専門出版社としては、上記の 3 社につづく長期の活動期間が認められるのは、今後の課題となるが、鈴木書店が約 26 年間の建築書を主体とした出版活動が認められる（創業 1911 年、建築書主体の出版活動は 1918～1944 年ごろか）。また、新建築社の戦前期の活動期間は約 23 年間となる（雑誌『新建築』刊行 1925～1944 年、戦後復刊 1946 年）。そして市販の建築専門誌の創刊は、『建築世界』誌につづき 1911 年に 2 誌がつづいたのは前章でふれたとおりである。

以上の検証作業によって、わが国の明治・大正・昭和戦前期における建築専門系の出版社としては、1910 年前後に起こった各社の建築書の商業出版ブームにさきがけるかたちで、建築書院が最も早く活動を開始したと考えられるだけでなく、最も長く活動したと認められること明らかとなった。同院を創業した吉原米次郎の逝去後は、その出版事業が他社の出版実業家へと譲渡されていたが、たんに上記の他社と創業者の発行人在任期間を比べてみても、昭和戦前期までの建築系の出版組織の出版・編集人としては、吉原が最も早く活動を開始し、最も長く活動したひとりといえる。

³⁶ 『建築世界』誌は、1923 年 9 月号から発行人が須原屋書店代表の鈴木壮太郎となり、建築世界社の出版事業は須原屋に譲渡されたものとみられる。また、同誌は 1943 年 6 月号から 1944 年 8 月号の終刊までは発行人が鈴木増雄、発行所は須原屋に代わって刊行された。

2-1-3 設立趣旨と刊行物の概要

建築書院の創業経緯については本章第1項ですでに触れたが、ここであらためて吉原による3つの社告から同院の設立趣旨を確認する。最初に示す社告は、設立の約2年後とみなされる1895年の刊行物から掲載されたものだが、「建築書院設立ノ目的」が明文化された唯一の社告とみられるだけでなく、同じ文面で繰り返し掲載されていることから、その設立趣旨を示すものとして認められる。

建築書院業務

◎建築書院謹告◎

◎建築書院設立ノ目的

建築書院ノ目的ハ本邦ニ於ケル工学ノ隆盛進歩ヲ図リ此道ノ先輩諸士ニ請ヒ広ク本学ニ関スル著書或ハ講義録又ハ翻訳書等ヲ出版発兌スルニアリ

◎工学書籍ノ各種類

工学書籍ノ種類ハ造家、土木、造船、電気、機械、採鉱、冶金、舎密等専工学上百般ノ書籍ヲ発兌シ工学社会ニ配布ス

◎建築書院特有ノ点

本院ハ坊間普通ノ書肆ニ於テ盛ニ発兌セザル工学百般ノ書籍ヲ続々発兌シ毫モ営利ニ走ラス実費ニテ発売ス主トシテ印刷、紙質、製本等ヲ精撰シ読者ノ便益ニ供ス

◎建築書院業務ニ就テ

本院ハ明治二十六年五月設立セリ而シテ日尚ホ浅シト雖トモ幸ニ諸君ノ協賛ヲ得テ益々隆盛ニ向エリ是レニ愛顧諸君ニ感謝スルトコロナリ本院ハ今後一層業務ヲ拡張シ奮発以テ素志ノ貫徹ヲ期スヘシ

建築書院主幹 吉原米次郎

(二見鏡三郎講述『土木工学講義』第1号、1895年6月、頁数記載なし、巻末掲載
同書第6号、1895年12月まで継続掲載)

これによれば「建築書院ノ目的」や「特有ノ点」は、その設立当初から「工学百般ノ書籍」を刊行することにあつたことが示されている。また「著書或ハ講義録又ハ翻訳書等」と記されていることから、当初の刊行形式が「著書」「講義録」「翻訳」の3本柱で企図されていたことが認められる。つぎに示す2つの社告における文面は、その大部分が一致し

ているため、相違部分を下線で示す。

土木工学講義発刊之辞

文運隆昌印刷出版の途大に開け著述の世に公にせらるゝ者日に月に其数を加へ屋外
尺寸の地を踏ますして毫も良師無きに困ます洵に聖代に遭遇する者の幸福と謂ふへ
し然れとも退きて之か裏面を考察すれば文化未た普汎ならず新刊書籍の多数は概ね
文学、経済、法律、医学等に関するものにして工学書の出版に至りては寥々として晨
星の如し余輩斯学を修むる者に取りては遺憾の極とす蓋し工学書の出版斯の寥々た
る所以は第一著述者少なく第二購読者の範囲未だ広大ならず第三多く挿図等多数を
要し彫刻及印刷費の廉価ならざるに由るとせば坊間普通の書肆に於て之にせざるも
亦宜なる哉

不肖夙に身を工学界に委ね工学科中の一科を専修せり工学書の出版斯くの如く未だ
振はざるを見て慨歎に堪へず明治二十六年五月建築書院を興し造家、土木、造船、電
気、機械、採鉱、冶金、舎密等専ら工学に関する著述の出版発兌を企てたり幸に先輩
諸士の協賛を得既に発刊の重なるものには瀧工学士の建築学講義録あり二見理学士
の土木必携あり其他一々列挙するに違あらず皆な印刷実費を以て販売し大に我同志
者後進諸君の便益を計るを得たり而かも未だ素志の十分の一だも果たさず以後益々
奮勉して其の貫徹を期せんとす今や幸に二見理学士が曩きに或る後進者のために講
述せらしものを筆記し今回更に同学士の校閲を経たる土木工学講義録発行の栄を享
け本日を以て第一号を発刊せり仍て一言を題すと云ふ

明治二十八年六月 建築書院編纂部に於て 建築書院主幹 吉原米次郎識

(二見鏡三郎講述『土木工学講義』第1号、1895年6月、頁数記載なし、巻頭掲載)

謹告

文運隆昌印刷出版ノ途大ニ開ケ著述ノ世ニ公ニセラル、者日ニ月ニ其数ヲ加ヘ屋外
尺寸ノ地ヲ踏マスシテ毫モ良師無キニ困マス洵ニ聖代ニ遭遇スル者ノ幸福ト謂フヘ
シ然レトモ退キテ之カ裏面ヲ考察スレハ文化未タ普汎ナラス新刊書籍ノ多数ハ概ネ
文学、経済、法律、医学等ニ関スルモノニシテ工学書ノ出版ニ至リテハ寥々トシテ晨
星ノ如シ余輩斯学ヲ修ムル者ニ取りテハ遺憾ノ極トス蓋シ工学書ノ出版スルノ寥々タ
ル所以ハ第一著述者少ナク第二購読者ノ範囲未タ広大ナラス第三多ク挿図等ヲ要シ

彫刻及印刷費ノ廉価ナラザルニ由ルトセハ坊間普通ノ書肆ニ於テ之ニセザルモ亦宜ナル哉

不肖夙ニ身ヲ工学界ニ委ネ工学科中ノ一科ヲ専修セリ工学書ノ出版斯克ノ如ク未タ振ハザルヲ見テ慨歎ニ堪ヘズ先輩諸士ノ協賛ヲ得テ明治二十六年五月建築書院ヲ興シ造家、土木、造船、電気、機械、採鉱、冶金、舎密等専ラ工学ニ関スル著述ノ出版發兌ヲ企テタリ皆ナ印刷実費ヲ以テ販売シ大ニ我同志者後進諸君ノ便益ニ供セリ而カモ未タ素志ノ十分ノ一ダモ果サス以後益々奮勉シテ其ノ貫徹ヲ期セントス大方ノ諸君幸ニ本学ニ関スル玉稿ヲ続々御投与アラシコトヲ希望ス本院は奮ツテ其發兌ニ従事スベシ聊カ茲ニ一言ス

明治二十九年十一月 建築書院主幹 吉原米次郎

(安河内鶴千代編『実用 鉄道工学講義』、1896年11月、頁数記載なし、巻末掲載)

前者は、月刊形式で頒布された講義録における発刊の辞である。後者は、ほかの刊行物にも掲載されている³⁷。出版文化が盛んになるなかで、工学書の刊行が「寥々として」振るわない理由は、「多く挿図等多数を要」することによって「印刷及彫刻費の廉価ならざる」こととなり、ゆえに「普通の書肆」では着手が困難になっていることを指摘しながら、「斯学を修むる者」には「遺憾の極」であることを一卒業生として嘆いている。つまり、建築書院の設立にあたって工学書を対象にすえるなかで、コストを引き上げる図版の多さが刊行の要点と認識されていたことが読み取れる。

また、こうした設立時の社告では「造家、土木、造船、電気、機械、採鉱、冶金、舎密」といった工学書の刊行分野が記されているが、以降の各刊行物の社告にも刊行分野が示されることとなり、以下のような変遷がみられる。

掲載年	社告に掲載された刊行分野（順序は原文ママ）
1894年 ³⁸	建築 土木 機械 電気 造船 採鉱 冶金 舎密
1895年 ³⁹	造家、土木、造船、電気、機械、採鉱、冶金、舎密
1904年 ⁴⁰	土木 建築 電気 機械 機関 鉱山 鉄道 理化 製図 造船 諸工芸

³⁷ このほかに同じ社告が『建築学提要』（訂正増補再版、1896年11月）でも確認できる。

³⁸ たとえば『摘要 石灰及セメント使用法』亀井重磨編、1894年4月、巻末社告。ここでは「建築学書類」と表記されている。

³⁹ たとえば『土木工学講義』二見鏡三郎講述、第1号、1895年6月、頁数記載なし、巻末社告

数理

1913年 ⁴¹	土木	建築	鉄道	製図	測量	庭園	装飾	電気	機械	機関	汽缶
	造船	鉱山	分析	海事							
1918年 ⁴²	土木	製図	測量	鉄道	建築	装飾	庭造	工業	造船	航海	汽缶
	機関	機械	電気	鉱業	分析	染色					

工手学校の学科構成は、吉原が卒業した 1892（明治 25）年から 1893 年までは、土木、機械、電工、造家、造船、採鉱冶金、採鉱、舎密の各学科からなり⁴³、これは建築書院の設立当初の社告に示された 1894～1895 年の刊行分野とほぼ一致しているといえる。前述の『東京書籍商組合史及組合員概歴』において吉原が創業から 1912 年当時の自社の歩みを顧みた記述では、「建築書院ト号シテ書店ヲ創メ、一二講義録ヲ月刊シ、其他土木建築ニ関スル書ヲ発行ス。明治三十年一月以後、更ニ進ンデ工業全般ニ涉リ専門的ノ書籍及ビ海軍、庭造ニ関スル書ヲ発行シ、以テ今日ニ至ル」⁴⁴とつづられたように、年次が下るほどに刊行分野が展開され、社告の表記が細目化されていった様子が刊行物の社告に認められる。

こうした建築書院の刊行物を集計していくと、現時点では 270 点が確認できる。その一覧を [表 2-1] に示した。本章では増刷・重版や改訂版は除いている。たんなる増刷でなく、内容を増補・更訂した改訂版は、現在も新刊図書として流通されており、建築書院においてもたとえば滝大吉の『建築学講義録』が 1909 年の「第十六版合本発行」ののちにも、1914 年に「合本発行」が確認できるが、全刊行物における各版の差異のすべてをたどるのは正確性を望めない。そこで本章では、たとえ「増補改訂版」などの明記が確認できる場合でも刊行点数には含めず⁴⁵、初版のみを刊行点数として集計することとした。そして、工学書全般にわたる建築書院の出版活動について、その変遷の特徴を概観するために、刊行分野をつぎの 6 つに大別することとした。また、カッコ内に各分野の刊行点数を併記する。

⁴⁰ たとえば『新式実験 染色法』高橋藤蔵編、1904 年 1 月、巻末社告。ここでは「建築学」などと表記されている。

⁴¹ たとえば『海陸 機関士受験参考及実地問答便覧』御園重太編、1913 年 2 月、巻末社告

⁴² たとえば『世界の建築様式』森田洪編、1918 年 9 月、巻末社告。ここでは「建築書類」などと表記されている。

⁴³ 前掲 12『工手学校一覧』、1894 年版、p.46-58

⁴⁴ 『東京書籍商組合史及組合員概歴』東京書籍商組合編・発行、1912 年、p.141

⁴⁵ たとえば『土木工学 橋梁編』（西川,新太郎編）の上巻は、初版が 1896 年、「訂正増補再版」が 1899 年となる。

建築（80点） 土木（83点） 機械（27点） 電気（44点） 造船（12点）
工業（24点）

「土木」のうち7点は、内容的に「建築」も含まれていることが刊行物に明示されているが、著者の専門分野などの状況からひとまず「土木」に分類した⁴⁶。本章3節で建築書に絞って考察する際には、これら7点の土木書を含めている。つまり、刊行が確認できる総計270点のうち、約1/3ずつが「建築」と「土木」を扱っていたこととなる。なお、上記の「工業」とは、工学全般にかかわるテーマの刊行物のほかに、鉱業（刊行3点）や色彩（同2点）といった少数の刊行にとどまった分野をまとめている。

こうして大別した刊行分野によって、建築書院の刊行物全体を整理したのが[図2-5]である。ここに示された特徴を概観すると、つぎのような推移が認められる。創業時の刊行分野は土木と建築でほぼ全数が占められていたが、1903年から刊行分野が工学全体へと展開されるにつれて建築と土木の刊行点数は低減している。1910年からは建築の比重が高まり、1921年に新刊がいったん立ち消えとなる。そして1922年からは建築と電気の割合が高まっているのは、発行者の交替による影響が推察できよう。

つまり、建築書院の出版活動は、全体を4期に区分できるといえる。次節ではこの区分にそって、建築書院の刊行物全体について、出版活動の変遷を考察していく。

⁴⁶ 建築の内容を含む土木書7点とは、『摘要 石灰及セメント使用法』（亀井重磨編、中島鋭治序、1894年4月）、『土木建築工事設計要表』（原田碧著、1897年10月）、『土木建築材料検査及使用法』（竹貫直次、前沢初治編、1900年3月）、『土木建築材料継手法』（工学叢書第2編、中村猪一、1902年5月）、『土木建築材料及構造強弱編』（中村猪市編、1903年3月）、『土木建築技術便覧』（清水熊蔵編、1908年9月）、『鉄筋コンクリート速算法』（原田碧著、1925年5月）。

第2節 建築書院の工学書全体にみる出版活動の変遷

2-2-1 第1期：土木・建築書による創業期 1893～1902年

[図2-5]に示されているように、第1期は土木書と建築書が刊行物の主体となった創業期である。刊行分野による刊行点数の内訳は、建築10、土木65（うち分冊形式18）、工業3となり、土木書が全体の8割を占めている。年間平均では約7.8点が刊行された。

土木書の刊行点数が圧倒的に多いのは、分冊形式による土木の講義録と叢書形式の土木技術書がこの時期に集中していることが要因とみられる。つまり、『土木工学講義』が分冊形式で18号（二見鏡三郎講述、1895年6月～1899年2月）[図2-6]が刊行されたのをはじめ、以下のような土木関連の叢書が18点ほど確認できる。

『土木工学』

橋梁編 上（西川新太郎編、田辺朔郎校閲、1896年2月）[図2-7]

橋梁編 下（西川新太郎編、田辺朔郎校閲、1896年4月）

治水編（瀬賀熊太郎編、永田銈輔校閲、1896年1月）

水理編（長多喜三次郎編、近藤仙太郎校閲、1897年5月）

市街道路編（亀井重磨著、三田善太郎校閲、1897年7月）

土工編（大西正信編、1901年2月）

実用道路編（竹貫直次編、蔵重哲三校閲、1901年4月）

材料及施工編（竹貫直次編、1902年8月）

砂防工編（中村猪市編、山内一太郎校閲、1902年10月）

『土木学公式』（いずれも金井彦三郎編）⁴⁷

第1編 測量公式（1900年2月） 第2編 水理公式（1900年5月）[図2-8]

第3編 道路公式（1900年8月） 第4編 材料強弱（1901年4月）

第5編 結構公式（1901年10月） 第6編 橋梁公式（1902年9月）

⁴⁷ 第10編までの社告がみられるが、刊行の形跡は確認できていない。『実地測量術簡易早学』（1901年3月）や『土木工学 実用道路編』（1901年4月）の巻末社告に掲げられた各タイトルは、「鉄道公式」「構造強弱公式」「治水公式」「雑公式及施工法」とされている。

『工学叢書』

第1編 鉄材重量及計算表（金井彦三郎編、1902年2月）

第2編 土木建築材料継手法（中村猪一編、1902年5月）

上記の叢書リストには、複数点数を刊行した著者が多いという特徴も見いだせる。そこで、この第1期に複数の刊行物を著した編著者を以下に抽出する。

二見鏡三郎 19点（うち18点は分冊形式）、金井彦三郎 10点（うち1点は翻訳書）、竹貫直次 5点、亀井重麿 4点（のち第2期に4点）中村猪市 3点（のち第2期と第3期に1点ずつ）、滝大吉 3点、原田碧 2点（のち第4期に1点）、西川新太郎 2点

滝の3点は『建築学講義録』である。ほかは、すべて土木書の著者となっている。二見は分冊形式による『土木工学講義』の刊行点数が大きいのはいうまでもない。そして、上記の土木書の著者について共通点を探ってみると、じつに5名が攻玉社の土木科の卒業生であったことが判明する。金井彦三郎⁴⁸、竹貫直次⁴⁹、亀井重麿⁵⁰、原田碧⁵¹、西川新太郎⁵²である。中村猪市の経歴については、現時点で確認できていない。

攻玉社⁵³は、幕末期における蘭学の私塾・攻玉塾にはじまり、明治期に航海測量習練所（1874年）と陸地測量習練所（1880年）を開設し、官立の工部大学校などに入学できない子弟を受け入れていった。攻玉社陸地測量習練所は1888（明治21年）に土木科となって、多く土木技術者が輩出されていく。同年の1888年に工手学校が開校したのは前述のとおりであり、たとえば亀井重麿と吉原米次郎は、それぞれ1893（明治26）年に卒業している。

攻玉社の卒業生による建築書院の土木書は、工学博士・田辺朔郎、理学士・三田善太郎、工学士・蔵重哲三らが校閲していることが多い。つまり、工学書の著者が少ないことを吉

⁴⁸ 伊東孝「明治期東京の橋梁技術創成期と技術者群像——倉田良嗣と金井彦三郎に焦点をあてて」（土木史研究、25号、pp.9-18、2005年）

⁴⁹ 長谷川博、雨宮邦之、吉田成男「明治期の攻玉社土木科同窓会誌——土木技術として」（土木史研究、15号、345-352、1995年）

⁵⁰ 長谷川博「明治期の攻玉社——亀井重麿を中心として」（日本土木史研究発表会論文集、9号、pp.79-88、1989年）

⁵¹ 山根巖「明治末期における長崎での鉄筋コンクリート橋」（土木史研究、19号、pp.209-220、1999年）

⁵² 倉田吉嗣「序」（『土木工学 橋梁編 上』頁数記載なし、西川新太郎編、建築書院、1896年2月）

⁵³ 攻玉社の記述は、長谷川博「明治期の攻玉社——亀井重麿を中心として」（日本土木史研究発表会論文集、9号、pp.79-88、1989年）を参照した。

原は嘆きながらも⁵⁴、大学出身者を校閲者に冠し、攻玉社の卒業生を著者にすえることで、専門書の刊行を拡充させていったことが認められる。しかも、ここに挙げた攻玉社土木科の卒業生5名は、土木技術者としての日常業務の余暇に執筆活動を行っており⁵⁵、短期間に複数の刊行物を著していることから、相当の筆力を有していたことは想像に難くない。そうした土木技術者を著者陣として形成したからこそ、創業期より多くの土木書を刊行できたものと考えられる。

また、上記の書目とは一致しないが、この時期における吉原の執筆依頼の様子は、土木書のなかで著者によって紹介されている。たとえば前掲の攻玉社卒業生である亀井重麿によれば、「一日工業書肆建築書院主幹吉原氏ト会談ス談偶々前記ノ事ニ及フ氏膝ヲ進テ曰ク方今我全国各地ニ於テ土木建築ノ実業ニ従事セル所ノ士ニシテ此類ノ書籍ノ世ニ出テンコトヲ望ム者頗ル多シ余其稿ヲ受ケテ之レヲ上梓シ其需用ニ応セント」⁵⁶といったように、膝づめで刊行を訴える吉原の様子が描かれている。さらに同書の第二版にあたっては「去年初旬建築書院主幹吉原君一書寄セテ曰ク先年君カ編スル処ノ灰及セメント使用法今ヤ初版殆ント尽キテ僅カニ数部ヲ余スノミ依テ不日之レヲ再版ニ附セント欲ス君若シ改訂ノ要ヲ認メハ請フ加筆ノ勞ヲ採レ」と加筆を求め、「依テ稿ヲ吉原君ニ送レリ」と記された⁵⁷。

さらに、亀井以外の土木書の著者によっても「本書ハ建築書院主吉原米次郎氏ノ所望ニヨリ編著セシモノニシテ専ラ我邦ニ於ケル鉄道職員用ノ日英対話ヲ掲記セリ」⁵⁸とつづられ、「一日建築書院主吉原米次郎氏ト会談ス談偶々日英ヲ対照セル工学用語蒐集シ初学者ノ参考

⁵⁴ 吉原米次郎「土木工学講義発刊之辞」（『土木工学講義』第1号、二見鏡三郎講述、1895年6月、頁数記載なし、巻頭掲載）

⁵⁵ 著者の本務の職場における立場を気にしてのことか、執筆活動は本務の余暇に行った旨、あるいは出版社の強い要望によるいきさつなどが明記されることは少なくなかった。たとえば以下のような記述が確認できる（傍点引用者）。「建築書院主吉原米次郎君之ヲ纂シテ一冊子トナシ以テ刊行センコトヲ請フ余素浅学公務ノ余暇筆ヲ採リ」（二見鏡三郎著『土木必携』、「序」、頁数記載なし、1894年11月）、「金井先生の平素繁務なるに不拘其余暇を以て本書校閲の勞を賭せられしことを深謝す」（建築書院編集部編、金井彦三郎校閲『鉄橋設計及施工実例図面』、「発行に就て」、頁数記載なし、1903年9月）、「本書ハ素ト公ニナスノ意思ナク余ガ公務ノ余暇縮紳ノ邸宅ヨリ貸長家ニ至ル迄多クノ実例ヲ蒐集シ他日ノ参考ニナサント欲シ製図ニ着手中偶々建築書院主ノ來訪アリ」（越本長三郎著、伊東忠太校閲『和洋住宅間取実例図集』、「凡例」、1907年1月）、「之を辞する再三……遂に自ら櫛らず公務の余暇、製図に着手し僅かに三月を超へざるに院主再び來り告ぐる」（鶴飼長三郎著、伊東忠太校閲『各種商店建築図案集』、「凡例」、1907年9月）、「本書ハ著者曩ニ公務ノ余暇ヲ以テ『土木工事設計便覧』千八百頁ヲ著シ」（『土木工事設計実例 第1巻 測量編』、「自序」p.1、井上福一郎著、1926年8月）

⁵⁶ 亀井重麿「自序」（『摘要 石灰及セメント使用法』、p.1、1894年4月）

⁵⁷ 亀井重麿「第二版緒言」（『摘要 石灰及セメント使用法』、第二版、p.7、1899年10月）

⁵⁸ 片岡喜三郎、依田忠四郎「自序」（『対話自在 鉄道職員用日英会話』、頁数記載なし、1899年3月）

ニ供セント」なり、「草稿ヲ探り得テ之ヲ示セリ氏曰ク幸ヒナル哉本稿ハ已ニ一冊子ヲナセリ」と申し出て、「吉原氏再三請テ止マズ茲ニ於テ氏ノ懇望ニ任セ幾日ノ余暇ヲ得テ之レヲ訂正増補シ遂ニ印刷ニ付スルコトヲ諾セリ」といった経緯がつづられた⁵⁹。

また、二見鏡三郎講述による『土木工学講義』の発刊趣旨とその経緯については、吉原が記している。いわく、「二見理学士か曩きに或る後進者のために講述せらしものを筆記し今回更に同学士の校閲を経たる土木工学講義録発行の榮を享け本日を以て第一号を發刊せり」という。「曩き」（さき）に、つまり、すでに筆記された原稿が存在していたものと考えられる。東京大学理学部土木科を卒業した二見は、のちに京都帝国大学の教授を務めるが、この当時は1892年からは福井県技師として九頭竜川改修を調査計画し、『土木工学講義』の刊行がはじまった1895年より第三高等学校教授となった⁶⁰。同書の「講述」の経緯については、確かな資料が認められていないが、このころに工手学校の校友だった形跡がみられる⁶¹。滝大吉の『建築学講義録』は、すでに刊行がはじまり休刊中だったものを吉原が引き受け、両者は工手学校の教員と学生として出会ったと考えられることは前述のとおりである。したがって、二見の『土木工学講義』の刊行についても、滝の『建築学講義録』と同様に、工手学校が接点となったものと推し量ることができる。

そして第1期における土木・建築分野以外の刊行物においても、土木とのつながりを指摘できる。その刊行物は、本章では「工業分野」とした以下の3冊である。

『工師必携 材力便覧』（立岩芳太郎著、原龍太序、1894年1月）

『実用工業数学』（立岩芳太郎編、1897年7月）

『独学実用 製図法自在』（竹貫直次編、前沢初治補、1899年4月）

これはいずれも工学全般に係わる教科書や実務書といえるが。著者に着目すると、竹貫直次は前述のとおり土木技師で、前沢初治は竹貫と『土木建築材料検査及使用方法』（1900年3月）の共編著が建築書院から刊行されているため、土木系の著者とみなされる。立岩芳太郎は「海軍技師」と記されているだけだが、原龍太は御茶ノ水橋などの設計で知られる東京大学理学部土木工学科出身の土木技師（のち東京帝国大学教授）であるため⁶²、立岩も土

⁵⁹ 内田録雄「自序」（『日英対照 鉄道土木建築機械用語かな引』、頁数記載なし、1897年10月）

⁶⁰ 藤井肇男『土木人物事典』、p.272、アテネ書房、2004年

⁶¹ 前掲12『工手学校一覧』、1894年版、p.27

⁶² 藤井、前掲60、p.250-251

木系の技術者とみてよいだろう。つまり、工学全般をテーマとした刊行物も、土木系の著者によって担われていたこととなる。

以上、第1期の出版活動では、刊行点数にして8割以上の刊行物が土木技術者によって手がけられており、分冊頒布や叢書といったシリーズ形式をとることで刊行物の充実化が図られていった様相を観察できた。それらの著者による原稿依頼の経緯からは、吉原が造家学科で学んだ知見や人脈を活かし、隣接分野である土木にも、積極的な執筆と刊行の働きかけを行っていたことが読み取れる。工学書の難点である図版の多さによって刊行物が増えず、工学系の読者が不利益を被っている点について建築書院の設立趣旨で指摘していることとも、吉原の学生時代の実体験によるものとみなされよう。

つまり第1期は、吉原の就学経験にもとづき、土木・建築を主体とした教本づくりから同院の出版活動が立ち上げられた創業期と位置づけられる。その刊行意欲に応えるだけの著者筋が、とくに土木界には1890年代に一定の幅をもって形成されていたことも指摘できる。なかでも竹貫直次は、建築書院の設立以前に土木工学の著作をもち、のちに小説家に転身するほどの健筆家であり、明治末期における土木書の活発な出版活動の象徴だったといえる。

2-2-2 第2期：工学書全体への展開期 1903～1909年

〔図2-5〕に表われているように、第2期は刊行分野が工学書全体へと一気に広げられた展開期となる。刊行分野による刊行点数の内訳は、建築7、土木10、機械14、電気10、造船11、工業17となり、刊行分野が工学全体へと満遍なく行き渡っていった。創業時より「造家、土木、造船、電気、機械、採鉱、冶金、舎密等専ラ工学ニ関スル著述ノ出版発兌ヲ企テ」で「本学ニ関スル玉稿ヲ続々御投与アランコト」を呼びかけてきた設立趣旨⁶³が刊行物として具現化されたこととなり、「工業書肆 建築書院」⁶⁴の自称にもふさわしい出版活動が示されている。年間平均では約9.9点が刊行された。

この時期の特徴を最も示す刊行分野は、造船関連の書目といえる。第2期に11点が刊行されたのちは、第3期の1918年に1点の新刊がみられるだけとなる。つまり、造船関連の書目はこの第2期に集中している。それは、『船舶運用術』（1906年2月）や『造船学講義』（1908年4月）といった造船学の入門書だけでなく、『海上衝突予防法註釈——附 衝突予

⁶³ 安河内鶴千代 編、橋本秀威校閲『实用鉄道工学講義』1896年11月ほか

⁶⁴ 『摘要 石灰及セメント使用法』（1894年4月）、『応用 水道新書』（1894年6月）、『土木必携』（1894年11月）などの刊行物の以後、この自称が一貫して認められる。

防実例』(1906年7月)や『現行海事法令』(1906年11月)[図2-9]に顕著に示されているように、日露戦争後の国外進出への機運が反映されている。なかでも『現行海事法令』は700頁あまりにも達する大部なもので、船舶法や船員法などの「海事ニ関スル法令」を「最初ニ発セラレタルモノヨリ現今迄」を「網羅ス」とともに「海事ニ関スル申請書及び願届等ノ文例ヲ掲載」し⁶⁵、その編纂者は「建築書院海事図書部」とされた。同部名義による刊行物は、この1点のみしか確認できていないが、このころから「工業及海事書肆 建築書院」⁶⁶や「工業書類海事書類発行 建築書院」⁶⁷との表記がみられるようになり、軍備拡張へと進む工学界の時勢が示されている。

同様の傾向は、機械および工業関連の書目にも認められる。機械関連としては、たとえば『海陸 火夫実用問答』(1903年9月)、『蒸汽機関実地取扱法』(1905年6月)、『瓦斯及石油機関取扱法』(1906年5月)[図2-10]、『通俗蒸汽機関術』(1908年4月)、『陸用汽缶汽機取扱問答』(1909年4月)といったように、動力機関やエネルギーに関する実用書が拡充されていった。そして、本章で工業全般として区分した書目についても、『通俗 鉱山学問答』(1903年8月)、『鉱山実地測量術』(1908年6月)、『実用 金属分析自在』(1908年6月)といったように、鉱山などの資源開発を扱う刊行物が顕著となっている。

これらの刊行物に対する吉原の姿勢にも、前期からの発展・展開する様相が観察できる。たとえば前述の『瓦斯及石油機関取扱法』では、著者の序文に執筆依頼の経緯が記された。「工業書肆建築書院主人吉原氏曰く、瓦斯及石油機関の用途日に月に隆盛にして」いるが、「通俗簡易にして実用の友とすべき」本が「稀にし」て「其出版を促す者頗る多しとて、余に寄稿を請はる、再三辞するも同氏聴かず」とつづられ(同書「序」p.1)、吉原の執筆依頼が土木・建築から工学全体へと広がっていった形跡として認められる。さらに『架空電線路建築一斑』(1906年5月)は、「此書は建築書院の主人の需に応じて、電信電話や、電灯電力の様な、一般電気事業に関する架空電線路の構造、及び之れが建築法を、初学者に分り易い様に極めて平易に講述した」(同書「序」p.1)とされ、同書の中扉には「工学士若目田利助講述 建築書院編纂」と明記されている。本業に多忙な工学士に口述させ、建築書院側で筆記したものと考えられる。

また、土木書となるが、『鉄橋設計及施工実例図面』(1903年9月)[図2-11]は、「建築書院編集部編 金井彦三郎校閲」とされ、その巻頭には刊行の趣旨と経緯が以下のように記

⁶⁵ 建築書院海事図書部「凡例」(『現行海事法令』、頁数記載なし、巻頭に掲載、1906年11月)

⁶⁶ たとえば『現行海事法令』奥付(1906年11月)に記載。

⁶⁷ たとえば『建築工事仕様便覧』巻末社告(1905年8月)に記載。

されている。

発行に就て

本邦に於ける鉄橋設計実例の仕様書及其詳細図面の附属する初学者の参考となるべき書籍発兌を本院へ促さるゝ各位当に多く依りて部員をして斯学応用の参考となるべき実例を撰写せしめ更に其稿を金井先生に請ひ同君の懇切周到なる校閲を経て今回発行するに至り幸に斯道を〇〇すんを得〇本院の光栄とする所なり茲に金井先生の平素繁務なるに不拘其余暇を以て本書校閲の勞を賭せられしことを深謝す

明治二十六年九月 建築書院編集部にて 主幹 吉原米次郎
(頁数記載なし、〇は判読不明)

つまり、本文の口述筆記とともに、鉄道設計の図版の収集なども含めて、自社の編集部員たちの手で編纂できるようになっていたものと読み取ることができる。

なお、この時期の刊行物には、発行部数に関する記述が認められる。1905年4月に刊行された『工業実用文例』（高橋毅堂著、大久保藤吾序）は、数か月後の社告で「五千部以上を発売し尚購求諸君陸続たり」とする「工業家座右の宝典」とうたわれた⁶⁸。やはり同年の社告では「日ニ月ニ新版ノ種類ヲ増加シ其都度数千部ヲ斯界へ配送シ初学者ヲシテ多少ノ至便ヲ得セシムルハ寔ニ本店ノ光栄トスル所ナリ」⁶⁹（傍点引用者）と記された。こうした部数は自己申告ではあるが、初版部数は1,000部から数千部単位で印刷されていたものと推定できる。

以上、第2期における建築書院の出版活動は、日露戦争後の国力増強と市区改正の機運にのって、工学全体へと進出していった。つまり、海事や動力機関、資源などの分野において、技術書の需要に応じていった工学書の展開期といえる。そこでは、建築書院編集部が著者の口述を筆記し、あるいは図面を収集するなど、自社の編纂による入門書や実務書が工学全体に登場し、同院の編集機能が充実していく兆候も認められた。

2-2-3 第3期：建築・電気書への偏向期 1910～1921年

[図2-5]に示されたように、第3期は刊行点数の割合が建築と電気工学の分野に集中され

⁶⁸ 『工業簿記』巻末社告（山田四朗著、波多野重太郎序、1905年8月）

⁶⁹ 『建築工事仕様便覧』巻末社告（小國巳一編、中條精一郎・柴垣鼎太郎校閲、1905年8月）

た建築・電気書への偏向期となる。刊行分野による刊行点数の内訳は、建築 34、土木 6、機械 5、電気 18、造船 1、工業 4 となり、さきの第 2 期を特徴づけた造船分野に新たな刊行物がほぼみられなくなっている。全体を年間平均でみると約 4.8 点となり、第 2 期の約 9.9 点からはほぼ半減となる。

建築のつぎに多い電気分野としては、『電気学 ABC』（1911 年 11 月）や『電気学手ほどき』（1913 年 8 月、いずれも若目田利助著）のように初学者向けの表題が目立ち、先期に 2 点が刊行された自社編纂による『電気叢書』が今期も 2 点が確認できる。各巻は『電灯』（1912 年 9 月）と『電気工業力学』（1916 年 5 月、いずれも建築書院編集局編、扇本真吉校閲）と基本用語で構成され、たとえば前者は「中等教育の程度に於て、電灯に関する事項の一般を記述せるものにして、尚専門的に電灯に関する学術を研究せんと欲する者の階梯とならんことを期したり」（同書「例言」p.1）とつづられ、専門教育の窓口になることが企図されている。

こうした初学者向けの刊行趣旨は、新たな叢書でより明確化された⁷⁰。それは、叢書名に「初等」と銘うたれた『電気工学初等叢書』[図 2-12] であり、1916 年から 1922 年にかけて 13 巻の刊行が確認できる。編著者はさきの『電気叢書』につづき、建築書院編集局編、扇本真吉校閲、さらに校閲者には同院における著者の常連でもある若目田利助ら合計 4 名の工学士が招かれた⁷¹。その刊行趣旨は、吉原米次郎がつづっている⁷²。「電信・電話は、どんな片田舎にも施設され」て「百般の工業に電力を用いないものは無い位」となり、「電気事業に従事する人の殖えたことは著しく」関連書は多いが、「其の多くは、電気を専門に研究する技術者用のものであって、其の説く所は六ヶ敷いものが多い」ばかりか「紙数も多く値段も高く」、「電気工学の概念を得んと欲する人や、学校で学んだ補修の目的で読む人には適さない」。そこで「成る可く平易に、本文には振り仮名まで付けて、しかも重要な事柄は漏らさず」に、「五十銭均一といふ破格の定価で発売することとした」とされ、「幾分なりとも電気事業の発達に貢献する」ことが叢書発刊の目的にうたわれた。

巻末の社告には刊行予定のラインナップが掲げられ、「発刊の都度、全国各新聞紙上に広告す」とうたわれている。この新聞広告の存在は確認できておらず、当初予定の 15 巻が

⁷⁰ 『電気叢書』については、4 点以降の続刊は確認されておらず、『電気工学初等叢書』へと引き継がれるかたちで発展的に解消したものとみられる。

⁷¹ ほかの工学士の監修者として高津清と村尾栗が記されている。高津は若目田利助と共編で『電気工学ポケット・ブック』（1915 年 7 月）も刊行している。

⁷² 『電気工学初等叢書 電力輸送』、序 pp.1-2、1916 年 6 月をはじめ、全巻の巻頭に掲載されている。

実際は 13 巻にとどまったものとみられるが、5 版、6 版を数えた巻も認められることから、初学者向けの普及版という刊行趣旨は一定の成果を挙げたものとみられる⁷³。

電気以外の刊行分野では、『機械叢書』『土木叢書』『建築叢書』が『電気叢書』とともに第 3 期にそろえられたことが指摘できる [図 2-13]。実際に、4 種の叢書がそろった時点の社告では「現代唯一」「時勢は本書を要求す」「専ら実用的新書なり」「専門家執筆」と華々しくうたわれている⁷⁴。このうち『機械叢書』は先期に 3 点が刊行されており、第 3 期では 1 点をくわえるにとどまったものとみられる⁷⁵。『建築叢書』で刊行が確認されるのは 1 点のみである⁷⁶。『土木叢書』については、『土木林業 砂防工事書』（中村猪市編、1912 年 5 月）、『鉄筋「コンクリート」設計実例』（井上福一郎編、以下同、1912 年 9 月）、『実用木橋編』（1913 年 9 月）、『水力電気工事編』（1914 年 4 月）と意欲的なテーマを掲げたラインナップが並べられ、「時代の要求に応じ随時発行し斯界の実用に供す」ことが目標とされた⁷⁷。

これらの 4 分野の叢書については、刊行実績をみるかぎりにはラインナップの展開が不十分であり、好評をえられず続刊しなかったものとみられる。それゆえに、さきの『電気工学初等叢書』のように、初学者向けの刊行を明確化して一定の成果が挙げられたために、自社編纂による同叢書のラインナップの拡充に注力したものとも考えられる。

そして、建築書院における刊行分野の推移として、土木書の刊行点数についての特徴を指摘しておきたい。創業期に圧倒的な割合を占めた土木書の刊行点数は、第 2 期以降は急激に減少する。すなわち、第 1 期土木 68（うち分冊形式 18）、第 2 期 11 点、第 3 期 6 点となり、1915 年以降は 1925 年と 1926 年に 1 点ずつとなる。こうした変化の要因となったものの可能性のひとつとして、第 1 期の土木書の著者筋となった攻玉社において、独自の講義録の刊行が開始されたことによる影響の可能性を指摘しておきたい。ちょうど本章の第 2

⁷³ 刊行が確認できるものとして、『電気通論』（1916 年 6 月）、『電力輸送』（同年 8 月）、『交流理論』（同年 12 月）、『電池工学』（1917 年 2 月）、『電気測定器』（同年 4 月）、『電気磁気測定』（同年 6 月）、『直流機械』（同年 8 月）、『交流機械』（同年 11 月）、『無線電信電話』（1919 年 9 月）、『変圧器及誘導電動機』（1920 年 3 月）、『汽力発電所』（同年 11 月）、『照明工学』（1922 年 3 月）、『電灯工学』（同年 11 月）がある。そのうち増刷が確認できるものに、たとえば『交流理論』（初版 1916 年 12 月、第 6 版 1918 年 12 月）、『電池工学』（初版 1917 年 2 月、第 5 版 1918 年 4 月）、『電気磁気測定』（1917 年 6 月、第 5 版 1918 年 12 月）がある。

⁷⁴ 『建築叢書 実用建築材料編』、巻末社告、頁数記載なし（天野郁介編、1912 年 10 月）。このほかに掲載例は確認できていない。

⁷⁵ 刊行が確認できたのは『歯輪設計及製図法』（大石開二編、1908 年 6 月）、『機械割出及製図法』（市川忠一編、1908 年 11 月）、『機械工具焼入法』（中山虎吉編、1909 年 9 月）、『機械据付及運転法』（市川忠一編、1912 年 8 月）

⁷⁶ 刊行が確認できたのは『実用建築材料編』（天野郁介編、1912 年 10 月）

⁷⁷ 『土木叢書 土木林業 砂防工事書』、巻末社告、頁数記載なし（中村猪市編、1912 年 5 月）

期のはじまるとなる1903（明治36）年の8月に「土木工学講義録」が「通学できない者に対して作成された」とされる⁷⁸。さきに挙げた金井彦三郎の攻玉社における著作としては、1905年の『攻玉社工学校講義録 橋梁編』（攻玉社工学校講義録発行所）⁷⁹をはじめ、『応用高等数学』（攻玉社工学校土木講義録発行部、以下同、1907年）、『土木工学 材料編』『土木工学 橋梁編』（以上1908年）、『土木工学 測量篇』（上巻、下巻、1909年）、『土木公式図式解法』（1910年）などが確認できる⁸⁰。

しかし、本書の冒頭で述べたように、ここでは新刊点数のみを扱っており、正確な追跡が困難な重版や改訂版については除外している。たとえば建築書院における刊行物の社告として、最もページ数が多いもののひとつとみられる『日本住宅雑作図案五百種』（金子清吉著、伊東忠太校閲、1917年8月）[図2-30]では、後付の社告が29頁にもわたって設けられ、既刊書として152点と刊行予告10点が並ぶ図書目録が掲載された[図2-14]。ここには創業時の刊行物とされた『建築学講義録』（1896年ごろ）も含まれている。つまり、この社告の図書目録は、第3期当時における同院の取り扱い刊行物を示しているといえる。よって、建築書院における工学書は、各刊行分野の新刊点数に年代ごとの変遷はみられるが、全体としては刊行物が蓄積されることで、商品のラインナップが充実化されていったものと認められる。それは、雑誌とは異なる単行本や叢書の大きな特徴であり、既刊書の販売期間は短くなく、好評なものは重版や改訂版がつづいていく。ゆえに建築書院の第3期における出版活動は、単行本と叢書の刊行形式により工学書を刊行しつづけることで、初学者向けの刊行物を中心に、工学分野においての一定の範囲を網羅するレファレンスを形成していった拡充期と考えられる。

なお、自社編纂による工学書の刊行にあたっては、工学士などの専門家の校閲だけでなく、洋書を基本としていた形跡が認められる。それは工学に「関スル著書或ハ講義録又ハ翻訳書等ヲ出版発兌」することを掲げた「建築書院設立ノ目的」に則ることになり⁸¹、翻訳という行為が創業当初から意識され、また実際の出版活動において行われていたことを意味することになる。それらは今後の研究課題とし、本章ではその指摘と一例を示すだけに

⁷⁸ 梶山清人、長谷川博「明治期にみる現場施工監督者の立場——「攻玉社土木科同窓会誌」の記述から」（土木史研究、19号、pp.407-414、1999年）、p.408

⁷⁹ 同年刊行の同講義録として、「結構編」「橋梁編」「建築編」「構造編」「治水編」「水理編」「測量編」「鉄道編」が確認できる（国立国会図書館所蔵）。

⁸⁰ いずれも国立国会図書館所蔵。

⁸¹ 吉原米次郎「建築書院業務」（二見鏡三郎講述『土木工学講義』第1号、1895年6月、頁数記載なし、巻頭掲載、同書第6号、1895年12月まで継続掲載）

留めておきたい。

一、本書の編纂に就き、参考せる書籍の主なるもの左の如し。

Crocker, *Electric Lighting*.

Zeidler and Lustgarten, *Electric Arc Lamps*.

Maycock, *Electric Lighting and Power Distribution*.

Karapetoff, *Experimental Electrical Engineering*.

(『電気叢書 電灯』、「例言」 p.2、建築書院編集局編、扇本真吉校閲、1912年9月)

上記に相当する刊行物と推定される書誌情報については、参考として以下に付記する。

Francis B. Crocker, *Electric lighting: a practical exposition of the art, for the use of engineers, students and others interested in the installation or operation of electrical plants*, D. Van Nostrand company, New York, 1906.

J. Zeidler, Joseph Lustgarten, *Electric Arc Lamps: Their Principles, Construction and Working*, Harper & brothers, London, New York, 1908.

Maycock, W. Perren, *Electric lighting and power distribution. An elementary manual of electrical engineering*, Whittaker & co., London, New York, 1902

Karapetoff, Vladimir, *Experimental electrical engineering and manual for electrical testing*, J. Wiley & sons, New York, 1907

2-2-4 第4期：建築・電気書による収束期 1922～1931／1941年

第4期は、吉原初太郎が亡きあとの建築書院の晩期となる。[図 2-5] に表われているように、第3期と同じように建築と電気工学の分野への特化が継続された建築・電気書による収束期といえる。刊行分野による刊行点数の内訳は、建築 29、土木 2、機械 8、電気 16 となり、このうち機械分野の3点は1941年に刊行されている。よって第4期の刊行物は、建築と電気に刊行分野がほぼ限定されていたともいえる。全体を年間平均でみると5点となり、吉原が健在だった第3期の約4.8点とほぼ同等だったことが認められる。

しかし、第4期に新たに立ち上げられた叢書については、『通俗科学電気講座』（第12巻まで確認、西田潤一郎著、1926年11月～1929年3月）を除くと、短期で終わったとみられ

るものが目立つ。『最新自動車工学大成』（藤田治夫、油谷十二、清水隆、西田順一著）は意欲的なテーマで第6巻の計画が認められるが、実際の刊行は2巻しか確認できない（いずれも1925年5月刊）⁸²。また、『土木工事設計実例』（井上福一郎著、1926年8月）と『最近欧米 模範建築図集』（永江亘編、1924年8月）は各1点の刊行が確認できるだけである⁸³。

建築分野について刊行点数が多い電気分野のうち、先期からつづく『電気工学初等叢書』の2点は⁸⁴、同叢書全体が自社編纂であることから、吉原の企画にもとづくものとみてよいだろう。そして前述のように、第4期ではめずらしく12巻まで確認できる叢書『通俗科学電気講座』（西田著）は、『自分で出来る乾電池と蓄電池』（第1巻、1926年11月）[図2-15]や『自分で出来る発電機と電動機』（第2巻、1926年12月）といったように、「自分で出来る」をモットーに「空論よりも実際を重じて、簡単なる製作法を主として記述」することで「本書と対照して試作し他日の発明に資せられんこと」を広く願った入門書となっている⁸⁵。一部の巻では「訂正4版」⁸⁶が確認できることから、一定の評価をえられたものとみられる。

全巻を単著で著したことになる西田順一については、同叢書にも学位などの記載はない。しかし、他社の著作により早稲田大学卒業の工学士であることが判明する。それは以文館から先行して刊行された『通俗電気学叢書』である。同叢書の巻末社告によれば、序文は工学士や工学博士、著者は「早大工学士」の組み合わせで構成され、西田は以下の巻を担当している。

『通俗電気学叢書』（以文館）のうち西田順一著

第1編『誰にもできる乾電池及湿電池製作法』（1913年3月）

第3編『誰にもできる懐中電灯製作及取扱法』（1913年11月）

第6編『誰にもできる電話機の製作及通話法』（1914年9月）

（第6編巻末社告より、頁数記載なし）

⁸² 第1巻『機関の原理及構造』と第2巻『機関装置』の巻末社告には「近刊予告」として第3巻『走行装置』、第4巻『自動車電気学』、第5巻『操縦法』、第6巻『工具及修繕』が告知された。

⁸³ 『最近欧米 模範建築図集』第1集は、『仏蘭西住宅之部』とタイトルが付いている。

⁸⁴ 建築書院編、扇本真吉・若目田利助・高津清・村尾葉監修『照明工学』（1922年3月）、同『電灯工学』（1922年11月）

⁸⁵ 西田潤一郎「通俗科学 電気講座の趣旨」（『通俗科学電気講座』第1巻、p.4、1926年11月）。以降の巻にも同様に掲載された。

⁸⁶ 『自分で出来る家庭用電熱器』第4巻、初版1927年2月、訂正4版1927年8月

これらの表題は、建築書院の『通俗科学電気講座』と叢書名および各巻の枕詞「自分で出来る」とよく似ている。建築書院版の各巻では、『自分で出来る乾電池と蓄電池』（第1巻、1926年11月）、『自分で出来る電灯と照明装置』（第5巻、1927年5月）、『自分で出来る電話機と通信機』（第6巻、1927年8月）が以文館版と似たテーマともいえる。実際に乾電池をテーマとした巻は、目次構成まで部分的に共通点がみられる。以文館の『通俗電気学叢書』の詳細は不明であるが、第6巻以降の刊行の形跡は確認できていない。また、西田は建築書院の『通俗科学電気講座』より1年あまり前に同院で刊行された『最新自動車工学大成』（2巻、1925年5月刊）の共著者のひとりであった。これらの状況から、建築書院の『通俗科学電気講座』は、その10年ほど前に刊行された以文館の『通俗電気学叢書』に着想をえて刊行されたものと類推できよう。つまり、第4期に立ち上げられて12巻が実現した叢書『通俗科学電気講座』は、建築書院独自の起案による刊行物とは認めがたいものと考えられる。

第4期の刊行物で現れた全体的な特徴としては、巻末などの社告に類似テーマの既刊書だけが掲載されている傾向である。たとえば『通俗科学電気講座』の巻末社告には、同叢書のラインナップのほかは、『電気工学初等叢書』などの電気分野だけが並んでいる⁸⁷。第1期から第3期までの巻末社告は、「土木書類」「製図書類」「測量書類」「鉄道書類」「建築書類」「装飾書類」「庭造書類」「工業書類」「造船書類」「航海書類」「汽缶書類」「機関書類」「機械書類」「電気書類」「鋳業書類」「分析書類」「染色書類」といった分野ごとに整理され⁸⁸、時代が下るほどに科目が増える傾向もみられていた⁸⁹。つまり、工学分野全体をみわたす姿勢が示されていた。それは「身を工学界に委ね工学科中の一科を専修」⁹⁰した創業者・吉原米次郎の才覚によるものと認められる。吉原が亡くなったあとの建築書院は、建築以外の工学書については、先期においても好調だった電気分野に注力し、他社の既刊書の叢書に倣わざるをえなかったものともいえる。それは、初学者向けの入門書であっても、工学分野に理解と意欲をもった出版人や編集者の必要性を示すものとも考えられる。

建築書院の最後の刊行物とみられる『機械技術者養成叢書』（3巻まで確認、田中光彦ほ

⁸⁷ たとえば『通俗科学電気講座』第1巻、1926年11月

⁸⁸ たとえば『世界の建築様式』森田洪編、1918年9月、巻末社告

⁸⁹ 本章第1節第3項「刊行物と刊行分野の概要」を参照されたい。

⁹⁰ 前掲54に同じ。

か著、いずれも 1941 年 3 月) [図 2-16]⁹¹は、「東亜建設の大業完成を期する為め」に「工業の中心たる熟練工の排出を要求して止まない」なかで「一大福音たる」書となろうことがうたわれていた⁹²。いわゆる出版統制下の用紙供給に制限があったなかで、刊行できる刊行物は時局に貢献するテーマが必然であり、同叢書はもそのひとつといえる。筆者が確認できている建築書院の刊行物としては、1931 (昭和 5) 年 1 月刊行のものから 1941 年 3 月の『機械技術者養成叢書』にいたる間に改訂版などもみられない。また、同叢書は 1944 年 3 月に国民出版社から再刊された形跡がとみられ⁹³、両社は 1930 年前後から平井佐兵衛が経営していたことは前述のとおりである。これらの経緯から、『機械技術者養成叢書』が突如として大阪移転後の建築書院の名で刊行されたのは、「建築電気に関する出版を刊行し東京時代」から「つとに世に名声あつた」定評をもって⁹⁴、平井がその名を用いたものと考えられる。その「名声」は、吉原米次郎によって築かれたことが指摘できるとともに、これらの記述が「明治以後の書籍商史」として 1930 (昭和 5) 年に刊行された『日本出版大観』で紹介されていることから、同時代の出版界における吉原の事績の評価が認められるのである。

つまり、吉原亡きあとの第 4 期における建築書院は、著者の人脈とともに、編集方針も吉原の築いた基盤のうえに成り立っていた建築・電気書への収束期であったといえる。社告における刊行リストに工学分野ごとの整理がみられなくなるなど、工学全体を俯瞰する総合的な視野はみられなくなった。それは、「工学ノ隆盛進歩ヲ図」らんとする意思をもった吉原という出版人の存在が、工学書の出版文化を支え、その展開において一定の役割を果たしていたことを示すものと考えられる。

このように工学書を展開させた吉原だったが、その出版活動の主眼については社名が示すように建築書におかれていたものとみられる。それは後述するように、建築書だけがいわゆる豪華本が登場するようになり、ほかの刊行分野と比べて注力のしかたに差異が広がっていくためである。次節では建築書院における建築書の出版活動について、本節と同じく 4 期の区分にそって検討を加えていく。

⁹¹ 各巻の表題は『工作機械の構造及性能』(第 1 巻、田中光彦、鎌谷一二著)、『工作機械の使用法』(第 5 巻、田中光彦、中谷喜美、鎌谷一二著)、『木型と鑄造及製缶其他』(第 6 巻、田中光彦著)

⁹² 杉田稔「序文」(『機械技術者養成叢書 第 5 巻 工作機械の使用法』(序文 pp.1-2、田中光彦、中谷喜美、鎌谷一二共著、1941 年 3 月)。杉田は「前大阪市立都島工業学校長」との肩書きが付されている。

⁹³ 同じ『機械技術者養成叢書』のシリーズ名にて、『工作機械の使用法』(田中光彦、中谷喜美、鎌谷一二著)、『測定器及図面』(田中光彦、大石國一、鎌谷一二著)、『工場用金属材料』(田中光彦、鎌谷一二著)が刊行された。

⁹⁴ 前掲 26 に同じ。

第3節 建築書院における建築書の展開

2-3-1 第1期：建築教本による始動期 1893～1902年

第1期の建築書は、刊行点数としては合計14点で、年間平均では1.4点となる。前節で述べたように当期の刊行点数としては土木書が68点と圧倒的に多いが、当時の吉原の記述によれば「建築書院を設立し専ら建築書発行の策を決し其第一着手として過般来休刊中なりし本会正員滝工学士の講述に係る建築学講義録を続刊せり」ともされている⁹⁵。第1期の建築書は後述のように、啓蒙的な講義録や読み物が特徴的であることから、建築教本による始動期といえる。

滝大吉の『建築学講義録』[図 2-4]の初版は、大阪の工業夜学校での講義による私家版であったとされる⁹⁶。また、同書の建築書院版について筆者が確認できたのは、「第一回合本印刷」が1896年4月に刊行された記載を、1898年版（第二回合本印刷）の奥付で確認するにとどまっている。しかし、少なくとも1895年6月の時点で「既に発刊の重なるものには瀧工学士の建築学講義録あり二見理学士の土木必携あり」⁹⁷と記され、『土木必携』は1894年11月に刊行されている。これらの経緯を勘案すると、建築書院もしくは同院の設立前に吉原が個人としてかかわった『建築学講義録』の刊行としては、1895年以前になると推定できる。現時点で確認しうる同院の第1期における刊行点数は土木書が多いが、造家学科出身の吉原が「専ら建築書発行の策を決し」⁹⁸たとされるように、建築書の刊行にも一定の力が注がれていたものと考えられる。

同様に現存を確認できていないが、建築書院における最初期の建築書としては、『欧米建築』（下田菊太郎著、久留正道関）と『地震家屋』（佐藤勇造著）が1894年ごろに刊行されたものと、同院の社告の記述経緯から推定される⁹⁹。この2冊の共通点としては、初版は著者を発行者とする私家版で刊行されていることである。『欧米建築』は1889（明治22）年6

⁹⁵ 吉原米次郎「会員諸君に望む」、『建築雑誌』第7巻、p.227（第79号、1893年7月）

⁹⁶ 土崎、前掲20、後編p.73

⁹⁷ 前掲54に同じ。

⁹⁸ 前掲95に同じ。

⁹⁹ 刊行前の社告は定価が未記入のことが多いが、『欧米建築』と『地震家屋』がともに価格入りで掲出された社告としては、『実用 曲線測設法』（1893年10月序、国立国会図書館蔵本は奥付欠如）、『摘要 石灰及セメント使用法』（1894年4月）、『応用 水道新書』（1894年6月）が挙げられる。また、1896年刊行の『建築学提要』と『実用鉄道建設技術者必携』では「明治二九年十一月 最近既発書籍目録」として掲出されているほか、1987年以降も『実用工業数学』などで刊行リストに含まれている。

月（「大売捌」に丸善商店、哲学書院、博聞社）、『地震家屋』は1893（明治26）年4月（「発兌元」に共益商社）に刊行された¹⁰⁰。

これと同様な刊行形態としては、『建築学提要』（千葉末吉著、中村達太郎校閲）[図2-17]も初版は1891（明治24）年7月に著者の私家版として淵点堂から発売され、その「訂正増補再版」が1896年11月に建築書院から刊行されている。つまり、滝大吉の『建築学講義録』と同様に、建築書院の創業直後となる1894～1896年の建築書は、著者の私家版で刊行された既刊書を再販するかたちではじまったものと考えられる。それは、工手学校の卒業前後に建築書院を設立したとみられる吉原が、建築書のラインナップを充実させる手段ともいえ、市場で入手困難となった好著の刊行を継承する狙いも存在したものと考えられる。

そして1897年以降は、建築書においても建築書院が初版となる『建築工事 設計便覧』（大泉龍之輔編、滝大吉・野村一郎校閲、1897年8月）[図2-18]や『教科適用 矩尺原理及使用法』（島邦生著、1901年5月）といった実務書が認められる。さらに、自社編集による建築書として最初の刊行物となったのが「日本人著者による洋式建築の雛形として初めて出版された」¹⁰¹とも評される『木造洋館雛形集』（上下巻、吉原米次郎編、1897、1898年）[図2-19]であった。その刊行趣旨としては「初学者の階梯とすべき洋風家屋建築図集の如き太た稀」ななかで「図集発刊の第一着手」として計画された¹⁰²。それは、建築書院設立の趣旨のひとつに挙げられた工学書刊行の課題である「図等多数を要し彫刻及印刷費の廉価ならざるに由る」¹⁰³ことに対するチャレンジの第一歩であったと考えられる。

このことは、印刷所の違いにも表れている。第1期をとおして印刷所は「積文舎（印刷人：松本義弘）」で一貫している。積文舎については不明点が多いが、工手学校の公式案内書ともいえる『工手学校一覽』の1894年版の印刷を手がけていることから、吉原と工手学校の関係性による接点が推定できる。全期をつうじては、刊行物の総計270点のうち半数近くの131点に積文舎の名前が確認でき、建築書院とは近しい関係にあったことが認められる。しかし、第1期では『木造洋館雛形集』の上下巻2点だけが、印刷所は「関口丁西堂（印刷人：関口嘉一郎）」とされた。関口丁西堂に関する記録は確認できていないが、図版に適した印刷を考慮しての印刷所の変更だったと推察できる。それでも「謄写不完全に

¹⁰⁰ いずれの私家版も国立国会図書館蔵。

¹⁰¹ 山口圭子、片野博「著者にみる建築技術書の内容的変遷——我が国における技術書の刊行と建築技術の普及に関する研究 その5」（日本建築学会研究報告九州支部計画系、第42号、2003年）、p.45

¹⁰² 吉原米次郎「序」（『木造洋館雛形集』上巻、吉原米次郎編、1897年7月、頁数記載なし、巻頭掲載）

¹⁰³ 前掲54に同じ。

して加ふるに印刷甚だ粗」であったことを謝し、「再版に際し十分訂正増補し益々初学者参考の資料に供せんことを誓ふ」と述べている¹⁰⁴。

つまり、第1期の建築書は、講義録に代表される文章主体の刊行物について、私家版による既刊の良書から積極的に自社へと取り込むことでラインナップを拡充するとともに、自社編集によって図版主体の刊行手法に取り組みはじめる姿勢が確認できた。

2-3-2 第2期：建築仕様便覧と建築図集の展開期 1903～1909年

第2期の建築書は、刊行点数としては合計9点と年間平均約1.3点にとどまっているが、そこには第1期の建築書からの継続性と発展性が見いだせる。それは、第1期で『建築工事設計便覧』と『木造洋館雛形集』（上下巻）で1例ずつみられた建築仕様便覧と建築図集が、第2期で発展的な刊行物が表れていく展開期となる。

同様に第1期でみられた私家版などの既刊書の再版としては、1886年6月に京都で刊行された『匠工必携』（柴田四子吉著・発行）¹⁰⁵が建築書院より1906年6月に刊行されている。これは規矩術書のひとつでありながら、英国や米国の各単位との換算方法をはじめ、コンクリートやペンキ塗りなどの説明が巻頭と巻末に付されており、和洋の建築実務を対照できる有効性に吉原が注目して版權をえたものと考えられる。

そのほかの建築書は、建築書院独自の初版刊行とみられ、『実用 木材尺メ便覧』（造林学研究会編、1904年3月）、『建築工事仕様便覧』（小國巳一編、中條精一郎、柴垣鼎太郎校閲、1905年8月）といったように、建築工事の実務に即した技術書が刊行されていった。なかでも『和洋建築工事仕様設計実例』[図2-20]は、上下巻をあわせると1,800頁を越える大部なもので、刊行は上巻が1905年9月、下巻が1908年9月と完結に足かけ3年を要している。校閲は三橋四郎が務め、辰野金吾と妻木頼黄に序文を寄せており、第一線の学士建築家と明治建築界の二大巨頭を迎えた陣容に、出版社としての意気込みと建築界での地位の確立を見て取れる。この一大刊行事業の執筆を担った編者の田中豊太郎は、北海道帝国大学の各校舎を設計したことで知られているが、『和洋建築工事仕様設計実例』の刊行時には大蔵省臨時煙草製造準備局で妻木のもとで技手を務め、それ以前は陸軍省で三橋四郎と

¹⁰⁴ 前掲102に同じ。

¹⁰⁵ 発行人として柴田とともに、山内正次郎が併記されている。山内は京都の版元である山内文華堂とみられ、国立国会図書館蔵本には、つぎのような刊行物も確認できる。『新撰歎喜嘆 信後相続』『本願寺聖人親鸞伝絵 上・下』（いずれも山内正次郎編、1892年）

同僚であったとされる¹⁰⁶。田中は、工手学校造家学科の第2回生として1890（明治23）年2月に卒業しており¹⁰⁷、年2回の卒業制だったなかで同学科第6回生の吉原とは2年違いとなる。ふたりの在校期間は重なっていないものの、近しい関係にあったであろうことが推察できる。また辰野は当時、工手学校時代に同校で教鞭ととっていたともされる¹⁰⁸。こうした田中の労作に対し、辰野には「広ク材料ヲ輯集シテ其選択ヲ読者ニ一任シタルガ如キ真ニ我国現時斯業社会」に有益であり、技術者や「後進者ハ勿論博士学士ト雖モ此書ニヨツテ便益ヲ感ズル」ことは少なくないだろうと書かせ、上司であった妻木には「田中豊太郎氏ハ篤学ノ士ナリ」と人柄を紹介させた¹⁰⁹。吉原の出版人としての手腕の成熟が認められよう。

そして、建築書院の設立時の課題のひとつであり、先期にその試行の第一歩が観察できた図版の印刷については、この第2期においても継続的に取り組まれている。それは、『和洋住宅間取実例図集』（1907年1月）[図2-21]と『各種 商店建築図案集』（1907年9月）[図2-22]であり、ともに著者は越本長三郎¹¹⁰、校閲者は伊東忠太である。ふたりは二楽荘（1910年）や真言宗徒生命保険会社（1912年）といった西本願寺関連の建築で設計をともにしたとされる¹¹¹。『各種 商店建築図案集』の「凡例」¹¹²では、その刊行の趣旨と経緯が越本によってつづられた。「本書を出版せし所以」は、「商店の建築は今尚依然とて旧態を脱せず不便、不体裁の家屋多く」あるが、「目今所在市区改正実施の挙あり此の機に臨み市街の面目を一新し焦点の品位を高め」んとする好機にあるためとする。そうしたなかで「建築書院主吉原君余に囑」したのが「商店建築の著」であり、「之を辞する再三」もかなわず、「製図に着手し僅かに三月を超へざるに院主再び来り告ぐるに時機を失するの処あるを以てし督促太だ急にして充分研究の余地を与え」られなかったが、「製図は外観の形式を主とし印刷をして鮮明ならしめんがため銅板彫刻となせしも絵様、繰形等は極めて繊細緻密なるを以て往々形式の誤謬を生ぜり乞ふ諒せよ」と述べ、著者の製図による立面図とファサード部分の

¹⁰⁶ 皆川雄一、角幸博、池上重康「田中豊太郎（1870-1947）の建築活動」（日本建築学会大会学術講演梗概集、2002（F-2）、建築歴史・意匠、pp.359-360、2002年6月）

¹⁰⁷ 前掲12『工手学校一覧』、1894年版、p.34

¹⁰⁸ 前掲106に同じ。

¹⁰⁹ 『和洋建築工事仕様設計実例』上巻、前付 pp.1-4、1905年9月

¹¹⁰ 『各種 商店建築図案集』における著者名の表記は、扉頁では「越本長三郎」だが、奥付では「鶴飼長三郎（旧姓：越本）」と併記された。以後、鶴飼姓をなつたとみられる。

¹¹¹ 長谷川尚人「明治大正昭和初期、西本願寺関連施設研究序説——二楽荘に於ける鶴飼長三郎の役割」（九州大学工学部建築学科2010年『建築学研究卒業論文梗概集』pp.23-1～23-4頁）

¹¹² 頁数記載なし。

平面・断面図で構成された図面の特性が読者に説明されている。

また、同書の巻末社告では、前著の『和洋住宅間取実例図集』がすでに「好評三版」となり、「銅版五十図」を収録した特徴もうたわれている。越本の著作2点は、いずれも印刷所が通常と異なるだけでなく¹¹³、奥付には「彫刻者 豊田嘉兵衛」と明記された。豊田の人物像は不明だが、図版の銅版印刷にあたった制作者とみられ、当時における図版印刷の特殊性を物語っているものとも考えられる。

つまり第2期の建築書は、図版制作という課題に対し、社会の需要にあわせた住宅の間取りや商店のファサードといった図面を建築技師に描かせることで、著者とともに建築図集の充実化を図っていたものと考えられる。それらと併行し、1,800頁を超える仕様便覧も刊行されており、建築の仕様という文字情報と建築図面による視覚情報の併存が観察できる。こうした建築書は、建築書院における他分野の工学書と比べると刊行点数は多くないが、大部な仕様便覧や銅版彫刻による図集が複数冊を刊行されるなど、それぞれの出版計画に対する注力の比重の高さが認められる。

2-3-3 第3期：建築図集の開花期 1910～1921年

第3期の建築書は、合計34点と年間平均2.8点となる。刊行点数としては決して多いといえないが、その内容は特徴的な傾向が認められる。それらの一覧を[表2-2]に示したように、「図案」「図解」「図集」そして「写真」集といった図版主体の建築書が並んでおり、建築図集の開花期となったことが認められる。

逆に文章主体の読み物は、34点のうち2点（[表2-2]中の番号《19》《23》。以下《》は同じ）だけである。つまり、第2期にみられた仕様便覧という文字情報と図面集という視覚情報の併存が、第3期において視覚情報に特化されたことが認められる。それは、繰り返し述べているように、建築書院の設立趣旨のひとつだった図版印刷の課題を解消した証左ともいえよう。ここでは、そうした図版掲載の企図に着目しながら、おもな刊行物の特徴をたどっていくことにする。

「建築書院創業二十周年記念出版」と位置づけられた『和洋住宅建築図集——附 家屋諸造作雛形』《2》[図2-23]は、伊東忠太らの校閲のもと同院編集局で編纂されている。「和洋の住宅大、中、小の正面図、側面図、平面図等及家屋諸造作の類七十五図を鮮明なる銅版

¹¹³ いずれも「印刷者 奥山鏡吉」「印刷所 清鏡堂」とされ、『各種 商店建築図案集』には「印刷所 積文舎」も併記されている。

彫刻にて印刷」されることで、「住宅を建築せんとする諸君の好参考と実用的の良書にて何人にも頼る便利なる」ものであり、「殊に概算建築費等をも附記せる最も重宝の図集」とうたわれた¹¹⁴。その背景には、1907年刊行の『和洋住宅間取実例図集』は「少なからぬ好評を博」したものの、「初学者並に建築に興味をもつてゐる素人（所謂普請道楽とも云ふべき）諸君」から間取図だけでは理解しにくいゆえ「正面図、側面図其外造作図面の大要等」を希望する「督促文、陸続として机上に堆かきを為すと云ふ始末」となったことから、図面を急遽追加して「出版に急なりし為め、銅版に誤刻多く」発生した「編者の遺憾」を述べつつ、「図案を寄寄せられ、且つ懇篤なる助言を辱ふせし諸先生の厚意」に感謝が表された¹¹⁵。つまり、図版を用いることによって、建築の施主となる「素人（所謂普請道楽）」が読者対象とされ、またそうした反響があることも示されている。

さらに、同じく自社編纂による『日本家屋写真叢書』《5～10》[図 2-24]は、「建築書院編集局撮影」によって6冊が同時に刊行された。それは「建築に興味を有する、初学者や素人諸君」には「専門的に縮尺製図するよりも、寧ろありのまゝの実物写真にする方こそ、却て了解を早むる唯一の方便」になると吉原は発想したことがつづられている¹¹⁶。「初学者や素人諸君」により適した印刷物として、図面から写真へと情報媒体の展開が試みられたことが示されている。

こうした図版中心のヴィジュアルな刊行物による対象読者層の広がりや、第3期に11点を刊行した杉本文太郎の著作にも表れている。杉本は第4期にも6点を刊行しており、この第3期より建築書院の主要著者のひとりに加わったといえる。その著作のテーマは、「室内装飾・座敷飾り」《3、13、14、15、16、23》[図 2-25]と「庭造」《4、15、18、21、33》[図 2-26]で大きく二分され、『西洋庭造法図解』《15》を除いてはすべて日本の伝統的文化を扱っている。また、画家の名を特記した挿図が目立つのは《4、14、15、16、17》、図解の質を上げるだけでなく、建築書院における建築技術者の著者とは異なり、杉本が図面を描けなかったものとみられる。

杉本の人物像については、その著作が後年に復刊された際の解題などでも触れられているが¹¹⁷、生活史研究家である小泉和子の論考にまとめられている¹¹⁸。小泉によれば、杉本は

¹¹⁴ 『日本住宅室内装飾法』巻末社告、頁数記載なし（杉本文太郎著、1910年7月）

¹¹⁵ 吉原米次郎「本書の発刊に就て」（『和洋住宅建築図集——附 家屋諸造作雛形』巻頭社告、頁数記載なし、1910年7月）

¹¹⁶ 吉原米次郎「本書の発刊に就て」（『日本家屋写真叢書』巻頭社告、頁数記載なし、全6巻に掲載、1911年4月）

¹¹⁷ 杉本文太郎『増補改訂香道』（矢野環校閲、雄山閣出版、1984年）、森仁史「生き延びた近世」（杉本文太郎『叢書・

「地誌・郷土誌、教本、教養、庭園、室内装飾、茶室」と著作が多いわりには経歴に不明点が多いものの、造庭や茶室の普請については経験豊富な「本格的な造庭家」だった。そして小泉の専門である室内意匠に関する杉本の著作については「和風住宅の室内装飾のための歴史的、文化史的知識を盛り込んだ懇切丁寧な啓蒙書であると同時に、実用的^{ママ}はハウツー本」だったと評し、その背景として杉本の著作にさかのぼる「明治二十年代から三十年代にかけて上流階級の間では高級な和風住宅を建てるブームがさかん」となり、それが20世紀初頭の明治「三十年代後半から四十年代にかけて、中流階級にまで広がった結果、「中流階級の間には和風住宅の装飾への関心が高まったため」としている。この時期に「資本主義が軌道に乗り、ブルジョワジーが生まれ、新たな社会階層が形成」され、「日清戦勝によるナショナリズムの台頭による和風熱の亢進」があったことを小泉は指摘している。さらに杉本の著作に「貴顕紳士からの題辞や序文」が多く、大臣や華族、博物館長などの学者の名が列挙されていることにも触れている。これは、中流階級の読者にとっての参照の対象を掲げることによる刊行物の権威づけと販売促進の手段ともみられる。その到達点が「賜天覧台覧」されたという刊行物となろう。たとえば『日本庭造法図解』《4》[図 2-26]はその第3版(1911年1月)に同書4冊が「天皇 皇后両陛下 皇太子同妃両殿下へ献納願出ニ付伝献取計候此段及通牒候也」と「宮内大臣子爵渡邊千秋」の署名で記された。同様に「賜天覧台覧」の榮に浴したものとして、『茶室と茶庭圖解』《11》、『図解日本座敷の飾り方』《14》[図 2-27]、『新撰日本庭造図面百種及其説明』《18》も社告で示されている¹¹⁹。

なお、『築山庭造伝』《25~30》は前・後編がそれぞれ上中下巻で計6冊が同時に刊行されているが、その成立年代については前編が1735(享保20)年、後編は1828(文政11)年とされる¹²⁰。これらの江戸時代の作庭書が建築書院で扱われているのも、杉本文太郎の著作との関係性、あるいは杉本による何らかの示唆が推定できよう。

そして、伊藤虎三もやはり個性的な著者として特記できる。「有名なる近世の巨匠故帝室技芸員名古屋伊藤平左衛門翁の三男にて、近来稀に見る日本建築界の天才」¹²¹とのちに建築書院の社告で紹介されたように、その編著による建築図集には以下のような刊行趣旨が掲

近代日本のデザイン 第8巻 日本住宅室内装飾法 森仁史監修、pp.293-298、ゆまに書房、2007年)

¹¹⁸ 小泉和子「杉本文太郎のこと」『家具道具室内史』第8号、pp.99-121、2016年)

¹¹⁹ たとえば『日本住宅室内飾り道具図解』(1912年4月)や『日本住宅建築図案百種』(1913年9月)の巻末社告で確認できる。

¹²⁰ 飛田範夫「造園古書の系譜」(昭和59年度日本造園学会研究発表論文集2、『造園雑誌』47巻5号、pp.49-54、1984年5月)

¹²¹ 『新撰 欄間図案百種』、巻末社告、伊藤虎三著、1926年2月

げられた。

『凍れる音楽』とは美術的建築に対する摘評^{マツ}ですが、江戸時代以後従来巷間に行はれつゝある日本建築は、遺憾ながら美的要素に乏しく慊らぬ点が多いのであります、此欠点を改良して、建築上の美的観念乃至趣味の向上を計ると云ふ事は、吾人建築家の常に考慮しなければ成ぬ問題であります。

此問題の解決上、建築物の細部に施す意匠図案を美術的^{マツ}のものに改めて行くと云ふのが、私の主張であり又希望であります、本図集は此希望の一部を具現化したものであります、万人の趣味は同一でない限り、素より之れを以て総てを律する訳には行きますまいが、併し今後美術的意匠^{マツ}のものを造る前提として、本書が購求者に何者かの、ヒントを与へる事が出来たならば、私の本懐は之れに過ぎぬのであります。

大正九年七月 著者識

(伊藤虎三「序」、『日本建築欄間図集』1920年9月および『日本建築建具図集』1920年10月、ともに頁数記載なし、ともに曾禰達蔵題辞、笠原敏郎序) [図 2-28]

日本の伝統的な建築について、「細部に施す意匠図案を美術的^{マツ}のものに改めて行く」ことを「私の主張であり又希望」と明言されている。建築の意匠に対する著者の主張が前面に打ち出された建築図集は、従来の建築書院にはみられなかった特徴として指摘できる。発行人が吉原松に変わった直後の刊行であったが、「日本建築界の天才」による2冊組みの大判図集という積極的な出版の姿勢が認められ、後継の発行人は建築の専門外だったことから判断して、本書は吉原米次郎の最晩年の出版企画だったと考えられる。吉原の注力した建築図集に、著者の個性が表れはじめていたことを示してもいる。

そして『かし家と小住宅建築図案五十種』《32》[図 2-29]の刊行趣旨は、「『貸家』又は『小住宅』を建てようとする人々の参考に供す為め、成るべく手軽に建てる事の出来る日本式貸家及び小住宅等、併せて五十種の建築図案を集めたもので、謂はゞ家主の『相談相手』である」ことがうたわれた。そこでは、和洋の建築意匠はおろか、「日本家屋」の造作などの図示もみられなくなり、平面図と立面図だけがおもな仕様と建築費の概算とともに掲示されている。その読者対象は「家主借主」、つまり売家・貸家の不動産経営者に絞られていた。この特徴によって、紹介される住宅建築が簡素な仕様なのに対し、書籍の体裁は大判の豪華本という一見アンバランスな刊行物の性格が理解できる。中小の住宅をたんに持ち家として

建てようとする施主個人には不釣り合いといえる造本の豪華さは、中産階級以上の不動産所有者や経営者に向けられていたのである。

つまり第3期の建築書は、図版主体で構成されていくことで、読者対象が初学者から建築の施主などの素人にも広げられ、さらには貸家の家主という不動産経営者にも向けられるようになったことが明らかとなった。一部ではその表現手段が図面から写真へと展開されていたのである。とくに日本の伝統的な建築文化を扱った図集は、ときに皇室に献納されたように豪華な体裁が多く、造家学科出身の吉原米次郎が創業から取り組んできた図版印刷の成果を示す建築書の拡充期となったといえる。

2-3-4 第4期：建築図集の継承期 1922～1931年¹²²

第4期の建築書は、合計29点と年間平均2.9点となる。吉原米次郎亡きあとの建築書院の出版活動は、前述のようにその親友であり、複数の書肆を経営した出版人・今津源右衛門（隆治）に引き継がれたものの、1923年の関東大震災によって在庫書籍などの資材が灰燼に帰したとされる。こうした震災の影響については、第4期の建築書における著者の記述からも確認できる。

曩に刊行しました拙著欄間図并建具図集は先年の大震火災に不幸原版一切を烏有に帰し絶版となりました為め之れが再著を建築書院より依頼されましたので新たに稿を起こしたのであります今や上梓に際し一言を附して序と致します

大正十四年秋 伊藤虎三誌

（『新撰 欄間図案百種』、序、頁数記載なし、1925年12月）〔図2-31〕

原版が失われた伊藤の「拙著欄間図并建具図集」とは、前項で紹介した『日本建築欄間図集』（1920年9月）と『日本建築建具図集』（同年10月、ともに曾禰達蔵題辞、笠原敏郎序）のことと考えて間違いない。震災後も2冊組みとなる『新撰 欄間図案百種』と『新撰 建具図案百種』（1926年2月）へと生まれ変わった。『新撰 欄間図案百種』の巻末社告では、その全容は不明だがやはり伊藤の著書である『数寄屋建築図案』（5集まで確認、1925年11月～1926年ごろ）が紹介されている。伊藤は第3期の2点につづき、第4期に7点の著書

¹²² 建築書院における工学書全体を対象とした時代区分による第4期は、「1922～1931/1941年」と前節で表記した。1941年の刊行物は、現時点では機械分野のみが認められる。本節は建築書のみを対象とするため、第4期を「1922～1931年」と表記する。

を刊行しており、建築書院における建築書の主力著者のひとりとなったともいえる。

同様に、杉本文太郎によって「室内装飾・座敷飾り」と「庭造」に関する著書が第3期に11点、第4期にも6点が刊行されたことは前述のとおりだが、それらはみな図集や図解書である。第4期の建築書全体においても図集が目立つのは先期につづく傾向といえるとともに、著者の人脈も先期から継承されており、その新版も刊行されていた。つまり建築書においても、亡き吉原の編集方針が基盤とされていたことが認められる。

第4期の建築書29点のうち、図集や図解書は24点とじつに8割を超える。その一覧を[表2-3]として示す。たとえば『日本建築雑作図案 上巻 床棚の部』([表2-3]中の番号《18》。以下《》は同じ)も、やはり震災後の新版であった。同じ金子清吉著と伊東忠太校閲による『日本住宅雑作図案五百種』(1917年8月)[図2-30]は「非常に江湖の歓迎する処となつて高価なる書籍であつたにも拘わらず版を重ねること六回、発行部数も数千の多きに達したが、不幸彼の大震の厄に遭遇し現品は勿論原版まで烏有に帰し」たが、「彼の大冊が全巻悉く精密なる図版であるから、復旧とても容易な業でない為絶版」となっていたものの「社会の要求が益々熾烈である為に遂に本書出版の企画を定め」て「新図を多数増補」し「全然面目を一新」して刊行された¹²³。

また、『六坪より七十坪まで 新しき日本住宅の間取と外形図集』《4》と『八坪より七十坪まで 住み心地よき日本住宅の間取と外形図集』《28》は、建築書院の編纂とされている。このほかに自社編纂の建築書は第4期においてみられず、また同期の工学書全体においても自社編纂として認められるのは先期に吉原が企画した『電気工学初等叢書』の続刊2点¹²⁴だけであるため、自社編纂による2点の建築図集はめずらしい存在といえる。そうした1924年刊行の『六坪より七十坪まで 新しき日本住宅の間取と外形図集』(以下「1924年版」)[図2-32]と1931年刊行の『八坪より七十坪まで 住み心地よき日本住宅の間取と外形図集』(以下「1931年版」)[図2-33]は、表題が類似しているだけでなく、ページ構成も同様に編纂されている。たとえば両書の目次の冒頭は「第一図 木造瓦葺平屋建 建坪六坪」(1924年版)と「第一図 木造瓦葺平屋建 一戸建て 建坪八坪七号五勺」(1931年版)とされたように、ページを送るごとに坪数が「七十坪まで」増していき、2階建ても混じるようになり、規模が大きくなっていく。各事例は表題のとおり「間取と外形図」が示され、建築費の概

¹²³ 金子清吉「緒言」(『日本建築雑作図案 上巻 床棚の部』、頁数記載なし、1926年4月)。なお、同文では「先づ上巻として「床棚の部」を上梓し、下巻として「書院や花狭間や絵様等を引続き発刊すべく目下鋭意執筆中」とあるが、現時点で続刊は確認できていない。

¹²⁴ 前掲84に同じ。

算が付されているのも同様である。

「1924年版」については、曾禰達蔵が寄せた「序」のなかで「本書著述の主任者鈴木孫三郎君は設計に独特の技能を有する青年建築家」と紹介されている¹²⁵。つづく建築書院編集局による「序言」では「木造耐震家屋構造法の著者たる鈴木孫三郎氏が東京市郡湘南房総等に建築せられた家屋の設計図」が収録され、「本書の製図方面に就て今倉卯兵衛氏の熱心なる努力」をえたことが紹介された¹²⁶。今倉卯兵衛という人物に関する情報は確認できていないが、鈴木孫三郎とは名古屋高等工業学校建築科の第1回生（1908年卒）で、東京市土木課営繕掛技手などを務め、明治神宮宝物殿設計競技（1915年）では二等二席に選出されたことで知られている¹²⁷。鈴木は設計の巧手だだけでなく、著述も得意としたようで、建築書院では第4期に前述の『木造耐震家屋構造法——附 準防火設備』（1924年3月）のほか、『工業用対数付 簡易度量衡換算表』（同年4月）、『鈴木式計算図表 度量衡換算図表』（同年5月）、『誰にもわかる市街地建築物法図解』（同年7月）と幅広いテーマの著書が刊行されている。しかも「1924年版」は同年2月の刊行であるから、鈴木による5冊の著作は月刊ペースであったことが認められる。これらから「1924年版」には、設計も著述も得意な建築技師・鈴木孫三郎が深く関与していたことが認められ、「今倉卯兵衛氏」などの社外の協力者があってこそ建築書院編集局の編纂名義による図集が成り立っていたものと考えられる。

以上、第4期における建築書の特徴をふまえると、先期まで自社編纂の刊行物が活発に展開された建築書院編集局の機能は実質的に失われており、吉原によって築かれた刊行方針によって支えられていたものと考えられる。つまり、図版主体の建築書へとより特化され、著者筋が継承されることによって、複数回の経営譲渡や震災による資材壊滅、といった時代の荒波に揺さぶられながらも、創業者の逝去も10年あまりにわたって出版活動が継続されたといえる。

2-3-5 建築書院にみる工学書と建築書の同異

工学書全般の刊行を設立趣旨に掲げて創業された建築書院は、第1期こそ土木書の刊行点数の割合が多くを占めたものの、第2期になると建築、土木、機械、電気、造船といっ

¹²⁵ 頁数記載なし。

¹²⁶ 頁数記載なし。

¹²⁷ 藤岡洋保「明治神宮の建築（下）」（『明治聖徳記念学会紀要』第33号、p.28、2001年8月）。明治神宮宝物殿設計競技の一等は大森喜一、二等一席小林福太郎、三等は一席が後藤慶二、二席遠藤新、三席松井貴太郎とつづく。

た工学書全般に展開されながら、出版社としての商品のラインナップが拡充されていった。そして、第3期からは建築書が過半数を占めるようになり、それにつぐ刊行点数の電気関連の書籍とともに出版活動の主体が形成されていった。その方針は、創業者の吉原米次郎亡きあとにも引き継がれ、第4期においても同様に、図集を主とした建築書と初学者向けを主とした電気分野の書籍を中心に刊行物が積み重ねられていった。

全期をつうじた刊行点数を刊行分野で見ると、建築書は過半数を超える程度にとどまっているが、創業以来の図版印刷への取り組みの深化と大判の建築図集の増加、そして吉原の刊行趣旨の展開をふまえれば、吉原の出版活動は工学分野全体に発展しながらも、その主体は社名のとおりに建築書にあったことが認められる。第3期以降に顕著にみられる豪華な体裁の建築図集には、図版掲載の課題克服に対する挑戦の成果が集約されているともいえる。

それらの建築図集は、図版によって初学者や技術者に新しい建築を啓蒙するにとどまらず、建築の施主や趣味人にも対象読者層が広げられていった。そこで扱われるテーマも、建築技術者への設計資料としての建築図面集から、日本の建築や庭園などの伝統的な文化を示すものへと注力されていった。なかには華族などの題辞が巻頭に列挙され、皇室に献納される刊行物も現れるようになった。それは、工学と技術の普及を旨とした入門書や実務書が主体とされた建築以外の工学書にはみられない性質であることが指摘できる。

吉原は工手学校造家学科での修学体験と工学書の少なさに発奮した経験に端を発し、工学分野全体にわたって入門書を刊行していった。それは、電気工学の分野において初学者向けの叢書が継続的に刊行されたことに顕著に示されている。一方で、建築書については、出版活動の展開とともに、初学者や学生には購入が難しいであろう豪華な体裁の建築図集に力が注がれるようになり、皇室や華族まで視野に入れた上流・中流階層の施主向けの建築図集が刊行されていった。

日清・日露戦争以降のナショナリズムやブルジョワジーの台頭とともに、工学書は国力増強にむけて新しい技術の習得と普及に圧倒的な比重が置かれるなかで、建築書も同様に設計や仕様の便覧などが刊行されていったが、建築をめぐる伝統的な文化を視覚的に示す刊行物として建築図集が拡充されていったことを示している。つまり、建築書院における建築書は、伝統や意匠というテーマ、建築の施主という読者層、そして視覚性が重視された図集という刊行形式に表れているように、工学書にあって特異な建築書固有の性質が示されているもえのと考えられる。

小結 建築書院と吉原米次郎の事績

1 建築出版組織としての特徴

建築書院の出版活動について、院主・吉原米次郎の経歴や刊行物の特徴を検討しながら考察した結果、以下のことが明らかになった。

同院は、わが国の明治・大正・昭和戦前期における建築系の出版社としては、最も早い1893年ごろに活動を開始し、最も長い期間にわたって活動したもののひとつといえることを示した。その創業者で院主の吉原米次郎は、わが国において近代建築教育を修めた最初の出版・編集人であり、工手学校の教員たちから講義録の刊行を委託されることによってその出版活動の幕が上げられた。建築書院の設立にあたっては、吉原の学生時代の知見をもとに、費用のかさむ図版制作が課題とされながら、工学書の発展が目的として掲げられていた。

実際に同院の刊行物は、建築書にかぎらず工学全体に展開されており、その刊行分野を6つに大別して出版活動の全体像を整理することで、4期に区分できることを示した。すなわち第1期は、吉原の就学経験にもとづいて建築・土木分野を主体とした教本づくりから開始された創業期であり、とくに土木分野では攻玉社の卒業生を軸に土木技術者の執筆陣が形成されていた。第2期は、日露戦争後の国力増強の機運にのって海事や動力機関、資源などの分野の技術書への需要に応えるかたちで工学全体へと広げられた展開期であり、同院の編集部による口述筆記や図面収集など自社編纂を軸として入門書・実務書が充実化されていった。第3期は、新刊の点数が建築書に集中された建築書の拡充期であり、単行本と叢書による初学者向けの既刊書を中心に工学分野における参照源が積層されていった。第4期は、亡き吉原によって築かれた著者筋と編集方針にもとづきながら出版活動が継続された建築・電気書への収束期であり、社告における刊行リストには工学全体を総合的に俯瞰する姿勢はみられなくなった。それは、工学書における出版人の存在とその意志の重要性を示している。全期をつうじては、建築書は刊行点数の約半数を占めるだけでなく、ほかの刊行分野にはみられない豪華本が増えていくなど、その出版活動の主眼は建築書におかれていたことが示されている。

そうした建築書院の建築書に絞って検証しても、工学書全体と同様に4期に整理できることを示した。すなわち、第1期の建築書は、文章主体の教本や実務書が、私家版などの既刊の良書を積極的に取り込みながら拡充されるとともに、建築図集刊行への取り組みが

自社編集によってはじめられていた。第2期の建築書は、建築仕様書という文字情報と建築図面による視覚情報が併存されながらも、住宅の間取りや商店のファサードをテーマにした建築図集の図版印刷が銅版彫刻によって探究されていった。第3期の建築書は、図版主体の傾向がより強められることで読者対象が建築の施主となる中産階級に主眼がおかれるようになり、一部ではその視覚媒体が図面から写真へと展開され、日本の伝統的な建築意匠を扱った豪華な体裁の図集が多く表れていった。第4期の建築書は、建築図集への特化がより進められ、関東大震災で灰燼に帰した建築図集の新版刊行が主軸となるなど、ほかの分野の工学書と同様に亡き吉原の築いた著者筋と編集方針が基盤とされていた。

こうした出版活動の展開にみられる工学書全般と建築書の同異としては、ともに日清・日露戦争以降の国力増強にむけて新しい技術の習得と普及を目的とした初学者向けの教本や中堅技術者向けの実務書に力が注がれていったのは共通しており、建築書も仕様便覧などが刊行されていった。一方で、建築分野に独特の刊行物も認められ、建築の伝統的な意匠を視覚的に示す建築図集が拡充されていった。建築意匠が図版で一目瞭然と視認できる図集という刊行形式は、建築の専門知識をもたない施主も読者層に取り込むこととなり、工学書にあって特異な建築書固有の性質が示されているといえる。

2 建築出版活動としての史的意義

このように際立った性質を有する建築図集は、建築書院においては建築写真への着眼がわが国の建築界のなかでも早期にみられるように、図版による視覚化に対して一貫した注力が認められるとともに、そのテーマは「日本家屋」へと収斂されていった。そこでは、中産階級の住まいにおける装飾や意匠から、彼らの経営する売家・貸家まで、幅広い社会階層に対して伝統的な住まいの規範が啓蒙されていった。そして吉原の編集方針や刊行手法の特徴としては、日本の伝統的な住まいを図集のかたちで視覚化していくことによって、西洋化の進む近代日本社会の中産階級の施主層に対して、文化や趣味、あるいは芸術として「日本家屋」を伝えることにあり、その文化を継承することが目論まれていたといえる。

以上、建築書院の出版活動を考察することによって、わが国の戦前期において土木、建築、海事、動力といった工学書の刊行分野が時代の要請に応じながら展開され、それらに版を重ねるものが少なくなかったことから、新しい知識や技術の普及媒体としての技術書が裾野を広げながら蓄積されていく実像の一側面を明らかとすることができた。そのなかでも建築書には特異な性質が示されており、建築意匠を視覚的に示す建築図集が主眼に

おかれることで、理想的な建築を実現するための施主たる中産階級も読者層に取り込んでいったのである。

つまり、建築書院における建築書は、ときに皇室や華族をふくむ上流階級の住まいにおける作法や趣味を視覚化し、中流階級へと展開させることで、日本家屋という伝統的な建築のありかたが、趣味や芸術、あるいは不動産経営として近代社会に組み込まれていった過程を示していると考えられる。日本家屋のありかたが、新興の中産階級における趣味や文化として浮上されることで、社会通念として視覚的に再定着されていったことを示すともいえる。

それは、社寺や城郭などの為政者側からみた日本建築史、あるいはモダニズム建築の導入史とは異なる側面において展開された、日本家屋の近代化の実質を見いだすことができる。近世の雛形書からつづく伝統的な建築を主題とした刊行物が、読者対象として中産階級の施主が含まれ、また媒体として写真が現れ、そして建築の近代教育を修めた出版人によって編まれたという観点において、建築書院の建築図集はわが国における近代建築書の生成を示してもいる。

第3章 洪洋社と建築出版活動の展開

序 既往研究にみる洪洋社への言及と本章の構成¹

前章で分析対象とした建築書院については、従来はほとんど注目されてこなかったが、工学書を広く刊行し、そのなかで最も力を注いだ刊行分野は建築書、とりわけ建築図集だったといえることを明らかとした。本章で取り上げる洪洋社については、「戦前期における建築専門の代表的な出版社」²とも評されており、これまでに菊池重郎や藤岡洋保らによって同社の個々の建築図集についての特徴が検証されてきた³。とくに菊池は、「わが国近代の建築プレート図集の歩みを辿るとき、避けて通れないものに洪洋社の『建築写真類聚』がある。人によって評 値 の軽重はあるにしても、何人にも異存はなさそうである」⁴としながら、創業期の刊行物を丹念に追跡しているが、対象とした時期や刊行物が一部にかぎられており、同社の建築出版活動の全体像については明らかにされていない。

序章でも述べたように、建築の視覚情報の果たす役割が近代になって拡大したとされるなかで、写真印刷技術の発達により建築のイメージを視覚的に普及させた図集という媒体形式に着目する意義は小さくない。しかし、従来の日本近代建築史研究において建築図集に焦点を当てた論考は、前述の菊池や藤岡らによる一部の研究にかぎられている⁵。それは、写真主体の建築図集には、文章量が少なく、明確な編集方針を読み取りにくいことにも要因のひとつがあるように考えられる。また、建築図集を刊行した特定の出版組織について活動全体を明らかにした論考は確認できない。

¹ 本章は、以下の 2 編の拙稿をもとに、その後の知見をくわえて加筆・訂正しながら再構成したものである。

「洪洋社の建築出版活動の概要とその特質について」(大川三雄、矢代眞己、田所辰之助と共著、日本建築学会計画系論文集、721 号、pp.751-758、2016 年 3 月)、「叢書形式の建築図集にみる洪洋社の刊行手法とその特徴について」(大川、矢代、田所と共著、査読中：日本建築学会計画系論文集)

² 藤岡洋保「はしがき」(『写真集 失われた帝都 東京』、p.3、藤森照信、初田亨と共編著、柏書房、1990 年)

³ 菊池重郎が『明治村通信』誌で発表した一連の研究として、洪洋社に関しては「欧米新建築のプレート図集「モダン・アーキテクチュア」について」(1981 年 2 月号)、「月刊図集「近世建築」(1)(2)」(1981 年 4、5 月号)、『セセッション図案集』特に「外観之部」の初刊年代について(上)(下)」(1981 年 9、10 月号)、「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動(上)(下)」(1982 年 1、2 月号)、「洪洋社の「建築写真類聚」(1)～(5)」(1983 年 7、10、11 月号、1984 年 2、5 月号)があり、ほかの出版組織に関しては「木葉会の明治期に刊行した建築プレート図集考(上・中・下)」(1982 年 10 月号、1983 年 1、3 月号)が挙げられる。藤岡洋保については、前掲 2 による。

⁴ 菊池、前掲 3「洪洋社の「建築写真類聚」(1)」、p.4

⁵ 藤岡洋保は住宅図集についても論考を発表している(藤岡洋保、石井高弘「明治末期から昭和戦前における『住宅図集』について——出版の背景と和洋に対する態度」日本建築学会学術講演梗概集 F、1990 年)。

そして、洪洋社の刊行物については、建築図集だけでなく、近代建築運動を報じた雑誌の存在も知られている。『建築新潮』誌と『建築工芸アイシーオール』誌は、戦前期の建築誌を並べた各種の年表⁶において、つねに主要雑誌のひとつとして掲載されてきた。『建築新潮』誌は「若手の建築運動を他のどの雑誌にもまして数多く取り上げている」⁷とされるのは第1章でふれたとおりであり、『建築工芸アイシーオール』誌は川喜田煉七郎が「バウハウスの構成主義教育を紹介」⁸したと評され、近年その復刻版が川喜田の事績を長年研究してきた梅宮弘光の監修によって刊行中であることは序章で述べたとおりである⁹。

このように洪洋社の建築書は、図集から雑誌まで多様に富んでいるが、ゆえに明確な編集方針のない雑多な刊行物ともみられてきたともいえよう。しかし第1章でみたように、雑誌だけでない多様な刊行形式が近代日本の建築出版活動全体で確認できる。長期にわたってさまざまな刊行形式の建築書を刊行した洪洋社について考察する意義は決して小さくないと考えられる。

そこで本章では、研究目的を二段階で設定した。ひとつは、洪洋社の全体像として、その建築出版活動の概要を明らかにすることであり（第1節、第2節）、ふたつめは、同社における建築図集の刊行手法を検証することである（第3節～第5節）。

第1節では、洪洋社の組織と刊行物の概略について述べ、刊行形式と編著者の傾向を指摘したうえで、その特徴にもとづいて活動期間を3期に区分する。第2節では、各期の刊行物の性格とその変遷について検証し、全期間をとおして刊行形式とテーマの関係性について分析したうえで、同社の刊行物における最大の特徴は叢書形式の建築図集にみられることを指摘する。

第3節以降は、叢書形式の建築図集における刊行手法を明らかにすることで、同社の事績を評価する。建築図集ならではとなる図版の制作方法に着目しながら刊行趣旨

⁶ 神代雄一郎「日本における近代建築思潮の形成」（『建築学大系 6 近代建築史』、p.318、彰国社、1958年）、日本科学史学会編（責任編集：村松貞次郎）『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』（p.483、第一法規出版、1964年）、座談会「建築ジャーナリズムの動きをたどる——関係誌20年の歩み」（『建築雑誌』1956年4月号、p.59）

⁷ 石田潤一郎『『新住宅』『建築新潮』』（『日本近代 建築・土木・都市・住宅 雑誌目次総覧』、第2期第1巻、p.141、菊岡俱也、藤井肇男編、柏書房、1991年）

⁸ 神代、前掲6「日本における近代建築思潮の形成」、pp.312-313

⁹ 『復刻版 建築工芸アイシーオール』（監修・梅宮弘光、国書刊行会）は、1931～1936年の全58号のうち、1933年以前の号が2015年に復刻刊行され、1934年以降の号は2017年以降の復刻刊行予定とされる。

を分析し、その刊行手法を考察することで、洪洋社の建築図集の特質を解明していく。叢書形式の建築図集を分析対象としたのは、同社において最も点数が多い刊行形式であるだけでなく、シリーズごとに複数巻で構成されるため、一定の刊行手法を見いださうと考えられるからである。

第3節においては、洪洋社の刊行形式と編集体制との関係性について検討し、図版の制作方法との関わりを指摘する。第4節では、図版の制作方法の観点から刊行手法の変遷について分析する。第5節では、叢書総体としての刊行の企図について検証したうえで、同社の刊行手法の特徴を評価する。そして、洪洋社の建築出版活動について、日本近代建築史上における意義を考察する。

研究にあたっては、1,000点以上とみられる同社の刊行物の全体像を把握するために、先行研究の調査結果なども参照することで、今日では原本が不明になっていると思われる刊行物の存在についても推定した¹⁰。また、菊岡俱也や藤森照信らによる建築書のデータベースなども活用した¹¹。とくに第3節以降の研究対象となる叢書形式の建築図集については、筆者が実在を確認した618点を分析対象としたうえで、各叢書の全体像としては既往研究に依拠しながら別途23巻の巻数を刊行点数の集計に含めている。これらの研究対象としての資料特性については、第3節第1項で述べる。

くわえて、洪洋社を創業した社主・高梨由太郎の遺族に対して聞き取り調査を行い、高梨自筆による手紙なども実見している¹²。

なお、各叢書の数えかたについては、[表3-2]の「刊行点数」の項に示したように、「集」「号」「編」「巻」と叢書によって異なるが、本章においては各叢書の刊行点数を示す場合は便宜上「巻」で統一した。たとえば『建築写真類聚』では「第1期第1集」と表記されたが、刊行点数を記す際には「各巻」「年に3巻刊行」などと表記している。

¹⁰ 前掲3の各研究による。

¹¹ 菊岡俱也、藤井肇男編『日本近代建築・土木・都市・住宅雑誌目次総覧』（柏書房、1990、1991年、とくに同書の第2期第1巻には洪洋社刊の『建築新潮』を所収）や、藤森照信（代表研究者）『日本近代建築書の研究』（昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年）などを参照した。

¹² 社主・高梨由太郎から次男・信重宛ての1934年ごろの私信が14通存在する。

第1節 洪洋社の活動概要と編著者の特徴

3-1-1 組織の概要

洪洋社の建築出版活動のはじまりは、菊池重郎の研究によれば雑誌『建築写真時報』の1912年7月号の創刊とされる¹³。これは、同誌が同年7月7日の『時事新報』文芸欄に「創刊雑誌」として掲出されていることから確認できる。最後の刊行物は1949年6月発行の『平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集』とみられ、ほかにも第二次世界戦後に数点が再刊されたが¹⁴、主だった出版活動は戦時下に終えたものと考えられる。戦前期の最後の刊行物としては1944年1月発行の『近代家具装飾資料』の47集「新作洋家具展集」を確認できる。

これらの表紙の多くには「東京牛込 洪洋社」と明記されている。奥付の住所は「東京市牛込区市谷台町10番地」と記され、この「台町」の名は現在も東京都新宿区に残されている¹⁵。発行人は、創業者で社主の高梨由太郎（1882～1938年）であり、その逝去にともない長男の高梨勝重へと引き継がれた。

洪洋社が創業された1912年のころは、第1章で述べたように、1907年に建築世界社による『建築世界』誌が創刊され、1911年に建築画報社の『建築画報』誌と建築ト装飾社の『建築ト装飾』（のち南北社）が相次いで創刊されている。その約20年前には、建築書院が設立されていた。戦前期において長期にわたって刊行をつづけた市販建築書の出版組織の活動期間については、第2章で示した比較を再掲する。

社名	活動期間	創業者	創業者の発行人在任期間
建築書院	1893～1931/41年（約39年間）	吉原米次郎	1893～1918年ごろ（約25年間）
建築世界社	1907～1943年（約36年間）	光岡義一	1907～1923年（約16年間） ¹⁶
洪洋社	1912～1944年（約32年間）	高梨由太郎	1912～1937年ごろ（約25年間）

¹³ 菊池は自ら所蔵するバックナンバーから逆算し、創刊号の発行日を1912年6月25日と推定している（前掲3、菊池「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（上）」）。

¹⁴ 1948年の再刊に『建築計算寸法便覧』（須藤真金、岸原三郎、初版1939年）や『趣味の建具図案集』（阿部正雄、同1940年）が確認できる。遺族によると、1948年に建築設計施工会社「株式会社洪洋社」へと転業したとされる。

¹⁵ 創業時の住所は「四谷区坂町44番地」、1913年後半に「牛込区市谷谷町93番地（1922年の住所変更で「市谷台町」同番地）、関東震災後に「市谷台町10番地」となった。戦後は「市谷台町12番地」となっている。

¹⁶ 建築世界社の活動期間と『建築世界』誌の刊行期間については、第2章の注36を参照されたい。

洪洋社の建築出版活動は、わが国における市販建築誌の黎明期にはじまり、建築書院と建築世界社の動向をふまえると、社主・高梨由太郎は戦前期において活動期間が最も長い建築系出版社の発行人のひとりだったといえる。

3-1-2 刊行物の概要と編著者の特徴

洪洋社の刊行物は現時点で 1,032 点まで確認できる [表 3-1]。刊行形式ごとにみると、単行本 133 点、雑誌が 4 タイトルで計 212 点 (号)、シリーズ形式の叢書が 24 タイトルで計 687 点 (巻) となり、叢書が全体の約 3 分の 2 を占める。前述した最長期の市販建築書の出版組織では、建築書院が工学書全体で 270 点のうち、建築書は 80 点で、その内訳は単行本 74 点、叢書が 2 タイトルで計 6 点 (巻) であった。建築世界社は『建築世界』誌 433 号のほかは、単行本と叢書の建築図書としては現時点で 18 点が確認できるのみである ([表 1-13])。ゆえに洪洋社の刊行物は、戦前期における市販建築書の刊行としては最大級の点数と考えられ、多様な刊行形式と多品種の叢書によって独自の位置を占めていたとみられる。

つぎに、編著者に着目すると、社主の個人名や「洪洋社編集部」の名義で奥付に記された社内編集は 774 点が確認でき、全体の 7 割以上に達する。後述するように、高梨由太郎は建築の専門的な就学がなかったとされ、印刷会社勤務などを経て『建築画報』誌の編集・発行人を一時務めたのち¹⁷、洪洋社を創業した。5 年先行して建築世界社を起こした光岡義一も建築は素人だったが、日露戦争の報奨金を元手にした起業とされ¹⁸、それが的中して市販建築誌の創刊が続いたことから、洪洋社も高梨の印刷会社勤務の経験などを活かした起業だったと考えられる。

高梨の遺族によると 1920～1930 年代の同社の様子は、写真部員と経理事務員、住み込みの従業員が各 2 名従事していたが、社内に編集部員はおかず高梨がひとりで編集作業を行い、早稲田大学の教師陣によく相談していたという¹⁹。佐藤功一ら早大関係者の多くが洪洋社の編著者に名を連ねており、その協力を得られたことが、社内編集の刊行物が年間平均 20 点を上回れた一因と考えられる。

¹⁷ 菊岡俱也『『建築画報』(前掲 11、第 1 期第 4 巻、p.7、1991 年)による高梨の在任期間は、1911 年の 2 巻 9 号から翌年の 3 巻 1 号まで。

¹⁸ 河東義之「建築世界」、『都市住宅』1974 年 7 月号、pp.53-54

¹⁹ 高梨由太郎の次男・信重の夫人である高梨優子さん、長男・勝重の息女である大月綾乃さんの証言による。

以上から洪洋社の刊行物は、刊行形式の多様さと、大半が社内編集だったことが特徴として指摘できる。こうした観点をもとに、社内編集か、社外の建築家たちの編著かの相違と、叢書・雑誌・単行本という刊行形式の違いに着目し、同社の刊行物を整理したのが〔図 3-1〕上段のグラフである。

編著者と刊行形式による区分によって刊行物の動向をたどると、第一の変化は1920年に表れ、社内編集の雑誌が再登場して軌道に乗っていくほか、これと前後して社外著者の刊行物が登場している。第二の変化は1931年に表れ、雑誌が社外編集に切り替わり、全体でも社外著者の刊行物の点数が優勢になっていく。つまり、洪洋社の建築出版活動は全体を3期に区分できるといえる。次節では、この区分にそって洪洋社の建築出版活動の変遷を考察する。

第2節 建築出版活動の変遷

3-2-1 第1期：社主独力の創業期 1912～1919年

[図 3-1] 上段のグラフに表れているように、創業期は社主のほぼ独力で編集が行われた時期である。年間平均約 17 点、合計 139 点を刊行したが、社外の著者による刊行物は 6 点にかぎられていた。

当時の建築誌の印刷方法については、菊池重郎が指摘するように²⁰、網目状の写真版印刷が一般的だったのに対し、洪洋社では写真の階調をきめ細かく再現できるコロタイプ印刷が創業時から導入された。この特長を生かせる形式が、厚紙の片面に図版を印刷したいわゆる「プレート図集」であり、洪洋社の刊行物の特筆すべき性格となっていた。

創業当初の刊行物を丹念に蒐集・追跡した菊池によると²¹、最初の刊行物となった月刊誌『建築写真時報』[図 3-2] は、記事 8 頁と写真 12 枚からなり、雑誌とプレート図集を併せた形式だったが、頁数のわりに価格が他社の雑誌よりも割高だったためか 2 年間 16 号ほどで立ち消えたとされる。これとほぼ併行したのがプレート 10 枚のみの叢書『世界建築様式図解』(1912 年 10 月～1914 年ごろ) [図 3-3]²²であり、ルネッサンス様式を中心に 19 集ほど頒布されたという。さらに『セセッション図案集』(1913～1914 年ごろ) [図 3-4] はプレート 190 枚を 5 回に分割して頒布され、版を重ねたことから²³、当時の「セセッション式」のブームにも乗って一定の売上が立つ

²⁰ 菊池、前掲 3、「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（上）（下）」「洪洋社の「建築写真類聚」（1）」。
建築プレート図集については、市販ではない私家版の先例は少なくなく、その代表例といえる木葉会の刊行事業について菊池は「官選」と評し、洪洋社の民間事業と対比している（菊池、前掲 3、「木葉会の明治期に刊行した建築プレート図集考（上・中・下）」）。

²¹ 菊池、前掲 3「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（上）」、p.16

²² 筆者は叢書『世界建築様式図解』の存在を確認できていないが、菊池重郎が所有していた形跡が確認できる（前掲 3 菊池「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（上）」）。なお、筆者が確認した『セセッション図案集』（上・中・下巻、1913 年、大阪府立図書館蔵）の表紙それぞれには「■建築写真時報□世界建築様式図解発行所■洪洋社」（記号ママ）と銘打たれており、叢書『世界建築様式図解』が実際に刊行されていた形跡として認められる。

²³ 前掲 3 菊池「『セセッション図案集』特に「外観之部」の初刊年代について」によれば、1912 年ごろに各 30 枚・3 回頒布、翌年に「外観之部」として各 50 枚・2 回頒布、関東大震災後に合本版が再販された。筆者が確認した『セセッション図案集』は、大阪府立図書館の蔵書による「上巻」「中巻」「下巻」は、最初の 3 回頒布に相当すると考えられるが、奥付は確認できない。しかし、各巻の表紙には同館の受け入れ印が確認でき、それぞれの日付けは 1913（大正 2）年 5 月 12 日、同年 7 月 29 日、同年 8 月 4 日とされる。

ていったと推測される。こうして出版事業の重点が雑誌からプレート図集に移り、主力商品となる『建築写真類聚』へとつながったと考えられる。

1915年10月に刊行がはじまった『建築写真類聚』[図3-5]は、月刊形式のプレート図集であり、1943年10月ごろまでに266集に達したことが認められる²⁴。戦前期の建築書では、雑誌を除き最多の巻数といってよい。24集で1期を区切り、当初の各集のテーマは国内外の建築を「玄関」「暖炉」「窓及勾欄」といった部位別や、「銀行会社」「ドーム建築」「神社仏閣」といった建築類型などをもとに編まれた。

奥付の編者は「建築写真類聚刊行会」の代表として高梨の名が併記された。1集50枚のプレートには外観や室内、ディテールの写真をはじめ、パースや図面も印刷され、洋書の複写とみられる図版も少なくない。解説文は巻頭の扉頁か数頁にとどまる²⁵。それは「門とか、玄関とか、其他各種の意匠的、設備的構想を捉へて類別」²⁶した建築設計のための「手つとり早いカタログ」²⁷であった。

判型は、四六判(188×127mm)帙入りの体裁をとり²⁸、当時の雑誌に多い四六倍判の半分の大きさが採用された。つまり、価格を抑えながら印刷精度を保持しつつ頁数を確保し、図版数を増加できる。この方式が、高等教育機関の整備と中堅技術者層の拡大にともなって読者層が増大していった当時の機運に乗ったと考えられる。実際に5、6回に及ぶ重版も少なくなく²⁹、28年間ほぼ月刊形式でコンスタントに巻を重ねるまでに至った。

²⁴ 藤岡らの調査では264集まで確認し(前掲2、中村裕太は266集まで確認している(中村裕太「資料紹介 スタイルブックとしての『建築写真類聚』、『大正イマジユリィ』、no.7、pp.96-120、2012年)。筆者も266集まで実在を確認した。なお中村の記述は、前掲3 菊池による各論考および拙稿「建築専門出版社・洪洋社の出版活動について(その1)(その2)」(川嶋勝、大川三雄、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2、pp.93-96、1997年9月)にもとづいている。

²⁵ 前掲24 中村は、解説頁は3期(1921年1月)以降に付くとするが、前掲3 菊池「洪洋社の『建築写真類聚』(1)」では第1期第1集(1915年11月)に「凡例」として巻頭解説頁のつく初版の蔵書が示されている。

²⁶ たとえば『建築新潮』1927年2月号、裏表紙社告

²⁷ たとえば『建築新潮』1928年3月号、後付社告(頁なし、以下同)

²⁸ 第8期(1931年11月)からは判型は194×157mmとひとまわり大きくなり、製本はリング製本か平綴じへと変更された。

²⁹ 筆者らの実見例として、第4期第7集「文化住宅 巻一」が1927年2月に6版(初版1923年7月)、第3期第5集「改良和風便所」が1925年12月に5版(初版1921年5月)などを確認している。

1914年ごろには「海外新建築の紹介機関」³⁰となる新たな月刊図集『近世建築』〔図3-6〕が立ち上がった。同書の創刊経緯など不明点が多いが、約13年で95号ほどが刊行されたことから³¹、プレート図集の出版事業が順調であった様子がうかがえる。

つまり第1期は、印刷業のいわばベンチャービジネスとしての模索を経て『建築写真類聚』を定着させた、建築プレート図集の市販事業の確立期と位置づけられる。建築の様式や部位、類型などによるカタログ形式で編み、印刷精度と図版数を重視した図集に特化することで、拡大しつつあった中堅技術者層の需要に応じていった。

3-2-2 第2期：刊行形式の多様化と建築専門家との共同 1920～1930年

〔図3-1〕上段のグラフのように、社内編集の叢書が基底をなしながら月刊誌に再挑戦し、社外の建築家たちの編著も増えていく。刊行形式は多様化し、年間平均50点ほどを刊行する最盛期となった。

この期の幕を開けた1920年1月創刊の月刊誌『新住宅』〔図3-7〕は、住宅改良運動の一翼を担おうとする姿勢が示され、初期においては家政学的な記事が多い³²。奥付の編集者は高梨だが、編集顧問に生活改善同盟会の中心人物である佐藤功一と大熊喜邦を冠し、寄稿者は今和次郎や山本拙郎、蔵田（濱岡）周忠、森口多里らも名を連ねた。ここには、早大関係者を軸とした洪洋社の執筆陣が形成される様子を観察でき、先述した高梨の遺族の証言を裏づけている。

『新住宅』誌は関東大震災をもって休刊となり、翌1924年1月からは『建築新潮』（1931年8月まで）〔図3-8〕と改題され、帝都復興事業による建築への社会的な関心の高まりをうけて、住宅にかぎらず広く建築全般を対象とした³³。奥付では高梨の編集とあるが、今和次郎、木村幸一郎、田辺泰が「編集に特殊の関係を持」³⁴ったとされ、早大人脈の編集協力が認められる。

蔵田や森口らの海外情報通が欧米の動向を伝える一方で、盛期を迎えた新興建築運動を積極的に紹介し、なかでも分離派建築会に関しては第5回から第7回の展覧会を

³⁰ たとえば『建築新潮』1925年7月号、後付社告

³¹ 『近世建築』の初期については、菊池の論考（前掲3「欧米新建築のプレート図集「モダン・アーキテクチュア」について」「月刊図集「近世建築」」）に依拠しながら、京都大学所蔵の合本版から確認した。現存で確認できる最後は1928年1月刊行の95号「コルビュジエ氏近作集」である。

³² 菊岡俱也『『新住宅』『建築新潮』、前掲11書、第2期第1巻、p.141、1991年

³³ 前掲11菊岡『『新住宅』『建築新潮』、p.142

³⁴ 「休刊の言葉」、『建築新潮』、1931年8月号、p.23

総特集した³⁵。当初こうした試みは「ジャーナリズムとして最も新しい興味あるもの」としての「新しいムーブメントの記録」が「永久に残る事を編集者は喜」³⁶ぶ姿勢を示し、やがて「例年の通り全誌を挙げて分離派建築家諸氏の作品と論評とに委ね」³⁷ることが明言されるまでになった。

このころ『国際建築』誌が国内外のモダニズムの情勢を前面に打ち出し、日本の建築ジャーナリズムの開花・形成期と評されるが³⁸、建築誌の主題が生活改善からモダニズムへ移った転換を『建築新潮』誌は示している。ヨーロッパでは各運動体の機関誌がメディアの主体とされたが、わが国では複数の運動体が共演する市販の建築誌を主体とする傾向がみられるのは第1章第6節で述べたとおりであり、『建築新潮』誌はそのひとつだったともいえる。

雑誌の活発化とともに、叢書はこの期に12タイトルが立ち上がり、計300点余が刊行された。先述の『近世建築』はアール・デコやル・コルビュジエなどを各号にまとめた。『意匠美術写真類聚』（意匠美術写真類聚刊行会編、12集か、1922～1924年）は「ウキリアム・モリス図案集」「ピアズリ装画集」など、『図案資料叢書』（田辺編、12集か、1924～1928年ごろ）は「欧米ポスター図案集」「電灯装飾意匠集」など、『亜細亜美術叢書』（洪洋社編、3巻か、1930年ごろ）[図3-9]はアンコールワットやボロブドゥールなど、『美術工芸大観』（美術工芸大観刊行会、1922～1925年ごろ、48集か）[図3-10]は日本の古美術と、図集のテーマの多角化を観察できる。

そして「建築芸術の鑑賞及び建築の文化史的研究の入門書」³⁹をうたった『建築文化叢書』（11編か、1921～1927年ごろ）[図3-11]は、伊東忠太と佐藤功一の監修のもと、「エジプトの文化と建築」（森口、濱岡）から「近代建築思潮」（蔵田）までをそろえ、各巻が本文約100頁、コロタイプ印刷の図版約30枚からなる本格的な学芸書のシリーズとなった。月刊資料集成『建築資料叢書』（19編か、1926～1932年ごろ）は、「鉄筋混凝土構造」（伊部貞吉）や「住宅の平面計画」（佐藤）、「町屋と民家」（今）などが並び、このころ各社が活発に刊行した建築講義録にも引けを取らない陣容となっ

³⁵ 第5回、第6回、第7回展の『建築新潮』での総特集号は、順に1926年3月号、1927年3月号、1928年11月号となる。

³⁶ 『建築新潮』1926年3月号、p.16

³⁷ 『建築新潮』1928年11月号、p.15

³⁸ 宮内嘉久『少数派建築論』、pp.273-294、井上書院、1974年

³⁹ たとえば『建築新潮』1926年3月号、後付社告

ている⁴⁰。このように建築家や建築学者たちを叢書の著者に招くことで、従来の各巻の構成がやや場当たりのだったのに対し、ラインナップが学術的に整えられ、より系統的に刊行されたと考えられる。

雑誌でみられた分離派建築会との結びつきは単行本にも表れ、『紫烟荘図集』（堀口捨己、1927年）〔図 3-12〕と『住宅双鐘居』（同、1928年）といった住宅単体の作品集も確認できる。ほかに『現代の都市計画』（石原憲治、1925年）や『ル・コルビュジェ作品集』（高梨編、1929年）などが挙げられ、国内外の動向は単行本でも随時まとめられていったことを示している。

第2期は、刊行形式を適宜使い分けるようになったことに出版社としての進展が示され、情報の即時性や資料性が高まり、出版企画が多角化した興隆期と位置づけられる。その基底をなすプレート図集は、建築から芸術や装飾へとテーマを精力的に展開させていった。

3-2-3 第3期：社主の引退と建築専門家による編著の主力化 1931～1944年

〔図 3-1〕上段のグラフにみられるように、社主の療養とともに雑誌の編集が社外の建築家に委託され、叢書と単行本も社外の著者が主体となった収束期となる。年刊平均25点ほどを刊行した。

その端を開いた月刊誌『建築工芸アイシーオール』（1931年11月～1936年8月）〔図 3-13〕は、ウクライナ劇場の国際コンペ入選で知られた建築家・川喜田煉七郎が、「血の出る様な新しい記事と図面と写真の氾濫」⁴¹をスローガンに編集した。もとは洪洋社の広告用小冊子を川喜田が受託し、付録の記事頁を拡大して、自らの主宰する新建築工芸学院の機関誌へと脱皮させたとされる⁴²。独自の「構成教育」と住宅や商店の設計技術を啓蒙し、A.ベーネの著書の編訳などで欧米モダニズムの動向を「近代建築史」として紹介した。同誌創刊の2か月前に『建築新潮』誌が休刊していることから、両誌の間には後継関係が認められる。

⁴⁰ この時期の例としては、建築世界社『建築講義録』（1924～34年ごろ）のほか、アルス社『アルス建築大講座』（1926～28年ごろ）、早稲田大学出版部『早稲田大学建築講義』（1929～31年ごろ）などが挙げられる。

⁴¹ 『建築写真類聚』第10期第17集、1939年10月号、奥付社告など

⁴² 村松貞次郎「日本建築界のアウトサイダー・川喜田煉七郎」、『日本建築家山脈』、p.273、鹿島研究所出版会、1965年

同様に海外情報を扱う叢書『近世建築』は、「世界新興建築の展望室」⁴³をうたう叢書『建築時代』（全24集、1929～1932年）〔図3-14〕へと受け継がれ、パウハウスやR.ノイトラなど紹介した。さらにその後継となる叢書『建築構成』（8集か、1932～1935年ごろ）は、川喜田の責任編集となり、小住宅や商店の「設計グラフ」が主題とされた⁴⁴。

このころ川喜田は洪洋社の「社友」とも告知され⁴⁵、『建築時代』の責任編集と記す社告もあり、大半の解説文を担当している⁴⁶。同書と『建築工芸アイシーオール』誌の奥付は高梨編、『建築構成』は洪洋社編集部とあるが、その内容や記名記事の割合から実質的に川喜田の編集だったと考えられる。つまり、それまで社内編集だった月刊誌と海外情報の叢書が川喜田へ託され、その得意とするモダニズムや設計実務へとテーマの重心が移ったことが指摘できる。

著者の個性はほかの叢書にも色濃く投影され、その代表といえるのが全20巻の『数寄屋聚成』（1935～1937年）〔図3-15〕である⁴⁷。数寄屋研究家・北尾春道が「歴史的にも建築的にも有数なる名茶席、名園及数寄屋住宅を全国的に渉獵」し、「各実測図、外観、内部等に亘り、広く深く集大成」⁴⁸した。高橋義雄、正木直彦という斯界の権威を顧問に冠し、洪洋社の写真部員たちと撮影・実測した図版が主体となり、英文を併記して海外への伝統文化の情報発信も企図された。各社で伝統建築を再評価する刊行物が活発化するなか⁴⁹、『数寄屋聚成』は図版の独自性と上質な造本による20巻の威容で、異彩を放っていたといえる。1970年代には「増補復刻版」が他社から刊行されたほど息の長い数寄屋建築の参考書となった⁵⁰。

⁴³ たとえば『建築工芸アイシーオール』1933年2月号、後付社告など

⁴⁴ 第6集は山脇巖編「オランダ新建築」（1934年2月）と方向性を異にするが、山脇は第5集「住宅とその設備（1）」を川喜田と共編している。

⁴⁵ たとえば『建築工芸アイシーオール』1932年2月号、後付社告

⁴⁶ 責任編集の記載は前掲43社告など。解説文は全24集のうち21集を川喜田が担当した（うち大内秀一郎、土浦亀城との連名が各1集）。

⁴⁷ 『数寄屋聚成』については、大川三雄「北尾春道の著作にみる特徴とその性格——『数寄屋聚成』とその時代背景」（日本建築学会計画系論文集、no.478、p179-188、1995年）に詳述されている。

⁴⁸ たとえば『国宝書院図聚』第1巻、1938年、後付社告

⁴⁹ たとえば『国際建築』1934年1月号の「茶室特集」、『建築世界』1934年4月号の「数寄屋建築特集号」（北尾監修）、重森三玲『茶室・茶庭』（河原書店、1934年）などが挙げられる。

⁵⁰ 叢文社、1971～1974年刊。伊藤ていじが同時代の動向を増補した。

姉妹版となる『国宝書院図聚』（北尾著、大熊喜邦監修、全 13 巻、1938～1940 年）〔図 3-16〕もすぐにつづき、戦時の出版統制下でも単行本『国宝能舞台』（北尾、1942 年）が刊行された。いずれもオリジナルの図版が主体となり、時局を思わせる豪華本となっている。

また、この時期の叢書は、『家具写真集成』（洪洋社編、全 16 集、1932～1934 年）〔図 3-17〕は「椅子・卓子」「事務机」など、『近代家具装飾資料』（洪洋社編、全 47 集、1936～1944 年）は三越や白木屋、高島屋などの家具展カタログ、『木材工芸叢書』（木材工芸学会編、全 16 巻、1936～1938 年ごろ）は「住宅室内計画」（木檜怨一）、「書斎家具」（鈴木太郎）といった内容となっている。

これらの叢書は、家具や工芸、伝統建築へとテーマが収斂されていく様相を示しており、とくに北尾の叢書は内容・体裁ともに美術全集のような性質まで建築書を昇華させたとも評価できる。

この期の単行本は『ソウェートロシア新興建築図葉』（今井兼次、1931 年）、『新日本住宅図集』（志摩徹郎〔吉田鉄郎〕、1931 年）、『生産工業的家具』（形而工房編、1935 年）、『一住宅と其平面』（堀口、1936 年）などが挙げられ、著者の研究や設計の最新成果をまとめたものであり、川喜田と北尾の刊行物も同様の性質を指摘できる。

それは建築家たちへの活動支援となっただけでなく、出版企画の検討に際しては、出版社としての市販性への観点と、著者の専門的な知見が、お互いに影響を及ぼしあったものと考えられる。川喜田ならば最新の建築理論よりも設計実務や工芸を打ち出し、北尾の数寄屋研究は伝統美術の全集としてまとめることで建築界を越えた広い読者層に訴求した。そこには、モダニズムの先鋭性と伝統再考の学術性、そして商業出版のポピュラリティが均衡する様相を観察できる。つまり第 3 期は、出版社と著者の役割が明確化し、刊行物のオリジナリティが深まった円熟期と位置づけられる。

3-2-4 叢書の特徴とテーマの展開

本節第 2 項で述べたように 1931 年 8 月の『建築新潮』誌の休刊は、洪洋社における編集責任制への移行を示している。同号には高梨の著と推定される「休刊の言葉」が掲載された⁵¹。そこでは、蔵田や川喜田らをデビューさせた「過去の功績」を挙げ、休刊理由は「不況の祟り」とし、前身の『新住宅』誌から「損ばかり」だったにもか

⁵¹ 前掲 34。記名はないが、記述内容から高梨の著と推定できる。

かわらず「非商業的な雑誌が十二年も続」いたのは「洪洋社主人の商売気を離れた面白い気稟」だったと述懐する。また、たとえ景気が戻っても復刊は不明とし、「建築の雑誌の内容といふ問題になるといろいろの疑問が起るからだ」と出版人の心情を吐露している。

一方の叢書は、前述のように『建築写真類聚』では版を重ねる巻も多く、豪華本の『数寄屋聚成』でも短期で増刷していることから⁵²、一定の利益が確保されていたことが推定できる。さらに、広告用冊子から川喜田の個性的な雑誌への転換を許容したことで発刊された経緯からも、モダニズムを主題とする雑誌の収益面を、建築の様式や装飾といったカタログ形式の建築図集による叢書が支えるような構図、つまり前衛的・啓蒙的な性格の強い雑誌を、実用的・実務的な内容の叢書が支えていたといえる。

こうした叢書の変遷を、テーマの傾向で整理したのが、[図 3-1] 下部の一覧である。海外情報を扱う図集が受け継がれつつ、芸術や装飾へとテーマが多角化し、講義録や学芸書への体系化もみられ、やがて伝統的建築や工芸へと収斂していく様相が認められる。

月刊の建築誌では、情報の即時性ととも、デザインや理論の新奇性が評価軸のひとつとなる傾向があるのに対し、シリーズでまとめる叢書では、資料性やテーマの安定性に重心が置かれる。洪洋社では「写真」「文化」「数寄屋」「工芸」といった大きなテーマで叢書を打ち立て、各巻のラインナップは「玄関」「ルネサンス」「名園」「書齋家具」といった明瞭なタイトルで構成された。それは、建築様式や装飾、工芸といったテーマが、刊行物をとおして戦前期の建築界に継続して伝播していた様相を示していると考えられる。その最大の媒体こそが、洪洋社の建築出版活動を特徴づける叢書形式の建築図集であったといえる。

⁵² 筆者らの実見した第1集は、初版1935年5月13日発行、再版が同年5月28日、三版が同年11月23日と奥付に記されている。

第3節 叢書形式の建築図集と編集体制

3-3-1 叢書形式の建築図集の概要

前節までに洪洋社の建築出版活動の概要を明らかにし、多様な刊行形式が展開するなかで、その中核となっていた刊行物が叢書形式の建築図集であったことを指摘した。建築図集については、文章量が少ないこともあってか、同社の活動全体からみた明確な編集方針はこれまで言及されてこなかった。

そこで本節以降は、洪洋社における叢書形式の建築図集を分析対象として取り上げることで、同社の事績を考察していく。建築図集ならではの図版の制作方法とともに刊行趣旨を分析し、その刊行手法を考察することで、洪洋社の建築図集の特質を明らかにすることを試みる。叢書形式の建築図集を分析対象としたのは、同社において最も点数が多い刊行形式であるだけでなく、シリーズごとに複数巻で構成されるため、一定の刊行手法を見いだしうると考えられるからである。

以下、第5節までの構成としては、本節では叢書形式の建築図集の概要について述べ、分析対象の範囲とその史料特性についても言及する。そして、洪洋社の刊行形式と編集体制との関係性について検討し、図版の制作方法との関わりを指摘する。第4節では、図版の制作方法の観点から刊行手法の変遷について分析する。第5節では叢書総体としての刊行の企図について検証する。

洪洋社の叢書としては、24タイトルが確認できる〔表3-2〕。そのうち『建築文化叢書』『建築資料叢書』『木材工芸叢書』は、図版も多いが文章主体で構成されている（〔表3-2〕の《6、14、23》。以下、《 》の数字は〔表3-2〕右端の番号を示す）。残り21タイトルが図集に相当し、本章の分析対象となる。建築が直接扱われていない図集《7、8、10～13、15》についても、「美術、工芸、建築、其他一般図案家の好資料」⁵³などと社告で示されているように、建築とその周辺分野の読者に向けられていたものと認められるため、本章での分析対象とする。

各叢書の巻数⁵⁴については、全巻の完結が確定できるのは5タイトルのみである《16、20、21、23、24》。そのほかの叢書については、266巻まで確認できる『建築写真類聚』《3》といえども最終巻が断定できない。本節以降では、こうした不確定要素の多い叢

⁵³ たとえば『建築新潮』1926年3月号、後付社告（頁なし、以下同）

⁵⁴ 本章の序で述べたように、各叢書の数えかたについては、〔表3-2〕の「刊行点数」の項に示したように、「集」「号」「編」「巻」と叢書によって異なるが、巻数を示す場合は便宜上「巻」で統一している。

書の性質をふまえ、具体的な分析については実在を確認できた 618 点の巻数となる叢書形式の建築図集を対象とする。そのうえで、各叢書の全体像としては、既往研究に依拠しながら別途 23 点の巻数を刊行点数の集計に含めている（[表 3-2] 注記参照）。

図版が主体となる建築図集においては、刊行趣旨が読み取れる文章は、序文などの短い解説文とともに、社告における広告文 [図 3-18] にかぎられてくる。また、社内編集による建築図集の序文には、広告文と同じく筆者が記されていない。例外的に『建築時代』《16》と『建築構成』《19》では、奥付に編者として高梨由太郎と洪洋社の名が、巻頭の解説文には社外の建築家の氏名が明記された⁵⁵。洪洋社の編集作業は高梨の独力だったと、複数の遺族が回想している⁵⁶。本節以降では、これらの無記名の序文や広告文についても同社の刊行趣旨を読み取る分析対象とし⁵⁷、その刊行手法の特徴を検討していく。

3-3-2 社主の経歴

[表 3-2] の「編著者」の項に示したように、洪洋社における叢書形式の建築図集のうち 9 タイトルの編者は、同社もしくは社主の名義であることから、創業社主の高梨由太郎 [図 3-19] の存在が注目される。高梨の経歴については、菊池重郎が洪洋社設立前後の動向を刊行物の形跡からたどっている⁵⁸。菊池によれば、高梨は雑誌『建築画報』の発行兼編集人を 1911 年 8 月号から 1912 年 1 月号まで務め、1912 年 3 月ごろに建築画報社を退職したとされる。同年 7 月に雑誌『建築写真時報』を創刊して洪洋社を設立したという。以下、本節では、高梨の経歴について洪洋社設立以前に遡りながら、同社で高梨と協働経験のある三男・高梨康重を中心に、高梨由太郎を知る遺族 4 名への聞き取り調査をもとに検討をくわえる⁵⁹。

高梨由太郎は、1882 年 3 月 8 日に高梨勝蔵とすでの長男として長野県南佐久郡に生まれた。一家は由太郎の生後間もなく上京し、麴町区紀尾井町に住んだとされる。高

⁵⁵ 最も多い川喜田煉七郎の記名解説文は、『建築時代』が 24 集中 22 集（ほか土浦亀城など）、『建築構成』は 8 集中 7 集（ほか山脇巖）となる。

⁵⁶ 洪洋社で高梨由太郎と協働経験のある三男・高梨康重、孫として接した高梨の長男・勝重息女のニューベリ一淳子と大月綾乃による。

⁵⁷ 藤岡洋保は、洪洋社の広告文を高梨由太郎の手によるものとみなしている（前掲 2、p.3）。

⁵⁸ 菊池、前掲 3「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（上）（下）」

⁵⁹ 前掲 56 の 3 名にくわえ、二男・信重夫人の高梨優子も高梨由太郎を知るひとりとして聞き取り調査を行った。なお、前掲 2 の藤岡は、前掲 56 の大月綾乃に証言をえている。

梨は20歳前後のころ、陸軍省構内の印刷所「小林出張所」で印刷工の職に就いたという。その傍ら夜学へ通い、国史や英語、漢学などを学んだとされるが、建築学については修学の形跡がみられない。

小林出張所とは、明治期から昭和戦前期にわたって陸軍省御用の印刷業務を手広く担った川流堂の「小林又七出張所」のことと考えられる。その名称は当主の氏名によるもので、陸軍省構内における出版活動が記録されている⁶⁰。川流堂からは、陸軍省の測量地図や軍事技術書が数多く印刷、発行されており、『普国野外築城教範』（1900年）や『歩兵之築城』（1911年）などの建築技術書も含まれていた。幕末・明治期は軍事技術書が西洋建築の導入に大きく寄与したが⁶¹、日清・日露戦争の写真報道は印刷技術にも発展をもたらしており、後述のコロタイプ印刷もそのひとつであった⁶²。西洋の印刷技術と建築書に高梨が接しえたという意味で、小林出張所における職歴を洪洋社の建築出版活動の原点として指摘できよう。

洪洋社における社内編集の刊行物は、最大で年間52点にも達したが⁶³、その序文や広告文が多産された背景として、高梨が相当の筆まめであった形跡を指摘できる。後述する同社「建築設計部」の現場監理で広島滞在中の次男・信重に対し、13日間に6通の手紙が差し出されていた⁶⁴。そこには、職人や資材の差配から逗留先への付け届けなどが事細かに、しばしば指示書のような箇条書きでつづられている。

晩年の高梨は、1935年ごろから江ノ島で療養生活を送るようになり、洪洋社の社主を長男の勝重に譲ったとされる。しかし、1937年ごろまでは、高梨由太郎の名が奥付に発行人として記載されている⁶⁵。高梨の逝去は1938年10月8日のことだった。以後も1944年ごろまで刊行は継続されたが、空襲で社屋や資材が焼失したこともあり、戦後では終戦間もない数点の刊行に限られている⁶⁶。

⁶⁰ たとえば『丸山正彦伝』（丸山善彦発行、1915年）の奥付に記載。川流堂は当主が小林又七の名を継いでいた（『東京書籍商組合史及組合員概歴』、p.223、東京書籍商組合、1912年）。なお、川流堂の本店は麹町区隼町に所在し、高梨は同区に居住していたことになる。

⁶¹ 菊池重郎『日本に於ける洋式建築の初期導入過程の研究』、pp.31-39、pp.504-508、東京工業大学博士論文、1962年

⁶² 岡塚章子「小川一眞印刷・発行による『日露戦役写真帖』『日露戦役海軍写真帖』について」（東京都江戸東京博物館紀要、第2号、pp.85-100、2012年）

⁶³ 社内編集による刊行物の年刊行点数は、1923年が52点、1922年と1925年に48点を確認できる。

⁶⁴ 前掲12に同じ。

⁶⁵ たとえば1937年6月発行の『数寄屋聚成』第20巻

⁶⁶ 1948年の再刊に『建築計算寸法便覧』（須藤真金、岸原三郎、初版1939年）と『趣味の建具図案集』（阿部

一方で、1934年に建築の設計施工部門が設けられ、1948年に建築設計施工を専門とする「株式会社洪洋社」へと改組された。同社は勝重が中心となり、いずれも早稲田高等工学校で建築を学んだ次男・信重と三男・康重との協働で栄えていった⁶⁷。建築専門出版社としての洪洋社は、発展的に業種転換されることで、その建築出版活動を実質的に高梨由太郎の一代で終えたといえる。

3-3-3 編集体制と写真部員による図版制作

前節で述べたように、1920～1930年代の洪洋社には写真部員と経理事務員、住み込みの従業員が各2名従事しており、いずれも高梨が郷里から呼び寄せた縁者であったという。編集作業は高梨のほぼ独力で行われ、勝重が洋書の翻訳を手伝う程度だったとされる。

洪洋社の編集体制を例証する資料としては、勝重の設計により1934年に建てられた自宅兼社屋（以下「新社屋」）の図面が残されている〔図3-20〕。新社屋は「東京市牛込区市谷台町十番地」に木造3階建てで建てられた⁶⁸。1階はおもに事務室に充てられ、一部の社告では「営業所」と記された⁶⁹。関東大震災後に当地へ移ってからは、『建築写真類聚』の社告などに同社の案内図が載せられた⁷⁰。普請道楽で知られた映画俳優・大河内傳次郎も刊行物の購入に訪れたと遺族が証言するように⁷¹、直販の場ともなっていた。

2階の和室は編集室とされ、高梨が写真や洋書を並べ、ひとりで原稿を整理していたという。3階北側の「アトリエ」には「建築設計部」が新社屋の完成とともに新設された。東側は「暗室」、南側は不鮮明だが「写真復写室」と読め〔図3-20〕、ここを「写真部の部屋」と記憶する遺族もいる。営業、編集、写真という新社屋の構成は、同社の編集体制を示していると考えられる。

正雄、同1940年）が確認でき、1949年に戦後唯一と推定される新刊として『平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集』（広島カトリック教会編）が確認できる。

⁶⁷ 高梨康重によれば、終戦前後の洪洋社の設計施工業務は、田中角栄の田中土建と近い関係にあったという。

⁶⁸ 洪洋社の住所の変遷については前掲15参照。

⁶⁹ たとえば『建築工芸アイシーオール』1935年10月号、奥付社告

⁷⁰ 案内図掲載の最初期とみられる『建築写真類聚』第4期第8集「銀行会社 巻四」は、奥付には1923年8月刊行と記載されているが、序文には関東大震災後の取材となった経緯が明記されているため、同書の実際の刊行は同年9月以降とみて間違いない。

⁷¹ 前掲56、ニューベリー淳子による。

洪洋社最初の刊行物である『建築写真時報』誌は、雑誌とプレート図集をあわせたような体裁で、それは高梨が従前に在籍した『建築画報』誌における図版重視の編集方針を倣ったものと指摘されてもいる⁷²。実際に『建築画報』誌は「記事欄」と写真の「画報欄」で構成されており、『建築写真時報』誌はとくに名称は付されていないが記事を主体とした頁と「写真欄」の2種の誌面からなる。

高梨が在籍した前後の『建築画報』誌には、「建築画報社写真部」による建築写真の「出張撮影」と「複写及引伸」の請負を宣伝する社告が繰り返し掲載され、同誌奥付の印刷所欄には「建築画報社印刷部」と記載されていた⁷³。また、高梨の同社退職翌年の1913年1月号には、建築画報社の年頭挨拶の社告に社員7名の氏名が記され、そこに峯尾松太郎の名を確認できる。峯尾については、洪洋社の写真部員だったことを高梨の複数の遺族が証言しており、同社の1930年代の刊行物に撮影者として記載されている⁷⁴。ゆえに峯尾は、高梨の独立後に洪洋社へ移籍した写真部員と考えられる。

洪洋社の刊行物の奥付に記された印刷所は、発行所と同住所の「洪洋社写真印刷部」が多い。これは建築画報社の部署名に倣ったものとみられる。高梨は、洪洋社設立にあたって『建築画報』誌の編集方針だけでなく、同誌の人脈や編集体制も受け継ぎながら、写真部員の撮り下ろしによる図版の制作方法を採ったといえる。

高梨は新しい建築が完成したと聞くと写真部員とともに現地へ赴き、撮影の交渉と出版の許諾をえていたという。刊行が28年間にわたった叢書『建築写真類聚』には、1915年の創刊時から撮り下ろしとみられる鮮明な写真が確認できる。同叢書は、国内外の図面、洋書からの複製図版も掲載された。そのひとつである「百貨店」（1927年8月）の写真は、オランダの『ヴェンディンヘン』誌から複製したことが明記され、「多少印刷の鮮麗を欠く嫌」はあるが日本で未紹介ゆえに「極力修正」して掲載したという。洋書の複製印刷に手慣れていた様子が認められる。

これらのことから洪洋社では、高梨の指示のもと、写真部員が月刊形式の『建築写真類聚』の図版を撮り下ろし、暗室で現像する傍らで、「写真複写室」にて洋書や図面などを複写していたと考えられる。つまり、自社での撮影と複製による図版制作が、洪洋社の建築出版活動の柱に据えられていたといえる。

⁷² 菊池、前掲3「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（上）」、p.10

⁷³ たとえば『建築画報』1911年9月号～12月号および1913年の各号の後付社告

⁷⁴ たとえば『レイモンドの家』（1931年）と『数寄屋聚成』第20巻（1937年）で確認できる。

第4節 建築図集における刊行手法の変遷

3-4-1 複製図版による海外情報の目的

本節では、洪洋社の活動の柱とされた図版制作の観点から、社内編集の建築図集を軸に刊行手法の変遷について考察する。それは〔表 3-2〕の「図版の制作方法」の項に示した「複製図版」「自社撮影」「実測・作図」という3つの観点である。基本的に、複製は海外情報、撮影や実測は国内情報に対応する。また、「印刷方法」の項で多くを占めるコロタイプ印刷の特徴についても検討をくわえる。

洪洋社の叢書は、洋書からの複製図版にはじまる。最初の『世界建築様式図解』《1》は、「有らゆる世界の建築を様式別に分類」し、その「材料は、容易に得難き貴重書物より選択複製」して「諸彦の座右を飾る」ことが企図されていた⁷⁵。西洋の建築様式を扱うに際して、複製図版を用いるがこそその情報の確かさが強調されている。

複製主体の建築図集は『近世建築』《2》へと受け継がれた。表題に「The Modern Architecture」と併記された同叢書の広告文には、「新建築運動」の「中心地たる独逸」では国外の情報を「図版に依り複製紹介する事業が可成り盛ん」であり、「此精神に依る本図集は、其紹介の機敏」と「印刷の鮮麗」により「満足に値する事は疑ひない」とつづられた⁷⁶。図版の複製行為は、モダニズム建築の動向を速報するための世界的な趨勢とされた。

複製の対象は、建築の周辺分野にも広げられた。『西洋文様図譜』《15》では「紀元前より近代」までの「建築工芸其他の意匠として使用された文様」が紹介された。そして「新しいデザイン」が「盛と」なるなかで、「一通りの古い伝統様式の訓練を経て」こそ「真に現代のデザイナーの本道」と主張されている⁷⁷。『亜細亜芸術叢書』《18》では、「常に向新^ニの道」を求める「現代欧州人」がアジアの「古代芸術に眼を光らせるなかで「亜細亜人たる吾々」が「偉大なる芸術の宝庫を前にして、徒手茫然」とできず、「速に本図集に参して新興芸術の開発に資せん」と読者に訴えている。各地の伝統的意匠を「新興芸術の開発」への素養とすることの重要性が強調された⁷⁸。

⁷⁵ 菊池、前掲3「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（下）」、p.8

⁷⁶ たとえば『建築新潮』1925年7月号、後付社告

⁷⁷ たとえば『建築写真類聚』第6期第9集、1928年2月、折込社告

⁷⁸ 前掲77に同じ。

洪洋社では、図版の複製によって建築の情報媒体としての機能を高めることに早くから取り組んでおり、その素材となる海外情報の対象を拡大させていった。西洋建築における歴史様式の正確性から建築運動の即時性、やがては「新興芸術」の創出への寄与という企図のもと、複製図版による建築図集が展開されていったといえる。

3-4-2 自社撮影による国内情報の推移

写真部員による建築撮影としては、とくに『建築写真類聚』《3》が注目される。巻によっては複製図版や図面が主体とされたが、全体としては28年間という長期にわたって自社撮影による国内建築の写真掲載が認められるためである。

各巻のテーマについては、初期の1910年代では「玄関」（第1期第1集・1915年11月のほか、1917、1921年に各1集）や「銀行会社」（第1期第7、8集・1916年4、5月のほか1931年までに計7集）といった建築の部位や類型をおもに扱っている。前者は「現代の住宅に適応すべき」「構想手法」が「玄関として単独に離観」して「採択」された⁷⁹。「現代の住宅」に適した部位として玄関の範例が撮影されていたといえる。

1920年代以降では「近代装飾意匠図案」（第4期第4集・1923年4月）や「日本趣味の折衷住宅」（第5期第9、10集・1925年11、12月）といった装飾や意匠を扱う巻が目立っていく。当時の有力工務店・島藤による一邸宅をまとめた「数寄屋造住宅」（第6期第15集・1928年8月）の序文では、「欧風模倣に没入」する風潮のなかで日本の「固有芸術の魅力に満ちた」数寄屋を紹介するのは「編者の欣快」と記されている。伝統的建築の固有性にあらためて着目し、撮影対象とする傾向が認められる。

島藤による住宅は同叢書の「近代数寄屋住宅」（第9期第23集・1937年3月）としてもまとめられており、島藤と洪洋社との浅からぬ関係も推察できる。また、後年の島藤の社史では、戦前期の代表作を「建築写真出版社として著名であった牛込の洪洋社」が写真集にしたと記されている⁸⁰。このことから、洪洋社が建築写真を特徴とする出版社として、一定の認知を得られていたことが理解できる。

『建築写真類聚』の序文には、建築写真の撮影に関する記述もみられる。「カフェー内部集 巻一」（1932年6月）では「店の繁栄を描き出す所の唯一の実物見本」をとらえたのは「一に写真技師のお手柄」とされ、自社の撮影技術への自負も垣間見られる。

⁷⁹ 『建築写真類聚』第1期第1集、1915年11月、「凡例」（前掲2 菊池「洪洋社の「建築写真類聚」(1)」、p.6）

⁸⁰ 『島藤八十年史』p.26、島藤建設、1954年

さらには複製図版による巻の序文でも、写真撮影について触れられている。欧米モダニズムを紹介する「世界の新興住宅」（第8期第12集・1932年12月）〔図3-21〕では、『新興住宅』が何であるかは「既に御承知のこと」として「問題でない」とされ、「たゞ、主もだつた写真について、説明」される。「緑の中に浮び出た白い壁。曲線と直線の明快な交錯、これこそ現代人を抱擁する美しい生命の城郭」とし、抽象美にもとづく建築構成を見いだしている。「バルコンの景観」は「撮り方がうまいばかりではない。そこに立つ人の心の喜びが響いて来る」と建築撮影の視点や構図の特徴に関する言及も示された。

『建築写真類聚』における写真掲載の主眼は、建築の部位や類型に関する範例の提供から日本の伝統的建築に関する固有性の紹介へ、さらにはモダニズム建築の新たな抽象美のありかたを伝える対象へと、展開されていったことが認められる。視覚情報としての建築写真のとらえかたが変化していく様子を読み取れるのである。

3-4-3 実測・作図と「建築設計部」の役割

洪洋社の図版制作がより進展し、独自の実測・作図による図面制作が行われたのが『数寄屋聚成』《21》〔図3-15〕と『国宝書院図聚』《24》〔図3-16〕であった。前者には「東山桃山時代」から「現代」に至る「茶室建築及び数寄屋住宅の内外観及び其詳細約千五百図」によって合計135棟が紹介された⁸¹。一方、後者は国宝指定の「書院建築の内外詳細を網羅」し、その「構造、建築装飾、庭園等を叙述」するものである⁸²。ともに編著は数寄屋研究者の北尾春道だが、その実現には高梨由太郎の「多大の御厚意」をはじめ、「製図の労」は「高梨勝重、高梨信重両氏」、写真撮影は「洪洋社写真部 峰尾松太郎氏、高梨良蔵氏」に負ったことが北尾の謝辞に明記されている⁸³。

同時期の1937年に竣工した西本願寺法主・大谷光照の私邸「錦華寮」は、北尾の建築設計の代表作とされる。洪洋社から同年刊行の『錦華寮建築図譜』には、その設計が「洪洋社建築設計部 北尾春道 高梨勝重」で、監督が北尾と表記され、設計依頼のきっかけが『数寄屋聚成』での同寺の実測であったことも紹介された⁸⁴。洪洋社と北尾は、出版と建築設計の双方で密接な協力関係にあったことが認められるのであり、

⁸¹ 大川、前掲47、p.184

⁸² 『国宝書院図聚』第1巻、p.5、1938年

⁸³ 『数寄屋聚成』第20巻、前詞（頁なし）、1937年

⁸⁴ 北尾春道『錦華寮建築図譜』、前詞（頁なし）、1937年

出版の企画から実測・撮影、作図・編集に至るまで両者が一体となって進められたものと考えられる。

1930年代の出版界では、伝統文化再考の機運に乗って、数寄屋や茶室の関連図書や特集雑誌が各社から刊行された⁸⁵。そのなかでも『数寄屋聚成』は実測図と撮り下ろし写真で構成されており、従来の展開図や起こし絵ではなく、陰影を表現した立面図や透視図が用いられたことから、特異な存在だったといえる。同書の編集顧問である茶人・高橋義雄は序文を寄せて「室内陰翳多く光線難透なる隅々までも写し得て鮮明、恰も実物を目撃するが如く、其詳細を通覧し得る」驚きを吐露している⁸⁶。また、平面図には撮影の位置と方向が矢印で示されており、室内空間の空間性が示されてもいた。一方の『国宝書院図聚』は、「豪華な形式的存在を誇る」ものとして書院建築の規範を的確に伝えるために、写真よりも図面に比重が置かれていた。写真撮影に際しても「局部的細部を充分明示するやう努め、写真技術を製図的表示に効果あらしむるやう努力した」とされ、詳細図に相当するような写真表現の企図が認められる⁸⁷。

これらのことから両叢書の図版制作には、日本の伝統的建築の空間やディテールを視覚的に明示しようとする編集上の創意が認められる。そこには洪洋社の培ってきた写真撮影と図版制作の技法が注がれており、透視図を含む図版には建築の高等教育と設計の実務経験を経た北尾と高梨の息子たちの建築観が投影されていたといえる。『数寄屋聚成』が同社の創立25周年記念刊行とされたように⁸⁸、建築設計部員の動員を含め、図版制作を重視して編集体制を整備していった洪洋社の建築出版活動の集大成とも位置づけられる。

『数寄屋聚成』と『国宝書院図聚』には、伝統的建築の意匠が視覚的な情報として建築図集に組み込まれていく過程の一断面が示されているといえる。だからこそ、従来の大工棟梁に継承されてきた伝統的、因習的な技術体系によらない建築設計者にも受容されたのである。このことは、『数寄屋聚成』が戦後も有益な情報として再版されたことにも裏づけられている⁸⁹。「純粹の日本的な建築の姿」の「国際的進出を試み」

⁸⁵ たとえば『国際建築』1934年1月号の「茶室特集」、重森三玲『茶室・茶庭』（河原書店、1934年）などが挙げられる。

⁸⁶ 高橋義雄「序」、『数寄屋聚成』第1巻、頁なし、1935年

⁸⁷ 前掲82に同じ。

⁸⁸ たとえば『建築工芸アイシーオール』1935年3月号、前付社告

⁸⁹ 前掲50に同じ。

るものとして⁹⁰、英文併記とともに図版の表現が工夫されることで、海外の読者をも対象としえたと考えられる。

3-4-4 印刷方法の特徴

[表 3-2] の「印刷方法」と「図版の制作方法」の項に示したように、『建築写真類聚』を除くと、当初の約 20 年は複製図版が主体とされていたが、コロタイプ印刷⁹¹は一貫して用いられていたことが認められる。網点印刷よりも高価だが図版の再現性が高いコロタイプ印刷は、網点がないためモアレが少なく、洋書の複製図版の印刷にも適していたといえる。

発行部数としては、網点印刷が数千部単位なのに対し、コロタイプ印刷は刷版の耐久特性から数百部が適正とされる。戦時下の用紙統制で部数表示が義務づけられた時期の『建築写真類聚』などの奥付には 510 部と記され⁹²、1942 年の豪華本『国宝能舞台』は「限定 300 部」だったと高梨康重が証言している。ゆえに、洪洋社の建築図集の発行部数は、各巻が数百部程度だったと考えられる。

また、『建築写真類聚』には 5 版、6 版と重ねられた巻も少なからず認められる⁹³。同社の建築図集は少部数が基本とされ、需要に応じて重版されたとみられる。このことは在庫のリスクを低減させ、経営の安定化にも寄与したものと推測できる。

以上のことから洪洋社では、少部数と複製図版の制作に適したコロタイプ印刷の特性を活かすことで、多数の建築図集を刊行しえたと考えられる。前節で述べた自社での撮影と複製による図版制作は、社内編集の名義による建築図集を高頻度で刊行する業態をもたらしていたともいえる。その結果、多様なテーマをもつ叢書が展開できたのである。そうした刊行手法による叢書が、[表 3-2] にみられるように昭和戦前期末まで途切れなかったのは、一定の読者需要に見合っていたことの証左といえる。あるいは市販による建築図集の刊行形式として、叢書が適していたことも示している。次節では、洪洋社の叢書総体としての刊行の企図について検証する。

⁹⁰ 『数寄屋聚成』第 1 巻、前詞（頁なし）、1937 年

⁹¹ 本章でのコロタイプ印刷に関する記述は、日本コロタイプ印刷史編集委員会編著『日本コロタイプ印刷史』（全日本コロタイプ印刷組合、1981 年）にもとづいている。

⁹² たとえば『建築写真類聚』第 11 期第 9 集、1942 年 11 月

⁹³ たとえば、第 4 期第 7 回「文化住宅 巻一」が 1927 年 2 月に 6 版（初版 1923 年 7 月）、第 3 期第 5 集「改良和風便所」が 1925 年 12 月に 5 版（初版 1921 年 5 月）などを確認できる。

第5節 叢書総体としての刊行の企図

3-5-1 読者層の想定

洪洋社の叢書形式の建築図集に関する広告文〔図 3-18〕では、対象とする読者層についても繰り返し触れられている。『建築写真類聚』は「全く理屈なしの万人向活資料」であり、「建築家は造家主の意図の片鱗を把握する為」に「造家主は自己の意図を建築家に伝ふる為」に「見たり見せたり」することで「意向伝達の媒介」となる企図がうたわれた⁹⁴。写真を視覚媒体とすることで、建築の専門知識を有さない「造家主」、つまり施主も読者層に想定にされていたのである。海外経験や日本の伝統文化への素養が豊かな施主の場合には、その意向を設計者がくみ取る手助けにもなったことだろう。たとえば「住宅樂翠荘」（第9期第18集・1936年8月）は「建築技師を介して、主人自らの趣味構想を展開した大住宅」として紹介され、施主の趣味という観点からまとめられている。

『美術工芸大観』《7》〔図 3-10〕は、国宝や皇室所蔵品の什器、伝統芸能の道具類などの文化財や工芸品を紹介する写真集である。その所蔵先は東大寺正倉院をはじめとする名刹、伊達伯爵家などの名家、ときに佐藤功一などの建築家も含まれる。日本の至宝を写真によって視覚的に集成することで、富裕層の趣味を伝えようとする企図が認められる。あるいは『意匠美術写真類聚』《8》は、「実生活と最も関係の深い建築及工芸芸術の制作者と鑑賞家」に対し、「最も喜ばしい意匠の精神と智識とを鼓吹」することを目的に編まれた⁹⁵。

洪洋社の刊行物は、ときに大河内傳次郎のような普請道楽も買い求めたとされるように、建築意匠に関する多様な情報を視覚的に顕在化させながら、昭和戦前期という時点で建築界の内外へ継続的に紹介し、ときには建築をめぐる美術工芸などについての施主の趣味も同様に伝えていた。写真という視覚媒体を用いることで読者層を広げるとともに、設計者と施主の間に建築意匠に関する共通の意識を醸成する役割の一端を担っていたといえる。

⁹⁴ たとえば『建築新潮』1927年2月号、裏表紙社告

⁹⁵ たとえば『建築新潮』1926年3月号、後付社告

3-5-2 目録としての性格

『建築写真類聚』の広告文では、建築書としての汎用的な機能についても触れられている。「応接、書斎、客間、台所、浴室、便所、扱ては暖炉、床の間、欄間、手摺、窓等徹に入り細に亘るものであり、「凡ゆる建築の種類を分類して一冊宛に纏めたもので、随時、随意のものを索出し展覧し得る至便此上なき活資料」とうたわれた[図3-18]。各巻の表題は「数寄屋」を含むものが13巻、「商店」11巻、「床の間」6巻など、具体的かつ平明な建築の部位や類型の名称が並ぶ。読者の目的に応じた巻を表題から「索出」でき、シリーズをつうじて総覧の利便性の向上が目論まれていたといえる。

あるいは洪洋社の多様な叢書の総体が、そうした利便性を企図していたとも考えられる。[表3-2]にみられるように叢書の表題は「図案資料」「数寄屋」「木材工芸」といった分野別に構成され、各巻の表題では「表現主義」「名園」「書斎家具」といった個別的なテーマが設定されており⁹⁶、情報の階層性が確保されていた。

叢書および各巻のテーマ設定については、販売方式との関係性も指摘できる。刊行物に付された社告には、既刊書を並べた目録形式が多く、ある時期には図書目録が別冊子として定期刊行された形跡も認められる⁹⁷。また、叢書では購読の振込規定が明示され、まとめ払いによる割引価格が設定されていた⁹⁸。実際に、折り込み形式の刊行案内と振替用紙には「近く台頭せんとする亜細亜芸術 図集」について「御申込は躊躇なく」といった文言が鮮やかな特色で刷られ⁹⁹、印刷技術の特徴を生かした販売促進が認められる。そして丸善とは外商の契約が結ばれ、上海、台湾、朝鮮にも販路が築かれていたという¹⁰⁰。これは、目録形式による通信販売が重視されていたことを示し、刊行物の内容を伝える社告は、当時各地に広がり活躍していた建築技術者に対して有用な情報になったといえる。

⁹⁶ 『図案資料叢書』第4集「表現主義版画集」(1925年)、『数寄屋聚成』第8~10巻「数寄屋名園聚」(1935~1936年)、『木材工芸叢書』第4巻「書斎家具」(1937年)

⁹⁷ 筆者らは「出版目録」(刊行年記載なし)を確認した。前掲2藤岡によれば出版案内『洪洋社タイムス』が1922年から刊行されたという。

⁹⁸ たとえば『建築文化叢書』の振込規定は、全20巻を全冊1回払33円、2回払16円80銭、3回払11円20銭、毎回払3円(以上送料込)、1巻ごとの「分売」は「送料実費共」で3円15銭とされた(『建築新潮』1925年7月号、前付社告など)。

⁹⁹ 『建築写真類聚』第6期第1集、1927年10月に折り込みを確認。

¹⁰⁰ 前掲56、高梨康重の証言による。

広範な題材に及ぶ洪洋社の建築図集は、目録が制作されることで、総覧の利便性と検索性の向上が叢書総体として目論まれながらラインナップが整えられていくこととなり、建築意匠の造形語彙の選択可能性を拡充させていったと考えられる。

3-5-3 建築意匠に対する意識

以上のような建築意匠への洪洋社の姿勢は、『建築写真類聚』における各巻の序文に見いだせる。たとえば西洋の「近代装飾意匠図案」（第4期第4集・1923年4月）では、「其東洋味を帯びた風趣」は「吾々の触覚に流れ込むやうな快感を与へ」ながら、「簡易と趣味とを目的とせる文化的住宅には、最も適応はしい軽快美を与へ得る」とする。国内の「文化住宅 卷五」（第6期第7集・1927年12月）については「近代的感覚を飽満せしむべき別乾坤」として紹介された。建築写真によって読者の趣味や感性に訴求しようとする姿勢が認められる。

また、先述の「世界の新興住宅」（第8期第12集・1932年12月）では、建築写真が「意匠設計のヒントを得るに足るだけの資料」で、それが「高尚な学問や理論よりどんなに、役立つてゐるかは知る人ぞ知る」と自負の姿勢が示されている。同様の刊行趣旨はシリーズ全体の広告文のなかで繰り返されていた。「意匠設計は教へらるゝものでなく、自ら育成」しなければならないとし、その「用意は、常に耕すことにある。眼をこやし、頭を豊穰ならしむにある。建築写真類聚の存在は、そこに赫々たる光輝を放つ」とうたわれた〔図3-18〕。

洪洋社では、写真をつうじて建築意匠を視覚的に経験する図集の性質に特化した建築書の提供によって、建築設計に関する読者の美的感覚の醸成に寄与しようともしていたと認められる。

小結 洪洋社の特質とその刊行手法の意義

1 建築出版活動としての特質

洪洋社の建築出版活動の全体像について、本章第1節と第2節において刊行物の性格や編著者の特徴を検討しながら考察した結果、以下のことが明らかになった。

同社は、戦前期の建築専門出版社として活動期間が最も長いもののひとつであったこと、刊行点数は最大級と考えられること、また、その活動は3期に区分できることを示した。すなわち、第1期は社主の独力による建築プレート図集の市販事業の確立期であり、建築の様式や部位、類型などのカタログ形式と、印刷精度と図版数を重視することで広がる需要に応えた。第2期は、刊行形式を適宜使い分け、情報の即時性と資料性を高めていった興隆期であり、月刊誌は新興建築運動の複数の組織が共演する舞台となる一方で、叢書は講義録や学芸書、古今東西の芸術様式集など、建築家たちと共同しながら多角化、系統化していった。第3期は出版社と著者の役割が明確化され、コンテンツの独自性を高めた円熟期であり、美術全集のような叢書も成功させ、建築学研究的な学術性と商業出版のポピュラリティを均衡させていった。全期をつうじては、図集を軸とした叢書が建築様式や装飾を継続して紹介するなかで、やがて伝統建築と工芸に収斂していき、建築表現の新奇性に偏りがちな雑誌では継続されにくいテーマが展開されていった。

こうした洪洋社の建築出版活動を考察することで、建築様式や装飾、工芸といった多様な意匠の情報が、戦前期に広く伝播していった実像の一側面を明らかにすることができた。その主体を同社では叢書形式の図集が担っており、建築家との連携を深めることで刊行物の専門性と市販性の均衡が図られていったのである。これは、出版社と著者の役割が確立する過程を示している。

つまり、洪洋社の建築出版活動は、刊行形式の展開、テーマの拡充、出版社と著者との共同の緊密化といった、近代日本の建築書の変遷をたどる一定の輪郭を示していると考えられる。それは、建築専門誌を中心とした従来の研究では描かれてこなかった側面である。ゆえに洪洋社は、歴史様式からモダニズムに至る多様な意匠が展開された、日本近代建築の発展形態における裾野の一翼を、叢書形式の図集で支えていたとも評価できる。同時に、叢書以外の出版活動を含む刊行形式の多様性のなかに、日本における建築の近代化とその普及過程の実質を見いだすことができるのである。

2 刊行手法の史的意義

洪洋社における叢書形式の建築図集について、本章第3節から第5節において同社の刊行形式と編集体制の関わりを分析しながら、その刊行趣旨と図版の制作方法を検証し、洪洋社の刊行手法の特徴を考察した結果、以下のことが明らかになった。

洪洋社の刊行手法には、創業社主・高梨由太郎の同社設立以前の経歴が影響していることを指摘した。高梨は陸軍省御用の印刷所に勤務していたため、建築技術書とコロタイプ印刷に接しうる機会があった。また、専属の写真部員に建築を撮影させる図版の制作方法を採っていた『建築画報』誌の編集兼発行人を高梨が務めていたことも、その背景のひとつとして指摘できる。洪洋社設立後は、写真部員の建築撮影による図版の社内制作、そしてコロタイプ印刷による建築図集の刊行が、活動の柱となったからである。また、洋書からの図版の複製も、主要な社内制作の方法とされていた。

図版の制作方法の観点から刊行手法の変遷を分析すると、洋書からの複製図版、つまり海外情報の役割については、西洋の建築様式の正確な伝達、同時代の建築運動を即時的に報じることによる世界的な趨勢の共有、そして「新興芸術」の擁立へとテーマが広げられていった。自社撮影の写真掲載、つまり国内情報の主眼としては、建築の部位や類型ごとの範例から伝統的建築へ、そしてモダニズム建築の抽象美へと対象が広げられていった。さらに、「建築設計部」と著者の協働による実測と作図が数寄屋と書院の全集へと結実し、詳細図の効果や空間性の伝達を意図した写真表現に図版制作の創意が認められた。そして、少部数と複製図版の制作に適したコロタイプ印刷の特性を活かすことで、社内編集による多数の建築図集が制作され、多様なテーマをもつ叢書が高頻度で刊行されていった。

建築図集の読者対象については、建築の設計者などの専門家だけでなく、施主をはじめとする建築の愛好家の存在も強く意識されていた。設計者および施主の趣味をめぐる「意向伝達の媒介」となる役割を写真という視覚媒体に担わせることで、ときには美術工芸にかかわる富裕層の嗜好を伝えながら、建築意匠に関して共有しうる認識を醸成する役割も目論まれていた。そして、叢書の表題が建築に関する分野別に構成され、各巻の表題は個別のテーマによって設定されることで、情報の階層性が確保されていた。多岐にわたる建築意匠が目録形式により等価に扱われ、読者が総覧する際の利便性と検索性の向上が企図されていた。それらの種々の建築図集によって読者が

視覚的な経験を積み重ねることで、建築意匠に関する美的感覚が醸成されることも意識されていた。

以上から、洪洋社における刊行手法の特徴とは、叢書形式の建築図集が多数かつ高頻度で刊行されるなかで、建築情報の視覚表現が深められていき、叢書総体としては当時普及しはじめていた建築意匠の目録となる機能がめざされていたことにあるといえる。洪洋社における建築図集の刊行手法の展開は、建築の造形語彙の選択可能性が、モダニズムばかりでなく幅広いかたちで拡充されていった一側面を示すとともに、設計者と施主が多種多彩な建築意匠を共有しあう地平の一端が開かれていったことを示している。それは、一人ひとりの趣味を建築設計に反映させる一助となる場が設定されていったとも考えられる。

第4章 構成社書房と近代建築運動の最盛期における建築出版活動

序 既往研究にみる構成社書房への言及と本章の構成¹

第2章と第3章で分析対象とした建築書院と洪洋社は、いずれも30年を超える長期の活動をみせた。それに対して本章で取り上げる構成社書房の活動期間は、後述するように、実質的には1930年前後の約2年間に限られていた。そのためか、従来の日本近代建築史研究ではほとんど検討されずにきた。しかし、構成社書房の動向を概観すると、建築出版活動をつうじてわが国の近代建築運動の方向性に少なからぬ影響を与えたことが認められ、その存在は看過できないものと考えられる。

構成社書房の刊行物に関する既往研究での言及については、建築誌の系譜を示した年表に従来の理解が示されているといえる。同書房から刊行された建築誌は、いずれも1年以内の短い刊行期間に終わった『建築紀元』と『建築時潮』となる。序章第2項と第1章第1項で検討した建築誌の年表においては、『建築学大系 6 近代建築史』（1958年）と『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』（1964年）の「建築関係雑誌年表」²では『建築時潮』誌のみが記載され〔表 1-3〕〔表 1-4〕、日本建築学会創立70周年記念座談会の年表³では『建築紀元』誌のみが取り上げられた〔表 1-5〕。

菊岡俱也による建築誌のドキュメンテーション活動を振り返ると、主要な建築誌の創刊号の表紙と目次、創刊の辞をまとめた「明治・大正・昭和にみる建築・都市・住宅関係雑誌の変遷」（1977年）⁴では、『建築時潮』誌のみが紹介されている。『日本近代建築・土木・都市・住宅雑誌目次総覧』（柏書房、1990～1991年）では、『建築紀元』誌と『建築時潮』誌がともに関係雑誌の一覧表に誌名が記載されたのみで⁵、本文となる目次総覧の掲載対象とはなっていない。

¹ 本章は、拙稿「構成社書房の建築出版活動の概要と史的意義について」（大川三雄、矢代眞己と共著、日本建築学会計画系論文集、541号、pp.221-226、2001年3月）をもとに、その後の知見をくわえて加筆、再構成したものである。

² 神代雄一郎「日本における近代建築思潮の形成」（『建築学大系 6 近代建築史』、p.318、彰国社、1958年）、日本科学史学会編（責任編集：村松貞次郎）『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』、p.483、第一法規出版、1964年

³ 日本建築学会創立70周年記念座談会「建築ジャーナリズムの動きをたどる——関係誌20年の歩み」『建築雑誌』1956年4月号、p.59

⁴ 菊岡俱也、田中良寿「明治・大正・昭和にみる建築・都市・住宅関係雑誌の変遷」（『建築雑誌』1977年11月号、pp.43-59）

⁵ 「戦前期 建築・土木・都市・住宅 関係雑誌一覧（第二期以降）」、『日本近代 建築・土木・都市・住宅 雑誌目次総覧』、第2期第1巻、pp.11-12、菊岡俱也、藤井肇男編、柏書房、1991年

これらによって、構成社書房から刊行された2種の建築誌は、その存在は知られているものの、戦前期の主要な建築誌としては認識されてこなかったといえる。一方で、構成社書房の刊行物が特記された日本近代建築史の通史も認められる。前述の『建築学大系6 近代建築史』である。同書第2部「日本近代建築史」の2章「日本における近代建築思潮の形成」(神代雄一郎著)では、序章でも述べたように、多くの建築誌や建築図書を紹介するなかで、とくに『国際建築』『建築時潮』『建築工芸アイシーオール』『現代建築』の各誌は表紙が挿図として掲載された。『建築時潮』誌のキャプションでは「新興建築家連盟の経過を説明した『建築時潮』の表紙」と説明文が付されている⁶。さらに本文の記述では、日本のモダニズム建築における「合理主義的な歩み」の広がりをしめす事例として、岸田日出刀の写真集『過去の構成』と『現代の構成』、ル・コルビュジエ『今日の装飾芸術』(前川國男訳)やアンドレ・リュルサ『建築』(市浦健訳)の訳出が紹介され、その脚注において「これらの著書は雑誌『建築時潮』を刊行した構成社書房から出版された」と解説を付すことによって出版社の存在にまで読者の注意を促したのである⁷。

構成社書房から『建築』を訳出した市浦健は、前述の日本建築学会創立70周年記念座談会において、つぎのような発言を残している⁸。

ちょっと出ですぐ消えたような、例の岸田先生なんかの「建築紀元」というようなのがありました。これはまあ「国際」に対抗するような内容で、もつと紙が大きくてね、あれは本当に3号で終わったと思いますが、それからいわゆる「新興建築家連盟」あの時あれは1年位続いたかしら……。

「岸田先生」とは岸田日出刀であり、「国際」とは『国際建築』誌を指すことは記すまでもないだろう。こうした神代の記述や市浦の発言からは、構成社書房の活動を実体験として知る関係者やその次世代の人々には、決して無視できない刊行物であり、「例の岸田先生なんかの」でつうじるほどに特定の人物との関係が強く印象づけられていたことも示されている。さらに神代と市浦がともに言及した新興建築家連盟とは、第1章第1節で繰り返しふれたように、分離派建築会や創宇社建築会以来の建築運動体

⁶ 神代、前掲2、p.315

⁷ 神代、前掲2、p.313

⁸ 前掲3「建築ジャーナリズムの動きをたどる——関係誌20年の歩み」、p.64

が 1930 年に大同団結した一大組織であり、結成後間もなく「赤という魔符を張られて壊滅」⁹したことで知られている。わが国戦前期の建築運動にとって、いわば幻のように興亡した最盛期といえる。神代と市浦による記述と発言は、新興建築家連盟と構成社書房の刊行物との関係性が暗に示唆されているとも解釈できよう。

そこで本章では、構成社書房の建築出版活動の特徴について、わが国の近代建築運動の最盛期という背景をふまえながら、関連人物の動向とともに検討をくわえていく。著者としての建築家や建築学者はもちろんのこと、編集者や経営者の存在にも注目しながら、建築出版組織としての性格を分析する。まず、構成社書房の建築出版活動の概略として、組織と刊行物の概要について述べ、雑誌・叢書・単行本という刊行形式によって刊行物が分類・整理できることを指摘する。つぎに、その刊行形式の区分にそって刊行物の性格を分析する。そのうえで、企画・編集体制、刊行物の内容にみられる全体的な傾向、そして関連人物の相互関係を検証することによって、同書房の活動を考察する。

検証にあたっては、構成社書房から刊行されたと考えられる 48 点の刊行物のうち、44 点の建築書すべてについて実見している。また、同書房の活動に関わった主要人物のひとりである藤島亥治郎博士（以下、敬称略）に対して聞き取り調査を実施した¹⁰。

⁹ 『世界建築全集 9 近代』（平凡社、1961）、p.101

¹⁰ 藤島亥治郎に対する聞き取り調査は、1999 年 1 月 11 日に約 3 時間にわたってインタビューを実施した。

第1節 構成社書房の活動概要

4-1-1 組織の概要

構成社書房の建築出版活動は、ル・コルビュジエの著書『Vers une Architecture』（1923年）の邦訳版『建築芸術へ』（宮崎謙三訳）を1929年9月に刊行したことにはじまる¹¹。確認できる最後の刊行物は1933年12月刊行の『金属工芸——研究と制作の実際指導』（松崎福三郎著）だが、同書と1931年6月刊行の雑誌『建築時潮』第12号との間の約2年半で刊行物は認められない。構成社書房の活動が短期間に終わった理由や正確な時期は不明だが、その主要編著者のひとりであった岸田日出刀が1929年に同書房から著書を刊行して「間もなく業を廃めた」¹²と1938年に回顧していることから、その活動は短命であったことが確認できる。

刊行物の奥付の表記によれば、構成社書房は「東京都麹町区飯田町2丁目3番地」に社屋を構え、発行人は猪木卓二とされる¹³。猪木については後述するが、園芸や俳句、科学、児童書などを刊行していた資文堂書店も経営しており、両社の住所は一致する。また、1943年刊行の出版業界名簿には、猪木卓二を代表者とする出版社「資文堂構成社」が「美、趣、芸」を「主要出版部門」として記載されている¹⁴。これらのことから構成社書房は、資文堂書店の建築部門のようなかたちで短期間だけ存在していたものと推定できる。

構成社書房の刊行物としては、現時点で48点が認められる。1933年12月刊行の『金属工芸』をのぞく47点は、1929年9月刊行の『建築芸術へ』から1931年6月刊行の『建築時潮』誌第12号のあいだに刊行されている。したがって同書房の実質的な活動期間は、1930年前後の約2年間に限られていたと考えられる。

¹¹ 社告では「Vers une Architecture」と誤記されている。同書の邦訳版は、戦後に吉阪隆正の訳によって刊行され、そのあとがきに宮崎謙三による先行例について記されている（『建築をめざして』、p.210、鹿島研究所出版会、1976年）。

¹² 岸田日出刀の写真集『過去の構成』（再版）の「自序」（頁数記載なし、相模書房、1938年）。同書の初版は1929年12月20日に構成社書房から刊行された。

¹³ 最初の刊行物である『建築芸術へ』だけは、発行人は荻田卯一という人物が奥付に記載されているが、詳細は不明である。

¹⁴ 共同出版社編集部編・発行『現代出版文化人総覧』、p.124、1943年

4-1-2 刊行物の概要

最初の刊行物となった『建築芸術へ』を刊行した翌月の1929年10月には、雑誌『建築紀元』が創刊された。そして同誌を引き継ぐかたちで1930年7月から刊行された雑誌が『建築時潮』である。いずれも短命に終わったが、構成社書房の活動期間をつうじて月刊の建築誌を刊行していたこととなる。

雑誌と併行し、叢書も継続的に刊行されている。『現代建築大観』は、欧米諸国の同時代的な新しい建築の動向と成果が国別にまとめられた写真集のシリーズである。『現代建築文叢』では、先進国の建築理論の文献集となることが企図された。

そして単行本は12点の刊行が認められる。このうち建築を取り扱っていない刊行物は『金属工芸』を含めて4点が確認できるが¹⁵、これらが幅広いテーマを扱う資文堂書店ではなく構成社書房から刊行された経緯などは現時点で不明である。本研究では建築書を分析対象とすることもあり、この4点については本章では分析対象から除いている。

こうした構成社書房における44点の建築書の動向について、雑誌・叢書・単行本という刊行形式によって分類・整理したのが〔表 4-1〕である。同書房の建築出版活動は、単行本も刊行しているが、雑誌と叢書の形式による刊行が主軸となっていたと考えることができる。

以下、刊行形式の区分にそって各刊行物の特徴について検討をくわえる。

¹⁵ 『高等英文法——史的解説』（大塚高信著、1930年3月）、『現代独逸文学の三段階』（レオポルト・ウインクラー著、1930年11月）、『自然科学小論文集』（林久男著、1930年11月）、『金属工芸——研究と製作の実際指導』（松崎福三郎著、1933年12月）が確認できる。このうち松崎福三郎は鋳金家で、構成社書房の主要著者のデザイン評論家・小池新二とは近しかったものと推測できる。ともに商工省工芸指導所で技師を務めていたが、在籍期間の重なりなどについては現時点で不明である。

第2節 雑誌による新概念の提示

4-2-1 雑誌『建築紀元』と「構成」

「造形芸術雑誌」¹⁶と銘うたれた『建築紀元』[図4-1]は、1929年10月から1930年3月までに合併号ひとつをふくむ合計5号が刊行された月刊誌である。各号30頁、定価50銭で、余白の広い誌面では写真を大きく示すことが重視され、菊倍判（ほぼA4判）の全頁にアート紙が用いられている。

戦前期における建築誌の体裁は、ほとんどが菊判（ほぼA5判）もしくは四六倍判（ほぼB5判）で、本文はザラ紙が主体とされ、アート紙は一部の口絵などに限られていた。『建築紀元』誌の体裁は、異例といえる豪華な仕様であった。実際に創刊号の編集後記には「菊倍版といふ大いさの雑誌は、少なくとも建築関係方面には従来一つもなかつたし、又全部アート紙といふものもない。これらの点で、本誌は一つの新しい試み」¹⁷であることが記されている。

表紙のデザインは、編集委員が交替で手がけ、岸田日出刀（第1年第1号、同年第3号）、堀口捨己（第1年第2号）、今井兼次（第2年第1/2号）、藤島玄治郎（第2年第3号）が担当している。共通する活字体の誌名の字体は、岸田による。

『建築紀元』の発刊趣旨は「創刊の言葉」¹⁸でつぎのようにうたわれている。

新しい時代が明けました。／新しい精神が漲っています。／此の新時代の中
心生命は、合理的のもの、技術的のもの、数学と機械とにあると云へます。／総て
の造形芸術の中で最もよく此の新時代を代表するものは恐らく建築でありませう。
／本誌は此の意味で建築を主題とし、人類文化の全域に亘り、様様な造形の問題を
各方面から取扱ひ、新時代の指導的な使命を果たしたいと希つて居ます。／茲に創
刊に当り諸兄姉の末長き御支援をお願い申し上げます。／昭和四年十月一日

（「／」は改行）

¹⁶ 「造形芸術雑誌」という用語は、創刊号の表紙に明記されたほか、終刊の社告でも記されている（『建築紀元』の改造（『建築紀元』第2年第3号、p.1、1930年3月）。

¹⁷ 岸田日出刀「随想」（『建築紀元』第1年第1号、p.28、1929年10月）。同誌の創刊より2か月早く創刊された日本インターナショナル建築会機関誌『インターナショナル建築』が同様に菊倍判（A4判）だった。

¹⁸ 「創刊の言葉」（『建築紀元』第1年第1号、p.1、1929年10月）

この発刊趣旨文では、合理、技術、数学、機械がキーワードに掲げられ、建築を中心として造形芸術に関する諸分野の総合化を図る目的が明確に示されている。実際の誌面内容も、建築、美術、演劇、工芸と幅広い領域の記事が掲載された¹⁹。記事の総数43本のうち35本は海外の潮流が扱われており、とくにバウハウス関連が15本と全体の約1/3を占める。第1年第2号はバウハウスの特集号で、通常の倍の頁数が組まれた。バウハウスの沿革やカリキュラムの紹介、今井兼次が撮影した写真付きの訪問記、国内外の関連文献一覧やバウハウス叢書の解題など、充実した内容で構成されている。この特集号をはじめとして、ほかの号でも継続的かつ積極的にバウハウスが論じられた。

また、「機構美号」（第2年第1/2号）を中心として、機械美、構成美、機構美といった表現が随所にみられる。モホリ・ナギを思わせる構成主義的な構図をもった岸田日出刀撮影の写真8点が、「鉄の機構美」「三つの構成美」というタイトルとともに掲載され²⁰、その美意識を視覚的に訴えてもいる〔図4-1〕。

これらの美意識はいずれも同質のものであり、構成社書房という出版社名そのものにも示されているように、「構成」という概念に整理・集約できる。それは、後述するように、同書房から刊行された岸田日出刀による写真集『過去の構成』（1929年）と『現代の構成』（1930年）という2冊の単行本の書名および内容に顕著である。「構成」とは、機械や橋梁などの構造物の造型にみられるように、機能性や必然性にもとづいて不可欠となる要素だけが集合、つまり構成されることにより具現化された美学と理解することができる。それは、それまでの歴史主義様式の建築にはみることのできないものであり、また装飾性に立脚することのないもので、建築をふくめた造形上の新しい美学となる工学的審美性の存在と可能性を示唆するものであった。実際に前述の「機構美号」は、「工学的審美性を問題とした興味ある特集」と予告されている²¹。

さらに『建築紀元』誌には、反芸術としての建築像を求める先鋭的な論考もみられる。たとえば谷口吉郎の「建築の出動」では、「現代建築は所謂『芸術』を破棄するもの」で、必要とされるのは「芸術活動よりも政治活動である」と主張されている²²。

¹⁹ 『建築紀元』誌の終刊号にあたる第2年第3号に掲載された総目次では、既往の記事を、建築、美術、演劇、工芸の4つの領域に整理分類している。

²⁰ 『建築紀元』第2年第1/2号、pp.8-9, 13、1930年2月

²¹ 「躍進の準備なれる建築紀元」（『建築紀元』第1年第3号、p.1、1929年12月）

²² 谷口吉郎「建築の出動」（『建築紀元』第1年第3号、p.5、1929年12月）

以上のことから『建築紀元』誌は、バウハウスに範をおきながら海外の同時代的な潮流を研究・紹介しつつ、工学的審美性の本質を「構成」ととらえながら、モダニズム建築の理論的・美学的規範を追求する姿勢を示す雑誌であったといえる。

なお、『建築紀元』誌はその終刊時の社告として、『建築時潮』誌の発刊とともに、「論文集『建築紀元』」²³への衣替えが予告されている。その名前の刊行物は確認できず、叢書『現代建築文叢』が相当すると考えられる。これについては次節で述べる。

4-2-2 雑誌『建築時潮』と「構築」

もう一方の月刊誌『建築時潮』[図 4-2]は、1930年7月から1931年6月にかけて第12号まで刊行された²⁴。合併号を1号含むため、実質的な刊行数は11号である。その体裁は『建築紀元』誌とは対照的に、各号は約50頁、定価30銭で、ザラ紙が主体の菊判（ほぼB5判）の誌面は、口絵をはじめとする多くの図版が掲載されているが、全体としては論述が主体となっている。刊行期間の後半にあたる1931年以降の表紙や目次には、エスペラント語訳も併記された²⁵。

創刊目的をうたった「Eingang」²⁶では、つぎのように高らかに宣言されている。

建築の時代は今や過ぎ去らうとして居る。／我々は構築時代の暁を体験しつつある。／その過渡期に於いて我々は何をしなくてはならないか。それは余りに明瞭である。／我々は、現実の社会に突入して体験した。／社会は未だ未だ建築の幼稚な地下室で遊んで居る。／不合理な計算されない、感覚的な、非物象（ウンザハリヒ）趣味的な、暗い、個人的な、非生物学的、非社会学的な、製図板的建築計画が行はれて居る。／何故か？／社会に責任がある。建築主は真の建築を知らないんだ。そして建築家も悪い。／我々は構築したい。併しそのために非常に大きい摩擦抵抗を感じる。／その減摩剤が此の「建築時潮」として現はれた。／当分此の減摩剤を社会に注入する。／生物学的／社会学的／健康的／ザッハリヒカイト／機能的／材料

²³ 前掲 16 に同じ。

²⁴ 『建築紀元』誌の終刊時の社告では、『建築時潮』誌の創刊は1930年4月とも5月とも記載されている（『建築紀元』第2年第3号、前付社告およびp.28、1930年3月）。

²⁵ 『建築時潮』の編集責任者である山越邦彦の横浜国立大学での教え子・實木富士夫によれば、山越はエスペラント語に造詣が深かったという。

²⁶ 『建築時潮』、第1号、pp.1-2、1930年7月。表題の「Eingang」は「入口」「序奏」などの意のドイツ語。

的／構造的／合目的的／の研究を目指して、可及的新しい報道の順列組合せをしようと思ふ。／何故此の雑誌に「構築」の代わりに「建築」を冠したか。それは我々に大いに考ふる所があつたためである。／何れ「構築」へと棄揚する時代の早く来ることを待望する。 (「／」は改行)

個人性や感性、趣味性などに依拠した主観的な芸術としての建築像に対し、機能性や即物性、合目的性などに根ざした客観的な科学としての建築像へととらえなおすことが企図されている。そして「構築」という新たな建築像の探求が掲げられた。これらは、刊行の目的が「客観的妥当性のある構築」²⁷と「合目的構築」²⁸の確立とされていることから裏づけられる。

各号の記事は基本として、論説、時潮、技術という3つの柱から成り立っている。

論説欄では、おもにモダニズム建築に対する理念的、理論的な論述が掲載されている。なかでも CIAM (近代建築国際会議) に対する強い注目が認められる。1930年に開催された CIAM 第3回会議について、会議の詳細の報告とその際のヴァルター・グロピウスによる講演内容が個別に掲載された²⁹。

時潮欄では、おもに欧米各国の近代建築運動の動向、住宅建設の実践、個別の集合住宅、国際的な会議や展覧会についての記事が掲載されている。とくに「構築的に最も進歩した国」³⁰との理解が誌面上に示されたソヴィエト連邦における建築の動向を報じる記事が繰り返し認められる³¹。また、日本国内の動向については、新興建築家連盟の結成と瓦解について、当時の建築誌のなかで唯一、大きく取り上げていること

²⁷ 「順列組合せ後記」、『建築時潮』、第4号、p.55、1930年10月

²⁸ 「順列組合せ後記」、『建築時潮』、第1号、p.47、1930年7月

²⁹ 「ブラッセル会議」(『建築時潮』第7号、pp.2-13、1931年1月)、ワルター(ママ)・グロピウス「低層・中層構築か高層構築か？」(同第11号、pp.2-27、1931年5月)。なお、『建築時潮』誌では「CIAM」を「国際構築会議」と訳していることを指摘しておく。これは「CIAM」のドイツ語正式名称「Internationale Kongresse fuer Neues Bauen」からの邦訳とみられる。このことは「Bauen」という概念が「構築」としてのモダニズム建築像に相当するものと認識されていたことを明らかにする。

³⁰ 「レポルタージュ後記」(『建築時潮』第10号、p.56、1931年4月)

³¹ 「ソヴィエト連邦最近の構築課題」(『建築時潮』、第1号、pp.30-31、1930年7月)、「ロシア建築の特性」(同第7号、pp.21-25、1931年1月)、「住宅コムニューンに於けるリッツキーの移動壁」(同第7号、pp.26-27)、「サヴェート治下の建築家・技術家」(同第8号、p.23、1931年2月)、「モスコウのエルンスト・マイ」(同第9号、pp.21-25、1931年3月)、「レニンの新廟」(同第10号、p.25、1931年4月)、「サヴェートに於ける住宅建築の状況」(同第11号、pp.28-34、1931年5月)、「新ロシアの都市計画」(同第12号、pp.18-34、1931年6月)

も特記できる³²。

技術欄では、ガラス、コンクリート、照明、音響技術など、新しい技術の実務的な運用報告と、その一般化を図ろうとする記事が掲載された。とくにその姿勢を明確としているのが、建築材料の材料的性格を客観的に比較検討するためにより便利となる「鉄骨構造用の壁材と遮断材の表」³³や、荷重条件によって柱の断面寸法を即座に仮定できる手段としての「P及びMのかかる鉄筋コンクリート柱の断面表」³⁴の掲載である。

以上のことから、『建築時潮』誌は、科学を基盤とする「構築」という概念を規範にすえて、世界的に同一的な方向性に進んでいることを裏づけるものとして同時代の欧米各国の近代建築運動の動向を紹介しつつ³⁵、その帰結ともなる「インターナショナル」な建築像の普及・確立をめざして、啓蒙活動を行った雑誌であったといえる。エスペラント語の使用も同様の趣旨にもとづくと考えられる。したがって『建築時潮』誌は、「構築」という概念を鍵とするモダニズムの建築像の推進を担う存在だったといえる。

³² 「新興建築家連盟成る！」(『建築時潮』第4号、pp.44-13、1930年10月)、「新興建築家連盟分散さる」(同第5/6号、pp.33-36、1930年12月)。

³³ 『建築時潮』第2号、pp.39-49、1930年8月

³⁴ 『建築時潮』第4号、pp.39-43、1930年10月、同第5/6号、pp.42-50、1930年12月、同第10号、pp.48-52、1931年4月

³⁵ 記事の収集の姿勢として「最も構築的に発達した方面からの記事が多いであろう」と記述されている(「順列組合せ後記」、『建築時潮』、第1号、p.47、1930年7月)。

第3節 叢書と単行本による海外情報

4-3-1 写真集『現代建築大観』

「現代建築の世界的鳥瞰図集」と銘うたれた国別の写真集『現代建築大観』[図 4-3]は、1929年10月から1931年3月にかけてほぼ月刊で17集が刊行された。各集は14～15枚のコロタイプ印刷によるプレートが、別冊子の解説を付されて帙に収められている。[表 4-1]にも列記したように、欧米17か国のモダニズム建築の成果276作品が、合計240枚のプレートによって網羅的に紹介された。構成社書房による社告には「全18集」の刊行計画であることが繰り返し掲載され、第18集は「日本編」とされたが、刊行された形跡は確認できない³⁶。

別冊子の解説を分担執筆した編者は、今井兼次、堀口捨己、藤島亥治郎、岸田日出刀であり³⁷、『建築紀元』誌と同様の陣容であった。その判型は菊四倍判（ほぼA3判）というきわめて異例の大判であり、プレート1枚につき写真1点の掲載が大半となっている。こうした体裁に関する刊行趣旨は、いくつかの社告から確認できる。

これ程組織立つた現代建築の図集は他にありません。³⁸

諸方からの御希望に基づき全十八集の感性と共に全部を収める気持のよい帙を作製しこれを予約者全部に漏れなく無代で配布することになりました。／完成の上は永久に諸兄の書棚を飾ることでありませう。³⁹

編集者は豊富な材料を駆使して最も代表的な且最も効果的な画面を選定し、僅か数葉の内に作品の特性を要領よく表現させるやうに苦心致します。／斯うして本大観には厳密な編集によつて殆ど一葉の無駄もない必要にして且充分な真のエッセンスが盛られるのであります。⁴⁰ (「／」は改行を示す)

³⁶ 『建築紀元』誌や『建築時潮』誌の社告に掲載され、なかでも『建築時潮』第12号（1931年6月）の後付社告では『現代建築大観』の全18集の刊行が終了されたように記されてもいるが、第18集の刊は確認できていない。

³⁷ 編者の記載順序は、巻によっては藤島、今井、堀口、岸田の順となる。解説文の執筆配分との関係性は、現時点で見出せない。

³⁸ 構成社書房「新刊書御案内」、p.8。刊行年は記載されていないが、筆者が確認した日本建築学会図書館蔵書では、1930年1月刊行の『現代建築大観 第7集 仏蘭西編 其一』に折り込まれ、表紙の右上隅には「建築紀元臨時増刊」と小さく付記されている。

³⁹ 折込社告「第一回配本に際して」（『現代建築大観 第2集 亜米利加編 其一』、1929年10月）

⁴⁰ 折込社告（『現代建築大観 第12集 スカンディナヴィア編 其一』、1929年12月）

「現代建築」を国別に「組織立」てて図集とし、「永久」に読者の「書棚を飾る」ことがうたわれた。欧米の近代建築運動の潮流がほぼ収斂されてきた1930年前後にあつて、モダニズム建築の趨勢が世界的に「永久」のものとなったことを異例の大判で示そうとしたものと考えられる。最終巻として計画された「日本編」の存在は、その世界的な潮流に自国が合流していることを伝えようとしていたといえる。

また、「編集者」が「最も代表的な且最も効果的な画面を選定し」て「厳密な編集によつて殆ど一葉の無駄もない必要にして且充分な真のエッセンスが盛られる」との自負は、編者である建築家たちが建築写真の視覚上の編集作業を意識的に行っていたことが示されている。編者のひとり堀口は、写真の選定とトリミングに徹底してこだわったことは第1章第6節で述べたとおりであり、岸田もその「カメラ アイによる日本建築の新しい解釈」⁴¹を自らの撮影写真によって視覚的に提示した『過去の構成』などの写真集を刊行するほど建築写真の編集には長けていた。そのうえで採られた異例の判型は、設計資料としての機能を超えているといえるのであり、建築写真を大画面で示すことで新しい建築の美とその現実性を読者へ視覚的に強く伝えようとしたとも考えられる。あるいは、図集という書物の枠組みを超えて、壁などに掲示して鑑賞することももくろまれていたと考えるのが妥当といえよう⁴²。

とくに堀口捨己は、それまでに作品集などの刊行に豊富な経験を蓄積していたが、「建築設計も、研究も、著作も、本の装幀も、『表現』であるという点でつながっていた」⁴³と藤岡洋保が指摘したように、異例の大判によるモダニズム建築の写真全集という出版企画そのものが、建築に関わる新たな表現だったとも考えられる。

なお、『現代建築大観』の写真は、戦後の『近代建築史図集』（日本建築学会編、彰国社、初版1954年）への転載が認められ、同図集の新訂版（1976年）では7点の写真が『現代建築大観』からの複写であることが記されている⁴⁴。

⁴¹ 『建築紀元』第2年第3号、後付社告、1930年3月

⁴² 展覧会「岡崎乾二郎の認識 抽象の力—現実（concrete）展開する、抽象芸術の系譜」（豊田市美術館、2017年4月22日～6月11日）では、『現代建築大観』から約60枚のプレートが額装されて壁面に掲示された。

⁴³ 藤岡洋保『表現者・堀口捨己——総合芸術の探求』（p.iv、中央公論美術出版社、2009年）

⁴⁴ 日本建築学会編『近代建築史図集』（新訂版、p.165、彰国社、1976年、筆者は1993年の第20刷で確認）。ここでは『現代建築大観』の発行元が「洪洋社」と誤記されている。

4-3-2 叢書『現代建築文叢』

もうひとつの叢書は、「理論を中心とし現代建築の理解に資する重要文献を網羅」⁴⁵することをめざした『現代建築文叢』であった。結果的には第1編『建築』（A.リュルサ著、市浦健訳、1930年6月）と第5編『今日の装飾芸術』（ル・コルビュジェ著、前川國男訳、1930年10月）の2編のみを刊行して終わったとみられる。

しかし、社告によれば（著者名は原文ママ）⁴⁶、『大都市建築』（ヒルベルザイマア著、谷口吉郎訳）、『アメリカ建築の研究』（マムフォード著、小池新二訳）、『フランス建築』（ギーヂオン著、香野雄吉訳）、あるいは『新興ロシヤの建築』（今井兼次著）などの刊行も予定されていた。世界的な最新の建築思想を日本に紹介していくことが企図されていたと考えられる。

さらに、つぎのような刊行計画も社告で示されていた⁴⁷。『コンクリート住宅図集』（堀口捨己編）、『朝鮮建築図集』（全6集、藤島亥治郎）、『競技場の建築と設備』（牧野正己著）、『小病院と医院建築』（宮崎謙三著）、『日本建築史』（藤島亥治郎著）、『西洋建築史』（藤島亥治郎著）、『造型工作概論』（小池新二著）といったように、欧米の動向に限らないテーマが並んでいる。それは、構成社書房の主要著者を中心とした研究・設計活動の表れともいえる。また、これらのうち単行本に切り替えて刊行されたのが、藤島亥治郎著『日本建築史』（1930年11月）と堀口捨己著『一混凝土住宅図集』（1930年12月）と考えられる。

前節で触れたように、『建築紀元』誌はその終刊時の社告において論文集への衣替えが予告されている⁴⁸。

昭和四年十月創刊以来五冊を刊行した造形芸術雑誌「建築紀元」は次号から論文集の形で単行本として提供することとなりました。従つて定期刊行物としての「建築紀元」は本号をもつて終りと致します。／右の如き改造を断行する理由は月刊雑誌として進む時はジャアナリズムの支配を受けること多く本誌発刊の根本目的を阻害され易いからであります。／論文集「建築紀元」は建築を中心とする造形芸術の全般に亘り研究・批評・紹介・翻訳等を蒐録し近く新装されて諸君に見えます。

⁴⁵ 『建築時潮』第1号、裏表紙の社告など、1930年7月

⁴⁶ 『建築』と『今日の装飾芸術』の後付社告による。

⁴⁷ 前掲46に同じ。

⁴⁸ 前掲16に同じ。

／これと同時に日進月歩の建築界の趨勢を迅速に報導^マする純然たる建築雑誌が別項の如く創刊されます。名づけて「建築時潮」と云ひます。幸に御愛読あらんことを切望致します。／昭和五年三月一日／「建築紀元」編集部

(／は改行)

『建築紀元』誌は編著者たちの研究活動の成果としての論文発表が第一義とされ、『建築時潮』誌は最新動向の報道が重視されていたものと認められる。『建築紀元』誌は1930年3月に終刊となり、その名を冠した論文集が刊行された形跡は確認できない。叢書『現代建築文叢』の刊行計画には、欧米の新しい建築理論書の訳出を含めた編著者たちによる最先端の建築設計・研究の成果を示す発表の場として設定されていたことが示されており、その第1編が1930年6月に刊行された。『建築紀元』誌の論文集の転換は、叢書『現代建築文叢』として具現化されたものと考えられる。

なお、このほかに、ふたつの叢書の企画と刊行を指摘できる。『建築細部集』は第1集「グリル」のみ刊行が確認できるが、以降の続刊の形跡はみあたらない。『建築工芸集成』は1巻めとして「装飾彫刻 其一」の刊行予告が『現代建築大観』の折込広告にみられるが、刊行の実施は現時点で確認できない。

4-3-3 単行本の役割

前述の『建築芸術へ』のほかに単行本による邦訳書としては、CIAM第2回会議(1929年)の議事録を柘植芳男が訳した『生活最小限ノ住宅』(1930年5月)が挙げられる。前者は、モダニズム建築の旗手であるル・コルビュジエの建築観を知るために長らく全訳が待望されていたものである。後者は、国際的に課題となっていた住宅問題解消が議論された議事録について、会議の翌年という迅速な訳出がなされたものであった。

岸田日出刀による写真集『過去の構成』(1929年12月)[図4-4]と『現代の構成』(1930年4月)は、いずれも「構成」という新しい観点から、建築のありかたや審美性を示そうとするものである。岸田が撮影した写真によって、前者では日本の古建築を、後者では工学的な構造物などのアノニマスな造形物を取り上げている。『過去の構成』の刊行趣旨はつぎのように示されている⁴⁹。

⁴⁹ 『建築紀元』誌の後付社告による(第1年第3号、1929年12月、第2年第3号、1930年3月)

本書はカメラ アイによる日本建築の新しい解釈である。文献や考証によらない最も具体的な観察である。ザッハリヒカイトの強調せらるゝ現代にあつて我国古来の造形芸術は如何に理解されるべきであろうか。本書第一巻は実にこれ等過去の構成に投げられた最も新しい照明灯である。

ここに、わが国の伝統的な建築と現代的な構造物とが「構成」という視座のもとに架橋されるのである。そのためとくに『過去の構成』は、建築における伝統性という要素が重要視される 1930 年代後半以降において、丹下健三などの若い建築家たちに多大な影響を及ぼすこととなった⁵⁰。そして、2 冊の書名に「構成」が用いられているように、『過去の構成』は「カメラアイによつて展開された日本の構成芸術史」⁵¹ともうたわれており、『建築紀元』誌と同様な美学的規範を追求する姿勢が認められる。

堀口捨己著『一混凝土住宅図集』（1930 年 12 月）〔図 4-5〕は、著者が設計した吉川邸を 1 冊の作品集としてまとめたモノグラフである。同書では、日本におけるモダニズム建築のありかたについての堀口の言説も収録され、同一の論文が同時期に刊行された『建築時潮』誌にも掲載された⁵²。

藤島亥治郎著『日本建築史』（1930 年 11 月）は、古代から 1920 年代にいたるまでの日本建築の軌跡について、各時代の世界的な文化交流の産物という視座のもと、移入・同化という過程の繰り返しとして描いたものである。そして、その流れの延長線上に位置する必然的な動きとして、モダニズム建築が解釈されている。

堀口と藤島による 2 冊の単行本は、前節で述べたように、当初は『現代建築文叢』のシリーズとして刊行が予定されていた形跡も認められる⁵³。構成社書房の単行本による建築書は、雑誌や叢書をつうじての建築出版活動を補完するものとして企画・刊行されていたと考えられる。

⁵⁰ 岸田日出刀の追悼座談会において、市浦健、佐藤武夫、吉武泰水、丹下健三らが『過去の構成』に対する感銘を語っており、堀口捨己もその啓発を吐露している（岸田日出刀先生記念出版事業会『岸田日出刀』、上巻、pp.205-206、相模書房、1972 年）。

⁵¹ 前掲 38、構成社書房「新刊書御案内」、p.4

⁵² 堀口捨己「建築材料」（『建築時潮』第 5/6 号、pp.4-7、1930 年 12 月）、堀口「材料と様式」（同第 8 号、pp.15-20、1931 年 2 月）

⁵³ 『現代建築文叢』の第 1 編『建築』（A.リュルサ著、市浦健訳、1930 年 6 月）と第 5 編『今日の装飾芸術』（ル・コルビュジェ著、前川國男訳、1930 年 10 月）の後付社告による。

第4節 出版活動の特徴

4-4-1 企画・編集の体制

『建築紀元』誌の奥付には、編集責任として小池新二の名が記されている。ほかに編集委員として、堀口捨己、岸田日出刀、藤島亥治郎、今井兼次、板垣鷹穂、仲田定之助、坂倉準三、吉田兼吉が名を連ねていた⁵⁴。同誌の表紙のデザインは、前述したように堀口、岸田、藤島、今井が持ち回りで担当していることから、編集委員のなかでもこの4名と小池が中心人物であったことが推定できる。

『建築時潮』誌の奥付には、編集者として山越邦彦の名だけが記載されている。しかし、1929年暮れに「建築に興味を持った同志が夜晩くまで日本の建築に談り」合い、「建築の理論が甚だ振はないこと」で意見が一致した結果として創刊された経緯や⁵⁵、「各自皆他に仕事をもっている連中ばかりなので校正その他の事務がビジネスライクにいかない」⁵⁶との記載があるため、複数の建築家が編集作業に関わっていたことが認められる。記事は一般に無署名であるが、編集後記に「同人柘植芳男君」⁵⁷と記載されているため、『生活最小限ノ住宅』を構成社書房から訳出した柘植が『建築時潮』誌の編集に関わっていたものとみられる。また、記名による論述や翻訳記事から、堀口と藤島の関与も推測できる⁵⁸。

叢書と単行本における訳者は、前述のように柘植芳男や前川國男、市浦健などであり、1920年後半に東京帝国大学建築学科を卒業した共通点を見いだせる。前川、市浦と岸田の交友関係はよく知られており、柘植も当時東大営繕課に勤めていたことから、内田祥三のもとで岸田との関係があったと考えられる。そして、柘植の証言からは、訳出すべき原書の選定にあたっては、小池新二が中心的な役割を担っていたことが認められる⁵⁹。

藤島の回想によれば、『建築紀元』誌の編集作業についても、そのほとんどを小池が

⁵⁴ 『建築紀元』第1巻第3号、前付頁、1929年12月。ただし、当該頁が欠如した合本版の実在も確認できる。

⁵⁵ 「順列組合せ後記」、『建築時潮』、第1号、p.47、1930年7月

⁵⁶ 「順列組合せ後記」、『建築時潮』、第7号、p.53、1931年1月

⁵⁷ 「レポルタージュ後記」、『建築時潮』第9号、p.55、1931年3月

⁵⁸ 堀口捨己「建築材料」(『建築時潮』第5/6号、pp.4-7、1930年12月)、堀口「材料と様式」(同第8号、pp.15-20、1931年2月)、藤島亥治郎訳「イタリアの新興建築」(同第12号、pp.29-34)

⁵⁹ 柘植芳男「ああ、『小池新二』君」(「一―二三小池新二フォーラム横浜／あれから十年・小池新二先生を偲ぶ会」開催記念出版、『甦れ、混沌！ 甦れ、小池ロマン！』、pp.118-120、同開催事務局刊)

担っており、編集委員の会議は東京駅周辺などで行い、メンバーとは公私にわたってよく顔を合わせていたという。また、企画内容については委員のあいだで決定しており、出版社側から注文をつけられた記憶はないとも語っている。

これらのことから構成社書房の刊行物は、編集や記事の内容だけでなく、著者の選定をふくめた企画段階から、専門家による責任編集体制が一貫して存在していたことが指摘できる。

4-4-2 新思潮に対する姿勢

構成社書房の建築出版活動は、欧米先進国から新たな建築理念の導入を図るものが多くを占める。新思潮を邦訳して紹介する動きは、たとえば『国際建築』誌などの国内のほかの建築誌でもみられるが、それらは基本的に抄訳や部分訳となることが大勢を占めるなかで、構成社書房では単行本というかたちで全訳を刊行していった点に明瞭な特徴がある。

前節で述べたように、欧米の近代建築運動の潮流がほぼ収斂されてきた1930年前後において、写真集のシリーズ『現代建築大観』を刊行し、モダニズム建築の趨勢が世界的に「永久」⁶⁰のものとなったことを異例の大判で示そうとしたと考えられる。国別に「組織立」⁶¹てて網羅的に紹介することで、モダニズム建築の普及が企図されていたと考えられる。

一方でふたつの建築誌においては、「構成」と「構築」という異なる視点から、モダニズム建築に対する理解が提示されている。日本におけるモダニズム建築のさらなる発展にむけての展開の契機となるべき概念が示されているのである。そして、「構成」という概念においては、日本の伝統的建築とモダニズム建築とを同一平面で解釈できる回路を準備したといえる。また、「構築」という概念では、科学技術を必然とする認識を示すことで、たとえば俊鎮論争に代表されるそれまでの美用二元論的な建築解釈に終止符を打たせることになったともいえる。合目的性などを論拠として建築像をとらえなおそうと試みる前衛運動が、日本にも波及していたことを示す貴重な足跡ともなっている。

以上のことから、構成社書房の建築出版活動は、雑誌・叢書・単行本という3つの

⁶⁰ 折込社告「第一回配本に際して」（『現代建築大観 第2集 亜米利加編 其一』、1929年10月）

⁶¹ 前掲38、構成社書房「新刊書御案内」、p.8

刊行形式に区分けされて行われていたが、3者は実質的には有機的に関連づけられており、その全体として近代建築運動の紹介、普及、そして展開が目されていたことが認められる。

4-4-3 編著者の人物像

『建築紀元』誌の編集責任者を務めた小池新二⁶²は、1927年に東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業し、1930年代以降、産業立国をうたうドイツの工芸政策を規範として各雑誌や商工省で活発な言論活動を展開した。建築と工芸の評論家としてパイプ役を果たすだけでなく、デザインと国家の関わりかたを示して脚光を浴びた。

『建築時潮』誌の編集責任者である山越邦彦は、1925年に東京帝国大学建築学科を卒業したのち、戸田組（現・戸田建設）に入社した。山越は、戸田組に勤務しながら編集作業などにあたっていたことである⁶³。前述のように同誌は、新興建築家連盟の結成と解体についての報道を展開しているが、同連盟の結成に際して山越は準備メンバーのひとりとなっていた。

新興建築家連盟の理事には岸田日出刀が就任し、今井兼次、谷口吉郎、前川國男、市浦健らが会員に名を連ねている。また、1936年に堀口捨己と岸田を中心として結成された日本工作文化連盟は、小池の唱える産業立国のヴィジョンを旗印にすえて設立された組織であり、堀口と岸田が交替で理事長を務め、小池も理事として中心的存在のひとりとなっている。これらの顔ぶれは、いずれも何らかのかたちで構成社書房の出版活動に関わりをもっていたことを指摘しておきたい。さらに、本章の序で記したように、「新興建築家連盟の経過を説明した『建築時潮』の表紙」⁶⁴との神代雄一郎による言及のしかたや、「『建築紀元』」は「本当に3号で終つたと思いますが、それからいわゆる「新興建築家連盟」あの時あれば1年位続いたかしら……」⁶⁵と述べた市浦健の発言からは、『建築時潮』誌が新興建築家連盟と深く関係していたことへの共通認識が示されているといえよう。

⁶² 建築・デザイン評論家として、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学、多摩美術大学）や建築博物館の創設を提唱。戦前期の評論集に『汎美計画』（アトリエ社、1943年）。戦後は千葉大学教授（1950～1967年）として工業意匠学科を創設、九州芸術工科大学初代学長（1968～1974年）を務め、工業デザイン教育のパイオニアとなった。出版業績にて日本建築学会賞（1954年）。

⁶³ 1932年の雑誌『建築知識』創刊広告には、「戸田組技師長」の肩書にて同誌の賛助会員に名を連ねている。

⁶⁴ 神代、前掲2、p.315

⁶⁵ 前掲7に同じ。

構成社書房の建築出版活動に関わった専門家の経歴に注目すると、谷口、前川、市浦が東大建築の同期（1928年卒）であることはいうまでもないが、小池と坂倉、山越と柘植が大学で、小池、山越、柘植、宮崎謙三は東京府立一中での同窓だったことが見いだせる。構成社書房の建築出版活動に集った専門家たちは、同書房で共同する以前に知己であった近しい関係のつながりから成り立っており、新興建築家連盟と日本工作文化連盟という戦前期の組織的建築運動の双方においても中心的な役割を果たしたのである。

4-4-4 読者対象の傾向

構成社書房で想定されていた読者対象は、前章までみてきた建築書院や洪洋社のように明記されることは少なかった。構成社書房のおもな刊行物の刊行趣旨から読み取りを試みる。

『建築時潮』誌の創刊主旨「Eingang」⁶⁶では、新たな「構築時代」がつくられようとするなかで発する「非常に大きい摩擦抵抗」に対して「減摩剤を社会に注入」するのが同誌であり、建築の時代から『構築』へと棄揚する時代の早く来ることを待望すると述べられた。『建築紀元』誌からの移行時には、『建築時潮』誌は「純然たる建築雑誌」⁶⁷と明記され、実際の記事も「P及びMのかかる鉄筋コンクリート柱の断面表」⁶⁸といった技術的な内容も多いことから、読者対象は建築の専門家であり、「構築時代」へと建築界を導こうとする姿勢が認められる。

『建築紀元』誌の「創刊の言葉」⁶⁹では、「建築を主題とし、人類文化の全域に亘り、様々な造形の問題を各方面から取扱い、新時代の指導的な使命を果たしたいと希つて居ます」と述べられた。同じく創刊号の巻末では「造形芸術全般に涉り、新時代の第一線に立つて活動するをその主旨とし使命とする」⁷⁰ことが編集委員の岸田日出刀によって記された。同誌では建築分野以外の著者が継続的に登場しており、吉田謙吉（第1年第1号、同第3号）、中原実（第1年第2号）、北園克衛（第2年第1・2号、同第

⁶⁶ 『建築時潮』、第1号、pp.1-2、1930年7月

⁶⁷ 前掲16に同じ。

⁶⁸ 『建築時潮』第4号、pp.39-43、1930年10月、同第5/6号、pp.42-50、1930年12月、同第10号、pp.48-52、1931年4月

⁶⁹ 前掲18に同じ。

⁷⁰ 岸田日出刀「随想」（『建築紀元』第1年第1号、p.28、1929年10月）

3号)などが寄稿した。建築を中心とした造形芸術全般の文化に関わる読者が対象と設定されていたと考えられ、その新しい時代を主導しようとする姿勢が示されている。

叢書や単行本では、前述のように、西欧モダニズムにおける最新の建築理論書が全訳されていた。ル・コルビュジエの著作の邦訳『建築芸術へ』の社告では「実に此の書は建築芸術を通じて現代生活を指導する新精神を説けるもの——建築家は勿論一般文化人の必読を要する書である」⁷¹と案内されている。当時わが国ではル・コルビュジエの名は建築界以外の文化人にも認知されていたことが知られており⁷²、その「建築観をまとめた」⁷³本書の全訳は、折からの建築界のル・コルビュジエブームをさらに後押しし、拡張する一助になったと考えられる。

岸田日出刀の『過去の構成』が丹下健三などの若い建築家たちに大きな影響を与えたことは前述したが⁷⁴、同書では「過去の日本の造形芸術全般に涉り、現代人の構成意識ともいふべき観点から展望」したのは「好事家の骨董いぢりではない」とし、「過去の日本の建築」に『『モダン』の極致ともいふべきものを見出して今更に驚愕し、胸の高鳴る感激を覚えるのは決して私だけのことでないと思ふ』と読者に共感を呼びかけている。その読者対象の想定は、「造形芸術全般」に関わる「現代人の構成意識」に向けられていたと読み取ることができ、『建築紀元』誌と同様の姿勢が認められる。

構成社書房では、ふたつの建築誌『建築紀元』と『建築時潮』が、いずれも編著者たちによる最新の研究成果を読者に伝えながら、「構成」と「構築」という対照的な概念を提示したように、読者対象の想定の傾向としてはふたつの方向が見いだせる。建築界に向けた技術的、理論的な観点、もう一方は建築を中心として造形芸術全般に関わる「文化人」へ向けた視覚的、感覚的な観点といえる。それは、モダニズム建築、あるいは建築そのものが内包する二面性を示しているとも考えられる。

4-4-5 経営者の足跡

前述のように、構成社書房の発行人である猪木卓二は、園芸や俳句、科学、児童などの図書を広く刊行していた資文堂書店の経営者であった。資文堂書店における建築分野の刊行物としては『家を建てる人の為に』（山田醇著、1928年）や『和洋風庭園

⁷¹ 前掲 38、構成社書房「新刊書御案内」、p.7

⁷² 林美佐編『コレクション・モダン都市文化 第43巻 ル・コルビュジエ』、p.646、和田博文監修、2009年

⁷³ 前掲 38、構成社書房「新刊書御案内」、p.7

⁷⁴ 前掲 50に同じ。

の作り方』(上原敬二著、1929年)などが確認できる。これらは構成社書房の建築書と比べると、建築の専門家向けではなく、建築の施主や一般の趣味人が対象とされていたといえる。

猪木卓二の人物像は不明な点が少なくないが、一定額以上の納税者を記載した『日本紳士録』(交詢社)でたどると、1922年版では「日本食品(株)常務、印刷業」、1925年版は「京華堂印刷業」、1927年版は「京華社印刷業」、1930年版では「出版業」と紹介されている。日本食品という企業は不明だが、京華社とは構成社書房と資文堂書店の刊行物の奥付に記載された印刷所である。また、前述したように、1943年刊行の『現代出版文化人総覧』には、猪木卓二を代表者とする資文堂構成社が「美、趣、芸」を「主要出版部門」として記載された⁷⁵。

これらのことにより猪木卓二は、印刷所と出版社などの経営者であり、一般向けの建築書も一部で扱う資文堂書店を運営しながらも、構成社書房という別会社を立ち上げて特定の建築家たちの編集・出版活動を印刷・出版人として支えていたものと考えられる。

⁷⁵ 共同出版社編集部編・発行『現代出版文化人総覧』、p.124、1943年

小結 構成社書房の性格とその意義

1 建築出版組織としての性格

構成社書房の建築出版活動について、組織の性格や刊行物の特徴を検討しながら考察した結果、以下のことが明らかとなった。

同書房の刊行物は、雑誌・叢書・単行本という3つの刊行形式から成り立っており、とくに雑誌と叢書の刊行が主軸とされていた。それらの刊行物は、堀口捨己や岸田日出刀、小池新二、山越邦彦といった戦前期の近代建築運動の枢要な人物たちの手で企画・編集されていた。全体をつうじてみると、各刊行物は有機的に関連づけられていたことが認められる。欧米の近代建築運動の潮流がほぼ収斂されてきた1930年前後において、叢書では先進各国の最新動向を網羅的に紹介し、新たな審美性にもとづく鑑賞対象として図示することでその普及の方向性が、雑誌では「構成」と「構築」という新たな概念を提示することで、日本におけるモダニズム建築の展開の可能性が示されていた。また単行本では、こうした活動を補足する作業が行われていた。

雑誌・叢書・単行本の具体的な連携としては、『建築紀元』誌が時事情報の報道よりも編著者たちによる研究活動が重視されることで、叢書『現代建築文叢』へと刊行形式が転換され、海外の最新文献の邦訳や国内における設計・研究活動の成果を発表し、啓蒙する場となることが計画されていた。そして、結果的には国内活動の成果は、単行本のかたちで刊行された。それらの刊行物の多くは、菊四倍判のプレート図集『現代建築大観』に象徴されるように、編著者である建築家たちの手によって大判の建築書が企画・デザインされていた。仕様が簡素なのは『建築時潮』誌のみであった。

こうした刊行物の体裁に示されているように、構成社書房の刊行物にはふたつの方向性が認められた。ひとつは、建築界に向けた技術的、理論的な観点による最新情報の報道と「構築」という概念の普及活動である。もう一方では、建築を中心とした「造形芸術全般」の文化に対して「構成」の美が視覚的、感覚的に提示され、編著者の理想とする新たな建築像が書物として表現されていた。後者は、雑誌『建築紀元』、叢書『現代建築大観』、単行本『過去の構成』にみられるように、編著者である建築家たちによって建築写真が意識的に編集され、ときに建築界のみならず広く文化人を意識しながら、「構成芸術」による新たな審美性を示すことが構成社書房の建築出版活動の主軸となっていた。

出版社から刊行される市販の建築誌として、「構成」と「構築」という編著者の主張する概念が全面に押し出されていたことは、第1章でみてきた他社の建築誌の動向と比べると、異例の存在であったことも指摘できる。大判の体裁とともに、理解ある社主の支援によってはじめて実現可能となる性格の活動であったことが認められる。

つまり、構成社書房の建築出版活動は、理念のうえでも、実質的な活動の形式においても、嚆矢的存在として運動的な性格と成果を内在させていたと評価できる。

2 建築出版活動としての史的意義

分離派建築会による建築出版活動の舞台となった出版組織については、第1章第6節で述べたように、前半が岩波書店、後半は洪洋社と移行し、その間に堀口捨己のモノグラフが一時的に構成社書房から刊行されていたことになる。3社にわたった堀口のモノグラフの装幀がいずれも著者自装によって均等割りの書名でデザインされていたように、特定の著者による建築出版活動という観点からは複数の出版組織にわたる共通点を見いだすことができる。

第1章で描出した日本近代建築出版活動の概観を顧みると、構成社書房の主要な編著者のうち、とくに建築出版活動が経験豊富で、複数の建築出版組織で活躍した人物として挙げられるのが堀口捨己と岸田日出刀となる。ふたりのいずれかが主導した建築出版活動をたどると、岩波書店と洪洋社における分離派建築会と堀口の一連の作品集（1920～1928年）、両名が力を注いだ構成社書房における雑誌『建築紀元』と叢書『現代建築大観』（1929～1931年）、そして岸田が主力となった相模書房の雑誌『東洋建築』（1937～1938年）と叢書『建築新書』（1941～1949年）、両名が交替で理事長を務めた日本工作文化連盟の雑誌『現代建築』（1939～1940年）へとつながる系譜が描き出せる。

これらのなかで『建築新書』以外に共通するのは、大判の誌面に写真を大きく示し、論文を掲げる構成である。いずれも他社の市販建築誌や建築運動体の機関誌とは一線を画した体裁となっており、書物そのものが建築家たちの作品といえる性質を有している。また、日本の伝統的建築の紹介を主体とした『東洋建築』誌に対し、岸田の写真集『過去の構成』と同様の姿勢、つまり新たな伝統解釈による建築美を伝えようとした姿勢に注目するならば、上記の系譜は建築家がモダニズムの審美性を書物で表現していった建築出版活動という共通項でとらえることも可能となる。

また、構成社書房の叢書『現代建築文叢』の出版企画は小池新二によって主導されたが、同叢書と大判の『建築紀元』誌、そして『現代建築大観』による刊行物の構成は、読み物の叢書、大判の雑誌、写真集という刊行物の性格で整理でき、相模書房の『建築新書』や『東洋建築』誌、そして『過去の構成』（再版）や『熱河遺蹟』という構成は同様の性質を示している。つまり、モダニズム建築の審美性を探求した構成社書房の刊行物が、戦時下にあつて「東洋建築」の伝統とその審美性を探求する相模書房の刊行物へと転換されたともいえる。

これらによって、わが国のモダニズムに関する建築書の系譜には、市販建築誌と運動体機関誌による雑誌形式の報道に対して、建築家の作品と研究成果としての書物による新たな建築美の視覚的な表現を第一義とした建築出版活動の系譜が指摘できるのである。それは、分離派建築会が出版組織や寄稿者のステータスに留意していたように、作品集のごとき書物の表現によって、建築界におけるモダニズム建築のステータスが示されようとしていたとも考えられる。

以上のことから構成社書房は、戦前期の近代建築運動の最盛期にあつて「構成芸術」という審美性を軸としながら、建築家による建築写真の視覚的な編集行為によって建築像が表現された建築出版活動の最盛期を示すものと評価できる。それは、わが国のモダニズム導入をめぐる建築出版活動が、ジャーナリスティックな言論活動だけでなく、視覚的な図版表現としても展開されていった実像を示している。戦前期のモダニズム建築は、建設活動の実践において少数派にとどまっていたが、大判の建築書によって欧米各国の実作が視覚的に整理されることで世界の趨勢が既成事実のものとして日本の建築界に伝播されていった。実作の代替としての建築出版活動によってモダニズム建築のステータスが醸成されることによって、戦後の建設活動における共通意識を質実ともに準備したのである。

結章 近代日本の建築出版活動の特質とその史的意義

1 建築出版活動の史的展開とその特質

本論文は、近代日本における建築出版活動の史的展開について、従来の建築誌中心の論考から脱却し、叢書や単行本による建築図書を包含した全体像を明らかにするために、建築出版組織の枠組みによる評価軸を設定したうえで、著者や編集者・出版人という情報供給側の活動に着目しながら、以下の4つの局面から考察してきた。ひとつめがその全体像の概括であり、ふたつめ以降が個別の建築出版組織についての分析となる。

第一に、近代日本の建築出版活動の史的概観として、建築出版組織の類型が展開しながら、建築誌のみならず建築図書が豊かに拡充されていく様相を描出した。

第二に、わが国最初の建築系出版社となった建築書院の活動を取り上げ、同院では図版の印刷が要点となる建築図集の刊行に力点が置かれ、初学者や実務家に向けられた設計雛形にはじまり、やがて施主や不動産経営者を含む読者層に向けた写真集や図集が登場していく過程を解明した。

第三に、戦前期における最大点数の建築書を刊行した洪洋社の活動について検証し、雑誌、叢書、単行本という刊行形式の広がりとともに、建築専門家である著者と出版社の共同が緊密化していく諸相をたどり、とくに主力とされた叢書形式の建築図集における刊行手法を分析した。

第四に、わが国の近代建築運動の最盛期と密接な関係をもつ構成社書房の活動に焦点を当て、建築家たちが新たな建築概念を提示するために建築書の企画・編集を自ら行い、モダニズム建築が世界の趨勢であることを大判の図集や雑誌によって示していった実像を検証した。

これら4つの要点については、本研究の論文構成にあって、第1章から第4章までの4つの章に対応しており、全19節の小節によって叙述してきた。各章における骨子と論点について、あらためてまとめてみたい。

第1章では、近代日本の建築出版活動の史的概観として、従来の通史といえる宮内嘉久の「建築ジャーナリズム史」について検討をくわえたうえで、建築出版組織の類型ごとの成立過程を軸として検証した。宮内による「建築ジャーナリズム史」は、西山卯三ら戦前期建築運動の当事者による叙述が踏襲され、建築運動体の系譜に特定の建築誌を重ねあわせた構図が、日本近代建築史の基本文献に引用されることで伝播されていった。この建築誌に限定された従来の通史に対し、建築図書をふくめて近代建築書を概観するために、建築出版組織の性格によって4つの類型、つまり「建築系学協会」「建築図書出版社」「建築誌出版社」「建築運動体」に整理したうえで、それぞれの成立過程について叙述することで建築出版活動の史的概観を試みた。

まず、その前史段階として、江戸幕府や明治政府の軍事機関などがオランダの軍事技術書を邦訳した西洋建築技術の導入過程について検討し、江戸・明治期に共通した邦訳文や版元による継

承性を指摘した。それらの邦訳書は明治期に入ると、江戸期以来の老舗書林と明治期の新興出版社によって市販されており、江戸期と明治期の建築出版活動における継続性が認められた。

第一の建築出版組織となった建築系学協会による会誌刊行は、造家学会の『建築雑誌』の草創期における中村達太郎の献身的な執筆・編集活動に象徴されるように、啓蒙意識の高い建築家たちによる中堅技術者への知識の普及活動として成立した。同様の啓蒙精神は、最初期の市販建築図書となる建築講義録にも認められ、当初は著者の建築家による私家版だったが、やがて総合出版社や第二の建築出版組織となる建築図書出版社などへと刊行が引き継がれていった。

第二の建築図書出版社は、第三の建築出版組織となる建築誌出版社よりも14年早く、建築系学協会に遅れること7年をもって成立していた。その嚆矢が建築書院であり、建築系の出版社の活動は、図書を主体として幕を開けたことが認められる。

第三の建築誌出版社については、建築の門外漢の社主により起業された建築世界社、電気技術者による設備計画の啓蒙活動として設立された建築画報社、ひとりの中堅技術者の啓蒙思想が具現化された建築ト装飾社と、組織の多様性が草創期から認められた。建築世界社では、建築技師と一般のジャーナリストによる社会性の高い建築批評が展開され、建築画報社における評論家・黒田鵬心、建築ト装飾社における建築技術者・塚本重五郎と中村鎮などの活動にみられるように、1920年代の近代建築運動の起首をさきがけるかたちで、1910年前後から市販建築誌における批評活動が広く観察できた。

第四の建築出版組織としての建築運動体では、分離派建築会の出版活動に象徴されるように、岩波書店などの著名な出版社から大判の作品集を刊行することで、建築運動の社会的地位の向上がめざされていた。建築運動体においては出版活動が実質的な主活動とされ、市販の建築誌や芸術系出版社などの支援も認められた。さらに、「建築ジャーナリズム史」で建築運動と建築誌の停滞期とされた1930年代以降も、建築図書出版社の創業はつづいていた。彰国社と相模書房が1940年代に発刊した叢書は、戦前・戦後と継続されており、終戦直後から活発化する建築評論集などの出版活動の基盤が戦時下に形成されていた。

こうして建築出版組織の展開によって近代日本の建築出版活動を概観すると、雑誌のみならず図書も広く刊行されており、刊行形式の拡充という観点で近代建築書の変遷過程を看取できる。その過程は、以下の4期に区分できることを示した。

第I期	建築学系協会と建築図書出版社による近代建築書の草創期	1886～1906年
第II期	建築専門出版社による市販建築誌の成立期	1907～1919年

第 III 期 建築運動体による建築作品集と建築誌・建築図書の隆盛期 1920～1931 年

第 IV 期 建築図書出版社の個性化による建築出版活動の成熟期 1932～1945 年

こうした建築出版組織の活動の前史段階が 1856～1885 年、つまり官版の邦訳による建築技術書の輸入期となる。また、一連の建築出版組織の共通点としては、建築誌を主体とした組織を含めて、そのほとんどが建築図集を刊行していたことが判明した。

以上の特性をふまえ、個別研究の対象となる建築出版組織の抽出にあたっては、4 期の時代区分とその潮目を包含しつつ、建築図集をふくむ建築図書が主力刊行物とされながら、複数の刊行形式が認められる 3 つの組織を選定し、以降の各章で考察した。すなわち、第 2 章で扱う建築書院は、建築系出版社の嚆矢である。第 3 章で述べる洪洋社は、昭和戦前期までの建築出版組織としては最大の刊行点数が認められる。また、建築書院と洪洋社の 2 社の活動期間によって、建築出版組織の諸活動の全 4 期間をほぼ包含できる。そして、第 4 章で分析対象とした構成社書房は短期間の活動に限定されるが、建築出版活動の重要な一側面をなす建築運動の頂点と密接な関係性が当事者などにより示唆されてきた。同書房自身が建築運動体的な性質が示されながらも、建築運動体としては稀といえる建築図書と建築誌を併行して刊行していったため、建築図書と建築誌の系譜それぞれの関係性、あるいは建築図書と建築運動のつながりについても検証しうると考えた。

第 2 章では、これまでほとんど着目されることがなかった建築書院の出版活動について、建築世界社により建築誌出版社の設立がはじまるよりも 14 年も前に、建築図書をもって近代建築書の市販にいち早く注力した出版社としてその活動概要を検証した。建築書院は、工手学校造家学科の草創期に学んだ吉原米次郎が、同校の教員から講義録の刊行を依頼されたことにはじまり、土木、建築、機械、電気といった工学分野の刊行物が時代の要請に応じながら展開されていった。

なかでも院主・吉原の出身学科である建築分野の刊行物には最も力が注がれ、とりわけ建築の意匠や計画・設計を視覚的に示す建築図集の刊行に最大の関心が払われていた。建築図面などの図版印刷が高価な銅版彫刻によっていた当時であって、吉原は創業当初から一貫して建築図集の刊行手法を探究し、その読者対象は建築の初学者や技術者から施主へ、さらに住宅地経営者などの富裕層へとしだいに移行していった。それらの建築図集の編著者は、院外の建築家や技術者だけでなく、吉原や建築書院編集局が務める傾向も継続して確認でき、ついには同院の写真部員の撮影による建築写真集が大判の叢書として刊行されるにいたった。

建築図集のテーマとしては、読者対象が技術者から施主へと移行するにともない、ときに皇室

や華族をふくむ上流層の住まいにおける趣味や作法へと重心が置かれていった。それらが図集によって視覚的に示されることで、新興のブルジョワジー層へと伝播され、日本家屋という伝統的な建築のありかたが趣味や芸術、ときに不動産経営の対象として近代社会に組み込まれることとなり、社会通念として視覚的に再定着されていった過程の一端を示している。近世からつづく伝統的な建築が扱われた建築図書が、建築の近代教育を受けた出版人によって、新しい印刷技術による図面や写真を媒体としながら新興のブルジョワジーへむけて刊行されたゆえに、建築書院における建築図集の刊行はわが国における近代建築書の生成を示す出版活動として認められる。

第3章では、戦前期の代表的な建築専門出版社として知られてきた洪洋社を取り上げた。同社は多種多様な建築図集から建築運動を報じる雑誌まで幅広く扱ったために、一貫した編集方針や刊行物の全貌が明らかにされてこなかった。本章では、洪洋社の建築出版活動の全体像を検証するとともに、多彩な刊行物の大黒柱となった叢書形式の建築図集に着目して同社の刊行手法を考察した。

洪洋社の刊行物は1,032点が確認でき、わが国戦前期の建築出版組織としては群を抜いた刊行点数となる。その過半数は、社主・高梨由太郎を中心とした社内編集による叢書形式の建築図集であった。そこでは、建築の様式や装飾が一貫して扱われるなかで、日本の伝統的な建築や家具・工芸へと収斂されていき、新奇性に偏りがちな雑誌では継続されにくいテーマが展開されていった。また、社外の建築家との共同の緊密化によって、雑誌・叢書・単行本という刊行形式と刊行テーマが拡充され、刊行物の専門性と市販性の均衡が図られていった。

洪洋社が主力とした叢書形式の建築図集では、洋書からの複写による海外情報と、写真部員の撮影による国内情報が、それぞれ建築の様式や部位の雛形から日本の伝統的建築やモダニズム建築の抽象美へと対象が広げられていき、最終的には洪洋社建築設計部と数寄屋研究者の共同実測・撮影による図版制作の表現へと出版社の創意が発揮されていった。そこでの刊行手法としては、洋書からの複製と写真部員の撮影による図版制作が同社の活動の主軸とされながら、複製および少部数の印刷に適したコロタイプ印刷で制作されることで、多種多彩な建築図集が社内編集の名義によって高頻度で刊行しえたのである。

洪洋社の建築出版活動では、建築の様式性や装飾性、あるいは伝統性や近代性のありかたが、叢書形式の建築図集をつうじて一望の元に図示されていた。そこでは、多様な図版による視覚的な経験を読者が積み重ねることで、建築意匠に対する美的感覚が養われることも企図されていた。また、施主の趣味や意向を設計者に媒介する役割も意識されていた。多種多彩な建築図集によって造形語彙の選択可能性が拡充されるとともに、拡大する中流層における住文化の趣味を、設計

者をつうじて建築意匠に反映させる一助となっていたといえる。

第4章では、構成社書房を取り上げ、約2年間に限られた建築出版活動の全体像をはじめて明らかにした。これまでは、戦前期建築運動の最盛期を示す新興建築家連盟との密接な関係性が、一部の当事者などから間接的に指摘されたままとなっていた。

同書房の建築出版活動は、芸術系出版社の社主の支援のもと、堀口捨己や岸田日出刀、小池新二、山越邦彦といった戦前期建築運動の枢要な人物たちの手で企画・編集されており、実質的な建築運動の性格と成果を内在させていた。分離派建築会以外の建築運動体における出版活動の大半が機関誌の刊行や市販誌による報道に限られていたのに対し、構成社書房では雑誌の刊行とともに、建築図書も重視され、叢書と単行本の双方の形式による大判の写真集や海外の最新文献の邦訳にも力が注がれていた。

具体的には、新興建築家連盟の動向を建築誌のなかで唯一詳細に報じた『建築時潮』誌では、建築界に向けた技術的、理論的な観点による最新情報の報道と「構築」という概念の普及活動が展開されていた。その一方で、建築を中心とした「造形芸術全般」の文化に対して「構成」の美が視覚的、感覚的に提示されていった。それは、編著者の理想とする新たな建築像が書物として表現され、雑誌『建築紀元』、叢書『現代建築大観』、単行本『過去の構成』にみられるように、編著者の建築家たちによって建築写真が意識的に編集されていた。構成社書房の建築出版活動は、建築を中心とした芸術分野の総合化を意識しながら、「構成」を規範とする新たな審美性を普及させることが最大の柱とされていた。

それは、分離派建築会が機関誌ではなく作品集の刊行を主眼としたように、岩波書店、洪洋社、構成社書房、相模書房、日本工作文化連盟と、建築家がモダニズムの審美性を書物で表現していた建築出版活動の系譜が描き出せることを述べたうえで、構成社書房は堀口捨己と岸田日出刀による建築出版活動の系譜の中盤に位置づけられることを指摘した。建設活動の実践においてなお少数にとどまっていた戦前期のモダニズム建築は、大判の写真全集などで欧米の実作品が示されていくことで、世界的な趨勢となることが文化人を中心として広範に伝播されていったのである。わが国のモダニズム建築は、建築運動と建築誌だけでなく、建築図集という刊行形式が採られることで、より広い文化人に対する社会的認知が醸成されることとなり、戦後の建設活動における意識の共通基盤が実質的に準備されていったともいえる。

こうして第2章から第4章において検証した3つの建築出版組織の活動には、建築図書によって接続していた建築と社会との回路を見いだせる。建築書院では、伝統的な日本家屋を文化、趣味、そして不動産の経営対象として近代社会へと連結させていた。洪洋社では、建築の施主層と

設計者との建築意匠に対する共通意識が育まれていた。構成社書房では、建築をめぐる造形芸術文化の首座を担うべく、モダニズム建築の社会的な地位と共通意識が培養されていた。3社の編集者・出版人による建築の情報供給の観点でみるならば、建築書院は啓蒙、洪洋社は普及、構成社書房は表現、と展開されていったともいえる。これらの過程には、わが国における近代建築書の変遷と発展が示されていると考えられる。それは、前衛的な言説や思潮をたどる建築誌の研究からは浮かび上がらない側面といえるものであり、建築図書の刊行手法の検証によってこそ抽出しえた性質であることが認められる。

さらに、建築図書にみられる社会との回路について、第1章でみた建築出版活動の史的概観にそって考察すると、伝統的建築については近代社会との接続という意味において、江戸期と明治期、あるいは皇室・華族などの上流層とその追従者としての新興ブルジョワジーとの社会階層間の文化をつないでいた。また、建築の様式性や装飾性については、建築図集の広範な展開という見地において、設計者・技術者と施主、あるいは大衆とを接合していた。そして、モダニズム建築については、建設の実践前における社会的地位の形成という観点において、戦前と戦後、あるいは建築をめぐる造形芸術全般の文化人のあいだを結びつけていた。

つまり、近代日本における建築出版活動の史的展開は、市販の建築書の総体によって、建築家の先鋭性と施主の読者層における趣味性との均衡が図られ、建築をめぐる社会的な嗜好が醸成されていった実像の一側面が示されていると考えられるのである。

2 近代日本の建築出版活動の史的意義

以上、近代日本における建築出版活動の史的展開について考察することで、建築図書の出版組織の変遷過程において、図版による視覚表現の発展により建築の造形語彙が選択可能な意匠として拡充されながら、編集者・出版人による刊行趣旨と刊行手法が建築情報の啓蒙、普及、表現と展開していったことが明らかとなった。建築出版活動の史的展開を俯瞰することによって、日本家屋という伝統的建築については江戸期と明治期、あるいは社会階層間の文化をつなぎ、建築の様式性や装飾性については設計者・技術者と施主・大衆とをつなぎ、モダニズム建築については戦前と戦後、あるいは建築をめぐる造形芸術分野全般を結びつけていた。そして市販書の建築出版活動の総体によって、建築家の先鋭性と施主の読者層における趣味性との均衡が図られることとなり、建築の社会的な嗜好が醸成されていった。

近世封建社会から近代市民社会へと移行するなかで、建築物は私有財産の件数とその割合が高まっていった。設計者や施主による個人的な趣味が建築意匠の設計に反映されることで、従来の

社会的な規範としての建築様式は変容し、個人のイメージによる建築像が拡張されていくこととなった。それは、施主の趣味あるいは社会的地位が反映しうる造形文化としての建築の特性が、建築図集などの情報媒体によって視覚的に伝播されていったとも考えられる。そこには、モダニズム建築とは異なった、近代社会におけるもうひとつの建築のありかたが示されている。

つまり、建築写真などの図版によって建築情報の視覚表現が発達していくなかで、施主の趣味性がしだいに育成され、建築をめぐる多様な嗜好が醸成されていったと考えられる。建築図集の編集・刊行により様式性や装飾性、伝統性、近代性などの西洋より移入された諸概念が相対化され、個人の趣味を媒介に建築意匠を状況に応じて選択できる文化的土壌が形成されていった。

以上のことから、近代日本における建築出版活動においては、一部の建築家による前衛的な建築誌の刊行にとどまらず、より広範で多様な建築情報を積極的に提供した建築図書が展開されたことで、個人の趣味性と建築の社会性との均衡が図られていったといえる。建築の設計者側だけでなく、施主など建築情報の受容者側の視点も組み込まれていくことにより建築出版活動の裾野も広げられ、近代社会の発展のなかで建築を新たな文化規範として再認識していく契機がもたらされていったのである。

图表

[表 1-1] 日本近代の建築ジャーナリズム史をめぐるトピックス

[A] 戦後の宮内嘉久らによる叙述のトピックス

[B] 戦前の西山卯三らによる叙述のトピックス

			[B]				[A]			
[e]	[f]	[g]					[a]	[b]	[c]	[d]
西山 1933	西山 1937	高橋 1937	西暦 トピックス				宮内 1949	宮内 1961	村松 1964	宮内 1999
			1886	造家学会(現・日本建築学会)創立			○			○
			1887	『建築雑誌』創刊			○			○
			1907	『建築世界』創刊			○			○
	○		1908							
	○		1909	伊東忠太「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」 (建築雑誌1909.01)			○			○
	○		1910	建築学会討論会「我国将来の建築様式を如何にすべき や」(建築雑誌1910.06, 08所収)			○			○
	○		1914	東京大正博覧会				○		○
	○		1915	野田俊彦「建築非芸術論」(建築雑誌1915.10所収)			○			○
○	○	○	1920	分離派建築会結成			○			○
			1921	雑誌『種時く人』創刊			○			○
			1922							
	○	○	1923	創字社結成			○			○
	○	○	1924	メテオール結成			○			○
	○	○		ラトー結成			○			○
	○	○		マヴォ結成			○			○
			1925							
			1926	伊藤清造「建築のプロレタリアズム」(建築新潮1926.07)			○			○
				蔵田周忠「建築論」(『アルス建築講座』所収)			○			○
	○	○	1927	日本インターナショナル建築会結成			○			○
				石原憲治「必然の建築」(科学画報1927.12)			○			○
			1928	岡村蚊象「新建築における唯物史観」(アトリエ1928.09)			○			○
				全日本無産者芸術連盟(NAPP)結成			○			○
			1929	第1回建築思潮講演会			○			○
				同上、岡村蚊象「合理主義反省の要望」(国際建築 1929.11所収)			○			○
				同上、牧野正己「建築思潮を語る」(建築雑誌1929.10所 収)			○			○
	○	○	1930	新興建築家連盟結成・瓦解			○			○
				原沢東吾「唯物史観建築史創設の必要と建築の本質に 就て」(建築雑誌1930.04)			○			○
				谷口吉郎「ル・コルビュジエ検討」(思想1930.12)			○			○
			1931	帝室博物館設計競技			○			○
				Dezam成立			○			○
	○	○	1932	日本青年建築家連盟結成			○			○
				Dezam「建築と建築生産」(Dezam1932.12)			○			○
			1933	建築科学研究会結成			○			○
				青年建築家クラブ結成			○			○
				香山三郎(西山卯三)「建築家のための建築小史」(国際 建築1933.08-1934.01)			○			○
				刀根川浩(原沢東吾)「建築学の科学性のために」唯物 論研究1933.08-09			○			○
				高橋寿男「分離派建築会の通った道」(建築1933.12)			○			○
			1934	火曜会結成			○			○
			1936	日本工作文化連盟結成			○			○
			1937	西山卯三「日本の折衷主義と我国の建築運動」(建築と 社会1937.06)			○			○
				高橋寿男「青年建築家クラブをかえりみて」(建築と社会 1937.06)			○			○

[表 1-1] 日本近代の建築ジャーナリズム史をめぐるトピックス (前頁のつづき)

文献一覧

【a】 宮内 1949

宮内嘉久「近代日本の建築イデオロギー——ジャーナリズムを通して」
(東京大学卒業論文、1949年／宮内嘉久『少数派建築論』所収、井上書院、1974年)

【b】 宮内 1961

宮内嘉久「日本の建築運動 1920-60——組織・創造・イデオロギー」
(『世界建築全集 9 近代』、平凡社、1961年)

【c】 村松 1964

村松貞次郎「近代建築運動の展開」
(『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』第一法規出版、1964年)

【d】 宮内 1999

宮内嘉久「20世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」
(『建築雑誌』1999年9月号)

【e】 西山 1933

西山卯三「建築家のための建築小史」(国際建築 1933年8月号～1934年1月号)

【f】 西山 1937

西山卯三「日本折衷主義と我国の建築運動」(『建築と社会』1937年6月号)

【g】 高橋 1937

高橋壽男「青年建築家クラブを顧みて」(『建築と社会』1937年6月号)

[表 1-3] 村松貞次郎の著書に掲載された「建築関係雑誌年表」(下)と「日本の近代建築運動年表」(上)

表1. 日本の近代建築運動年表

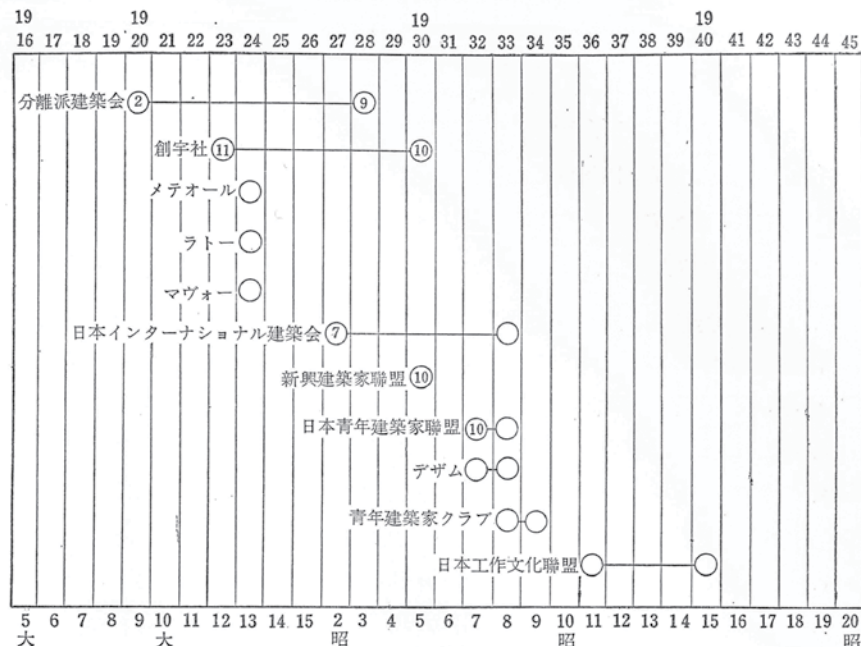
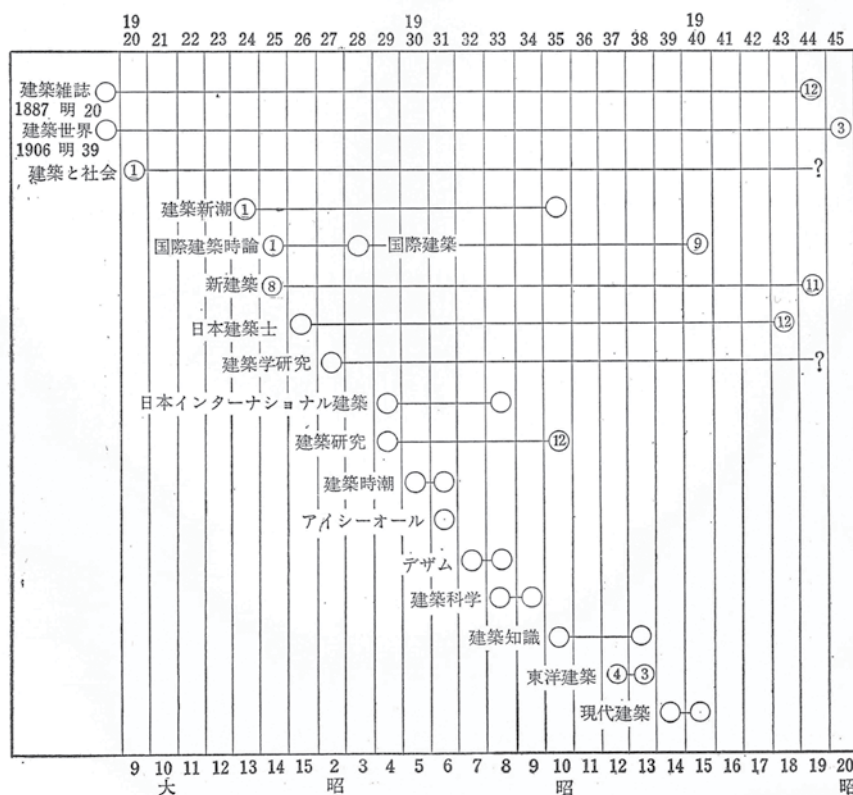


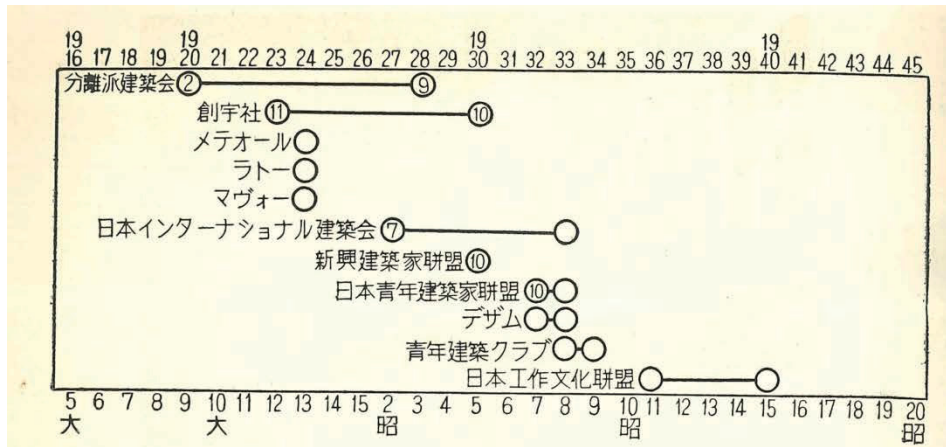
表2. 建築関係雑誌年表



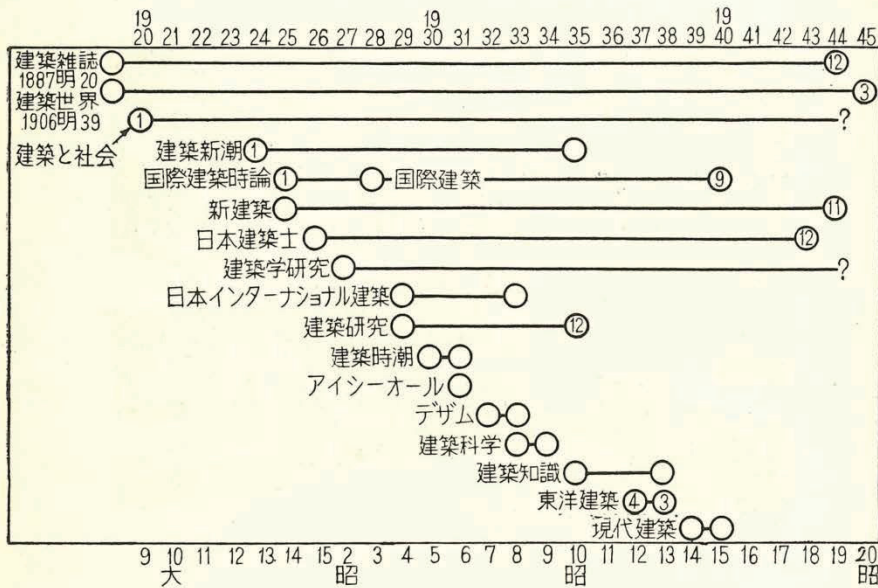
注 ○の中の数字は月を示す。

出典：日本科学史学会編（責任編集：村松貞次郎）『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』、p.483、第一法規出版、1964年

[表 1-4] 神代雄一郎の著書に掲載された「建築関係雑誌年表」(下)と「日本の近代建築運動年表」(上)



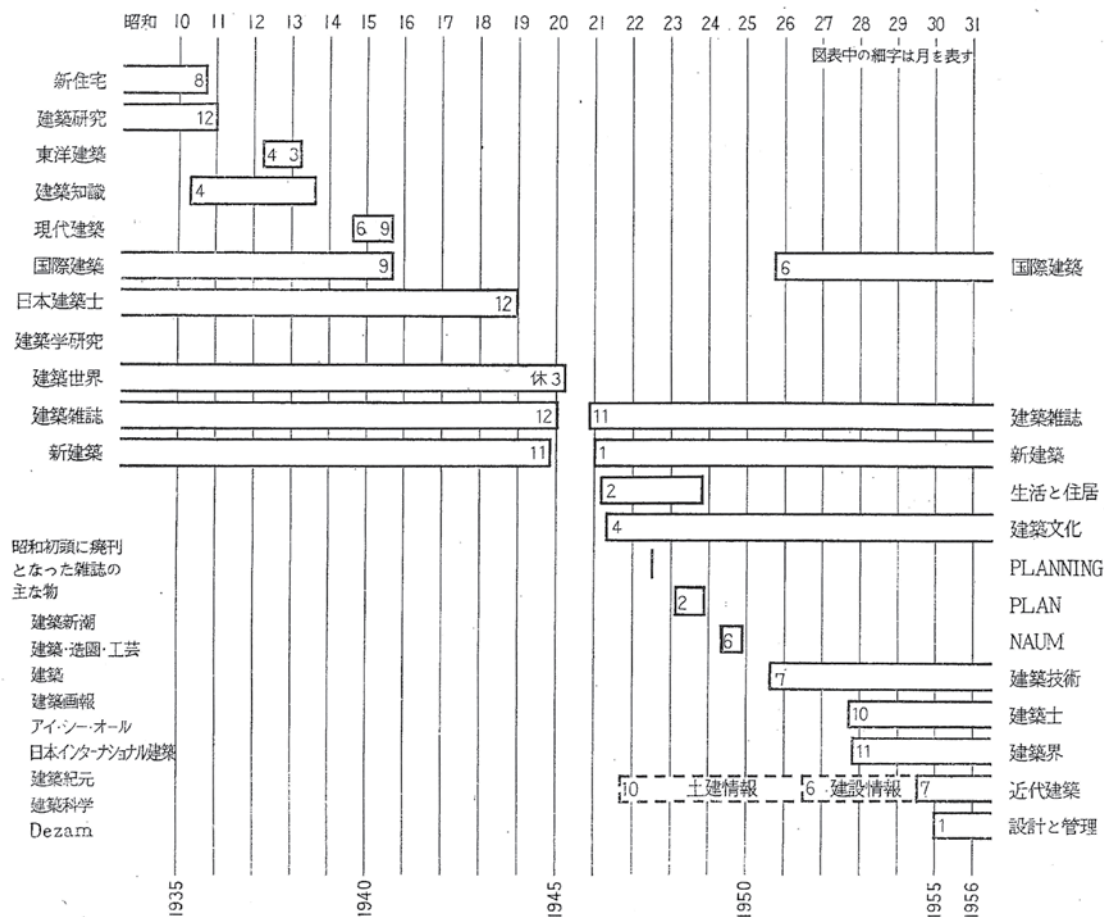
2.55 図 日本の近代建築運動年表



2.56 図 建築関係雑誌年表

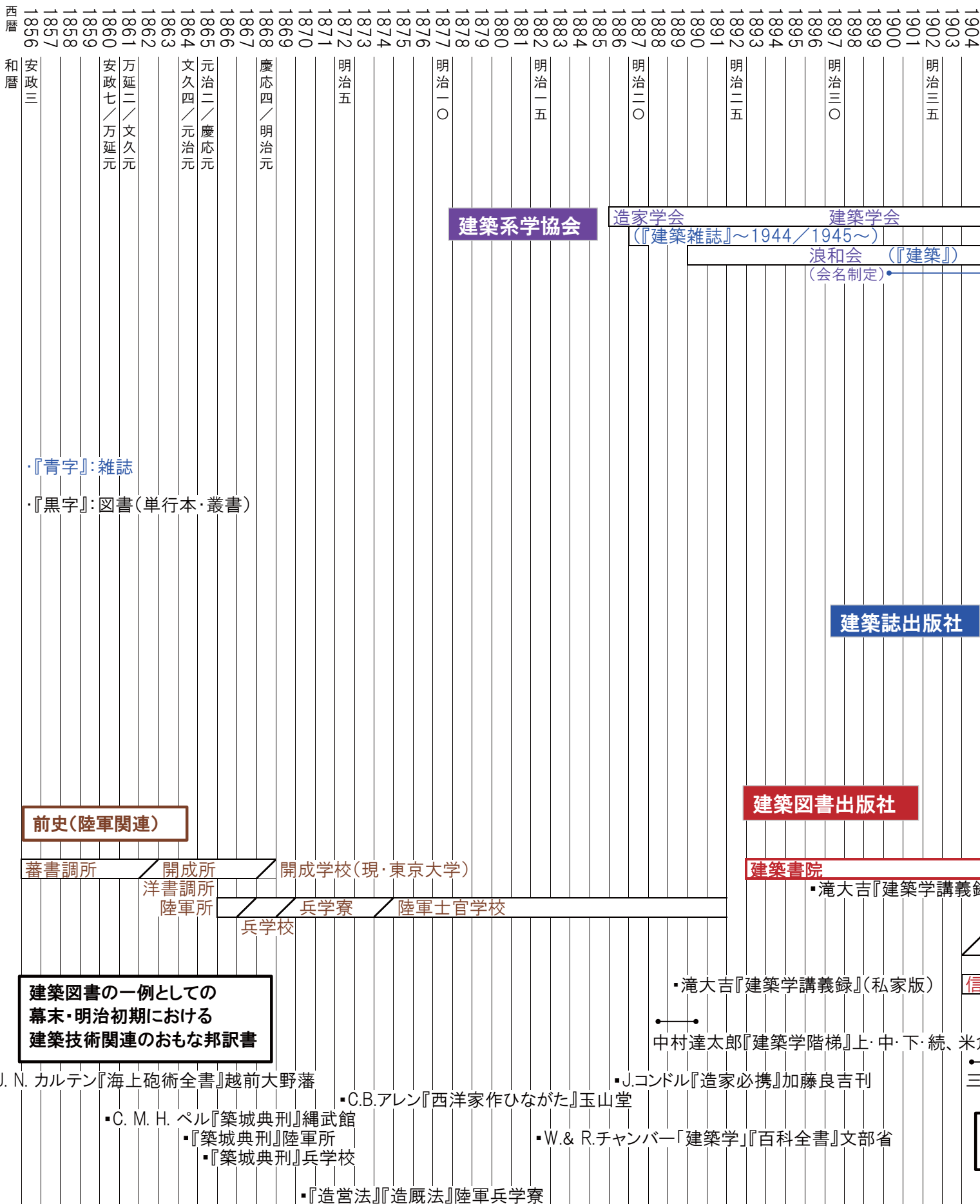
出典：神代雄一郎「日本における近代建築思潮の形成」(『建築学大系 6 近代建築史』、p.316、彰国社、1958年)

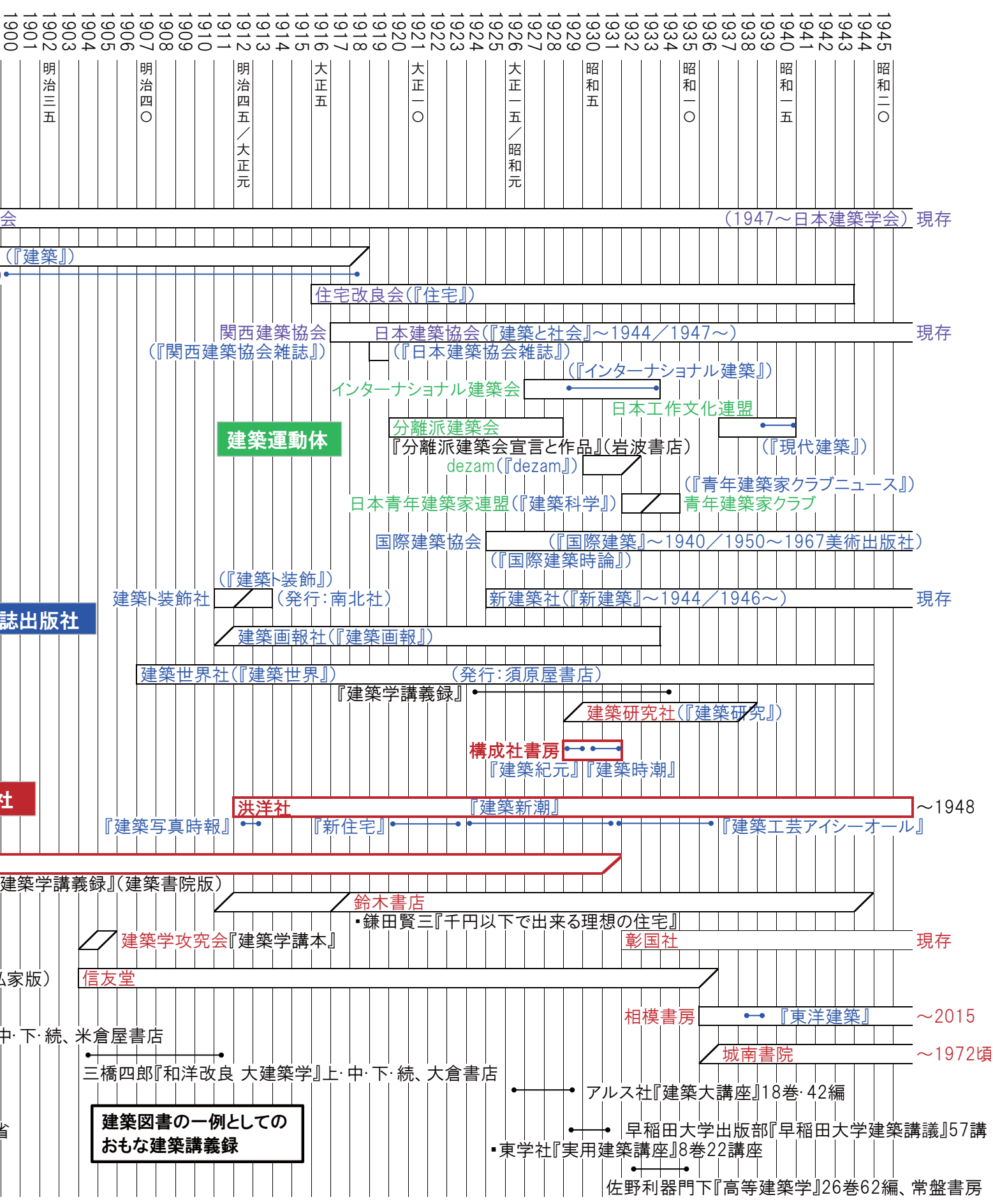
[表 1-5] 日本建築学会座談会「建築ジャーナリズムの動きをたどる
——関係誌 20 年の歩み」年表



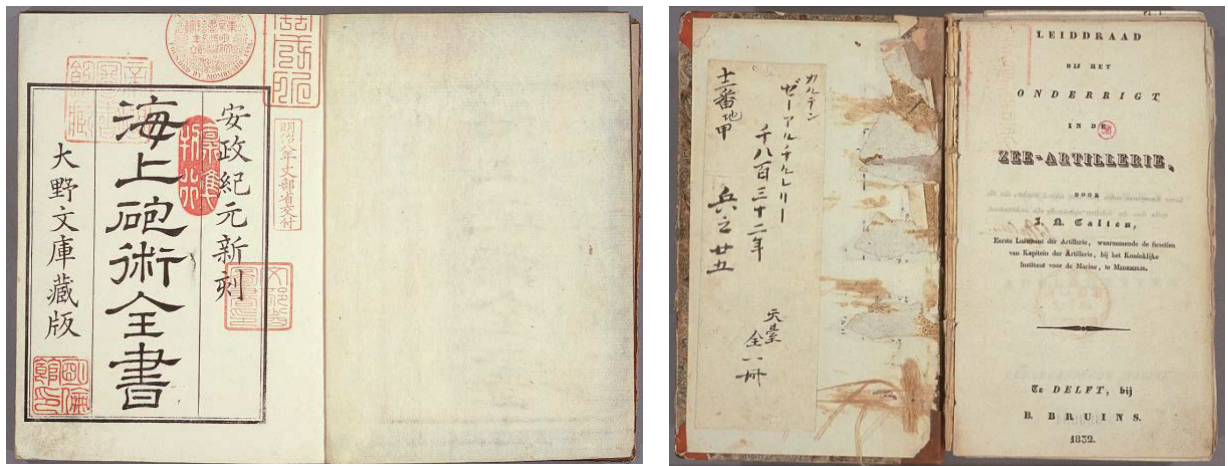
出典：「創立 70 周年記念特集」座談会「建築ジャーナリズムの動きをたどる——関係誌 20 年の歩み」（『建築雑誌』1956 年 4 月号、p.59）

[表1-6] 建築出版組織の展開にみる近代日本の建築出版活動の系譜



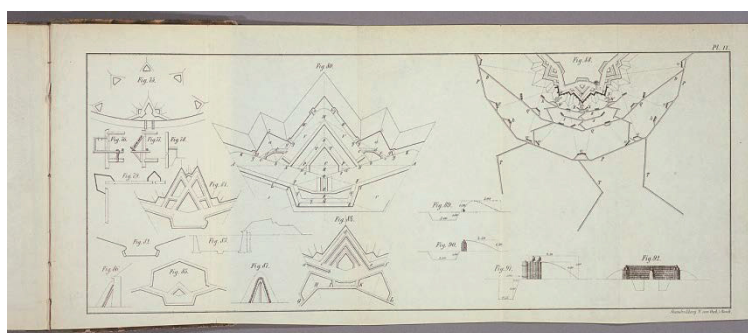
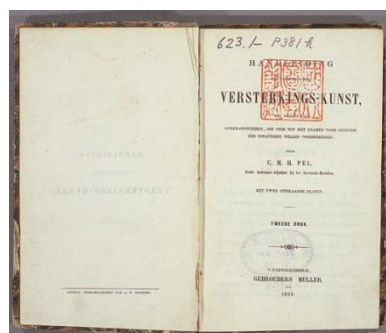
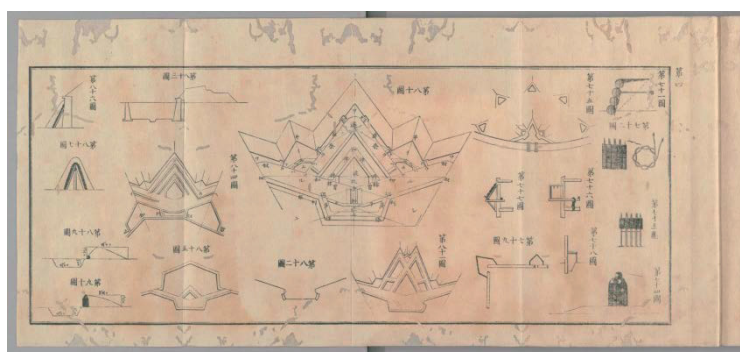


建築図書の一例としてのおもな建築講義録



[図 1-1] 『海上砲術全書』と原書『Leiddraad bij het onderrigt de zee-artillerie』（右）。

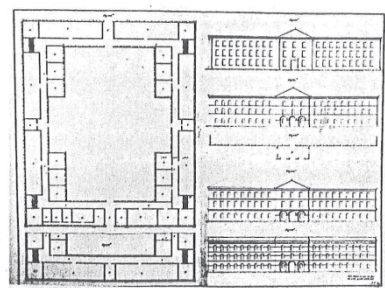
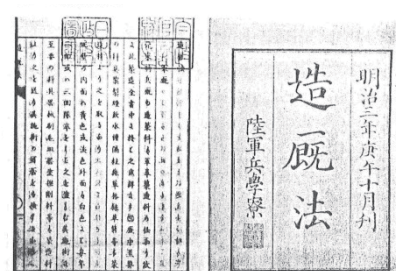
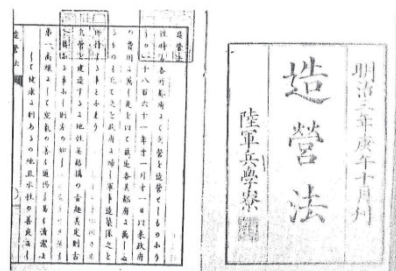
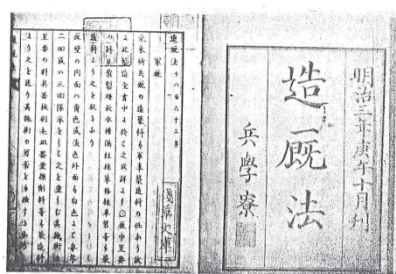
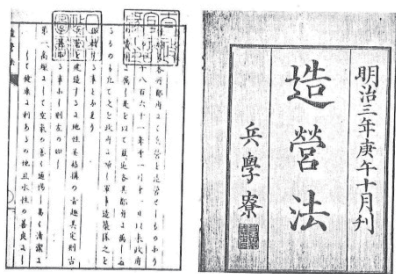
- 『海上砲術全書』葛爾甸 (J. N. カルテン) 著、宇田川榕庵ほか訳、大野文庫、1854 年、
- Calten, J. N.: *Leiddraad bij het onderrigt de zee-artillerie*. Delft: B. Bruins, 1832
- いずれも所蔵：国立国会図書館、書影出典：国立国会図書館電子展示会「江戸時代の日蘭交流」2009 年、更新 2013 年 3 月 19 日、最終アクセス 2016 年 8 月 4 日、
http://www.ndl.go.jp/nichiran/s2/s2_5.html



[図 1-2] 『築城典刑』(上、中)と原書『Handleiding tot de kennis der versterkings-kunstm』(下)

- ・ 『築城典刑』吉母波百兒 (C.M.H. ペル) 著、大鳥圭介訳、繩武館、1860 年(上)、陸軍所、1864 年(中)
- ・ Pel, C. M. H.: *Handleiding tot de kennis der versterkings-kunstm*, 2. druk. 's-Hertogenbosch: Muller, 1852
- ・ 上 2 点所蔵・画像提供：静岡県立中央図書館
- ・ ほかすべて所蔵：国立国会図書館

出典：国立国会図書館電子展示会「江戸時代の日蘭交流」2009 年、更新 2013 年 3 月 19 日、最終アクセス 2016 年 8 月 4 日、http://www.ndl.go.jp/nichiran/s2/s2_5.html



[図 1-3] 『造営法』(左列)、『造厩法』(右列)
 上段：初版、兵学寮、中段：陸軍兵学寮、
 いずれも 1870 年
 出典：菊池重郎『日本に於ける洋式建築の初期導入
 過程の研究』(東京工業大学博士論文、1962 年)、
 pp.551-552、556

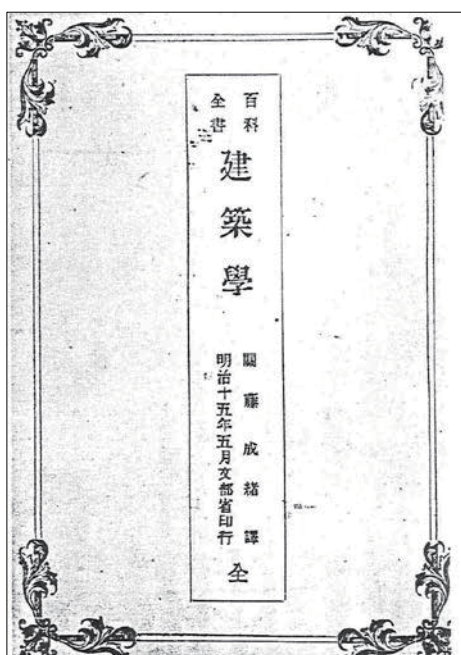


[図 1-4]、『西洋家作ひながた』
 シー・ブリュス・アルレン著、ウキール・ジョン増補、
 村田文夫、山田貢一郎訳、玉山堂、1872 年
 所蔵：国立国会図書館

[図 1-5] 『西洋家作ひながた』初版版元の「玉山堂出版書目録」より「雛形書之部」筆頭に『西洋家作ひながた』、1886年改正

出典：人間文化研究機構国文学研究資料館、CC BY-SA 4.0、

「近代書誌・近代画像データベース」、2017年9月7日、最終アクセス 2017年9月19日、
<http://school.nijl.ac.jp/kindai/NIJL/NIJL-01105.html>



[図 1-6] 『百科全書 建築学』

関藤成緒訳、文部省、1882年

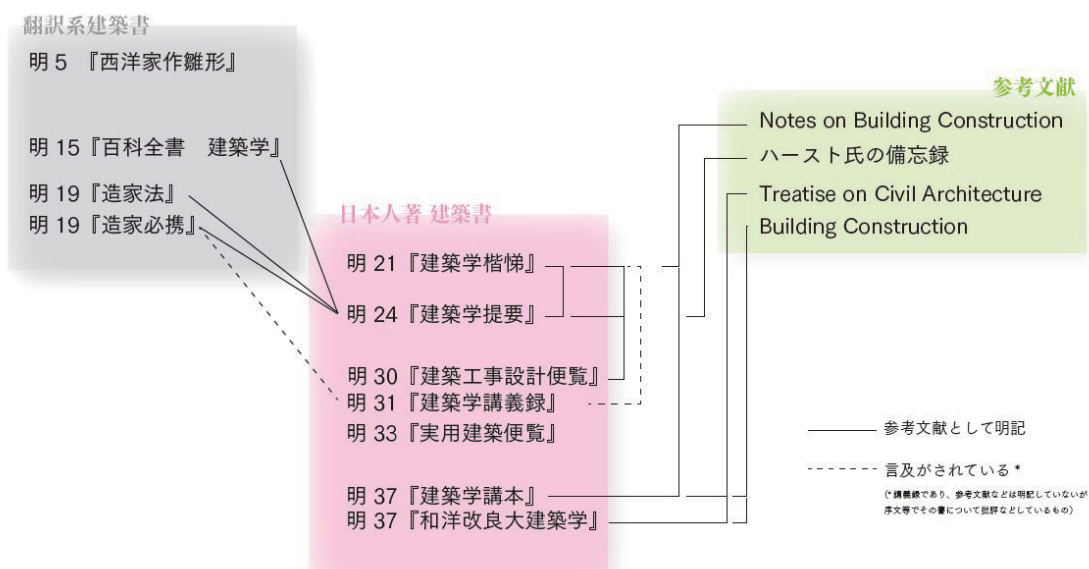
出典：菊池重郎『日本に於ける洋式建築の初期導入過程の研究』（東京工業大学博士論文、1962年）、p.66

（国立国会図書館蔵書は扉欠如）

[表 1-7] 丸茂友里ほか作成「明治期のおもな公刊建築書一覧」

発行 (明治)	書名	著者	発行 地	発行者
3	造営法	陸軍学兵寮		陸軍学兵寮
5	西洋家作ひながた	シー・プリウス・アルン 著 ウキール・ジョン 増補 村田文夫・山田貢一郎 訳	東京	玉山堂
15	建築学『百科全書』	W.&R.Chambers著 文部省 訳	東京	文部省
15	工匠用字類	宮地高里 著	東京	金港堂
19	造家法	チャンパー 著 都築直吉 訳	東京	丸善
19	匠工必携	柴田四子吉 著	京都	柴田吉次郎 山内正次郎
19	造家必携	ジョサイア・コントル 述 松田周次・曾禰達蔵 記	東京	加藤良吉
21	新選作事用文	剣持柳太郎 編	東京	古文堂
21-23	建築学楷梯	中村達太郎 編	東京	米倉屋書店
23	欧米建築	下田菊太郎 著	東京	下田菊太郎
24	建築学提要	千葉末吉 著	広島	淵点堂
25	地震家屋	佐藤勇造 著	東京	共益商社
26	小学校建築図案	文部省	[東京]	文部省
27	積壁法 一名・五効建築説明	市村善吉 著	大阪	市村善吉
27	洋館建築設計書々式	立川知方 編	東京	開工社
27	壁職業祖先記録	小松雪山 著	東京	尚古堂
28	大工職工作文字必要便	湯本栄助 著	東京	栄盛堂
28	木造耐震家屋構造要領等調査ノ主旨	文部省震災予防調査会	[東京]	文部省震災予 防調査会
30	建築学提要	千葉温也 編	東京	建築書院
30	建築造営主心得書 附・伊藤建築事務所定則	伊藤為吉 著	東京	伊藤建築設計 事務所
30	建築工事設計便覧	大泉竜之助 編	東京	建築書院
30	建築設計通書	朝倉清一 編	東京	共益商社
32	建築設計便覧:建築工事	滝大吉 著、野村一郎 校 閲、大泉龍之輔 編	東京	建築書院
31-42	建築学講義録	滝大吉 述	東京	建築書院
32	家屋改良談	土屋元作 著	東京	時事新報社
33	実用建築便覧	竹貫直次 著	東京	博文館
35	建築必携	Hurst, John Thomas 著 今井殿三郎 訳	東京	建築書院
36	通俗家屋改良建築法	井上繁次郎 著	東京	博文館
37-38	建築学講本 第1,2,4-6冊	建築学研究会 編	東京	建築学研究会
37-44	和洋改良大建築学	三橋四郎 著	東京	大倉書店
38	建築工事仕様便覧	小国巳一 編	東京	建築書院
38,41	和洋建築工事仕様設計実例	田中豊太郎 編	東京	建築書院
39	学校建築通解	島田博 著	新潟	末広堂
39	簡易洋風建築術	森友吉 著	東京	信友堂
39,40	和洋住宅建築学	駒杵勤治 著	東京	須原屋

出典：丸茂友里、中谷礼仁、本橋仁、根来美和、廣瀬翔太郎『『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究 4：明治初期日本における「建築」概念の美学的観点について』（日本建築学会大会学術講演梗概集、2015年9月、建築歴史・意匠、p.745）



[図 1-7] 丸茂友里ほか作成「明治期の公刊建築書にみられる相互関係」

出典：丸茂友里、中谷礼仁、本橋仁、根来美和、廣瀬翔太郎『『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究 4：明治初期日本における「建築」概念の美学的観点について』（日本建築学会大会学術講演梗概集、2015年9月、建築歴史・意匠、p.745）

[表 1-8] 国立国会図書館蔵書にみる信友堂（信友堂書店）の刊行物

	刊行年	分野	書名	編著者名
1	1904年	建築	日本建築規矩術	斎藤兵次郎 著
2	1904年	建築	日本家屋構造 上巻 構造編	斎藤兵次郎 著
3	1904年	建築	日本家屋構造 上巻 図面	斎藤兵次郎 著
4	1905年	建築	茶室構造篇	斎藤兵次郎 編
5	1906年	建築	簡易洋風建築術 上 説明	森友吉 編
6	1906年	建築	簡易洋風建築術 下 図面	森友吉 編
7	1906年	建築	日本家屋構造 続編	斎藤兵次郎 編
8	1908年	建築	日本著名建築写真帖	斎藤兵次郎 編
9	1908年	建築	和洋建築製図手本	東京高等工業学校建築科 編
10	1908年	建築	大工さしがねづかひ	斎藤兵次郎 著
11	1908年	建築	和洋建具設計実例	斎藤兵次郎 著
12	1908年		せんぱんにて螺糸を切る法	田島義造 著 関口八重吉 閲
13	1909年		製図用文字集	岡本勝三 著
14	1909年		発動機大意	吉田賢吉 著
15	1910年		ゆにうあーさるみりんぐましん 前編	田島義造 著
16	1910年		ポケット機械実用表	岸井堯 編
17	1911年		ゆにうあーさるみりんぐましん 後編	田島義造 著
18	1912年	建築	新築竣工家屋類纂 第1集	保岡勝也 編
19	1912年	建築	日本住宅写真図譜	森友吉 編
20	1915年		表式機械設計及計算	榊田喜一郎 著
21	1916年		鍛工法	田村百太郎 著
22	1918年	建築	破風造構造法	斎藤亀吉 著
23	1918年	建築	床棚書院	斎藤亀吉 著
24	1920年	建築	神社建築構造法	斎藤亀吉 著
25	1921年		ぼんぷ之話	吉田賢吉 著
26	1921年		機械工師必携	榊田喜一郎 著

27	1922年		歯車の割出方	田所末次郎 著
28	1926年		機械木型及鋳型製作法	宮島武八郎 著
29	1927年		能率増進工人生活	吉田賢吉 著
30	1929年	建築	最新便所の設計及改良法	相沢時正 著
31	1932年		実用アセチレン溶接法	森川清 著
32	1933年	建築	近代的角度	蔵田周忠 著
33	1933年		実用製罐及鋳金法	吉原鉄夫 著
34	1934年		機械工場用算術	田島義造 著
35	1934年		精密機械工具使用法	田島義造 著
36	1934年		電弧溶接法	利根山巖 著
37	1936年		実用広告便覧：専門雑誌を主とした	明報社 編
38	1936年		旋動歯截機械	山本岳記 著
39	1937年		初等機械工作術	山本岳記 著
40	1938年	建築	寺院建築構造法	横山好治 著
41	1938年		モジュール・ピッチ、ダイアメトラル・ ピッチ平歯車外径表	山本岳記 編
42	1938年		旋盤実地作業法	山本岳記 著
43	1938年		誰れにもよく解る旋盤掛換歯車表	山本岳記 著
44	1938年		工業材料の知識	石井義雄 著
45	1939年		フライス盤歯割表	山本岳記 著
46	1939年		嵌合規格調査資料 第1-2輯	岸井堯 編
47	1940年		実地工作術 第1編	池田辰衛 著
48	1942年		最新金属材料重量表	石井義雄 編
49	1942年		最新鍛造法	石井義雄 著

[表 1-9] 宮内嘉久による「建築批評・評論の徴表」

伊東忠太	「建築進化の原則より見たる我国建築の前途」(『建築雑誌』1909年1月号)
関野貞	「日本建築の将来」(『建築雑誌』1909年7月号)
岡田信一郎	「建築と評論」(『建築雑誌』1910年4月号)
岡田信一郎	「建築と現代思潮」(『建築雑誌』1910年4月号)
正員討論会	「我国将来の建築様式を如何にすべきや」(『建築雑誌』1910年6、8月号)
	巻頭言「建築と批評及建築家と批評家」(『建築世界』1911年2月号)
黒田鵬心	「建築批評の標準」(『建築雑誌』1911年5月号)
岡田信一郎	「社会改良家としての建築家」(『建築雑誌』1915年9月号)
野田俊彦	「建築非芸術論」(『建築雑誌』1915年10月号)
野田俊彦	「所謂日本趣味を難ず」(『建築雑誌』1917年12月号)
秋水生	「建築批評家の出蘆を望む」(『建築と社会』1918年12月号)

出典：宮内嘉久「近代日本の建築イデオロギー：ジャーナリズムを通して」(東京大学卒業論文、1949年／宮内嘉久『少数派建築論』所収、p.263、井上書院、1974年)

[表 1-10] 『建築世界』 創刊期の主な署名記事と「主張」欄

手島精一	説林「職工教育」(1908年3月号)
辰野金吾、塚本清、伊東忠太	説林「議院建築の方法」(1908年5月号)
三橋四郎	説話界「家屋建築改良の急」(1908年10、11月号)
中村達太郎	説話界「青年建築家に望む」(1908年11月号)
佐野利器	説話界「震度及び破壊力」(1909年5月号)
	主張「記念号発刊の日に臨み」(1909年7月号)
武田五一	評論「日本住宅建築に改良の余地ありや」(1909年8、9月号)
	主張「火災と震災と」(1909年9、10月号)
安部磯雄	評論「東京市区改正意見」(1909年10月号)
辰野金吾	評論「消極的防火に関する意見」(1910年1月号)
	主張「如何にして建築界を興隆せしむ可き乎」(1910年2~4月号)
伊東忠太	評論「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」(1910年2~5月号)
辰野金吾	評論「帝国議院建築準備に関する意見書」(1910年4月号)
大隈重信	評論「技師と職工に望む」(1910年7月号)
	主張「方針を誤れる我建築界」(1910年8~10月号)
伊東忠太	評論「再び日本建築将来のスタイルに就て」(1910年9~11月号)
	主張「日本が要する建築家」(1910年11、12月号)
	主張「建築と批評及建築家と批評家」(1911年2~4月号)
妻木頼黄	主張「吉原再築に対する予の希望」(1911年5月号)
	主張「建築と彫刻の関係」(1911年6月号)

[表 1-11] 『建築世界』 1909 年 1 月号社告による「編集局記者」

執筆時の肩書と執筆期間（筆者追記）	
金夫不二夫	建築技師、「金城不二夫」の誤字か、1907 年 9 月号～1911 年 3 月号
小松八翠	土木技師、1908 年 12 月号～1912 年 8 月号
新竹辰雄	建築技師、1908 年 7 月号～1916 年 7 月号
戸台邀月	工学士、1907 年 7 月号～1909 年 6 月号、初出のみ「東京工科大学」
國建樹	建築技師、1908 年 8 月号～1913 年 4 月号
小西可東	肩書なし、1908 年 11 月号～1910 年 11 月号頻出後、 1915 年 1 月号と 1929 年 12 月号に寄稿。「小西勝次郎」に名義で 奥付の編集者として 1907 年 7 月号～1909 年 7 月号に記載

[表 1-12] 小西可東の主な著書

『バンカラ伍長——軍事小説』皆兵舎 1910 年
『続我まゝ曹長——戦場漫筆』皆兵舎 1910 年
『我まま曹長——戦場漫筆』皆兵舎 1910 年
『腕白新兵——軍事小説』皆兵舎 1911 年
『熊本籠城』春江堂 1911 年
『騎兵斥候露軍横断記——参謀本部附某参謀官実歴口演』同文館 1912 年（小西勝次郎名義）
『薩摩義士録』西濃印刷岐阜出版部・須原屋書店 1915 年（小西勝次郎を併記）
『巨人貞任——安倍氏一門之事蹟』岩手日報社・須原屋書店 1918 年（小西勝次郎を併記）
『播州特産金物發達史』工業界社 1928 年（小西勝次郎名義）

[表 1-13] 建築世界社による建築図書の一例

刊行年	書名	編著者名	備考
1910	最新家屋建築設計便覧	建築世界社編	須原屋刊
1911	東京勸業展覧会出品建築図案集		
1912	建築図案集——東京勸業展覧会出品 第2回	建築世界社編	
1914	建築用本邦産木材及石材 第1編 木材之部	大蔵省臨時建築部編	
1916	近世建築用材料 上下巻	野呂長四郎著	須原屋書店・ 建築世界社刊
1916	住宅建築	光岡義一 編	
1917	乗除表——新式統計	オルークル著、 光岡義一訳	
1924	表現派作品集 第1集・第2集	浜松義雄編	
1924 ~ 1934	建築講義録		※
1926	フランク・ロイド・ライト作品集 第1集	小山正和編	
1926	建築年鑑 大正15年版	建築世界社編	
1928	建築年鑑 昭和2年度版	建築世界社編	
1928	建築年鑑 昭和3年度版	浜松義雄編	
1928	工学博士長野宇平治作品集	浜松義雄編	
1929	建築士及其職責	ジー・ガデー著、 長野宇平治訳	
1929	近代建築家選 第1 ——エミール・フアーレンカムプ	今井兼次編	
1930	近代建築家選 第2 ——グンナル・アスプルンド	今井兼次編	
1934	数寄屋建築	建築世界社編	建築世界社・ 須原屋書店刊

※『建築講義録』について筆者が確認できたのは、1931年1月刊行の「防火建築」（尾崎久助講述）と「耐震建築」（永田愈郎講述）にかぎられ、「1924～1934年」の継続的な刊行については松永文雄の研究成果によっている（松永文雄『我が国における中等建築教育の確立に関する基礎的研究——大正末、昭和初期の文部省内と建築学会の検討活動を通じて』（p.19、九州大学博士論文、2008年）。

[表 1-14] 彰国社の叢書『東亜建築撰書』

	書名	著者名	刊行年月	備考
1	徳川家霊廟	田辺泰著	1942年11月	
2	アイヌの住居	鷹部屋福平著	1943年3月	
3	名古屋城	城戸久著	1943年3月	
4	アンコール・ワット	藤岡通夫著	1943年5月	
5	法隆寺建築	太田博太郎著	1943年7月	
6	支那庭園論	岡大路著	1943年8月	
7	北方圏の家	鷹部屋福平著	1943年12月	
8	朝鮮の石塔	杉山信三著	1944年3月	
9	日光廟建築	田辺泰著	1944年9月	龍吟社名義で刊行
10	桂御山荘	澤島英太郎著	1944年10月	龍吟社名義で刊行

『支那庭園論』巻末社告に掲載された「第一次目録」には、つぎのような刊行計画が記載された。

台湾の住居（千々岩助太郎）、熱河の古建築（吉村孝義）、本派本願寺建築（藤原義一）、日本城郭建築（服部勝吉）、満州の住居（矢崎高義）、上代神社建築（福山敏男）、春日神社（黒田昇義）、日本民家の構造（棚橋諒）、興福寺（大岡實）、プロ・ブドウール（藤島亥治郎）、題未定（岸田日出刀）、雲崗石窟に於ける北魏建築様式（鈴木義孝）、蒙疆の建築（村田治郎）、鶴林寺（野地修佐）

[表 1-15] 相模書房の叢書『建築新書』

	書名	著者名	刊行年月	備考
1	国民学校	伊藤正文著	1941年12月	
2	工場の建築	平岡正夫著	1941年12月	
3	日本住宅小史	関野克著	1942年3月	
4	二條城	澤島英太郎、吉永義信著	1942年2月	
5	ブルーノ・タウト	蔵田周忠著	1942年7月	
6	建築と火災	内田祥文著	1942年12月	
7	住宅問題	西山卯三著	1942年12月	
8	ナチス独逸の建築	岸田日出刀著	1943年3月	
9	規格家具	剣持勇著	1943年4月	
10	樺太アイヌの住居	山本祐弘著	1943年12月	
11	住宅の平面計画	市浦健著	1943年12月	
12	防空と偽装	星野昌一著	1944年9月	乾元社名義で刊行
13	セメント代用土	中村伸著	1945年2月	乾元社名義で刊行
14	工員寄宿舎	図師嘉彦著	1945年11月	乾元社名義で刊行
15	帰農者住居	竹内芳太郎著	1948年1月	
16	瓦	中村伸著	1949年3月	
13	住宅の平面計画	市浦健 著	1949年	巻数が「13」とされた経緯は不明

『建築新書』の「刊行書目」としては以下が挙げられていた（『建築と火災』『樺太アイヌの住居』などの巻末社告に記載順。刊行が確認できた書目は除く）

煉瓦の建築（石塚彌雄）、新興木造建築（竹山謙三郎）、建築物の振動（河野輝夫）、無筋コンクリート造建築（水原旭）、電弧溶接の強度と計算（仲威雄）、木造建築の強度と計算（後藤一雄）、耐震建築（齋田時太郎）、建築基礎の理論と実際（後藤正司）、鉄筋コンクリート新体制（吉田宏彦）、題未定（二見秀雄）、建築力学及び材料強弱学（勝田千利）、スラブとシャーレン（坪井善勝）、トラスとラーメン（加藤六美）、免震構造（岡隆一）、建築の構造用鉄材（鶴田明）、木材の腐食（十代田三郎）、建築と防水（狩野春一）、建築材料の規格及び試験（栗山寛）、建築と材料（交渉中）、耐火木材と耐火塗料（相三衛）、セメント・コン

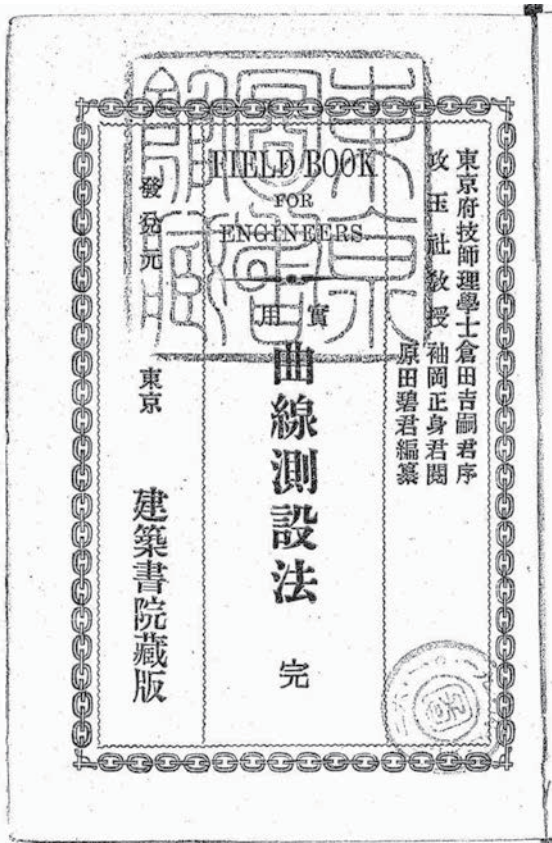
クリート（栗山寛）、新しい建築材料（吉阪隆正）、建築とガラス（今井兼次）、建築と防空（田辺平学）、建築と音響（川島定雄）、題未定（佐藤武夫）、風と建築（谷口吉郎）、雪と建築（竹内芳太郎）、建築保健工学（平山嵩）、建築の現場管理（山下寿郎）、建築の施工（山下寿郎）、建築の断面（星野昌一）、日本建築特技（佐々木孝之助）、新興日本建築（吉田五十八）、明治初期の洋風建築（堀越三郎）、法隆寺（足立康）、パルテノン（滝澤真弓）、古代アテーネ（森田慶一）、千利休・織田有楽齋（堀口捨己）、小堀遠州・古田織部（澤島英太郎）、明治の建築家（岸田日出刀）、オットー・ワグナー（岸田日出刀）、ル・コルビュジユエ（前川國男）、ジョサイヤ・コンデル（田中義次）、ワルタ・グロピウス（蔵田周忠）、ヴイトルビユース（森田慶一）、ブラマンテ（森田慶一）、数寄屋及数寄屋造（大熊喜邦）、神社建築（谷重雄）、寺院建築（太田博太郎）、日本建築の技法（上田虎介）、建築の統制（後藤米太郎）、住宅政策（西山卯三）、国土の構成（高山英華）、建築と庭園（堀口捨己）、建築と医学（大西清治）、建築と衛生（伊東恒治）、建築と化学（交渉中）、建築と物理（交渉中）、建築と気象（交渉中）、建築と経済（交渉中）、建築と色彩（星野昌一）、建築と写真（岸田日出刀）、農村と建築（後藤米太郎）、建築と工芸（鈴木道次）、橋梁美（岸田日出刀）、日本建築史（福山敏男）、支那・印度建築史（田辺泰）、西洋建築史（藤島亥治郎）、日本の城郭（藤岡通夫）、西洋の城郭（田辺泰）、病院設備（大澤一郎、櫻井省吾、東福寺一雄）、工場の給排水及瓦斯設備（櫻井省吾、椎野八朔、本多政富）、工場の暖房換気設備（野崎操一、田家安治）、工場の厚生施設（櫻井省吾、藤井文雄、椎野八朔）、工場の運搬設備（平岡正夫）、電気設備（交渉中）、家具（交渉中）、日本の民家（今和次郎）、満州の民家（村田治郎）、支那の劇場建築（須田敏夫）、支那の造型・装飾（志賀憲一、吉村芳清）、工員の住宅（菊池新平）、開拓地の建築（高原一秀）、大陸の都邑（秀島乾）、記念建造物（藤島亥治郎）、発電所の建築（藍川旭）、厚生建築（市浦健）、アパート建築（市浦健）、ジードルング（伊東五郎）、建築と航空（齋藤寅郎）、劇場・映画館建築（明石信道）、労務者住宅（岡島暢夫）、営団住宅（武基雄）、倉庫の建築（北村勝成）、錬成道場の建築（清田文永）、建築と日照（木村幸一郎）、建築と照明（関重広）、建築と空気調整（土井孝正）



[図 2-1] 建築書院創業者・吉原米次郎 (44 歳ごろ)

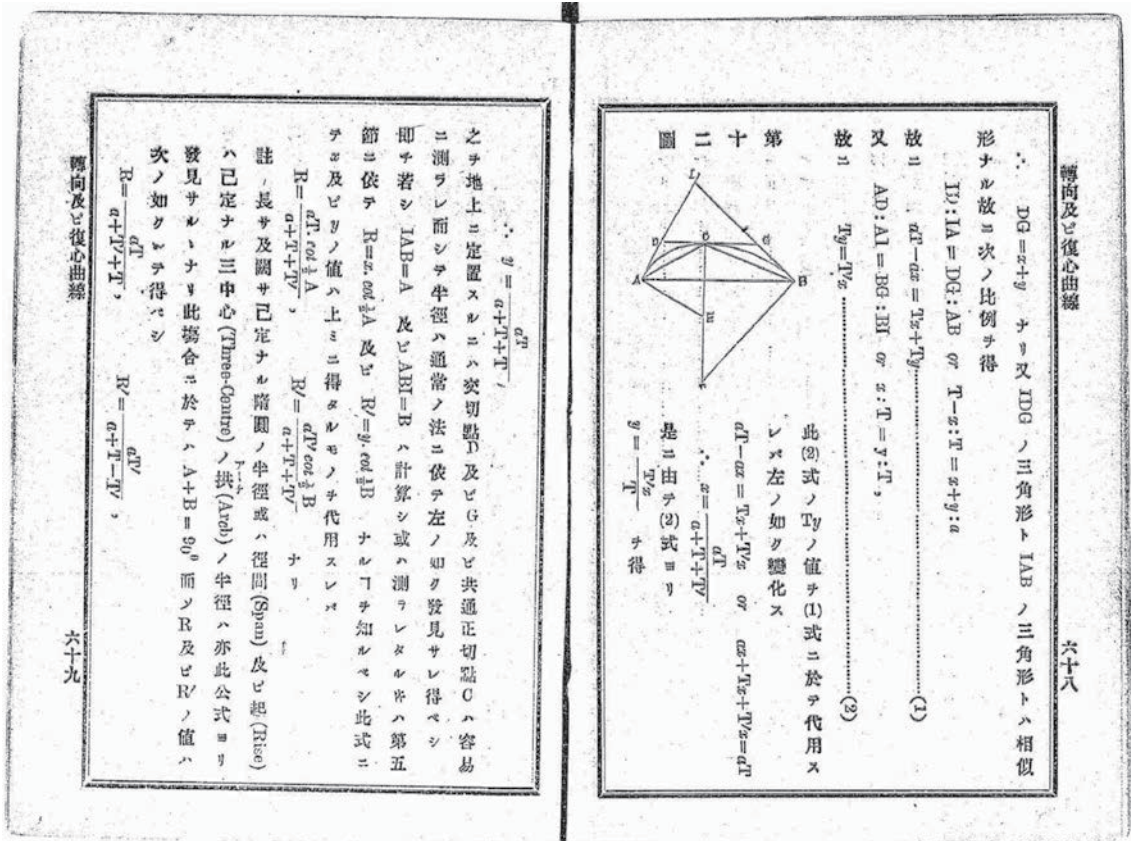
出典：東京書籍商組合編・刊『東京書籍商組合史及組合員概歴』、1912 年、p.141

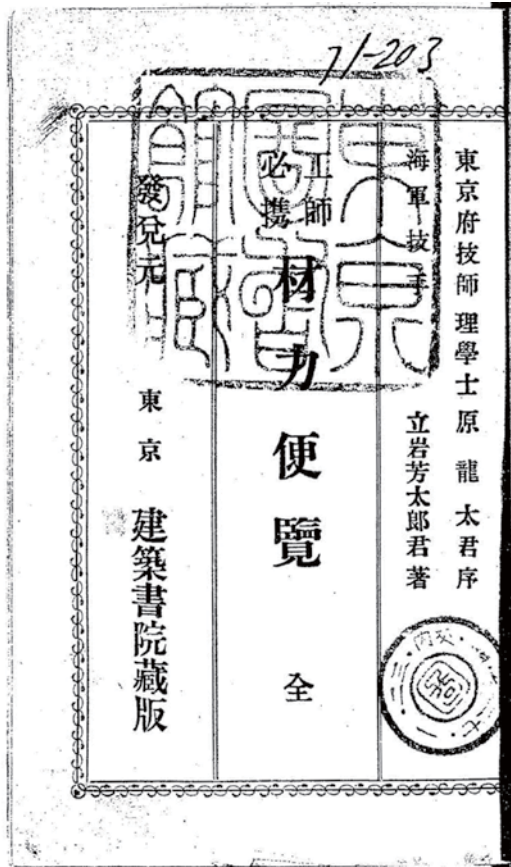
所蔵：国立国会図書館



[図 2-2] 『実用 曲線測設法』

原田碧編、建築書院、
「序」1893年10月付、
扉および pp.68-69





[図 2-3] 『工師必携 材力便覽』

立岩芳太郎著、建築書院、1894年1月、

扉および pp.124-125

所蔵：国立国会図書館

○第五章

中央ノ 荷重 P.	下		中央ノ 荷重 P.	上	
	總計	恒久		總計	恒久
3,184.5	0.3845	— ^{1.5}	6,369.0	0.6369	— ^{1.5}
6.36	0.91	0.025	12,722	1.65	0.07
9.54	1.17	0.050	25,444	3.40	0.12
12.72	1.62	0.100	50,888	6.85	0.38
25.44	3.30	0.125	101,800	14.70	1.47
50.88	6.98	0.508	154,000	32.70	3.56
76.30	11.35	0.888	203,800	31.00	3.93
101.80	15.70	1.470	254,000	40.20	5.97

四十一頁

○第五章

百二十四

ヨリ Rノ値ヲ得ルコト次ノ如シ：

$$R = \frac{6L}{4b^2} (P + \frac{1}{2}P_1) = \frac{6 \times 410 \times 454.16}{4 \times 7.62^2 \times 3.81^2} = 2525 \text{ キロ}$$

故ニ梁ノ中央ニ於ケル一平方センチ横截面ノ纖維ハ凸側ニ二千五百二十五キロノ牽力ヲ保ツベシ。

3 鑄鐵ノ T 形梁ヲ以テシタルホ氏ノ試験 此梁ハ兩端ヲ支ヘ中
央ニ荷重ヲ懸クベシ。

中央ニ荷重ヲ懸クベシ

$b = 12.7 \text{ 「センチ」}$ $Z = 0.84 \text{ 「センチ」}$
 $Z_1 = 0.081 \text{ 「センチ」}$ $b_1 = 0.91$
 $Z_2 = 3.12$ $I = 198.2$
 梁ノ重量…………… P = 17.93 「キロ」

工學士 瀧大吉先生講述

建築學講義録 三

東京 建築書院發兌

[図 2-4] 『建築学講義録』
 瀧大吉講述、卷之三、建築書院、
 1898年10月「第2回合本印刷」版
 (1896年4月第1回合本印刷)、
 扉および pp.576-577
 所蔵・国立国会図書館

建築學講義録

木脚及柱

名	長	幅	釘	釘	釘
一分五厘間	一分五厘	一分五厘	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
二分水脚板	二尺二寸	平均三寸四分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
三分全	一尺三寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
五分全	一尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
六分全	一尺六寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
八分全	一尺八寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
壹寸脚板	二尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
壹寸半脚板	二尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
二尺全	二尺六寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
二尺半全	二尺九寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
三尺全	三尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
三尺半全	三尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
四尺全	四尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
四尺半全	四尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
五尺全	五尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
五尺半全	五尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
六尺全	六尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
六尺半全	六尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
七尺全	七尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
七尺半全	七尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
八尺全	八尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
八尺半全	八尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
九尺全	九尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
九尺半全	九尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十尺全	十尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十尺半全	十尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十一尺全	十一尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十一尺半全	十一尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十二尺全	十二尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十二尺半全	十二尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十三尺全	十三尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十三尺半全	十三尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十四尺全	十四尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十四尺半全	十四尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十五尺全	十五尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十五尺半全	十五尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十六尺全	十六尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十六尺半全	十六尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十七尺全	十七尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十七尺半全	十七尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十八尺全	十八尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十八尺半全	十八尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十九尺全	十九尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
十九尺半全	十九尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
二十尺全	二十尺一寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分
二十尺半全	二十尺四寸	平均三寸五分	平均三寸四分	六分七分半四厘	五分二分

其質を堅くする爲めに炒るべきものとす又此書方を用ゆる時は五寸勾配以上とすべし

五百七十七

建築學講義録

五足

板脚板の三種に分ても唯其厚に依りて名稱を異にするのみ即ち脚板は厚一寸より二分半迄にして木脚板は厚二分五厘より壹分迄脚板は厚壹分より五厘六分十二枚掛迄とす

脚板は本長一尺にして厚は一分即ち一寸板を拾枚に掛きたるもの即ち俗に拾枚掛と唱ゆるものなれども通常の出来合品は長八寸より九寸迄にして厚は七分拾枚掛のものより六分拾枚掛に至る薄きものあり而して脚板の荷遣法は一把の幅延二十五間にして二把を一端と稱し賣買の標位と定む

脚板の五足は脚板の上端に露れたる部分の長の事に依りて第五十一圖のイロ又はハの長なりと知るべし

脚板の五足は脚板の長に從ひて何寸足と云ふ即ち一寸五分足なれば一寸五分足二寸の長あれば二寸足と云ふか如し又其長は材料の大小に因りて長短あるものと知るべし

脚板の五足は脚板に於て脚板を著く時は五足を一寸五分より三寸迄とすし脚板の釘にて脚板を打付くるものにして若し竹釘を用ゆる時は

五百七十六

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
001	1893.10	土木	実用曲線測設法	原田碧編	倉田吉嗣序	奥付なし	吉原米次郎	松本義保、積文舎		国立国会図書館
002	1894.01	工業	工師必携材力便覧	立岩芳太郎著	原龍太序	吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
参考情報	1894.01*	建築	欧米建築	下田菊太郎著	久留正道閲				未確認。1889私家版（「大売捌」は丸善商店、哲学書院、博聞社の市販化か。	
参考情報	1894.01*	建築	地震家屋	佐藤勇造著					未確認。1893「共益商社」発売、著者が発行人で同著者・同書名あり	
003	1894.04	土木・建築	摘要石灰及セメント使用法	亀井重磨編纂	中島鋭治序	吉原米次郎	松本義保、積文舎	1899.10訂正増補再版		国立国会図書館
004	1894.06	土木	応用水道新書	亀井重磨著	山崎鉦次郎校閲	吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
005	1894.11	土木	土木必携	二見鏡三郎著		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
006	1895.06	土木	土木工学講義第1号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
007	1895.07	土木	土木工学講義第2号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
008	1895.08	土木	土木工学講義第3号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
009	1895.10	土木	土木工学講義第4号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
010	1895.11	土木	土木工学講義第5号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
011	1895.12	土木	土木工学講義第6号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
012	1896.01	土木	土木工学講義第7号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
013	1896.02	土木	土木工学講義第8号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館
014	1896.02	土木	土木工学：橋梁編上	西川新太郎編	田辺朔郎校閲、倉田吉嗣序	1899訂正増補再版＝吉原米次郎	松本義弘、積文舎			国立国会図書館
015	1896.03	土木	土木工学講義第9号	二見鏡三郎講述		吉原米次郎	松本義保、積文舎			国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
016	1896.04	建築	建築学講義録 卷之一	瀧大吉講述	瀧大吉講述	1909年16版合 本＝吉原米次	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
017	1896.04	建築	建築学講義録 卷之二	瀧大吉講述	瀧大吉講述	1909年16版合 本＝吉原米次	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
018	1896.04	建築	建築学講義録 卷之三	瀧大吉講述	瀧大吉講述	1896版第一回 合本印刷未確 認→1898版第 二回合本印刷 ＝吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
019	1896.04	土木	土木工学講義 第10号	二見鏡三郎講 述	二見鏡三郎講 述	吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
020	1896.04	土木	土木工学:橋 梁編 下	西川新太郎編	田辺朔郎校閲	1900訂正増補 再版＝吉原米 次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
021	1896.05	土木	土木工学講義 第11号	二見鏡三郎講 述	二見鏡三郎講 述	吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
022	1896.06	土木	実用鉄道建設 技術者必携	大塚梅三郎、 内田録雄著	吉川三次郎校 閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
023	1896.06	土木	土木工学講義 第12号	二見鏡三郎講 述	二見鏡三郎講 述	吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
024	1896.09	土木	土木工学講義 第13号	二見鏡三郎講 述	二見鏡三郎講 述	吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
025	1896.10	土木	鉄道貨物運送 便覧	井関喜一郎編	真弓武八訂正	1898訂正増補 再版＝吉原米 次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
026	1896.10	土木	土木工学:治 水編	瀬賀熊太郎編	永田銚輔校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
027	1896.10	土木	土木工学講義 第14号	二見鏡三郎講 述	二見鏡三郎講 述	吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
028	1896.11	建築	建築学提要	千葉末吉著	中村達太郎校 閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館	翻刻か。1891「淵点堂」発 売、著者が発行人で同著 者・同書名あり	国立国会図書館
029	1896.11	土木	実用鉄道工学 講義	安河内鶴千代 編	橋本秀威校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
030	1897.00	土木	実用図解鉄道 線路工事便覧	建築書院編	建築書院編			国立国会図書館		京大、九大
031	1897.02	土木	土木工学講義 第15号	二見鏡三郎講 述	二見鏡三郎講 述	吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
032	1897.03	土木	測量学全書 上 巻	岡村森彦編	河野鯉雄校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
033	1897.05	土木	土木工学:水利編	編著者1 長多喜三太郎 編	近藤仙太郎 校閲	吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
034	1897.05	土木	土木工学講義 第16号	二見鏡三郎 講述		吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
035	1897.07	建築	木造洋館雛形 集上巻	吉原米次郎 編		吉原米次郎	関口嘉一郎、 関口丁酉堂	国立国会図書館		国立国会図書館
036	1897.07	土木	土木工学:市 街道路編	亀井重麿 著	三田善太郎 校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
037	1897.07	工業	実用工業数学	立岩芳太郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
038	1897.08	建築	建築工事設計 便覧	大泉龍之輔 編	瀧大吉、野村 一郎 校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館、 国立国会図書館		国立国会図書館、 国立国会図書館
039	1906.11	工業	工場用材料	一戸清方 著	阪田貞一、河 合鈿太郎 校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	他社初版の「増補再版」。 初版1897.08共益商社		国立国会図書館
040	1897.09	土木	測量学全書下 巻	岡村森彦 編	河野鯉雄 校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
041	1897.09	土木	土木工学講義 第17号	二見鏡三郎 講述		吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
042	1897.10	土木	日英対照 鉄道 土木建築機械 用語か次引	内田録雄 編		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
043	1897.10	土木建 築	土木建築工事 設計要表	原田碧				京大、岩手大		
044	1898.02	土木	新編実用 鉄道 工師必携	大西正信 編	木寺則好 校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
045	1898.03	土木	対話自在 鉄道 職員用日英会 話	片岡喜三郎、 依田忠四郎 編	河本泰 補正	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
046	1898.06	建築	木造洋館雛形 集下巻	吉原米次郎 編		吉原米次郎	関口嘉一郎、 関口丁酉堂	国立国会図書館		国立国会図書館
047	1898.10	土木	理論応用 橋梁 構造編	坂岡末太郎 著		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
048	1899.02	土木	土木工学講義 第18号	二見鏡三郎 講述		吉原米次郎	松本義保、積 文舎	国立国会図書館	第三編 橋梁論 / 第五章 鐵製桁構橋	国立国会図書館
049	1899.03	建築	家屋改良談	土屋元作 著		時事新報社		京大	売捌所が建築書院	京大
050	1899.04	工業	独学実用 製図 法自在	竹貫直次 編、 前沢初治 補		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館
051	1899.04	土木	袖珍工師必携 第1編 鉄道編	ジョン・シー・ト ラウトワイン 著、 片岡喜三郎 訳		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎	国立国会図書館		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
参考情報	1899.04*	土木	最新 電車馬車 鉄道工式		佐々木恒太郎 編				未確認。189904_独学実 用製図法自在 巻末社 告あり。	
052	1899.05	土木	応用図式力学		マンズフィールド ド・メリマン, ハ ンリー・ジャンコ ビー 著, 金井 彦三郎 訳					国立国会図書館
053	1899.05	土木	鉄道職員必携 汽車速度早見 表:附・鉄道要 表		中里一郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
054	1899.06	土木	応用自在測量 器械取扱法		G.W.Usill (ユ シール) 著 竹貫, 直次	Usill, George William. and 竹貫, 直次	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
055	1899.06	土木	実用水理		トーマス・ボック ス 著	Box, Thomas and 十川, 嘉太 竹貫, 直次	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
056	1899.07	土木	新選測量用三 角術		G.W.Usill 著	竹貫直次	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
057	1899.07	土木	応用自在測量 術階梯		G.W.Usill 著	Usill, George William. and 竹貫, 直次	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
058	1900.02	土木	測量公式	土木学公式 第 1編	金井彦三郎 編					東大農学部ほか3館蔵
059	1900.03	土木建 築	土木建築材料 検査及使用方法		竹貫直次、前 沢初治 編					東大農学部ほか5館蔵
060	1900.05	土木	水理公式	土木学公式 第 2編	金井彦三郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
061	1900.08	土木	道路公式	土木学公式 第 3編	金井彦三郎 編					東大農学部ほか3館蔵
062	1900.11	土木	鉄道工事設計 用諸表		大塚樸三郎、 内田録雄 著					東大農学部ほか3館蔵
063	1900.12	土木	応用数学公式 増訂第2版		金井彦三郎 編				刊行年月は増訂第2版	九大ほか2館所蔵
064	1901.02	土木	土木工学: 土 工編		大西正信 編		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
065	1901.03	土木	市区郡役所町 村役場員職務 用独習 実地測 量術簡易早学		田中三郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
066	1901.04	土木	材料強弱	土木学公式 第4編	金井彦三郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
067	1901.04	土木	土木工学:実用道路編		竹貫直次 編	蔵重哲三校閲	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
068	1901.05	建築	教科適用 矩尺原理及使用法		島邦生 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
069	1901.06	土木	各府県庁市区郡役所村役場適用 土木職員必携		竹貫佳水 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
070	1901.10	土木	結構公式	土木学公式 第5編	金井彦三郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
071	1901.12	建築	ハースト氏 建築必携		今井殿三郎 訳	滝大吉校閲	吉原米次郎	松本義弘、積文舎	著者=Hurst, John Thomas	国立国会図書館
072	1902.02	土木	鉄材重量及計算表	工学叢書 第1編	金井彦三郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
073	1902.05	土木建築	土木建築材料 継手法	工学叢書 第2編	中村猪一 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
074	1902.06	土木	ワゲル氏鉄橋設計示方書		金井彦三郎 訳		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
075	1902.08	土木	土木工学:材料及施工編		竹貫直次 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
076	1902.09	土木	橋梁公式	土木学公式 第6編	金井彦三郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
077	1902.10	土木	実用河川工事要覧		亀井重鷹 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
078	1902.10	土木	木橋設計便覧		金井彦三郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
079	1902.10	土木	土木工学:砂防工編		中村猪市 編	山内一太郎校閲	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
080	1903.03	土木	英和对訳 実用土木字典		竹貫直次 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
081	1903.03	土木・建築	土木建築材料及構造強弱編		中村猪市 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
082	1903.04	機械	実用機関学問答		清水増太郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
083	1903.04	土木	実用鉄道隧道編		内田録雄 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
084	1903.08	工業	通俗 鉱山学問答		津田房之助 編	大久保藤吾序	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
085	1903.09	機械	海陸火夫実用 問答	清水増太郎 編	清水増太郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
086	1903.09	土木	鉄橋設計及施 工実例図面	建築書院編輯 部 編	金井彦三郎 校 閲		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
087	1903.11	電気	実用電気学問 答	電気学研究会 編	遠藤又蔵校閲		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
参考 情報	1904*	土木	土木行政法	竹貫、佐々木、 前澤共著					未確認。社告190407_最 近実験木材防腐法	
参考 情報	1904*	土木	土木百話			工学館発行			未確認。社告190407_最 近実験木材防腐法	
参考 情報	1904*	工業	実用袖珍工師 之友	亀井重磨 著	三田善太郎序				未確認。社告1901.03実 地測量術簡易早学ほか3 点に掲載	
参考 情報	1904*	工業	英文チヤン パース対数表			建築書院発売 (翻刻)			未確認。社告190407_最 近実験木材防腐法ほか3 点に掲載	
088	1904.01	工業	製図彩色法	亀井重磨 著			吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
089	1904.01	工業	新式実験染色 法	高橋藤蔵 編			吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
090	1904.03	建築	実用木材尺 便覧	造林学研究会 編			吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
091	1904.04	電気	最新電気鍍金 法	高橋藤蔵 編			吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
092	1904.05	土木	土木工学講義 合本	二見鏡三郎 著					1895-96年刊18巻本の合 本	東大農学部ほか10館 所蔵
093	1904.07	工業	最近実験木材 防腐法	齋藤正平 編	守屋物四郎校 閲		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
094	1904.07	土木	土木学入門	亀井重磨 著			吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
095	1904.08	機械	機械材料強弱 学	野津正之助 著			吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
096	1904.09	機械	実用機械学問 答	清水増太郎 編			吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
097	1904.09	造船	実用船舶機関 士受験問答	御園重太 編	馬場哲次郎校 閲		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
098	1905.04	土木	農業用土木学	亀井重磨 著			吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
099	1905.04	工業	工業実用文例	高橋毅堂 著	大久保藤吾序		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
100	1905.04	工業	新撰工業力学		市川忠一 編	甘利忠 校閲	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
101	1905.06	機械	蒸汽機関実地取扱法		清水増太郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
102	1905.08	建築	建築工事仕様便覧		小國巳一 編	中條精一郎、柴垣鼎太郎校	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
103	1905.08	造船	潜水業		齋藤高保 編	高田善一題字【ママ】、丹羽鋤彦序文	齋藤高保	廣瀬安七、東京印刷横浜分社	荒捌所が建築書院	京大ほか4館所蔵
104	1905.08	工業	工業簿記		山田四朗 著	波多野重太郎序	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
105	1905.09	機械	実用汽力指示器取扱法		市川忠一 編訳		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
106	1905.09	建築	和洋建築工事仕様設計実例上		田中豊太郎 編	辰野金吾序、妻木頼黄序、三橋四郎校	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
107	1905.09	土木	木橋設計参考図面	——附・材料調書及予算調書作成法	坂岡末太郎 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
108	1905.12	工業	応用分析術		高橋藤蔵 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
109	1906.02	造船	船舶運用術		野村保胤、安田厚三 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
110	1906.04	造船	航海術		篠田理作、安田厚三 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
111	1906.04	工業	実用力学初歩		中村猪市 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
112	1906.05	機械	瓦斯及石油機関取扱法		清水増太郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
113	1906.05	電気	応用電気工学		佐伯順太郎 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
114	1906.05	電気	架空電線路建築一斑		若目利助 講述		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
115	1906.06	建築	匠工必携		柴田四子 吉				1886.06著者発行書あり。その再刊か、	京大ほか計2館所蔵
116	1906.06	造船	和洋端艇漕法	——附 競漕術	安田厚三 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
117	1906.06	工業	製図用文字及輪廓		山本公介 編	大沼文哉序	山本公介	江口辰、印刷所 江口商店印刷部	荒捌所が建築書院	国立国会図書館
118	1906.07	造船	応用水泳術		大塚証之助 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
119	1906.07	造船	海上衝突予防法註釈	副題——附防实例	林儀一郎、安田厚三著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
120	1906.10	造船	航海数学		安田厚三著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
121	1906.11	造船	現行海事法令		建築書院海事図書部編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
122	1907.01	建築	和洋住宅間取実例図集		越本長三郎(新姓:鵜飼=ndi記載)	伊東忠太校閲	吉原米次郎	「印刷者 奥山鏡吉」「彫刻者 豊田嘉兵衛」「印刷所 清鏡堂」		国立国会図書館
123	1907.01	土木	農業土木耕地整理実施設計例		井上福一郎編	杉野茂吉、三宅鏗吉、吾孫子勝校閲	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
124	1907.03	機械	実用機関算法及例題		清水増太郎編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
125	1907.07	機械	機械実用計算法		大石聞二編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
126	1907.07	工業	実用鉱物鑑定及分析便覧		高橋藤蔵著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
127	1907.09	建築	各種商店建築図案集		鵜飼長三郎(旧姓:越本)【奥付ママ】	伊東忠太校閲	吉原米次郎	「印刷者 奥村鏡吉」「彫刻者 豊田嘉兵衛」「印刷所 清鏡堂」「印刷所 積文舎」		国立国会図書館
128	1907.12	電気	理論応用通俗電気学		若目田利助著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
129	1908.02	機械	機械工学便覧		市川忠一編		吉原米次郎	印刷者 野村宗十郎印刷所 東京築地活版製造所		国立国会図書館
130	1908.04	機械	通俗蒸汽機関術		村田篤由著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
131	1908.04	工業	新撰製図用文字及図譜集		神門久太郎		吉原米次郎	「彫刻者 豊田嘉兵衛」「印刷者 香山秀吉」「印刷所 香山石版印刷所」		国立国会図書館
132	1908.04	造船	造船学講義		武田甲子太郎著		吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
133	1908.05	電気	英和对訳 電氣用語	電氣	若目田利助 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
134	1908.06	機械	齒輪設計及製図法	機械叢書	大石聞二 編					東大ほかに計館所蔵
135	1908.06	工業	鉱山実地測量術		高橋藤蔵 著		吉原米次郎	印刷者 中村彌助 印刷所 近藤商店(同心日吉町10)		国立国会図書館
136	1908.06	工業	実用 金属分析 自在		高橋藤蔵 著		吉原米次郎	印刷者 中村彌助 印刷所 近藤商店(同心日吉町10)		国立国会図書館
137	1908.06	工業	カード式工業記帳法		山田四朗 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
138	1908.08	電気	実用 電氣工師 便覧		石田政之助 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
139	1908.09	建築	和洋建築工事仕様設計実例 下		田中豊太郎 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
140	1908.09	土木建築	土木建築技術 便覧		清水熊蔵 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
141	1908.11	機械	機械割出及製図法		市川忠一 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
142	1908.11	電気	電話		若目田利助 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
143	1908.12	電気	電池		斎藤正平 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
144	1909.04	造船	陸用汽缶汽機 取扱問答		御園重太 編	芳賀惣治郎 序、原田九郎	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
145	1909.04	工業	実用 製図学		神門久太郎 著		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
146	1909.09	機械	機械工具焼入 法		中山虎吉 編		吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館
147	1909.10	電気	電氣及磁気		若目田利助 著		吉原米次郎	(松本義弘、積文舎)再確認		国立国会図書館
148	1910.05	建築	裝飾图案法		森田洪 著	小笠原長生題 辭、伊東忠太・今泉雄作序、大澤三之助・島田佳矣校閲	吉原米次郎	松本義弘、積文舎		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
149	1910.07	建築	和洋住宅建築 図集	——附 家屋諸 造作雛形	吉原米次郎 編	伊東忠太、伊 藤為吉・佐藤 豊次郎・田中 豊太郎校閲	吉原米次郎	「銅版彫刻者 豊田嘉兵衛」 「印刷所 清鏡 堂」印刷所 積文舎」		国立国会図書館
150	1910.07	建築	日本住宅室内 装飾法		杉本文太郎 著	秋元興朝題 辞、今泉雄作・ 高橋義雄序	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
151	1910.11	建築	日本庭造法図 解		杉本文太郎 著	大村民次郎 画 (奥付「図画 者」)	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎、「製版所 田中写真製版 1911.1.1三版	賜天覽台覽。1910.11.18 発行、1910.11.30再版、 1911.1.1三版	国立国会図書館
152	1910.09	土木	土木工事設計 便覧		井上福一郎 著	服部鹿次郎 序、長崎武英 序及校閲	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
153	1911.04	建築	外形と諸部百 種	日本家屋写真 叢書	建築書院編輯 局 撮影(編集 兼発行者吉原 米次郎)		吉原米次郎	大江太、大江 写真製版所、 製本所・植木 瀧蔵		国立国会図書館
154	1911.04	建築	床棚百種口上 巻	日本家屋写真 叢書	建築書院編輯 局 撮影(編集 兼発行者吉原 米次郎)		吉原米次郎	大江太、大江 写真製版所、 製本所・植木 瀧蔵		国立国会図書館
155	1911.04	建築	床棚百種口下 巻	日本家屋写真 叢書	建築書院編輯 局 撮影(編集 兼発行者吉原 米次郎)		吉原米次郎	大江太、大江 写真製版所、 製本所・植木 瀧蔵		国立国会図書館
156	1911.04	建築	欄間百種	日本家屋写真 叢書	建築書院編輯 局 撮影(編集 兼発行者吉原 米次郎)		吉原米次郎	大江太、大江 写真製版所、 製本所・植木 瀧蔵		国立国会図書館
157	1911.04	建築	建具と手摺百 種	日本家屋写真 叢書	建築書院編輯 局 撮影(編集 兼発行者吉原 米次郎)		吉原米次郎	大江太、大江 写真製版所、 製本所・植木 瀧蔵		国立国会図書館
158	1911.04	建築	門と玄関百種	日本家屋写真 叢書	建築書院編輯 局 撮影(編集 兼発行者吉原 米次郎)		吉原米次郎	大江太、大江 写真製版所、 製本所・植木 瀧蔵		国立国会図書館
159	1911.04	建築	茶室と茶庭図 解		杉本文太郎 著	大村民次郎 画 (奥付「図画 者」)	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎、「製版所 田中写真製版		国立国会図書館 大ほか14館所蔵

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
160	1911.06	建築	和漢洋家屋諸 造作応用図案 上巻		森田洪 著 [中 扉 = 図案]	正木直彦題 辞、曾禰龍蔵・ 古宇田貫序	吉原米次郎	「彫刻者 豊田 嘉兵衛」[印刷 者 香山秀吉] 「印刷所 研香 堂石版所」		国立国会図書館
161	1911.06	建築	日本各時代室 内装飾法		杉本文太郎 著	土方久元・股 野琢・今泉雄 作題辞	吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
162	1911.08	機械	実用 機械製図 学 下		大石聞二 著		吉原米次郎	香山秀吉、香 山石版印刷所	上巻は本文、下巻は図面 集(判型も印刷所も異な る)	国立国会図書館
163	1911.08	機械	実用 機械製図 学 上		大石聞二 著		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
164	1911.11	電気	電気学ABC		若目田利助 著		吉原米次郎	松本義弘、積 文舎		国立国会図書館
165	1912.00	土木	実地応用測量 術独習自在 第 5版		田中宗三郎				再版か(1901.03市区郡役 所町村役場員職務用独習 実地測量術簡易早学)	北大ほか2館所蔵
166	1912.03	建築	図解日本座敷 の飾り方		杉本文太郎 著	高輪其堂 画	吉原米次郎	印刷: 渡邊為 蔵・民友社、整 版: 田中写真 製版所、製本: 植木瀧蔵	賜天覧台覧	国立国会図書館
167	1912.04	建築	西洋庭造法図 解		杉本文太郎 著	高輪其堂 画	吉原米次郎	印刷: 渡邊為 蔵・民友社、整 版: 田中写真 製版所、製本: 植木瀧蔵		国立国会図書館
168	1912.04	建築	日本住宅室内 飾り道具図解		杉本文太郎 著	小塚芳舟 画	吉原米次郎	印刷: 渡邊為 蔵・民友社、整 版: 田中写真 製版所、製本: 植木瀧蔵	『図解日本座敷の飾り方』 姉妹編(序p.2)	国立国会図書館
169	1912.05	土木	土木林業 砂防 工事書	土木叢書	中村猪市 編		吉原米次郎	渡邊為蔵、民 友社		国立国会図書館
170	1912.08	機械	機械据付及運 転法	機械叢書	市川忠一 編					東大ほか11館所蔵
171	1912.09	電気	電灯	電気叢書	建築書院編輯 局 編(編集兼 発行者吉原米 次郎)	扇本眞吉 校閲	吉原米次郎	牛来丈助、千 代田印刷		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
172	1912.09	土木	鉄筋「コンクリート」設計実例	土木叢書	井上福一郎 編	服部鹿次郎 序、長崎武英 序及校閲	吉原米次郎	渡邊為蔵、民友社		国立国会図書館
173	1912.10	建築	和漢洋家屋諸造作応用図案 下巻		森田洪 著 [中扉 = 図案]	正木直彦 題 辞、曾禰龍蔵・古宇田貫 序	吉原米次郎	「彫刻者 豊田嘉兵衛」「印刷者 堀野與七」「印刷所 東光印刷」		国立国会図書館
174	1912.10	建築	新撰日本庭造図面百種及其説明		杉本文太郎 著	大村令邦、高輪其堂 (奥付「図画者」)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所、「図画 大村令邦、高輪其堂」「製版 田中写真製版所」「製本所・植木瀧蔵」	1919.07第6版で賜天覽台覧か	国立国会図書館 大ほか8館所蔵
175	1912.10	建築	実用建築材料 編	建築叢書	天野郁介 編		吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館
176	1913.02	機械	海陸機関士受験参考及実地問答便覧		御園重太 編		吉原米次郎	牛来丈助、千代田印刷		国立国会図書館
177	1913.02	電気	電気機械及器具図解		建築書院編輯局 編	若目田利助 校閲				東北大ほか2館所蔵
178	1913.08	電気	電気学手ほどき		若目田利助 著		吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館
179	1913.09	建築	日本住宅建築図案百種		金子清吉 著	伊東忠太 校閲	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所	創業25周年記念、天覽台覧	国立国会図書館
180	1913.09	土木	実用木橋編	土木叢書	井上福一郎					京大ほか計11館所蔵
181	1914.04	土木	水力電気工事 編	土木叢書	井上福一郎 著					国立国会図書館
182	1915.06	建築	二坪より百坪まで日本庭造真行草三体図案 新書	——附 築庭法心得及仕様書と工事予算書	杉本文太郎 著	秋元興朝 題 辞	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所、製本所・植木瀧蔵		国立国会図書館
183	1915.07	電気	電気工学ポケット・ブック		若目田利助、高津清 編		吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所	1915第3版、191806第6版	国立国会図書館
184	1916.03	建築	茶室構造法図解		杉本文太郎 著					京大ほか2館所蔵

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1 局編	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
185	1916.05	電気	電気工業力学	電気叢書	建築書院編輯局編	冨本真吉・高津清・村尾菜津修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館
186	1916.06	電気	電力輸送	電気工学初等叢書	建築書院編	冨本真吉・高津清・村尾菜津修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所	叢書が総ルビ、50銭均一	国立国会図書館
187	1916.08	電気	電気通論	電気工学初等叢書	建築書院編	冨本真吉・高津清・村尾菜津修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館
188	1916.09	建築	日本住宅の保全と諸什器取扱ひ法	——附室内裝飾法心得	杉本文太郎 著	渋澤栄一題辞	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館
189	1916.12	電気	交流理論	電気工学初等叢書	建築書院編	冨本真吉・高津清・村尾菜津修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館
190	1917.02	電気	電池工学	電気工学初等叢書	建築書院編	冨本真吉・高津清・村尾菜津修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館
191	1917.04	電気	電気測定器	電気工学初等叢書	建築書院編	冨本真吉・高津清・村尾菜津修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		東大ほか7館所蔵
192	1917.06	電気	電気磁気測定	電気工学初等叢書	建築書院編	冨本真吉・高津清・村尾菜津修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所	1918.12第5版	
193	1917.08	建築	日本住宅雑作図案五百種		金子清吉 著	伊東忠太校閲	吉原米次郎	銅版彫刻: 渡邊影堂、印刷: 佐藤保太郎、文祥堂印刷所 石板印刷: 奥村鏡吉、製本所: 植木瀧蔵		国立国会図書館

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
194	1917.08	電気	直流機械	電気工学初等叢書	建築書院編	夙本真吉・若目田利助・高津清・村尾榮監修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		国立国会図書館 京大農学部ほか6館 所蔵
195	1918.01	建築	築山庭造伝前編下		北村援琴著	承議郎金吾校尉、藤井宿祢重好畫画	吉原米次郎	西村多三郎	1735年刊、相阿弥流の作庭書	国立国会図書館 京大農学部ほか6館 所蔵
196	1918.01	建築	築山庭造伝前編中		北村援琴著	承議郎金吾校尉、藤井宿祢重好畫画	吉原米次郎	西村多三郎	1735年刊、相阿弥流の作庭書 国立国会図書館奥付なし	国立国会図書館 京大農学部ほか6館 所蔵
197	1918.01	建築	築山庭造伝前編上		北村援琴著	承議郎金吾校尉、藤井宿祢重好畫画	吉原米次郎	西村多三郎	1735年刊、相阿弥流の作庭書 国立国会図書館奥付なし	国立国会図書館 京大農学部ほか6館 所蔵
198	1918.01	建築	築山庭造伝後編下		籬島軒秋里画述	玄二菴遺齋校訂	吉原米次郎	西村多三郎	1735年刊、相阿弥流の作庭書	国立国会図書館 京大農学部ほか6館 所蔵
199	1918.01	建築	築山庭造伝後編中		籬島軒秋里画述	玄二菴遺齋校訂	吉原米次郎	西村多三郎	1735年刊、相阿弥流の作庭書 国立国会図書館奥付なし	国立国会図書館 京大農学部ほか6館 所蔵
200	1918.01	建築	築山庭造伝後編上		籬島軒秋里画述	玄二菴遺齋校訂	吉原米次郎	西村多三郎	1735年刊、相阿弥流の作庭書、前編：上中下、後編：上中下 国立国会図書館奥付なし	国立国会図書館 京大農学部ほか6館 所蔵
201	1918.02	造船	実用造船術製図編		足達三三三著	坂本一題辞、今岡純一郎、永村清序	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		
202	1918.04	機械	通俗瓦斯機関 下里編 使用法				吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		
203	1918.04	工業	実用吹管分析 第10版		湯川巖				初版他社か(1909.11 青山高山堂)	金沢大ほか3館所蔵
204	1918.04	工業	応用鉱山地質学 第10版		湯川巖				初版他社か(1911.10 高山堂)	日大文理ほか2館所蔵
205	1918.09	建築	世界の建築様式		森田洪著	塚本靖題辞、大澤三之助序			ndl-oは奥付欠	京大ほか15館所蔵
206	1918.11	電気	交流機械	電気工学初等叢書	建築書院編	夙本真吉・若目田利助・高津清・村尾榮監修(すべて工学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、文祥堂印刷所		

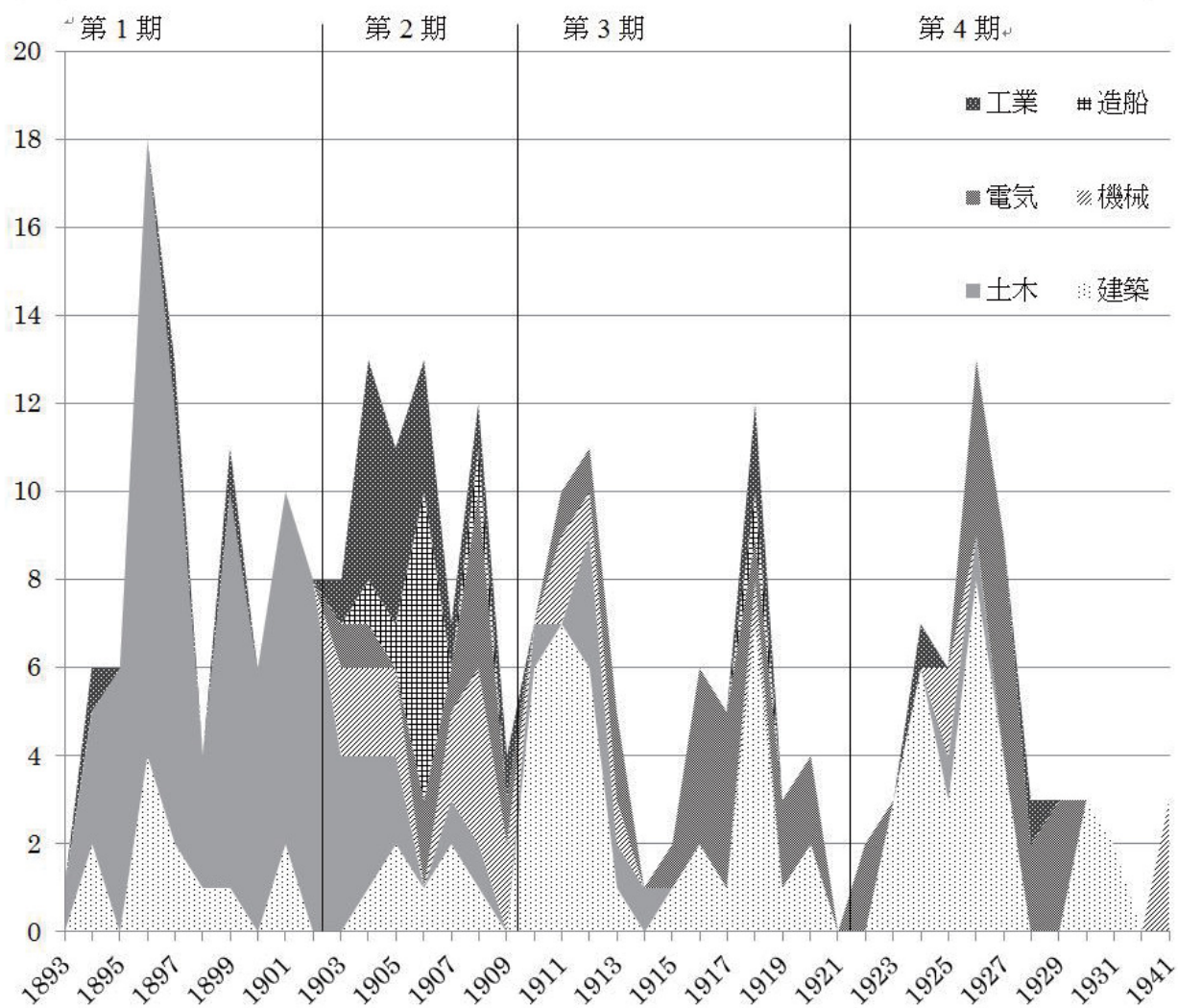
no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
207	1919.06	建築	かし家と小住宅 建築図案五十 種		建築書院編輯 局 編	曾禰龍蔵題 辞、笠原敏郎 序	吉原米次郎	銅版彫刻：渡 邊影堂、銅版 印刷：奥村鏡 吉、清鏡堂印 刷所、印刷：左 藤保太郎、文 祥堂印刷所 製本所：市村		
208	1919.07	電気	現代の電話工 学		若目田利助 著		吉原米次郎	佐藤保太郎、 文祥堂印刷所		
209	1919.09	電気	無線電信電話	電気工学初等 叢書	建築書院 編	兩本真吉・若 目田利助・高 津清・村尾采 監修(すべて工 学士)	吉原米次郎	佐藤保太郎、 文祥堂印刷所		
210	1920.03	電気	変圧器及誘導 電動機	電気工学初等 叢書	建築書院 編	兩本真吉・若 目田利助・高 津清・村尾采 監修(すべて工 学士)	吉原松	佐藤保太郎、 文祥堂印刷所	発行者交替	
211	1920.09	建築	日本建築欄間 図集		伊藤虎三 著	曾禰龍蔵題辞	吉原松	彫刻者：渡邊 影堂、印刷者： 奥村鏡吉、清 鏡堂印刷所		
212	1920.10	建築	日本建築建具 図集		伊藤虎三 著	曾禰龍蔵題辞	吉原松	彫刻者：渡邊 影堂、印刷者： 奥村鏡吉、清 鏡堂印刷所		
213	1920.11	電気	汽力発電所	電気工学初等 叢書	建築書院 編	兩本真吉・若 目田利助・高 津清・村尾采 監修(すべて工 学士)	吉原松	佐藤保太郎、 文祥堂印刷所		
214	1922.03	電気	照明工学	電気工学初等 叢書	建築書院 編	兩本真吉・若 目田利助・高 津清・村尾采 監修(すべて工 学士)	株式会社建築 書院 代表者 今津源右衛門	鷺見知枝磨、 鷺見文友堂	発行者交替、移転	

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
215	1922.11	電気	電灯工学	電気工学初等叢書	建築書院編	本真古・若目田利助・高津清・村尾栄監修(すべて工学士)	建築書院今津源右衛門	鷺見知枝麿、鷺見文友堂		
216	1923.02	建築	建築図案	——文化生活と其の住宅	山中節治 著					京大ほか13館所蔵
217	1923.05	建築	図解庭園樹木手入法	野間守人 著	野間守人 著	原熙 序	建築書院今津源右衛門	川崎佐吉、川崎活版所		
218	1923.08	建築	庭園樹木要覧	野間守人 編	野間守人 編		建築書院今津源右衛門	川崎佐吉、川崎活版所		
219	1924.02	建築	六坪より七十坪まで新しき日本住宅の間取と外形図集		建築書院編		建築書院今津源右衛門	山縣秀助、秀美堂印刷所	序: 曾禰龍蔵	
220	1924.03	建築	木造耐震家屋構造法	——附 準防火設備	鈴木孫三郎 著		建築書院今津源右衛門	秀文社印刷所		
221	1924.04	工業	工業用対数付簡易度量衡換算表		鈴木孫三郎 著				国立国会図書館蔵は奥付 九欠	
222	1924.05	建築	鈴川式計算図表度量衡換算図表		鈴木孫三郎 著		建築書院今津源右衛門	岡田吉三郎		
223	1924.07	建築	誰にもわかる市街地建築物法図解		鈴木孫三郎 著		建築書院今津源右衛門	鷺見知枝麿、鷺見文友堂		
224	1924.08	建築	最近欧米模範建築図集	第一集 仏蘭西住宅之部	永江亘 編		建築書院今津源右衛門	鷺見知枝麿、(写真) 錦陽堂美術整版所、文友堂		
225	1924.09	建築	商店建築及店頭計画図案		府立東京商工奨励館編		建築書院今津源右衛門	山縣秀助、ほか装幀、撮影など明記	序: 岡田信一郎、帝都復興建築資料展覧会のコンペ図集	
226	1925.05	機械	機関の原理及構造	最新自動車工学大成 第1巻	藤田治夫、油谷十二、清水隆、西田順一		建築書院今津源右衛門	山縣秀助		
227	1925.05	機械	機関装置	最新自動車工学大成 第2巻	藤田治夫、油谷十二、清水隆、西田順一		建築書院今津源右衛門	山縣秀助		
228	1925.05	土木建築	鉄筋コンクリート速算法		原田碧 著					国立国会図書館、京都工織大ほか5館所蔵

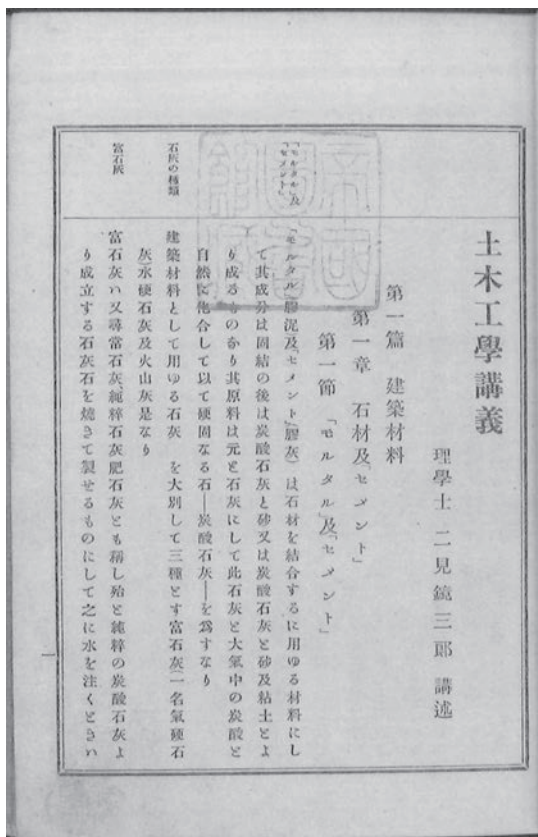
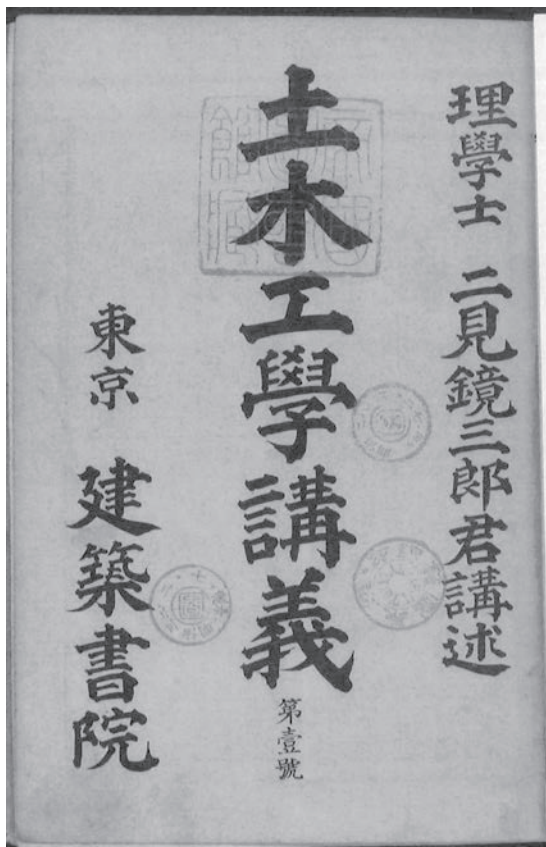
no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
229	1925.09	建築	建築仕様全集		田中豊太郎	著 矢橋賢吉校閲	建築書院 今津源右衛門	西澤圭、信毎印刷所		
230	1925.11	建築	数寄屋建築図案 第1集		伊藤虎三	著			国立国会図書館蔵は奥付 九六、千葉大欠	
231	1925.12	建築	新撰 欄間図案 百種		伊藤虎三	著	建築書院 今津源右衛門	田中善吉、文化印刷		
232	1926.00	建築	数寄屋建築図案 第3集		伊藤虎三	著			ndl-cは奥付欠 刊行年は 192604_美地作例平面図 附庭の造り方図解 巻末 社告から推定 他社本の再刊か(1926.07 日本電気公論社)	国立国会図書館
233	1926.00	電気	最近無線電話 配線図集		東京無線電話 研究所					九六ほか計2館所蔵
234	1926.00	建築	数寄屋建築図案 第2集		伊藤虎三	著			ndl-cは奥付欠 刊行年は 192602_日本建築仕様図 解 本編 巻末社告から推	国立国会図書館
235	1926.02	建築	新撰 建具図案 百種		伊藤虎三	著	建築書院 今津源右衛門	田中善吉、文化印刷		
236	1926.02	建築	日本建築仕様 図解 本編		近間佐吉	著	建築書院 今津源右衛門	川崎佐吉、川崎活版所	本編・附図2冊組。大熊喜 邦序文	
237	1926.02	建築	日本建築仕様 図解 附図		近間佐吉	著	建築書院 今津源右衛門		本編・附図2冊組。国立国 会図書館蔵の附図は奥付	九六ほか計4館所蔵
238	1926.04	建築	日本建築雑作 図案	上巻 床棚の部	金子清吉	著	伊東忠太校閲 建築書院 今津源右衛門	鷺見知枝麿、鷺見文友堂	下巻は未刊か。類似書: 1917.08 日本住宅雑作図 案五百種』	国立国会図書館、九 大ほか計4館所蔵
239	1926.04	建築	実地作例平面 図	——附 庭の造 り方図解	杉本文太郎	著	甲斐喜美 画 建築書院 今津源右衛門	題簽 武田霞 洞、玻璃版印 刷 藤本錦陽 堂、図版印刷 鷺見活版所、 説明印刷 文 化印刷、装幀		
240	1926.08	土木	土木工事設計 実例 第1巻		井上福一郎	著	建築書院 今津源右衛門	鷺見知枝麿		
241	1926.10	建築	間口二間より四 間まで各種 商店建築図案		伊奈文太郎、 金子清吉	著	建築書院 今津源右衛門	川崎佐吉、玻 璃版印刷 湯田 坂奥左衛門		
242	1926.11	電気	自分で出来る 乾電池と蓄電 講座 第1巻		通俗科学電気 講座 第1巻	著	建築書院 今津源右衛門	荻野徳次、東 京印刷製本		
243	1926.12	電気	自分で出来る 発電機と電動		通俗科学電気 講座 第2巻	著	建築書院 今津源右衛門	荻野徳次、東 京印刷製本		

no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
244	1926.12	電気	自分で出来る 変圧器と感応 コイル	通俗科学電気 講座 第3巻	西田順一 著		建築書院 今津 源右衛門	荻野徳次、東 京印刷製本		
245	1927.00	建築	数寄屋建築図 案 第4集		伊藤虎三 著				国立国会図書館蔵は奥付 欠 刊行年は国立国会図 書館記載「1925-1927」と 前巻より推定	国立国会図書館
246	1927.00	建築	数寄屋建築図 案 第5集		伊藤虎三 著				国立国会図書館蔵は奥付 欠 刊行年は国立国会図 書館記載「1925-1927」と 前巻より推定	国立国会図書館
247	1927.01	建築	茶室の構造法 と茶庭図解		杉本文太郎 著				建築書院	九大ほか5館所蔵
248	1927.02	電気	自分で出来る 家庭用電熱器	通俗科学電気 講座 第4巻	西田順一 著		建築書院 今津 源右衛門	野口常太郎、 友文社	1927.08に訂正4版	国立国会図書館、九 大、兵庫教育大
249	1927.05	電気	自分で出来る 電灯と照明装	通俗科学電気 講座 第5巻	西田順一 著		建築書院 今津 源右衛門	野口常太郎、 友文社		国立国会図書館、九 大ほか3館所蔵
250	1927.08	電気	自分で出来る 電話機と通信	通俗科学電気 講座 第7巻	西田順一 著		建築書院 今津 源右衛門	野口常太郎、 友文社		国立国会図書館、九 大
251	1927.11	建築	日本造庭材料 図編 第1集	垣根・袖垣及 堀の部	杉本文太郎 著				国立国会図書館蔵は奥付 欠(日付以下の部分は破 れ)	国立国会図書館、京 大ほか2館所蔵
252	1927.11	電気	自分で出来る ラヂオ機械	通俗科学電気 講座 第10巻	西田順一 著		建築書院 今津 源右衛門	野口常太郎、 友文社	「高級ラヂオ」は別巻あり	九大
253	1927.11	電気	自分で出来る 誘導電動機と 扇風機	通俗科学電気 講座 第9巻	西田順一 著		建築書院 今津 源右衛門	野口常太郎、 友文社		国立国会図書館、九 大
254	1928.02	工業	標準製図用文 字ト輪廓		徳岡精彦 著		建築書院 今津 源右衛門	鷺見知枝磨		国立国会図書館
255	1928.03	電気	自分で出来る 電気鍍金術	通俗科学電気 講座 第8巻	西田順一 著		建築書院 井上 鉄三郎	町田一郎、文 化印刷		国立国会図書館、北 大ほか3館所蔵
256	1928.12	電気	自分で出来る 電鈴と電気玩	通俗科学電気 講座 第6巻	西田順一 著		建築書院 井上 鉄三郎	吉田次郎、 吉田印刷所		国立国会図書館、九 大、兵庫教育大
257	1929.03	電気	自分で出来る 交流機械及静 電機械	通俗科学電気 講座 第11巻	西田順一 著		建築書院 平井 佐兵衛	吉田次郎、 吉田印刷所		国立国会図書館、九 大ほか2館所蔵
258	1929.03	電気	農村電化と其 の施設		西田順一 著		建築書院 平井 佐兵衛	吉田次郎、 吉田印刷所	発売オーム社 大阪市北 区堂ビル404 「東京大阪 建築書院」	国立国会図書館

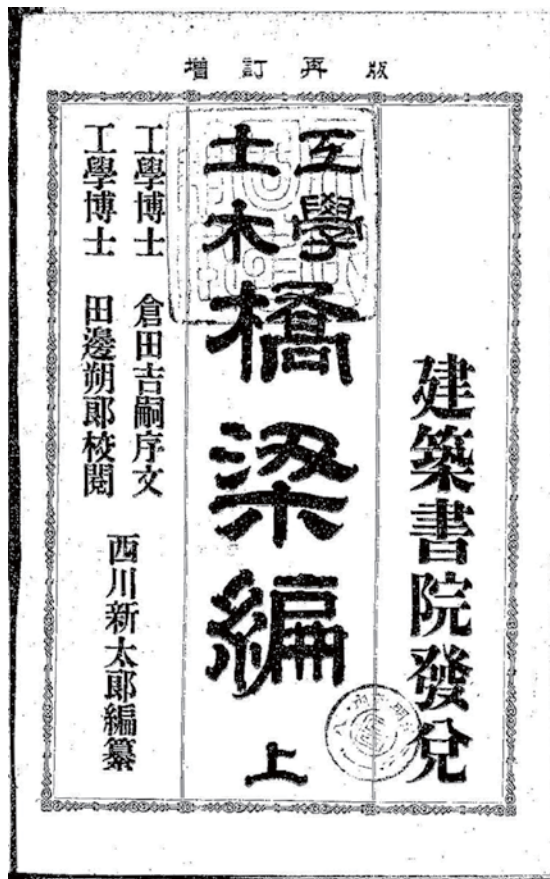
no.	刊行年月	分野	正題	副題・叢書名	編著者1	編著者2	発行者	印刷所・者	備考	所蔵
259	1929.03	電気	自分で出来る 高級ラヂオ機 械	通俗科学電気 講座第12巻	西田順一 著		建築書院 平井 佐兵衛	吉田由治郎 【マヤ】、吉田 印刷所	吉田印刷所＝大阪市浪速 区久保吉町1239	国立国会図書館
260	1930.00	建築	日本造庭材料 図編 第3集	四阿及橋の部	杉本文太郎 著				国立国会図書館蔵は奥付 欠 刊行年は前巻より推	国立国会図書館
261	1930.00	建築	日本造庭材料 図編 第4集	手水鉢及石置 の部	杉本文太郎 著				国立国会図書館蔵は奥付 欠 刊行年は前巻より推	国立国会図書館
262	1930.05	建築	日本造庭材料 図編 第2集	庭門の部	杉本文太郎 著		建築書院 平井 佐兵衛	松井昇作	2冊組か	国立国会図書館
263	1931.02	建築	八坪より七十坪 まで住み心地 よき日本住宅 の間取と外形 図集	建築書院 編			編修発行 平井 佐兵衛	松井昇作	類似：1924.02六坪より七 十坪まで新しき日本住宅 の間取と外形図集 建築 書院 編	国立国会図書館、豊 橋技術科学大
264	1931.02	建築	すぐわかる 和洋建築早割 図解		石原良三 著		建築書院 平井 佐兵衛	山田元吉	平井の住所「神田区今川 小路三ノ六」	国立国会図書館、名 工大
265	1941.03	機械	木型と鑄造及 製缶其他	機械技術者養 成叢書 第6巻	田中光彦 著		建築書院 平井 佐兵衛	吉田由次郎	発売 国民出版社、平井の 住所「大阪市西区北堀江 通四丁目二〇番地」	国立国会図書館
266	1941.03	機械	工作機械の構 造及性能	機械技術者養 成叢書 第1巻	田中光彦、鎌 谷 一二 著		建築書院 平井 佐兵衛	吉田由次郎	発売 国民出版社 平井の 住所「大阪市西区北堀江 通四丁目二〇番地」	国立国会図書館
267	1941.03	機械	工作機械の使 用法	機械技術者養 成叢書 第5巻	田中光彦、中 谷喜美、鎌谷 一二 共著		建築書院 平井 佐兵衛	吉田由次郎	発売 国民出版社 平井の 住所「大阪市西区北堀江 通四丁目二〇番地」	国立国会図書館
268	1944.03	機械	工場用金属材 料	機械技術者養 成叢書	田中光彦、鎌 谷一二 共著		国民出版社			滋賀県立大ほか3館所 蔵
269	1944.03	機械	測定器及図面	機械技術者養 成叢書	田中光彦、大 石國一、鎌谷 一二 共著		国民出版社			滋賀県立大ほか6館所 蔵
270	1944.03	機械	工作機械の使 用法	機械技術者養 成叢書	田中光彦、中 谷喜美、鎌谷 一二 共著		国民出版社			滋賀県立大ほか2館所 蔵



[図 2-5] 刊行分野にみる建築書院の出版活動の変遷



[図 2-6] 『土木工学講義』
 二見鏡三郎講述、建築書院、
 1895年6月～1899年2月、
 第1号、1895年6月、扉および p.1
 所蔵：国立国会図書館



[図 2-7] 『土木工学 橋梁編 上』
 西川新太郎編、田邊朔郎校閱、
 建築書院、1896年2月、扉および p.126、
 増訂再版 1899年11月
 所蔵：国立国会図書館

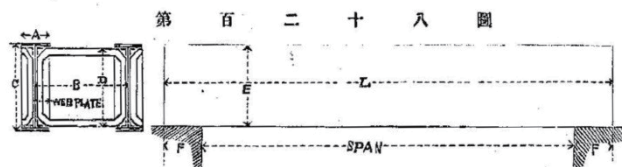
百二十六

尤モ經濟ナル桁ノ高サヲ計算スルニ要スル
 公式

$$D = \sqrt[3]{\frac{4L}{21P}}$$

t = 中板ノ厚(吋)
 P = 許ナルニキ應力平方吋ニ付磅
 L = 徑間(呎)
 W = 總荷重(桁ノ長サ一呎ニ付磅)
 D = 桁ノ高(呎)

次表ハ鐵道局ニ於テ標準トセルモノナラバ茲ニ掲ゲテ
 讀者ノ參考ニ供ス

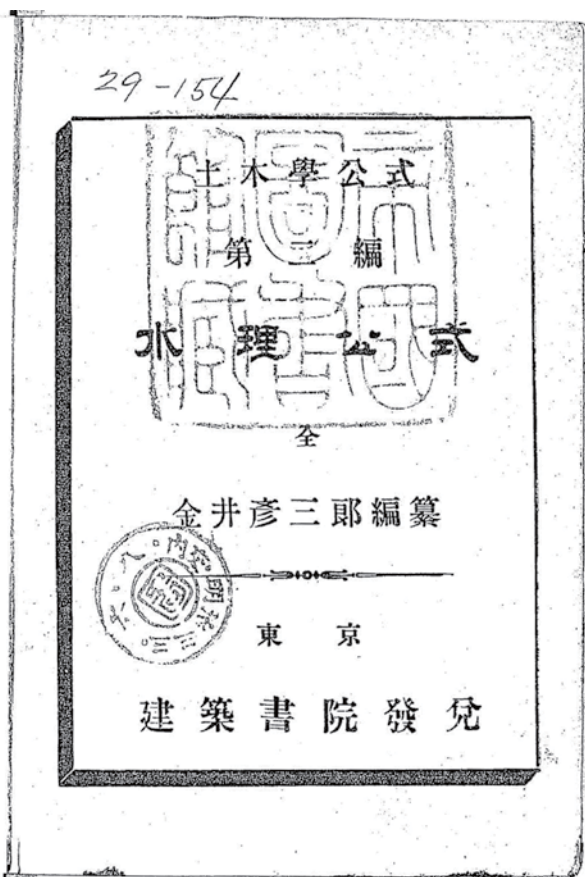


鐵 鐵 板 桁 橋										
徑間	A	B	C	D	E	F	L	L	鐵 反り	許應力
12'	1'2"	3'8 1/4"	1'3"		1'3"	1'2"	14'4"	3 1/2" x 3 1/2" x 1 1/4"	3/8"	1.5.3.3
15'	1'2"	3'8 1/4"	1'6"		1'6"	1'6"	18'0"	3 3/8" x 3 3/8" x 1 1/4"	3/8"	1.18.0.0.2
18'	1'0"	3'8 1/4"	1'6"		1'6"	1'6"	21'0"	3 3/8" x 3 3/8" x 1 1/4"	3/8"	2. 2. 0.0.
20'	1'2"	3'8 1/4"	2'1 1/2"	2'3 1/4"	2'1 1/2"	1'6"	23'0"	3 3/8" x 3 3/8" x 1 1/4"	3/8"	2.12.3. 1.
30'	1'2"	3'8 1/4"	2'1 1/2"	2'3 1/4"	2'6"	1'6"	33'0"	3 3/8" x 3 3/8" x 1 1/4"	3/8"	5.13.0. 9.
40'	1'3"	3'8 1/4"	3'4 1/8"		3'4 1/8"	2'1"	41'1"		3/8"	7.11.1. 7.
47 1/2'	1'6"	5'0"	4'2"		4'1 1/2"	2'2"	51'8"	6" x 4" x 1 1/2"	3/8"	12.3.2. 10.
60'	1'6"	5'0"	4'6 3/4"	4'4 1/2"	4'4 1/2"	2'6"	65'0"	6" x 4" x 1 1/2"	3/8"	15.16.1.30.
70'	1'6"	5'0"	5'1"		4'11 1/2"	3'0"	76'0"		1 1/8"	22.5.0. 27.

鋼 鐵 板 桁 橋										
徑間	A	B	C	D	E	F	L	L	鐵 反り	許應力
20'	1'1"	3'8 1/4"	2' 3/4"	2' 0"	2' 3/4"	1'6"	23'0"	3" x 4" x 3/4"	3/8"	2.9.0. 0.
30'	1'3"	3'8 1/4"	2'7 3/8"	2' 6"	2' 6 3/8"	1'6"	33'0"	3 1/2" x 3 1/2" x 1 1/4"	3/8"	5.5.2. 11.
40'	1'6"	3'8 1/4"	3'4 1/8"	3' 3"	3'3 3/8"	2' 1/2"	44'1"		3/8"	8. 9.1. 21.
50'	1'6"	5' 0"	3'1 1/2"	4' 0"	4' 3/8"	2'2"	54'4"	4" x 4" x 1 1/2"	"	12.8.1. 14.
60'	1'8"	5' 0"	4' 6"	4'13 1/2"	4' 5 1/2"	2'4"	64'8"	"	"	15.19.3. 1.
70'	1'8"	5' 0"	5' 3/4"	4' 10"	4' 11"	2'8"	76'4"	"	1 1/4"	21.7.2. 18.
80'	1'8"	5' 0"	6' 2 1/2"	6' 0"	6' 1"	3'3"	86'6"	"	1 1/2"	32.6.0. 21.

(百二十六ノ表)

尚ハ鐵道板桁橋臺井ニ橋脚ハ鐵道局ニ於テ規定セルモノアリコハ本書下巻ニ於テ一
 般ノ橋臺壁ヲ論スルノ際ニ併セテ之ヲ掲記セン





[図 2-8] 『土木学公式』
 金井彦三郎編、建築書院、
 1900年2月～1902年9月、
 「第2編 水理公式」、扉および pp.40-41、
 1900年5月
 所蔵：国立国会図書館

(40)

$$q = 3.33n(HH')^{\frac{3}{2}}$$

nの値はH及H'の比に依りて異なるものにして次表の如し

H'/H	n	H'/H	n	H'/H	n
0.00	1.000	0.26	.970	0.54	.875
.01	1.004	.28	.964	.56	.866
.02	1.006	.30	.959	.58	.859
.04	1.007	.32	.953	.60	.846
.06	1.007	.34	.947	.62	.836
.08	1.006	.36	.941	.64	.824
.10	1.005	.38	.935	.66	.813
.12	1.002	.40	.929	.70	.787
.14	.998	.42	.922	.75	.750
.16	.994	.44	.915	.80	.703
.18	.989	.46	.908	.90	.574
.20	.985	.48	.900	1.00	0.000
.22	.980	.50	.892		
.24	.975	.52	.884		

堰の内面垂直ならしてA圖の如く傾斜するや或はB圖の如く圓きときは其流量は角なるときに比して増加す又C圖の如く水が堰を越ゆるの後空中に放流せしめて圖の如く傾斜したる床上を流るときはHが15吋以上なれば大なる減少なきもH若し12吋なるときは實際水量は計算のものより一割を減しH若し6吋なる

(41)

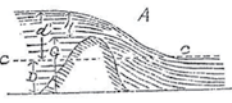
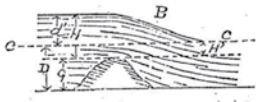
ときは同二割2.5 吋なるときは三割1 吋なるときは五割を減す

若し溜池の水が静水ならして堰に向て某速度を有するときはHの數吋あるときは流量の増加は僅少なる可しフランス氏の實驗に依れば毎秒速度一呎にして水頭十三吋なるときは水量は其百分の一を増加し水頭八吋にして速度六吋なるときは又百分の一を増加す

放水堰 (Waste Weir) 溜池或は運河の兩側に於ける放水堰にして其上部の厚さ凡三尺なるものを超て流出する水量は次式の如し

$$q = 3.016H^{1.52}$$

堰堤 (Dam) 或る水流を横きりて堰堤を設くるとき其堰堤の高さ及水面の達する高さは次の如し

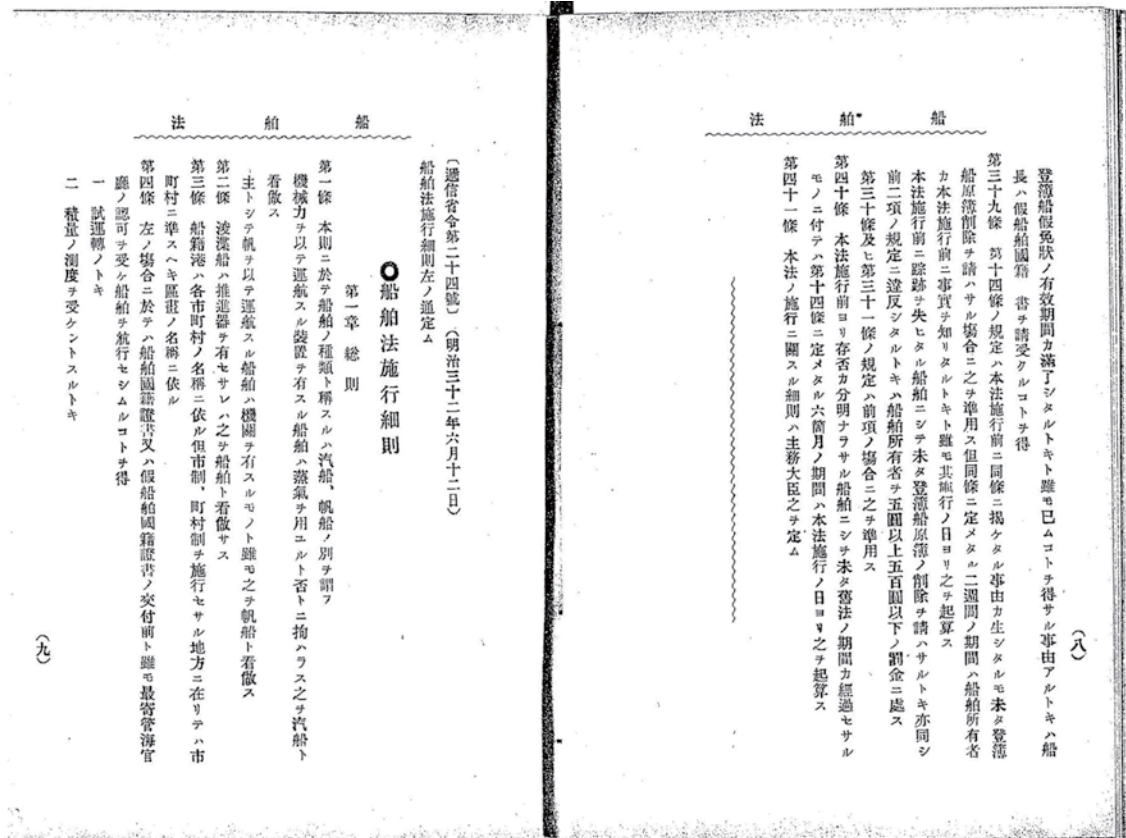



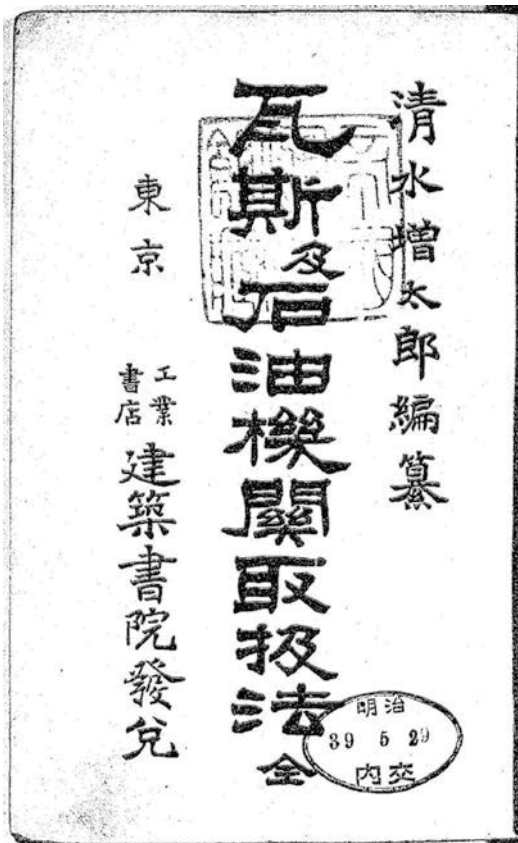
C C線は堰堤を設けるとききの水面
 D=水の深さ
 G=堰堤の高さ
 H=堰堤上水の高さ
 d=堰堤の爲めに水面の隆起



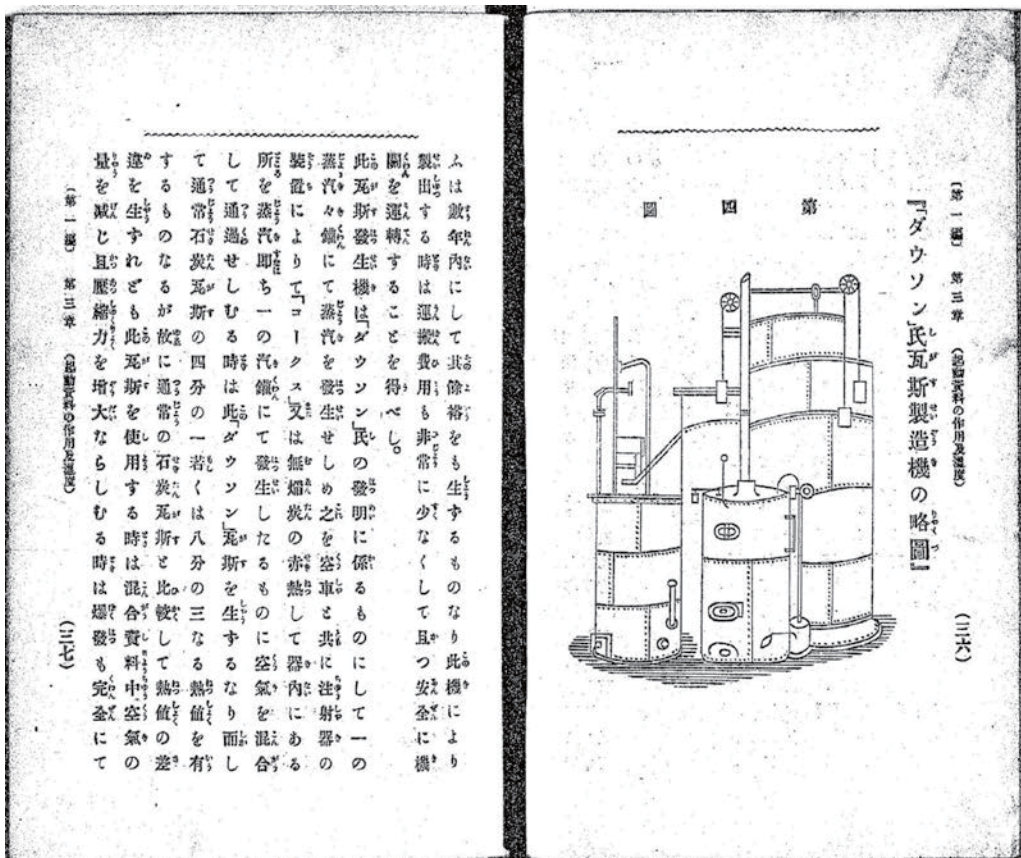
[図 2-9] 『現行海事法令』

建築書院海事図書部編、建築書院、
1906年11月、扉および第1編 pp.8-9
所蔵：国立国会図書館





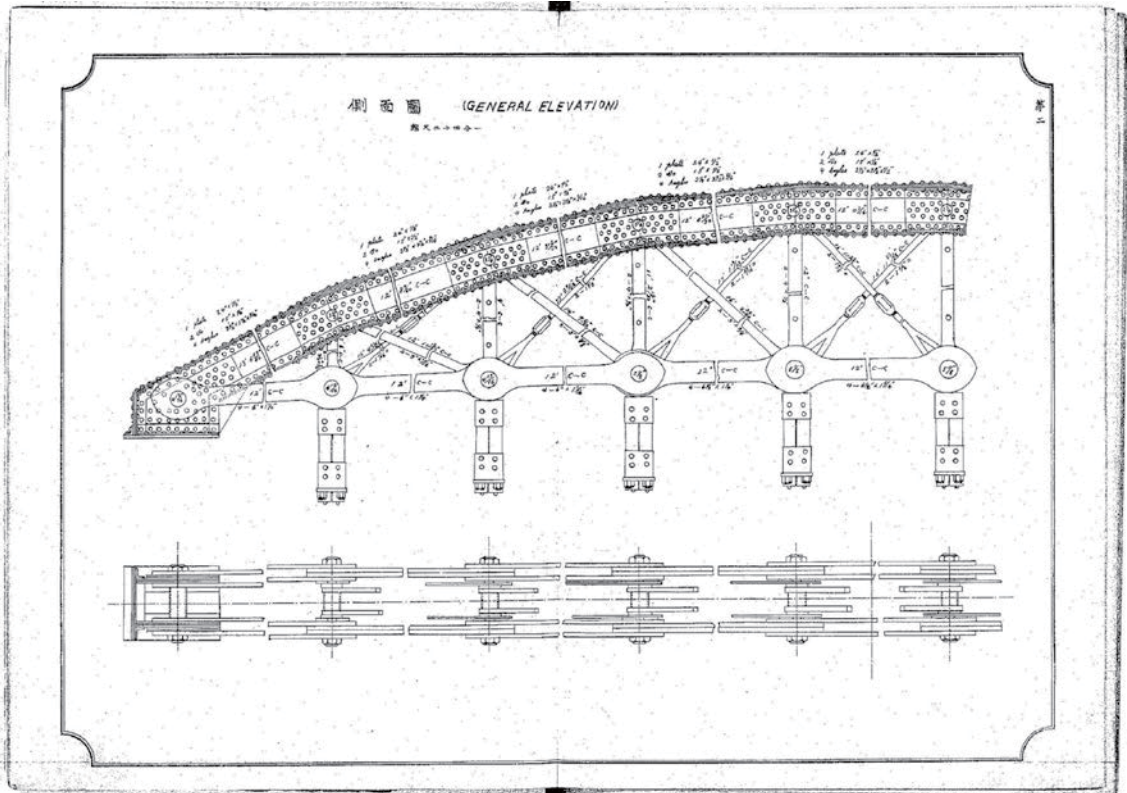
[図 2-10] 『瓦斯及石油機関取扱法』
 清水増太郎編、建築書院、
 1906年5月、扉および pp.36-37
 所蔵：国立国会図書館

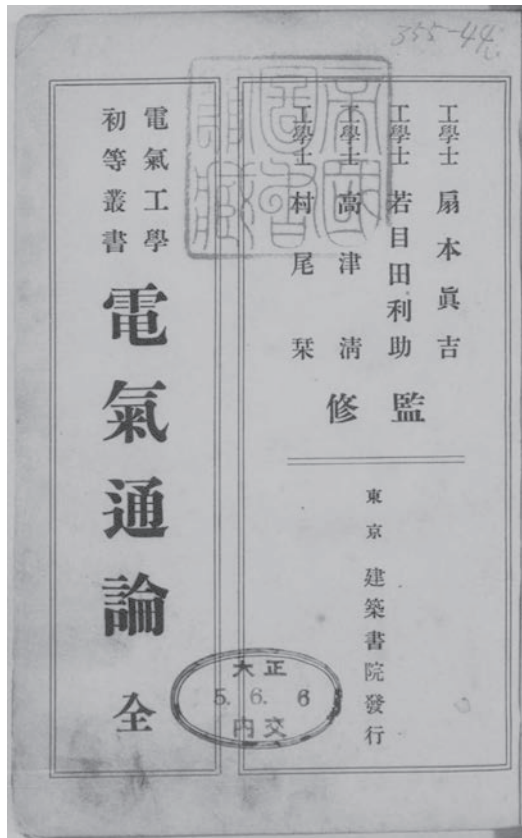


東京市技師金井彦三郎校閱
 建築書院編集部編纂
鐵橋設計及施工實例圖面全

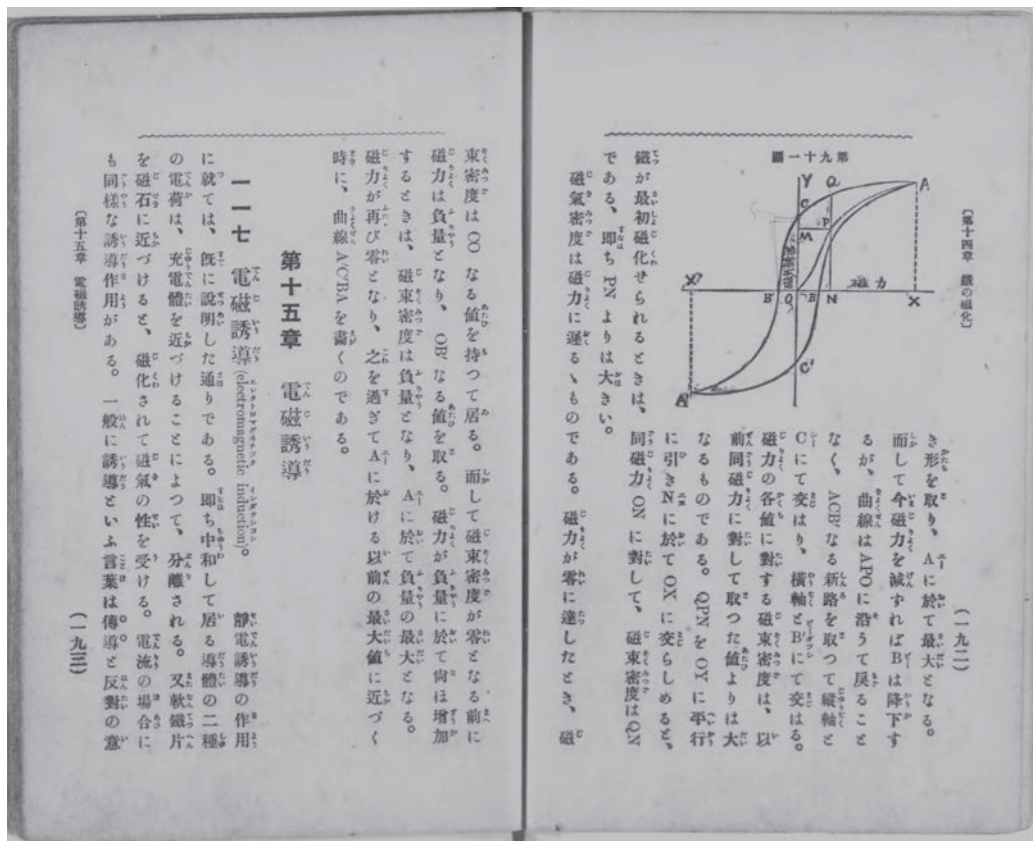
東京 建築書院藏版

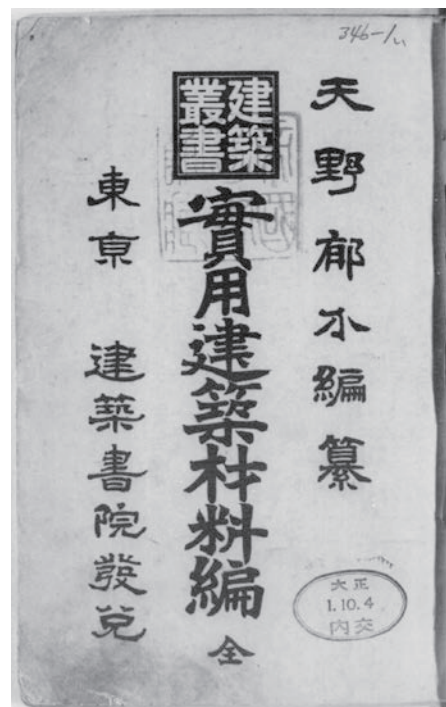
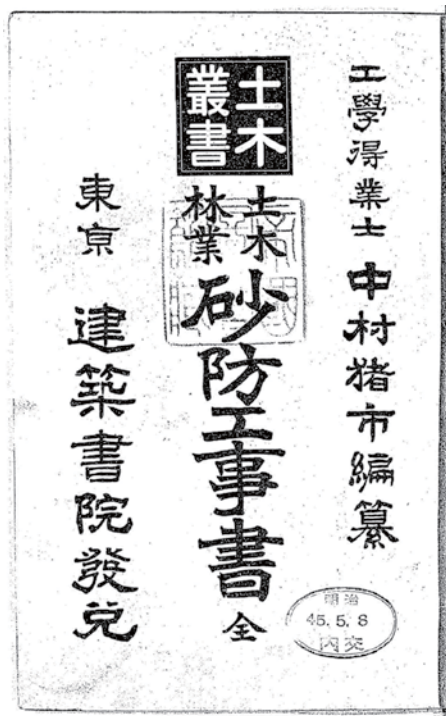
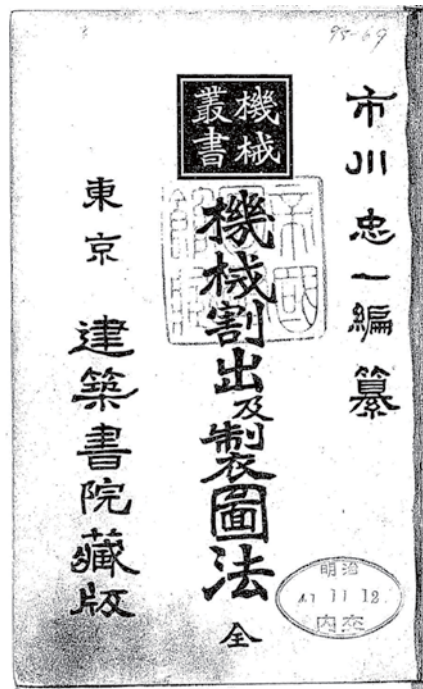
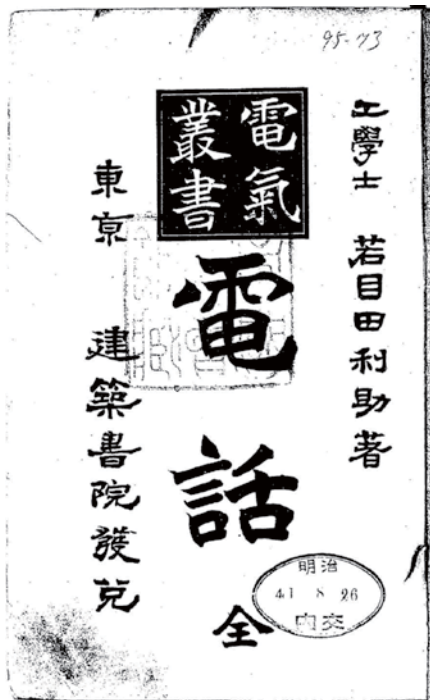
[圖 2-11] 『鐵橋設計及施工實例圖面』
 建築書院編集部編、金井彦三郎校閱、
 建築書院、1903 年 9 月、
 扉および詳細圖面第 2
 所藏：国立国会図書館





[図 2-12] 『電気工学初等叢書』
 建築書院編集局編、扇本真吉、若目田利助、
 高津清、村尾栗校編、建築書院、
 1916年6月～1922年11月ごろ
 「電気通論」、扉および pp.184-185、
 1916年6月
 所蔵：国立国会図書館



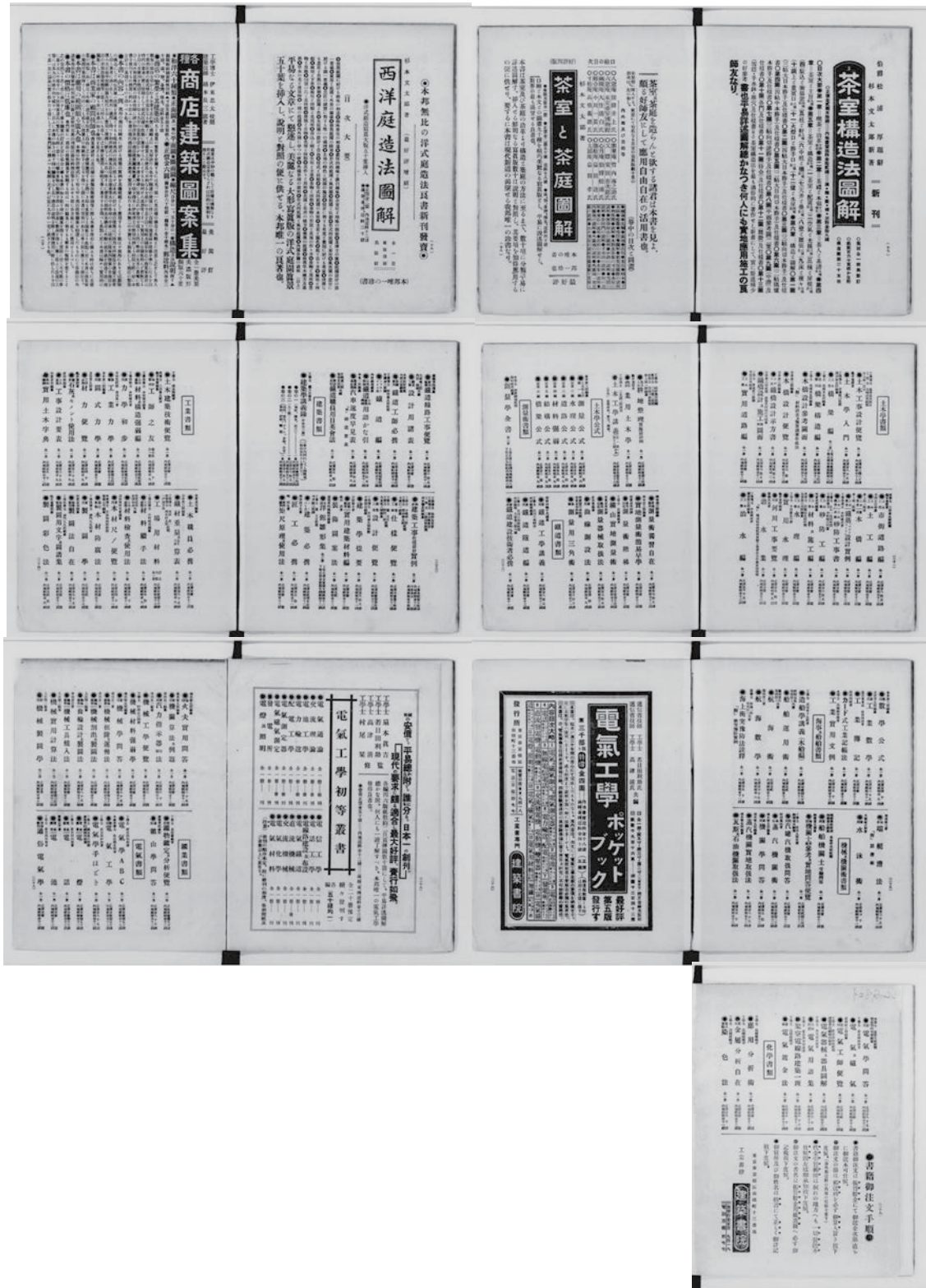


[図 2-13] 勢ぞろいした『電気叢書』『機械叢書』『土木叢書』『建築叢書』の各扉頁
 左上：『電気叢書 電話』、若目田利助著、建築書院、1908年11月
 右上：『機械叢書 機械割出及製図法』、市川忠一編、建築書院、1908年11月
 左下：『土木叢書 土木林業 砂防工事書』、中村猪市編、建築書院、1912年5月
 右下：『建築叢書 實用建築材料編』、天野郁介編、建築書院、1912年10月
 所蔵：国立国会図書館



[図 2-14] 社告の図書目録例

『日本住宅雑作図案五百種』金子清吉著、伊東忠太校閲、建築書院、
1917年8月、後付社告 pp.1-16
所蔵：国立国会図書館



[図 2-14] 社告の図書目録例 (前頁のつづき)

『日本住宅雑作図案五百種』金子清吉著、伊東忠太校閲、建築書院、1917年8月、後付社告 pp.17-29

所蔵：国立国会図書館



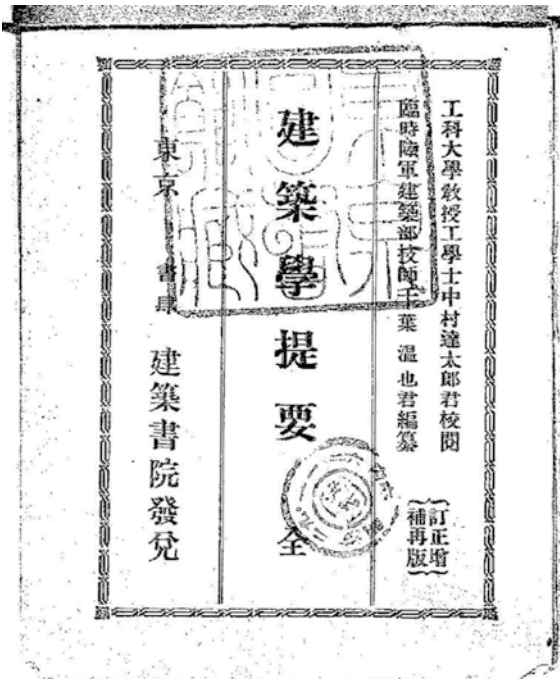
[図 2-15] 『通俗科学電気講座』
 西田潤一郎著、建築書院、
 1926年11月～1929年3月
 第1巻「自分で出来る乾電池と蓄電池」、
 表紙および pp.180-181、1926年11月
 所蔵：国立国会図書館



前大阪市立都島工業學校長 杉田稔 先生 序文	
機械技術者養成叢書	
第一卷 <small>定價 金四十七錢 郵税 金十二錢</small>	<small>工學士 田中光彦先生・鎌谷一二先生共著</small> 工作機械の構造と性能
第二卷 <small>定價 金四十七錢 郵税 金十二錢</small>	<small>工學士 田中光彦先生・中谷喜美先生 鎌谷一二先生 共著</small> 仕上工作及工具
第三卷 <small>定價 金四十七錢 郵税 金十二錢</small>	<small>工學士 田中光彦先生・鎌谷一二先生共著</small> 工場用金屬材料
第四卷 <small>定價 金四十七錢 郵税 金十二錢</small>	<small>工學士 田中光彦先生・大石國一先生 鎌谷一二先生 共著</small> 測定器及圖面
第五卷 <small>定價 金四十七錢 郵税 金十二錢</small>	<small>工學士 田中光彦先生・中谷喜美先生 鎌谷一二先生 共著</small> 工作機械の使用法
第六卷 <small>定價 金四十七錢 郵税 金十二錢</small>	<small>工學士 田中光彦先生著</small> 木型と鑄造及製罐其他
<small>大阪市西區北堀江通四丁目</small> 發行所 建築書院 <small>電話新町九八二番・振替大阪八四六〇五番</small>	

[図 2-16] 『機械技術者養成叢書』のランナップ

第 5 卷「工作機械の使用法」、建築書院、1941 年 3 月、卷末社告
 所蔵：国立国会図書館



[図 2-17] 『建築学提要』

千葉末吉著、中村達太郎校閲、
 建築書院、訂正増補再版、1896年11月、
 扉および pp.20-21
 所蔵：国立国会図書館

氣ノ流通宜キ廻轉窓ト稱スルモノアリ此ノ
 構造ハ窓ノ中央ヨリ少シク上リテ兩側ニ樞
 軸ヲ備ヘ障子ノ上縁ト闕トニ索條ヲ懸通シ
 之レヲ下ヨリ挽クキハ上部ハ内方ニ下部ハ
 外方ニ開クノ仕法ナリ

窓ノ大小員數及ビ種類ヲ定ムルニハ家屋ノ
 結構其用途ノ如何氣候ノ變異等ニヨリ一定
 ノ方法ナシト雖モ窓ヲ配置スルニハ概シテ
 一層中ニアル各窓ヲ都テ同水平ニアラシメ
 二階三階等ヲ有スル層樓ノ家屋ニ在テハ同
 垂直中ニ設置スルヲ可トス而シテ長方形ノ
 窓ノ高幅ハ其比例一倍半乃至二倍半前後ト
 スルヲ佳トス

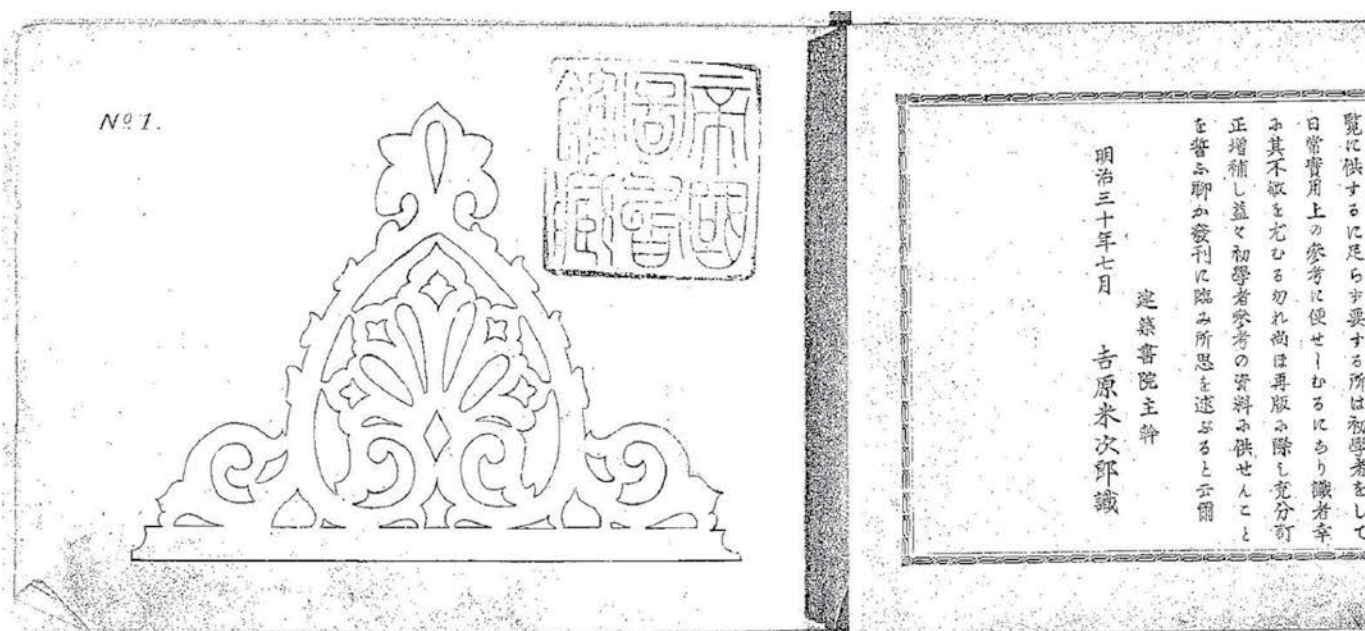
又家屋ノ端末ニ於テハ窓ト隅石ノ間隔ヲ廣
 クシ實際上且ツ外觀ヲ堅牢ナル如クス即チ
 其間隔ハ各窓ノ隔リノ二分ノ一ヲ以テ極少
 ノ幅員トスルヲ佳ナリト云フ

又家屋ノ各層ニ於テ窓ノ高幅ノ比ヲ左表ノ
 如クスルコトアリ但シ窓高ハ其幅ノ十二分ノ
 一ヲ以テ單位トス

家屋ノ種類 及ビ窓ノ幅	窓ノ高さ			
	下室	二階	三階	四階
上等家屋 五尺三寸乃至 四尺三寸二六	二四	二四	二二	一八
中等家屋 四尺三寸乃至 三尺六寸	二四	二二	二〇	一八
普通家屋 三尺六寸乃至 三尺三寸	二〇	二〇	一九	一八

窓ノ高幅ナルニ直徑ヲ知ルノ法又種々アリ
 左法ハ廣氏建築節用集ロベルトモーリス氏
 ノ法式ヲ譯載シタルモノナリ
 室内ノ高サ幅及ビ長サノ三數ヲ相乘シ之レ

二二

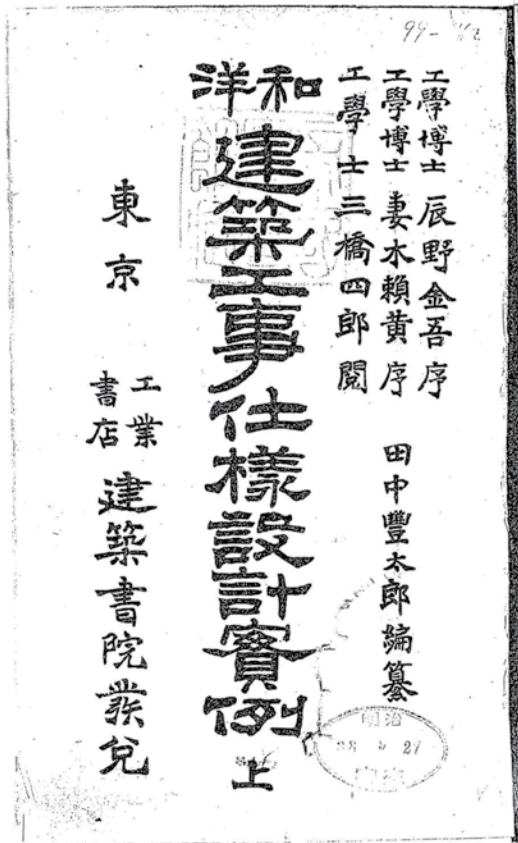


[図 2-19] 『木造洋館雛形集』

吉原米次郎編、上巻、建築書院、1897年

扉および第1図

所蔵：国立国会図書館



[図 2-20] 『和洋建築工事仕様設計実例 上』
 田中豊太郎編、辰野金吾序、妻木頼黄序、
 三橋四郎校閲、建築書院、1905年9月、
 扉および pp.538-539
 所蔵：国立国会図書館

○平壁漆喰調合并手間

一平壁下塗材直中塗「ヨシペリ」上塗共漆喰五箇塗厚六分附材料手間共一式
 一坪當り

品目	下塗厚五厘	材直厚五厘	中塗厚五分	上塗厚一分
灰	一斗	三斗	一斗	一斗
又	六十目	二百十日	八十目	七十目

内 譯

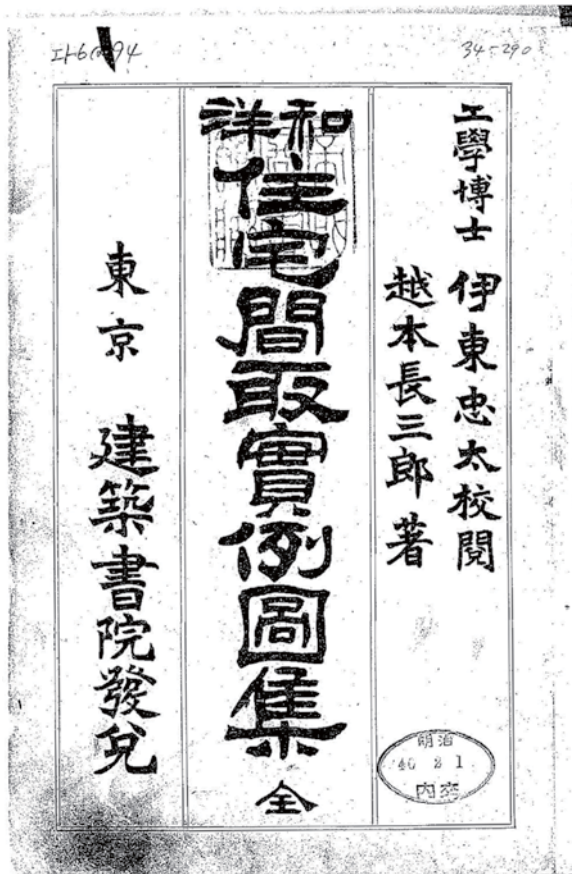
灰 九斗
 本 灰 五百二十五目
 上液粉手切 百五十目
 練方手切人足 五分五厘

角 又 五百二十五目
 中液粉手切 八百十五目
 左官手間 七分

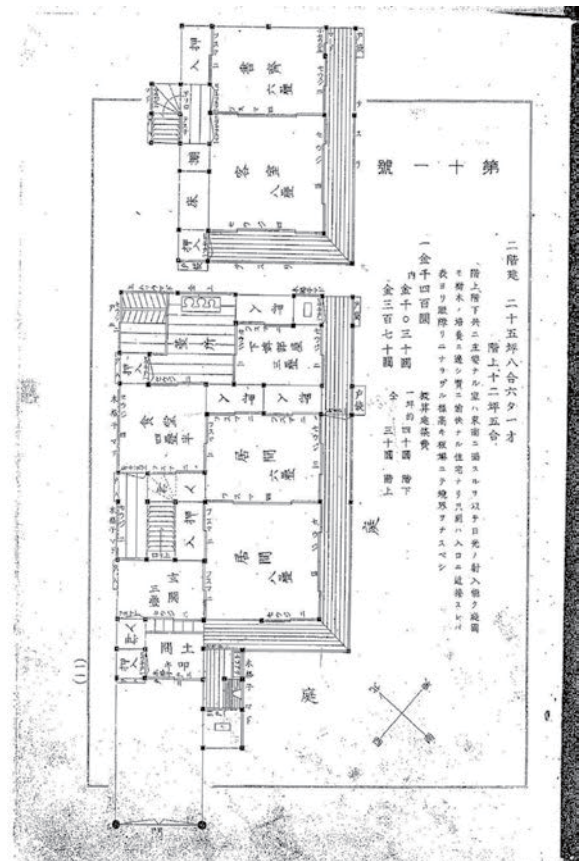
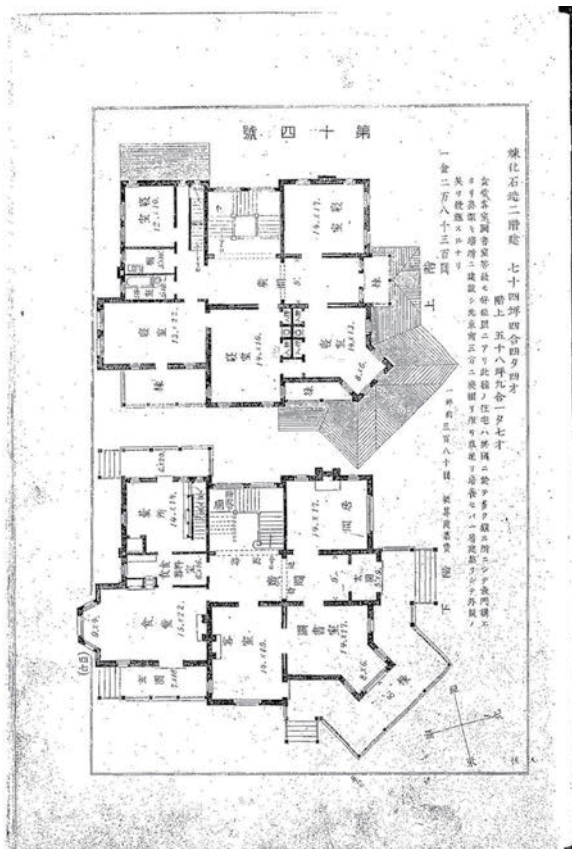
五百三十九

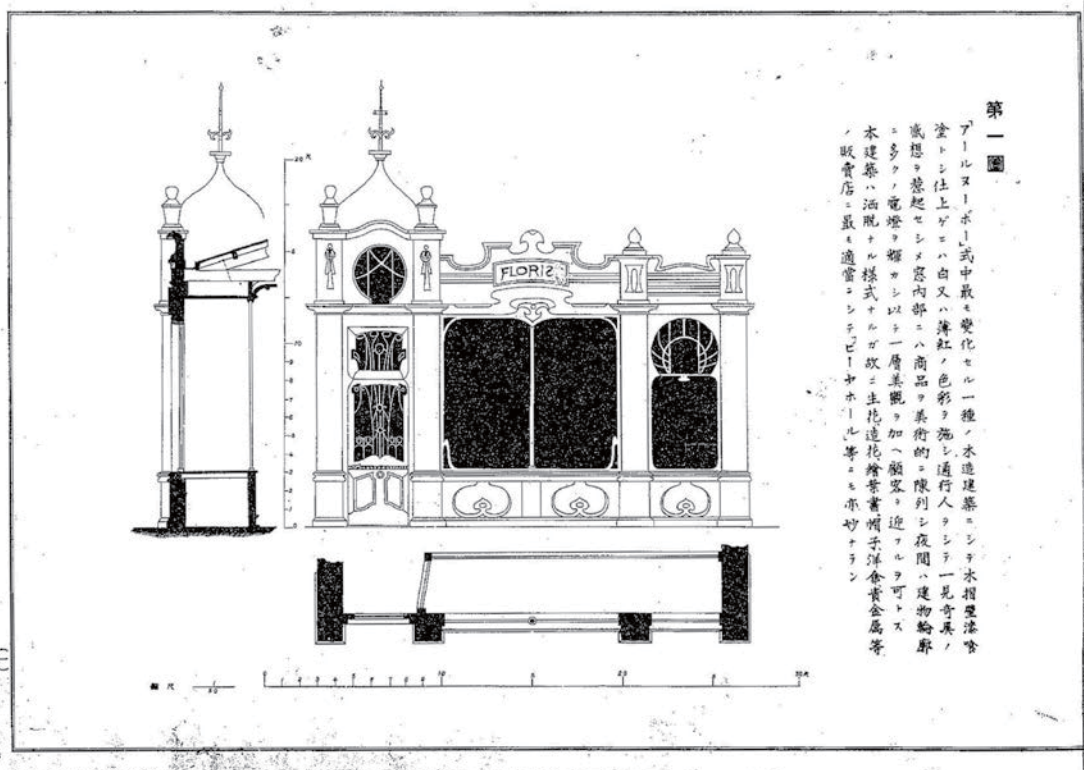
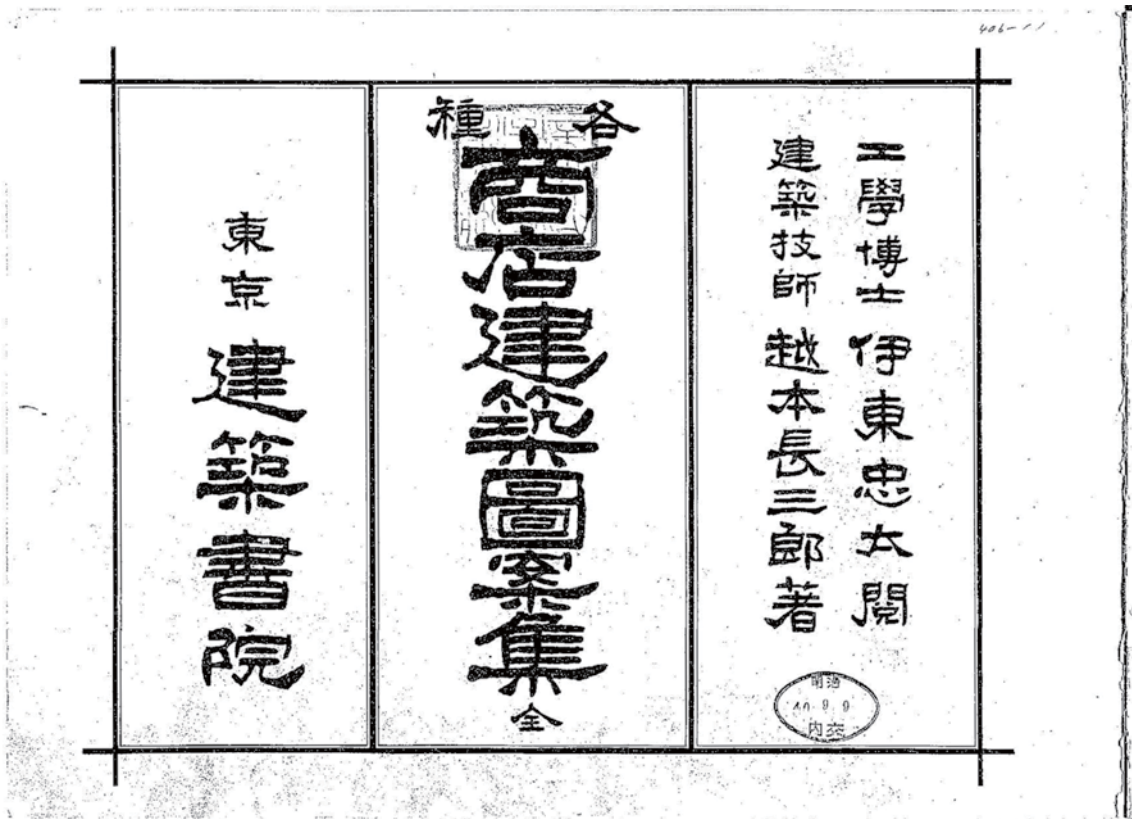
圖ノ塗喰漆并天及壁リ廻内

五百三十八



[図 2-21] 『和洋住宅間取実例図集』
 越本長三郎著、伊東忠太校閲、建築書院、
 1907年1月、扉および pp.11, 47
 所蔵：国立国会図書館





[図 2-22] 『各種 商店建築図案集』

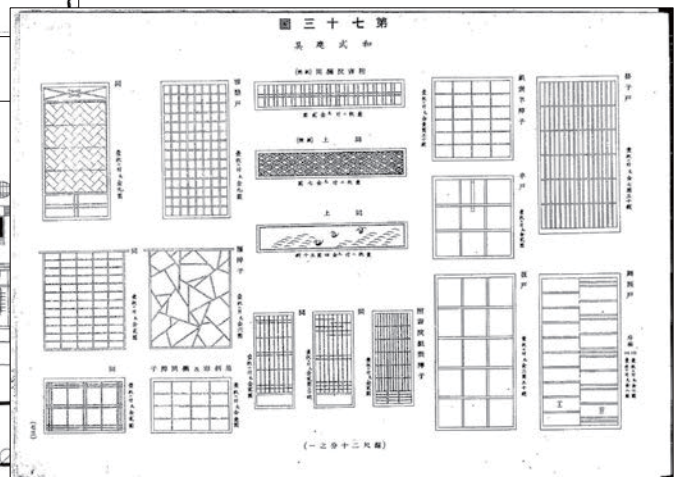
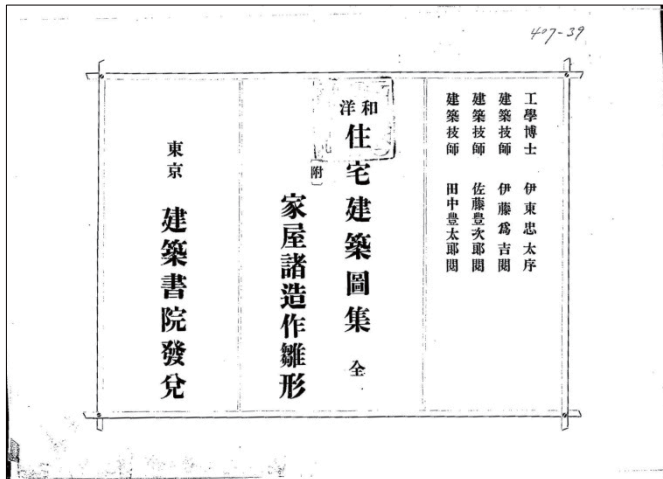
越本長三郎著、伊東忠太校閱、建築書院、1907年9月、扉および p.1

所蔵：国立国会図書館

[表 2-2] 建築書院第 3 期の建築書一覧

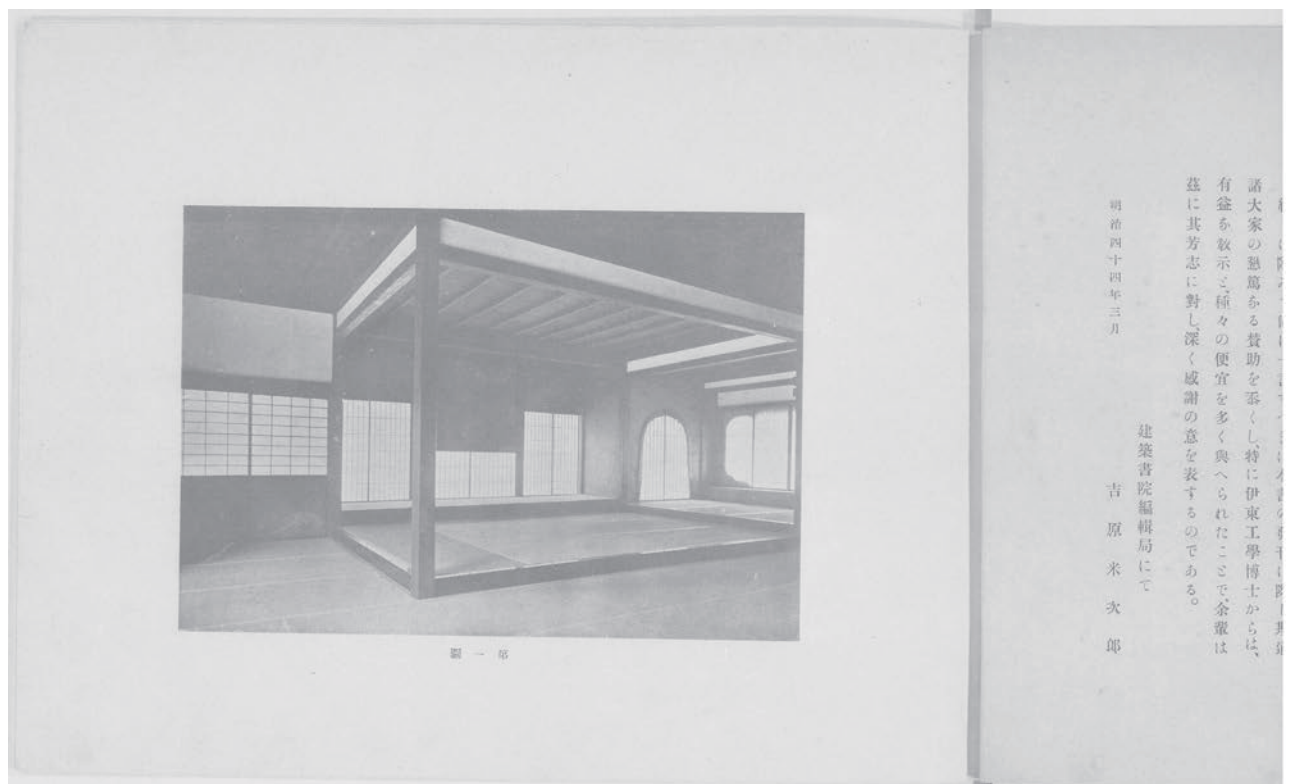
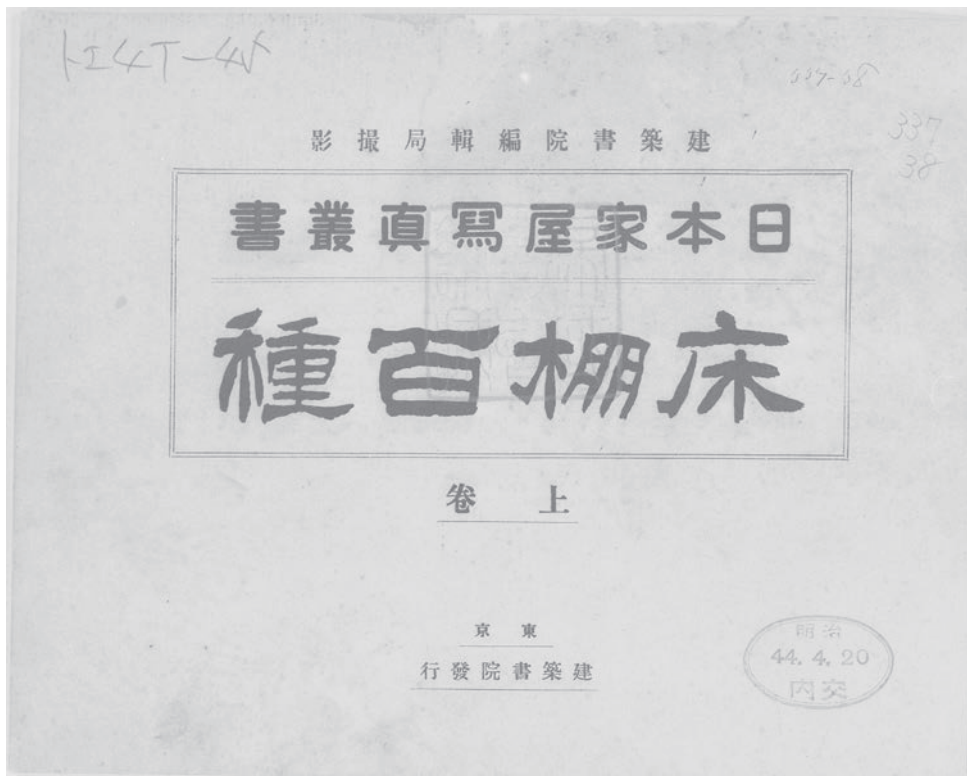
書名	編著者名	刊行年月
1 『装飾図案法』	森田洪著、小笠原長生題辞、伊東忠太・今泉雄作序、大澤三之助・島田佳矣校閲	1910年5月
2 『和洋住宅建築図集——附 家屋諸造作雛形』	吉原米次郎編、伊東忠太・伊藤為吉・佐藤豊次郎・田中豊太郎校閲	1910年7月
3 『日本住宅室内装飾法』	杉本文太郎著、秋元興朝題辞、今泉雄作・高橋義雄序	1910年7月
4 『日本庭造法図解』	杉本文太郎著、大村民次郎画	1910年11月
5 『日本家屋写真叢書 床棚百種上巻』	建築書院編輯局 撮影（編集兼発行者吉原米次郎）	1911年4月
6 『日本家屋写真叢書 床棚百種下巻』	建築書院編輯局 撮影（編集兼発行者吉原米次郎）	1911年4月
7 『日本家屋写真叢書 欄間百種』	建築書院編輯局 撮影（編集兼発行者吉原米次郎）	1911年4月
8 『日本家屋写真叢書 建具と手摺百種』	建築書院編輯局 撮影（編集兼発行者吉原米次郎）	1911年4月
9 『日本家屋写真叢書 門と玄関百種』	建築書院編輯局 撮影（編集兼発行者吉原米次郎）	1911年4月
10 『日本家屋写真叢書 外形と諸部百種』	建築書院編輯局 撮影（編集兼発行者吉原米次郎）	1911年4月
11 『茶室と茶庭図解』	杉本文太郎著、大村民次郎画	1911年4月
12 『和漢洋 家屋諸造作応用図案上巻』	森田洪 著 [中扉＝図案]、正木直彦題辞、曾禰達蔵・古宇田實序	1911年6月
13 『日本各時代室内装飾法』	杉本文太郎著、土方久元・股野琢・今泉雄作題辞	1911年6月
14 『図解日本座敷の飾り方』	杉本文太郎著、高輪其堂画	1912年3月
15 『西洋庭造法図解』	杉本文太郎著、高輪其堂画	1912年4月
16 『日本住宅 室内飾り道具図解』	杉本文太郎著、小塚芳舟画	1912年4月

17	『和漢洋 家屋諸造作応用図案 下巻』	森田洪 著 [中扉=図案]、正木直彦 題辞、曾禰達蔵・古宇田實序	1912年10月
18	『新撰日本庭造図面百種及其説 明』	杉本文太郎著、大村令邦・高輪其堂 画	1912年10月
19	『建築叢書 実用建築材料編』	天野郁介編	1912年10月
20	『日本住宅建築図案百種』	金子清吉著、伊東忠太校閲	1913年9月
21	『二坪より百坪まで 日本庭造真 行草三体図案新書——附 築庭法 心得及仕様書と工事予算書』	杉本文太郎著、秋元興朝題辞	1915年6月
22	『茶室構造法図解』	杉本文太郎著	1916年3月
23	『日本住宅の保全と諸什器取扱 ひ法——附 室内装飾法心得』	杉本文太郎著、洪澤栄一題辞	1916年9月
24	『日本住宅雑作図案五百種』	金子清吉著、伊東忠太校閲	1917年8月
25	『築山庭造伝 前編 上』	北村援琴著、承議郎金吾校尉、藤井 宿祢重好畫画	1918年1月
26	『築山庭造伝 前編 中』	北村援琴著、承議郎金吾校尉、藤井 宿祢重好畫画	1918年1月
27	『築山庭造伝 前編 下』	北村援琴著、承議郎金吾校尉、藤井 宿祢重好畫画	1918年1月
28	『築山庭造伝 後編 上』	籬島軒秋里画述、玄ニ菴遺齋校訂	1918年1月
29	『築山庭造伝 後編 中』	籬島軒秋里 画述、玄ニ菴遺齋校訂	1918年1月
30	『築山庭造伝 後編 下』	籬島軒秋里 画述、玄ニ菴遺齋校訂	1918年1月
31	『世界の建築様式』	森田洪著、塚本靖題辞、大澤三之助 序文	1918年9月
32	『かし家と小住宅建築図案五十 種』	建築書院編輯局 編、曾禰達蔵題辞、 笠原敏郎序	1919年6月
33	『日本建築欄間図集』	伊藤虎三著、曾禰達蔵題辞	1920年9月
34	『日本建築建具図集』	伊藤虎三著、曾禰達蔵題辞	1920年10月



〔図 2-23〕『和洋住宅建築図集——附 家屋諸造作雛形』

吉原米次郎編、伊東忠太・伊藤為吉・佐藤豊次郎・田中豊太郎校閲、
 建築書院、1910年7月、扉、口絵2葉（頁数なし）、第2図、第73図
 所蔵：国立国会図書館

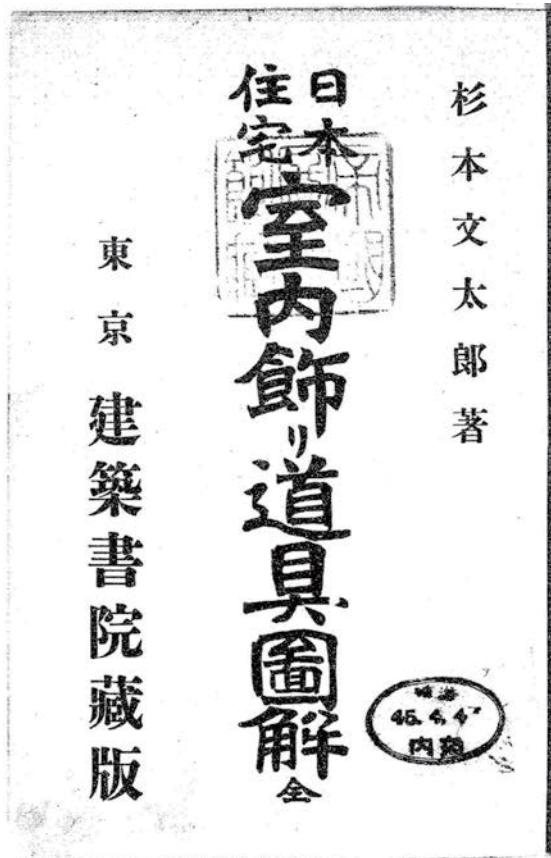


[図 2-24] 『日本家屋写真叢書』

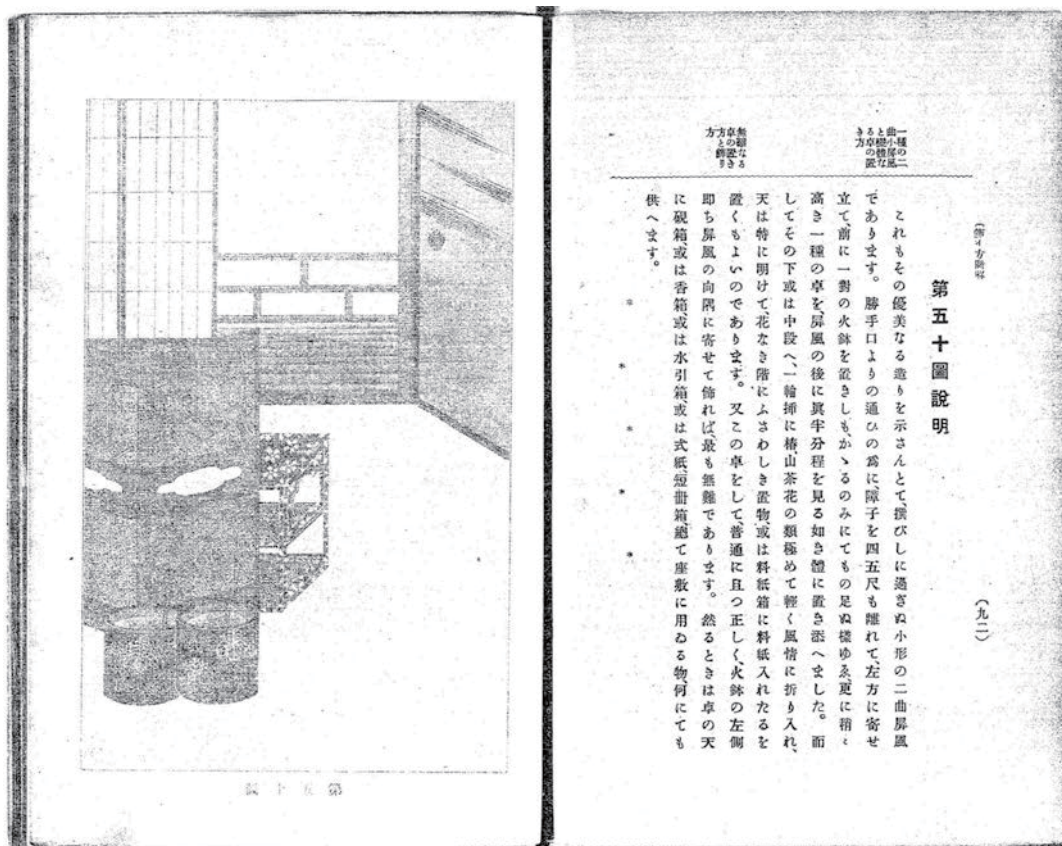
建築書院編輯局 撮影 (編集兼発行者吉原米次郎)、建築書院、1911 年 4 月、

「床棚百種 上巻」、扉および第 1 図

所蔵：国立国会図書館



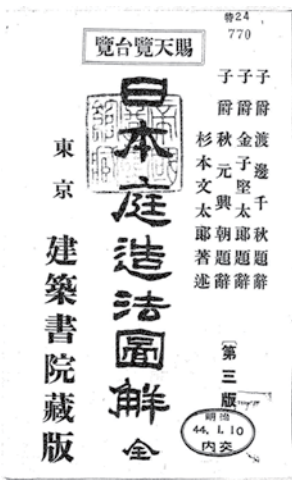
[図 2-25] 『日本住宅 室内飾り道具図解』
 杉本文太郎著、小塚芳舟画、
 建築書院、1912年4月、扉および pp.92-93
 所蔵：国立国会図書館



（九二）

第五十圖説明

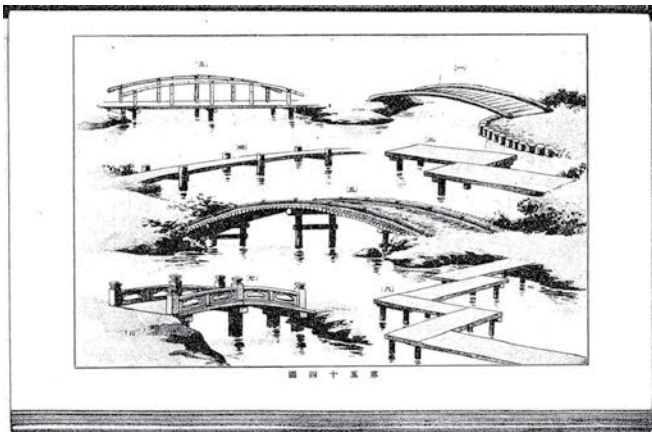
これもその優美なる造りを示さんとして、横びしに過ぎぬ小形の二曲屏風
 であります。勝手口よりの通ひの爲に障子を四五尺も離れて左方に寄せ
 立て前に一對の火鉢を置きしも、かゝるのみにてもの足ぬ様ゆゑ更に稍々
 高さ一種の卓を屏風の後に真半分程を見る如き體に置き置へました。而
 してその下或は中段へ、一輪挿に椿山茶花の類極めて軽く風情に折り入れ、
 天は特に明けて花なき階にふさわしき置物或は料紙箱に料紙入れたるを
 置くもよいのであります。又この卓をして普通は且つ正しく火鉢の左側
 即ち屏風の向隅に寄せて飾れば最も無難であります。然るときは卓の天
 に硯箱或は香箱或は水引箱或は式紙短冊箱總て座敷に用ゐる物何にても
 供へます。

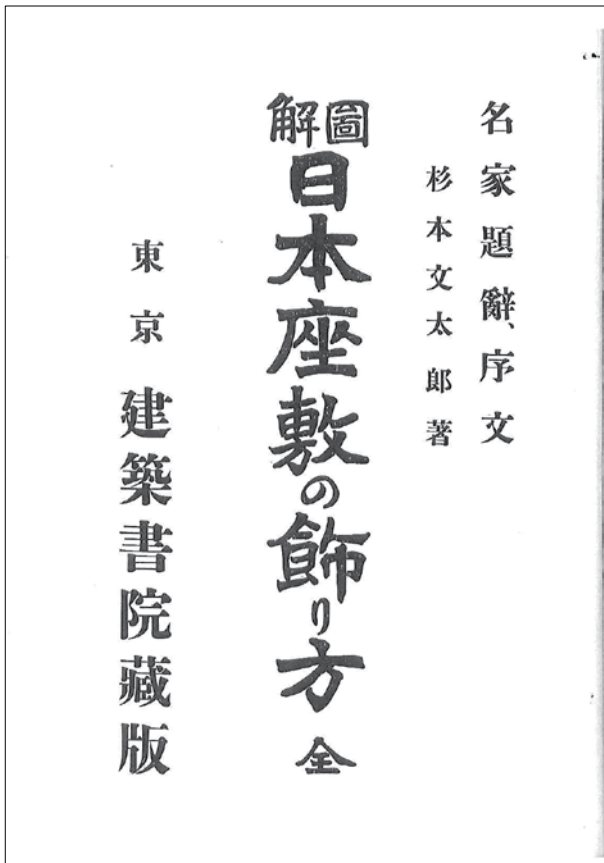


[图 2-26] 『日本庭造法図解』

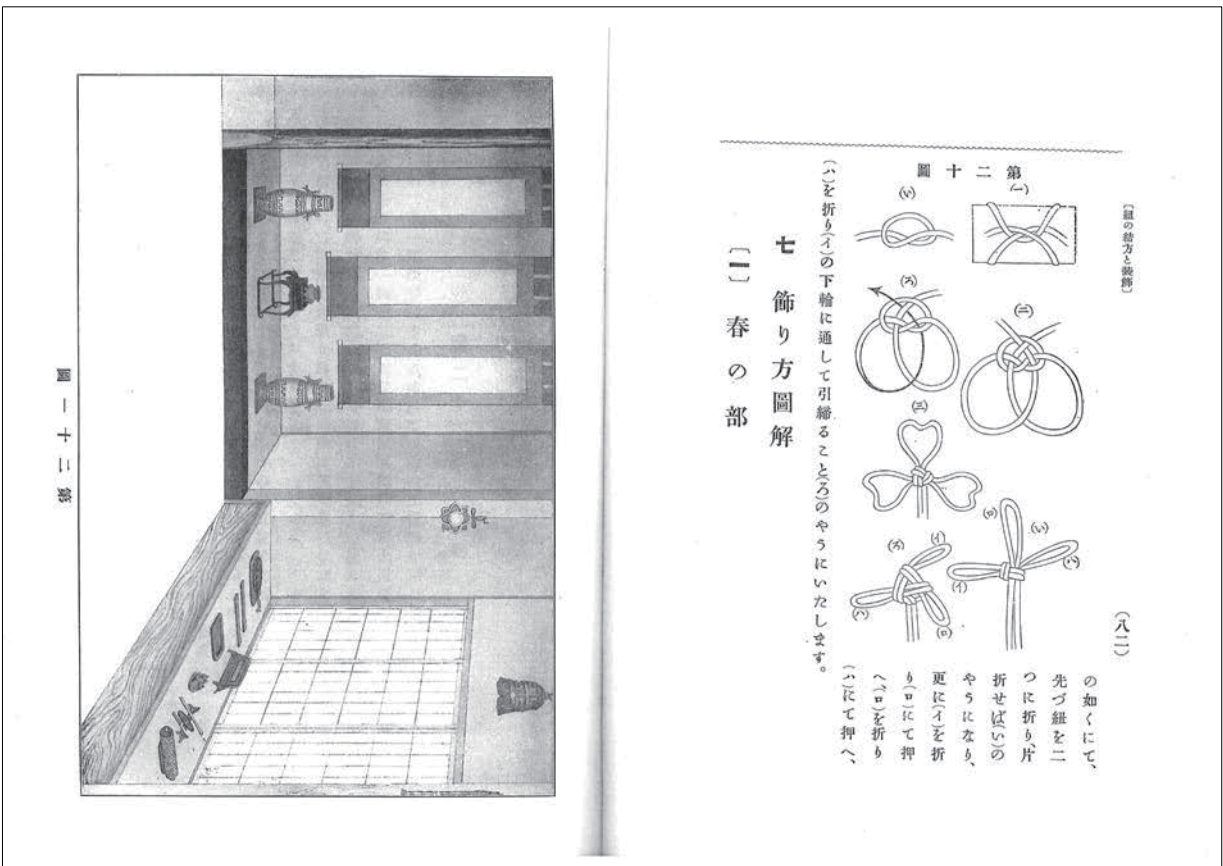
杉本文太郎著、大村民次郎画、建築書院、1910年11月、扉、天覧告知および桂宮御園（以上頁数なし）、第54図所蔵：国立国会図書館

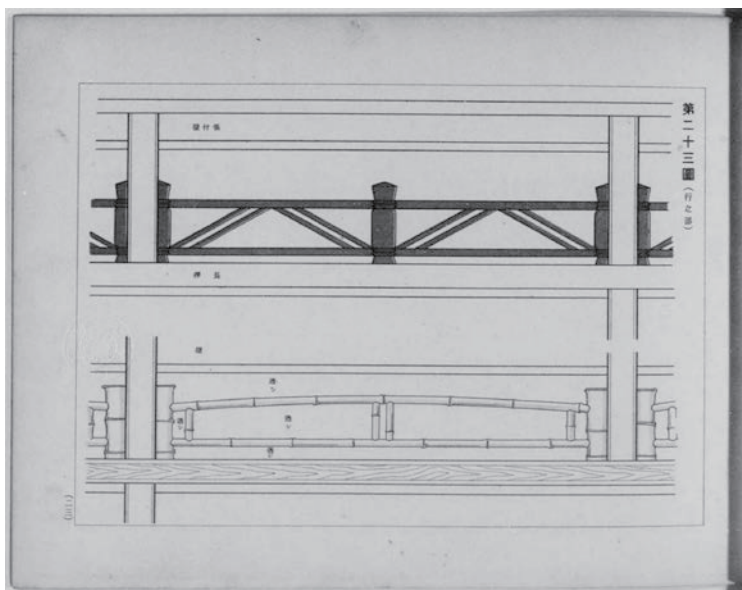
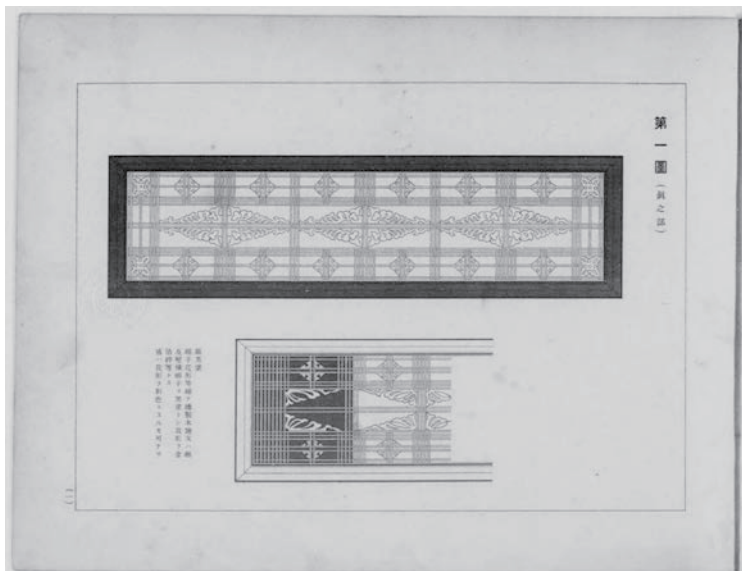
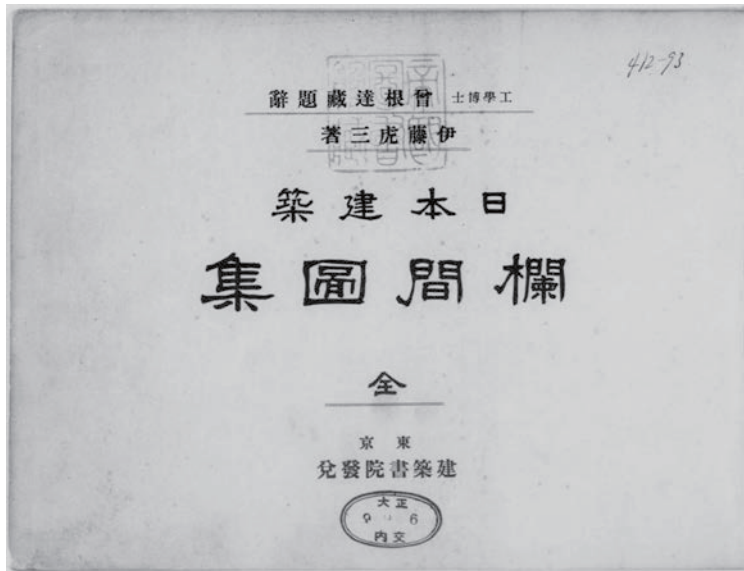
一日本庭造法圖解 四冊
 右
 天皇
 皇后兩陛下
 皇太子同妃兩殿下、獻
 納願出三付傳獻取計
 候此段及通牒候也
 明治四十三年十一月三十日
 宮内大臣子爵渡邊千秋
 建築書院



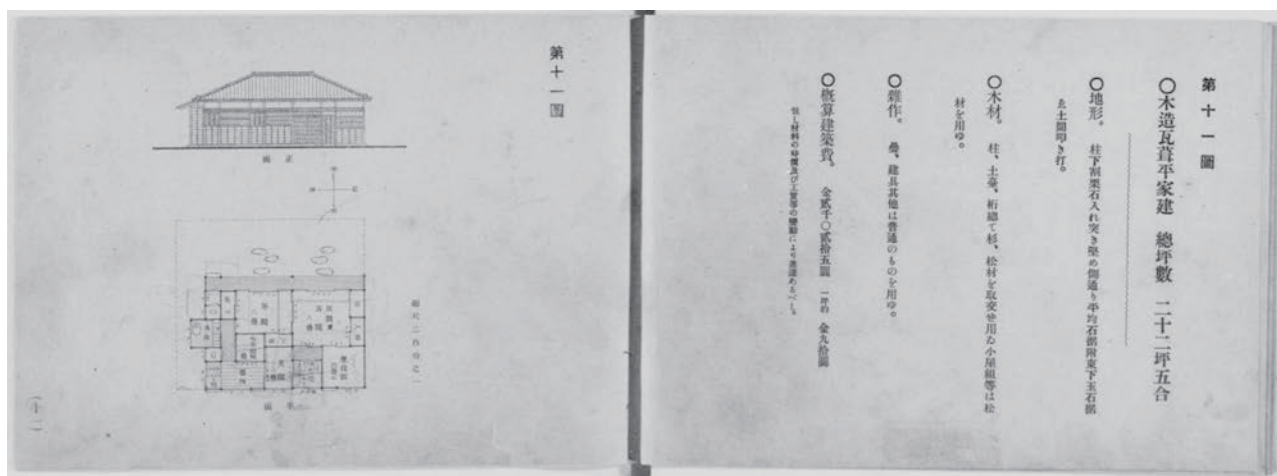


[図 2-27] 『図解日本座敷の飾り方』
杉本文太郎著、高輪其堂画、
建築書院、1912年3月、
扉および pp.82-83
所蔵：国立国会図書館





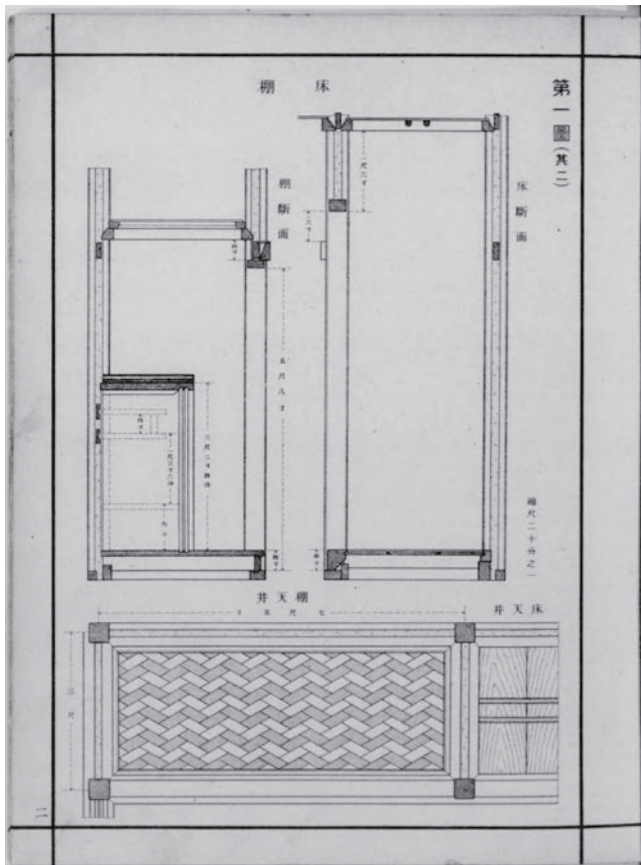
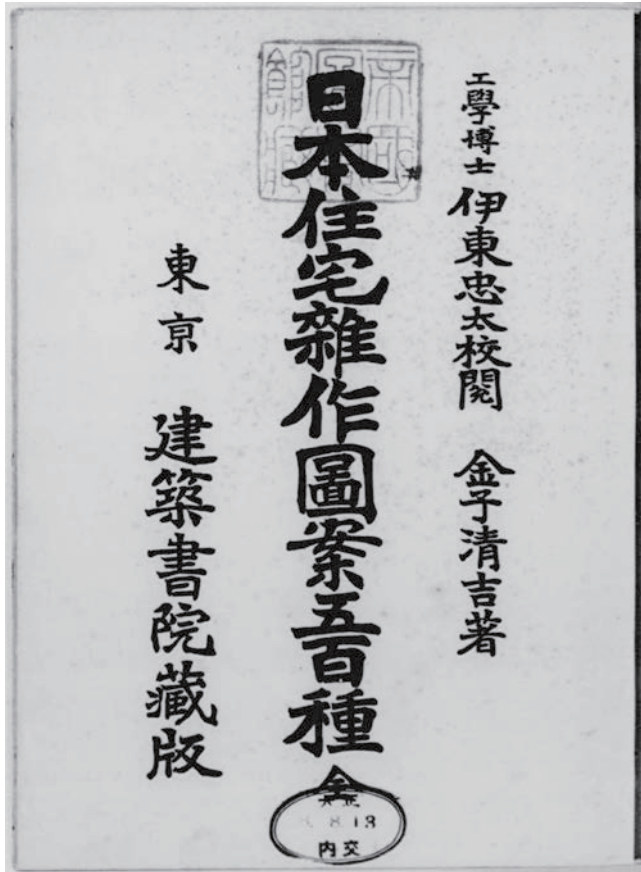
[図 2-28] 『日本建築欄間図集』
伊藤虎三著、曾禰達藏題辭、
笠原敏郎序、建築書院、
1920年9月、扉、第1図、第23図
所蔵：国立国会図書館



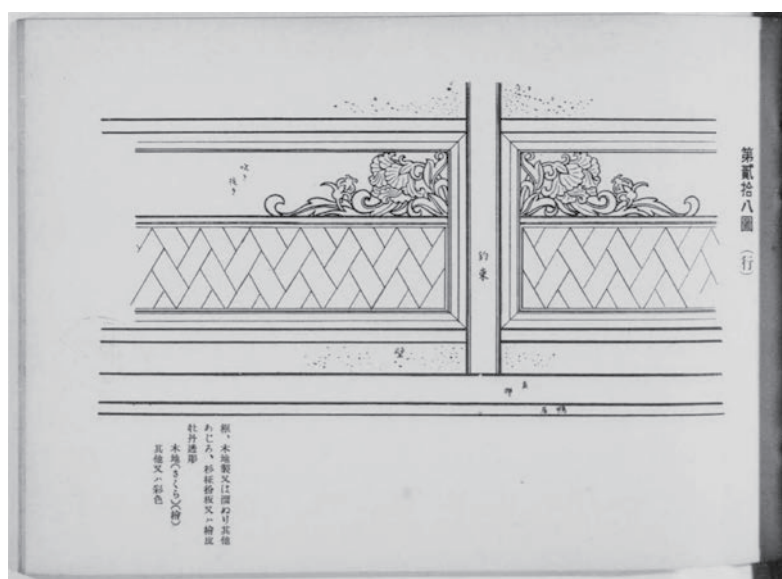
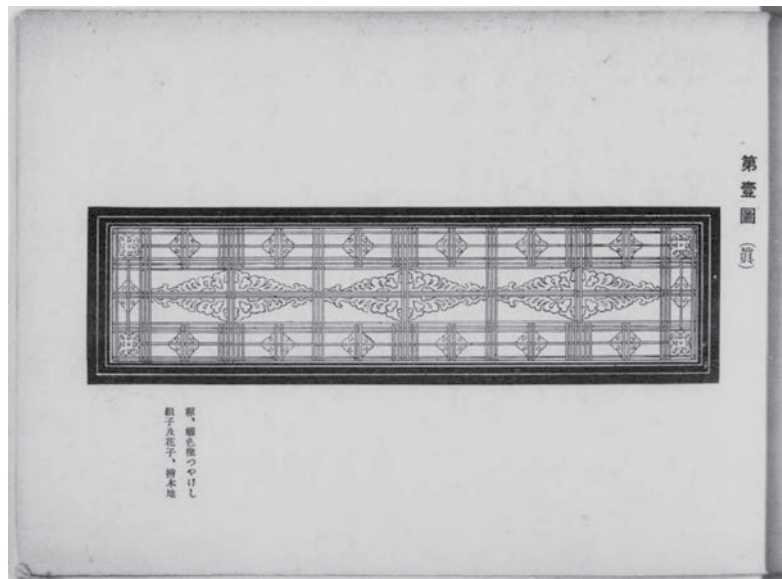
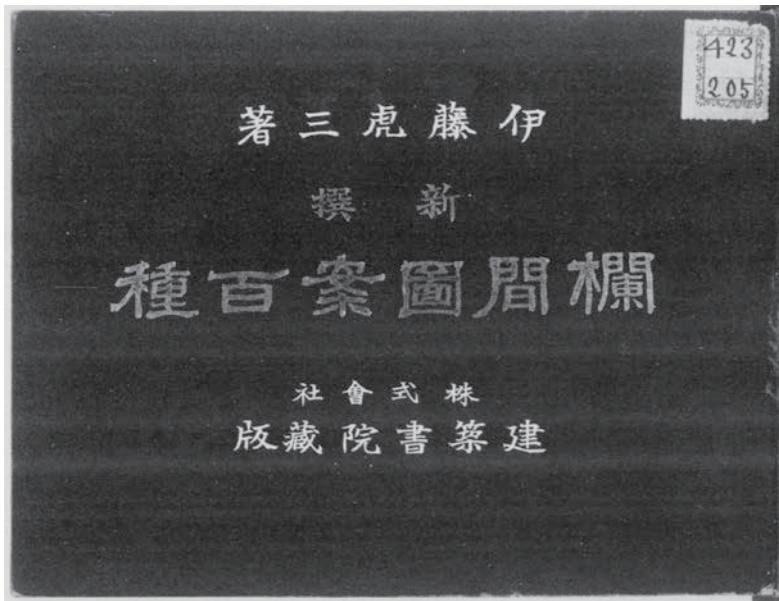
[図 2-29] 『かし家と小住宅建築図案五十種』

建築書院編集局編、建築書院、1919年6月、扉、第11図

所蔵：国立国会図書館



[图 2-30] 『日本住宅雑作圖案五百種』
 金子清吉著、伊東忠太校閱、
 建築書院、1917年8月、扉および p.2
 所蔵：国立国会図書館



[図 2-31] 『新撰 欄間図案百種』
伊藤虎三著、建築書院、
1925 年 12 月、
表紙、第 1 図、第 28 図
所蔵：国立国会図書館

[表 2-3] 建築書院第 4 期の建築書一覧

書名	編著者名	刊行年月
1 『建築図案——文化生活と其の住宅』	山中節治 著	1923 年 2 月
2 『図解庭園樹木手入法』	野間守人 著 原熙 序	1923 年 5 月
3 『庭園樹木要覧』	野間守人 編	1923 年 8 月
4 『六坪より七十坪まで 新しき日本住宅の間取と 外形図集』	建築書院 編	1924 年 2 月
5 『木造耐震家屋構造法——附 準防火設備』	鈴川孫三郎 著	1924 年 3 月
6 『鈴川式計算図表 度量衡換算図表』	鈴川孫三郎 著	1924 年 5 月
7 『誰にもわかる市街地建築物法図解』	鈴川孫三郎 著	1924 年 7 月
8 『最近欧米 模範建築図集 第一集 仏蘭西住宅 之部』	永江亘 編	1924 年 8 月
9 『商店建築及店頭計画図案』	府立東京商工奨励 館 編	1924 年 9 月
10 『建築仕様全集』	田中豊太郎 著 矢 橋賢吉校閲	1925 年 9 月
11 『数寄屋建築図案 第 1 集』	伊藤虎三 著	1925 年 11 月
12 『新撰 欄間図案百種』	伊藤虎三 著	1925 年 12 月
13 『数寄屋建築図案 第 2 集』	伊藤虎三 著	1926 年 ※
14 『数寄屋建築図案 第 3 集』	伊藤虎三 著	1926 年 ※
15 『新撰 建具図案百種』	伊藤虎三 著	1926 年 2 月
16 『日本建築仕様図解 本編』	近間佐吉 著	1926 年 2 月
17 『日本建築仕様図解 附図』	近間佐吉 著	1926 年 2 月
18 『日本建築雑作図案 上巻 床棚の部』	金子清吉 著 伊東 忠太校閲	1926 年 4 月
19 『実地作例平面図——附 庭の造り方図解』	杉本文太郎 著 甲 斐喜美画	1926 年 4 月
20 『間口二間より四間まで 各種 商店建築図案』	伊奈文太郎、金子清 吉 著	1926 年 10 月

21	『数寄屋建築図案 第4集』	伊藤虎三 著	1927年 ※
22	『数寄屋建築図案 第5集』	伊藤虎三 著	1927年 ※
23	『茶室の構造法と茶庭図解』	杉本文太郎 著	1927年 1月
24	『日本造庭材料図編 第1集 垣根・袖垣及塀の部』	杉本文太郎 著	1927年 11月
25	『日本造庭材料図編 第2集 庭門の部』	杉本文太郎 著	1930年 5月
26	『日本造庭材料図編 第3集 四阿及橋の部』	杉本文太郎 著	1930年 ※
27	『日本造庭材料図編 第4集 手水鉢及石畳の部』	杉本文太郎 著	1930年 ※
28	『八坪より七十坪まで住み心地よき日本住宅の間取と外形図集』	建築書院 編	1931年 2月
29	『すぐわかる和洋建築早割図解』	石原良三 著	1931年 2月

※ 刊行年月は推定。国立国会図書館蔵書は奥付欠如のため、以下のように推定した。

《13》： 《16》 卷末社告における既刊書とみられる紹介より

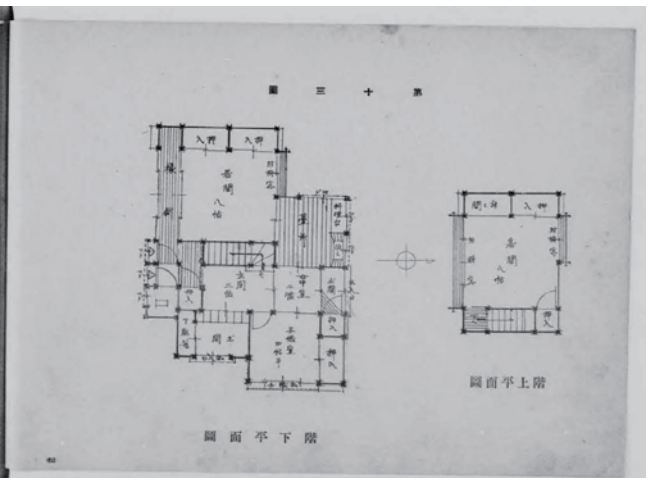
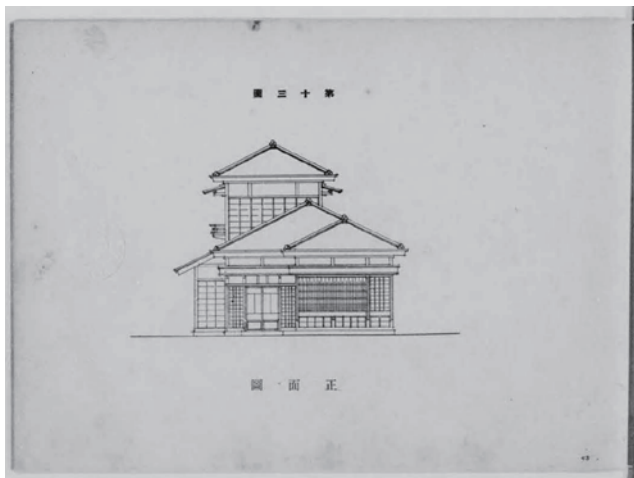
《14》： 《19》 卷末社告における既刊書とみられる紹介より

《21》： 国立国会図書館登録年「1925-1927」および前巻《13》《14》の経緯より

《22》： 国立国会図書館登録年「1925-1927」および前巻《13》《14》の経緯より

《26》： 前巻《25》より

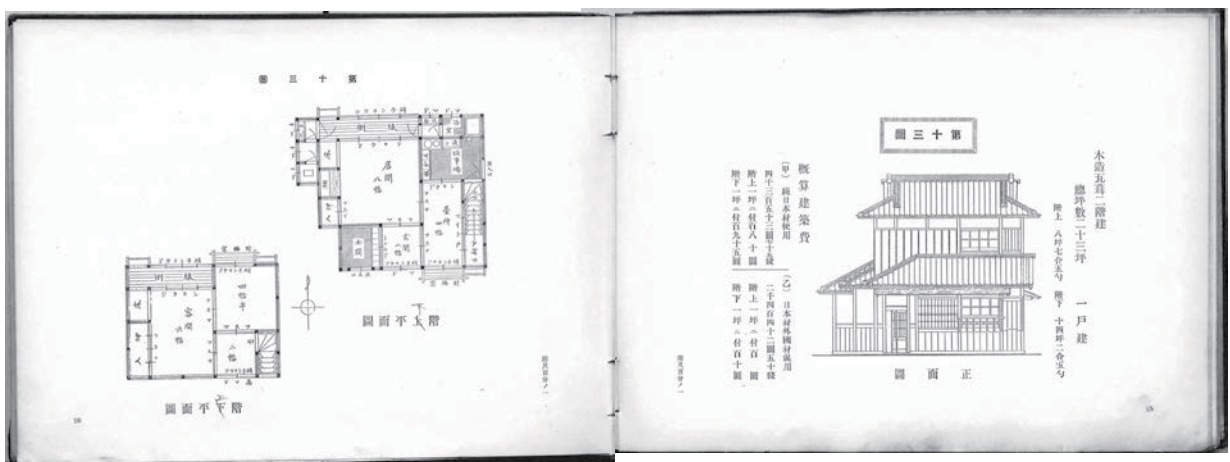
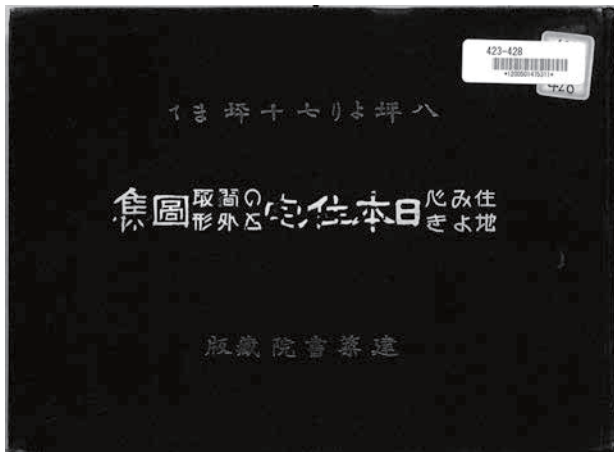
《27》： 前巻《25》より



[図 2-32] 『六坪より七十坪まで 新しき日本住宅の間取と外形図集』

建築書院編・刊、1924年2月、扉、第13図

所蔵：国立国会図書館



[図 2-33] 『八坪より七十坪まで 住み心地よき日本住宅の間取と外形図集』
建築書院編・刊、1931年2月、表紙、第13図
所蔵：国立国会図書館

- 1 誌名：『建築写真時報』
- 2 編者：高梨由太郎
- 3 刊行期間：1912(大正元)年7月ごろ～1914(大正3)年7月ごろ
- 4 累計号数：16号か
- 5 体裁：265×195mm、図版12枚、記事8頁(コロタイプ印刷)
- 6 定価：25銭
- 7 備考：第3巻第2号をのぞいては、菊池重郎「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動(上(明治村通信、1982年1月号))に依拠している。

no.	巻	号	特集	刊行年月	所蔵	備考
m001	第1巻	第1号		1912.07		
m002		第2号		1912.08		
m003		第3号		1912.09		
m004		第4号		1912.10		
m005		第5号		1912.11		
m006		第6号		1912.12		
m007	第2巻	第1号		1913		
m008		第2号		1913		
m009		第3号		1913		
m010		第4号		1913		
m011		第5号		1913		
m012		第6号		1913		
m013		第7号		1913		
m014	第3巻	第1号		1914		
m015		第2号	博覧会号：東京大正博覧会紀念	1914.05	京都府立図書館	
m016		第3号		1914.07		

凡例(以下[表3-1]共通)

- m 雑誌の累計号数
- s 叢書の累計巻数
- b 単行本の累計点数
- ndl 国立国会図書館蔵
- L 図書館の略記

- 1 叢書名：『世界建築様式図解』
- 2 編者： ー
- 3 刊行期間： 1912(大正元)年10月ごろ～1914(大正3)年ごろ
- 4 累計巻数： 19集か
- 5 体裁： 152×218mm、図版10枚、コロタイプ印刷
- 6 定価： 15銭
- 7 備考： 本叢書の書誌情報は、菊池重郎「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動(明治村通信、1982年2月号)」に依拠している。
[図3-1]の集計における各年の刊行点数については、
推定として1912年は2集、1913年に11集、1914年に6集を振り分けた。

no.	集	タイトル	刊行年	所蔵	備考
s001	第1集	モダン・レネッサンス	1912		
s002	第2集	セセッション			
s003	第3集	英国レネッサンス(アダム派)			
s004	第4集	仏国レネッサンス			
s005	第5集	モダン・レネッサンス			
s006	第6集	ジャーマン・コテージ			
s007	第7集	モダン・レネッサンス			
s008	第8集	モダン・レネッサンス			
s009	第9集	セセッション			
s010	第10集	モダン・レネッサンス			
s011	第11集	露西亜建築			
s012	第12集	セセッション			
s013	第13集	セセッション			
s014	第14集	モダン・レネッサンス			
s015	第15集	サラセン建築			
	第16集				
s016	第17集	サラセン建築			
s017	第18集	セセッション			
s018	第19集	ヌーボー			
	第20集				
	第21集				
	第22集				
s019	第23集	セセッション			
	第24集		1914		

- 1 叢書名: 『近世建築 The modern architecture』
- 2 編者: 高梨由太郎、洪洋社
- 3 刊行期間: 1914(大正3)年ごろ～1926(大正15)年2月ごろ
- 4 累計号数: 95号か、そのほかに臨時増刊1号か
- 5 体裁: 254×188mm、図版10枚(70号まで)、図版20枚(71号以降)、コロタイプ印刷
- 6 定価: 50銭、のちに1円
- 7 備考: 1～70号は合本版で確認のほか、菊池重郎「欧米新建築のプレート図集
「モダン・アーキテクチュア」について」(明治村通信、1981年2月号)、「月刊図集「近世建築」(1
「月刊図集「近世建築」(1)(2)」明治村通信、1981年4、5月号)にも依拠している。

no.	号	タイトル	刊行年	所蔵	備考
s020-029	1-10	(1)	1914-	京大工	合本版で確認※
s030-039	11-20	(2)	1914-	京大工	合本版で確認※
s040-049	21-30	(3)	1914-	京大工	合本版で確認※
s050-059	31-40	(4)	1914-	京大工	合本版で確認※
s060-069	41-50	(5)	1914-	京大工	合本版で確認※
s070-079	51-60	(6)	1914-	京大工	合本版で確認※
s080-089	61-70	(7)	1914-	京大工	合本版で確認※
s090	第71号	ハンブルグの智利館:フリッツ・ヘエゲル作	1925.03	ndl	※ [図3-1]の集計 における各年の刊 行点数については、 推定として1914年 ～1917年に各7号、 1918年～1924年に 各6号を振り分けた。
s091	第72号	和蘭ヒルヴェルサムmの建築:エム・デウドック設計	1925.04	ndl	
s092	第73号	フリードリヒヒ廳舎とエッセン市廳舎:建築技監 ボーデ氏作	1925.05	ndl	
s093	第74号	游泳場と別荘:フランスの近代建築	1925.06	ndl	
s094	第75号	和蘭の新建築	1925.07	ndl	
s095	第76号	巴里・萬國工藝美術博覽會 卷1	1925.08	ndl	
s096	第77号	巴里・萬國工藝美術博覽會 卷2	1925.09	ndl	
s097	第78号	巴里・萬國工藝美術博覽會 卷3	1925.10	ndl	
s098	第79号	巴里・萬國工藝美術博覽會 卷4	1925.11	ndl	
s099	第80号	巴里・萬國工藝美術博覽會 卷5	1925.12	ndl	
s100	第81号	集合住宅1(佛・墺・獨)	1926.02	ndl	
s101	第82号	近代住宅の室内		ndl	
s102	第83号	シカゴ・トレビューン:ホウエルス及フード氏設計	1926.03	ndl	
s103	第84号	新住宅1(独逸)	1926.09	ndl	
s104	第85号	ケルンの高層建築	1926	ndl	
s105	第86号	ミュルハイム・ルール市庁舎		ndl	
s106	第87号	事務所建築 卷1	1926	ndl	
s107	第88号	巴里・萬國工藝美術博覽會 卷6		ndl	
s108	第89号	新住宅2	1926.09	ndl	
s109	第90号	集合住宅2(墺地利)	1926.02	ndl	
s110	第91号	新住宅号	1928	ndl	
s111	第92号	湖辺の家	1927	ndl	
s112	第93号	仏蘭西 雑集		ndl	
s113	第94号	和蘭 雑集		ndl	
s114	第95号	コルビュジエ近作集	1928.01	ndl	
s115	臨時増刊	店頭及陳列棚意匠集	1926.02	ndl	

- 1 叢書名：『建築写真類聚』
- 2 編者：建築写真類聚刊行会(代表:高梨由太郎、のち高梨勝重)
- 3 刊行期間：1915(大正4)年10月～1943(昭和18)年10月ごろ
- 4 累計巻数：266集か、そのほかに別巻15集か
- 5 体裁：188×127mm(第8期以降194×157mmスクリーン綴or平綴)、図版50枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：75銭、第3期以降1円10銭
- 7 備考：第10期第23集は、藤森照信(代表研究者)『日本近代建築書の研究』(昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年)に依拠している。

no.	期	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s116	第1期	第1集	玄関 巻一	1915.10	ndl	
s117		第2集	住宅の外観 巻一	1915.11	cinii	
s118		第3集	茶室及数寄屋造 巻一	1915.12	ndl	
s119		第4集	門 巻一	1916.01	ndl	
s120		第5集	客間及広間 巻一	1916.02	ndl	
s121		第6集	暖炉 巻一	1916.03	ndl	
s122		第7集	銀行会社 巻一	1916.04	ndl	
s123		第8集	銀行会社 巻二	1916.05	ndl	
s124		第9集	床の間 巻一	1916	ndl	ndl奥付不明
s125		第10集	商店建築 巻一	1916.08	ndl	
s126		第11集	欄間 巻一	1916.09	ndl	
s127		第12集	建具 巻一	1916.10	cinii	
s128		第13集	劇場建築 巻一	1916.11	ndl	
s129		第14集	瀟洒なる建物 巻一	1916.12	ndl	
s130		第15集	寝室及化粧室 巻一	1917.01	ndl	
s131		第16集	床の間 巻二	1917	cinii	cinii奥付不明
s132		第17集	ステインドグラス 巻一	1917.03	ndl	
s133		第18集	住宅の外観 巻二	1917.04	ndl	
s134		第19集	窓及勾欄 巻一	1917.05	ndl	
s135		第20集	庭門及四阿 巻一	1917.06	ndl	
s136		第21集	神社仏閣 巻一	1917.07	cinii	
s137		第22集	玄関 巻二	1917.08	ndl	
s138		第23集	官衙学校	1917	ndl	ndl奥付不明
s139		第24集	特殊建築 巻一	1917.11	ndl	
s140	第2期	第1集	ドーム建築	1918.01	ndl	
s141		第2集	家具 巻一	1918.02	ndl	
s142		第3集	外部装飾 巻一	1918.03	ndl	
s143		第4集	室内装飾 巻一	1918.04	cinii	
s144		第5集	瀟洒なる建物 巻二	1918.05	ndl	
s145		第6集	住宅間取図 巻一	1918.06	ndl	
s146		第7集	窓及勾欄 巻二	1918.07	ndl	
s147		第8集	外部装飾 巻二	1918.08	ndl	
s148		第9集	階段 巻一	1918.09	ndl	
s149		第10集	門 巻二	1918.10	cinii	

no.	期	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s150		第11集	室内装飾 卷二	1918.11	cinii	
s151		第12集	茶室 卷二	1919.02	cinii	
s152		第13集	天井	1919.04	ndl	
s153		第14集	牆壁	1919.05	ndl	
s154		第15集	橋梁 卷一	1919.06	cinii	
s155		第16集	神社仏閣 卷二	1919.08	ndl	
s156		第17集	外部装飾 卷三	1919.11	cinii	
s157		第18集	欄間 卷二	1920.02	ndl	
s158		第19集	室内装飾 卷三	1920.04	ndl	
s159		第20集	家具 卷二	1920.05	京都府L	
s160		第21集	庭園の局部	1920.06	cinii	
s161		第22集	建築金具	1920.07	ndl	
s162		第23集	庭門及四阿 卷二	1920.10	ndl	
s163		第24集	建具 卷二	1920.10	ndl	
s164	第3期	第1集	独逸近代建築彫刻 卷一	1921.01	ndl	
s165		第2集	住宅の外観 卷三	1921.02	ndl	
s166		第3集	電灯装飾	1921.03	ndl	
s167		第4集	居間及食堂	1921.04	ndl	
s168		第5集	改良和風便所	1921.05	ndl	
s169		第6集	銀行会社 卷三	1921.06	ndl	
s170		第7集	階段 卷二	1921.07	ndl	
s171		第8集	特殊建築 卷二	1921.08	ndl	
s172		第9集	玄関 卷三	1921.09	ndl	
s173		第10集	暖炉 卷二	1921.10	ndl	
s174		第11集	住宅間取図 卷二	1921.11	ndl	
s175		第12集	門 卷三	1921.12	ndl	
s176		第13集	寢室及化粧室 卷二	1922.01	ndl	
s177		第14集	アパートメント・ハウス 卷一	1922.02	ndl	
s178		第15集	商店建築 卷二	1922.03	ndl	
s179		第16集	劇場建築 卷二	1922.04	ndl	
s180		第17集	別荘建築 卷一	1922.05	ndl	
s181		第18集	理想の台所	1922.06	ndl	
s182		第19集	公共建築 卷一	1922.07	ndl	
s183		第20集	別荘建築 卷二	1922.08	京都府L	
s184		第21集	床の間 卷三	1922.09	ndl	
s185		第22集	学校建築 卷一	1922.10	ndl	
s186		第23集	書齋と応接	1922.11	ndl	
s187		第24集	中流住宅の浴室	1922.12	ndl	
s188	第4期	第1集	改造住宅 卷一	1923.01	都中央L	
s189		第2集	改造住宅 卷二	1923.02	京都府L	
s190		第3集	独逸近代建築彫刻 卷二	1923.03	ndl	
s191		第4集	近代装飾意匠図案	1923.04	ndl	
s192		第5集	病院建築 卷一	1923.05	ndl	

no.	期	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s193		第6集	文化住宅の家具 卷一	1923.06	ndl	
s194		第7集	文化住宅 卷一	1923.07	ndl	
s195		第8集	銀行会社 卷四	1923.08	ndl	
s196		第9集	墓標と記念碑	1923.09	ndl	
s197		第10集	銀行会社 卷五	1923.10	ndl	
s198		第11集	洋風窓	1923.11	ndl	
s199		第12集	バラック建築 卷一	1923.12	ndl	
s200		第13集	客間及広間 卷二	1924.01	ndl	
s201		第14集	国際謝恩塔	1924.02	ndl	
s202		第15集	文化住宅 卷二	1924.03	ndl	
s203		第16集	家具 卷三	1924.04	ndl	
s204		第17集	活動写真館 卷一	1924.05	ndl	
s205		第18集	小規模の美術館	1924.06	ndl	
s206		第19集	バラック建築 卷二	1924.07	ndl	
s207		第20集	寝室及化粧室 卷三	1924.08	ndl	
s208		第21集	文化住宅 卷三	1924.09	ndl	
s209		第22集	医院建築 卷一	1924.10	ndl	
s210		第23集	レストランとカフェー 卷一	1924.11	ndl	
s211		第24集	レストランとカフェー 卷二	1924.12	ndl	
s212	第5期	第1集	表現主義の彫刻	1925.03	ndl	
s213		第2集	停車場建築	1925.04	ndl	
s214		第3集	公衆浴場	1925.05	ndl	
s215		第4集	新時代の家具	1925.06	ndl	
s216		第5集	アメリカ近代住宅	1925.07	ndl	
s217		第6集	店頭装飾 卷一	1925.08	ndl	
s218		第7集	店頭装飾 卷二	1925.09	ndl	
s219		第8集	和蘭近代住宅	1925.10	ndl	
s220		第9集	日本趣味の折衷住宅 卷一	1925.11	ndl	
s221		第10集	日本趣味の折衷住宅 卷二	1925.12	ndl	
s222		第11集	学校建築 卷二	1926.01	ndl	
s223		第12集	商店建築 卷三	1926.02	ndl	
s224		第13集	文化住宅 卷四	1926.03	ndl	
s225		第14集	独逸近代住宅	1926.04	ndl	
s226		第15集	遊園地の建物	1926.05	ndl	
s227		第16集	活動写真館 卷二	1926.06	ndl	
s228		第17集	橋梁 卷二	1926.07	ndl	
s229		第18集	ステインドグラス 卷二	1926.08	ndl	
s230		第19集	銀行会社 卷五	1926.09	ndl	
s231		第20集	一五六坪の小住宅 卷一	1926.10	ndl	
s232		第21集	米国図書館建築	1926.11	ndl	
s233		第22集	一五六坪の小住宅 卷二	1926.12	ndl	
s234		第23集	一五六坪の小住宅 卷三	1927.01	京都府L	
s235		第24集	商店建築 卷四	1927.02	ndl	

no.	期	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s236	第6期	第1集	室内装飾 卷四	1927.05	ndl	
s237		第2集	特殊建築 卷三	1927.06	ndl	
s238		第3集	外部装飾 卷四	1927.07	ndl	
s239		第4集	百貨店	1927.08	ndl	
s240		第5集	新住宅の浴室	1927.09	ndl	
s241		第6集	新興アパートメント 卷一	1927.10	ndl	
s242		第7集	文化住宅 卷五	1927.12	ndl	
s243		第8集	室内装飾 卷五	1928.01	ndl	
s244		第9集	望駿荘	1928.02	ndl	
s245		第10集	ステインドグラス 卷三	1928.03	ndl	
s246		第11集	講堂と図書館	1928.04	ndl	
s247		第12集	改良便所	1928.05	ndl	
s248		第13集	木造小住宅	1928.06	ndl	
s249		第14集	林泉集	1928.07	ndl	
s250		第15集	数寄屋造住宅	1928.08	ndl	
s251		第16集	商店建築 卷五	1928.09	京都府L	
s252		第17集	装飾塔・装飾門	1928.11	ndl	
s253		第18集	東洋趣味の新住宅	1928.12	ndl	
s254		第19集	百貨店白木屋 卷一	1929.01	ndl	
s255	第20集	商店建築 卷六	1929.02	ndl		
s256	第21集	旅館建築 卷一	1929.03	ndl		
s257	第22集	銀行会社 卷七	1929.04	ndl		
s258	第23集	学校建築 卷三	1929.06	ndl		
s259	第24集	新しい室内意匠	1929.07	ndl		
s260	第7期	第1集	映画館建築	1929.09	ndl	
s261		第2集	新時代の住宅 卷一	1929.07	ndl	
s262		第3集	朝日住宅写真集	1929.11	ndl	
s263		第4集	門 卷四	1929.12	ndl	
s264		第5集	レストランとカフェー 卷三	1930.01	ndl	
s265		第6集	建具 卷三	1930.02	ndl	
s266		第7集	ホテル建築	1930.03	ndl	
s267		第8集	商店建築 卷七	1930.04	ndl	
s268		第9集	工業建築	1930.05	ndl	
s269		第10集	石灯籠集	1930.06	ndl	
s270		第11集	住宅の外観 卷四	1930.07	ndl	
s271		第12集	和風住宅の室内構成 卷一	1930.08	ndl	
s272		第13集	舞台装置と舞台設備	1930.09	ndl	
s273		第14集	明治神宮写真集	1930	ndl	ndl奥付不明
s274		第15集	瀟洒なる建物 卷三	1930.11	ndl	
s275		第16集	カフェー外観集 卷一	1930.12	ndl	
s276		第17集	住宅翠巒荘	1931.01	ndl	
s277		第18集	寝室及化粧室 卷四	1931.02	ndl	
s278		第19集	病院建築 卷二	1931.03	ndl	

no.	期	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s279		第20集	都ホテルと京都ホテル	1931.04	ndl	ndl奥付不明
s280		第21集	数寄屋造の別荘	1931.05	ndl	ndl奥付不明
s281		第22集	店頭欄間集	1931.06	ndl	
s282		第23集	銀行会社 卷八	1931.07	ndl	
s283		第24集	小住宅庭園図集	1931.08	ndl	
s284	第8期	第1集	茶室建築 卷三	1931.11	ndl	
s285		第2集	百貨店白木屋 卷二	1931.12	ndl	
s286		第3集	カフェー外観集 卷二	1931.12	ndl	
s287		第4集	新しき階段の構成	1932.01	ndl	
s288		第5集	現代和風邸宅の構成	1932.02	ndl	
s289		第6集	新しき照明意匠	1932.04	ndl	
s290		第7集	和風住宅の室内構成 卷二	1932.05	ndl	
s291		第8集	カフェー内部集 卷一	1932.06	ndl	
s292		第9集	書齋と応接の構成	1932.07	ndl	
s293		第10集	カフェー内部集 卷二	1932.09	ndl	
s294		第11集	塗装・舗装・石積意匠集	1932.10	ndl	
s295		第12集	世界の新興住宅	1932.12	ndl	
s296		第13集	事務所建築	1932.12	ndl	
s297		第14集	玄関硝子戸写真集	1933.01	ndl	
s298		第15集	床の間集 卷四	1933.02	ndl	
s299		第16集	新興住宅の室内構成 卷一	1933.04	ndl	
s300		第17集	医院建築 卷二	1933.06	ndl	
s301		第18集	床面意匠集	1933.07	ndl	
s302		第19集	住宅渡月荘	1933.08	ndl	
s303		第20集	カフェー内部集 卷三	1933.10	ndl	
s304		第21集	新興仏寺建築	1933.11	ndl	
s305		第22集	暖炉前の構成	1933.12	ndl	
s306		第23集	住宅竹翠居	1934.01	ndl	
s307		第24集	食堂の構成	1934.02	ndl	
s308	第9期	第1集	建築家の家 卷一	1934.04	ndl	
s309		第2集	東都映画館建築 卷一	1934.05	ndl	
s310		第3集	川崎大社大本坊客殿の建築構成	1934.06	ndl	
s311		第4集	新興日本の住宅	1934.07	ndl	
s312		第5集	喫茶店の新構成 卷一	1934.10	ndl	
s313		第6集	数寄屋趣味の店舗	1934.11	ndl	
s314		第7集	瀟洒なる料亭の構成	1934.12	ndl	
s315		第8集	洋風住宅外観集 卷一	1935.02	ndl	
s316		第9集	数寄屋趣味の料亭	1935.04	ndl	
s317		第10集	現代の建築彫刻	1935.05	ndl	
s318		第11集	数寄屋住宅錦舟寮	1935.06	ndl	
s319		第12集	商店建築外観集 卷一	1935.09	ndl	
s320		第13集	ドーア集	1935.11	ndl	
s321		第14集	和風牆壁集	1935.12	ndl	

no.	期	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s322		第15集	和洋前庭集	1936.02	ndl	
s323		第16集	割烹旅館	1936.04	ndl	
s324		第17集	日本建築細部図集	1936.06	ndl	
s325		第18集	住宅楽萃荘	1936.08	京都府L	
s326		第19集	和洋住宅の門	1936.08	ndl	
s327		第20集	グリル意匠集	1936.10	ndl	
s328		第21集	異色ある料亭	1936.12	京都府L	
s329		第22集	商店建築外観集 卷二	1937.02	京都府L	
s330		第23集	近代数寄屋住宅	1937.03	京都府L	
s331		第24集	和洋玄関集 卷一	1937.04	京都府L	
s332	第10期	第1集	名古屋汎大平洋平和博建築図集	1937.05	京都府L	
s333		第2集	床の間 卷五	1937.09	京都府L	
s334		第3集	劇場と映画館	1937.12	京都府L	
s335		第4集	新興住宅の室内構成 卷二	1938.02	京都府L	
s336		第5集	室内の構成	1938.04	京都府L	編者・由太郎
s337		第6集	住宅外装集	1938.06	ndl	
s338		第7集	和風天井集	1938.08	京都府L	
s339		第8集	趣味の数寄屋住宅	1938.09	京都府L	
s340		第9集	数寄屋趣味の料亭 卷二	1938.10	京都府L	
s341		第10集	茶室建築 卷四	1938.12	ndl	
s342		第11集	陶製モザイクと彫刻	1939.01	cinii	編者・勝重
s343		第12集	高原の農村住宅	1939.02	京都府L	
s344		第13集	数寄屋趣味割烹店・酒場新装集 卷一	1939.03	京都府L	
s345		第14集	和洋住宅外観集 卷一	1939.05	ndl	
s346		第15集	医院建築 卷三	1939.06	京都府L	
s347		第16集	理髪店と美粧院	1939.08	ndl	
s348		第17集	アパートメント・ハウス 卷二	1939.10	京都府L	
s349		第18集	和風住宅の室内構成 卷三	1939.11	京都府L	
s350		第19集	居間・応接・食堂の構成	1939.12	京都府L	
s351		第20集	浴室・洗面・化粧室の構成	1940.02	ndl	
s352		第21集	数寄屋趣味の料亭 卷三	1940.04	京都府L	
s353		第22集	新興しるこ店集	1940.06	東大生研	
s354		第23集	日本住宅建築構造図集	1940.07	ndl	
s355		第24集	喫茶店の新構成 卷二	1940.10	ndl	
s356	第11期	第1集	床の間 卷六	1940.11	京都府L	
s357		第2集	日本趣味の店舗	1940.12	ndl	
s358		第3集	住宅台所集	1941.04	大阪府L	
s359		第4集	川喜田煉七郎店舗作品集一 小商店図集	1941.05	ndl	
s360		第5集	和洋住宅外観集 卷二	1941.08	ndl	
s361		第6集	日本住宅建築構造図集 卷二	1941	ndl	ndl奥付不明
s362		第7集	共同住宅建築集 卷一	1941	ndl	ndl奥付不明
s363		第8集	制限小住宅集 卷一	1942.04	ndl	
s364		第9集	日本住宅庭園集 卷一	1942.11	ndl	

no.	期	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s365		第10集	住宅玄関集	1943	ndl	ndl奥付不明
s366		第11集	制限小住宅集 卷二	1943.10	ndl	
s367	別巻	別巻1	瀟洒なる建物 卷三	1933.08	ndl	
s368		別巻2	庭門及四阿	1933.08	ndl	
s369		別巻3	カフェー外観集 卷一	1933.12	ndl	
s370		別巻4	和風住宅の室内構成 卷一	1939.04	ndl	
s371		別巻5	旅館建築	1934.01	ndl	
s372		別巻6	新住宅の浴室	1934.01	ndl	
s373		別巻7	和風住宅の門	1934.08	ndl	
s374		別巻8	新興アパートメント	1934.05	ndl	
s375		別巻9	建具写真集 卷二	1934.01	ndl	
s376		別巻10	欄間集 卷一	1935.10	ndl	
s377		別巻11	欄間集 卷二	1939.01	ndl	
s378		別巻12	和風窓及勾欄	1933.06	京都府L	
s379		別巻13	数寄屋造の住宅	1936.06	ndl	
s380		別巻14	帝国ホテル写真集	1937	大阪府L	
s381		別巻15	新しい台所の設計	1933.06	都中央L	

- 1 誌名：『新住宅』
- 2 編者：高梨由太郎、顧問：大熊喜邦、佐藤功一
- 3 刊行期間：1920(大正9)年1月～1923(大正12)年9月
- 4 累計号数：45号、ほか臨時増刊1号
- 5 体裁：257×188mm、16頁、口絵1葉(コロタイプ印刷)
- 6 定価：30銭
- 7 備考：原本不明の号数は、菊岡俱也、藤井肇男編、『日本近代 建築・土木・都市・住宅 雑誌目次総覧』、第2期第1巻、柏書房、1991年)に依拠している。

no.	期	集	特集	刊行年月	所蔵	備考
m017	第1巻	第1号	正月創刊号兼クリスマス号	1920.01	京大工	
m018		第2号		1920.02	京大工	
m019		第3号		1920.03	京大工	
m020		第4号		1920.04	京大工	
m021		第5号		1920.05	京大工	
m022		第6号		1920.06	京大工	
m023		第7号	庭園之研究(特別号)	1920.07	京大工	
m024		第8号		1920.08	京大工	
m025		第9号		1920.09	京大工	
m026		第10号		1920.10	京大工	
m027		第11号		1920.11	京大工	
m028		第12号		1920.12	京大工	
m029	第2巻	第1号		1921.01	京大工	
m030		第2号		1921.02	京大工	
m031		第3号		1921.03	京大工	
m032		第4号		1921.04	京大工	
m033		第5号		1921.05	京大工	
m034		第6号	農民美術号	1921.06	京大工	
m035		第7号		1921.07	京大工	
m036		第8号		1921.08	京大工	
m037		第9号		1921.09	京大工	
m038		第10号		1921.10	京大工	
m039		第11号		1921.11	京大工	
m040		第12号		1921.12	京大工	
m041	第3巻	第1号		1922.01	ndl	
m042		第2号		1922.02	ndl	
m043		第3号		1922.03	ndl	
m044	臨時増刊号		平和博覧会・文化村の簡易住宅	1922.03	ndl	
m045		第4号		1922.04	ndl	
m046		第5号		1922.05	ndl	
m047		第6号		1922.06	ndl	
m048		第7号		1922.07	ndl	
m049		第8号		1922.08	ndl	
m050		第9号		1922.09	ndl	

no.	期	集	特集	刊行年月	所蔵	備考
m051		第10号		1922.10	ndl	
m052		第11号		1922.11	ndl	
m053		第12号		1922.12	ndl	
m054	第4卷	第1号		1923.01	関西大	
m055		第2号		1923.02	関西大	
m056		第3号		1923.03		原本不明
m057		第4号		1923.04	関西大	
m058		第5号		1923.05		原本不明
m059		第6号		1923.06	関西大	
m060		第7号		1923.07		原本不明
m061		第8号		1923.08		原本不明
m062		第9号		1923.09	関西大	

- 1 叢書名：『VENUS建築図集』
- 2 編者：ヴィーナス・ソサイティ
- 3 刊行期間：1921(大正10)年2月ごろ～1921年10月ごろ
- 4 累計巻数：4集か
- 5 体裁：254×188mm、図版30枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：1円60銭
- 7 備考：第3集は、藤森照信(代表研究者)『日本近代建築書の研究』(昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年)に依拠している。

no.	号	タイトル	刊行年	所蔵	備考
s382	第1	ペエタア・ベエレンス氏作品	1921.02	東工大	
s383	第2	カアル・モリッツ氏作品・ヨセフ・ホフマン氏作品	1921.07	九大	
s384	第3	メキシコ建築集	1920.10	東大生研	
s385	第4	アルビンミウラア作品集	1921.02	千葉大	

- 1 叢書名：『建築文化叢書』
- 2 監修：伊東忠太、佐藤功一
- 3 刊行期間：1921(大正10)年4月ごろ～1927(昭和2)年ごろ
- 4 累計巻数：11編か
- 5 体裁：188×127mm、本文約110頁、図版約30枚(コロタイプ印刷)
- 6 定価：3円15銭
- 7 備考：9編「回教徒の文化と建築」のみ不明

no.	編	タイトル	編著者	刊行年	所蔵	備考
s386	第1編	エジプトの文化と建築	森口多里、濱岡周忠	1922.03		
s387	第2編	希臘の文化と建築(上)	森口多里、田邊泰	1923.09		
s388	第3編	希臘の文化と建築(下)	森口多里、田邊泰	1926.07		
s389	第4編	ローマの文化と建築	森口多里	1927.12		
s390	第5編	ビザンチン文化と建築	森口多里、木村幸一郎	1925.01		
s391	第6編	ローマネスクの文化と建築	森口多里	1921.04		
s392	第7編	印度の文化と建築	森口多里、濱岡周忠	1924.04		
s393	第8編	ゴシックの文化と建築	森口多里	1921.07		
	第9編	回教徒の文化と建築				刊行不明
s394	第10編	ルネッサンス文化と建築(上)	蔵田周忠	1926.10		
s395	第11編	ルネッサンス文化と建築(下)	蔵田周忠	1927		
s396	第12編	近代建築思潮	濱岡周忠	1924.07		

- 1 叢書名：『美術工芸大観』
- 2 編者：美術工芸大観刊行会編(代表：高梨由太郎)
- 3 刊行期間：1922(大正11)年ごろ～1925(大正14)年ごろ
- 4 累計巻数：48集か
- 5 体裁：254×188mm、図版10枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：1期12集で35円
- 7 備考：国立国会図書館所蔵

no.	期	集	刊行年月	no.	期	集	刊行年月
s397	第1期	第1集	1922	s421	第3期	第1集	1924
s398		第2集	1922	s422		第2集	1924
s399		第3集	1922	s423		第3集	1924
s400		第4集	1922	s424		第4集	1924
s401		第5集	1922	s425		第5集	1924
s402		第6集	1922	s426		第6集	1924
s403		第7集	1922	s427		第7集	1924
s404		第8集	1922	s428		第8集	1924
s405		第9集	1922	s429		第9集	1924
s406		第10集	1922	s430		第10集	1924
s407		第11集	1922	s431		第11集	1924
s408		第12集	1922	s432		第12集	1924
s409	第2期	第1集	1923	s433	第4期	第1集	1925
s410		第2集	1923	s434		第2集	1925
s411		第3集	1923	s435		第3集	1925
s412		第4集	1923	s436		第4集	1925
s413		第5集	1923	s437		第5集	1925
s414		第6集	1923	s438		第6集	1925
s415		第7集	1923	s439		第7集	1925
s416		第8集	1923	s440		第8集	1925
s417		第9集	1923	s441		第9集	1925
s418		第10集	1923	s442		第10集	1925
s419		第11集	1923	s443		第11集	1925
s420		第12集	1923	s444		第12集	1925

- 1 叢書名：『意匠美術写真類聚』
- 2 編者：意匠美術写真類聚刊行会
- 3 刊行期間：1922(大正11)年11月ごろ～1924(大正13)年7月ごろ
- 4 累計巻数：12集か
- 5 体裁：188×127mm、図版40枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：1円10銭
- 7 備考：

no.	期	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s445	第1期	第1集	ウキリアム・モリス図案集	1922.11		
s446		第2集	ビアズリ装画集	1922.12		
s447		第3集	希臘瓶絵集	1923.01		
s448		第4集	北伊太利のロマネスク裝飾美術集	1923.02		
s449		第5集	花を取扱へる意匠圖案集	1923.02		
s450		第6集	英吉利の古家具意匠集	1923		
s451	第2期	第1集	埃及ツタンカーメン王寶器集	1923.06		
s452		第2集	近代の舞台装置意匠集	1923.06		
s453		第3集	続近代の舞台装置意匠集	1923.07		
s454		第4集	表現主義の工芸美術集	1923.08		
s455		第5集	メストロウィッチの彫刻集	1923.09		
s456		第6集	埃及裝飾美術意匠集(森口多里監修)	1923.10		

- 1 誌名：『建築新潮』
- 2 編者：高梨由太郎(編集協力:今和次郎、木村幸一郎、田辺泰)
- 3 刊行期間：1924(大正13)年1月～1931(昭和6)年8月
- 4 累計号数：92号
- 5 体裁：257×182mm、32頁、口絵約6葉(コロタイプ印刷)
第11年第7号以降200×182mm、20頁もしくは26頁(終刊号のみ50頁)
- 6 定価：60銭
- 7 備考：関東大震災により第4巻第9号で休刊した雑誌『新住宅』の改題再刊とされたため、
『建築新潮』としての創刊号は第5年第1号とされた。

no.	期	集	特集	刊行年月	所蔵	備考
m063	第5年	第1号		1924.01	ndl	
m064		第2号		1924.02	ndl	
m065		第3号		1924.03	ndl	
m066		第4号		1924.04	ndl	
m067		第5号		1924.05	ndl	
m068		第6号		1924.06	ndl	
m069		第7号		1924.07	ndl	
m070		第8号		1924.08	ndl	
m071		第9号		1924.09	ndl	
m072		第10号		1924.10	ndl	
m073		第11号		1924.11	ndl	
m074		第12号		1924.12	ndl	
m075	第6年	第1号		1925.01	ndl	
m076		第2号		1925.02	ndl	
m077		第3号		1925.03	ndl	
m078		第4号		1925.04	ndl	
m079		第5号		1925.05	ndl	
m080		第6号		1925.06	ndl	
m081		第7号		1925.07	ndl	
m082		第8号		1925.08	ndl	
m083		第9号		1925.09	ndl	
m084		第10号		1925.10	ndl	
m085		第11号		1925.11	ndl	
m086		第12号		1925.12	ndl	
m087	第7年	第1号	巴里・万国近代装飾美術博覧会号	1926.01	ndl	
m088		第2号		1926.02	ndl	
m089		第3号	分離派建築会第五回展覧会作品号	1926.03	ndl	
m090		第4号		1926.04	ndl	
m091		第5号		1926.05	ndl	
m092		第6号		1926.06	ndl	
m093		第7号		1926.07	ndl	
m094		第8号		1926.08	ndl	
m095		第9号		1926.09	ndl	

no.	期	集	特集	刊行年月	所蔵	備考
m096		第10号		1926.10	ndl	
m097		第11号		1926.11	ndl	
m098		第12号		1926.12	ndl	
m099	第8年	第1号		1927.01	ndl	
m100		第2号		1927.02	ndl	
m101		第3号	分離派建築会第六回展覧会作品号	1927.03	ndl	
m102		第4号	田園都市と住宅問題号	1927.04	ndl	
m103		第5号		1927.05	ndl	
m104		第6号		1927.06	ndl	
m105		第7号		1927.07	ndl	
m106		第8号		1927.08	ndl	
m107		第9号		1927.09	ndl	
m108		第10号		1927.10	ndl	
m109		第11号		1927.11	ndl	
m110		第12号		1927.12	ndl	
m111	第9年	第1号		1928.01	ndl	
m112		第2号		1928.02	ndl	
m113		第3号		1928.03	ndl	
m114		第4号	大礼記念国産振興東京博覧会画報	1928.04	ndl	
m115		第5号		1928.05	ndl	
m116		第6号	オットー・ワグナー十年祭記念号	1928.06	ndl	
m117		第7号		1928.07	ndl	
m118		第8号		1928.08	ndl	
m119		第9号		1928.09	ndl	
m120		第10号	鎌倉研究号	1928.10	ndl	
m121		第11号	分離派建築会第七回展覧会作品集	1928.11	ndl	
m122		第12号		1928.12	ndl	
m123	第10年	第1号		1929.01	ndl	
m124		第2号		1929.02	ndl	
m125		第3号	新興建築講演号	1929.03	ndl	
m126		第4号		1929.04	ndl	
m127		第5号		1929.05	ndl	
m128		第6号		1929.06	ndl	
m129		第7号		1929.07	ndl	
m130		第8号		1929.08	ndl	
m131		第9号	(南欧建築号)	1929.09	ndl	
m132		第10号		1929.10	ndl	
m133		第11号	特集バウハウス	1929.11	ndl	
m134		第12号		1929.12	ndl	
m135	第11年	第1号	新興建築講演号	1930.01	ndl	
m136		第2号		1930.02	ndl	
m137		第3号		1930.03	ndl	
m138		第4号		1930.04	ndl	

no.	期	集	特集	刊行年月	所蔵	備考
m139		第5号		1930.05	ndl	
m140		第6号		1930.06	ndl	
m141		第7号	劇場と舞台装置	1930.07	ndl	
m142		第8号		1930.08	ndl	
m143		第9号		1930.09	ndl	
m144		第10号		1930.10	ndl	
m145		第11号		1930.11	ndl	
m146		第12号		1930.12	ndl	
m147	第12年	第1号		1931.01	ndl	
m148		第2号		1931.02	ndl	
m149		第3号		1931.03	ndl	
m150		第4号		1931.04	ndl	
m151		第5号		1931.05	ndl	
m152		第6号		1931.06	ndl	
m153		第7号		1931.07	ndl	
m154		第8号		1931.08	ndl	

- 1 叢書名：『図案資料叢書』
- 2 編者：田辺泰
- 3 刊行期間：1924(大正13)年9月～1928(昭和3)年ごろ
- 4 累計巻数：12集か
- 5 体裁：218×152mm、図版30枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：1円10銭
- 7 備考：第3集は、藤森照信(代表研究者)『日本近代建築書の研究』(昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年)に依拠している。

no.	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s457	第1集	欧米ポスター図案集	1924.09	ndl	
s458	第2集	電灯装飾意匠集	1924.10	ndl	
s459	第3集	装飾文字図案集	1924.11	東大生研	
s460	第4集	表現主義版画集	1925.01	ndl	
s461	第5集	鉄格子意匠集	1925	ndl	
s462	第6集	絨氈図案集	1925	ndl	
s463	第7集	原始藝術集	1925.10	ndl	
s464	第8集	マヤ芸術集	1925	ndl	
s465	第9集	中世紀モザイク集	1926	ndl	
s466	第10集	ロシアン・バレエ意匠集	1927.01	ndl	
s467	第11集	ゴルドン・クレイグ版画集	1927	ndl	
s468	第12集	西洋織物図案集	1928	ndl	

- 1 叢書名：『古鐔図録』
- 2 編者：大熊喜邦
- 3 刊行期間：1925(大正14)年～1930(昭和5)年ごろ
- 4 累計巻数：20集か
- 5 体裁：188×127mm、図版10枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：30銭
- 7 備考：20集分は合本版で確認。分冊版10集の刊行とその完結後に合本版が刊行された社告は『建築新潮』1925年から1926年にかけて繰り返し掲載。
[図3-1]の集計における各年の刊行点数については、推定として1925年と1926年は各4集、1927年から1930年は各年に各3集を振り分けた。

no.	集	刊行年月	no.	集	刊行年月
s469	第1集	1925ごろ	s479	第11集	
s470	第2集		s480	第12集	
s471	第3集		s481	第13集	
s472	第4集		s482	第14集	
s473	第5集		s483	第15集	
s474	第6集		s484	第16集	
s475	第7集		s485	第17集	
s476	第8集		s486	第18集	
s477	第9集		s487	第19集	
s478	第10集		s488	第20集	1930

- 1 叢書名：『土人芸術叢書』
- 2 編者：洪洋社(1～3巻)、木村幸一郎(4・5巻)
- 3 刊行期間：1925(大正14)年6月～1927(昭和2)年ごろ
- 4 累計巻数：5巻
- 5 体裁：218×152mm、本文6～7頁、図版約40枚(1～3巻)、コロタイプ印刷
254×188mm、本文58・26頁、図版30・35枚(4・5巻)、コロタイプ印刷
- 6 定価：1円50～60銭(1～3巻)、3円(4・5巻)
- 7 備考：9編「回教徒の文化と建築」のみ不明

no.	巻	タイトル	編者	刊行年	所蔵
s489	第1巻	アフリカ土人芸術	洪洋社編、木村幸一郎監修	1925.06	ndl
s490	第2巻	濠洲及南洋土人の芸術	洪洋社編、木村幸一郎監修	1926.06	ndl
s491	第3巻	アメリカ土人芸術	洪洋社編、木村幸一郎監修	1925	ndl
s492	第4巻	古代メキシコ及ペルー芸術(上)	木村幸一郎	1927	ndl
s493	第5巻	古代メキシコ及ペルー芸術(下)	木村幸一郎	1927	ndl

- 1 叢書名：『建築資料叢書』
- 2 著者：佐藤功一、木村幸一郎ほか
- 3 刊行期間：1926(大正15)年8月～1932(昭和7)年6月ごろ
- 4 累計巻数：19編か
- 5 体裁：188×127mm、本文約70頁、図版約70枚、網点印刷
- 6 定価：2円
- 7 備考：5編分は刊行確認できず

no.	編	タイトル	著者	刊行年	所蔵	備考
s494	第1編	鐵骨構造	矢崎高儀、尾崎久助	1927.08	京大ほか計5館蔵	
s495	第2編	鐵筋混凝土構造	伊部貞吉著	1927.06	京大ほか計7館蔵	
s496	第3編	混凝土工事の実際	鴨志田兼吉著	1926.08	京大ほか計7館蔵、ndl	
s497	第4編	耐火材料の研究	内田泰司著	1926.12	京大ほか計8館蔵	
s498	第5編	石綿工業と其建築用途	瀧山米太郎著	1926.09	九大ほか計4館所蔵、ndl	
s499	第6編	近代の欧洲建築	大内秀一郎	1926.10	九大ほか計4館所蔵、ndl	
s500	第7編	近世日本建築史	大熊喜邦、高橋仁著	1930.07	京大ほか計7館蔵	
	第8編	(町屋と民家	今和次郎)			刊行不明
s501	第9編	事務所の平面計畫	木村幸一郎著	1928.12	名工大所蔵	刊行不明
s502	第10編	銀行の平面計畫	関根要太郎、蔵田周忠	1929	阪大ほか計5館所蔵	
s503	第11編	商店の平面計畫	十代田三郎	1931	京大ほか計2館所蔵	
s504	第12編	映画館の建築計畫	加藤秋著	1932.06	京大ほか計7館所蔵	
s505	第13編	住宅の平面計畫	佐藤功一、木村幸一郎	1927.11	京大ほか計5館蔵	
	第14編	(集合住宅の平面計畫	新名種夫)			刊行不明
	第15編	(店頭意匠	吉田亨二)			刊行不明
s506	第16編	新住宅の設備	大熊喜邦編、能瀬久一	1930.11	京大ほか計5館所蔵	
s507	第17編	家具と室内構成	川喜田煉七郎	1931.12	京大ほか計7館所蔵	
s508	第18編	建築と照明	門倉則之	1927.04	京大ほか計12館蔵	
	第19編	(台所と浴室	佐藤功一)			刊行不明
s509	第20編	数寄屋建築	保岡勝也著	1930	京大ほか計6館所蔵	
s510	第21編	庭園と住宅	戸野琢磨著	1927.05	九大ほか計7館所蔵	
s511	第22編	木造家屋切組図解	藤根大庭著	1927.10	京大ほか計3館蔵	
s512	第23編	木工芸と其要材	小泉吉兵衛著	1928.04	京大ほか計11館所蔵	
	第24編	(仕様と予算	須藤眞金)			刊行不明

- 1 叢書名：『西洋文様図譜』
- 2 編者：洪洋社
- 3 刊行期間：1928(昭和3)年9月ごろ
- 4 累計巻数：1集か
- 5 体裁：218×152mm、図版30枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：1円10銭
- 7 備考：第2集以降の刊行計画は『建築新潮』1928年掲載の社告より

no.	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s513	第1集	埃及文様集	1928.09	ndl	

以下、刊行不明の刊行計画

- 第2集 埃及文様集(2)
- 第3集 西方亜細亜文様集
- 第4集 希臘文様集(1)
- 第5集 希臘文様集(2)
- 第6集 羅馬文様集
- 第7集 初期基督教及ビザンチン文様集
- 第8集 サラセン文様集
- 第9集 ローマネスク文様集
- 第10集 ゴシック文様集(1)
- 第11集 ゴシック文様集(2)
- 第12集 ルネッサンス文様集

- 1 叢書名: 『建築時代』
- 2 編者: 高梨由太郎(解説文:川喜田煉七郎ほか)
- 3 刊行期間: 1929(昭和4)年9月～1932(昭和7)年2月
- 4 累計巻数: 全24集
- 5 体裁: 254×188mm、本文数頁、図版20枚、コロタイプ印刷
- 6 定価: 1円
- 7 備考: 全集完結の告知は、『建築工芸アイシーオール』1932年2月号前付社告など

no.	集	タイトル	(解説執筆者)	刊行年	所蔵
s514	第1集	カール・シュナイデル作品集	(R.K.)	1929.09	ndl
s515	第2集	バウハウス・ワイマール編	(大内秀一郎、川喜田煉七郎)	1929.10	ndl
s516	第3集	アドルフ・マイエル作品集	(川喜田煉七郎)	1929.11	ndl
s517	第4集	ブレスラウ住宅展図集	(川喜田煉七郎)	1930.01	ndl
s518	第5集	ワルター・グロピウス作品集	(川喜田煉七郎)	1930.02	ndl
s519	第6集	近代の共同住宅	(川喜田煉七郎)	1930.03	ndl
s520	第7集	近代の学校建築	(川喜田煉七郎)	1930.04	ndl
s521	第8集	ル・コルビュジエ新作品抄(1)	(川喜田煉七郎)	1930.05	ndl
s522	第9集	ル・コルビュジエ新作品抄(2)	(川喜田煉七郎)	1930.06	ndl
s523	第10集	サヴェート・ロシアの新建築	(川喜田煉七郎)	1930.07	ndl
s524	第11集	アンドレ・リュルサ作品集	(川喜田煉七郎)	1930.8	ndl
s525	第12集	エリッヒ・メンデルゾーン新作品集	(川喜田煉七郎)	1930.09	ndl
s526	第13集	新しき時代の家具	(川喜田煉七郎)	1930.10	ndl
s527	第14集	近代の劇場建築洪洋社	(川喜田煉七郎)	1930.11	ndl
s528	第15集	新興のオランダ建築	(川喜田煉七郎)	1930.12	ndl
s529	第16集	バウハウス・デッサウ編	(川喜田煉七郎)	1931.01	ndl
s530	第17集	新興のフランス建築	(川喜田煉七郎)	1931.02	ndl
s531	第18集	R.J.ノイトラ作品集:ライトを周る人々の作品1	(土浦亀城、川喜田煉七郎)	1931.03	ndl
s532	第19集	A.レイモンド作品集:ライトを周る人々の作品2	(土浦亀城、川喜田煉七郎)	1931.04	ndl
s533	第20集	現代のクラブ建築	(川喜田煉七郎)	1931.06	ndl
s534	第21集	新しき公舎建築	(署名なし)	1931.07	ndl
s535	第22集	フランク・ロイド・ライトとタリアセン:ライトを周る人々の作品3	(岡見健彦)	1931.08	ndl
s536	第23集	トーキー映画館図集	(川喜田煉七郎)	1931.11	ndl
s537	第24集	ルックハルト兄弟作品集	(川喜田煉七郎)	1932.02	ndl

- 1 叢書名：『亜細亜芸術叢書』
- 2 編者：洪洋社
- 3 刊行期間： 1930(昭和5)年5月～1930年9月ごろ
- 4 累計巻数： 3集か
- 5 体裁： 218×152mm、図版30枚、コロタイプ印刷
- 6 定価： 1円10銭
- 7 備考： 第4集以降の刊行計画は『建築新潮』1930年掲載の社告より

<i>no.</i>	集	タイトル	刊行年月	所蔵	備考
s538	第1集	印度支那芸術集	1930.05	日大	
s539	第2集	シヤム芸術集	1930.09	日大	
s540	第3集	ジャヴァ芸術集	1930.08	日大	

- 1 誌名: 『建築工芸アイシーオール』
- 2 編者: 高梨由太郎(実質の編者:川喜田煉七郎)
- 3 刊行期間: 1931(昭和6)年11月～1936(昭和11)年8月
- 4 累計号数: 58号
- 5 体裁: 220×150mm、50～90頁
- 6 定価: 30銭(特別号50銭)
- 7 備考:

no.	期	集	特集	刊行年月	所蔵	備考
m155	第1巻	第1号		1931.11	ndl	
m156		第2号		1931.12	ndl	
m157	第2巻	第1号	レストラン	1932.01	ndl	
m158		第2号	商店号	1932.02	ndl	
m159		第3号	商店号	1932.03	ndl	
m160		第4号	学校建築	1932.04	ndl	
m161		第5号		1932.05	ndl	
m162		第6号		1932.06	ndl	
m163		第7号		1932.07	ndl	
m164		第8号		1932.08	ndl	
m165		第9号	劇場号	1932.09	ndl	
m166		第10号	近代建築史・2	1932.10	ndl	
m167		第11号	建築工芸の新教育	1932.11	ndl	
m168		第12号		1932.12	ndl	
m169	第3巻	第1号	近代建築史・3	1933.01	ndl	
m170		第2号	スポーツ建築号	1933.02	ndl	
m171		第3号		1933.03	ndl	
m172		第4号	劇場と舞台	1933.04	ndl	
m173		第5号		1933.05	ndl	
m174		第6号		1933.06	ndl	
m175		第7号		1933.07	ndl	
m176		第8号	構成教育号・1	1933.08	ndl	
m177		第9号	小商店の改造	1933.09	ndl	
m178		第10号	構成教育号・2	1933.10	ndl	
m179		第11号	商店建築	1933.11	ndl	
m180		第12号		1933.12	ndl	
m181	第4巻	第1号	近代建築史・4	1934.01	ndl	
m182		第2号	小住宅グラフ・玄関の話	1934.02	ndl	
m183		第3号	小住宅グラフ・食事室の話	1934.03	ndl	
m184		第4号	近代建築史・5	1934.04	ndl	
m185		第5号	アパートメントハウス	1934.05	ndl	
m186		第6号	メイエルホリドとその舞台・小住宅グラフ	1934.06	ndl	
m187		第7号	構成教育号・3	1934.07	ndl	
m188		第8号	アパートメントハウス・絵画教程	1934.08	ndl	
m189		第9号	材料と構造の話・1	1934.09	ndl	

no.	期	集	特集	刊行年月	所蔵	備考
m190		第10号	材料と構造の話・2	1934.10	ndl	
m191		第11号	小商店模範設計集・1	1934.11	ndl	
m192		第12号	図解・住宅設計資料・1	1934.12	ndl	
m193	第5巻	第1号	家具と住宅の設計グラフ	1935.01	ndl	
m194		第2号	建築工芸読本	1935.02	ndl	
m195		第3号		1935.03	ndl	
m196		第4号	児童画に於ける構成教育・1	1935.04	ndl	
m197		第5号	一住宅——一実験住宅	1935.05	ndl	
m198		第6号	児童画に於ける構成教育・2	1935.06	ndl	
m199		第7号	市街地建築設計グラフ	1935.07	ndl	
m200		第8号	2つの喫茶店	1935.08	ndl	
m201		第9号	貴金属店の設計	1935.09	ndl	
m202		第10号	アメリカ建築号No.1 近代建築史・6	1935.10	ndl	
m203		第11号	アメリカ(No.2)とチェッコ 近代建築史・7	1935.11	ndl	
m204		第12号	近代建築史・8 ソヴェット・ベルギー・スイ ス・イタリー・ドイツ・フランス・ポーランド	1935.12	ndl	
m205	第6巻	第1号		1936.01	ndl	
m206		第2号	近代の舞踏・潜函工法・小商店自己診断	1936.02	ndl	
m207		第3号	アパート利益計算・グラフィックニュース・ 変ったソヴェット建築	1936.03	ndl	
m208		第4号	新興写真の過程・伸び行く満洲国の建 築・流行の熱帯魚とは	1936.04	ndl	
m209		第5号	現代の演劇	1936.05	ndl	
m210		第6号	商店に於ける陳列	1936.06	ndl	
m211		第7号	商店に於ける陳列・2	1936.07	ndl	
m212		第8号	商店の陳列・映画館建築	1936.08	ndl	

- 1 叢書名：『家具写真集成』
- 2 編者：洪洋社編集部
- 3 刊行期間：1932(昭和7)年9月～1934(昭和9)年9月
- 4 累計巻数：全16集
- 5 体裁：254×188mm、本文4頁、図版20枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：1円
- 7 備考：全集完結の告知は、『木材工芸叢書』24巻社告ほか

no.	集	タイトル	刊行年	所蔵
s541	第1集	机	1932.09	ndl-do
s542	第2集	椅子・卓子(1)	1932.10	ndl-do
s543	第3集	椅子・卓子(2)	1932.11	ndl-do
s544	第4集	椅子・卓子(3)	1932.12	ndl-do
s545	第5集	書棚：附ティーンテーブル・小物台・花卉棚	1933.01	ndl-do
s546	第6集	戸棚：什器戸棚 衣服戸棚 飾棚 箆笥	1933.03	ndl-do
s547	第7集	食堂と台所の家具	1933.04	ndl-do
s548	第8集	寝室と化粧台	1933.05	ndl-do
s549	第9集	子供室・ベランダ・庭園の家具	1933.06	ndl-do
s550	第10集	商店の家具	1933.08	ndl-do
s551	第11集	カフェーの家具(1)	1933	ndl-do
s552	第12集	和家具と折衷の家具(1)	1933	ndl-do
s553	第13集	カフェーの家具(2)	1933	ndl-do
s554	第14集	和家具と折衷の家具(2)	1934	ndl-do
s555	第15集	椅子・卓子(4)	1933.12	ndl-do
s556	第16集	事務机	1934.09	ndl-do

- 1 叢書名：『建築構成』
- 2 編者：洪洋社(解説文：川喜田煉七郎ほか)
- 3 刊行期間：1932(昭和7)年4月～1935(昭和10)年5月ごろ
- 4 累計巻数：8集か
- 5 体裁：254×188mm、本文数頁、図版20枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：1円
- 7 備考：全集完結の告知は、『建築工芸アイシーオール』1932年2月号前付社告など

no.	集	タイトル	(解説執筆者)	刊行年	所蔵	備考
s557	第1集	モダン小住宅設計グラフ(1)	(川喜田煉七郎)	1932.04	ndl	
s558	第2集	モダン小商店設計グラフ(1)	(川喜田煉七郎)	1932.06	ndl	
s559	第3集	モダン小住宅設計グラフ(2)	(川喜田煉七郎)	1932.09	ndl	
s560	第4集	新しい構造の家：トロッケン バウの家・乾式構造の家	(川喜田煉七郎)	1933.04	ndl	
s561	第5集	住器とその設備集(1)：機能 →形態	(川喜田煉七郎、 山脇巖)	1933.11	ndl	
s562	第6集	オランダ新建築	(山脇巖)	1934.02	ndl	表紙は「山脇巖編」
s563	第7集	モダン小商店設計グラフ(2)	(川喜田煉七郎)	1935.03	ndl	
s564	第8集	モダン小住宅設計グラフ(3)	(川喜田煉七郎)	1935.05	ndl	

- 1 叢書名：『数寄屋聚成』
- 2 編者：北尾春道編、高橋義雄、正木直彦顧問
- 3 刊行期間：1935(昭和10)年5月～1937(昭和12)年6月
- 4 累計巻数：全20巻
- 5 体裁：270×235mm、約100頁、コロタイプ印刷
- 6 定価：3円
- 7 備考：全集完結の告知は、『国宝書院図聚』第1巻社告ほか

no.	巻	タイトル	刊行年	所蔵	備考
s565	第1巻	数寄屋建築史図聚:東山・桃山時代	1935	ndl	
s566	第2巻	数寄屋建築史図聚:徳川時代前期	1935	ndl	
s567	第3巻	数寄屋建築史図聚:徳川時代後期	1936	ndl	
s568	第4巻	数寄屋建築史図聚:明治大正時代	1937	ndl	
s569	第5巻	数寄屋名席聚:各流茶祖好	1936	ndl	
s570	第6巻	数寄屋名席聚:武人文人好	1935	ndl	
s571	第7巻	数寄屋名席聚:名流茶匠好	1936	ndl	
s572	第8巻	数寄屋名園聚:茶庭燈籠	1936	ndl	
s573	第9巻	数寄屋名園聚:茶庭局部	1935	ndl	
s574	第10巻	数寄屋名園聚:蹲踞・手水鉢	1935	ndl	
s575	第11巻	近代数寄屋名席聚:現代茶室	1935	ndl	
s576	第12巻	近代数寄屋名席聚:書院式茶室	1937	ndl	
s577	第13巻	近代数寄屋名席聚:新興茶室	1936	ndl	
s578	第14巻	数寄屋住宅聚:歴史図録	1935	ndl	
s579	第15巻	数寄屋住宅聚:書院式数寄屋	1936	ndl	
s580	第16巻	数寄屋住宅聚:数寄屋造別荘	1936	ndl	
s581	第17巻	数寄屋建築構造聚:外観構成	1936	ndl	
s582	第18巻	数寄屋建築構造聚:窓・躡口	1936	ndl	
s583	第19巻	数寄屋建築構造聚:室内構成	1935	ndl	
s584	第20巻	数寄屋建築構造聚:続室内構成	1937	ndl	

- 1 叢書名：『近代家具装飾資料』
- 2 編者：高梨由太郎(第21集まで)、高梨勝重(第22集以降)
- 3 刊行期間：1936(昭和11)年2月～1944(昭和19)年1月
- 4 累計巻数：全47集(ただし42・43集と45・46集は倍頁の合本のため、刊行点数は45点)
- 5 体裁：254×188mm、図版20枚、コロタイプ印刷
- 6 定価：1円～1円30銭(合本の42・43集と45・46集は2円30銭)
- 7 備考：第36集の集計および下記※の年次は、新井竜治『戦前日本の家具・インテリア——『近代家具装飾資料』でよみがえる帝都の生活』(上巻、柏書房、2017年)に依拠

no.	集	タイトル	刊行年月	関連展覧会	備考
s585	第1集	新設計室内装飾展集[1]	1936.02	日本橋三越本店1935.11	cinii所蔵5館
s586	第2集	日本座敷に適はしき国風家具展集 新様式の室内に適はしき家具展集	1936.04	上野松坂屋1934.12、1935.10、白木屋1935※	cinii所蔵2館
s587	第3集	新興漆芸家具創作展集	1936.05	日本橋高島屋1936.04	cinii所蔵2館
s588	第4集	欧米に現はれた最近の居間家具	1936.06		ndl
s589	第5集	新作洋家具陳列會	1936.07	日本橋白木屋1936.05	京都府図蔵
s590	第6集	欧米家具作品集[1]	1936.09		ndl
s591	第7集	国風家具展集[1]	1936.11	上野松坂屋1936.10	ndl
s592	第8集	新設計室内装飾展集[2]	1936.12	日本橋三越本店1936.11	cinii所蔵5館
s593	第9集	欧米家具作品集(2)	1937.01		cinii所蔵4館
s594	第10集	レモンド家具作品集	1937.03		cinii所蔵1館
s595	第11集	趣味の和家具展集[1]:三匠会	1937.05	日本橋三越本店1936.11	cinii所蔵6館
s596	第12集	洋家具逸品会展観集[1]	1937.06	日本橋白木屋1937.04	cinii所蔵2館
s597	第13集	創作洋家具展集:第5回[洋]家具展	1937.08	日本橋高島屋1937.04	cinii所蔵2館
s598	第14集	二つの家具展作品集[1]	1937.09		cinii所蔵1館
s599	第15集	国風家具展集(2):付・紫紅会指物展	1937.12	上野松坂屋1937.11	cinii所蔵5館
s600	第16集	新設計室内装飾展集(3)	1938.02	日本橋三越本店1937.11	cinii所蔵5館
s601	第17集	趣味の和家具展集(2):三匠会	1938.03	日本橋三越本店1937.10	ndl
s602	第18集	欧米家具作品集(3)	1938.05		cinii所蔵4館
s603	第19集	洋家具逸品会展観集(2):夏向きの室内装	1938.07	日本橋白木屋1938.05	cinii所蔵2館
s604	第20集	工精会家具展集[1]:梶田恵、林二郎、渡邊	1938.09	日本橋高島屋1938.05	ndl
s605	第21集	欧米家具作品集(4)	1938.10		cinii所蔵4館
s606	第22集	趣味の和家具展集(3):三匠会	1938.12	日本橋三越本店1938.10	ndl
s607	第23集	[新作]和洋家具展集[1]	1939.01	銀座松屋1938.10	ndl
s608	第24集	新設計室内装飾展集(4)	1939.02	日本橋三越本店1938.11	cinii所蔵5館
s609	第25集	国風家具展集(3):付・紫紅会指物展	1939.04	上野松坂屋1938.11	cinii所蔵5館
s610	第26集	二つの家具展集(2):創作洋家具展 洋家具試作展	1939.05	日本橋高島屋1939.03-04、銀座松坂屋	cinii所蔵2館
s611	第27集	実用洋家具及夏の家具展集	1939.07	東横百貨店、高島屋百	cinii所蔵1館
s612	第28集	工精会家具展集(2):梶田恵、林二郎、渡邊	1939.08	日本橋高島屋1939.05	ndl
s613	第29集	欧米家具作品集(5)	1939.1		cinii所蔵4館
s614	第30集	国風家具展集(3):付・紫紅会指物展	1939.12	上野松坂屋1939.10	ndl
s615	第31集	新作和洋家具展集[2]	1940.02	銀座松屋1939	cinii所蔵1館
s616	第32集	新設計室内装飾展集(5)	1940.04	日本橋三越本店1939	cinii所蔵5館
s617	第33集	趣味の和家具展集(4):三匠会	1940.05	日本橋三越本店1939.10	cinii所蔵6館

no.	集	タイトル	刊行年月	関連展覧会	備考
s618	第34集	二つの家具展集(3):新設計洋家具展 洋家具逸品展	1940.07	日本橋高島屋1940.03、日本橋白木屋1939.10	ndl
s619	第35集	新作家具作品集:丹麗会家具展 新作洋家具陳列会	1940.08	伊勢丹百貨店、東横百貨店	cinii所蔵3館
s620	第36集	洋家具逸品会展観集(3)	1940.01	日本橋白木屋	個人蔵
s621	第37集	近代洋家具作品集	1940.12	独逸	ndl
s622	第38集	和洋家具陳列展集	1941.01	日本橋白木屋	個人蔵
s623	第39集	新時代洋家具展集	1941.05	日本橋高島屋1941.03	個人蔵
s624	第40集	実用洋家具作品集[1]	1941.08	三越1941	個人蔵
s625	第41集	東京木工芸作家協会作品集(1):東京木工芸作家協会第一回作品展覧会	1941.09	高島屋1941.06	個人蔵
s626	第42・43集	室内構成と家具作品集:東京工芸総合展覧会第二部	1942.01	日本橋三越本店1941.10	個人蔵
s627	第44集	実用洋家具作品集(2)	1942.12	三越本店1942.07	個人蔵
s628	第45・46集	家具及工芸品総合展覧集:三創会(新進工芸作家集団) 日本民芸協会同人	1943.09	日本橋三越本店1942.11	cinii所蔵1館
s629	第47集	新作洋家具展集	1944.01	高島屋1942.11※	cinii所蔵3館

- 1 叢書名：『木材工芸叢書』
- 2 編者：木材工芸学会編、木檜恕一・西川友武ほか著
- 3 刊行期間：1936(昭和11)年3月～1938(昭和13)年6月ごろ
- 4 累計巻数：全16巻
- 5 体裁：188×127mm、約60頁、網点印刷
- 6 定価：80銭
- 7 備考：全巻完結の告知、『近代家具装飾資料』44集後付社告

no.	巻	タイトル	著者	刊行年	所蔵	備考
s630	第1巻	住宅室内計画	木檜恕一	1936.03	cinii所蔵9館	
s631	第2巻	書斎家具	鈴木太郎	1937.02	cinii所蔵6館	
s632	第3巻	応接間家具	小林登	1937.06	cinii所蔵5館	
s633	第4巻	居間家具	岩瀬要三	1936.04	cinii所蔵4館	
s634	第5巻	食事室家具	鈴木富久治	1938.04	cinii所蔵2館	
	第6巻	(子供室用家具)				刊行不明
s635	第7巻	寝室家具	佐々木達三	1936.08	cinii所蔵5館	
	第8巻	(台所家具)				刊行不明
	第9巻	(屋外家具)				刊行不明
	第10巻	(事務家具)				刊行不明
s636	第11巻	金属家具	西川友武	1936.10	cinii所蔵4館	
	第12巻	(曲木家具)				刊行不明
	第13巻	(藤竹家具)				刊行不明
s637	第14巻	箆笥と鏡台	榎本安五郎	1937.08	cinii所蔵5館	
s638	第15巻	茶棚と飾棚	小栗吉隆	1937.05	cinii所蔵4館	
s639	第16巻	座机と書棚	遠藤武	1936.07	cinii所蔵5館	
	第17巻	(家具様式)				刊行不明
s640	第18巻	家具製図	鈴木三郎	1936.11	cinii所蔵5館	
	第19巻	(家具図案)				刊行不明
	第20巻	(家具用木材)				刊行不明
	第21巻	(木材乾燥)				刊行不明
	第22巻	(木工機械の使い方)				刊行不明
	第23巻	(製材機械)				刊行不明
s641	第24巻	ラックとラッカー	坂田秀太郎	1936.05	cinii所蔵7館	
	第25巻	(ワニスとペイント塗)				刊行不明
	第26巻	(家具の漆塗)				刊行不明
s642	第27巻	椅子張	熊井七郎	1937.12	cinii所蔵4館	
s643	第28巻	家具の金物	坂本春幸	1938.06	cinii所蔵4館	
	第29巻	(家具の工作法)				刊行不明
s644	第30巻	塑像と木彫	山本金三郎、吉見誠	1938.07	cinii所蔵5館	
	第31巻	(ロクロと旋盤)				刊行不明
	第32巻	(挽祓と象嵌)				刊行不明
	第33巻	(竹細工)				刊行不明
	第34巻	(玩具)				刊行不明
	第35巻	(卓上器具)				刊行不明

no.	巻	タイトル	著者	刊行年	所蔵	備考
	第36巻	(室内照明)				刊行不明
	第37巻	(壁紙の貼方)				第37・38巻合併
	第38巻	(カーテンとカーペット)				第37・38巻合併
s645	新第38巻	壁紙・カーテン・カーペット	坪井富士太郎	1938.08	cinii所蔵4館	旧38
	第39巻	(ベニアと其利用)				刊行不明
	第40巻	(建具と造作)				刊行不明

- 1 叢書名：『国宝書院図聚』
- 2 著者：北尾春道著、大熊喜邦監修
- 3 刊行期間：1938(昭和13)年2月～1940(昭和15)年11月
- 4 累計巻数：全13巻
- 5 体裁：270×235mm、コロタイプ印刷
- 6 定価：
- 7 備考：全集完結の告知は、『国宝書院図聚』第13巻「凡例」(p.3)に記載

□

no.	巻	タイトル	刊行年	所蔵	備考
s646	第1巻	靈雲院書院・光淨院客殿・觀智院客殿	1938.02	ndl	
s647	第2巻	勸學院客殿・圓滿院宸殿・大通寺書院	1938	ndl	
s648	第3巻	本願寺書院	1938	ndl	
s649	第4巻	觀音寺書院・妙法院大書院・勸修寺書院	1938	ndl	
s650	第5巻	妙喜庵書院・西教寺客殿・曼殊院書院	1938	ndl	
s651	第6巻	大覺寺正寢殿・南禪寺方丈	1938	ndl	
s652	第7巻	吉水神社書院・今西家書院・中ノ坊書院・西	1938	ndl	
s653	第8巻	大仙院方丈・正傳寺方丈・金地院方丈	1938	ndl	
s654	第9巻	本願寺飛雲閣・本願寺黒書院	1939.01	ndl	
s655	第10巻	鹿苑寺金閣・慈照寺東求堂・銀閣	1939	ndl	
s656	第11巻	願泉寺書院・孤篷庵書院・來迎寺客殿	1939	ndl	
s657	第12巻	淨土院客殿・知恩院方丈	1939	ndl	
s658	第13巻	護國寺月光殿・觀心寺書院・三寶院書院・	1940.11	ndl	

叢書名：『建築装飾図譜』

no.	集	タイトル	編著者	刊行年	所蔵	備考
s659	第1集	シールド	佐藤充弘	1917	大阪府立図書館	
s660	第2集	腰羽目	佐藤充弘	1917	大阪府立図書館	
	第3集					
s661	第4集	リボン・フェッスーン	佐藤充弘	1917	大阪府立図書館	
s662	第5集	キャピタル	洪洋社編	1918	大阪府立図書館	
s663	第6集	ペジメント・オーナメント	洪洋社編	1918	大阪府立図書館	
s664	第7集	持送	洪洋社編	1918	大阪府立図書館	

叢書名：『建築史・装飾美術参考図集』

編者：早稲田大学建築学教室建築史装飾美術研究室

no.	期	集	刊行年	所蔵	備考
s665	第1期	第1集	1923.04-	横国大、広大、大谷大ほ	
s666		第2集	※		
s667		第3集	※		
s668		第4集	※		
s669		第5集	※		
s670		第6集	※		
s671		第7集	※		
s672		第8集	※		
s673		第9集	※		
s674		第10集	1924		
s675		第11集	1924		
s676		第12集	1925		※ [図3-1]の集計における各年の刊行点数については、推定として1923年に6集、1924年と1925年に各5集を振り分けた。
s677	第2期	第1集	※		
s678		第2集	※		
s679		第3集	※		
s680		第4集	※		

叢書名：『宗達光琳扇面画集』

編者：扇面画集刊行会□

no.	回	刊行年	所蔵	備考
s681	第2回	1923.06-	九大、神戸大、東博	
s682	第7回	※		※ [図3-1]の集計における各年の刊行点数については、推定として1923年に2回、1924年と1925年に各1回を振り分けた。
s683	第9回	※		
s684	第12回	※		
s685	第13回	※		

叢書名：『世界の現代建築』

no.	集	タイトル	編著者	刊行年	所蔵	備考
s686	第1集	スウェーデン	吉田鉄郎	1929.11	京大工図	
s687		ドイツ、フランス	佐藤充弘	※	京大工図	

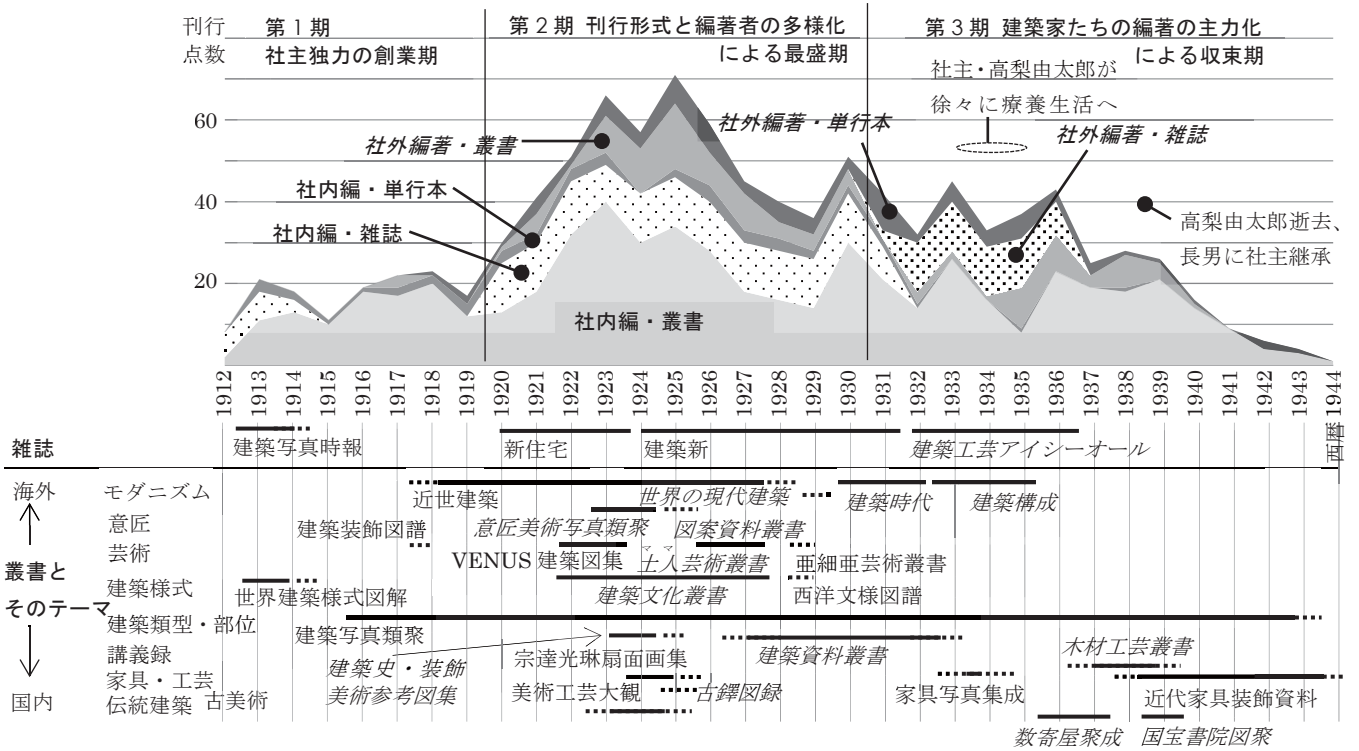
※[図3-1]の集計における各年の刊行点数については、推定として1930年に振り分けた。

no.	刊行年月	タイトル	編著者	所蔵／備考
b001	1913	セセッション図案集 下巻		大阪府立図書館蔵書印 1913(大正2)年8月4日
b002	1913	セセッション図案集 上巻		大阪府立図書館蔵書印 1913(大正2)年5月12日
b003	1913	セセッション図案集 中巻		大阪府立図書館蔵書印 1913(大正2)年7月29日
b004	1914.10	セセッション図案集 外観之部乾の巻		大阪府立図書館蔵／京都府立図書館蔵は1914か。刊行年は菊池『『セセッション図案集』特に「外観之部」の初刊年代について』
b005	1914.10	セセッション図案集 外観之部坤の巻		大阪府立図書館蔵／京都府立図書館蔵は1914か。刊行年は菊池『『セセッション図案集』特に「外観之部」の初刊年代について』
b006	1915.12	明治神宮宝物殿競技設計図集	高梨由太郎	ndl-dc
b007	1916.10	日清生命保険株式会社 長瀬商店事務所競技設計図集		cinii所蔵4館
b008	1917	オットー・ライス図案集:附 チェーツェンデル図案	建築写真類聚刊行会編	京大図書館蔵
b009	1917.07	各種アングル抗压及抗張強簡易計算表	洪洋社編	ndl-do
b010	1918	セッション図案集 室内之部		京都府立図書館蔵
b011	1918.01	聖徳記念絵画館葬場殿趾記念建造物競技設計図集	高梨由太郎	ndl確認
b012	1918.12	世界の議事堂	大熊喜邦著	ndl-do
b013	1919	アラビヤ芸術	高梨由太郎 編	ndl-do / 表紙は「THE ART ARABE 100 PLATES」奥付なし
b014	1919.03	現代的な中流住宅建築構造改良案	小笠原鋸 著	ndl-do
b015	1919.03	日本建築図解	建築写真類聚刊行会編	ndl-do
b016	1919.06	東京府史蹟	東京府 編	ndl-do
b017	1919.10	写真集 如水会館	高梨由太郎 編	ndl-do
b018	1920.01	議院建築意匠設計競技図集	高梨由太郎 編	ndl-do
b019	1920.06	日本建築細部図集	伊藤虎三著	cinii所蔵4館
b020	1920.10	現代の住宅	洪洋社編	cinii所蔵7館
b021	1920.12	明治神宮画集		cinii所蔵7館
b022	1921	仏蘭西近世建築 下巻	洪洋社編	ndl
b023	1921.03	建築計算寸法便覧	須藤真金、岸原三郎著	小樽商科大学
b024	1921.06	田邊淳吉氏作品集	佐藤功一編	cinii所蔵5館
b025	1921.07	市街地建築物法規集	岸原三郎共著	cinii所蔵3館
b026	1921.08	仏蘭西近世建築 上巻	洪洋社編	ndl
b027	1921.12	日本倶楽部写真集	田邊淳吉設計	cinii所蔵4館
b028	1922	住井廼一隅 上巻	伊藤虎三著	cinii所蔵3館
b029	1922.05	バンガロー式明快な中流住宅	大野三行著	cinii所蔵7館
b030	1922.06	平和記念東京博覧会画帖	高梨由太郎編	cinii所蔵1館
b031	1922.10	新傾向の住宅	高梨由太郎編	cinii所蔵5館
b032	1922.10	枢密院建築画帖	洪洋社編集部編	cinii所蔵2館
b033	1923.02	近世家具図集	前田健二郎編著	cinii所蔵10館
b034	1923.03	日本工業倶楽部		cinii所蔵2館
b035	1923.05	帝国ホテル		cinii所蔵8館

no.	刊行年月	タイトル	編著者	所蔵／備考
b036	1923.05	独逸プロイセン国会議事堂	高梨由太郎編	cinii所蔵1館
b037	1923.06	東京市政調査会館競技設計図集	東京市政調査会編・発行	ndl-do／洪洋社は印刷・発売
b038	1923.08	三十坪で出来る改良住宅	能瀬久一郎著	cinii所蔵3館
b039	1923.12	早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集	早稲田大学故大隈総長記念事業部編	cinii所蔵5館
b040	1923.12	表現主義建築図集	森口多里編	cinii所蔵8館
b041	1924.05	近代西洋住宅設計資料	早稲田大学建築学科住宅研究室編	cinii所蔵8館
b042	1924.06	東京の都市計画を如何にすべき乎	中村順平著	cinii所蔵4館
b043	1924.07	住み心地よき和洋折衷	大野三行著	cinii所蔵2館
b044	1924.08	現代都市の計画	石原憲治著	cinii所蔵29館
b045	1925.03	エリヒ・メンデルゾーン氏作品集	高梨由太郎編	cinii所蔵3館
b046	1925.04	欧米中央市場図集	佐野利器、松井清足編	cinii所蔵8館
b047	1925.04	現代小学校の建築と設備	峰彌太郎著	cinii所蔵11館
b048	1925.04	表現文様集	高梨由太郎編	cinii所蔵3館
b049	1925.04	木製玩具製作図集:手工教材資料	千葉憲雄著	cinii所蔵6館
b050	1925.05	大正大震災記念建造物競技設計図集	東京震災記念事業協会編	cinii所蔵4館
b051	1925.07	大正大震災震害及火害之研究	震害調査委員会編	cinii所蔵3館
b052	1925.11	樺太土人の生活:アイヌ・オロッコ・ギリヤーク	長根助八著	cinii所蔵16館
b053	1925.11	和蘭の新住宅	大熊喜邦	cinii所蔵3館
b054	1926	古代外邦陶器図譜	岡田三郎助、大隅為三編	cinii所蔵7館
b055	1926	住井廼一隅 下巻	伊藤虎三著	cinii所蔵3館
b056	1926	フランク・ロイド・ライト作品集 第1	高梨由太郎編	cinii所蔵8館
b057	1926	フランク・ロイド・ライト作品集 第2	高梨由太郎編	cinii所蔵8館
b058	1926.01	小さき室内美術:寝室・書斎・食堂	森谷延雄著	cinii所蔵5館
b059	1926.02	新橋演舞場	管原榮蔵著	cinii所蔵9館
b060	1926.04	イヴァン・メストロヴィッチ	諏訪森之助著	cinii所蔵5館
b061	1926.04	和蘭の近代建築 上	高梨由太郎編	cinii所蔵4館
b062	1926.07	近世風俗往来	高橋仁著	cinii所蔵12館
b063	1926.08	神奈川県庁舎競技設計図集	庁舎建築事務所編	cinii所蔵5館
b064	1926.11	和蘭の近代建築 下	高梨由太郎編	cinii所蔵4館
b065	1927	フランク・ロイド・ライト作品集 第3	高梨由太郎編	cinii所蔵8館
b066	1927	山王荘図集	高梨由太郎編	cinii所蔵4館
b067	1927	鉄筋混凝土校舎と設備	肥沼健次著	cinii所蔵12館
b068	1927.01	紫烟荘図集	分離派建築会編	cinii所蔵9館
b069	1927.03	建築構想図集	丹羽美著、白聖会編	cinii所蔵3館
b070	1927.11	多摩川原遊園京王閣図集	高梨由太郎編	cinii所蔵1館
b071	1928	フランク・ロイド・ライト作品集 第4	高梨由太郎編	cinii所蔵8館
b072	1928	フランク・ロイド・ライト作品集 第5	高梨由太郎編	cinii所蔵8館
b073	1928	市街地建築物法施行規則による建築寸法便覧	須藤真金、岸原三郎著	cinii所蔵1館
b074	1928.03	東京帝国大学工学部建築学科卒業計画図集	東京帝国大学工学部建築学科内木葉	cinii所蔵13館
b075	1928.07	透視図及陰影図法:附録平面幾何画法	小澤省三著	cinii所蔵3館

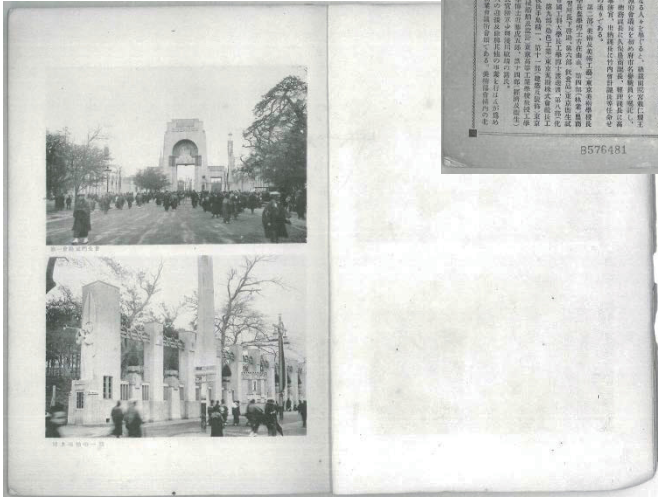
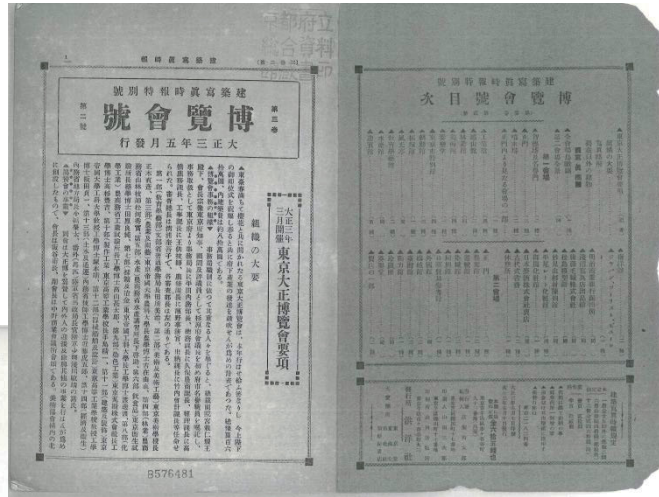
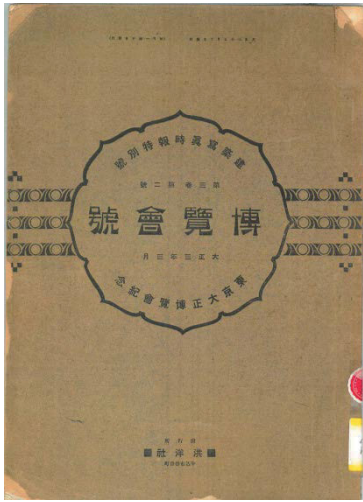
no.	刊行年月	タイトル	編著者	所蔵／備考
b076	1928.07	建築作品 第1集	中村庸二事務所編	ndl-dc
b077	1928.09	住宅双鐘居	堀口捨己編	cinii所蔵5館
b078	1928.12	支那建築細部集	洪洋社編集部編	cinii所蔵4館
b079	1929	茶の湯指物製作図集	小泉吉兵衛著	cinii所蔵3館
b080	1929.01	現代日本の家具	木檜恕一著	cinii所蔵19館
b081	1929.03	都市建築造型理論への考察	石原憲治著	cinii所蔵8館
b082	1929.06	ル・コルビュジエ作品集	高梨由太郎編	cinii所蔵4館
b083	1929.06	陸軍軍医学校牛込恩賜財団済生会病院新築工事概要	洪洋社編	ndl-do
b084	1929.07	奉天宮殿建築図集	伊藤清造編	cinii所蔵12館
b085	1930	博覧会建築図集年鑑	洪洋社編	cinii所蔵2館
b086	1930.06	名古屋市庁舎競技設計図集	中央建築会編	cinii所蔵5館
b087	1930.08	趣味のパテオ	戸野琢磨、須藤忠雄著	cinii所蔵2館
b088	1930.11	和蘭陀館集	洪洋社 編	ndl-do
b089	1930.12	家具製作図解	築島棟吉著	cinii所蔵3館
b090	1931	近代西洋住宅設計資料 続	早稲田大学建築学科住宅研究室編	ndl-dc
b091	1931	市街地建築図集	金杉哲伊	ndl-dc
b092	1931	和洋家具構造図解	築島棟吉、榎本安五郎著	ndl-dc
b093	1931.03	住宅湘南荘	江口義雄編	cinii所蔵3館
b094	1931.04	ソウェートロシア新興建築図集	今井兼次編	cinii所蔵5館
b095	1931.04	軍人会館競技設計図集	洪洋社編集部編	cinii所蔵4館
b096	1931.06	レイモンドの家	川喜田煉七郎編	cinii所蔵5館
b097	1931.06	吾等の住居	宮田莊七郎著	cinii所蔵8館
b098	1931.07	美術建具組物図集	阿部正雄編	cinii所蔵4館
b099	1931.08	新日本住宅図集	志摩徹郎 編	ndl-dc
b100	1931.09	明治製菓銀座売店競技設計図集	洪洋社編集部編	cinii所蔵1館
b101	1932	新選硝子戸図案集	阿部正雄著	ndl-dc
b102	1932.10	建築法規条文便覧	洪洋社 編	ndl-do
b103	1932.12	住宅鷗喃荘	佐藤武夫著	ndl-dc
b104	1933	新しい窓の機構	十代田三郎著	cinii所蔵2館
b105	1933.1	近代趣味の床の間図集	北尾春道著	cinii所蔵1館
b106	1933.08	床の間の構成:装飾篇	北尾春道著	cinii所蔵6館
b107	1933.10	鉄骨構造電弧溶接の理論と実際 上巻	伊藤千代藏著	cinii所蔵7館
b108	1933.11	小都市に建つ商店住宅	群馬県建築協会編	ndl-do
b109	1934	カアテン図案集	平治雄 編	ndl-dc
b110	1934.07	築地本願寺	北尾春道編	cinii所蔵3館
b111	1934.11	近代数寄屋住宅設計資料	北尾春道著	cinii所蔵5館
b112	1934.12	商店・デパート陳列家具設計図集	平岩敏二著	cinii所蔵1館
b113	1935	住宅を兼備せる医院建築	群馬県建築協会編	ndl-do
b114	1935	大東京建築祭建築設計競技銀座街共同建築	都市美協会編	cinii所蔵2館
b115	1935	生産工業的家具	型而工房 編	ndl-dc
b116	1935	山の住宅	報知新聞社 編	ndl-dc
b117	1935.06	数寄屋住宅錦舟寮	洪洋社編	cinii所蔵1館

no.	刊行年月	タイトル	編著者	所蔵／備考
b118	1935.09	基本家具設計図集	内田静馬著	cinii所蔵3館
b119	1935.11	小都市に建つカフェー建築	群馬県建築協会 編	ndl-do
b120	1936	市街地建築図集 続	金杉哲伊	ndl-dc
b121	1936.10	一住宅と其庭園	堀口捨己著	cinii所蔵2館
b122	1936.10	日本住宅手摺図鑑	伊藤虎三著	cinii所蔵2館
b123	1937	Une maison japonaise d'aujourd'hui: 今日の一日本住宅	Georgette Kohya,	cinii所蔵2館
b124	1937.09	横浜高工建築学科建築競技設計図集: 自昭和二年・至昭和十二年	Hideto Kishida 横浜高工建築学科 教室内出版会編	cinii所蔵6館
b125	1937.09	錦華寮建築図譜	北尾春道編	cinii所蔵2館
b126	1938.11	アラビア芸術図集: 回教国民の建築及び工芸【改題】	高梨由太郎編	cinii所蔵4館
b127	1938.12	農園の家	江口義雄著	cinii所蔵1館
b128	1939.11	名席図解茶室寸法図録	北尾春道著	cinii所蔵6館
b129	1940	趣味の建具図案集	阿部正雄著	ndl-dc
b130	1942	国宝能舞台	北尾春道著	cinii所蔵17館



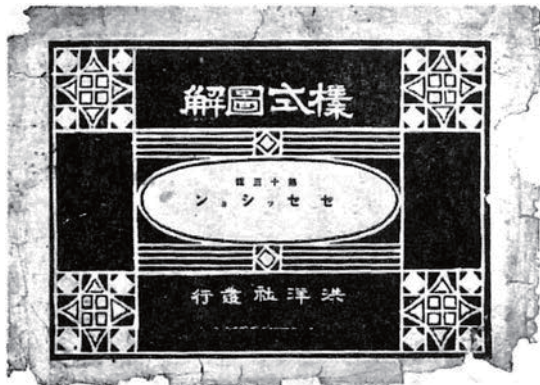
[図 3-1] 洪洋社の刊行物の概要

- ・ 上段：刊行形式および編著者の変遷
- ・ 下段：雑誌・叢書の一覧
- ・ 斜体は社外の建築家や建築学者の編著書を示す。
- ・ 1949年の新刊1点は欄外とした。
- ・ 下段の雑誌・叢書の刊行期間は、推定部分を点線で示した。



[図 3-2] 『建築写真時報』

「博覽會号——東京大正博覽會紀念」第 3 卷第 2 号、洪洋社、1914 年 5 月
所蔵：京都府立図書館

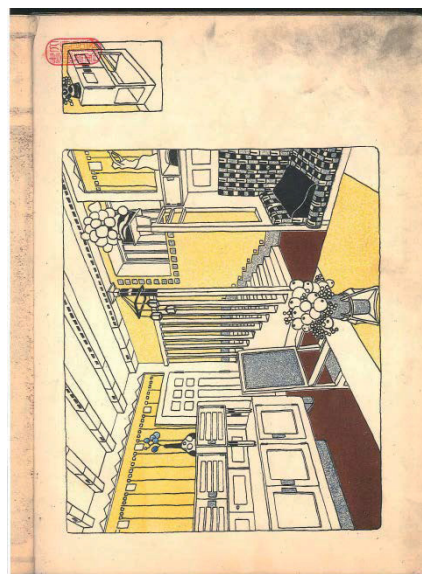


[図 3-3] 『世界建築様式図解』

洪洋社、1912年10月～1914年ごろ

出典：菊池重郎「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動（上）」

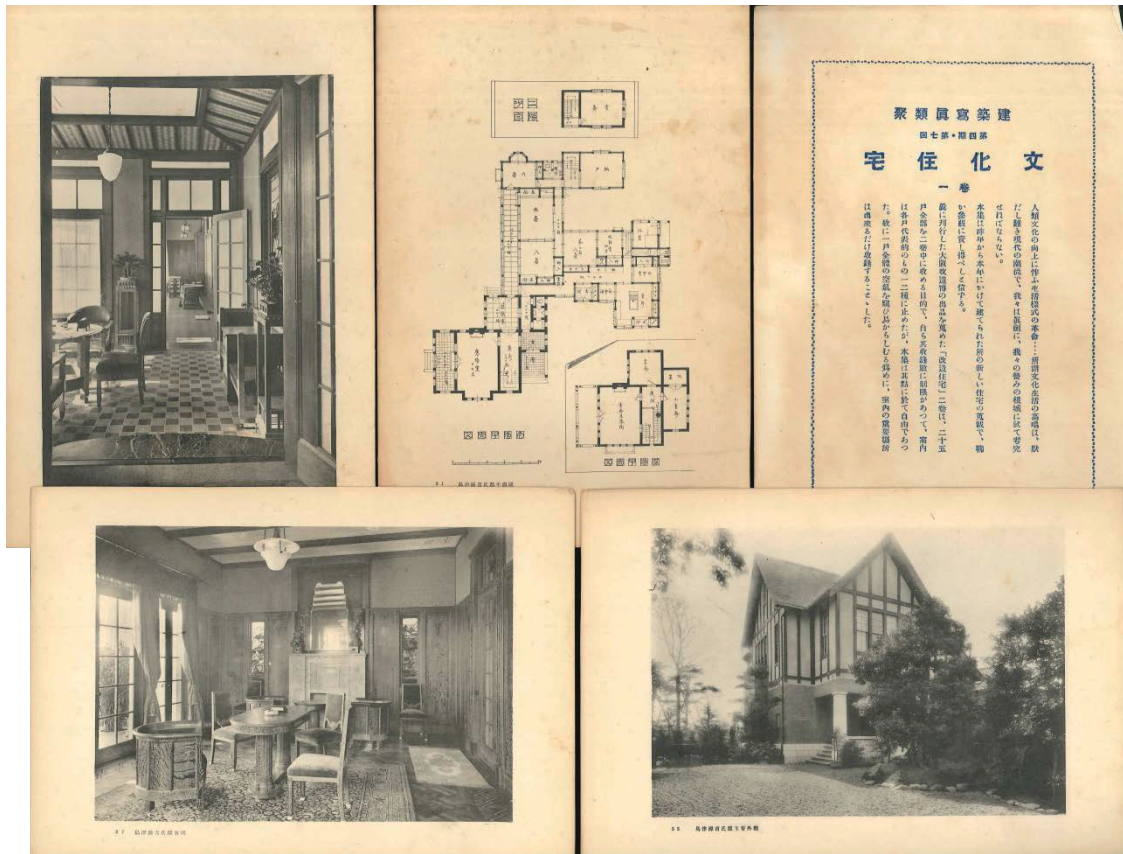
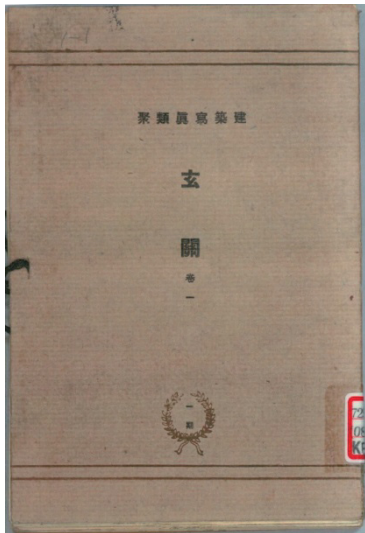
（『明治村通信』、1982年1月号）



[図 3-4] 『セセッション図案集』

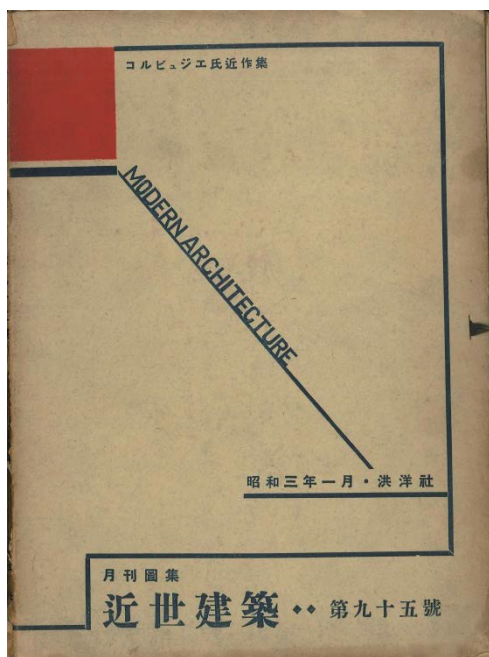
洪洋社、1913年ごろ

所蔵：大阪府立中央図書館



〔図 3-5〕『建築写真類聚』

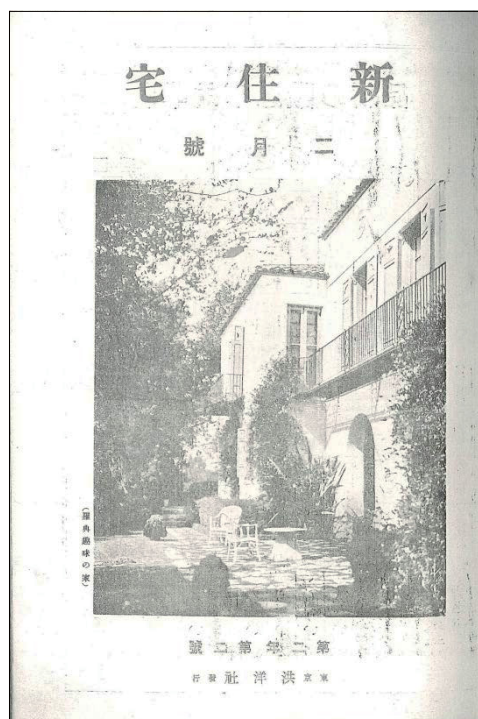
建築写真類聚刊行会編（代表：高梨由太郎）、洪洋社、
 上：第 1 期第 1 集、「玄関 卷一」、1915 年 10 月、
 下：第 4 期第 1 集、「文化住宅 卷一」、1923 年 7 月
 所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室



[図 3-6] 『近世建築』

高梨由太郎編、第 95 号、「コルビュジェ近作集」、
洪洋社、1928 年 1 月

所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室



[図 3-7] 『新住宅』

第 2 年第 2 号、洪洋社、1921 年 2 月

所蔵：東京大学 柏図書館



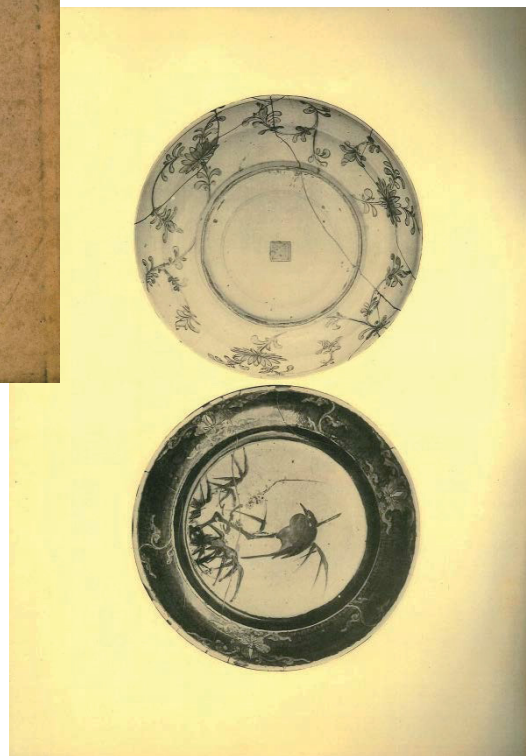
〔図 3-8〕『建築新潮』

第 9 年第 11 号、「分離派建築會第七回展覽會作品集」、洪洋社、1928 年 11 月
所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室



〔図 3-9〕『亜細亞藝術叢書』

洪洋社編・刊、第 1 卷、「印度支那藝術集」、1928 年 5 月
個人蔵



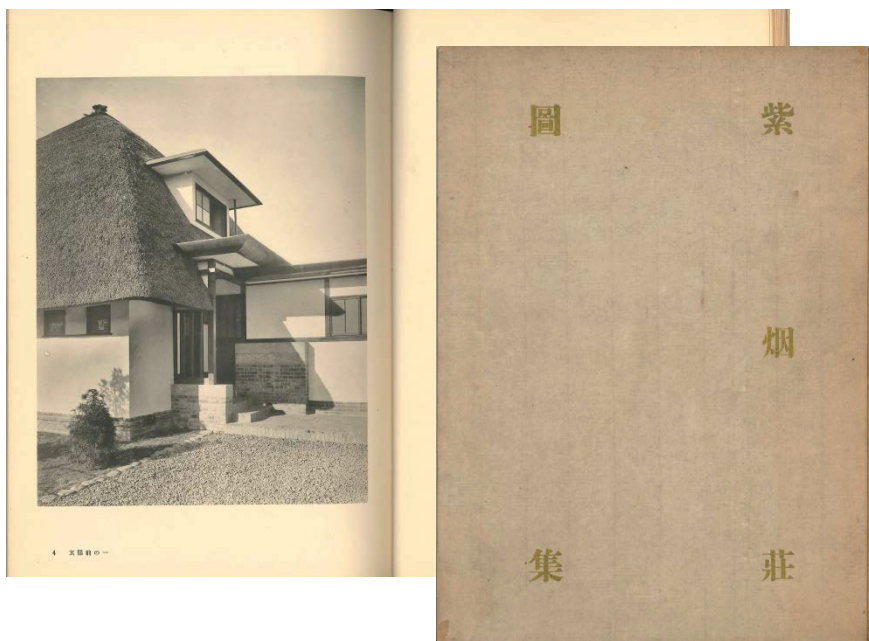
[図 3-10] 『美術工芸大観』

美術工芸大観刊行会編（代表：高梨由太郎）、
 洪洋社、第 2 期第 10 集、1923 年ごろ、
 第 79 図「古九谷窯花鳥絵大皿」（佐藤功一蔵）
 所蔵：国立国会図書館



[図 3-11] 『建築文化叢書』

伊東忠太、佐藤功一監修、第 6 編「ローマネスクの文化と建築」、森口多里著、
 洪洋社、1921 年 4 月
 個人蔵



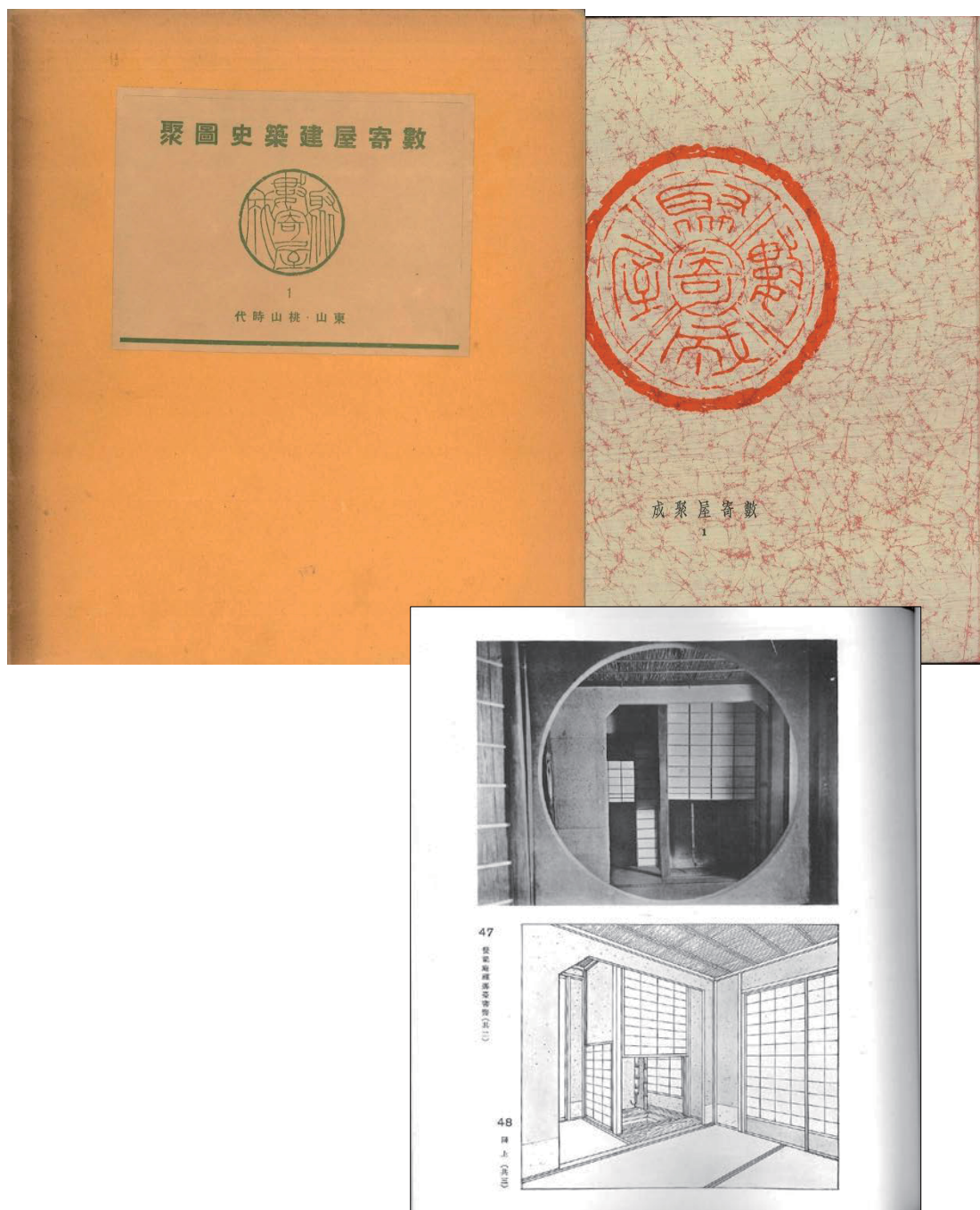
[図 3-12] 『紫烟荘図集』
 分離派建築会編、洪洋社、
 1927年
 所蔵：日本大学理工学部
 建築史・建築論研究室



[図 3-13] 『建築工芸アイシーオール』
 第1年第1号、洪洋社、1931年11月
 所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室

[図 3-14] 『建築時代』
 高梨由太郎編、第22集、
 「フランク・ロイド・ライト
 とタリアセン：ライトを周
 人々の作品3」
 洪洋社、1931年8月
 所蔵：日本大学理工学部
 建築史・建築論研究室





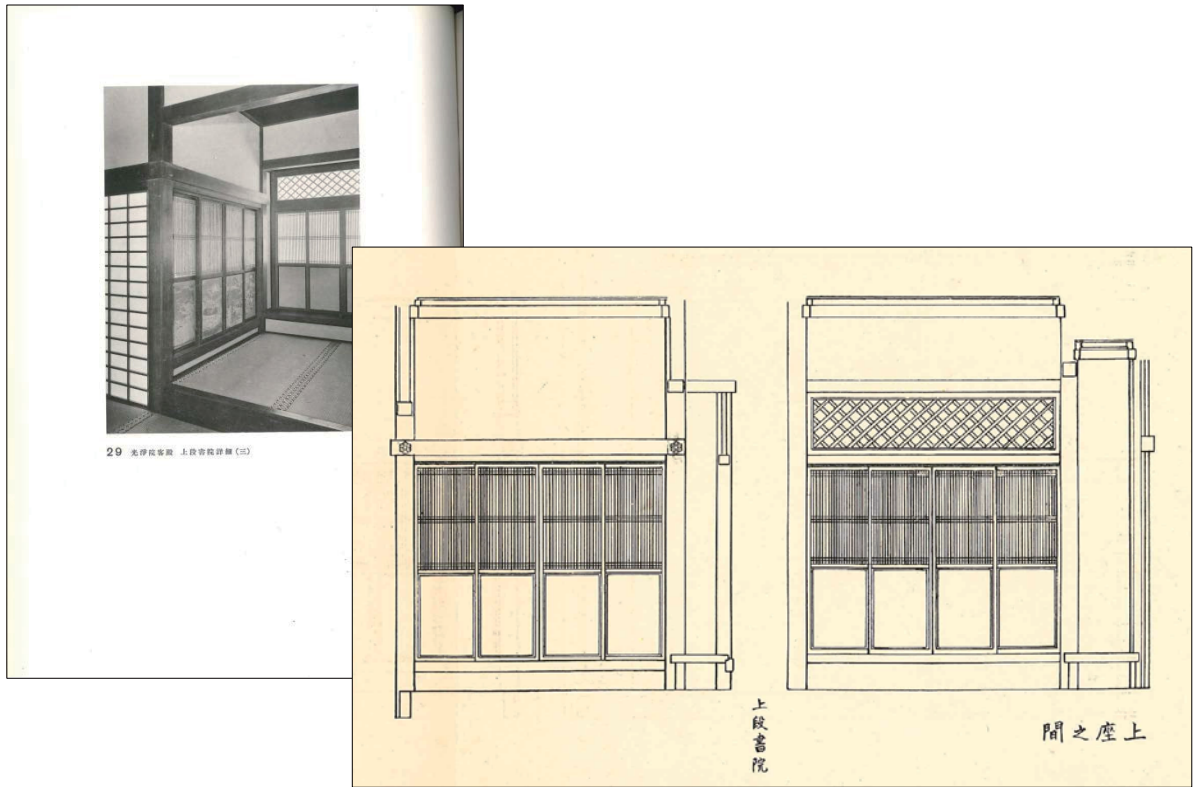
[図 3-15] 『数寄屋聚成』

北尾春道編、高橋義雄、正木直彦顧問、洪洋社、

上：第 1 卷、「数寄屋建築史図聚：東山・桃山時代」

下：第 14 卷、「数寄屋住宅聚：歴史図録」、1935 年、(図は雙龍庵)

所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室



[図 3-16] 『国宝書院図聚』

北尾春道著、大熊喜邦監修、洪洋社、

第 1 卷、「靈雲院書院・光淨院客殿・觀智院客殿」、1938 年 2 月、(図は光淨院客殿)

所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室



[図 3-17] 『家具写真集成』

洪洋社編集部編、

第 2 集、「椅子・卓子 (1)」、

洪洋社、1932 年 10 年

所蔵：国立国会図書館

[表3-2] 洪洋社の叢書一覧

叢書タイトル	編著者	刊行期間	刊行点数	印刷方法	図版の制作方法
《1》 世界建築様式図解	無記名	1912年10月～1914年ごろ	19集 *1	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《2》 近世建築	洪洋社編(71号より高梨由太郎編)	1914年～1928年1月ごろ	96号 *2	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《3》 建築写真類聚	建築写真類聚刊行会編(代表:高梨由太郎、のち高梨勝重)	1915年10月～1943年10月ごろ	266集 *3	コロタイプ印刷	自社撮影と複製図版を併用
《4》 建築装飾図譜	佐藤充弘著(1、2、4集)、洪洋社編(5～6集)	1917年～1918年ごろ	6集	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《5》 VENUS建築図集	ヴィーナス・ソサイティ編	1921年2月～1921年7月ごろ	4集 *4	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《6》 建築文化叢書	伊東忠太・佐藤功一監修、森口多里・浜岡周忠ほか著	1921年4月～1927年ごろ	11編	コロタイプ印刷(図版)	文章主体、図版は複製を主体
《7》 美術工芸大観	美術工芸大観刊行会編(代表:高梨由太郎)	1922年～1925年ごろ	48集	コロタイプ印刷	自社撮影と複製図版を併用
《8》 意匠美術写真類聚	意匠美術写真類聚刊行会編	1922年11月～1924年7月ごろ	12集	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《9》 建築史・装飾美術参考図集	早稲田大学建築学教室建築史装飾美術研究室編	1923年4月～1925年ごろ	16集	コロタイプ印刷	
《10》 宗達光琳扇面画集	扇面画集刊行会編	1923年6月～1926年ごろ	5回	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《11》 図案資料叢書	田辺泰編	1924年9月～1928年ごろ	12集 *5	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《12》 古鐔図録	大熊喜邦編	1925年～1930年ごろ	20集 *6	コロタイプ印刷	自社撮影
《13》 工人芸術叢書	洪洋社:編(1～3巻)、木村幸一郎:編(4・5巻)	1925年～1927年ごろ	5巻	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《14》 建築資料叢書	佐藤功一、木村幸一郎ほか著	1926年8月～1930年11月ごろ	19編	網点印刷	文章主体
《15》 西洋文様図譜	洪洋社編	1928年9月ごろ	1集	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《16》 建築時代	高梨由太郎編(解説文:川喜田煉七郎ほか)	1929年9月～1932年2月	全24集 *7	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《17》 世界の現代建築	吉田鉄郎(第1集)、佐藤充弘	1929年11月ごろ	2集	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《18》 亜細亜芸術叢書	洪洋社編	1930年5月～1930年9月ごろ	3巻	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《19》 建築構成	洪洋社編(解説文:川喜田煉七郎ほか)	1932年4月～1935年5月ごろ	8集	コロタイプ印刷	複製図版を主体
《20》 家具写真集成	洪洋社編	1932年9月～1934年9月	全16集 *8	コロタイプ印刷	自社撮影と複製図版を併用
《21》 数寄屋聚成	北尾春道編、高橋義雄・正木直彦顧問	1935年5月～1937年6月	全20巻 *9	コロタイプ印刷	自社の撮影と実測・作図を主体
《22》 近代家具装飾資料	高梨由太郎編(22集より高梨勝重編)	1936年2月～1944年1月	45集 *10	コロタイプ印刷	自社撮影と複製図版を併用
《23》 木材工芸叢書	木材工芸学会編、木曾恕一・西川友武ほか著	1936年3月～1938年6月ごろ	全16巻 *11	網点印刷	文章主体
《24》 国宝書院図聚	北尾春道著、大熊喜邦監修	1938年2月～1940年11月	全13巻 *12	コロタイプ印刷	自社の撮影と実測・作図を主体

*1 19集分の集計は、菊池重郎「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動(下)」(明治村通信、1982年2月号)に依拠。

*2 1～70号は合本版で確認。

*3 1集分の集計は、藤森照信(代表研究者)『日本近代建築書の研究』(昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年)に依拠。

*4 1集分の集計は、藤森照信(代表研究者)『日本近代建築書の研究』(昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年)に依拠。

*5 1集分の集計は、前掲*3に同じ。

*6 20集分は合本版で確認。分冊版10集の刊行後に合本版の刊行が社告に告げ(『建築新潮』1925.00～1926.00)。

*7 全集完結の告知は、『建築工芸アイン・オーラ』1932年2月号前付社告など。

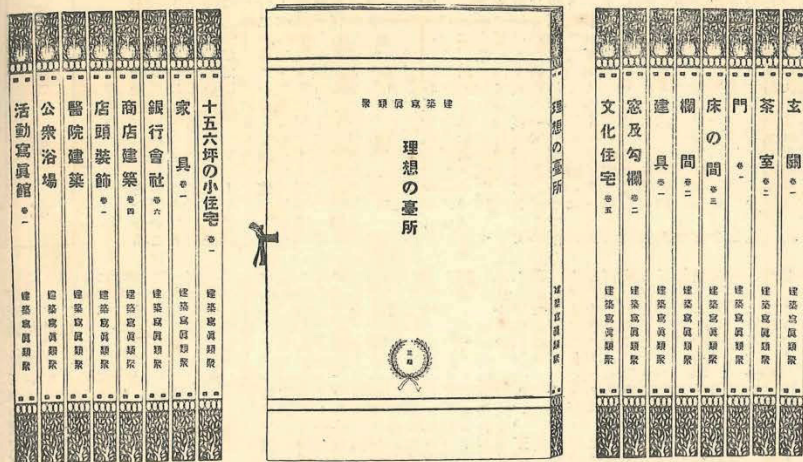
*8 全集完結の告知は、『木材工芸叢書』24巻後付社告など。

*9 全集完結の告知は、『国宝書院図聚』第1巻後付社告など。

*10 1集分の集計は、新井電話「戦前日本の家具・インテリア―『近代家具装飾資料』でよみがえる帝前の生活』(上巻、柏書房、2017年)に依拠。借頁の合併号を2種含むため、最終の号数表示は47集。

*11 全集完結の告知は、『近代家具装飾資料』44集後付社告。

*12 全集完結の告知は、『国宝書院図聚』第13巻「凡例」(p.3)。



送金料五錢 定價壹圓拾錢 第一分賣 四六判玻璃版印刷十五枚入

◆建築寫真類聚は、意匠設計の同伴として立つ。
 ◆意匠設計は教へらるゝものでなく、自ら育成し、自ら精練し、自ら高めねばならぬ。然らば如何にして育て、練り、高むるか。
 ◆意匠設計の用意は、常に耕すことにある。眼をこやし、頭を豊穰ならしむるにある。建築寫真類聚の存在は、そこに赫々たる光輝を放つ。
 ◆諸君は先づ、常に多くを見、味ひ、深く頭腦に刻み付けよ、諸君の才能は油を得たるエンヂンの如く、圓轉自在の妙機に觸るゝであらう。
 ◆建築寫真類聚は、凡ゆる建築の種類を分類して一冊宛に纏めたもので、随時、随意のものを索出し展覽し得る至便此上なき活資料である。
 ◆新築設計には勿論、増改築に際しての、手つとり早いカタログである。應接、書齋、客間、臺所、浴室、便所、扱ては煖爐、床の間、欄間、手摺、窓等微に入り細に亘り、それ／＼一冊宛になつて、しとやかに諸君の御愛招を待つて居る。

▼詳しい事は「會規」や「書目」を請求せられよ。
 ▼中途御入會の方で、毎月二三冊宛御希望は、『新刊一冊に既刊一冊若くは二冊』と云ふ風に御極めになるのが非常に多く、又當方でも御勧めしてゐる。
 ▼ハガキ一枚、會員になるを御知らせればすぐに送る。

振替東京一八二四二
 電話四四四二六

洪洋社

東京市牛込區
 山谷臺一〇

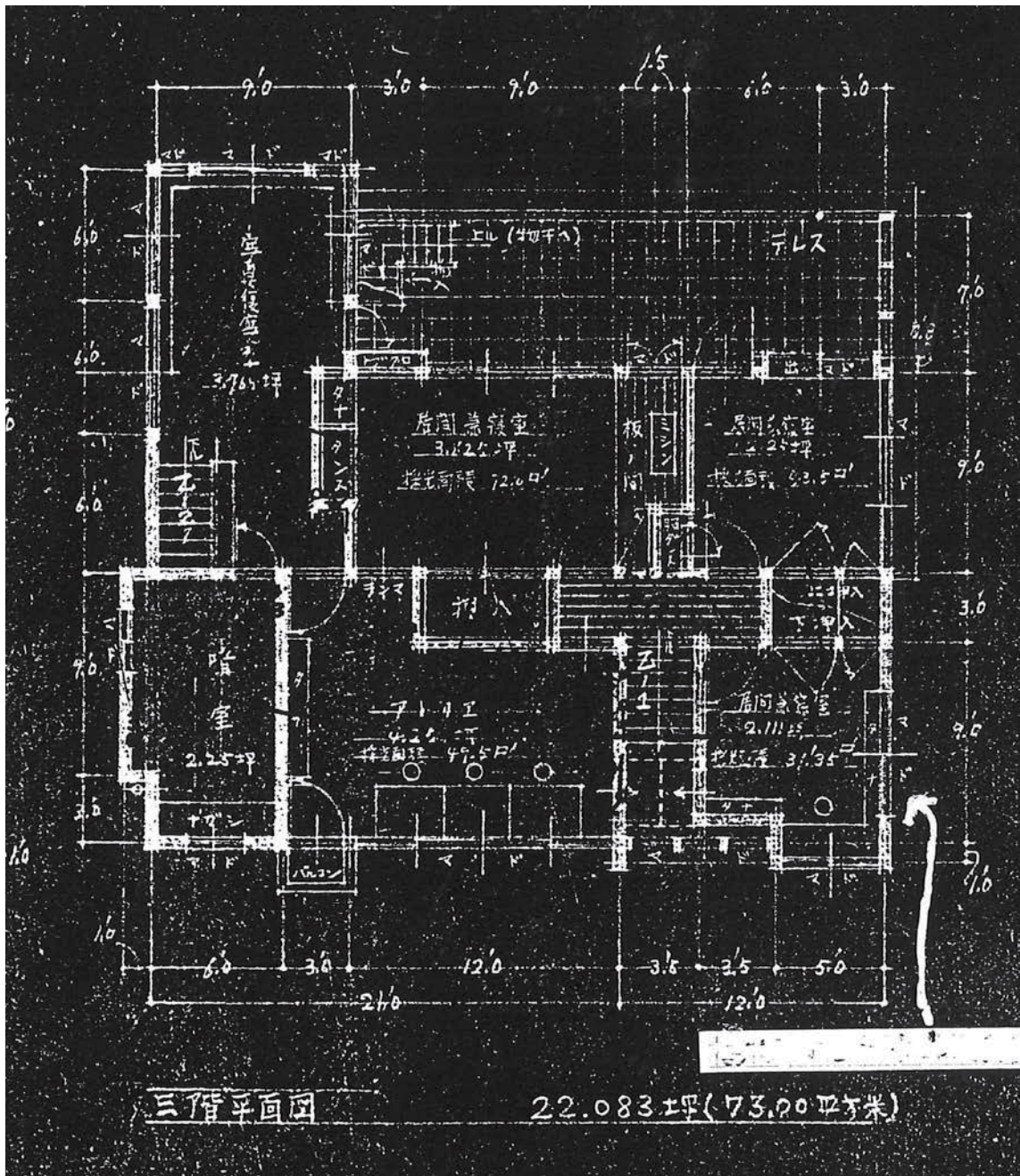
[図 3-18] 『建築写真類聚』の社告

出典：『建築新潮』第9年第11号、洪洋社、1928年11月、後付社告

所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室



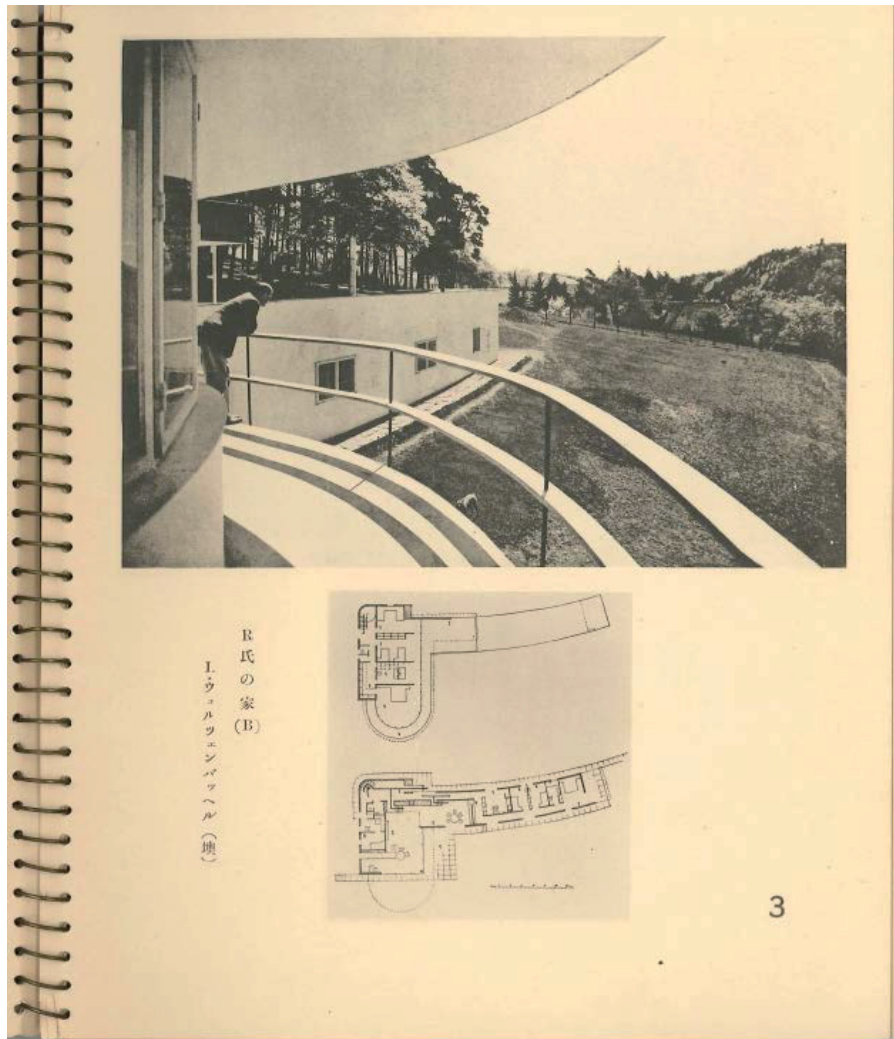
〔図 3-19〕 洪洋社創業社主・高梨由太郎
中央、1922 年ごろ撮影
所蔵：高梨家



[図 3-20] 洪洋社自宅兼社屋、3 階平面図

設計：高梨勝重、竣工：1934 年

所蔵：高梨家



〔図 3-21〕「世界の新興住宅」

『建築写真類聚』第 8 期第 12 集、洪洋社、1932 年 12 月

所蔵：日本大学工学部建築史・建築論研究室

[表4-1] 構成社書房の建築書一覧

年 月	雑誌	叢書	単行本
1929 9			『建築芸術へ』ル・コルビュジエ著、宮崎謙三訳
10	『建築』第1号	『現代建築大観』	第1集 グリル
11	第1年第2号「特集バウハウス」	第2集 亜米利加編 其一	
12	第1年第3号	第4集 独逸・奥大利編 其一	
1930 1		第12集 スカンディナビア編 其一	『過去の構成』岸田日出刀
2	第2年第1/2号「機構美号」	第7集 仏蘭西編 其一	『住宅——休息・家具・室-建築』野村茂治著※
3	第2年第3号	第1集 英吉利編	
4		第5集 独逸・奥大利編 其二	
5		第8集 仏蘭西編 其二	『現代の構成』岸田日出刀
6		第16集 露西亜編	『生活最小限ノ住宅』CIAM・議事録、拓植芳男訳
7	『建築』第1号	第3集 亜米利加編 其二	第1編『建築』A.リュルサ著、市浦健訳
8	第2号	第6集 独逸・奥大利編 其一	
9	第3号	第10集 和蘭編	
10	第4号	第14集 瑞西・チエコスロバキア編	
11		第9集 仏蘭西編 其三	第5編『今日の裝飾芸術』ル・コルビュジエ著、前川国男訳
12	第5/6号	第13集 スカンディナビア編 其二	『日本建築史』藤島亥治郎著
1931 1	第7号	第11集 和蘭・白耳義編	『一混凝土住宅図集』堀口捨己著
2	第8号	第17集 露西亜・波蘭編	
3	第9号	第15集 伊太利・西班牙編	『建築工事現場の欠陥』堀井啓次著
4	第10号		
5	第11号		
6	第12号		

建築書以外

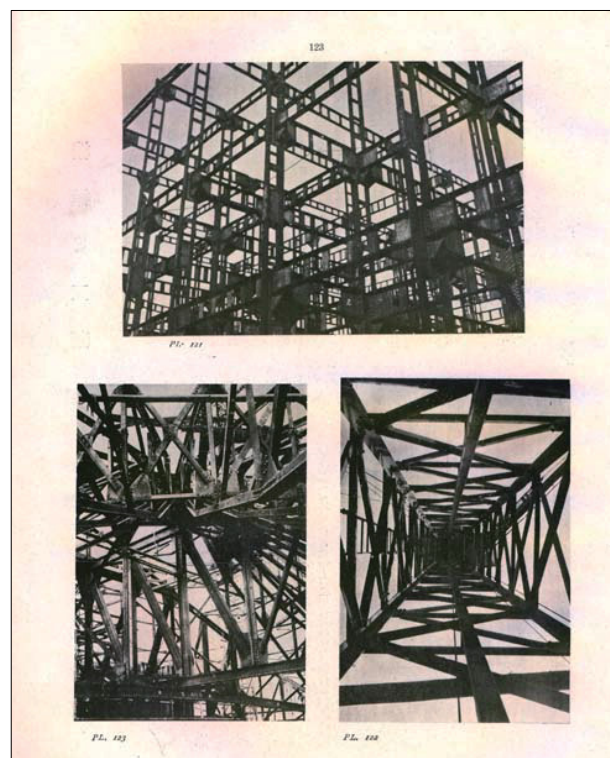
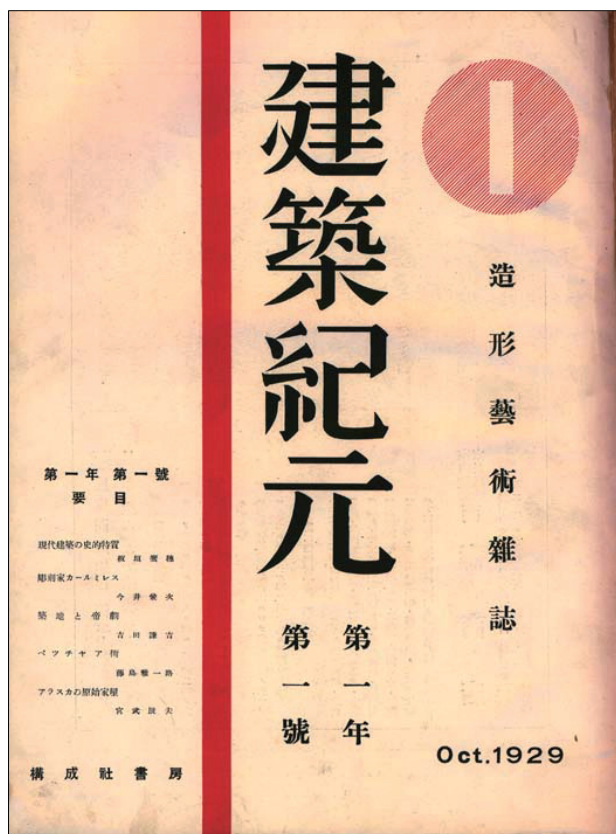
『高等英文法——史的解説』(大塚高信著、1930年3月)

『現代独逸文学の三段階』(レオポルト・ウインクラー著、1930年11月)

『自然科学小論文集』(林久男著、1930年11月)

『金属工芸——研究と製作の実際指導』(松崎福三郎著、1933年12月)

※『住宅——休息・家具・室-建築』の副題は、『住宅——合理的な住居の姿』と表記されることが多い(国立国会図書館ほか)が、本章では構成社書房の社告における表記を採った(たとえば『現代建築大観 第12集 スカンディナビア』)



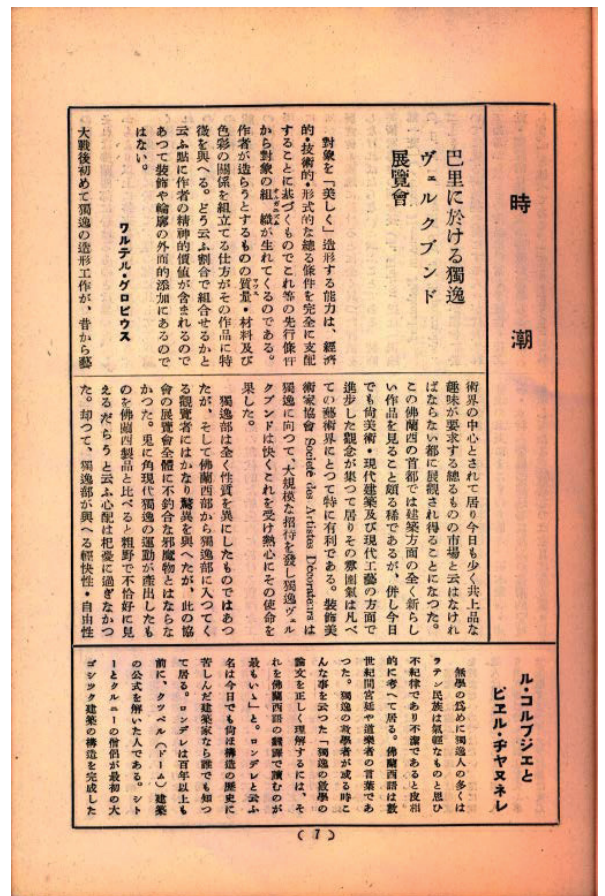
〔図 4-1〕 造形芸術雑誌『建築紀元』

右：第 1 年第 1 号表紙、1929 年 10 月（装丁：岸田日出刀）

左：岸田日出刀撮影「鉄の機構美」、第 2 年第 1/2 号、p.9、1930 年 2 月）

構成社書房

所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室



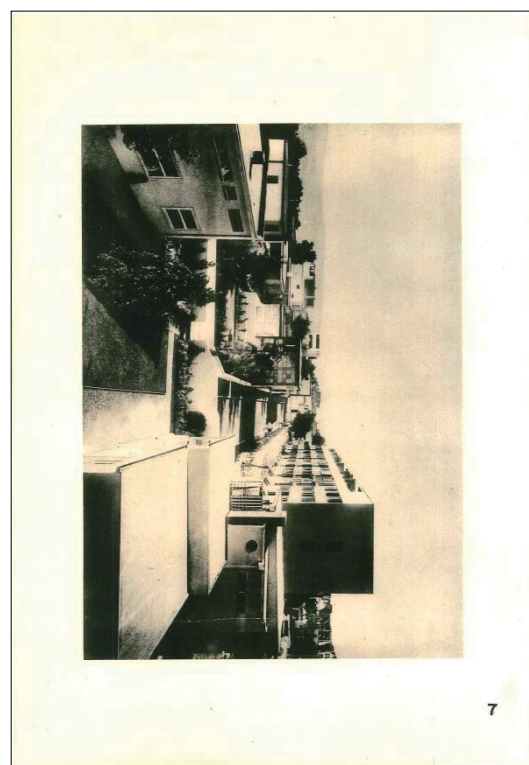
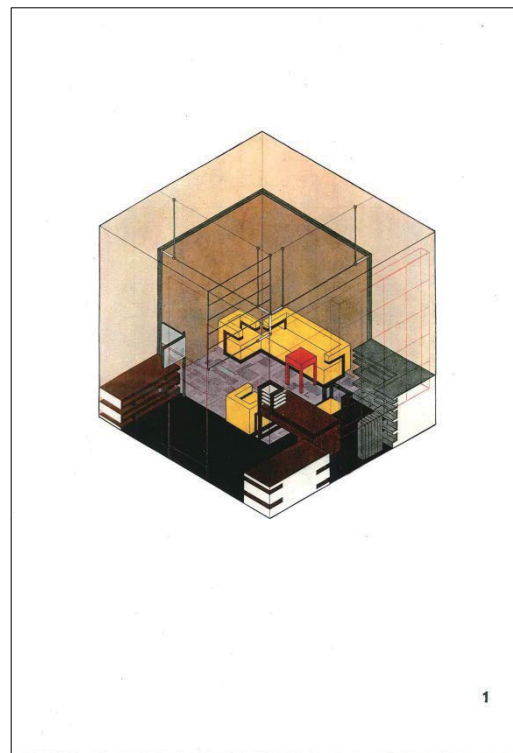
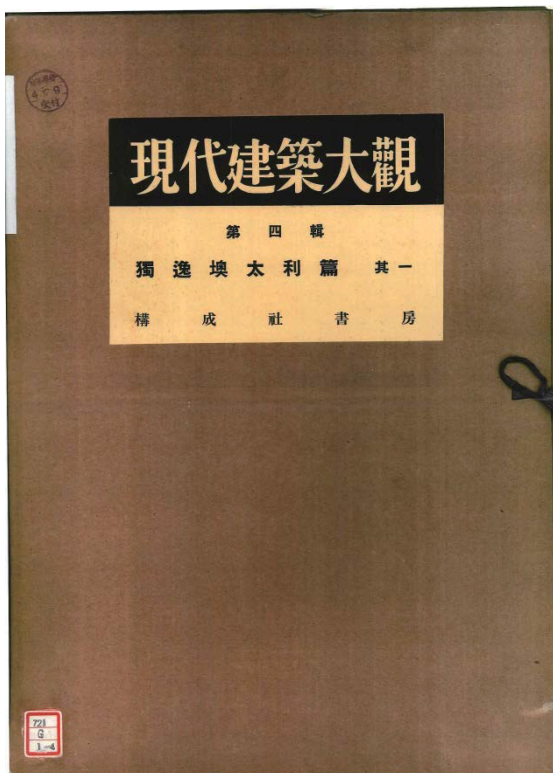
〔図 4-2〕 雑誌『建築時潮』

右：第 7 号表紙、1931 年 1 月

左：時潮欄「巴里に於けるヴェルクブンド展覧會」、第 2 号、p.7、1930 年 8 月

構成社書房

所蔵：日本大学理工学部建築史・建築論研究室



〔図 4-3〕写真集『現代建築大観』

第 4 集「独逸・埃太利篇 其一」、藤島亥治郎、今井兼次、堀口捨己、岸田日出刀編
構成社書房、1929 年 11 月

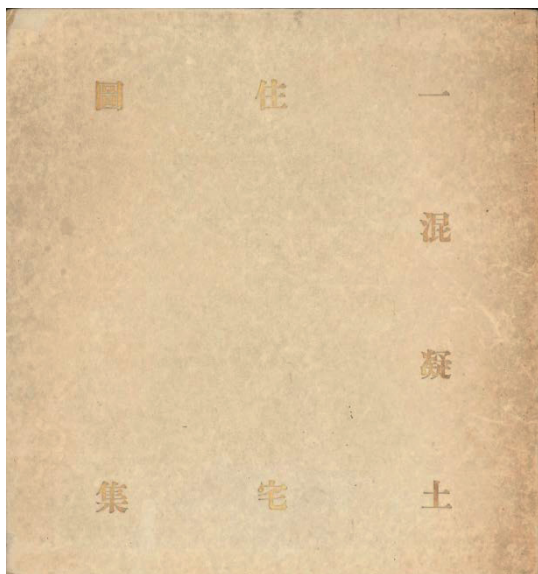
所蔵：日本建築学会図書館



[図 4-4] 『過去の構成』

岸田日出刀著、構成社書房、1929年12月

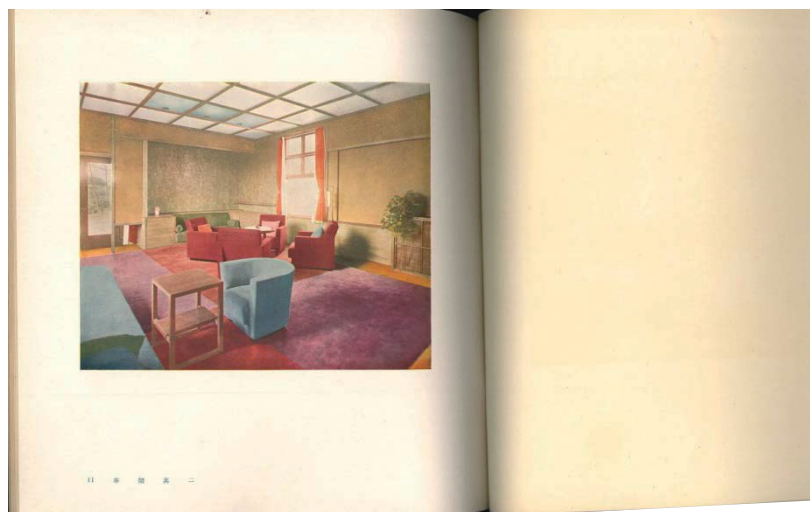
画像提供：まんだらけ 中野店



[図 4-5] 『一混泥土住宅図集』

堀口捨己著、構成社書房、1930年12月

所蔵：日本大学工学部建築史・建築論研究室



参考文献

1 日本近代建築史の概説書

- ・ 神代雄一郎「日本における近代建築思潮の形成」(『建築学大系 6 近代建築史』、彰国社、1958年)
- ・ 稲垣栄三『日本の近代建築——その成立過程』(丸善、1959年／鹿島出版会、上下、1979年)
- ・ 村松貞次郎『日本建築技術史』(日本技術史叢書、地人書館、1959年)
- ・ 菊池重郎『日本に於ける洋式建築の初期導入過程の研究』(東京工業大学博士論文、1962年)
- ・ 日本科学史学会編『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』(村松貞次郎責任編集、第一法規出版、1964年)
- ・ 村松貞次郎『日本建築家山脈』(鹿島出版会、1965年)
- ・ 桐敷真次郎『明治の建築——建築百年のあゆみ』(日経新書 33、日本経済新聞社、1966年)
- ・ 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』(丸善、1972年)

2 日本の近代建築書および建築図書に関する総合的な研究

- ・ 藤森照信(代表研究者)『日本近代建築書の研究』(昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書、1988年)
- ・ 和田博文監修『コレクション・モダン都市文化』(全5期・100巻、ゆまに書房、2004～2014年)
- ・ 森仁史監修『叢書・近代日本のデザイン』(明治篇9巻、大正篇19巻、昭和篇40巻、ゆまに書房、2007～2015年)
- ・ 内田青蔵監修『近代日本生活文化基本文献集——ひと・もの・住まい』(第I期明治・大正編7巻、第II期大正・昭和期編7巻、第III期昭和戦前期編7巻・別冊1、日本図書センター、2010～2012年)

3 近代日本の建築誌に関する総合的な論考・文献

- ・ 宮内嘉久「近代日本の建築イデオロギー ——ジャーナリズムを通して」(東京大学卒業論文、1949年／宮内嘉久『少数派建築論』所収、井上書院、1974年)
- ・ 日本建築学会創立70周年記念座談会「建築ジャーナリズムの動きをたどる——関係誌20年の歩み」(『建築雑誌』1956年4月号)
- ・ 特集「建築ジャーナリズム」(『建築雑誌』1977年11月号)
- ・ 菊岡俱也、藤井肇男編『日本近代 建築・土木・都市・住宅 雑誌目次総覧』(柏書房、1990～1991年)

- ・ 大川三雄「建築ジャーナリズムの『昭和』」(平林左伎司・宮本和義監修『昭和彩譜』所収、シーアイ化成、1990年／再刊：宮本和義監修『昭和彩譜——写真が語る昭和の建築と世相 建築で綴る昭和史』日経BP社、1991年／復刊：『昭和建築世相史』日本図書センター、2012年)
- ・ 特集「建築をめぐるジャーナリズム」(『建築雑誌』、1999年9月号)
- ・ 宮内嘉久「20世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」(『建築雑誌』、1999年9月号)

4 日本の近代建築書に関する個別研究および技術史研究

- ・ 佐藤功一「西洋家作雛形解題」(『明治文化全集 第24巻 科学編』吉野作造編、日本評論社、1930年、『佐藤功一全集 第三巻』、1942年)
- ・ 高杉造酒太郎『『建築雑誌』の歩みと変せん』(『建築雑誌』、1968年8月号)
- ・ 山口廣「年表・建築雑誌1000号の歩み(明治20年～昭和43年)」(『建築雑誌』、1968年8月号)
- ・ 佐々木宏監修・解説『新建築50年に見る建築昭和史』(新建築1975年12月臨時増刊)
- ・ 菊池重郎の『明治村通信』誌における建築図集に関する一連の論考(「欧米新建築のプレート図集「モダン・アーキテクチュア」について」(1981年2月号)、「月刊図集「近世建築」(1・2)」(1981年4、5月号)、「『セセッション図案集』特に「外観之部」の初刊年代について(上・下)」(1981年9、10月号)、「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の活動(上・下)」(1982年1、2月号)、「洋風建築装飾ひながた図集(上・下)」(1982年6、7月号)、「木葉会の明治期に刊行した建築プレート図集考(上・中・下)」(1982年10月号、1983年1、3月号)、「洪洋社の「建築写真類聚」の創刊(1)～(5)」(1983年7、10、11月号、1984年2、5月号)、「幻の邦訳・日本語版『フランク・ロイド・ライト作品集』の探索(1)～(4)」(1984年9、12月号、1985年1、2月号)
- ・ 堀口甚吉『近代建築史論』(堀口甚吉論集刊行会、1984年)
- ・ 藤森照信、藤岡洋保、初田亨編『写真集 失われた帝都 東京』(柏書房、1990年／再刊：『写真集 幻景の東京』、柏書房、1998年)
- ・ 中谷礼仁『幕末・明治規矩術の展開過程の研究』(早稲田大学博士論文、1998年／中谷礼仁・中谷ゼミナール著『近世建築論集』所収、アセテート、2005年)
- ・ 花田佳明、石坂美樹「建築雑誌『国際建築』研究1・2」(日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2001年)
- ・ 片野博ほか「我が国における技術書の刊行と建設技術の普及に関する研究」(「明治、昭和初期における理工学系教科書と建築学教科書の役割」「その2：大正、昭和初期に刊行された代表的建築学教科書の内容の特徴について」(共著：塚原恵美子、長谷隆、日本建築学会研究報告九州支部第

40号、2001年)、「その3：明治、大正、昭和初期における建築技術書の時期別出版状況」「その4：明治、大正、昭和初期における建築技術書の分野別出版状況」(共著：長谷隆、山口圭子、同報告第41号、2002年)、「その5：著者にみる建築技術書の内容的変遷」「その6：一般叢書にみる建築普及の変遷 明治・大正・昭和初期」(共著：山口圭子、同報告第42号、2003年)、「その7：建築の基礎学問分野における技術書の変遷」「その8：土木分野における技術書の変遷」(共著：その7岡本温子、その8黒澤圭太、同報告第43号、2003年)、「その9：「高等建築学」と著者の属性について 構造・材料等分野」「その10：「高等建築学」と著者の属性について 計画等分野」(共著：木下健二、同報告第43号、2004年)

- ・ 青井哲人『『建築雑誌』アーカイブス』(『建築雑誌』2002年1月号～2003年12月号)
- ・ 松永文雄『我が国における中等建築教育の確立に関する基礎的研究——大正末、昭和初期の文部省内と建築学会の検討活動を通じて』(九州大学博士論文、2008年)
- ・ 柳澤宏江『明治時代の建築雛形本にみる洋風意匠の受容に関する研究』(名古屋市立大学博士論文、2008年)
- ・ 石田潤一郎『『新建築』の創刊前後——解題にかえて』(『『新建築』解題・総目次・索引』所収、不二出版、2010年)
- ・ 花田佳明『植田実の編集現場』(ラトルズ、2010年)
- ・ 中村裕太「資料紹介 スタイルブックとしての『建築写真類聚』」(『大正イマジユリィ』、no.7、2012年)
- ・ 中谷礼仁、本橋仁、丸茂友里、根来美和、廣瀬翔太郎『『西洋家作雛形』・『Cottage Building』比較研究』(「1：明治初期日本における救貧行政からみる出版意図の再考察」「2：産業革命後英国における住宅改善の取り組みと本書の位置づけ」「3：西洋建築導入期における技術的語句の意図的な翻訳の工夫」「4：明治初期日本における「建築」概念の美学的観点について」(日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠、2015年)

5 日本の近代建築運動史に関する論考・文献

- ・ 西山卯三「建築家のための建築小史」(『国際建築』、1933年8月号～1934年1月号／西山卯三『建築史ノート』所収、相模書房、1948年／『西山卯三著作集4建築論』所収、勁草書房、1969年)
- ・ 特集「近世日本建築文化運動」(『建築と社会』、1937年6月号)
- ・ 宮内嘉久「日本の建築運動1920-60——組織・創造・イデオロギー」(『世界建築全集9近代』、平凡社、1961年)
- ・ 本多昭一著、松井昭光監修『近代日本建築運動史』(ドメス出版、2003年)

6 そのほかの近代建築史に関する論考・文献

- ・ 土崎紀子、沢良子編著『建築人物群像——追悼編・資料編』（住まいの図書館出版局、1995年）
- ・ ビアトリス・コロミーナ『マスメディアと近代建築——アドルフ・ロースとル・コルビュジエ』（松畑強訳、鹿島出版会、1996年）
- ・ 初田亨『職人たちの西洋建築』（講談社選書メチエ、1997年）
- ・ 倉方俊輔「「日本近代建築」の生成——「現代建築」から『日本の近代建築』まで」（『10+1』no.20、2000年6月）
- ・ 藤岡洋保『表現者・堀口捨己——総合芸術の探求』（中央公論美術出版社、2009年）
- ・ 井上章一「現代の建築家⑧ 堀口捨己——メディアの可能性ともむきあって」（『GA JAPAN』117号、2012年7月／『井上章一 現代の建築家』、エーディーエー・エディタ・トーキョー、2014年）
- ・ 『モダニスト再考 [日本編] ——建築の20世紀はここから始まった』、彰国社編・刊、2017年（特集「日本モダニズムの30人——モダニスト再考2 国内編」[『建築文化』、2000年1月の再編集]）

7 出版史に関する論考・文献

- ・ 東京書籍商組合編・刊『東京書籍商組合史及組合員概歴』（1912年）
- ・ 出版タイムス社編・刊『日本出版大観』（1930年）
- ・ 杉村武『近代日本大出版事業史』（出版ニュース社、1967年）
- ・ 今田洋三『江戸の本屋さん——近世文化史の側面』（日本放送協会、1977年／平凡社ライブラリー、2009年）
- ・ 日本コロタイプ印刷史編集委員会『日本コロタイプ印刷史』（全日本コロタイプ印刷組合、1981年）
- ・ 西野嘉章編『歴史の文字——記載・活字・活版』（東京大学出版会、1996年）
- ・ 西野嘉章『前衛誌——未来派・ダダ・構成主義』（東京大学出版会、2016年）

既往研究一覧

1 査読付論文

- 1) 川嶋勝、矢代眞己、大川三雄：構成社書房の建築出版活動の概要と史的意義について；日本建築学会計画系論文集、541号、pp.221-226、2001年3月
- 2) 川嶋勝、大川三雄、矢代眞己、田所辰之助：洪洋社の建築出版活動の概要とその特質について；日本建築学会計画系論文集、721号、pp.751-758、2016年3月
- 3) 川嶋勝、大川三雄、矢代眞己、田所辰之助：叢書形式の建築図集にみる洪洋社の刊行手法とその特徴について；査読中（日本建築学会計画系論文集）

2 口頭発表

- 1) 大川三雄、川嶋勝：建築専門出版社・洪洋社の出版活動について——その1 編者と出版物の変遷；日本建築学会大会学術講演梗概集、F-2、pp.93-94、1997年
- 2) 川嶋勝、大川三雄：建築専門出版社・洪洋社の出版活動について——その2 社主・高梨由太郎の事績；日本建築学会大会学術講演梗概集、F-2、pp.95-96、1997年
- 3) 川嶋勝、大川三雄、矢代眞己：造形芸術雑誌『建築紀元』の概要について——建築専門出版社・構成社書房の出版活動に関する研究 その1；日本建築学会大会学術講演梗概集、F-2、pp. 361-362、1998年
- 4) 矢代眞己、大川三雄、川嶋勝：雑誌『建築時潮』の概要と性格について——建築専門出版社・構成社書房の出版活動に関する研究 その2；日本建築学会大会学術講演梗概集、F-2、pp. 363-364、1998年
- 5) 川嶋勝、大川三雄、片桐正夫：雑誌『現代建築』の概要と性格について——戦時下におけるモダニズム建築の啓蒙；平成10年度日本大学理工学部学術講演会論文集、pp.668-669、1998年
- 6) 矢代眞己、大川三雄、川嶋勝：雑誌『建築時潮』の誌面構成について——建築専門出版社・構成社書房の出版活動に関する研究 その3；日本建築学会関東支部研究報告集、第69号、計画系、pp.585-588、1999年
- 7) 大川三雄、川嶋勝、矢代眞己、田所辰之助：雑誌『建築世界』の創刊期における署名記事と巻頭言の展開について——建築世界社の出版活動研究1；平成27年度日本大学理工学部学術講演会予稿集、pp.517-518、2015年

- 8) 川嶋勝、大川三雄、矢代眞己、田所辰之助：雑誌『建築世界』の創刊期における「主張」欄の推移と編集体制の特徴について——建築世界社の出版活動研究 2；平成 27 年度日本大学理工学部学術講演会予稿集、pp.519-520、2015 年
- 9) 庄司兼悟、川嶋勝、田所辰之助：創宇社建築会の第一回及び第二回新建築思潮講演会について——創宇社建築制作展覧会への出品作品との比較を通して；平成 27 年度日本大学理工学部学術講演会予稿集、pp.527-528、2015 年
- 10) 田所辰之助、庄司兼悟、川嶋勝：ベルリンにおける「プロレタリア建築展」（1931 年）の概要について——滞独時代の山口文象の活動に関する研究 1；平成 27 年度日本大学理工学部学術講演会予稿集、pp.529-530、2015 年
- 11) 矢代眞己、梅宮弘光、川嶋勝：大野三行著『住心地よき中流住宅』（1923 年）について；日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠、pp.875-876、2016 年
- 12) 梅宮弘光、矢代眞己、川嶋勝：山越邦彦の活動変容にみるモダニズム建築思想の帰趨——山越邦彦研究・その 13；日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠、pp.951-952、2016 年
- 13) 川嶋勝、大川三雄、矢代眞己、田所辰之助：宮内嘉久による「建築ジャーナリズム史」の成立経緯について；平成 28 年度日本大学理工学部学術講演会予稿集、pp.548-549、2016 年
- 14) 大川三雄、川嶋勝、矢代眞己、田所辰之助：宮内嘉久による「建築ジャーナリズム史」の意義と特質について；平成 28 年度日本大学理工学部学術講演会予稿集、pp.550-551、2016 年

3 著書（共著）

- 1) 青井哲人、五十嵐太郎、梅宮弘光、岡崎乾二郎、岡田哲史、奥佳弥、笠原一人、川嶋勝、田所辰之助、田中純、田中禎彦、中谷礼仁、トーベン・バーンズ、濱寄良実、本田昌昭、松隈洋、丸山洋志、南泰裕、矢木敦、矢代眞己、八束はじめ：日本モダニズムの 30 人 モダニスト再考 2 国内編；建築文化、639 号特集、2000 年
- 2) 青井哲人、五十嵐太郎、梅宮弘光、岡崎乾二郎、岡田哲史、奥佳弥、笠原一人、川嶋勝、田所辰之助、田中純、田中禎彦、中谷礼仁、トーベン・バーンズ、濱寄良実、本田昌昭、松隈洋、丸山洋志、南泰裕、矢木敦、矢代眞己、八束はじめ：モダニスト再考 [日本編] ——建築の 20 世紀はここから始まった；彰国社、2017 年

あとがき

亡き恩師・近江榮先生は、博士論文のテーマ選定に建築論争史か建築設計競技史かで迷われ、小林文次教授に相談したところ、「それは君、コンペ史だよ。実証的だし、デザイン史として説得力がある」と即答で薦められたという。「お墨付きをいただいて、それからは未開拓の世界だけに、大変意欲的に取り組むことができました」と日本大学理工学部建築学科の最終講義で回顧された（近江榮『光と影——蘇る近代建築史の先駆者たち』、p.35、相模書房、1998年）。

従来の建築ジャーナリズム史と拙論の建築出版活動史との関係は、近江先生の選択肢とどこか似ているかもしれないと憚りながら感じてきた。日本の近代建築書についての一種の概括を試みるという分不相応に大きなテーマとなったが、コンペ史と同じく「未開拓」ともいえる建築出版組織の系譜に思いをめぐらすのは、苦しくとも楽しい時間となった。記述の曖昧さや不正確さは、すべて筆者の責に帰するものであり、ご教示とご批判を賜りたいと願うばかりである。

本論文の起首は、日本大学理工学部建築史・建築論研究室での卒業論文にさかのぼる。洪洋社をテーマとして薦めてくださったのは、日本大学理工学部特任教授の大川三雄先生である。修士論文では構成社書房の雑誌の存在をご教示いただき、本論文でも副査としてご指導いただいた。大川先生の描かれる建築ジャーナリズム史の掌上で筆者は学んできた。

日本大学理工学部教授の田所辰之助先生には、建築出版活動の史的研究の可能性に目をとめていただき、本論文をまとめるよう強く薦めてくださったうえに、主査の労をとっていただいた。こうして擱筆にいたったのは、田所先生のきめ細く温かなご指導の賜物にほかならない。

日本大学理工学部建築学科主任教授の重枝豊先生と神奈川大学工学部教授の内田青蔵先生にも副査をお願いした。重枝先生には、修士論文の行き詰まりを打開するご示唆をいただくなど、折にふれてご指導を頂戴してきた。内田先生は、近代建築書の復刻刊行を幅広く監修されており、そのご業績の多くに本論文は負っている。ご著書の一部で編集をお手伝いさせていただいたご縁をたどって、とくに今回の査読をお願いした。

日本大学短期大学部教授の矢代眞己先生には、修士論文の一部だった構成社書房の考察を査読付き論文に発展させる道筋を16年前につけていただき、共著者となって懇切丁寧なご指導を頂戴してきた。本論文をまとめるにあたって数々の貴重なご教示をいただいている。

ご指導を賜った先生がたへ深甚なる謝意を表します。

構成社書房の主要メンバーのひとりである故・藤島亥治郎先生（東京大学名誉教授）にお話をうかがえたのは、近江先生のご仲介にほかならない。日大建築史・建築論研究室の初代教授・小林先生は、藤島先生の門下生であり、その衣鉢を近江先生とともに継がれた故・片桐正夫先生（日本大学名誉教授）には修士論文をご指導いただいた。また、構成社書房で編集責任を務めた故・山越邦彦先生を顕彰する「山越邦彦研究会」は、矢代先生に誘われてお手伝いをはじめたが、同会の代表である神戸大学大学院教授の梅宮弘光先生には、山越先生に関するご教示だけでなく、近代建築書研究における情報供給者の観点についても貴重なご示唆を賜った。

洪洋社の調査をはじめたばかりのゼミ合宿で、黒沢隆先生の同期ゼミ生だった近藤あずさ氏が同社創業者の曾孫にあたることを知った。この稀有な巡りあわせによりご遺族各位とお会いでき、あずさ氏のご母堂・近藤苗子氏にいまも資料の便宜を頂戴している。日大建築史・建築論研究室には、建築評論家の故・浜口隆一先生により「建築ジャーナリズム研究所」が戦後まもなく設置され、現在もその宛名で郵便物が届くという。研究室の先輩がたには神子久忠氏を筆頭に幅広い世代の編集者がおられ、折にふれてうかがう逸話からは建築史上のできごとに少なからぬ実感を与えていただいた。また、濱寄良実博士をはじめとして近しい先輩がたに建築家が多くおられることで、建築設計への実感を養っていただいたと感じている。

研究室から頂戴したご縁と先生がたのご指導に対し、心から感謝を申し上げます。

幸運な巡りあわせは、筆者が勤める鹿島出版会における建築書の編集業務でも同様であり、錚々たる顔ぶれの著者の先生がたや社内外の編集者、デザイナー、写真家たちの本づくりを手伝ってきたことは、本論文の血肉となっていることだろう。お名前のすべてを記すことはかなわないが、訾咳に接した名誉教授の先生だけを数えても、研究生としてお世話になった藤森照信先生（東京大学名誉教授）をはじめ40名を超える。この場を借りて深く御礼を申し上げます。

そして、貴重な機会を与えてくれた鹿島出版会と関係各位に、厚く謝意を表します。

建築の本づくりと歴史研究の双方で満足な成果をあげることは難しくとも、双方を知っている、体験していることは、いくばくかでも相互に生かせる機会もめぐってこよう。そのことが建築史・建築論研究室と鹿島出版会の各位への恩返しになると信じ、研鑽を積んでいきたいと思う。

最後に私事となるが、公私ともに筆者を支えてくれている家族に感謝を述べ、ささやかな研究活動の節目を報告したい。実家の納屋に卒論の資料や古書が20年前のまま残されていなければ、本論文は生まれえなかった。

2017年9月

川嶋 勝

Summery

Study on the historical development of architectural publication activities in Modern Japan:

Formation of architectural publication organizations and roles of architectural books until the war in the Showa period

Masaru Kawashima

This paper is aimed to verify the overall of the architectural publication activities and clarify the meaning of the activities in the history of Japanese modern architecture by analyzing the historical development of architectural publication activities in Modern Japan while focusing on the publication organizations for architectural books.

The existence of printed books as information media to speak about architecture have played a great role in the development of architectural culture, from the books about architectural theory in Ancient Rome to organs of the modern movements in architecture. Especially, the development of photography printing technologies expanded the functions of architectural visual information dramatically, and for many people, chances to learn architecture through photographs printed in books increased more than viewing actual buildings.

Printed books are generally categorized into magazines and books, and books are categorized into independent books and serial books. In the studies of Japanese modern architecture, previous studies which target printed books for architecture (hereinafter referred to as architectural printed books) mainly discussed the trend of magazines for architecture (hereinafter referred to as architectural magazines) regarding the introduction of modernism. But in the history of architectural journalism which described the lineage of architectural magazines, it tended to emphasize only the relationship between specific architectural magazines and the movements in architecture. At the same time, the importance of books for architecture (hereinafter referred to as architectural books) such as architectural technical books and illustrated books on architecture had also been pointed out from early on. In recent years, reprinting major architectural printed books that were originally published before the war is spreading from architectural magazines to architectural books related to architectural design. However, in these series of previous studies, there was no sign of any extent which might have allowed to view the overall of architectural

printed books including architectural magazines and books in Modern Japan as a whole. In particular, any methodology in the study of the architectural history to outline the lineage of architectural books had not been presented.

This study is targeting the modern architectural printed books published after Japan ended its national isolation at the end of the Edo period. Modern architectural printed books are architectural magazines and books which main theme was modern architectures that were built after contacting modern Western civilization. Some printed books which dealt with Japanese traditional architectures are also included as long as they are recognized that they included modern publication methods such as photography printing and modern interpretation. The target period for the analysis was set to until the end of the WWII in 1945, the only year in which the publication of architectural printed books was halted. In the investigation method, the author directly targeted architectural publication organizations who published modern architectural printed books spontaneously and continuously, and architectural publication activities was set as the evaluation axis to grasp activities to publish architectural printed books by authors, editors or publishers in frameworks of architectural publication organizations. This evaluation axis has the following availabilities in the methodology.

- (1) For architectural books which lineage could not be found unlike architectural magazines, it must be possible to verify the historical development of architectural books by analyzing relationships among architectural books as well as publication purposes and methods of editors and publishers in frameworks of architectural publication organizations.
- (2) It must be possible to verify the overall of modern architectural printed books including both architectural magazines and books by capturing the activities of architectural publication organizations who published architectural magazines and books for certain periods with a chronological approach.

Based on the above points of view, the new methodology was presented in this paper for the study of the history of Japanese modern architecture to examine the process of modernization of architecture through architectural publication activities.

This paper consists of six chapters in total, including the introductory and conclusion chapters. Chapter 1 verified the historical overview of architectural publication activities in Modern Japan, and

focused on especially three architectural publication organizations that showed characteristic activity styles. They are studied individually in Chapter 2, 3, and 4.

In the introductory chapter, the purpose of this study, the examination of previous studies, and the research approach and intention were described. New perspectives of architectural publishing organizations and architectural books in the study on Modern architectural books in Modern Japan were extracted.

In Chapter 1, the author categorized architectural publication organizations into four types by their characters, and tried to see the historical overview of architectural publication activities in Modern Japan by analyzing the processes of the establishment by type. As the prehistory of that, the author examined the introduction of Western architectural technologies that were the translation of Dutch military technical books translated by military organizations during the end of Edo period and the beginning of Meiji period, and mentioned Japanese translation text and succession of publishers.

Among the four types of architectural publication organizations, the first one is architectural academic societies and associations. It started with the publication of the journal of the Architectural Institute of Japan "Kenchiku Zasshi (Journal of Architecture and Building Science)," and it was established as the writing and editorial activities dedicated by an architect, Tatsutaro Nakamura, and some others in pioneer days. Publications of architectural books including notes of lectures by architects started around the same time, and while the publication style transited from self-publishing by authors to publications by publishers, architectural book publishers emerged as the second type of architectural publication organizations, and Kenchiku Shoin was the pioneering figure. The activities of architectural publishers inaugurated while being anchored by books.

For architectural magazine publishers, the third type of architectural publication organizations were leading the reviewing activities in the movements in architecture in 1920s which can also be observed in around 1910s including architectural reviews that were highly prosocial. Groups of movements in architecture, the fourth type of architectural publication organizations were trying to improve the social status of the movements in architecture by publishing collections of works in a wide-format from major publishers, like activities by Bunriha Kenchiku kai (the Secession school of architects). Moreover, the number of architectural book publishers that were newly established kept increasing in 1930s or later, which is considered as the stagnant period of the movements in architecture as well as architectural magazines, and even during the wartime, the infrastructure for publishing collections of architectural reviews was formed, and then it became active after WWII.

It is a common point that many of architectural publication organizations mentioned above published illustrated books on architecture. We, therefore, focused on three architectural book publishers that we confirmed their continuous publication of illustrated books on architecture while taking the important points of overall various activities of architectural publication organizations into account. If we add the activity periods of Kenchiku Shoin and Koyosha together, it corresponds to the whole period of various activities by the architectural publication organizations which we targeted in this paper. Activities by Koseisha Shobo were limited to a short period, however, they were publishing both illustrated books on architecture and architectural magazines while showing the characteristics of the movements in architecture, thus it allowed us to verify the relationships of illustrated books on architecture, architectural books, and the movements in architecture. We verified the architectural publication activities by these three publishers in the following chapters.

Kenchiku Shoin in Chapter 2 was the pioneering figure of architectural publishers. Their activities started when Yonejiro Yoshihara, who studied at the department of architecture, Koshu Gakko (current Kogakuin University) in pioneer days, got a request to publish notes of lectures by a teacher of the school. They published a wide variety of books in engineering including civil engineering, architecture, mechanics, electronics, and shipbuilding depending on the requests of the time. In particular, they dedicated to publishing books of architectural field which Yoshihara studied and gave their biggest attention to illustrated books on architecture. Target readers changed from beginners of architectural field and engineers to clients, and then changed to affluent people such as landlords. Themes dealt in books also changed, and they put weight on tastes and manners in housing appreciated by upper classes including royal families and nobilities. We verified the starting-point that photo collections evolved from collections of drawings. It shows some part of the process that the way of Japanese traditional houses was visualized through illustrated books and gained a foothold in the modern society once again as a hobby or art for upper classes, or even a target for real estate management sometimes.

Koyosha in Chapter 3 published the biggest number of architectural printed books before the war. More than half of them were serial illustrated books on architecture that were edited by the in-house team led by Yoshitaro Takanashi, the company owner. Their publication method focused on duplication from Western books and making plates by photographs taken by staff photographers and it bore fruit which was plate expression by joint actual measurement and photographing between Koyosha and external researchers. It was the comprehensive list of style, decoration, tradition, and modernity of architecture through serial

illustrated books on architecture at a glance. They intended that aesthetic tastes for architectural design to be cultivated while their readers accumulated their visual experiences with various plates. Also, they were always aware of their role to mediate tastes and intentions of clients to architects. While enhancing the selectability of figurative vocabulary with a wide variety of illustrated books on architecture, they helped the tastes of housing culture of emerging middle classes to be reflected into architectural design through architectures.

Koseisha Shobo in Chapter 4 published both architectural magazines and books in the midst of the movements in architecture. Their magazine "Kenchiku Jicho (Architectural time and tide)" tried to diffuse modernism as a new architectural concept from a technical and logical point of view. At the same time, the focus of their entire activities was on presenting the norm of the beauty of abstract in various figurative art fields led by architecture and traditional architecture conducted by Sutemi Horiguchi and Hideto Kishida. Modernism architecture before the war was quite few in the actual practices of architectural activities, but it was conveyed that modernism architectures were the majority in the world to mainly intellectuals by presenting the actual Western works in wide-format photo collections and magazines. Modernism architecture in Japan was socially recognized many more intellectuals not only by the movement in architecture and architectural magazines but illustrated books on architecture, and the common ground of consciousness in the architectural activities after the war was actually prepared.

After analyzing architectural publication activities of the three companies, we came to the following conclusion and summarized it in the conclusion chapter.

Kenchiku Shoin helped traditional houses and manners to gain a foothold in the modern society once again by targeting upper classes. Koyosha contributed to cultivating the common perceptions between clients and architects for various architectural design, for mainly middle classes. Koseisha Shobo made efforts to diffuse the beauty of abstract of modernism architecture as a new figurative norm to intellectuals broadly. We assume that while visual expressions by photographs and plates evolved, sense of clients was cultivated gradually, and various tastes regarding architecture were fostered. Several concepts including style, decoration, tradition, modernity were imported from the West and relativized through architectural book publications, and it formed the cultural base that allowed people to choose architectural design freely via their own taste.

That is to say, in the architectural publication activities in Modern Japan, it was not limited to publications of avant-garde architectural magazines by some architects, but architectural books that actively

presented a wide variety of architectural information were deployed, and tried to balance between individual's taste and sociality of architecture. The base of architectural publication activities was expanded by incorporating views of not only architects but receivers of architectural information such as clients, and it provided opportunities for people to rediscover architecture as a new cultural norm in the development of the modern society.